文學博士 佐久間鼎著

日本音聲學

東京 京文社出版

はしがき

「科學的國語學の第一編は、必ずや國語音聲學でなくてはならない」――これは、著者がかつて國語音聲學の組織化の必要を説いた際、述べた言葉である。著者が日本語の音聲學的研究に從事してからすでに十餘年を經た。その間しばしば日本語の音聲學の體系化を企てたのであるが、まだその機會を得なかつた。いま從來の研究の分野を擴大して新しい境地を求めようと執心し、今後音聲研究に專心する時間を多くもつことができまいと豫想される時に際し、日本音聲學に對する自分の造詣を一卷にまとめて世に問ふことは、自分に課せられた學徒としての本然的な仕事であると思ふ。そこで、著者の藏するかぎりの國語の音聲に關する知見を提供して、こゝに世上の好學の士の一顧をこひねがふと共に、なほ有爲な研究者をこの方面に誘致して、さらに將來の研究をすゝめる一助ともしたい。

かやうに、一面において國語音聲の學的組織化を企てると共に、他の一面においい

て著者の研究業績の發表をも目的とした。この二樣の意圖が本書をかやうな姿のものとしたのである。從來の分析的な音聲學が語音の個別的性質を説くことに重きをおいて、綜合的方面を閑却してゐた嫌があるのに比して、本書が語調論に多大の紙幅を割いたことは、一般學界の趨向に徴して考へても、また國語におけるアクセント現象の學的に重要な意義から見ても、十分是認されるであらうと思ふ。

本書に取扱はれてゐる研究對象は、主として東京に現に行はれてゐる言葉であつて、そこにあらはれる音聲現象の事實・能因および理法を當面の問題とする。これを以て國語の全般における音聲現象の解明を得たとするならば、それは明かに失當である。が、著者がこゝに題して日本音聲學とするゆゑんは、日本語における音聲現象の一つの典型的事例を通じてはたらく理法と能因とが、全般をその裡に反映する具體的事理なるべきを信じるからである。いま事實の解明を期する科學的態度において、國語政策上の標準語の基礎たるがゆゑに東京語の音聲研究をたゞちに日本音聲學といふべしと主張するごときは、事實と當爲「あること」と「ありたい」または「あるべきこと」とを混同するもので、その態度は本書における科學的取

扱の遂行と相容れないものである。こゝにいふ日本音聲學は、國語における一つの典型的音聲現象の科學的組織化といふ以外に別の意味をもたないのである。

もとより現時の國語問題において、音聲の標準化は、きはめて重要な一事項であり、その實施方策の確立にあたつては、また必然その所依を國語における音聲事實の科學的解明に求めなければならないのであるから、日本音聲學の知見がどういふ方向に發音およびアクセントの整理統一の規準を求めしめるかを見るのは、きはめて緊要な時務である。著者が、從來斯學の通俗的著述において、つとめて統一標準の提示を試みたのも、つまりはそのためである。なほ別の機會においてこの政策的立場から問題を見ようと期してゐる次第である。

本書は讀者の一般音聲學に對する多少の知識を豫想して書いてある。音聲現象の一般的説明は、本書でも必要なかぎり一とほり試みたが、さらに詳細な説述を、他の成書について求めるならば、理會を深めることができると思ふ。いま試みに參考すべき内外の著述の書目を掲げると、次のやうである。

(甲)一般音聲學に關するもの

Sievers, E.: Grundzüge der Phonetik. 1876. 5. Aufl. 1901.

× *Sweet, H.* : A Handbook of Phonetics. 1877.

,, : A Primer of Phonetics. 1890. 3rd ed. 1906.

× *Trautmann, U.* : Die Spachlaute im allgemeinen und die Laute des Englischen, Französischen und Deutschen im Besonderen. 1884—86.

× *Trautmann U.* : Kleine Lautlehre des Deutschsen, Französischen und Englischen. 1901.

Viëtor, W. : Elemente der Phonetik des Deutschen, Englischen und Französischen. 1884. 5 Aufl. 1904.

Rousselot, L'Albé : Principes de phonétique experimentale. 1897—1908.

Scripture, E. W. : Elements of Experimental Phonetics. 1902.

Jespersen, O. : Lehrbuch der Phonetik. 1904. 2 Aufl. 1913.

,, : Phonetisches Grundfragen. 1904.

Passy, Paul : Pétite phonétique comparée des principales langues européennes. 1906.

Gutzmann, H. : Physiologie der Stimme und Sprache. 1909.

Roudet, Léonce : Eléments de phonétique générale. 1910.

Panconcelli-Calzia, G. : Einführung in die angewandte Phonetik. 1914.

〃 : Experimentelle Phonetik (Sammlung Göschen). 1921.

Noël-Armfield, G. : General Phonetics. 1919.

Stumpf, Carl : Die Sprachlaute: Experimentell-phonetische Untersuchungen, nebst einer Anhang über Instrumentalklänge. 1926.

（右のうち×印のあるものは著者の入手し得なかつたもの）

(乙)日本語に關するもの

Edwards, E. R. : Etude phonétique de la langue japonaise: Thèse pour le doctrat de L'Université de Paris, presenté à la Faculté des Lettres à la Sorbonne. 1903.

佐久間鼎『國語の發音とアクセント』大正八年、增訂三版大正十一年

『國語アクセント講話』大正十二年

神保格　『國語音聲學』大正十四年

本書の編次・項目の排列などについて、前記のレオンス、ルデの『一般音聲學』に倣つ

たところが少くない。それは比較研究の成果と實驗研究の業績とを偏頗なく受容し融和して行く邊にこの一書の用意のすこぶる見るべきものがあるのによる。

本書の公刊にあたり、著者の本研究に多くの援助を與へられた、當時(大正二年から七年に至る)の東京帝國大學の諸教授、特に上田萬年・松本亦太郎・藤岡勝二の三先生、實驗研究の上に種々の便宜を與へられた諸先輩、中にも大槻快尊・增田惟茂の二氏、問題を提供し有益な助言を與へられた友人、安藤正次・神保格・東條操・ポリワーノフの諸氏、多くの材料を供給された友人岩原拓氏一家の人々などに對して、心からの感謝をさゝげたい。また實驗室における助手として終始著者のために忠實にはたらいた著者の妻の助力が、實驗的研究の遂行について豫期以上の成績をもたらすにあづかつて力あるものであつたことを特筆しなければならない。

昭和二年八月

福岡にて

著　　者

凡例

一、便宜上、全體を前後の二篇に分けた。語音篇はむしろ音聲の分析的觀察であり、語調篇はこれに對してむしろ綜合的觀察である。

二、術語のうちにはまだ一定しないものが少くない現狀において、同一概念について數種の語のあるときは、おほむねその語義の說明に際して、通用のものを對照して揭げた。なほ卷末にドイツ語・フランス語またはイギリス語との對譯をかゝげた。

三、引用の書目は、各章の終に番號の順に一括して揭げた。照合の番號は各章ごとに改めた。

四、音聲の表示について音字その他の符號を用ゐるが、それは近ごろ世にひろく行はれる國際音聲學協會所定の「國際音字」である。たゞしこれは主として實用音聲學における使用上の便利を考慮して制定したものであるから、理論音

聲學において不適切を感じる場合も少くない。母音に對する「國際音字」の不足などは、イェスペルセンの先例によつて補充する等の方法を施した。なほ、必要上別に音字を創定したものもある（第一章第四節「音聲の標示」參照）。

五、音字は、他と區別するために、すべて括弧〔〕を以て圍むことにした。

目次

第二章　單　音

第三章　母　音

第四章　重母音と半母音

第五章　子音

第十一章　語音の强さ

第十二章　語音の高さ

後篇　語調篇

第三部　アクセント論

前篇

語音篇

語音篇

- 單音論
  - 音聲
  - 單音
  - 母音
  - 重母音と半母音
  - 子音
  - 調音の基底
- 連音論
  - 語音の結合
  - 語音の轉化
  - 音節
  - 語音の長さ
  - 語音の強さ
  - 語音の高さ

第一部　單音論

第一章　音聲

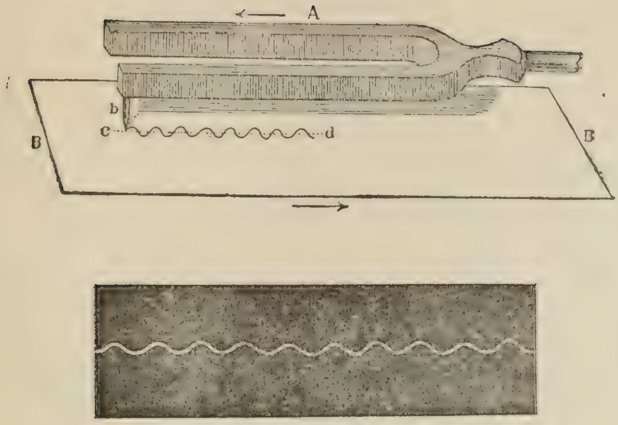
一　音聲の物理

音聲の成立は、これを發する過程、これを傳へる過程、およびこれを受取る過程に分けて考へることができる。人が思ふところを言葉を用ゐて他の人に傳へようとするとき、まづ思想または感情を音聲にあらはすといふ心理的なはたらきがある。つぎに、音聲の器官において生理的の營みが行はれる。かくて、空氣の振動がおこり、それが音波として四方に傳はつていく。これは物理的現象である。聞く人の耳にその振動が受取られて、ある生理的過程をおこす。つゞいて音聲の、およびこれに伴ふ言葉の認識が生じる。かくして音聲が成立つのである。

そこで、音聲の理解には、その物理學的構成、生理學的機能、および心理學的性質を考へ合せることが必要である。音聲學は、かやうな諸科學における知識にもとづき、比較觀察および實驗の方法に

よつて、音聲現象を科學的に解明しようとするものである。

物理學は、音響學といふその一部門で、一般に音響すなはち「おと」を論じる。「おと」の一般的性質についての知識は、音聲の考察に當つて、すこぶる必要である。こゝに「おと」の理論の大體を述べよう。



第一圖　音叉の振動

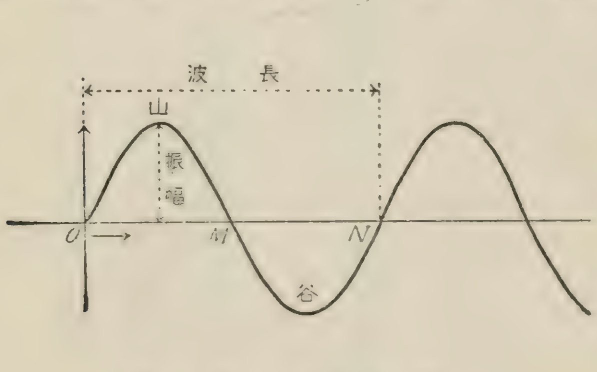
人が何か「おと」を聞く場合には、空氣の振動が耳（外聽道）まで傳はり、そのために鼓膜が振動する。この空氣の振動は、或は他の物體の振動によつて起され、或は空氣の壓力のリズム的變化によつておこされる。絃をはじき、棒または板をたゝいて「おと」を出すのは前の例で、サイレンのやうな裝置で「おと」を出すのは後の例である。

いま、音叉をたゝいて振動させ、その尖端に附けた針を振動の方向に直角に等速度を以て動く紙面に觸れさせるときは、針は紙面の上に規則正しい曲線をゑがくであらう。一面に煤をつけた紙一定の速さで廻轉する圓筒の表面に、はつた裝置を用ゐると、明瞭な曲線

が得られる。この曲線は、音叉の振動の性質に應じて、簡單で、相稱的で、一様なことを特色としてゐる。この種の曲線を正弦曲線といふ。（第一圖）

この曲線の部分について、上に向つた高まりの頂を「やま」といひ、下に向つたくぼみの底を「たに」といふ。一つの山から隣の山までの距離は波長であつて、谷から谷までの距離と相等しく、振動における一週期（すなはち往復の振動の時間）を代表する。山と山、谷と谷、また一般に横軸の方向に波長に等しい距離にある曲線上の諸點は、同じ位相にあるといふ（例へば圖中のOとN）。山と谷との間の垂直距離の半分（すなはち横軸と山との距離）は、振動における振幅にあたる。振動數とは一秒時間に反復する週期の數である。

音叉は、大體かやうないはゆる單絃運動を營むものである。その振動は周圍の空氣に振動をおこさせる。空氣の各分子は、單絃運動を行つて、その彈性によつて次第に他に振動を傳へる。かくて空氣の密度に粗密の差異を生じ、粗密、粗密の層が、週期的運動の源たる振動體を中心とした球面をゑがきつゝある速さで大氣中にひろがつていく。その有様は、水面に小



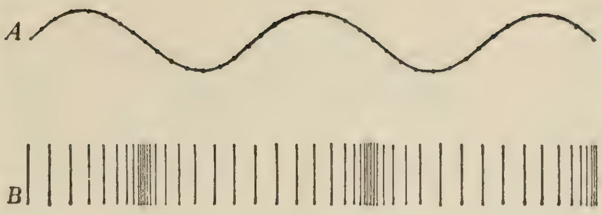
第二圖　正弦曲線

石を投じたとき、石の落ちたところを中心として波が次第に四方にひろがつていくのと同様である。これを空氣の波動と名づけ、また音波と名づける。水面の波にあつては、水の分子の週期的運動は、波形の進行の方向に對して垂直の方向に行はれるが、空氣の波動にあつては、分子の週期的運動が波動の進行と同じ方向に行はれる。前者は横波（高低波）であり、後者は縦波（粗密波）である。（第三圖）

一般に波動について波長をλ、波の進行の速度をv、週期をτ、振動數をNとすれば、次の關係が成立つ。

$$\lambda = \frac{v}{N} = v\tau$$

大氣中における音波の進行の速さは、氣壓および氣溫によつて多少の出入がある。氣溫攝氏十五度、氣壓七六〇ミリの大氣中においては、一秒につき三四〇メートルである。音波の進行の速さは、これを傳へる物質、すなはち媒質によつて異同がある。水の中ではその速さが大氣中におけるものゝ約四倍である。



第三圖　横波(A)と縦波(B)

音叉の空氣に與へる振動は、かやうに單純な波の形を示すが、普通に振動體によつて起される空氣の振動は、もつと複雜なものである。この複雜な振動は、週期や振幅や位相の同一でない幾つかの單

純な振動を同時に起すことによつて合成することができる。音叉の「おと」のやうな單純な振動すなはち單絃運動によつて成立つものを純音といひ、單絃運動の複合によつて成立つ「おと」を成音といふ。一般に成音の振動をあらはす複雜な曲線を、數個の單純な正弦曲線に分解して、その振動の性質を明かにすることが、數學上可能である。これはフーリエ氏公式を應用して分析を遂げるのであつて、音聲については、母音の構造を研究する場合にこの方法が適用される。

さて、「おと」を聞く際の感じによつて、「おと」に二とほりを區別することができる。「ね」または樂音と「ひびき」または噪音とがこれである。「ね」は「がくのね」、すなはち笛や琴やピアノなどの樂器の出す「おと」であつて、その感じからいふと、一定の調子をもつ快い「おと」である。その振動は週期的で、すなはち規則正しくくりかへされるものである。「ひゞき」はこれと趣がちがひ、はつきりした調子がなく、大抵いらたゞしい、または不快な感じをおこさせる「おと」で、午砲のドンといひ、車のガラガラといふやうなのが、その例である。その振動は不規則で、週期が一樣でなく、多くは極めて複雜な波形を示し、ながくつゞかないものがまた多い。

音聲のうちア・エ・イ・オ・ウのやうな母音は、その性質上「ね」といつて差支ないものであつて、

その振動は規則正しい。しかし普通には、その發音のつゞいてゐる間に週期がかはる。たゞ音樂で、ある一定の調子でアーとうたふやうなときは、うたふ間に週期はかはらない。カ・サ・タ・パ行の頭音、すなはち〔k〕・〔s〕・〔t〕・〔p〕などは、まつたくの「ひゞき」であつて、ガ・ザ・ダ・バ行の頭音、すなはち〔g〕・〔z〕・〔d〕・〔b〕などは、幾分か「ね」の性質をおびた「ひゞき」である。

かやうに、「ね」と「ひゞき」とは、特別の場合について見れば、明かな區別があるが、その中間の場合には、はつきり分けにくいものが少くない。また本來「ね」であつても、ごく短い間聞えたため、「ひゞき」として感じられる場合もある。たとへば瓶のキルク栓をぬくときの「おと」はポンといふ「ひゞき」と感じるが、これは「おと」が瞬間的に出るからだと思はれる。すべて、「ね」の性質をよく知ることは、音樂や音聲の理論上大切であるが、なほ音聲の理解にとつては、「ひゞき」を分析することがきはめて必要である。性質上比較的單純である「ね」の説明は、よほど行きとゞいてゐるが、「ひゞき」の性質については、まだあまり物理學的に明かにされてゐないものが多い。

「ね」にそれ〴〵一定の調子があるとは、直接耳に聞える「ね」の感じについていふのである。すなはち調子が高いとか低いとかいふ感じが「ね」に伴つてゐる。そして、かなり精密に調子のちがひを區別することができる。「ね」についてのこの性質を高さと名づける。一つの「ね」と、これより調子の高い「ね」とを比較すると、高さの差異があらはれる。これを音程といふ。高さのそれ〴〵ちがふ甲乙丙丁の「ね」について、甲と乙との間の音程が、丙と丁との間の音程と同じであるやうな場合もあ

る。この場合には甲對乙の高さの差が、丙對丁のと等しいのである。音樂に用ゐられる音程は、おのづから種類がきまつてゐる。この種の音程をへだてゝ高さの順序を逐つてならべられた「ね」の序列が、音階である。音階は（したがつて音程も）民族によりまた時代によつて必ずしも一樣でない。これが各民族および各時代の音樂の構成上の基本となり、それぞれの音樂に特色を與へる。

物理學的に見るときは、高さは振動數によつて定まり、高い音ほど振動數が大きいのである。音程は、二つの「ね」の振動數の比を以て數量的に表示されるものであつて、ある一つの音階について見れば、各の「ね」の間には一定の振動數の比が成立つ。その比は、各種の音階についてそれ〴〵一定してゐる。

音聲の高さは、「ね」の性質を帶びた音聲について定めることが出來る。一般に「ひゞき」についても、大體の高さはきめることのできる場合が多い。しかし音聲の考察上、母音のやうなものについて高さを調べることが、特に必要である。性別および年齢によつて、音聲の高さに相異がある。また言葉における音聲の高さの變化は、高さアクセントおよび言葉調子としてあらはれる。本書の語調篇では、もつぱら國語におけるかやうな現象を言葉の心理的性質に顧みつゝ考察する。

人の耳に「ね」として受取られる空氣の振動には、一定の限界がある。あまり振動數の小さなものまたは大きなものは、「ね」として

感じられない。「ね」として聞えるのは、振動數約一六から二〇〇〇〇または三〇〇〇〇までの間である。一秒に十六回よりも少く振動する音叉などは、連續した「ね」の感じを與へず、ボツ／＼とぎれた「おと」として受取られる。ピアノは低い「ね」の二七・二から高い「ね」の四一三八・四までの振動數のものをもつてゐる。唱歌における音聲の範圍は、低い男聲の六〇振動から、ごく高い女聲の約一三〇〇振動である。普通の談話に用ゐられる音聲の高さは、唱歌などに用ゐるものに比較すると、範圍がずつと小さい。(1)

耳の感じについていふ「おと」の强さは、普通「おと」が大きいとか小さいといふ場合の大小にあたる。ピアノの一つのキーをつよく打てば、つよい「ね」が出、同じキーを弱く押へれば同じ調子のよわい「ね」が出る。また大砲は大きな「おと」、豆鐵砲は小さな「おと」を出す。「おと」の大さの辨別は、高さの差別ほど精密に、確實にすることが出來ない。この感じとしての「おと」の大さは、個人の感覺の度合であつて、數量的に測定することが困難である。個人的に感じ方にちがひがあるのみならず、同じ人についても、高さの異なる「おと」、または音色のちがふ「ね」において感じの度が同じでない。

物理學上でいふ音波の强さは、感じにおける「おと」の大さ、すなはち聽覺的强さとは別に考へた、全然物理學的な量である。ゆゑに、これを力學的强度と名づけて、區別することがある。單純な振動にあつては、この强さは、單位時間に單位面積を通過する波動のエネルギーに比例する。音波を傳へ

る媒質が一定し（たとへば空氣であり）、その振動數が一定であるときは、波動のエネルギーは、振幅の自乘に正比例する。振幅が一定であるときは、波動のエネルギーは、振動數の自乘に正比例する。振幅および振動數が共にかはるときは、波動のエネルギー、從つてまた强さは、振幅および振動數の積の自乘に正比例する。純音については、强さの算出が面倒でないが、成音にあつては、ただちに求めることが出來ない。まづその波動曲線を構成分子たるいくつかの正弦曲線に分析して、個々の純音の强さを算出し、その總和を求めて成音の强さとするのである。

音聲の大さ、または强さを考へる場合には、實際上感覺の度合のやうな主觀的尺度を以てする。談話などでは、音聲の强さが、一句のうち、一語のうちはいふにおよばず、一音節のうちでも間斷なく變化するものであつて、その變化は音聲學上すこぶる重要な意味をもつのである。

實際の種々の「おと」および音聲にあつては、强さと高さとがさまざまな割合に結びついてあらはれる。音聲について太い、細いの區別をすることがあるが、これは大體强くて低いのが太いといはれ、弱くて高いのが細いといはれるやうである。また普通に大きな音聲を出す場合には、その調子、すなはち高さもそれに伴つて高くなる傾がある。音聲を張り上げるといひ、高聲、低聲といふ語を大さをあらはす場合に用ゐる習慣がある。そのために往々音聲の强さと高さとを混同する者が稀ではない。音聲の研究にあたつて、この辨別は注意を要する事項である。

高さも强さも相等しい二つの「ね」が、なほ他の性質によつて容易に區別される。この性質とは、「ねいろ」(音色)であつて、たとへば笛の「ね」と琴の「ね」とは、それ〴〵特有の色合をもつてゐる。樂器は各の「ねいろ」をそなへてゐて、それによつてたがひに特色を保つのである。

「ね」を純音と成音とに分けるが、純音は共鳴函の上にのせた音叉の出すやうな純粹、單純な「ね」で、つや、あぢ、いろあひなどといふ感じがなく、いはゞ無味である。樂器の「ね」はすべて成音であつて、「ねいろ」をもつ一つの「ね」として聞える。これを物理學的に見ると、いくつかの純音の複合であり、要素たる數個の純音が成音を組成するのである。この要素たる純音を成音の分子音（部分音）と名づけ、分子音のうち振動數の最も少いもの(最も低いもの)を原音(基音)とし、その他のものを陪音（上音）とする。成音の高さは、その原音の高さに外ならない。さて、樂器の「ね」について分析するに、陪音はすべて原音の振動數の二倍、三倍、四倍といふやうな整數倍の振動數をもつてゐて、その强さの割合は樂器によつてちがふ。或は原音の振動數の奇數倍又は偶數倍の振動數を有する陪音だけあらはれる「ね」もあり、ある高い方の陪音だけあらはれるものもある。かういふ組織の異同が「ねいろ」に關係することはヘルムホルツによつて明かにされた事柄で、同氏によれば、「ねいろ」は全く「ね」の分子音の數とその相對的强さとによつて定まり、その位相の異同には關係しない

のである。

すべての振動體は、おのづから定まつた振動の週期をもつてゐる。「ねじめ」といひ、調律といふのは、振動體の自然的週期を一定の振動數に調整することをいふ。振動體に力を加へるときは、普通はその固有の振動數を以て振動をつゞける。週期の相等しい振動が來て、振動體を搖り動かし、つひにこれを振動させる現象は、「ともなり」(共鳴)であつて、この際二者は調子が合ふのである。多少週期のちがふ場合にも共鳴が生じるが、その度は弱い。共鳴をおこすための裝置を共鳴器といふ。これには種々の形や材料のものがある。音叉には共鳴箱がついてゐるし、三味線や琴には胴といふ部分があつて、共鳴をおこすやうにしてある。すべて樂器には、「ね」を發生する部分と、共鳴を生じる部分とがある。その共鳴は、多くは共鳴域の自然的週期を以て振動するものではなくて、いはゆる强制振動であり、「ね」を出す振動體の週期に引きよせられて振動するものである。また共鳴器のうちには、自己の固有の週期をもたないで、種々の調子の「ね」および音色を寫し出すものがある。

音聲において、强さ・高さの異同のほかに種々の音質を區別するが、母音のアとイとの差別のごときは「ねいろ」のちがひに本づくこと、ヘルムホルツ以來の母音構成の研究によつて明かになつた。すなはち幾種かの單純な「ね」をいろ〳〵に組合はせて、「ア・イ・オ」のやうな成音を作り出すこと

が出來、また母音の振動をあらはす曲線を分析してこれを構成する分子音の何であるかを知ることが出來たのである。母音の構成に關する學理を母音論といふが、これについては、いまだ多少の見解の異同がある。子音の構成にいたつては、まだ物理學的に明かになつてゐないところが多い。これはその性質が極めて複雜で、分析しがたいためである。

- おと(音響)
  - ね(樂音)
    - 純音
    - 成音
      - 原音
      - 陪音(上音)
      - (原音・陪音)分子音(純音)
  - ひゞき(噪音)
    - 一時的のもの(拍音・破音)
    - 繼續的のもの(とゞろき・擦音)

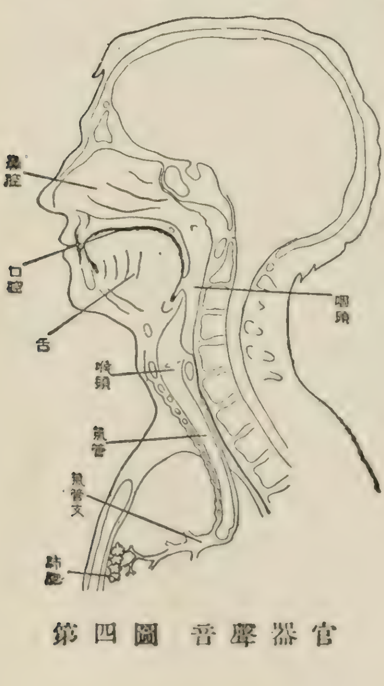
二　音聲の生理

人が音聲を發するにあたつては、およそ三種の器官が協同してはたらく。

(一) ある量の空氣が、肺から氣管支・氣管・「のど」を通つて吐き出される。はく「いき」、すなはち呼氣がこれである。「おと」を出す裝置として見れば、空氣を貯へる肺は、「ふいご」にあたる。

(二) この空氣が「のど」の一部喉頭で、週期的な振動をおこす場合がある。これによつて生じる「おと」を「こゑ」といひ、「こゑ」を出す生理的機能を發聲といふ。喉頭にある聲帶は振動體である。

(三) 空氣は、さらに咽頭をへて「くちのなか」(口腔)または「はなのなか」(鼻腔)に達する。「くち」と「はな」との空洞は、「こゑ」に對して共鳴器としてはたらき、「くちびる」や「した」や「あご」の運動によつて共鳴域の形や大さをかへて、「こゑ」に種々の「ねいろ」を與へる。または、「くち」の中で空氣の通路を狹くし、或は閉ぢて、呼氣の通過に際して「ひゞき」を生ぜしめる。一般にこの部分で出來る「おと」を「お



第四圖　音聲器官

ん」といひ、おもに言葉に用ゐるので、また語音といふ。「おん」を出す生理的機能を發音といひ、そのためにする器官の運動を調音（または構音）といふ。

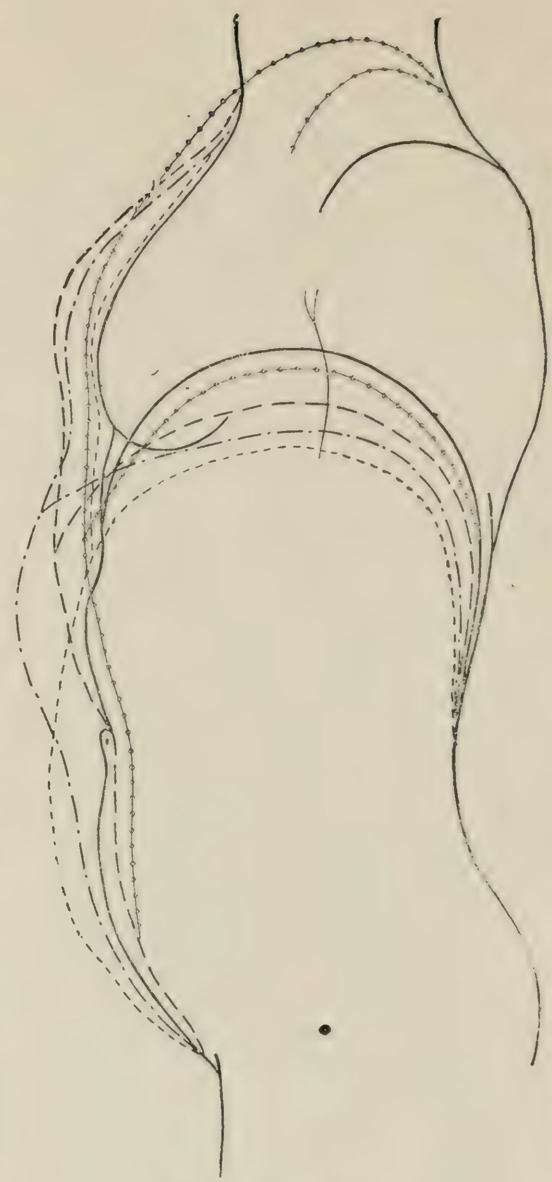
かやうに音聲機能に參與する器官は、廣義の呼吸器官であるが、これを右の三段に分けて配當すると、一は狹義の呼吸器官、二は發聲器官、三は發音器官である。二と三とを合はせて、音聲器官と名づけ、「こゑ」と「おん」とを總稱して音聲といふ。

呼氣は、呼吸作用の一半であつて、その半面たる吸氣と共に、必ずしも音聲に交渉なく營まれる。常態の呼吸にあつては、耳にたつほどの「おと」は發せられない。呼氣がその通過の途中で、何等かの障碍に出會ふとき、振動を生じ「おと」を出すのであつて、犬や猫の鳴聲なども、かうして出來る。人の音聲も通常もつぱら呼氣を以て發せられるもので、特別の場合に「いき」を吸ふ「おと」を出すほか、國語の音聲で吸氣を用ゐるやうな例はない。

南アフリカのある地方の言語では、吸氣を以て發する音聲を用ゐるといふ。ヨーロッパでは、接吻の際吸ふ「おと」をつよく立てるが、これは言葉の「おん」とはいへない。日本で商人などがもみ手をしながらの會話に、「いき」を吸ひこみながら時々スーと「おと」を立てるのは、西洋人にはかなり耳ざはりになるといふ。これは吸氣で出る「おと」である。ドイツで女などが折々 ja を吸氣で發音するのを聞くことがある。これらは勿論常態の發音といふのではない。

呼吸の様式に腹式・胸式などの別がある。腹式呼吸とは横隔膜の運動によつて營まれるもので、男に多く見る様式、胸式呼吸とは肋骨を持上げる筋肉の作用によつて營まれるもので、女に多く見る様式である。その他いはゆる「肩で息をする」といふ異常の様式も時としては現はれる。(第五圖)

呼氣の壓力が、音聲の大さに關係することは明かであるが、一義的にこれを規定するものではない。高い音聲や口のあきの廣い音聲は、他の音聲よりも多量の呼氣を要する。同じ「おん」たとへば「ア」なら「ア」についていへば、その呼氣壓の大さは音聲の强さの增すと共に增し、高さの增すと共に減じる。呼氣の用ゐられた分量が、いつでもその音聲の强さに比例する



第五圖

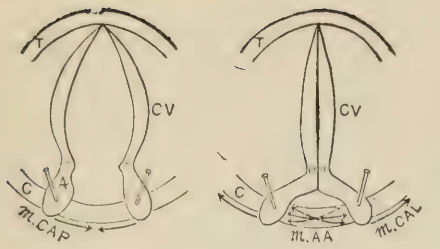
呼吸時における胸腹部および横隔膜の位置

靜息位置
腹式呼吸
胸式呼吸
鎖骨式呼吸

と考へるのは、よほど間違つた考である。

喉頭に達した呼氣は、こゝにはじめて振動を得て「こゑ」を出す。發聲の機能を營む器官がこゝに備つてゐるのである。

氣管の上部に空氣の通路を開きまた閉ぢる關門がある。これは聲門である。その門の扉にあたる右左の壁からの二つの隆起が聲帶であつて、二つの彈性ある唇の形をした筋肉および粘膜組織である。これを上からのぞくと、二すぢの紐を張り渡したやうに見える。その紐の前端は甲狀軟骨に固着し（結喉すなはち「のどだんご」の部分にあたる）、後端はおのおの別れて、披裂軟骨といふ左右の三面ピラミッド形の小軟骨に固着してゐる。その運動によつて聲帶の後端が或は互に密着して聲門を閉ぢ、或は左右にひかれて聲門を三角形に開く。この左右の軟骨の間に出來る隙間を軟骨聲門といつて、本來の聲門たる聲帶聲門と區別する。披裂軟骨は環狀軟骨の上にのつて、種種の運動を營むことが出來るやうな位置にある。（第六圖）



第六圖　聲門模型圖

T　甲狀軟骨
CV　聲帶
C　環狀軟骨
A　披裂軟骨

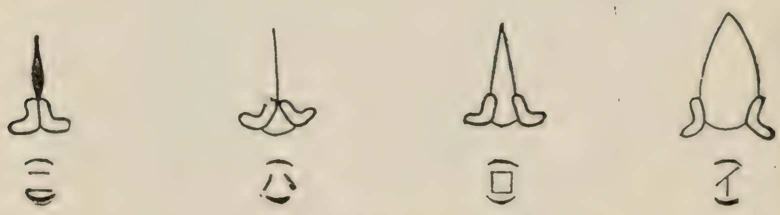
この數個の軟骨を結びつけていろ〳〵な筋肉が張られてあり、それの收縮の具合によつて聲門の開閉や聲帶の緊張弛緩が結果される。

かやうな精妙かつ複雜な軟骨および筋肉の構造によつて、聲帶は種々の異なつた位置を取ることが出來、發聲におけるさま〴〵の變化を營むのである。

(イ)披裂軟骨が内から外へ廻轉して、聲帶がその後部で大いに開かれ、聲門が廣がる（第七圖(イ)）。これは正常の呼吸における位置であつて、呼吸聲門(2)と名づけられる。この位置で口を開いて呼氣を出すときは、通常ほとんど何らの「おと」も聞かれない。子音〔p〕・〔t〕・〔k〕・〔s〕などの發音に際しても、聲帶はこの位置にあつて、「こゑ」を出さない。普通にこれを「いき」といふ。

(ロ)聲帶は互に離れてゐるが、その角度がずつと小さくなり、呼吸に抵抗を與へるにいたる（第七圖(ロ)）。呼氣はこゝを通過する際、一種の特色のある摩擦の「ひゞき」を立てる。これを氣音的聲位と名づける。「ハ」行の子音〔h〕は、この聲位をもつて發せられるいはゆる氣音である。〔h〕は本來の「こゑ」ではなくて「おん」の一種と見られてゐるものであるが、種々の點で「こゑ」と密接に關係するところがある(3)。

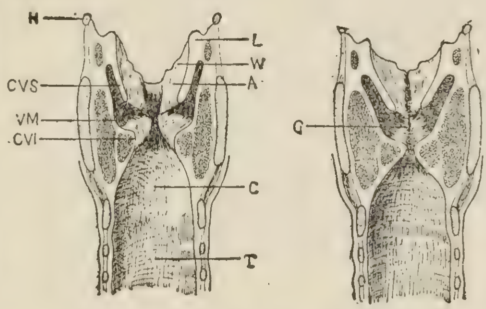
(ハ)聲帶が一層接近し、時としてはその一部分だけが開かれる。或は軟骨聲門



第七圖　發聲における聲門の開閉

だけが開かれてゐることもある（第七圖（ハ））。この位置で出る一種の「ひゞき」は、「さゝやき」（耳語）に用ゐられる。つまり普通の「こゑ」の代用をするもので、「こごゑ」といふのは通例これをさすことが多いが、その性質は小さな「こゑ」とはちがふ。

（二）聲帶がその全長に沿うて相觸れ、聲門が閉ぢられる。これを發聲聲門と名づける（第七圖（ニ））。呼氣が通路をふさがれて、その壓力を强め、聲門を押開く際、聲帶が自分の彈性によつて週期的に振動する。その振動によつて聲門は、開閉の作用をくりかへし、呼氣はとぎれ〱に通りぬける。かくサイレンの理によつてこゝに生じた空氣の振動がすなはち「こゑ」といふ一種の「ね」となるのである。すべての母音、および子音の〔b〕・〔d〕・〔g〕・〔z〕などは、「こゑ」を帶びた呼氣で發音される。音聲のうち、「こゑ」を帶びて發せられるものを有聲とし、「こゑ」を帶びないものを無聲とする。母音はすべて有聲であつて、子音には有聲のものと無聲のものとがある。



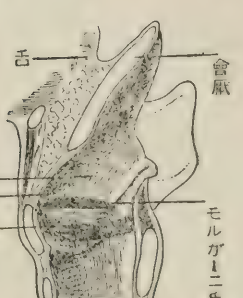
第八圖　呼吸と發聲

H　舌骨
CVS　假聲帶
VM　モルガーニ氏竇
CVI　聲帶
G　聲門

音聲における「こゑ」の出し方、すなはち「こゑたて」に二とほりある。一は聲帶がつよく密着

してゐる場合で、呼氣がつよくこれに當つて突破するとき、一種の破裂の「ひゞき」を伴ふ。かういふ發聲の仕方をかたい發聲(きつぱりした、きはだつた聲たて)(4)といひ、この聲帶のかまへ方をたしかな聲位といひ、これに伴ふ「ひゞき」を聲門打開または喉頭破音(5)(音字〔ʔ〕)といふ。ドイツ語で母音を發音するとき、しば〳〵このやうな「こゑ」の出し方をする。二は聲帶が最初からつよく密着せず、輕く相觸れ或は並行に接近した位置にあつて、その振動が徐々に自然にはじまり、破裂の「ひゞき」を伴はず、ふつくりした「こゑ」を出す仕方で、これをやはらかな發聲(しづかな聲たて)(6)といひ、その聲帶のかまへかたをゆるい聲位といふ。聲樂における發聲法は、かういふ仕方で發聲すべきことを教へる。國語の音聲における「こゑ」の出し方も、おほむねこの仕方である。(なほ第八圖・第九圖參照)

「こゑ」をとめる仕方すなはち「こゑとめ」にも、やはり二とほりあるわけで、普通にはゆるい聲位を以て、やはらかにとめるのである(やはらかな「こゑとめ」)。これが自然な仕方であるが、國語には、たしかな聲位を以て、かつきり發聲を中止する方法を用ゐる場合も少くない(かたい「こゑとめ」)。



第九圖 喉頭(縱斷面)

(ホ)ある言語には、いはゆる有聲の〔h〕があらはれる。この場合には聲帶の近づき方、觸れ方が一樣でなくて、呼氣の通過に際してその振動による「こゑ」と同時に摩擦の「ひゞき」もまじるのであらう。母音の間にはさまれた〔h〕が、しば〳〵かういふ風に發音されるのは、くだけた話しぶりのときの「オハヨー」などの例にも見られる事である。

聲門を通り過ぎた呼氣は、發音器官にはひつて來て最後の加工を受ける。發音器官のはたらきに三つの樣式がある。

(一)發聲器官に對する共鳴器の役目をして、「こゑ」に各種の「ねいろ」を與へる。母音の調音における仕方がこれである。

(二)呼氣の通路を狹めて、通過に際して摩擦の「ひゞき」をおこさせる。〔s〕・〔z〕などの子音の調音における仕方がこれである。(かうして生じる子音を擦音といひ、また狹窄音といふこともある)

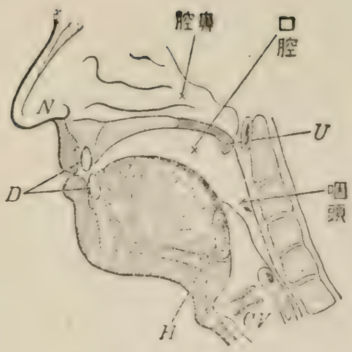
(三)一瞬間呼氣の通路を締切り、呼氣壓によつて急にそのとぢ目を開く際、「ひゞき」がおこる。〔p〕・〔b〕・〔t〕・〔d〕・〔k〕・〔g〕などの子音の調音における仕方がこれである。(かうして生じる子音を破音といひ、また閉鎖音といふこともある)

かやうに「おん」は何等かの氣流の障碍または遮斷によつて發せられるのであつて、いづれの調音

も大抵この二つの仕方に歸して考へられてゐる。口腔の內で狹まりまたは締切の行はれる部分を調音點(調音部位)、或は一層適切に調音域といふ。もつとも精密にいへば、一つの「おん」の調音域をある一箇所に限ることは出來ない。

發音器官は、大部分についていへば、外から見ること、觸れることが容易なので、特別の裝置を用ゐないでも、かなりよく觀察が出來る。この器官は、まづ「くち」と「はな」との空洞、すなはち口腔と鼻腔とに分れる。(第一〇圖)

口腔は、口蓋と上齒とを動かない天井とし、開閉する唇を門とし、下顎を底とする一の洞穴で、下顎はこれに固着する下齒や舌と共に全體として上下に動くやうになつてゐる。また奥の方では上に口蓋帆があつて、鼻腔との間のしきりとなり、また下に咽頭によつて喉頭への通路が開かれてゐる。



第一〇圖　發音器官

N　鼻のあな　U　のどびこ

D　齒　H　舌骨　CV　聲帶

唇は運動がかなり自由である。その周圍に種々の筋肉があり、その收縮によつて、口腔は或は全く閉ぢられ、或は大小のほゞ圓形の出入口や、又は横に細長いすきまが出來て外氣に通じる路を與へられる。

子音のうち脣の破音(破裂音・破障音)または閉鎖音といはれる〔p・f〕および鼻音〔m〕は、脣の閉鎖を「いき」または「こゑ」が押開いて出る際生じる。

母音のうちには、その發音に際して、ある程度で脣を圓くするものがある。これを圓口母音といひその調音の仕方を脣の「まるめ」といふ。これは國語には、あまり著しくあらはれない。

また母音のうちには、その發音の際脣の兩隅を左右に引くやうにして、脣のあき方を横に長くするものがある。國語にあつては「イ」の場合に著しく見るところである。

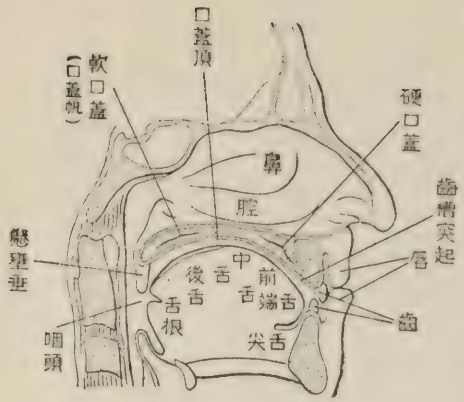
子音のうちには、上下の脣を接近させ、その隙から呼氣を出すときの摩擦によつて生じるものがある。いはゆる兩脣の擦音(摩擦音)で、國語には奥羽地方の方言にあらはれる。これと似てゐるが、英語などの(f)・(v)は、下の脣を上の齒に接近させて出す擦音である。

下顎は、食物をかむとき盛んに上下に運動するやうに、ある程度まで上顎との角度をかへることができる。その角度または上下の齒の垂直のへだゝりを口腔の「あき」といふ。これは發音に關係するので、母音の調音について、しば〳〵「あき」の大さを一つの目じるしとする。しかしその必要は絕對的ではない。パイプ又は鉛筆を口にくはへてゐて、すなはち「あき」をかへずに談話をし、種々の母音をあまり差支なく出すことも出來る。で、母音の調音には、むしろ口蓋と舌との間に作られる口

腔の形が、大切であることを知る。

口蓋は、粘膜で蔽はれた圓天井の形の上顎の一部で、前および左右の端は上の齒なみで限られ、後方は口蓋帆に連つてゐる。口蓋帆は多少動くことの出來る筋肉組織で、手で觸れてみると軟かであるから、また軟口蓋といひ、これと區別して硬い前方の部分を硬口蓋といふこともある。口蓋帆の運動によつて、口腔と鼻腔との通路が開閉される。

舌は種々の方向に走る十七の筋肉の形成する肉塊であつて、すこぶる多様な位置と形狀とを取ることができる。けだし人體中の最も自在に動く器官である。舌が口腔の形を種々に變化することによつて、共鳴器としての口腔の職能を發揮して、「こゑ」にそれ〴〵異色ある「ねいろ」を與へることは、母音の調音において見られるところである。もし舌が口蓋などに一層接近して、氣流の通路にあたつて狹まりを作るときは、その位置と形狀とに應じて特色ある種々の擦音を生じる。また通路を閉ぢて氣流の突破をおこさせるときは、各種の破音を生じる。或は口蓋の中部に閉鎖を作り、左右に通路をあけて「こゑ」を通すときは、いはゆる側音を生じる。或は舌の先を振動させるとき



第一一圖　發音器官の各部

は、いはゆる卷舌の「ラ」行の子音〔r〕のやうな別種の「おん」が出るのである。

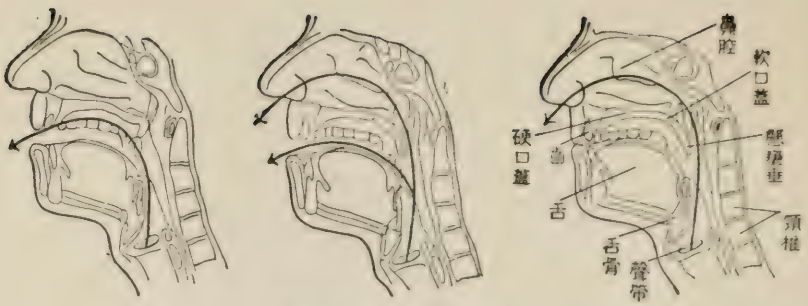
さて、音聲學で諸種の「おん」の調音を記述し分類する便宜上、舌や口蓋の部分を分けて名をつける。すなはち舌については、前端にあたる「さき」(舌尖)、その後方の部分の「へり」(舌緣)、上面にあたる舌面(舌背)、奥にはいつて下に傾いた面の舌根(舌本)をわける。さらに或は舌面を區分して前舌・中舌・後舌とすることもある。また舌に對する上顎面については、前方から順に擧げると、齒・はぐきうら(齒槽突起)、口蓋(前部および後部)、口蓋帆(前部および後部)、それから「のどびこ」(懸壅垂)である。もちろん舌面や口蓋について前後の部分を分ける區別のごときは近似的であつて、嚴密にどこからどこまでといふわけにいかない。(第一一圖)

「のどびこ」は口蓋帆の奥に下つてゐる突起で、口蓋帆の動くのにつれて共に上つたり下つたりする外、調音上格別の役をしない。たゞある言語では、この部分の振動を用ゐて、rに似た一種の子音を出す。國語にはあらはれない。

鼻腔は、前端の左右の鼻孔からはひると、内部がやゝ廣くなつてゐ、後部で折れ曲つて口蓋帆をしきりとして口腔に連る。口蓋帆が下つて「こゑ」の氣流が鼻腔にも流れ込むときは、「おん」は一種の特異な色合を帶びる。かやうな音聲はすべて鼻音(通鼻音)で、〔m〕・〔n〕および國語における「ン」などがこ

れにあたる。母音で「こゑ」の鼻腔に通るものは、特に鼻音的母音といひ、普通の母音と區別する。

國語の方言について比較するに、ある語句を發音する仕方におのづから方言的特色があらはれることを聽取することが出來る。東北方言において、五十音圖の「イ」列と「ウ」列とを混同するやうな一種の母音が用ゐられてゐると共に、「エ」列にもこれに相似た色合をもつ母音があらはれる傾がある。國語を外國語と比較するときは、その差が一層著しい。イギリス人の發音には、各人および各發音に共通な色合があつて、國語またはフランス語など、その語義を知らなくても容易に區別されるところがある。かやうな特色は、つまりそれぞれの言語における發音機能の習性的傾向であり、調音運動の傳統的傾癖である。自己の母語、自國語を語る者は、自然にこの傾向を習得し、その發音に特色をあらはすやうになる。つまり音聲器官特に發音器官のはたらきにおける生理的に定立するに至つた運動習慣であつて、細かく見るならば、舌の形狀およびその運動の方向、唇や下顎や口蓋帆や聲帶の運動に關聯するわけである。この全體的傾向に名づけて調音の基底といふ。



第一二圖　發音器官における氣流の通路

言語の習得にあたつては、この點が極めて大切である。自國語における調音運動の習慣は、外國語を話す場合にもそのまゝ實行されがちであつてこれを脱しきることは、なか〳〵容易でない。また國語の中にあらはれて來る外國語を、それ〳〵イギリス語風・フランス語風または支那語風に發音しかへることは、すこぶる困難である。これはその調音の基底を異にするがためである。

音聲の知覺に際しては、空氣の波動を受取る耳がその生理的機能によつて「おと」の感覺をおこすに至る。空氣の波動は、外耳に入つて鼓膜に達し、これを波動の形に應じて振動させる。その理はまさに電話の受話器、または蓄音機の發音函の膜と同様である。その振動は鼓膜の裏に接續する小さな三個の聽骨によつて內耳に傳へられ、こゝにある精巧な器官を介して聽神經に作用し、つひに「おと」として感覺されるのであるが、その詳細はこゝに必要がないから省く。

音聲器官

- 呼吸器官（肺・氣管・氣管支）（ふいご）
  - 呼氣
  - 吸氣
- 發聲器官（聲帶）——（こゑ）
  - こゑ
  - 氣音
  - いき
- 發音器官（口腔・鼻腔）——（共鳴おん）
  - あけ（母音）
  - せばめ（擦音）
  - しめきり（破音）

三　音聲の心理

生れたてのあかごが立てる「こゑ」は、反射的であつて、最初の呼吸に伴ふ生理的現象と見られるが、すでに生長した子供なり成人なりの出す音聲は、その極めて單純なものでも、大抵何等かの心境の表現であるといつて差支ない。單に一つの母音から成る間投詞も、その調子や大さや發聲の仕方によつて、それ〳〵感情の微妙な色合をあらはすものである。變態又は特殊の場合でないかぎり、まつたく無意味な音聲を發するといふことは、人の社會生活においては、見られないことである。

もちろん、口腔または鼻腔で、特殊の刺戟に對する生理的反射作用のために、なほ幾種かの「おと」(せき・くしやみ・いびき等)が出るし、また有意的にも特殊の「おと」「くちぶえ」のね・せきばらひ等)を發することも出來るが、これは音聲の中に數へない。これらの「おと」をある意志または意味をあらはす手段につかふこともあるのは、おのづから別問題である。

かくて音聲を出すといふことは、やがて言葉を話すことであり、音聲をきゝ取るといふことは、言葉をきゝ取ることであるともいへる。かほど密接な關係のあるものであるから、これを切離して考へると十分理解されない事柄が多くある。

まづ心の中に言葉の表象があらはれ、通常の人ではこれを音聲に出すといふ性向がこれに附帶してゐる。具體的な心の內景にあつては、言語表象は音聲表象と表裏をなしてゐるので、それはまた發聲・發音の器官における運動表象を抱き含んでゐる。國語における調音運動の習性は、かゝる表象に對して決定的傾向として連り、最小抵抗の方向に動作を解發する。呼吸・發聲・發音に關與する幾多の筋肉の運動は、音聲といふ對象を中心として協同作業をするわけである。各器官の機能について見れば、それ〴〵前に述べたやうな生理的條件によつて音聲の發現に參與するのであるが、これを具體的な人間活動の一面として見れば、發しようとする音聲表象を中軸にして、部分的はたらきは統合調整されるものである。すなはち各器官の作用の單純な同時的連結ではなくて、すべての人事において然るやうに、中心點を有し、目標を有する全的活動に外ならない。各器官の運動は、反復練習によつて自動的になるとはいへ、單に機械的・盲目的なものでなく、各樣各別の調整を遂げる可能性をもつ。その調整は音聲の全體表象によつて導かれるものである。

かくて實際上音聲を發してゐる人が、それ〴〵の場合にいづれの筋肉を動かし、いづれの器官をはたらかせてゐるかについては、ほとんど多く知るところがない。多くはどんな音聲を出してゐるか、或は何といふ言葉を話してゐるかについて意識してゐるだけである。しかも若しその音聲に何等かの

誤がある場合には、全體表象がその均衡を破られて、不安定がたゞちに感じられる。聲樂家はその「こゑ」の確かさすなはち調子の正しさを自己の耳によつて常に監督してゐるものであつて、かやうな敏感な聽覺をもたないものは、到底その技において進歩を見がたい。かういふ耳の感じによる音聲の修正は、日常の談話の場合にも行はれるのであつて、これによつて發音の誤が訂正されていく。さういふ次第で、發聲・發音の器官だけでなく、「おと」を受取る聽覺器官もまた協同の動作を營むものといふべきである。

このやうな協同は、口と耳とに馴れてゐる自國語について最も自然に行はれてゐるのであるが、いはゆる十分使ひこなすに至らない外國語については、事情がすこぶる異つて來る。すなはちこの場合には、一面において聽覺的音聲表象が心裡に確立してゐないと共に、他の一面において音聲の運動的習性が出來てゐない。自分の今まで親しんで來た自國語の音聲表象または運動習性を以て他を律しようとする傾が生じるを免れない。ゆゑに外國語の習熟には、その音聲を聽覺によつて捉へるに努めると共に、新しい音聲運動、ことに調音の習性を獲得することを念としなくてはならない。

外國語における音聲を精細に聞分け、またいひ分けるに至るときは、自國語の音聲と比較してその異同を考へ、特徴を探ることが容易になる。比較研究の方法は、いづれの場合にも必要であるが、國

語音聲學にあつても、音聲の一般的理論のみならず、外國語との比較考察が、多大の効果をもち來すことは、いふに及ばない。これによつて、ことに調音の異同を明かにし、以て國語にあつては自動的また無意識的に行はれてゐた發音上の習性に注意をむけることが出來、國語に特有の音聲現象などをも發見し解明するに至るであらう。外國語との接觸によつて、音聲知識が發達したのは、古今にも東西にも、例證に乏しくないのである。

音聲の認知は、特別の場合には間接に聽覺以外の感覺を介して行はれることがある。たとへば、「視話」といふやうに、主として發音における唇の運動を見て、音聲を察することがある。いふまでもなく、この場合には、ある樣式の唇や頰の邊の動き方、口のあき方が一義的に音聲を代表するものではないから、極めて不完全な結果を得るにとゞまる。また觸覺を介して振動を知覺する方法も、聾者などの用ゐるところであるが、その感受性がすこぶる高度まで發達するとしても、これは直接に振動體たる固體に觸れずには出來ないのであつて、もとより音波として空氣中を傳はるやうな音聲を十分に知覺する所以ではない。

音聲の直接な完全な知覺は、聽覺によつてはじめて可能である。「おと」は外耳に傳はつた空氣の振動が、內耳における生理的過程を生じて神經に作用し、これによつておこる感覺であつて、特定の振

動がこの感覺の正當な刺戟である。音聲に用ゐられる「こゑ」の高さは、普通最もよく音樂にも用ゐられる調子の範圍に限られ、低い方の約一〇〇振動から高い方の約三〇〇振動の間にある。その强さは發聲・發音の器官の構造および呼氣の壓力におのづから制限があつて、弱くする方は耳に聞えないほどにもすることが出來るが、强くする方には限度がある。發音における器官の運動にも、所要時間に一定の限度があつて、個々の音聲はそれ〳〵ある長さの最小限をもつ。はつきりした話しぶりにおける音聲の高さ・强さ・長さは、一般にその知覺に對する條件として不適當のものではない。

しかるに、日常の談話にあつては、話しぶりの速さなどの關係から、個々の音聲がはつきりした調音と十分の長さとをもたず、これを單獨に切りはなして聞くならば、音聲としてすこぶる曖昧なものが多くあらはれる。かやうな音聲によつて言葉がやりとりされながら、その意味が大抵通じて大して差支を生じないのは、言語の心理的理由にもとづく。そしてまた時々聞きちがひをし、言葉の意味をとりちがへるのも、心理的な現象に外ならないのである。

われ〳〵が知らない外國語を耳にするとき、何か音聲を出してゐることはわかるが、それは何の統一も連絡もない「おと」のごたまぜとしか聞えない。その中からある音聲を聞き出すことはあつても、いづれも自國語にあらはれるものか、またはそれに引き寄せて聞いたものである。かやうに意味を知

らない言葉については、その個々の音聲を聞きとることが困難であり、また間違ひやすい。この事實はたゞ知らない外國語を聞くやうな場合だけに限らない。音聲がある一つの意味をあらはすやうな全體に形成され、その全體のうちにそれ〴〵の定まつた結構が出來てゐる際に、これを捉へることが容易であり、さういふ形成と結構とをもたない單純な音聲の積み重ねが、「ひゞき」の混亂として以外にそのまゝ受取りがたいのは、病理的な言語障碍についても著しい例を見ることが出來るのであつて、實に音聲現象の全般について觀察することが出來る事理である。

シタインタールもいふやうに、普通の讀書に際しては、讀む人が語句の一字一字、また文字の一畫一畫を見るのでなく、見るところは思ひの外少くて、心でこれを補ふところが多きを占める。校正者が注意を文字や字畫に拂ひながら、なほ誤字や脱字を見のこすもこの故である。この事はまた移して音聲の場合にもいへる。話し言葉を理解する場合に、人はその一々の音聲を聞くのではない。まづその意味によつて成形された言葉全體を直接にとらへ來り、その内的結構によつて部分における音聲を定立するのである。かやうにして、調音の不完全な口ばやな言葉も、直下に理解され、その事態の如何によつてはまた誤解されるのである。

具體的な日常の話し言葉にあつては、一つの意味の重心が音聲の强めまたは同時に語調の高めを伴

つて發音され、知覺の作用はこれを中心としてその周圍に結晶する。かやうな全一的成形は、本來未分の狀態において原始的言語に著しくあらはれて來るものである。ジーヴェルスがいふやうに、原始的言語における話の一くぎりは、音聲學的に見れば、音聲の一かたまりであつて、話し手も聞き手も、その一々の部分たる單語を意識することなくして、語られまた理解される。その全體の構成のために は、部分たる單語はしば〳〵非常にゆがめられて、これを單獨に取出してみると、音聲の結構がその體をなしてゐない有樣になつてゐるが、話の理解には何らの支障もない。かやうな全體から、單語といふ論理的構成における概念的要素を取出すのは、まつたく分析的思索の結果である。この事理は自然民族の言語においてすこぶる著しい例を示すが、われ〳〵の日常の談話にあつても、その直接な心境に立入つてみればまつたく同一である。

かくて音聲の發生に際しての不完全(調音の不正確、强さ、長さの不十分、氣音などの紛れこみ)および聽取における不十分(個々の音聲の不分明、話のをはりに對する不注意)があるにも拘らず、日常の會話などで話し手と聞き手との間に意味の理解を遂げることが出來る。この際强くはたらくところの一つの心理的事實は、心の構へ方といふことであつて、すなはち特定の話題といふ一つの事態の中に適合するやうに態度をきめるのがそれである。ある話を「もち出す」とか、「水をむける」とかいふ

のは心理的な一定の事態または形勢を作り出すことであつて、かういふ風に構へられた心は、發せられたすべての音聲または語句を、その事態に適合しその形勢において安定するやうに受けとる傾向を著しく示すものである。部分的な不分明は、その全體的結構によつて明瞭にされるのであつて、いはゆる前後の意味、「文脈」で不明な箇所をわからせるといふのも、この事理による。

音聲の知覺におけるこの心理的事實は、速記者としての實際經驗にもとづいて述べたヘルヴィクの記載の中に、興味ある例證を見出すのである。氏は速記者の立場から次のやうな考を述べてゐる。「人が實際に聞いて捉へるのは、たゞちに理解して意味のわかるものだけである。辯士が聞き手の知らない語を用ゐたら最期、それが國語であらうが外國語であらうが、確かに正しく受取られるどころでない。知らない語についてゐた前後の言葉はやつと書取られたにしても、少くとも知らない語そのものは速記からぬけてしまふ。それは思ひ出せない。辯士がはつきり發音したかどうかさへ誰にも思ひ出せない。たゞ聞き手の教養によつて、聞いた「おん」と覺しいものに意味の通るやうな語をあてはめてみるより仕方がない。はつきりとした意味のわかる話なら、「おん」の解釋だけですむ。例へばダスと聞えたがこれはガスのことだといふ風に。ぼんやりした音聲や意味のわかりにくい語に出會ふと、理解力のから助をかりて意味をたどらなければならない。」

氏の經驗によると、かなり多くの音聲が知覺の際に混同を生じる。特に多く互に間違へられるのは氏によれば同じ調音域をもつて發音される音聲、たとへば〔p〕・〔b〕・〔v〕のやうなものだといふ。グツマンは無意味の音節を以て實驗を試みた結果に立脚して、これに反對し、同樣な音響學的性質をもつ音聲(「ねいろ」の似たもの)の方が、調音域を同じくする諸種の「おん」よりもずつと多く互に間違を起しやすいと主張する。すなはちその實驗の結果、〔p〕・〔t〕・〔k〕の無聲破音、〔b〕・〔d〕・〔g〕の有聲破音、〔ʃ〕・〔f〕・〔s〕・〔ts〕・〔ç〕・〔x〕の無聲擦音、〔m〕・〔n〕・〔ŋ〕の鼻音、〔v〕・〔z〕・〔j〕の有聲擦音のそれ〴〵の間に互に混同を生じる傾向が著しく見えたのである(音字の解說は次節參照)。また喉頭破音〔ʔ〕は、主として各種破音(或は無聲の或は有聲の)と混同され、喉頭擦音〔h〕は、しば〱或は喉頭破音と或は無聲破音〔p〕・〔t〕・〔k〕と間違へられた。母音についてはおほむね誤認を生じなかつたが、時として音色の相似た〔e〕と〔i〕とが間違へられ、また重母音〔aɪ〕・〔oi〕などにおいて、前部すなはち〔a〕・〔o〕だけとして聞かれたことがある。〔ε〕は〔e〕に、〔ø〕は〔e〕に、〔y〕は〔i〕にしば〱間違へられる。が、とにかく母音の知覺については、かやうな間違は非常に少い。

この際最も注意すべきことは、無意味な音節を以てしたこの實驗にあらはれた間違の件數が、有意味の單語を以てした場合に比して非常に大きいといふ事實である。パンコンツェリカルツィアの試みた實

驗でも、無意味の音節が意味のあるものよりも多く間違つて聞取られたのである(7)。またグッマンの結果では、耳のよく聞えない人について試みても、意味のある單語を以てした場合は、耳のよく聞える人について無意味音節を以て試みた場合よりも間違が少かつた。(8)

かやうに意味の含蓄を以て成形された音聲が、單に無意味な音聲の接合よりも、容易にかつ正確に知覺されるといふことは、言葉の心理的考察においてすこぶる注意すべき點である。ヘルヴィクの速記作業における觀察にも、次のやうな事例があつて、この事理をたしかめる。すなはち辯論や講演にあらはれる各種の語彙のうち、速記者が最もしば〳〵捉へにくいものとし、その發音を逸するのは、第一に數詞、第二に固有名詞であつて、これが語句の中ほどにあらはれた場合には、これをはつきり聞取ることが困難であり、時に全く確認することが出來ないといふ。これはつまり數詞・固有名詞などがその含蓄において程度が低く、全體の意味への適合、全的事態における安定は、數字の相異または甲氏と乙氏、丙地と丁地との交換によつてもほとんど影響されないからである。もちろん意味が全的事態において重きをなすやうな語であり、またすでに思想的成形において適當の地位を占めてゐるやうな熟知されたものであるならば、固有名詞であつても十分正確に知覺されるであらう。

人と相對して語るやうな會話の場合には、視覺のはたらきの協同によつて、最初から心の構へ方が

きまり、話の理解、したがつてまた音聲の知覺は、すこぶる容易になる。かういふ補助手段を伴はない電話による通話などにあつては、しば〳〵話の理解や音聲の知覺に困難が生じるわけである。電話の裝置が音聲、ことにある種の子音を傳へるためには、すこぶる不十分であるといふ點も顧慮すべきであるが、それにしても、一旦話し相手が自分の熟知する人物であり、話題が自分の利益に關する事件であることを知るに至れば、通話はほとんど差支なく行はれ、談話はよく理解されるのである。しかし、そのはじめに未知の人、または豫期しない友人などから突然その名をいはれて、容易にそれを聞きとることの出來ない場合があるのは、人のよく經驗するところであらう。數詞のごときは電話の通話にあつてももつとも聞きちがひをおこしやすいのであるから、きはめて明瞭にかつゆつくり發音しなければならない。

音聲の知覺における右のやうな事理は、言語にあらはれる諸種の現象を考察するにあたつて、大切な事柄である。音聲轉化の現象のごときも、單にその發聲・發音における生理的機能のみに着眼して考察すべきでなく、含蓄あり成形ある言語における心理的現象として理解しなくてはならない。

アクセントの成形や語調における感情のあらはれのごとき言葉の心理的事實については、後にくはしく述べよう。

四　音聲の標示

言葉を書きあらはすための文字には、漢字のやうに普通に意味をあらはすと思はれ、したがつて表意文字とよばれるものと、言葉の音聲をうつすことを主眼とする表音文字といふものとがある。漢字以外の文字は、みな表音文字といふことが出來るであらう。支那の言語においては、漢字もそれぐ必ず一定の音聲をあらはしてゐるものであるから、ある程度で意味をあらはすにしても、また表音のはたらきもしてゐるのである。すなはち一字が必ず一音節の音聲を代表するところは、わが國語に行はられる假名と同樣である。國語を書きあらはす場合に用ゐる漢字には、かやうな一定の表音のはたらきがなくて、一字の字音に幾通りもあり、訓すなはち讀み方にも種々あるが、かやうな文字の用ゐ方は文字成立の歴史から見ても、まことに變態的現象に屬する。假名といふ表音文字の發明されたのも、つまりこの變態狀態にもとづく不合理を緩和し、不便を少くするための必要から出てゐる。

かやうに文字は、表音のはたらきをするのでなくてはほとんど言葉を表示するといふ使命をはたすことが出來ない。これは言葉を構成する語に變化、活用があり、また助詞などのやうに一定の概念內容をもつとは見做されないものがあるからで、支那の文字に虛字といふやうなものがあらはれるのも

この故である。

表音文字にも單純な音聲の結びついて出來てゐると見られる一單位の音節を代表するものと、音聲をそれ〳〵一つの調音運動によつて發せられる單位まで分解した單音を代表するものとの二とほりに分けることが出來る。國語における假名や朝鮮におけるオンムン（諺文）は、おほむね一字が一音節をあらはすやうに作られてあり、イギリス・フランス・ドイツなどで用ゐられてゐるローマ字は大體の主意から見ると、一つびとつの單音をあらはすやうに出來てゐる。

單音は一つの調音運動によつて發せられる音聲の單位で、それ〳〵一定の音色または音質をもつてゐる。これがいろ〳〵に接續して種々の連音をつくり出すのであり、音節もかやうな連音のうちのごく短いものである（第七章參照）。さて、それ〳〵の單音を代表する文字をきめると、その文字の接合によつて種々の連音をあらはすことが出來。しかも少數の文字で事が足りる。たとへば現代の支那語（北京官話）において二つ、三つまたは四つの單音が結びついて一音節を形成する音聲の組合はせの種類は、四百餘といはれてゐる。それ〳〵の音節を一字づゝで代表させると、四百餘の表音文字がいるわけである。しかるに、これを單音に分解するときは、その單音の數に應じて、十に足りない母音と二十に及ばない子音とをあらはす文字で間に合ふであらう。或はローマ字で書く場合のやうに、二つの

文字を組合はせて一つの單音を示すやうな方法をとるならば、字數はもつと少くてすむのである。表音文字で言葉をうつすことの一つの長所は、文字の數が少くてすみ、その文字組織が簡明である點にある。この點では、音節を表はす文字よりも、單音をあらはす文字の方が優つてゐる。

音聲學では、音聲の分析的および綜合的考察を遂げるために、まづ單音の性質をよく知ることを肝要とする。そこで、單音を一義的に代表する符號をきめることが、數學などで符號を用ゐると同樣にはなはだ必要である。かくて、音聲學では單音をあらはす符號を定め、その符號は、一つの單音を他の單音から區別するやうに、それ〳〵の單音に對して一定しかつ獨特であるやうにする。また單音の性質を潤飾する發音・發聲または呼吸の上のはたらきも表示する符號をつくる。これを一般に音聲符號といふ。音聲符號にはいろ〳〵のものがあるが、普通の文字のやうに便利に書きあらはすことの出來るものが、最もひろく行はれてゐる。これも表音文字の一種であるが、一字はつねに一單音を代表し、一單音はかならず一字に當るといふことを原則とする點で、普通の文字とちがふものである。ゆゑに特に科學的字母、發音文字または音標字母とも名づけられるが、こゝにはこれを音字と呼ばう。

普通に用ゐられる表音文字は、音聲を代表するとはいひながら、種々の不十分な點があり、またその不足を補ふために行はれて來た習慣には、すこぶる不合理なものが少くない。一字一音の原則は事

實上あまり行はれてゐないで、表音のための規則すなはち正字法または假名づかひの如きも不統一かつ不徹底である。イギリス・フランスなどの言語において、この事が甚だしい。表音の手續を合理的にすべきことは、從來各國において實際運動として正字法改正の叫びとなつて現はれた。音聲學者の方では、音聲理論の考察といふそれ自身の立場から、この運動と關係なく別に音聲符號を考察した。かういふ立場から音聲を代表する符號の資格として要求されるのは、

(一)研究對象たる音聲をその微細な差異までもかなりよく代表し得、また必要によつては新しい音聲を代表する符號をも生み出すやうな彈性を具へること。

(二)習得および記憶に容易で、かつ書くのに骨の折れないこと。

(三)印刷にも困難のないこと。

である。この要求に應じて完全な資格を認められる方式は、今日までのところまづ見當らない。たゞ比較的に見て、しかじかの方式がこの資格を多分にもつといふことがいへるだけである。

一般に音聲符號を作るにあたつては、大體二つの道がある。

(甲)從來行はれてゐる文字に關係なく、全く新規に考案すること。

(乙)ローマ字(ラテン字母)などを基礎として、これを多少變化し、また補充すること。

この最初の行き方で、十七世紀から十八世紀の頃、種々の方式のものが案出され、十九世紀に至つてもその數を增したのである。この方式のうちで、最も注意すべきものが二つある。その一は速記術に用ゐる文字であり、他の一つは「視話音字」といはれるベル考案の音聲符號である。

速記文字は各國について異同があるが、その目的は、最も簡單で最も容易な符號を以て、普通の文字によるよりもずつと速かに言葉を寫し取らうとするにある。ゆゑに音聲學者の目的とするところと大いに異なり、音聲考察に對する用意を缺いてゐるのは當然である。

これに反してベルの方式は、氏の音聲理論にもとづく系統的組織であつて、スキートのやうな有力な音聲學者の支持を受けてゐる。一見して調音の部位および仕方を知り得るやうにと考案されたもので、特に母音の種類を分つこと、すこぶる詳細である。その獨創的な點は大いに認めるべきものがあるが、そのもとづくところの音聲理論が必ずしも正當なものでなく、その符號は見わけにくゝ覺えにくゝ書きにくいものであり、印刷上にも具合がよくない。かういふ理由のためにひろく行はれるに至らない。

イェスペルセンは、獨特の考案によつて音聲標示の方式を組立てた。單音を發するに當つて參與する發音・發聲および呼吸器官を代表する符號と、その各器官の形ならびに氣流通路の大さを示す數字

とを結合して、これによつて精密に特定の單音を代表しようとする方式である。これは、分析的考察に利するところが少くない。

ローマ字を基礎とする行き方は、習ひやすく、覺えやすくかつ書きやすいために、ひろく行はれてゐるが、これにも種々の方式がある。ローマ字の字母だけでは不足であるから、その不足を補ふために、或は頭文字・イタリックのやうな異なる字型を用ゐ、或は文字を倒さにして用ゐ、或はギリシア文字などを一部借用し、或は文字の上や下に補足的のしるしをつけて用ゐる。なほ不足する場合には新しい符號を作つて補ふのである。

この行き方によつてすでに古くから幾多の表音組織が世にあらはれ、音聲研究の盛んに行はれるに至つた十九世紀にはます〳〵その種類を増し、各の音聲學者が各自の方式をとるやうな事態も、ある時代には引續いた。かやうな有様は、研究の上に多くの不便と不利益とを持來さずにはゐない。表音方式の統一を希望する聲がやがて高まつたのである。

一八九四年ジュネーヴに開かれた東方學者の會議において、サンスクリット原文を寫しかへるに用ゐる表音の方式が一定された。これはサンスクリットにあらはれる音聲を寫すには適當であるが、あらゆる言語に對しても好都合とはいへない。しかし多くの言語學者は、多少ともサンスクリットを學

んでゐる關係から、しば〳〵これを借用して種々の言語における音聲をあらはし、隨時不足を補ふやうな便法をとる者が少くない。音聲學上の述作についても、この方式をとるものが言語學者の中に往々あつた。

「フランス言語分布圖」(9)は、方言研究についての典型的述作とされるが、これに用ゐた表音の方式はローマンス語における音聲の特質にもとづき、これを明かにするために考案されたものであつて、フランス音聲學者のうちには、この方式を用ゐるものが少くない。

一八七七年スキートが音聲學の述作を試みるに當つて案出した「ロウミク」Romic の方式では、音聲の精細な表示とやゝ不精密な表示とを併行して用ゐ、前者("Narrow Romic")を音聲理論の考察に適するもの、後者("Broad Romic")を實用に利あるものとした。この後者を基礎とし、これにフランス語を表示するに適するやうな若干の變更を加へて、ポール パシは一つの方式を組立て、また音聲學普及のための國際音聲學會を設けて、その機關雜誌「メートル フォネティク」(Maître phonétique)にこの方式を用ゐた。この會員は各國に亘つて分布され、現代語の教授などにこの方式 應用したので、すこぶる普及するに至つた。當初の方式は、のち次第に補充および變更を加へられたのである。

これは國際音字(萬國音標字母)といひ、各種の言語にあらはれる音聲を統一的に表示することを標榜

するものである。

國際音字は、當初からむしろ現代語の教授などにおける音聲學の應用に便するやうな用意の下に考案されたものであるから、これを學びこれを書くに容易であるといふ點に多大の長所をもつのであるが、音聲の精細な論究に對しては適切でないところが少くない。またフランス語にあらはれる母音を寫すには好都合であるが、イギリス・ドイツの言語や、或はわが國語・支那語などについていへば、多少とも適當せずまた都合のわるいところが出て來る。子音をあらはすには、まづ大抵間にあふが、母音に對してはかなり不足するところがある。國語について見れば母音の數が少いので、不足もしないと思はれようが、東京語における「イ」の「おん」などは、イギリス・ドイツなとの言葉において〔i〕または〔ɪ〕であらはされてゐるものと、かなり相違するのである。それゆゑ本來からいへば、國語については別に音字をきめなくてはならない。かういふ例は子音についてもある。

しかしその普及の點、使用および學習に便利な點などから、音字といへばさしあたりこの方式を用ゐないわけにいかない現狀である。そこで國際音字の使ひ方については、各國語ともあらかじめある諒解のもとに、相近似する「おん」は便宜之同じ音字であらはすことにしてゐる。そしてまた必要に應じてそれぞれ補足することにするのである。

從來國語の音聲をあらはすためにローマ字を用ゐる方式は、ずつと溯ればイスパニア風にシャ行の頭音に x の字母を用ゐるとか、ホーソマンの『日本語法』におけるやうにラ行の頭音に l の字母を用ゐるとかいふ有樣で、まち／＼であつたのを、いはゆるヘボン式の書き方が普及して、子音のあらはし方がイギリス風になつた。これによつて今まで完全なものと考へられてゐた五十音圖に、組織の整はないやうに見える箇所が出來、そのために音聲への注意をよび起した功績もこの方式のローマ字がきには、たしかにあると思はれる。しかしその一面には、國語の音聲に對する間違つた見解を流布した罪も少くない。音聲の觀察にあたつては、かやうな傳統的な見解を脫して、すべてを批判的に見なほさなければならない。

はじめて國語の音聲を組織的に研究し、國際音字をこれにあてはめたエドワーヅは、次のやうな音字對照表を掲げてゐる（こゝには便宜上母音と子音との二組に分けた。「英」などゝ書いてないのはフランス語の例である。）

第一表　音字對照表
(Edwards)

A. 母音對照表

フランス, イギリス, ドイツ語等			日本語	
[a]		patte		
			ɑ	nɑ (名)
			ɑĭ	ɑ ɑĭ (赤)
[ɑ]		pa		
[æ]	英	man		
[ʌ]	英	but		
[e]		dé		
			e	me (目)
			eĭ	kireĭ (美)
[ɛ]		fait		
[ə]		mesure		
[əː]	英	bird		
[i]		ni	i	ni (二)
[ɪ]	英	baby		
			《ĭ	maĭ (前)》
[o]		sot		
			o	to (戸)
			oĭ	ʃiroĭ (白)
[ɔ]		fol		
[u]		tout		
[ɯ]	(まるめノナイ u)		u	inu (犬)
			ŭi	furŭi (古)

第一表　音字對照表

(Edwards)

B. 子音對照表

フランス，イギリス，ドイツ語等			日本語	
[b]		*b*out	b	baʃa（馬車）
[c]		無聲口蓋破音		
[ç]	獨	i*ch*	ç	çiru（書）
[d]		*d*ent	d	dare（誰）
[ð]	英	*th*en		
[f]		*f*aux		
[ɟ]		有聲口蓋破音		
[F]		兩唇的 f	f	fune（舟）
[g]		*g*ant	g	go（五）
[illegible]	獨	*h*ier	h	hana（花）
[ɦ]		有聲軟口蓋擦音		
[j]		pa*y*er	j	jama（山）
[k]		*c*ar	k	kuru（來）
[l]		*l*ong		
[m]		*m*ot	m	miru（見）
[n]		*n*atte	n	naze（何故）
[ɲ]		oi*gn*on	《ɲ 稀》	
[ŋ]	英	si*ng*	ŋ	tamaŋo（卵）
			ŋ̊	kiŋ̊（金）
[p]		*p*art	p	paŋ̊（パン）
[r]		（舌尖的）		
[R]		（のどびこノ）		
[ɹ]	（卷カナイ）英	*r*ed	r	roku（六）
[s]		*s*i	s	sakura（櫻）
[ʃ]		*ch*ou	ʃ	ʃima（島）
[t]		*t*ôt	t	tora（虎）
[θ]	英	*th*ink		
[v]		*v*ent		
[ʋ]		兩唇的 v		
[ʍ]	スコットランド	*wh*ich		
[w]		*ou*i	w	wakaĭ（若）
			《x 稀》	
[x]	獨	ac*h*		
[y]		p*u*		
[z]		*z*èle	z	kaze（風）
[ʒ]		*j*oue	ʒ	ʒi（地）
[ʔ]		（喉頭破音）		

第一表　音字對照表

(Edwards)

C. 符　　號

˘　母音ヲアラハス音字ノ上ニツケテ，重母音ノ副音ニナルコトヲ示ス.

°　音字ノ上又ハ下ニツケテ無聲トナルコトヲ示ス.

ː　前ノおんノ長クナルコトヲ示ス.

ˑ　前ノおんノ半バ長クナルコトヲ示ス.

,　音字ノ下ニツケテさゝやきニヨル母音デアルコトヲ示ス.

`　音字ノ上ニツケテ母音ノあきノ廣イコトヲ示ス.

´　音字ノ上ニツケテ母音ノあきノ狹イコトヲ示ス.

ˈ　音字ノ前ニツケテソノおんノ强イコトヲ示ス.

⌜⌝　音字ノ上ニツケテソノおんノ高イコトヲ示ス.

⌞⌟　音字ノ下ニツケテソノおんノ低イコトヲ示ス.

|　いきノきれめヲ示ス.

‖　ヤヽ長イおんノ休止ヲ示ス.

ˌ　子音ヲアラハス音字ノ下ニツケテ音節ヲタモツコトヲ示ス.

˖　舌ガモ少シ前ニ出ルコトヲ示ス.

˗　舌ガモ少シ後ニサガルコトヲ示ス.

エドワーヅのこの表によれば、日本語の「ア」はフランス語の[a]と[ɑ]との中間にあり、「エ」はフランス語の[e]と[ɛ]との中間にあり、「オ」はフランス語の[o]と[ɔ]との中間にある。「ウ」は[ɯ]にあたり、「イ」はフランス語の[i]に應じてゐる。「ア・エ・オ」に對してそれぞれ[ɑ]・[ɛ]・[o]を、「ウ」に對して[u]を用ゐるのは、便宜によつてゐるのである。（ポール　パシは「ウ」を[ɯ]で寫してゐる）。[10] [F]の代りに[f]を用ゐるのも同様である。

本書において用ゐてゐる音字も、大抵こゝに示されてゐるものゝ範圍を出ないが、國語音聲の觀察にもとづいてエドワーヅの用ゐ方を修正したところもあり、また「金(キン)」の「ン」にあたる[ŋ]は、その用ゐ方が間違つた見解にもとづいてゐるので、これをやめて別に音字[ɴ]を作つてこれにあてる。その他母音について多少の變更を試みた。これらはすべて國語音聲の特質を明かにするための用意に出てゐる。それぞれの音字ならびに附帶して用ゐる符號については、各條下において説明を加へる。

註(1)普通男ではドイツ風の記法で A——c、女では a——e′ の調子である。

(2)呼吸聲門 Glottis respiratoria に對して發聲聲門 Glottis phonatoria を分ける。

(3)詳しくいへばなほ氣音の強さについて強弱の等級を分けることが必要であり、またその強まり方の方向について差別が考へられる。[h]を強く發しようとすれば、呼氣の量が多く費されるのであるから、普通の談話の場合には、これを強く發するといふことはあまり行はれない。唯感動詞のやうなものに強い氣音を聞くことがあるだけである。一般にはじゝ呼氣壓が弱

く、母音に近づくにしたがつて強くなる。漸强的h (das Crescendo h) は、もつとも普通のものである。

(4)ドイツ語にいふ der feste Einsatz で、イギリスでは check glottid 〔Ellis〕 などいはれる。

(5)いろ〳〵にいはれる。すなはち Stimmknall; coup de glotte; glottal catch など。Rapp: Versuch einer Physiologie der Sprache. I. 51〕が Kehlkopf xplosivlaut の名稱を用ゐた。

(6)ドイツ語で der lose Einsatz でイギリスでは clear glottid 〔Ellis〕, clear beginning 〔Sweet〕 などといはれてゐる。

(7)Panconcelli-Calzia: *Experimentelle Phonetik*, S. 19.

(8)Gutzmann, H: *Psychologie der Sprache* (Handb. d. vergl. Psychol., hrsg. v. G. Kafka, Bd. II, Abt. 1) S. 11.

(9)Gilliéron et Edmont: *Atlas linguistique de la France.* 1900—1910.

(10)Passy: *L'Ecriture phonétique.*

第二章　單音

五　音聲の分節

人がその思想を表はすために發音したある話の一つながりは、一つの全體であつて、もちろん全體として意味あるものである。原始的な言語にあつては、その語法的關係から、これを分けることが困難である場合が多い。分化した言語においては、普通には語法上の見方から、まづこれを單文に、單文を句に分け、句をまた語（單語）に分ける。かやうな語法的見方の外に、なほ論理的に一つの立論を前提と歸結とに分け、更にその成素を探つて主辭、繫辭、賓辭の關係に歸着させる場合もある。あるひは心理的の立場から、言語表象といふやうな成素を析出し、それの聽覺的・視覺的・音聲運動的・書字運動的成素を分けて考へるといふ行き方もある。

かやうな種々の立場を離れて、音聲學的に、すなはち音聲の耳に聞えるところの特質、およびその音聲器官の機能によつて發せられるところの條件に立脚して、一つながりの話において分解を試みることが出來る。

すなはち、暫くその意味内容を度外視して、音聲の連續について觀察すると、話における音聲は同じやうにどこまでも長くは續かない。おのづから頭・腹・尾を具へた段落を示して、それ〴〵の段落の間に切れ目が生じる。この段落は、自然に一定の聽覺的特色をもつ結構である。これをかりに話段と名づけよう。

一話段の四秒五秒以上もつゞく場合には、呼氣が音聲を發するのに不十分になるために、一旦空氣の呼出をやめて吸入をしなくてはならない。いはゆる息をつぐのである。話段の中での吸氣に際しては發聲發音が休止され、音聲の短いきれめが出來る。そのきれ目の長さは、話の速度によつてちがふが、普通一秒に及ぶことが少く、多くはそれ以下の休止である。これによつて分節される話段の一部は、いはゆる一いきで發音されるものであつて、これを呼氣小節（いきの段落）といふ。

さて、一つの呼氣小節の內部における音聲の進行は、やはり全く一樣でなく、これを耳に聞くに音樂にいふ拍子に類する感じがあり、また音樂にいふ旋律の動機にあたる、それ〴〵の形式をそなへた部分を分けることが出來る。これは音聲の强さの布置によつて、または高さの布置によつて成形を得るものであつて、かやうな部分をアクセント小節と名づける。後にのべるアクセントは、つまりこの小節の成形または結構に外ならない。

このアクセント小節の中について、さらに音聲が結び目のやうに幾つかにかたまつてゐるのを分けて音節といふ。音節を構成する成素を求めて、つひに單音を得るのである。單音は普通に音聲を分解して得る最後の成素である。

一つながりの話の中で、話段・呼氣小節・アクセント小節・音節・單音が、それ〴〵の程度の單位を形づくつてゐる。この音聲學的に見た各單位は、或は語法的分節に相當することもあるが、必ずしもさうでない。

かやうに分解して得た分子的單位である單音が結合して音節を作り、音節が集つてアクセント小節を成し、さらにこれが相集つて呼氣小節になるといふやうに、構成的に説明することは、語法において語幹・語尾・接頭辭・接尾辭から單語が構成され、單語が集つて語句が出來、語句が結びついて單文が成るといふ風に説明するのと同樣に、諸種の現象を理解するために利益するところが少くない。しかし、單にかういふ行き方では、成形における特徴がつひに説明されず、また重要な事理を閑却する弊が多いこと、近時の學界において痛論されてゐるところである。構成的見解を機械的に進めて一切の解明を期することは出來ない。大小それ〴〵の單位における特質を見きはめることは、全的理解に最も必要な事項である。

まづ單音の特質を明かにし、次に連音における諸現象を見、アクセントについてその結構を察し、話段における全的性質に關してその意義を探るのは、音聲學における便宜な進み方である。

六 單音の類別

音聲學にいふ單音は、一定の音色をもつて特徴とする單位語音である。この本來の性質は、音質に存して強さや高さや長さには關係しない。ゆゑに、同一の單音を、種々の大さ・調子または繼續時間をもつて發することができる。また二つの異なる單音を同一の大さ・調子または繼續時間をもつて發することもできる。

耳に聞える音色の相異は、心理的な事實であるが、これは單音の成立に際しての物理的および生理的條件における相異に對應する。語音を心理的にその主觀的印象から系統的に類別するときは、いはゆる「素音」を得るが、その類別の精密と明確とを期しがたいこと、あたかも味(あぢ)または匂(にほひ)におけると同樣である。そこで從來音聲學では、主として音聲を發するに當つての生理的物理的條件を考察して、特定の單音を定立し、かくてすべての語音を系統的に排列することを得たのである。

かやうな單音の類別にあつては、發聲・發音の條件を主として考察するとき、必ずしもその知覺に

おける近似殊別と一致しないものがある。ゆゑに單に發音の際の條件だけでなく、知覺における印象や音波の物理學的性質をも、あはせて考慮すべきである。

單音の類別は、音聲研究のはじまつた最初から問題とされてゐた事項であつて、上古にはインドにおいて語法學者がこれを試み、また古代ギリシアにおいても學者がこれを企てた。そのインドにおけるものは、音聲の觀察について精細なるものがあり、その見解はギリシアにおけるものよりも進んでゐる。かやうな古代における音聲の考察は、單音の類別に重きをおき、語音の系統組織を中心問題としたのであつて、その類別表を通覽してほゞ音聲についての當時の理解の程度を知ることができる。

ギリシアにおける音聲研究は、哲學者の仕事であつて、語法學者がこれに參加し、もつぱらギリシア語の音聲を分析し、音聲器官に關する不完全な知識に基礎を求めてゐる。その單音の類別を見るに次の表に示すやうである。

第三表　古代ギリシアの單音類別

- 要素（ストイケーア）（單音）
  - 母音（フォーネーエンタ）……
    - 短音（ブラケア）　ε　ο
    - 長音（マクラ）　η　ω
    - 中間音（ディクロナ）　α　ι　υ
  - 子音（シュンフォーナ）
    - 半母音（ヘーミフォーナ）
      - 單純音（ヘプラ）　σ
      - 重複音（ディプラ）　ζ　ξ　ψ
      - 流音（ヒュグラ）　λ　μ　ν　ρ
    - 默音（アフォーナ）
      - 稀薄音（プシラ）　π　κ　τ
      - 中庸音（メサ）　β　γ　δ
      - 濃密音（ダセア）　φ　χ　θ

この表について見るときは、ギリシア人が發音發聲の生理的條件を考察することが少く、むしろ聽取の際の心理的効果に着眼して類別したことがわかり、また文字の影響を受けてゐることがわかる。

古代インドの音聲考察も、その言語すなはちサンスクリット（梵語）の觀察に立脚してゐる。しかし一面においてサンスクリットが音聲（少くとも子音）について豐富な種類を有し、單音の連結における相互作用が語法上重要な意味をもつのと、他の一面ではインドの學者がギリシアにおけるよりも音聲器官の機能について知るところが多かつたのとで、語音の排列の仕方がよほど合理的である。次にローマ字を以て示したサンスクリットの語音類別表を掲げる。（譯語は荻原雲來氏による）

第四表　古代インドの單音類別

	無氣（無聲破音）	含氣（無聲帶氣）	無氣（有聲破音）	含氣（有聲帶氣）	鼻	硬吹氣音	半韻（半母音）	韻（母音）短	長
喉	k	kh	g	gh	ṅ			a	ā
顎	c	ch	j	jh	ñ	ś	y	i	ī
斷	ṭ	ṭh	ḍ	ḍh	ṇ	ṣ	r	ṛ	ṝ
齒	t	th	d	dh	n	s	l	ḷ	(ḹ)
脣	p	ph	b	bh	m		v	u	ū

軟吹氣音　h
隨韻　ṃ
隨鼻韻　m̐
止聲　ḥ

かやうにインドの音聲學では、語音が聲門の廣狹によつて區別される「いき」または「こゑ」によつて生じることを觀察して、これを無聲音（aghoṣa）と有聲音（ghoṣavant）とに大別した。また語音をさらに發音器官の開き方に着眼して四類に分けた。（一）母音（svara「韻」）は發音器官が開いて「こゑ」を通すもの。母音のない音節はない。（二）半母音（antaḥstha）「半韻」）は、發音器官が輕く接して半ば開き、「こゑ」を通すもの。（三）摩擦音（ūṣman「吹氣音」）は、發音器官が半ば開いて「いき」を通すもの。（四）閉鎖音（sparśa）は、發音器官が閉され、或は「いき」或は「こゑ」で發せられるもの。これに氣音を伴ふものと伴はないものとがある。また鼻音（anunāsika 通鼻）は、有聲閉鎖音である。

つぎに發音器官中の調音の行はれる位置に着眼して、語音を五種に分けた。（一）喉音（kaṇṭhya）とは、舌本と口蓋帆とで調音されるもの。（二）口蓋音（tālavya「顎音」）とは、舌面と口蓋との調音によるもの。（三）頂音（mūrdhanya）とは、舌尖が口蓋頂に向つてそるやうに調音するもの。また舌音（或は「斷音」）と名づけられてゐる。（四）齒音（dantya）とは、舌尖が齒に向つてはたらくもの。（五）唇音（oṣṭhya）とは、唇のはたらきによるもの。

かくして十字分類を試み、單音を系統的に排列したのが前記の類別表である。これをギリシアにお

けるものと比較するときは、これが發音發聲における生理的條件についての、すこぶる精細な觀察にもとづくことを見るべきである。すなはちインドの語法學者は、發音器官のはたらきが氣流の通路を廣くまたは狹くし或は全く閉ぢること（開、半開、半合、合の四種の別）を知り、有聲と無聲との別をわきまへ、いはゆる口音と鼻音との分れる所以の鼻腔への交通の有無によることを悟り、かつ語音の排列をその調音域の順序に應じて試みてゐる。かやうな音聲の理解がギリシアよりもずつと古く、上代インドに存したことは、サンスクリット語法の整備と共に、驚異に價するものである。この排列における短所は、母音の類別にあるが、母音の種類に乏しいサンスクリットにおいては、その考察がこの程度にとどまつたのも止むを得ないであらう。

この考察の行き方で、さらに比較研究によつて進んだならば、大いに見るべき音聲の組織化を得たであらう。しかるにこれが支那に入り、支那を經てさらに日本に入り、音韻の學の組織に根據を與へたのであるが、支那や日本では、格別インドにおける音聲の研究以上に出て、進歩をもたらしたといふやうなことはなかつた。悉曇と稱して佛敎徒の間に傳承されたインドの音聲知識は、音韻學者の間にすこぶる重んじられ、むしろ神聖視された。その傾向も支那や日本における音聲の理解の發達を妨げた一因であらうが、音節を分解して單音を取出し、子音の個々についてその性質をきはめることの

出來なかつた點におもな原因があると思ふ。これには文字の構成も大いに關係するわけで、一音節を單位としてゐる漢字または假名による音聲のあらはし方によつては、單音への分解が困難であり、したがつて音聲の理解が妨げられるのである。

支那の音韻學における「韻」とは、おもに母音をさし、また母音の後に來る子音（「隨韻」）をも合せていひ、一音節において頭部たる子音をのぞいた部分をかく名づけるのである。頭部たる子音をかりにその音節の頭音といふならば（もと往々「發聲」といふ語がこの意味に用ゐられた）、支那でこの頭音を分解し析出する方法が、いはゆる分九音法である。これはサンスクリットにおける語音排列にならつて作つたもので、支那における子音系統に外ならない。これを說明する文にいはく、

見溪郡疑是牙音　端透定泥舌頭音
知徹澄娘舌上音　幇滂並明重脣音
非敷奉微輕脣音　精清從心邪齒頭
照穿狀審禪正齒　影曉喩匣是喉音
來日半舌半齒音　後習學者自明分（『康熙字典』）

と。もちろん現時の支那語においては、音聲轉化によつて異なりを生じてゐるのであるから、直ちに

當はまりはしないが、ほゞ推定することが出來る。こゝに見・溪・郡・疑の順序は、ほゞサンスクリットにおける無聲破音・無聲帶氣破音・有聲破音・鼻音の排列に應じ、見・端・知・幫などの順序は調音域の異同によつて立てたものであらう。

ポール　ペルニによれば（『西漢同文法』[1]）、分九音法の對當子音は次のやうである。

第五表　古代支那の子音類別

	(硬 fortes)	(氣 aspirées)	(軟 ténues)	(鼻 nasales correspondantes)
牙　　音（齒喉音 dento-gutturales）	(k) 見	(kʻ) 溪	(k') 郡	(ng) 疑
舌頭音（齒音 dentales）	(t) 端	(tʻ) 透	(t') 定	(n) 泥
舌上音（口蓋音 palatales）	(tch) 知	(cʻ) 徹	(ch') 澄	(ng) 娘
重唇音（labiales fortes）	(p) 幫	(pʻ) 滂	(p') 並	(m) 明
輕唇音（labiales légères）	(f) 非	(f) 敷	(f') 奉	(o) 微
牙齒頭（sifflantes）	(ts) 精	(tsʻ) 淸	(ts') 從	(s) 心
禪正頭（chuintantes）	(tch) 照	(cʻ) 穿	(tch') 牀	(c'i) 審
喉　　音（gutturales）	(y) 影	(h) 曉	(y') 諭	(hy) 匣
半舌半齒音（半母音 semi-voyelles）	(l) 來	(j) 日		

この排列が支那の語音について正しかつたとすれば、對當の「おん」の表はし方に適切でないところがあるわけで、いづれかに缺陷があると思はれる。しかしこの排列がサンスクリットにおける語音排列を眞似たものであることは、一見明かであらう[2]。

なほ支那で音聲をあらはすために、「等韻」とか「反切」とかいふやうな、間接で面倒な方法を用ゐなくてはならなかつたのも、單音を取出してその自由な結合を考へることが出來なかつたのに由來するのである。「反切」は『韻會』のいはゆる「反切とは一音なり。展轉して相呼ぶ、これを反といふ。……切とは一韻の字相摩して聲を成す、これを切といふ」もので、この方法によつて字音を示すことが、なほかつ便利として行はれた。この方法も魏の孫炎の發明といふが、やはりインドの音聲知識に啓發された形迹もあらう[3]。

悉曇における語音排列を國語について試みたものが五十音圖である。「アイウエオ」の母音の順序のごときは、單に模倣によつて作つたものであり、子音と母音とで成る音節を五十音圖の形式に組立てたところにも格別の獨創は見られない。かくて母音および鼻音「ン」のほかには、單音を取り出してその性質を仔細に見ることが出來なかつた。したがつて國語に對する音聲の理解は、インドの古代におけるものに遠く及ばず、支那の音韻學を學んでもおそらくその程度にも至り得なかつたのである。

單音を取り出してこれを類別し、その性質を明かにすることは、國語の音聲學を科學以前の狀態から科學の體裁を具へたものにするために必要な、第一の段階であるといはなくてはならない。國語における音聲をその單音に分解して、その一つづゝを觀察するとき、どんな特徴が見えるか、またこれらがどう類別されるか。單音論の考察するところは、すなはちこの點である。

註(1)Paul Perny: *Grammaire de la langue chinoise*, 1873, Tome 1°, p. 37.

(2)Bernhard Karlgren は、古代シナ語の子音を次のやうに分類してゐる。

Gutturals: 干 *kân*; 坎 *k'an*; 强 *g'i̯ang*; 岸 *ngân*; 漢 *χân*; 旱 *γân*.

Palatals: 張 *t'i̯ang*; 暢 *t''i̯ang*; 丈 *d''i̯ang*; 章 *t's'i̯ang*; 昌 *t's''i̯ang*; 射 *d'z'i̯a*; 商 *s'i̯ang*; 上 *z'i̯ang*; 讓 *n'z'i̯ang*.

Supradentals: 斬 *ṭṣan*; 攙 *ṭṣ'an*; 讒 *ḍẓ'an*; 山 *ṣan*.

Dentals: 丹 *tân*; 坦 *t'ân*; 壇 *d'ân*; 難 *nân*; 贊 *tsân*; 慘 *ts'ân*; 殘 *dz'ân*; 散 *sân*; 祥 *zi̯âng*; 㘓 *lân*.

Labials: 包 *pau*; 泡 *p'au*; 炮 *b'au*; 茅 *mau*.

Laryngals: 安 *ân*; 羊 *i̯ang*.

中に拗音化するものもある。(Karlgren: *Analytic Dictionary of Chinese and Sino-japanese*, 1923, p. 9.)

(3)『夢溪筆談』—— 切韻之學出于西域。漢人訓字止曰讀如某字。未用反切。然古語已有二聲合爲一者。如……如是爲爾、而已爲耳、之乎爲諸之類。以西域二合之音。蓋切字之原也。

第三章　母音

七　母音總説

母音とは何

母音とは何であるか。音聲の物理的構造と生理的條件と心理的特質とを明かにしないかぎり、この質問に對して正確な解答を與へることができない。從來の音韻學が與へた定義のごときを見れば、このことが首肯されよう。

物理學(音響學)的に見れば、聲帶の振動によつて生じた「こゑ」が、共鳴域たる喉頭以上の氣道において共鳴をおこして特定の「ねいろ」を帶びたものが母音であつて、共鳴域の大さ・形によつて「ねいろ」が種々になるので、母音の種別が出來る次第である。かく母音の種別は、各の樂器の「ね」のそれ〳〵特色をもつやうに、その「ねいろ」にもとづくのであるが、たゞその樂器の「ね」と異なる點は、母音を構成する分子音中の一つまたは二つが、一定の高さ(各に固有の)をもつといふことである。この各母音に固有な一定の高さの分子音をその母音の固有音と名づける。固有音は著しい强さを

有して他の陪音を制壓し、ほゞ母音の「ねいろ」を決定するゝのである。

生理學的に母音の發生の條件について見れば、發聲器官のはたらきが積極的に行はれて「こゑ」を發する間に、發音器官においては、たゞ共鳴域の大さと形とを變化するためにはたらくだけで、この部分で耳にたつほどの「ひびき」を發することがないのである。したがつて、共鳴域の廣く大きい「ア」のやうな母音では、「こゑ」の潤色が比較的に最も少いといへる。

とはいへ、事實上母音と子音との間に明確な一線を劃することは出來ない。その兩極にあたるものを比較すれば、差別はいちじるしいが、その序列は相連續して、いはゆる子音中に母音的なものがあり、母音のうちにも多少のひゞきを帶びるものがあるのみならず、「さゝやき」の母音または「無聲母音」のやうに、「こゑ」を缺いてしかも母音に代用されるものもある。また一方には半母音といふやうな中間的のものがあると共に、他の一方には鼻音のやうな「ね」の性質を多分にもつものが普通に子音に數へられてゐる。

ゆゑに母音と子音との區別は、男と女といふやうな二者擇一的のものでなくて、その中間に種々の程度の灰色を置いて兩極につらなる白と黒との區別のやうなものである。そこで、どこに分界線をひくかは、結局便宜によつてきまるわけである。

母音の調音にあづかり、各母音に特色を與へるやうにはたらくものは、およそ次の四つである。

(一)口蓋帆　母音の調音に際して、口蓋帆のとる主な位置は二つである。すなはち、後端が上つて咽頭の壁に接着し、鼻腔への通路を全く閉して呼氣を悉く口腔へ送るやうするのがその一つである。この場合に生じる母音は、普通の純粹な母音である。他の一つは、口蓋帆が口腔と鼻腔との間に自由の位置をとり、呼氣を口腔にも鼻腔にも送るもので、この場合は、二つの空洞で共鳴を生じるために、「こゑ」が別種の「ねいろ」を帶びる。これは通鼻母音であつて、これをあらはすには、母音の音字の上に〔~〕のしるしをつける。例へばフランス語によくあらはれる〔ã〕・〔ɛ̃〕・〔ɔ̃〕のやうなものである。

(二)下顎　上顎との間にそれぞれの角度をつくつて、口の「あき」をきめる。「あき」の大きい母音などゝいふのは、この角度が他の母音に比して大きいものである。すなはち「ア」よりも「エ」の方が「あき」が少いといふやうな次第でなる。しかし前に述べたやうに、上下の顎のつくる角度の大さよりも、舌と口蓋との隔りの方が、共鳴域の大さと形とを直接に決定するものであつて、口の「あき」はむしろ間接に母音の調音にあづかるといふべきである。

（三）唇　これは發音器官の最も外側の部分で、口腔と外氣との間の關門であるが、その開き方を或は多くまたは少くし、その形を多少まるく又は平たくすることが出來る。「まるめ」をもつ母音、すなはち圓口母音は、ドイツ語・フランス語などでは、重要な地位を占める。國語やイギリス語では、「まるめ」といふことが比較的少い。小さくまるめる場合には、同時に唇が著しく前に突出される傾向がある。

（四）舌　母音の調音にあたつて、それぐ〵の母音に適切な共鳴域の大さと形とをつくり、それによつて特定の「ねいろ」を與へるはたらきをするのは、主として舌の役目である。すべての母音の發音に際して、舌の面が口蓋に向つてせり上り、その兩側が口蓋に接し、口蓋と舌とで多少圓筒形の廣狹種々の空洞を形成する。口蓋に接するのは、舌の一部がその左右の兩側においてするのである。この接觸部が調音域（調音部位）と呼ばれるもので、この部分以外では舌は口蓋から離れて、かなりのすきまを殘してゐるのが常である。

さて母音の種別についての考察の便宜上、調音域を前・中・後の三つに分けることが出來る。

（イ）硬口蓋と前舌との接近（兩側では接觸する）によつて發音される母音。この種のものを口蓋的または前の母音といひ、あるひは前舌母音と名づける。國語においては「イ・エ」がこれに屬

する。

（ロ）軟口蓋（口蓋帆）と後舌との接近（兩側では接觸する）によつて發音される母音。この種のものを口蓋帆的または後の母音といひ、あるひは後舌母音と名づける。國語においては「オ・ウ」がこれに屬する。「ア」も普通この中に數へられる。（從來用ゐられた喉音といふ名稱はこれに當るが、正確を缺き誤解を生じやすい）

（ハ）硬口蓋の後部および軟口蓋の前部と中舌との接近（兩側では接觸する）によつて發音される母音。これを中舌母音（または混合母音）といふ。國語では東北方言にあらはれる「ゥ」に似た母音がこれに屬する。

さて、母音の調音にあたつては、發音器官中の動くことの出來る口蓋帆や下顎や唇や舌がそのそれぞれの位置をとるために、極めて短いとはいへ多少の時間を要する。そしてある母音を發してゐる間は、その位置を維持するのであつて、次いで平常のすなはち發音運動をしないときの位置に復歸するか、または次の發音運動にうつるわけである。すなはち一つの母音を單獨に發する場合には、「おん」のはじまる時相、「おん」のつゞく時相、「おん」のをはる時相の三段の過程を考へることが出來る。一般に「おん」のはじめを「おんたて」、そのおはりを「おんとめ」と名づけよう。これは發聲にお

ける「こゑたて」と「こゑとめ」とに應じる。母音が他の「おん」と連つてゐる場合には、他の「おん」からこの母音へ、およびこの母音から他の「おん」への「うけわたし」がある。これを「わたり」（渉音）といふ。その「うけ」の方を「さしわたり」といひ、「わたし」の方を「ひきわたり」といふ名で呼ばう。

母音の始・中・終の三時相をルスロはそれぞれ *tension, tenue, détente* と名づけた。「おんたて」と「おんとめ」とは、それぞれスウィートの *initial glide, final glide* にあたり、「わたり」は *glide* に、「さしわたり」と「ひきわたり」とは *on glide* と *off glide* にあたる。

「わたり」はその發音器官の位置からいへば過渡的であり變化しつゝある時相である。母音を構成する上には附加的または副次的の部分といふべきものである。しかし音節のやうな成形された音聲を單音の接續と考へる構成的な行き方では、この意義を輕視してはならない。現實の音聲の一つながりは單音のモザイク的並列ではないのである。

母音の排列

母音の調音を仔細に比較して、その調音域の前後や大小などの關係から母音の系統的排列を試みる

ためには、發音器官の運動を十分に觀察しなければならない。まづ口蓋帆のはたらきは、口のあきの大きい「ア」のやうな母音については、小さな鏡で見ることが出來る。口のあきの狹い場合にはこの方法は役に立たない。實驗的にこの運動を記錄することも試みられたが、これはやゝ特殊の技術を要する。次に下顎の開き方は直接眼に訴へて見ることが出來、上下の門齒の間の隔りは簡單に測定することが出來る。唇の運動も觀察することが容易である。調音における舌の形狀や位置は、「あき」の廣い母音の場合には見ることが出來るが、その他の場合には、外から見えない。舌が口蓋のいづれの部分に接觸するかを知るために、人工口蓋を用ゐる。これは發音する人の口蓋にぴつたりはまるやうに作つた薄い硬質ゴム・金屬または紙製の模型的口蓋である。これに滑石（タルク）の粉末を塗つてはめこみ、一母音を發音したのち、そつとはづす。舌の接觸した部分はしめり氣のために粉がとれる。かうして母音の調音を察するのである。この方法は、完全なものではない。舌の形狀・位置はこの方法では、はつきりわからない。また口蓋帆は動くから、この部分についてはこの方法が適當でない。しかし、とにかくこれによつて明かにされた調音の事實は少くない。實驗方法としては比較的簡易なものであるため、よく用ゐられる。

かやうな實驗と觀察とにもとづいて、調音における發音器官のはたらきの立場から母音を類別し排

列するときは、一種の母音系統ができる。この種の母音系統は、二つの樣式に歸着するものであつて、その一方のヘルワクの案出したものは、母音を三角形に排列するものであるから、母音の三角形とも稱せられる。他の一つはベルの方式で、やゝ複雜であり、かつ技巧的である。

ベルの方式は、スウィートがうけついでゐるが、その式の缺點はしひて音聲を枠の中にはめこんだために、無用の區別を立てたり有用の區別を立て得なかつたりしたところにある。しかし一方には「混合」母音すなはち中舌母音の存立に對して一般の注意をひいたといふやうな功績もある。ヘルワクの方式は、都合のよいものとして多くの音聲學者に採用され、いろ〳〵の補修をうけて、今でも行はれてゐる。たとへばフィエートルは當初の三角形の二等邊だつたのを不等邊にするやうな例を開いた。チョウンズ一派は、「ねいろ」にはつきりした特色があり、調音のたしかに定められた十二の母音を選定して、これを基本母音とし、これは特定の言語における母音でなくて、各言語の母音の基準とすべきものと主張する。これを排列するにヘルワク式から脱化した不等邊四角形をもつてするのである。[1]

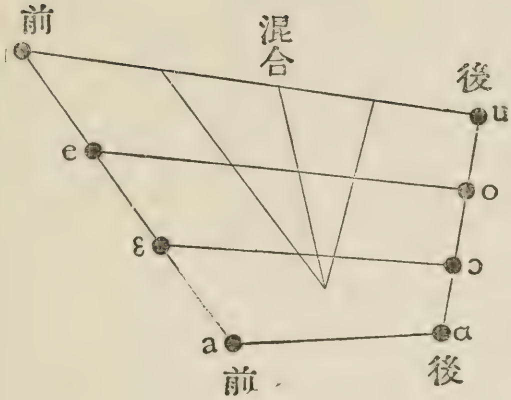
この基本母音は次のやうにしてきめてゐる。前舌を耳にたつほどの摩擦をおこさない限りで出來るだけ硬口蓋に近づける。この位置で「こゑ」が出るとき出來るのが、基本母音[i]である。次に前舌が出來るだけ低い、しかも後舌よりも高い位置におし下げられた場合に出るのが、基本母音[a]である。

この〔i〕と〔a〕とを連ねる一線上に基本的前舌母音の舌の位置が排列される。同樣の手續で基本的後舌母音〔u〕と〔ɑ〕とを得、この〔u〕——〔ɑ〕の線上に後舌母音を排列する。かくして梯形の四頂點を得る。なほ舌の位置が同一で唇の位置だけちがふものは、梯形の邊中の同じ位置において、適當のしるしで區別する。かういふ風に定めた母音系統を以て、各國語の母音の共通の基本とし、各國語の母音は、この基本母音に照してその位置を定められるとする。その排列は上のとほりである。(第一三圖)

これらの排列は、舌の位置を目標にして作ったのであるが、もちろん模型的であり、圖式的であるから、ふかくこれに拘泥すべきでない。

基本母音
(*Cardinal vowels*)

第一三圖



母音の構成

發音器官のはたらきに着眼して母音を考へると、以上に述べたやうな次第である。その物理學的および心理學的性質について見るならば、如何で

あるか。

この見地からの研究は(一)口腔共鳴域の測定、(二)母音の物理的條件たる音波の分析、および(三)母音の合成である。こゝにはこれらについて簡單に述べるだけにする。

(一)口腔共鳴域がどういふ固有振動を有するかをそれ〴〵の母音について定め、これによつて各母音の固有音を知る。これを定めるには、ある母音を發音するときのやうに構へ、その位置における口腔に種々の調子の音叉を近づけて、共鳴がおこるか否かを檢する。また石膏などで人工的口腔をつくり、これについて試みた者もある。

(二)いづれの母音の發音によつても、複雜な空氣の振動がおこる。この振動を種々の方法で記錄して波動曲線を得、これに成音分析(協和分析)を施して、母音がどんな分子音から構成されるかを研究する。ヘルムホルツは、幾多の共鳴器を用ゐて、母音の構成を實驗物理學的に研究した。またフリエ函數による數學的成音分析も、ミラーなどの幾多の研究者によつて試みられた。

(三)成音分析の反對の手續で、ある數個の純音を種々の強さで發生させ、これを同時に聞かせて母音と全く同じものを得る方法が、母音の合成である。すでにヘルムホルツが近似的に母音の合成をしたが、シトゥンプに至つて、まつたく母音と同じ「おと」を純音から合成することに成功した。

シトゥンプのドイツ語にあらはれる母音についての研究によると、一般に鈍いくらい母音（〔u〕・〔o〕など）は低い領域に主な分子音を、鋭いあかるい母音（〔i〕・〔e〕など）は高い領域に主な分子音を有する。鋭い母音は同時に二個の強い分子音をもつてゐる。この各母音に固有な主たる分子音（固有音）の順序にしたがつて、母音を排列すると、

高
〔i〕
〔e〕
〔ɛ〕〔y〕
〔œ〕
〔ɑ〕
〔o〕
〔u〕
低

のやうになる。[2] ミラーのアメリカの母音の分析の結果によると、次のやうに排列される。この排列に

〔ɑ〕〔ʌ〕
〔ɔ〕　〔æ〕
〔ɛ〕
〔o〕　〔e〕
〔u〕　〔i〕
低　高

あつては、頂點から左へ下るに從つて、母音に固有な一つの分子音がだん／＼低くなり、頂點から右にある母音は、二つづゝの固有な分子音をもち、その一つは右にいくに從つて次第に低くなり、他の一つは次第に高くなる。かやうに母音が漸次的に連つて一系列を作つてゐるのである。

母音の特色をなす「ねいろ」は、かういふそれ／＼に固有な

分子音によるものであつて、母音のやゝ異なる言語について見れば、その構成要素たる分子音も異なるわけである。この種の研究によつて、最も精密に各の母音の異同を明かにすることの希望が生まれる次第で、それは今後の研究成果に期待しなければならない。

八　母音の種々

國語の母音

國語の母音は、通常五十音圖の阿行にある「ア・イ・ウ・エ・オ」の五つであるが、東京語の發音では、ある特定の場合に一つの中舌母音が行はれる。その他方言的には、多少の異同があるを免れない。しかし、大體について見ると、母音の種類がよほど少いといはなければならない。

國語における母音の調音は、主として下顎と舌と口蓋帆との運動による共鳴域の變化に存する。唇の協同運動を見ることが極めて少く、その運動は多く發動的よりもむしろ受動的である。「まるめ」といふことは、あまり見られない。たゞ「オ」の場合に幾分か唇をまるめ、從つてやゝこれを尖らせることがあるが、ドイツ・フランスの言語におけるほど著しい程度ではない。(4) これらの言語において、

最も著しい「まるめ」を示す〔u〕母音に對して、國語の「ウ」は、すでにエドワーヅの指摘したやうに、[5]「まるめ」を伴はない後舌音である。かやうに唇の自發的運動が少いといふことは、國語における母音の調音についての一特徴であつて、おそらくは子音についても同様にいふことが出來よう。

母音の發聲の仕方、すなはち「こゑたて」と「こゑとめ」とについて見ると、東京語にあつても個人的に例外があるが、大體はやはらかで徐行的[6]である。しかし、ある特別の意味をあらはすために、急なかたい「こゑとめ」をすることが、しばしばある。力づよく言葉をいひ切るといふことが、命令や氣合や掛聲の場合に用ゐられる。そのとき支那語の入聲に類した發音の中止（多くは舌を硬口蓋に接觸させてする）も行はれないではないが、急に聲門をとぢて「こゑ」を遮斷する方法がむしろ普通である。[7]これを示すに、通例促音をあらはす（ッ）を用ゐてゐる。たとへば

コラッ　なにをしてるんだッ

出ていけッ

のやうである。

ア　母音

ア母音にあつては舌の調音の位置などを明確に定めがたい。理論上要求されるいはゆる純粹に中立的なaは舌の不偏的位置で出るもので、單獨に發音された「ア」とは異なる。東京語における「ア」は、多くのヨーロッパ語のこの種の母音と同樣に、舌がその不偏的卽ち安息の位置から後退して積極的に調音するのであるから、ケンペレンのいはゆる「自然的母音」(8)には當らない。

國語、特に東京語における「ア」は、やはり積極的調音を要するもので、口のあきは最も大きく、舌面は著しい高まりを示すことなく、舌尖はおほむね下の齒の裏面と齒齦との中間に觸れる。ある人は一層後退して齒の裏との間にすきまを生じる。舌の高まりの位置は、[ɑ]よりも前にすゝみ、[a]よりも後に退いてゐる。(9) イェスペルセンのやうにa音に四種のおもな型を分け、一番前の[a]、中の[ʌ]、一番奥の[ɑ]および鈍い音色の[ɒ]とすれば、最も純粹な中の（中立的な）[ʌ]が國語、特に東京語における「ア」にあたる。(10) その「ねいろ」は、よく開かれた口腔に「こゑ」が共鳴してもつとも朗かである。

單獨に發音される「ア」は、まづかういふ母音であるが、連音にあつてはその調音に多少の異同を生じるのが常である。また舌の弛緩した自然的位置で發せられる場合も、事實上多い。これは舌尖が下齒の裏面に輕く觸れ、舌面がすこぶる平かになつた位置であつて、その「ねいろ」が[ʌ]とちがつて、

それほど朗かでない。幾分か中舌母音の特色を帶びるものである（これを必要ある場合は[Ä]をもつてあらはす）。また前舌母音と接續する際、調音のすべりを生じて[a]に近似し、後舌母音と接續するときはまた後方へのすべりを生じること、むしろ自然的傾向に屬する。

脣をあまり大きく開くまいとの一種のたしなみから、ある婦人には「おつぼぐち」の習慣がある。この場合には「ア」はかなり「ねいろ」をかへて「オ」に幾分か近づくのである。また謠物の歌詞、中にも謠曲の文句などにあつては、聲樂における發聲といふ方の要求から、「ア」のごときは著しく調音が變化されて、「ねいろ」をかへるのである。

しかし概していへば、「ア」は國語において變化の少いものであり、音聲轉化に際しても、あまりかはらない成素である。これを實用音聲學では便宜上音字[ɑ]で代用して示す。

方言的には[a]を用ゐる例があるやうである。

母音のうち一般にあきの大きいものがもつとも多く鼻音化しやすい。すなはち通鼻母音になりやすい。これは發音器官の構造によるのであるが、東京語について見ても、一番多く鼻音化されるのは「ア」である。この際その調音は、口蓋帆が積極的にはたらかないで、鼻腔への通路をあけ放してゐる。時には舌が後退して一番奥の[ɑ]の位置に近づくことがある。「ア」の通鼻母音を便宜上すべて[ɑ̃]であらは

すことにする。「ア」が鼻音[n]・[m]・[ŋ]など丶接續する場合に、ある程度で母音の鼻音化をほとんど免れない。唯その程度は、かのフランス語に特有な通鼻母音ほどではない。[12] 通鼻母音は、東京語において次のやうな場合にあらはれる。

[ɑɑ̃'ɑ, ɑ̃:tɑ]（「アナタ」から轉じて）

[ɑ̃ị:ŋɑ̃to:]

[mmɑ̃, ɑmmɑ̃, ɑ̃mmɑ̃]

エ母音

東京語に行はれる(13)「エ」は、その調音と音色とにおいてあまり固定してゐない。個人的に出入があり、社會的に傾向があつて、イギリス語南イングランド風の發音における *men* の[ė]（スウィートの分類における mid-front-wide 中-前-廣）からおなじく *air* の[ε]（スウィートの分類における low-front-narrow 低-前-狹）までの間に動搖するとエドワーヅが說くのは、大體正しい。教養ある社會においては、むしろ多く[ė]が行はれると思ふ。[ε]すなはち口のあきの廣いものは、現在東京において廣く行はれ、いはゆる下町風の色合が多い。

東京語における「エ」は、北ドイツの *Seele*, *Reden* [ze:lə, re:dn] などにおける長い [e]、フランス語 *été*, *pénétrer* [ete, penetre] などにおける短い [e]（スウィートの分類における mid-front-narrow 中-前-狹）とは、はつきり區別される。この種の母音は、國語の方言のうちにはある。例へば越後地方では「エ」と「イ」とを區別しないで、共に [e] を以て發音する。これを東京語の「エ」と比較すると、發音の仕方および音色において、すこぶる差異がある。東京の人は越後の人の「エ」（すなはち [e]）を「イ」のやうに、またその「イ」（すなはち [e]）を「エ」のやうに聞く。「イ」といふべきものを「エ」といひ、「エ」といふべきものを「イ」といひあやまると普通にはいふが、實際はまつたく同じ母音 [e] をいづれの場合にも用ゐてゐるのを、聞く方でさう聞き取るのである。(14)

かく東京語について見ても、調音に多少の變はりがある點で、「エ」は「オ」と似てゐる。その變はる範圍がおのづから一定してゐて、[e] はあきの狹い方向へその範圍を越えたものである。反對にあきの廣い方へいくと、イギリス語の *man*, *la* [mæ:, læ] における [æ]（スウィートのいはゆる low-front-wide 低-前-廣）がある。東京近傍で、伊豆・上總・常陸など關東地方の所々に、重母音 [ɑĭ] の轉じなまつたもの（時としては [ɑĭ] のなまり）として、しばしば耳にする。たとへば ɑĭ > æ:

kaijɯ > kæ : jɯ

のやうな例が多くある。この母音は東京語にはあらはれない。東京の下町の職人風の發音でも、かういふ重母音のかはりに長母音をつかふが、その場合には〔ɛ:〕か、あるひは、一層あきの狭い〔ɛ̈:〕を出すのである。

この東京語の「エ」では、前舌が口蓋の前部、はぐきのうしろに向つて高まつて、その間に狭まりを作り、氣流の方向を下唇の方に向はせるやうな形に、舌の「へり」と「さき」とがひつこむ。狭まりは廣いときは小指または人さし指のはひるぐらゐの隔りをもつ。共鳴域は横に廣くならうとする傾があり、しばしば唇の隅を左右に引くことがある。〔e〕にあつては、接近の度もかなりちがふし、從つて横の幅がずつと狭くなる。舌の筋肉がこの際すこぶる緊張する等、調音においても差異を見るのである。

かういふわけで、ドイツ語やフランス語の〔e〕を發音することが、東京人（および多くの日本人）にはすぐには出來ない。相當の練習を積んではじめて發音が出來るやうになるのである。

東北地方には、中舌母音〔ë〕や〔ɛ̈〕も行はれるやうである。

この母音は越後地方における〔e〕のやうに、「イ」と「エ」との混同を來たすものである。これはのちに説く「イ」と「ウ」との

混同に伴つて、東北方言における發音上の甚だしい混亂を招くものである。

「エ」の鼻音化も、しば〳〵連音においてあらはれる。[15] たとへば、「眼に見えない」における「エ」を鼻音的にせずに發音することは、かへつて困難である。かういふ場合に多くはすべての母音が鼻音化される傾を示す。しかし、一般にあきの廣い母音が鼻音化されやすいもので、[16] 東京語の「エ」についても鼻音的〔ɛ〕すなはち〔ɛ̃〕が多く出るやうに觀察される。

物をねだるときの發音は鼻音化を著しくあらはす。いはゆる「はなごゑ」を出すのである。この種の「ねえ」における「エ」を觀察すると、よくわかる。

イ 母 音

ベル式の母音排列では、*i* 母音（すなはち high-front 高-前）に狹（はり）と廣（ゆるみ）との二型を分ける。前者は〔i〕、後者は〔ɪ〕であらはされてゐる。〔i〕（高-前-狹 high-front-narrow）はフランス語 *fini*〔fini〕、ドイツ語 *ihn*〔iːn〕, *sie*〔ziː〕における母音で〔i〕類母音中の典型的のものとされる。〔ɪ〕（高-前-廣 high-front-wide）は、イギリス語 *bit*, *mid*, *fix*〔bɪt, mɪd, fɪks〕、北ドイツ語 *bitte*, *mit*, *Fisch*〔bɪtə, mɪt, fɪʃ〕におけるもので、前者にあつては平均して後者よりも舌が低いと說かれてゐる。

東京語における「イ」は、フランス・イギリスなどのとよほどちがふ。前舌あるひは中舌がいちじるしく高まり、口蓋の彎曲に沿うてせばまりを作るが、舌の「へり」や「さき」の部分は、ずつと下の方に向つてゐる。これを明瞭に發音しようと努めるときは、下顎がすこぶる上顎に接近し、しかも唇はかへつて上下および左右にひろげられる。この位置で「こゑ」を出さずに強く「いき」を出すと、その迸り出る方向が、著しく下方に向つてゐることを知る。かやうに舌の「さき」が下の方に向ひ、多く下齒のうしろにあるやうな調音を營むのは、東京語の「イ」の特色である。

エドワーヅは、日本語（東京語）の「イ」が「はり」をもたず、フランス語のはられた[i]に似ないといふ。[17] そしてむしろイギリス語 see における重母音[ij]の前部のおんに似て聞えるといふ。「赤い」などの例の二重母音の後部には[I]があらはれて副音的になると解した。その他では氏が「イ」を[I]よりも[i]にあたると考へたのは、音字對照表について察せられる。しかし、「はり」の有無といふことだけでは區別されない。いちじるしい緊張をもつて「イ」が發音されることは、少くないのである。著者は「はり」の度合に相異を見るべきでなく、調音の仕方にちがひがあることを注意すべきであると思ふ。[18]

いはゆる「純粋な *i*」である[i]は、「さゝやき」の仕方で發音するとき[s]を思はせるやうな「おん」

を出し、[ɪ]はこれとちがつて[ɕ]を思はせるやうな「おん」を出す[19]といふが、[s]のやうなおんを出す調音では、舌尖が下にさがつてゐないことを察すべきである。東京語の「イ」の調音では、もちろん無聲になれば[ç]のやうなおんを出す。またむしろ中舌をもつて調音するといふ方が當る場合も少くない。しかし後にのべる「中舌母音」とはまつたくちがふものである。しかし、イギリスなどの[ɪ]と異なることは、耳に聞いても明かである。かやうな次第で、ベル流の「廣・狹」、またはそれを飜案した「はり・ゆるみ」の程度で説明しようとするのは、適切ではない。

「イ」母音（實用上音字[i]をあてる）の調音がかういふものであるから、東京語（また國語の大部分）において著しい口蓋化の現象、すなはち五十音圖の「イ」列にある「キ・シ・チ・ジ・ニ」の子音における調音のすべりがおこるのである。すなはち通常舌のさきをもつて調音される[t]・[d]・[n]などの場合にも、これが「イ」に接續するときは、舌のさきのかはりに前舌をもつて調音するのである。かくて[ti]・[di]・[ni]でなく「チ・ヂ・ニ」が出來る。普通國際音字では、口蓋化した子音をあらはすに、音字の上に[·]をつけるが、「イ」の同化による口蓋化が、[i]によるよりも一層著しいことを注意しなければならない。同様に[k]・[g]・[ŋ]が「イ」と接續する場合にも、調音域が著しく前方に移つて「キ・ギ」および[ŋ̇i]となるが、その[ŋ̇i]は、東京語にあつてはすこぶる「ニ」とまぎらはしい音になるのであ

る。こゝに[ɒ]は、フランス語における[ɔ]（a = a: [ɑpɔ]）に近似するに至る。(40)

オ母音

「オ」は後舌母音の一つで、調音上「ア」と「ウ」との中間に位する。すなはち後舌が口蓋帆に向つて途中まで高まり、口腔の前部に廣い共鳴腔をつくる。この際多少の脣のまるめを伴ふ。これは、國語の他の母音には見えないことである。エドワーヅは、「オ」がドイツ語 Sohn [zoːn] における[o]と、フランス語(21) fol [fɔl] における[ɔ]との間に動搖するといひ、また[o]と[ɔ]との中間にあたるものが多く聞かれるといふが、これをヨーロッパの母音にくらべるならば、舌の位置では「中-後-狹」または「-廣」(mid-back-narrow, -wide) の[o]。[ö]に類し、脣のあき方では「低-後-狹」(low-back-narrow)の[ɔ]に似てゐるとすべきであらう。「オ」においても脣の運動は、さほど積極的ではない。

イギリスの ɔː [ɔː] における[ɔ]或はむしろ[ɒ]は、あきがかなり廣い。日本の學生は、大抵これを「オ」よりも「ア」をもつて發音する。

「オ」に對しては、外國の母音と比較する場合には[o]をあてるべきであるが、實用上[o]をつかふのが常である。

「オ」は、鼻音との接續において容易に鼻音化する。「オ」の通鼻母音は[õ]であらはす。

ウ母音

「ウ」は國語の母音中では、後舌母音のもつともあきの狹いものである。これをヨーロッパ語に行はれる後舌母音[u]と比較すると、唇のまるめがないことは、容易に氣づく相異である。國語の「ウ」では、唇がたゞ上下から接近するだけであつて、これは下顎の運動に伴つて自然の位置をとつてゐるに過ぎない。口のあき、すなはち上下の顎の角度は、この場合に一番少く、しばしば齒をくひしばつて「ウ」を發音することがあるほどである。後舌は、「オ」におけるよりも軟口蓋に向つて一層接近する。いはゆる「まるめのない」後舌母音である[22]。

ドイツ語 *gut* [gu:t] における[u](高-後-狹 high back-narrow)またはイギリス語 *put* [pʊt] における[ʊ](高-後-廣 high-back-wide)の調音をこれと比較すると、唇のまるくなり、かつ突出されることも著しいちがひであるが、その調音域がずつと後方であつて、後舌の高まり方も一層著しい。かくて、前後に長くかつ門口の狹い共鳴域をつくる。日本人の耳には多少「オ」に似寄つたものに聞える。

この[u]と區別して「ウ」すなはちいはゆる「まるめのない」*u*を音字[ɯ]であらはす[23]。

この二種の後舌母音の異なりが、單に唇のまるめだけによるのではないことは、ある方法で唇をひろげて發音してみても、さほど音色をかへずに[u]も[ɯ]も發音することが出來るのに徵すべきである。[u]では舌の後退することが著しく、舌のさきは齒ぐきのうしろにあつて、ゆとりを見せてゐる。[ɯ]では、それほど後退しないので、さきが下の門齒の裏に觸れる。(時として少し上に向ふこともある)

この後舌母音の舌の調音域が、かやうに相異なるのみならず、その共鳴域の形全體にちがひがある。[u]では唇のあきを小さく圓くすると共に、これを前へつき出すので、兩頰がいつもよりはくぼむ。口の中では、前部に大きな空洞が出來、後方では舌の調音、前方では唇のまるめによつて、前後にしめくゝりのある共鳴域が出來る。これに「こゑ」のない強いいきを通すと、幾分か「ね」の性質をおびたホーホーといふかすかな「おと」がする。[ɯ]では頰も格別くぼまないし、口腔前部の空洞もそれほど大きくない。しめくゝりが前後とも十分でないから、強いいきを通しても、たゞフーフーといふかすかな「ひゞき」がおこるだけである。これは氣流が舌面の上の橫にひろがつたすきまを通るので生じる摩擦の「ひゞき」である。

[u]における前後のしめくゝりをもつと狹くし、また口のあきを大きくして空洞をもつとひろげると、「こゑ」を伴はない呼氣が(また吸氣も)、こゝでつひに「ね」を出すにいたる。これは口の中

で出る「ね」で、言葉には用ゐないが、日常よく聞くものである。すなはち「くちぶえ」がこれで、その空洞の大さをかへれば、高さがかはるのである。[u]における空洞の大さでは、口笛で出し得る「ね」のうち、ずつと低い方の「ね」が出る。またまるめのある前舌母音[y]（すなはちドイツ語 *kühn* [ky:n]、フランス語 *culte* [kylt] における母音）の共鳴域でも口笛を吹くことができるが、この場合にはずつと高い調子の「ね」が出る。

[ɯ]をいふ口の形で氣音的聲位を以て出す「おん」は、「フ」の頭音たる子音である。

中舌母音

通常國語における母音は五つとされてゐるが、東京語（また一般に關東地方の言葉）においては、「ス・ツ・ズ」のやうな場合だけに、「ウ」に類してしかも異なる別種の母音があらはれるのである。これを觀察するには、東京語の「ス」または「ツ」の母音をそのまゝ引きのばしてみ、さらにそれを引きはなしてみ、これと「ウ」とを比べてみる。あるひは「スウ」（吸ふ）、「ツーウン」（通運）のやうな語について發音して、母音のかはる有樣を觀察すると、その音色の相違も調音のちがひもわかるであらう。(24)

この母音では、口のあきは「ウ」乃至「イ」と同様であるが、調音域が「ウ」よりも前方にあり、舌面の高まり方はこれより少くなるが、舌の前部がかへつてずつと硬口蓋に近くなり、唇は「ウ」よりも少し大きくひらく(「イ」よりは小さい)。ベルの方式における「混合母音」(mixed vowel)、いはゆる「中舌母音」の一つである。これをあらはすに音字[ʉ]を用ゐる。スウェーデン語 *hus, nu* における *u* すなはち從來音字[ü]で[25]示されてゐる中舌母音(高-混-狹-圓 high-mixed narrow-round)は、これと似た調音と音色とをもつもので、中舌母音[ü]と[ʉ]との調音の異同は、あたかも後舌母音[u]と[ɯ]との間のと同樣で、唇のまるめの有無も著しい差異であるが、調音域にも差異があると思はれる。

かりに國語のこの母音を變的「ウ」と名づけたことがある。變的とはもちろん科學的な名稱ではなくて、實用上の便宜的命名である。また「中舌母音」の名も、從來音聲學で用ゐられてゐるので、こゝにもかりに用ゐるだけである。(この節の後段參照)

中舌母音[ʉ]は、東京語では「ス・ツ・ズ(ヅ)」の連音にかぎつてあらはれる。すなはち[s]と[z]とに接續するときだけ、「ウ」の位置に代つて發音されるものである。關東地方では一般にさうであるが、關西地方では、この接續の場合にも「ウ」を、すなはち後舌母音[ɯ]を用ゐるやうである。

東北地方では、後舌母音[ɯ]をつかはず、その代りにすべて中舌母音[ʉ]をつかふ方言がすこぶる多

い。出雲の方言も同樣である。これはいはゆる「ズーズー辯」の特色をなす發音上の地方的特色である。

支那語にこの種の中舌母音があるべきことは、はやくから豫想してゐたが、のち支那人について豫想をたしかめることが出來た。北京官話の發音で「私・思・司・糸・死・四・寺」などは、ウェイドの記法では ssŭ とされ、「姿・子・姿・自・字」などは tzŭ とされ、「疵・辭・此・次」などは tz'ŭ とされてゐるが、[26] このŭを以て示されるものは、中舌母音[ü]に外ならない。ウェイドは『語言自邇集』の序論で、このおんを表はすに適當な文字がなく、これにあたる母音がイギリス語等に存しない由を述べて、說明の困難を感じてゐるが、もつとも事である。この母音が北京官話でも[s]と[z]との次だけにあらはれることは、すこぶる面白い。もちろん「思・死・四」は[sü]と表記すべきものである。カルルグレンの支那音聲學に關する研究においては、[27] これを[sï]のやうに表記してゐるが、この母音[ï]には二とほりあつて、聽覺的印象は極めて類似してゐると述べ、一つはsとzとの次に來、他はṣとẓとの次にあらはれるものとし、ẓ……またはẓ……の調音におけるこゑの氣流の通路を母音になるだけに廣くした場合に生じる「おん」だと說いてゐる。此の場合の[ï]の一つ（前者）はこの[ü]であり、他の一つは次に說くやはり中舌の[ï]であると思はれる。

朝鮮語におけるいはゆる二種の「ゥ」のうち諺文으の示す母音は、岡倉由三郎氏によると、圓口前舌母音［y］のやうである。「舌を「ゥ」のところにおき、唇を「イ」のところにおいて發音すれば、韓語の으字の示す音が出る……」と、氏はいふ。(28) 著者は、この母音も一種の中舌母音で、おそらくは［ɯ̈］であらうと思ふが、まだ確かめる機會を得ない。

前舌母音「イ」の調音において、舌面と口蓋との接近が少くなり、同時に舌のさきはかへつて齒ぐきのうらに近くなり、そこにわづかのすきまをのこし、唇が［ɯ̈］におけるよりも一層開いて時としては「イ」の程度にも及ぶやうにすると、中舌母音［ï］が出來る。これはその調音域も中舌母音［ɯ̈］に近く、音色にも似たところがある。中舌母音［ï］の典型的なものは、ロシア語に「イェッリ」と稱する字母ыの示す母音であつて、日本では東北地方の方言にしば〳〵あらはれる。［kïmï］(君)における母音［ï］も、これと同類のものである。また琉球方言にひろく行はれることが明かになつた。(29)

この二種の中舌母音について、その調音仕方および調音域を見るに、これを中舌の高まるによつて生じるとするのは事實と反對な場合が少くない。(30) むしろベル・スウィートのやうに混合的といひ、前舌・後舌の同時的調音と解する方が事實に近い。しかしこれとて調音運動の模型的な考へ方である。著者の見解は、「中舌母音」において、舌の筋肉組織における緊張がなくて舌面が一部的に隆起

せず、大體自然のまゝで口蓋に向つて近づくために、共鳴域が比較的横にひろがつてゐ、氣流のとほる隙間は上下にせまいが左右にひろいものになるといふ特殊の調音を認める。この際舌の緣が口蓋に近づくので、往々[z]樣の摩擦の「ひゞき」を伴ふにいたる。ゆゑに、「中舌母音」といふ名稱に拘泥すべきではない。

中舌母音[ï]は、東京語にはまつたく現はれない。東北地方ではしばしば「イ」の代りに用ゐられる。その調音が[ü]に近く、その音色も相似てゐるところから、[ï]のかはりに[ü]があらはれ、かくて東北方言における「イ」と「ウ」との混同をきたすものであらう。このほか、なほこの地方で[ö]も往々聞かれ、かくて五十音圖における「イ」列と「ウ」列、および「イ」列と「エ」列との間に區別が立たなくなり、發音の不純・混亂を結果したと思はれる。從來世人の注意に上つてゐたのは、この地方における「シ」と「ス」、「チ」と「ツ」、「ジ」と「ズ」との間の混同であるが、混同が單にこれだけでなく、一般に「イ」列と「ウ」列、時には「エ」列にも及んでゐることは、少しよく觀察すれば容易に明かになる。これは「イ」および「ウ」、時には「エ」の母音に對して中舌母音を代用し、これがその調音と音色との近似からつひに一種の中舌母音（おもに[ü]）になつてしまふためであるとおもふ。いはゆる「ズーズー辯」とは、この方言的發音の特色を擬聲語的に名づけたものに外ならない。

プレトネルは、ロシア語の[ɨ]をあらはすに、[ɯ]の音字を用ゐてゐ、日本語の「ウ」に對しては、これの唇の運動の弱いものといふ意味で[ɯ]をあてゝゐる。(3) こゝには中舌母音の特異性などの問題が考慮されてゐないやうである。ために變的「ウ」および變的「イ」の性質、その區別は全く問題外となつてゐる。變的「イ」を有するロシア人は、これを以て[u]以外の類母音を律し去る傾を示すやうであつて、ポリワーノフもかつて東北方言の變的「ウ」を變的「イ」卽ち[ï]と同一視して、この音字を以て示してゐたと記憶する。

註(1)Daniel Jones: *An English Pronouncing Dictionary*, London 1917 卷頭記載母音系統圖。G. Noël-Armfield: *General Phonetics*, 2 Cambridge 1919, p. 117 ff.

(2)C. Stumpf: *Die Struktur der Vokale.* Sitz.-Ber. d. Berliner Akad. d. Wiss. 1918; ——: *Sprachlaute*: Experimentell-phonetische Untersuchungen. Berlin 1926.

(3)D. C. Miller: *The Science of Musical Sounds*, N. Y. 1916, p. 237.

(4)Il n'y a qu'un léger arrondissement des lèvres.——Ernest R. Edwards: *Étude phonétique de la langue japonaise*, Leipzig 1903, p. 16.

(5)*Op. cit.* p. 17. 'voyelle postérieure sans arrondissement' これを變態的母音 (voyelle anormale) といふのは、無意味である。

(6)Edwards: *Op cit.* p. 21. »Le commencement ou arrivée des voyelles initiales japonaise est douce et graduelle……
La détente des voyelles japonaises est douce et graduelle.«

(7)佐久間鼎『國語のアクセント』大正六年、一八一——一八二頁。

(8)Sievers: *Grundzüge der Phonetik*⁵, Leipzig 1901, p. 83. Das 'natürliche Vokal' nach Kempelen

(9)Edwards: *Op cit.* p. 16.「ほとんどドイツ語の *was* [vaːs] における [a] に等しく聽かれる」

(10)Jespersen: *Lehrbuch der Phonetik*, ² Leipzig 1913, p. 162. これを中立的ともいふが、不偏的安息的位置で出される母音といふ意味に解すべきではない。

(11)イギリス語にあらはれる中舌母音: [a]、すなはち *fur, bird, her, heard* などに見るもので、實用上 [əː] であらはされるものは、なほ舌の後退の點で國語の [A] と異なる。イエスペルセンは、舌の出來るだけ平かな位置で發するものを [A] とした(前出)が、これは「ねいろ」から見てもつとも「純粹な」*a* 音とはいへない。仔細に觀察すれば如上の區別が立てられるとおもふ。エドワーヅは、日本語に [ə] のやうないはゆる '*obscure*' な母音を認めがたいとして、その理由を次のやうに述べてゐる。——»La raison principale en est que l'accent est plus uni que dans les langues romanes ou germaniques.« *Op. cit.*, p. 20. 氏のいふアクセント、すなはち語音の強さが大體一樣だといふのは首肯されるが、イギリスの [a] に近似した [A] が事實上しば〳〵發音されるのは、強さの關係からだけで說明すべきではない。

(12)ストルムのいふやうに (Storm: *Englische Philologie*, ² Leipzig 1892 I, p. 59)、フランス語の通鼻母音は Velarnasal-vokale と名づけて他と區別すべき、調音ならびに音色の上に特色をもつものである。鼻音化した國語の「ア」はかやうな

velar r Charakter をもたない純粋に鼻音的なものである。

(13)『國語のアクセント』前出、二〇頁。「東京における「エ」は、かなり口のあいた方で、正面から見た場合に上下の齒の間にちよつと隙間が見える程である。……前者〔ê〕はむしろ上品とか謹愼とかを想起させるやうな音で、後者〔ɛ〕はいづれかといふと意氣な下町風を聯想させるものである。」なほEdwards: *Op. cit*, p. 15. 參照。Edward Gauntlett は次のやうに說いてゐる。——"The distinc ion be'ween *e* in *met* and *ai* in *fairy* is somewhat d ffi ult to perceive, at f rst. In the wr:ter's opinion the latter is a nearer approach to え" (*The Elements of Japanese and English Phonetics*, Tokyo 1905, p. 40).

(14)佐々間鼎『國語の發音とアクセント』大正八年、七一頁。この種の「とりちがへ」'Verwechselung' は一種の言語心理であつて、Karl Quiehl がいふやうに、ヘッセン人が *reisen* と *reissen*, *begleiten* と *bekleiden* とをとりちがへ、ザクセン人が〔p〕と〔b〕とを互にとりちがへるといふのは、むしろ双方に同一の「おん」を發音するためである。(*Französische Aussprache und Sprachfertigkeit*, Leipzig 1921, p. 11).

(15)エドワーヅは、東京語に元來通鼻母音がないこと、しかも耳に聞えるところでは、「サン・キン・モン・セン」などは、[sɑ̃, kiĩ, mõ, sẽ] のやうであるとしたのは、「ン」を理解しないための誤である。「ン」の代りに例外的に通鼻母音が用ゐられることもあるが、その調音と音色とは、だいぶ異なつてゐる。これらの「ン」を通鼻母音と同一視すべきではない。(*Op. cit*, p. 22)

(16)レントゲン線による觀察もこれを確かめる。E W. Scripture: *Elements of Experimental Phonetics*, N Y. 1902, p. 342.

(17)*Op. cit.* p. 15.

(18)前舌母音の調音についてスウィートは次のやうに說いてゐる。——"In the formation of front vowels, such as [ɪ] in *it* and [æ] in *man*, the front of the tongue is raised towards the front of the palate, so that the main body of the tongue slopes down from the front of the mouth backwards." H. Sweet: *A Primer of Phonetics*, [2] Oxford 1906, p. 14; *The Sounds of English*, [2] Oxford 1910, p. 25)

(19)Jespersen: *Op. cit.*, p. 51.

(20)Edwards: *Op. cit.*, p. 31. » Quelquefois sous l'influence de [i] ou [j] qui suit, [ŋ] est presque la nasale palatale [ɲ]: [niŋŋjoː] ou [niɲɲjoː] (人形) «

(21)*Op. cit.*, p. 16.

(22)Edwards: *Op. cit.*, p. 17.—'voyelle postérieure sans arondissement'.

(23)Paul Passy: *L'Ecriture phonétique* にはこれを用ゐて日本語の「ウ」を寫してゐる。エドワーヅは便宜上[u]を「ウ」にあてゝゐるが、音字對照表には[ɯ]を出してゐる。

(24)ケーニヒ氏羅炎裝置でためしても、あきらかな波形の相異を見る。

(25)スウェーデン語における中舌母音[ü]については、スウェーデン公使館のエングベリ氏などにただしたが、著者にはむしろ圓口前舌母音[y]に近く、すなはち[yː]として、かつ重母音的に強い[v]に似た「ひびき」を伴つて聞えた。すなはち[ü]から期待したところよりも前方で調音されたやうであつて、むしろ[i]にちかい音色をもつてゐた。イェスペルセンも同様な觀察を述べ

ている。(*Op. cit*, p. 156).

(26)Thomas Francis Wade: *Yü yen Tzŭ-erh Chi* (語言自邇集), Preface ix—"On the sound which I write ssŭ, tzŭ and t'zŭ, it is scarcely necessary to discourse. *The vowels in these syllables defy a European alphabet more obstinately than any we have to deal with.* Dr. Morrison's *sze* was changed by Dr. Williams to *sz'*. I used this for many years, but a tendency I noticed in some speakers to pronounce the syllable *sizz*, determined me to restore the vowel. Mr. Edkins write *sï*, which is neither better nor worse than *ssŭ*, or, as it ran in the old Syllabary *szŭ*. The vowel that *ï* or *ŭ* is supposed to stand for does not exist in our system, and represent it by what letter we will, some diacritic mark is indispensable."

(27)Bernhard Karlgren: *Etude sur la phonologie chinoise*, Archives d'Etudes Orientales, tome 15, Paris 1915-19. 本書によつて一覽したがいまだ十分に、參照することを得ない。同氏のイギリス文の漢字音の辭書(前出)緒論六頁參照。

(28)岡倉由三郎『發音學講話』。

(29)伊波普猷、宮良當壯の諸氏の研究によつてわかつてゐる。著者は大島の人についてこの音の存在をたしかめた。

(30)スウィートはポルトガル語や Walliesisch などに[ï]を見出したが、シチェルバ (Šcerba) は、ロシア語のと Walliesisch のとに相異があつて、後者は舌が同時に *i* と *u* との位置に高められてゐるといふ意味で mixed であるとしてゐる。(Jespersen: *Op. cit.*, p. 154) その論の當否はこゝに說くことが出來ないが、日本の方言にあらはれる[ï]も、前後に箇所の調音部位があると見るのが便利で、むしろ中舌母音といふよりも混合母音といふ方が事實にやゝ近いといへる。しかし混合

といふこともおもしろくないので暫く中舌母音の名稱を用ゐておく。とにかくその音色からいへば、ポリヷーノフ氏などについて發音を聞くに、ロシア語のによく似てゐるのである。『國語の發音とアクセント』前出。七七頁參照。

(31)オレスト　プレトネル『實用英佛獨露の發音』(大正十五年)三三、六九―七一、七八頁參照。

第四章　重音母と半母音

九　重母音

重母音の成立

國語に重母音があるかとは、從來多少問題にされた點で、普通に假名一字がいつも一音節であると考へる行き方では、重母音は認められないことになる。あるひは母音が連りさへすれば、重母音と呼んでゐる者もある。これは文字にとらはれた見方で、問題は音聲の事實について解決を求めなければならない。

一切の單音の連りにおいて、ウィンテレルがはじめて説いたやうに、[1]二つのおんに共通な運動はたゞ一回で、すなはち連續的にする傾がつよい。母音は「こゑ」を共通にもつてゐるので、母音の連る場合には「こゑ」がつゞく。この際一樣の強さでつゞくこともあるが、強さのちがふ場合もある。連つた二つの母音の間に強さのちがひがあり、強い母音が他を從屬させる趣を示すとき、これは一音節に凝縮する。これを二重母音と名づける。これを二つの部分にわけて、音節の支持者たる趣ある、すな

はち音節形成的の強くはつきり調音される母音を主音とし、非音節的のものを副音とする。副音をあはらすには、音字の上に〔˘〕のしるしをつける。まれに三つの母音から成る三重母音を説く者もあるが、普通に重母音といへば二重母音と解してよい。スウィートは重母音を一般に母音と「わたり」との連りと考へたが、重母音の副音の部分がいつも必ず「わたり」であるのでなく、時としてはかなりたしかな母音としての資格をもち、しかもそのために重母音の性質にはかはりがないやうな場合もあることは、氏も認めてゐる。そこで重母音を前に述べたやうに考へると、一音節を形成することと、主音副音の關係が存することとがその成立の條件である。

一つの重母音にあつては、その全長を通じて強さの分布が一樣でなく、主音から副音にうつるにつれて強さが減じる。主音が初めに、副音が次に來るときは、強さは漸次弱くなり、反對に副音が先に、主音が後に來るときは、これは漸次強くなる。前の種類のものを漸弱重母音、後の種類のものを漸強重母音と名づける。まれには同一の壓力で發音される重母音があつて搖曳的の名を得てゐるが、これを正當視しない學者も少くない。漸弱重母音は、スウィートの見解では「のちわたり」重母音(after-glide diphthongs)で、通例〔aĭ〕・〔ɑŭ〕・〔oĭ〕などが主なものである。漸強重母音は、スウィートのいはゆる「まへわたり」重母音(fore-glide diph.)で、〔ĭɑ〕・〔ĭo〕などがそれである。

漸弱重母音を本來のもの（'eigentliche Diphᵗ'）とし、漸强重母音を本來的でないもの（'uneigentliche Diphᵗ'）とする學者も少くないが、この關係はそれ〴〵の言語について異なるから、普遍妥當性をもたない。

國語の重母音

東京語に漸弱重母音を認め、たとへば［omaĭ］（汝）における［aĭ］のやうな例をエドワーヅは擧げてゐる。(2) これは普通の發音では明かに重母音である。「オモイ」［omoĭ］のやうな場合には、いつも必ずしもさうとはいへないが、多く重母音として發音される傾がある。日常の會話においては、かういふ母音の連りを重母音として發音する方が多い。ゆゑに實際の發音について見れば、東京語において重母音は存立する。たゞ强ひて切はなして發音することも語義を損なふことなくして出來るのである。

エドワーヅは「たいそう正しく發音する人は、［maĕ］（前）といふが、［aĕ］といふ重母音は、だん〳〵稀になる」といふ。かういふ重母音が東京語では事實上［maĭ］のやうになり、「オマエ」が事實上［omaĭ］のやうに聞えて來るが、しかし實際その副音において「イ」の調音の位置まで舌が運動することは、まづ見られないといつても誤ではなからう。エドワーヅも、後の例について、重母

音の第二の部分は、しばしば〔i〕であつて、すなはち〔omɑĭ〕または〔omɑi〕となる」といふ。が、それどころでなく、さらに口のあきの大きい場合が實際はあつて、しかも〔ɑĭ〕といふ重母音として差支なくうけ取られてゐるのである。ドイツ・イギリスなどで、〔ɑɛ̆〕や〔ɑĕ〕や、〔æĭ〕または〔əɪ〕さへも、なほかつ〔ɑĭ〕といふ同じ一般的印象（'derselbe allgemeine Eindruck von〔ɑĭ〕'）を與へるやうに、[3]〔ɑè〕の連音も一音節として主音・副音の關係で發音されるときは、たいてい一般的〔ɑĭ〕の印象を與へる。もし〔ɑĕ〕の重母音の印象を與へようとするなら、副音はよほど口のあきの大きい母音でなくてはならない。しかし思ふにエドワーヅのいはうと欲したのは、文字どほり發音しようとする人が、「マエ」を〔mɑ-ĕ〕と二音節に、すなはち重母音としてゞなく發音することがあるが、それは次第に稀になつて、ほとんど皆これを一音節に、すなはち重母音として發音するといふことに存したのであらう。

普通重母音〔ɑĭ〕として聞えるものゝ後部の調音における舌の位置は、實際には「イ」でなくて「エ」の程度であるやうな場合が多く、また前部も〔a〕の程度であることが少くない。これはスウィートのいふやうに副音が實際は一定の調音をするのでなくて、「わたり」であり過渡的な「おん」であるのによるのであるが、さらに一歩をすゝめて、重母音がたとへば〔ɑĭ〕として知覺されるのは、重母音を分析し抽象した個々の主音・副音によるのでなくて、音聲の連續的變化あるひは調音の時相の推移そのものにも

とづくといふのが、むしろ心理學的に正しい見方である。

發音の實際について見るならば、「タイ・カイ・マイ・サイ」(鯛・貝・眉・妻)における[aĭ]、「コイ・トイ・オイ」(鯉・樋・笈)における[oĭ]、「クイ・ルイ・フイ」(杙・類・無效)における[ɯĭ]は、時として二音節に發音されることがないとはいへないが、おほむね重母音として發音されるものであつて、漸弱重母音である。のちにアクセント形式を說く便宜上、これを二音節のやうに取扱ふが、そのために事實をまげて考へてはならない。そして、これらの重母音において、その副音が大抵「ひきわたり」として、明確な調音をしないことは、また容易に觀察されるところである。[aĭ]における副音が、つひに痕跡を失つて、[a:]となるやうな例も、しばしばおこるのは、この傾向に由來する。

[aɪ̯a so:doza:masɪ̥ka]

における[a:]のごときは、よく耳にするものである。(もと「あら、そうでございますか」である)

重母音[eĭ]については、エドワーヅの記したやうに、「イ」が「エ」の次に來て副音的となる場合、すなはち「シテイマス」[ʃ e imas]>[ʃ eĭmas]などにあらはれる。(4) しかしこの場合も、「キレイ」が「キレー」になるやうに、[eĭ]が[e:]なる傾は、東京語において著しいので、この種の重母音の存立は、すこぶる危ぶまれる。重母音[aɯ]および[oɯ]も氏の見たやうに、「アラウ・オモウ」(洗・思)のやうな場合にあ

らはれるが、いつもきつと重母音だとはいへない。はつきりいふときに、これらを二音節に發音することが間々あることを注意すべきである。

漸强重母音は、エドワーヅのあげたやうに、特殊の場合に[w̆o]・[w̆è]もあらはれるが、これはむしろ例外である。もつとも普通に東京語（およびほとんど全般の國語）にあらはれるものは、「ヤ・ユ・ヨ」および「ワ」である。この場合の副音、すなはちスウィートのいふ「まへわたり」は、普通には半母音と名づけられてゐる。これだけを切はなして、單獨に說くべきものではない。たゞ便宜上半母音の節を設けて、この種の重母音を說かう。

名古屋地方のいはゆる「おきゃあせ言葉」の特色たる發音は、イギリスの *air* [ɛ͜ə] などにおける重母音に似た一種の重母音にあるやうに思ふ。すなはち [æ͜ä̆] あるひは [æ͜ə] 乃至 [ɛ͜ə] のやうな重母音があらはれるやうである。

一〇　半母音

漸强重母音

インド・ギリシア・ラテンの古代語法では、もつぱら漸弱重母音をみとめて、副音を先とし主音が

これに次ぐ漸強重母音を、その正字法上の規約などから傳統的に子音と母音との連つた音節と同樣に解した。そしてその副音が他の子音とはちがつて母音的色合を有するところから、これを半母音と名づけた。しかるに、ローマンス語にあつては、正字法上この種の重母音が文字にあらはされてゐる。すなはちフランス語の *ie*, *oi* [ĭe, ŭa]、イタリア語の *uo* [ŭo]、イスパニア語の *ue* [ŭe] などは、當初から重母音と考へられてゐたのである。いはゆる半母音は、その音質上本來の母音と異なるものでなく、たゞ音節形成における役目を異にするだけである。

ヤ・ユ・ヨとワ

國語の「ヤ・ユ・ヨ」および「ワ」の頭音は、かの子音［j］・［w］のやうな摩擦のひゞきを伴はず、舌・唇の接近の度合も子音に見ることの出來ないものである。また五十音圖の「ヤ」行の「イ・エ」列にあたるもの、「ワ」行の「イ・ウ・エ・オ」列にあたるものが、いづれも「ア」行の同列の母音となつてゐる事實、「ワ」も往々轉化して「ア」となる事實などから見ても、「ヤ」行と「ワ」行とが五十音圖中の特異のものであることを察すべきである。

いま「ヤ」について觀察するに、その頭音の調音は舌が「イ」の位置にさへ至ることがきはめて少

く、おほむね「エ」〔ẹ〕または〔ɛ〕の位置からはじまる。その位置から「ア」の位置へ移るとき出る連音が「ヤ」としてうけ取られる。すなはち〔ĭɪ〕の如き調音は實際はまれであつて、大抵〔ĭa〕のやうに調音される。ゆゑに「イ」乃至「エ」を副音とし「ア」を主音とする漸強重母音とも見られる。スウィートの「まへわたり」の考を以てすれば、一層適切にその事理を明かにし得よう。

「ユ」にあつては、先行の副音が「ヤ」におけるよりもあきの狹いことを要するから、「イ」の位置からはじまるのを普通とする。「ユ」にあつても（少くとも東京語では）子音に聞くやうなひゞきを伴はない（東北地方などの方言にあつては、この關係がちがふ）。「ヨ」にあつては、その副音が大體「ヤ」におけるものと「ユ」におけるものとの中間の調音をする。かういふわけであるから、「ヤ」行の「イ」列・「エ」列にあたるものが、「イ・エ」であつて〔ji〕・〔je〕でないことは自然である。

「ワ」にあつては、その副音の調音がまつたく母音「ウ」と同樣であつて、唇における摩擦のひゞきを生じない。(5) 耳に聞くところでは、このおんがフランス語の *ouest*, *loin* 〔west, lwɛ̃〕における〔w〕によく似てゐるとエドワーヅはいふ。氏のいふやうに、(6) フランス語のこのおんと國語の「ワ」の頭音との調音上の差異は、唇の形や舌の高め方に存するが、これはつまり兩國語における母音〔u〕と〔ɯ〕との差異に相應じるものに外ならない。フランス語においてこゝの例の〔w〕で示されたものが、實は副音〔ŭ〕であ

るやうに、「ワ」の頭音は[ɯ]で、「ワ」は漸强重母音[ɯa]に外ならない。

エドワーヅが日本語の「ワ」の頭音における唇の狹め方について、「そのあひは細長い隙間で、日本の「ウ」より狹い」といつてゐるのは、つとめてはつきりと發音しようとした場合を偶然觀察したのではないか。また「ワ」が語頭にくるとき、摩擦がかなり著しくあらはれるので、これを擦音的子音に組入れることが常に出來ると說いてゐるのは、程度問題とはいへ、首肯することが出來ない。從來の見解では、「ワ」行の子音[w]あるひは[ɷ]に對應して、「フ」における子音[ʍ]あるひは[F]があるとするが、これらの唇的子音が何故に一方では「ア」の前だけにあらはれ、他方では「ウ」の前だけにあらはれるのか、いぶかしいことである。「ワ」の頭音が、かほどの子音的調音のきびしさをもつならば、動詞の活用等においても「ア」以外の母音とも結びついてあらはれるであらうと豫想されるのに、事實はその反對である。

實用音聲學において「ヤ・ユ・ヨ」をそれぞれ[ja]・[jɯ]・[jo]であらはし、「ワ」を[wa]であらはすが、これがためにその漸强重母音であることを見のがしてはならない。實用の便宜上かういふ風に音字をつかふことを許容するに過ぎない。

母音と子音との境界は、事實上往々見わけがたいことがある。そこで、かやうないはゆる半母音

について、その母音であるか子音であるかをきびしく區別することは、無用の骨折だとする人があり、事實の眞相を得るにおいてはかやうな論議に沒頭する必要を認めないとする人があるならば、重母音についてのスウィートのすぐれた見解を玩味するやうにすゝめたい。またジーヴェルス・イェスペルセン等の周到な説明を讀むことをすゝめたいのである。

註(1)Winteler: *Die Kerenzer Mundart in ihren Grundzügen dargestellt.* Leipzig 1876. (ジーヴェルス・イェスペルセンなどの著書參照)

(2)*Op cit*, p. 18.

(3)Jespersen, *Op cit*, p. 208; Sievers: *Op. cit.*, p 163.

(4)*Op. cit*, p. 18-19.

(5)ジーヴェルスはかう觀察してゐる。—„Das ja, a.l. e scheint mir ebenfalls hierher (die durch Geräuschreduktion entstandenen Nebenformen der stimmhaften Spiranten.)—*Op cit.*, p. 194.

(6)*Op. cit.*, p. 41-42.

第五章　子　音

一　子音總說

子音とは何

子音がどんな特徴によつて母音と區別されるかについては、すでに述べた。
物理學的にいふときは、子音とは、繼續的または一時的に多くは複雜。不規則な空氣の振動がおこるとき出來るもので、すなはち「ひゞき」（噪音）である。
生理學的にいふときは、子音とは、呼氣が口腔の中で通路をさへぎられまたは狹められるとき出來る破裂または摩擦の「ひゞき」である。
そこで子音にはまづ次の二種のあることを知る。
（一）口腔内の狹まりでおこるもの。氣流の摩擦がひゞきとなる。これは擦音である。
（二）口腔内の一時的閉鎖で出るもの。氣流がそれを破つて進むときの破裂がひゞきとなる。これは破音である。

また子音がその繼續的または一時的に發音される點から、これを區別して、次の三つとする。

（イ）續音（擦音、鼻音）

（ロ）斷續音（顫音）

（ハ）斷音（破音）

子音の調音についても、（甲）器官がある位置をとるまで、（乙）その位置にあるとき、および（丙）その位置から他へかはる三つの時相を區別することが出來る。特に破音を考察する際、その區別が必要であつて、その場合には、この三過程を（甲）しめこみ（內破、入破 *implosion*）、（乙）しまり（閉鎖 *occlusion*）、（丙）おしあけ（外破、出破 *explosion*）といふ。

子音に特有な「ひゞき」は、喉頭より上の部分、主として口腔の中で出來るもので、「こゑ」すなはち聲帶の振動による「ね」を伴はずにこれを出すことができるわけである。これは無聲子音である。また「こゑ」を伴ふ場合には、口腔においておこる「ひゞき」が「こゑ」と合して、その結果また別種の子音となる。これは有聲子音である。多くの言語に、調音域の共通な無聲と有聲との一對づゝの子音が行はれる。〔p〕と〔b〕、〔t〕と〔d〕、〔s〕と〔z〕などが、おの〳〵かやうな一對である。

無聲音と有聲音との別は、インドの語法家が定立して以來、一般に言語の考察上認められて來たも

のである。しかし實際の發音について見ると、無聲から有聲にいたる間に種々の段階があり、また「こゑ」の出し方にいろ〳〵の方式があつて、多種多樣の變化を生じる。そのおもな型を述べると、

(一)甲の時相のはじまると同時に喉頭における振動がおこり、それが乙と丙との時相を通じてつゞくとき、子音は十分に**有聲**である。ローマンス語およびスラヴ語には一般にこの種の有聲子音が行はれるといふ。東京語における有聲音は、おほむねこれである。

(二)乙又は丙の時相にいたつてはじめて聲帶の振動があらはれるとき、または甲又は乙の時相で聲帶が振動しても丙ではそれが止んでしまふとき、子音は**半有聲**である。

(三)聲帶の振動が甲の時相にはじまるが、丙に先だつて乙の時相で止むものがある。これを無聲化した有聲子音、また**無聲化有聲**と名づけることができよう。次につゞく無聲音のために影響されて、往々あらはれるものである。

(四)聲帶の振動が甲の時相にはじまり、しかも乙の時相の一部で一旦やんで、次いでまたおこるやうな場合をルスロは**中無聲**と名づけた(1)。

(五)子音の次に母音が來る場合に、聲帶の振動が子音の調音のをはり、すなはち丙の時相ではじまるのが、普通の**無聲**である。國語(東京語)における無聲子音もこの種のものである。

（六）子音の次に母音が來る場合に、聲帶の振動が子音のをはつた後、すなはち內の時相の後にちよつと間をおいてはじまるとき、その子音を通例氣音を伴ふもの、または帶氣的のものといふ。

ちようど子音ののちに輕い氣音が出るかのやうに聞えるものである。

かやうな事實は、ルスロの精細な實驗的研究によつて明白になつたことで、音聲の連りにおける諸種の現象を理解するために重要な事實である。

子音の調音にあたつて、口蓋帆が咽頭壁に向つて上つて鼻腔への氣流の通路を閉ぢるとき、通鼻的でない普通のものが出來る。これを特に區別する必要のあるときは、口音または口腔子音といふ。口蓋帆が日常の呼吸のときのやうにたれ下つて、口腔へも鼻腔へも通路を開いてゐる場合に、子音が調音されると、この音色がすこぶる變つたものになる。これは特に有聲子音について著しい。これを鼻音または通鼻子音といふ。生理的にいへば各口音に應じて鼻音があるわけであるが、通鼻擦音のごときは口腔擦音と音色において異なるところがごく僅かである。それで、各種の言語においても單に偶發的にあらはれるに過ぎない。普通に鼻音といふのは通鼻閉鎖音のことであつて、これは調音域の同じなそれぐの口腔破音と音色においてすこぶるちがふ。

子音の調音仕方

前に述べたやうに子音の調音仕方に二いろある。一つは氣流に對してせばまりをつくること、他の一つは氣流をさへぎることである。

(第一)せばまる場合。

口腔でせばまりがつくられ、そこを呼氣(たゞの「いき」または「こゑ」)が通り過ぎるとき、摩擦の「ひゞき」が出る。呼氣が續きさへすれば、その間は「おん」がつゞくのである。この仕方では、吸氣でもやゝ似た無聲音を出すことが出來る。

せばまり方の大きさによつて、「おん」の性質にちがひができる。

(一)あきの狹い母音における調音が一層程度を增し、つひにある種のひゞきを伴ふやうになつて出來る子音がある。この種のものに母音[i]および[u]に對應する[j]および[w]がある。

(二)擦音(摩擦音、狹窄音)とは、氣流の通路における一定の場所で著しいせばまりを作り、そこを通る呼氣にかなりの摩擦を與へるとき出る子音で、[f]・[v]・[s]・[z]などがそれである。

(三)顫音(輾音)とは、彈性のある器官(舌・のどびこ・唇)の振動によつて氣流の通路を交互に開

いたり閉ぢたりするによつて生じる子音で、〔r〕がその典型的のものである。

(四)側音とは、呼氣が口腔内の中線に沿うて出るものではなくて、兩側または片側を經て出るとき生じる子音である。中線のある一箇所で舌が口蓋に觸れて氣流をさへぎるが、口腔の中部で左右にすきまが出來、側音〔l〕およびこれに類する子音を生じるのである。

(第二)さへぎる場合。

口腔で氣流がある長さの(普通にはきはめて短い)時間だけさへぎられ、そのために高まる氣壓のためつひに閉鎖をつき破つて急に出るとき、破裂の「ひゞき」がおこる。これはすなはち破音で、〔p〕・〔b〕・〔d〕・〔k〕・〔g〕などがこれである。破音(破裂音・破障音)はまた閉鎖音といはれることもある。

アフリカータと名づけられる子音は、普通には破音と擦音との接合連續したものと考へられてゐる。そこで〔pf〕・〔ts〕・〔tʃ〕のやうに二つの音字であらはす。しかしルスロの見解によれば、これはそれぞれ一單音と考へるべきものである。そのわけは、閉鎖と摩擦との二つの時相から成立つにしても、それは單一の調音の結果であるからで、この見地から氏はこれを半閉鎖音といふ。(2)

子音の調音域

すべて子音の調音には、氣流の通路をせばめるか、まつたくふさぐかの二樣式があることは、前に述べたとほりである。この調音のはたらきは、運動し得る二つの器官の間、または一方に動き得る器官があつて動かないものに接觸または接近するによつて遂げられる次第である。

(一)一方の唇は他の一方の唇または齒・舌と相近づくことが出來る。

(a)上下の唇。破音〔p〕・〔b〕、兩唇的摩音〔ʍ〕・〔w〕および〔F〕・〔β〕、鼻音〔m〕など。

(b)下の唇と上の齒。摩音〔f〕・〔v〕、鼻音〔ɱ〕など。

(c)上の唇と下の齒。これを觸れまたは近づけることが出來るが、不自然な運動であるから、普通の言葉には用ゐられない。生理的缺陷ある者に見ることがある。

(d)上の唇と舌。全くまたは一部相觸れて、破音や摩音を出す。普通の言葉にはあまり用ゐられない。

かうして生じる子音を唇音といふことがある。

(二)舌の種々の部と口腔の丸天井の種々の部分との間に調音が行はれる。

(a)舌の前部(舌のさき、へりおよび前舌を含む)が齒のさきから口蓋頂までの間に全部的または一部的に接觸することが出來る。

（b）舌の後部（後舌）が口蓋帆と全部的または一部的に接觸する。また口蓋頂・硬口蓋とも接觸することが出來る。舌根は咽頭後壁に近づくことが出來る。

（c）舌の中部（中舌）は、口腔の天井のほゞいづれの部分にも接近することが出來る。

以上は舌についてのすべての可能な運動であるが、このうちに類を分ち型をきめる必要がある。その際普通に試みられる仕方は、口腔の天井の部分によつて前後を分け名目を立てることである。すなはち齒音・齒槽音（齒齦音）・口蓋音（前顎音）・口蓋帆音（後顎音、また往々喉音といはれる）の區別はこれによる。しかし母音の調音についてもしたやうに、舌の部分によつて分ける方が理論上適切なところがある。ベル・スウィート・ルスロなどがこの方をとつてゐる。各子音に特有な音色は、多くこの特質にもとづいてゐるのである。

かやうにして、舌のさきと齒・齒ぐきうら、口蓋の諸部分とで種々の閉鎖をつくることが出來るが、そのためにおこるそれぞれちがつた破音は、おのづから一味の共通な音色をおびてゐて、多少とも［t］や［d］を思はせるやうなものになる。

同じやうに、後舌が口蓋帆や硬口蓋の種々の部分と接觸することが出來るが、それによつて生じるそれぞれの破音にも、やはり共通の味があつて、いづれも［k］や［g］を思はせるところがある。

また中舌は硬口蓋の諸部分と接觸し、またさほど容易ではないが口蓋帆とも相觸れて閉鎖をつくる。かうして生じる子音には、また特有の感觸がそなはつてゐるもので、普通には口蓋音といはれてゐるが、その一種特有の感じからフランスでは軟音（濕音）といふ。「チンチュー」（緊急）のやうに聞える方言的發音の子音などもこれである。この子音の特色たる音色は、口蓋に向つて力づよく舌面をおしつける筋肉組織が舌の中央部に缺けてゐるために、その接觸がゆるやかで、接觸面が廣いといふ調音の仕方にもとづくものである。

かういふ子音を「口蓋音」といふのは、命名がよろしきを得てゐない。中舌が接觸するのは硬口蓋に對してだけではなく、齒ぐきうらに對しても、口蓋帆に對しても可能であつて、それぞれいはばねばりけのある子音が出る。また後舌が口蓋に接觸した場合には、いはゆる口蓋音とたちのちがつた子音が出るのである。

口腔内における子音の調音について、前に述べたやうな見地から三とほりの種別を立てることが出來る。すなはち

前舌的（舌尖的および舌冠的）

中舌的（舌背的）

後舌的（舌根的）

このすべてに共通な特徴は、口腔内部で生じるといふことである。

（三）子音の特色をなすひゞきを、口腔より後方（咽頭および喉頭）において出すことも出來る。

（a）舌根または口蓋帆が咽頭の壁に近づいて、咽頭子音を出す。セム族の言語によく聞かれるものである。

（b）聲帶のあき方またはとぢ方によつて、「こゑ」以外に喉頭子音が生じる。

この子音に共通な特徴は、口腔よりも奥の方で調音されることである。

調音の強弱と硬軟

子音の調音は、諸器官の全部的または一部的接觸（さへぎりまたはせばめ）による。この際の押しつける力すなはち接觸面の壓力のつよさと接觸面の大さとは、それぞれの子音によつてちがふ。器官の筋肉が緊張して接觸がしつかりしたものであるときは、「つよい」子音といひ、觸れ方がゆるやかであるときは、「よわい」子音といふ。たとへば國語において、「タ・ダ・ナ」の子音［t］・［d］・［n］は、同じ調音域をもつものであるが、［t］はつよい子音であつて、［d］・［n］はよわい。また［d］と［n］とを比

べると、〔d〕の方が〔t〕よりもつよい。子音のつよい・よわいは、「こゑ」と關係がふかいのであつて、たいてい無聲子音はつよく、有聲子音はよわい。

調音に際し舌の筋肉が比較的緊張して、その接觸面がわりあひに小さく限られてゐるやうな子音を「かたい」といふ。舌の筋肉がゆるんで、接觸が比較的廣い面積にわたつて行はれるやうな子音を「やはらかい」といふ。これは前に述べた軟音であつて、一種の特色のある音色をもつてゐる。

舌で調音される「かたい」子音は、すべて「やはらか」になることが出來る。それには、舌の緊張が解かれて弛緩し、接觸面がひろくなりさへすればよい。接觸面のひろがり方は、或は兩側から中線に向つてする場合もあり、或は前から後の方へ、または後から前の方へ向ふ場合もある。さへぎりの調音をする破音や半開の側音にあつては、接觸面のひろがりは前から後の方へ、または後から前の方へと行はれる。擦音にあつては、舌の兩側から中線に向つて接觸面が擴大するものである。

この過程は、子音の「やはらげ」すなはち軟(音)化である。普通に口蓋化といふことも、つまりこの現象の一面である。

ジーヴェルスは、破音における閉鎖をつくりまた解く仕方のちがひによつて、破音をはりのあるもの (*Gespannte Verschlusslaute, Sprenglaute*) とはりのないもの (*Ungespannte Verschlusslaute, Lösungslaute*) とに分けた。前者は接觸部位に緊張があるもので、

接觸面が比較的狹い。後者は緊張がなく、面が廣い。これによつてそのおんに銳鈍のちがひがおこるとしてゐる。

一般に、やはらかな（口蓋化した）子音と、かたい子音に〔j〕の接合したものとを同一視してはならない。やはらかな子音は、單音であつて、一囘の調音で出るものであるが、かたい子音に〔j〕の接合したものは、一つの調音から次の調音への推移があり、おんのわたりがあらはれる。實驗的にその接觸面を寫し出すか、または調音の移動を記錄してみると、二者の相異がよく見られる。

國語における音聲現象の考察にも、この邊の事理を明かにすることは、きはめて必要である。

二　擦音

擦音の成立

擦音とは、摩擦のひゞきを特色とする子音で、その發音に當つては、一方に氣流の通路におけるせばまりを必要とし、他の一方にやゝ強い呼氣壓を必要とする。

擦音は、繼續的に發音することの出來る子音であり「いき」を以てする無聲のものと「こゑ」を伴ふ有聲のものとがあること、既にのべたとほりである。

その調音にたづさはる器官は、口腔の外面では唇があり、口腔内部では舌があり、口腔から奥の方では咽頭・喉頭におけるものがある。

國語にあつては、その種類がすこぶる限られてゐて、普通には[s]・[z]の一對と[ʃ]・[ʒ]の一對とだけであると考へられる。

唇の擦音

唇の調音によつて發せられる擦音のうち、ひろくヨーロッパなどの言語にあらはれるものは、上の齒に下の唇を近づけて調音する[f]・[v]の一對である。[f]は無聲の、[v]は有聲の唇齒的擦音である。いづれもわが國語にはあらはれない。

上下の唇で調音する兩唇的擦音には、二とほりをわける。母音[u]の舌の高まりを有し、唇のまるめを以てする有聲の[w]は、イギリス・ドイツの言語にあらはれるが、著しい摩擦のひゞきを伴はない、むしろ半母音である。これに對應する無聲の[ʍ]はスコットランドの發音にある。唇がまるめられずに、たゞ一直線になり、間に狹い隙間を殘すやうな調音で出る擦音（無聲[ɸ]、有聲[β]）は、國語でも地方的に間々聞かれるものである。しかし、東京語には、この種の擦音がいづれもあらはれない。

越後の東部および兩羽地方の一部に行はれる「葉・火」などにおける子音は、無聲の兩唇的擦音である。その調音について觀察するに、兩唇の間のあきが狹くて左右に長いこと、上齒が下唇の內面にかるく觸れる傾あることがわかる。すなはち[F]にあたる子音である。またこれに對する有聲音は、越後の一地方で行はれてゐるやうである。[Ve](家)のやうな場合にこれを見る。

東京語における「フ」の子音は、從來この種の擦音(多くは[F])と考へられたことがある。(3) しかしその見解の穩當でないことは、著者がかつて說いたところである。なほのちに氣音[h]を說明する際、この點の細論を試みよう。

口腔內の擦音

口腔の內部で出來る擦音には、すこぶる種々のものがあるが、そのうち主なものは數種で、國語にあらはれるものは二三種にすぎない。

まづ舌のさきが上齒の端または裏面に向つて調音するときは、イギリス語によくあるいはゆる*th*のおん、卽ち無聲[θ]および有聲[ð]が出る。これは國語では行はれないものである。

つぎに舌面が齒ぐきうらに向つて調音し、氣流の通路をごく狹い筒形にすると、無聲[s]、有聲[z]が

出る。この際通路の形が大切であつて、調音の部位如何はむしろ副次的の意義を有するのみである。

國語における「サ・ス・ソ」などの子音は[s]、「ザ・ズ・ゾ」などの子音はまづ[z]である。その調音について觀察すると、中舌母音[ü]におけると近似してゐる。(4) すなはち舌の後部および兩側の位置は、ほとんどこれと同樣であつて、たゞ舌のさきが一層齒ぐきうらに近づいてせばまりを作る。この中舌母音にあつても、往々輕い程度の摩擦のひゞきを伴ひ、それが[z]に似てゐることは、すでに述べた。かく、調音においても音色においても、すこぶる近い關係がある。東京語において[ü]が特に[s]・[z]と結びついてあらはれるわけも、その調音が近似してゐるといふ事情にもとづく。

北京官話についても同樣な連音上の事實があることは前に述べた。

東北方言ではすべて「ウ」に[ü]を代用するが、「シュ」のやうな場合には、[ʃ]と[ü]とでは連結が困難である。そこで、双方から調音のすべりを生じて、[sï]のやうな連音となる。この場合の[s]は軟化した子音[ʂ]である。カルルグレンが支那語の子音についてṣのやうに表示したのもこれに當る「おん」と思はれる。

國語における「シ」の子音は[ʃ]、その有聲なものは[ʒ]であらはす。普通口蓋音と呼ばれる[ʃ]・[ʒ]で示される子音には、いろ〳〵の調音で出るものが一括されてゐる。さういふわけから、これを說明す

る記述が學者によつてすこぶる一致を缺くやうなことになる。が、そのいづれにしても、上齒のすぐ後方に共鳴域ができるのが、この子音の調音の特色である。これと[s・z]とのちがひは、やはり學者によつて說くところを異にするが、それはまたそれぞれの言語において異同があるによるであらう。

東京語においては、その調音が前にのべた母音「イ」にかなり近い。もつとも「イ」に一番近いのは、のちに述べる「ヒ」の子音であるが、[ʃ・ʒ]もかなり似たところがある。たゞし、舌の前部が一層口蓋に向つて高められる點は、著しい相違である。これを[s・z]の場合と比較してみるに、[s・z]では舌のさきがのびて長いまゝで上齒の少しうしろまで近づくが、[ʃ・ʒ]ではさきがひつこんで舌の形がまるくなり、横にもひろがり、口腔の前部、齒のすぐうしろに共鳴域をつくり、唇はほゞ「イ」の場合のやうに引きあけられる。パシのいふやうに、前の場合は、空氣の通りみちが細長く狹いし、後の場合にはこれが短くひろいとは、國語（東京語）のこの子音についてもあてはまる。したがつて、フィエートルのいふやうに、[ʃ・ʒ]においては氣流が横にひろくなる。國語における[s]では、呼氣は上齒の裏がはにつきあたり、屈折して下の齒列の中央に向つて流れ出るが、[ʃ]では上下の齒列にひろくあたる。ドイツ語などの[ʃ]では、呼氣の進み方がこれほど下に向はないし、唇もだいぶとがつて前に突出される。

エドワーヅは、東京語の[ʃ]について、舌尖の低下、下の齒ぐきと舌の接觸、氣流の通路の大きく平たいことなどをあげてゐる。

[s]と[ʃ]との形成およびその相互の關係については、從來學者の所說に一致を缺き、音聲學上の一つの論爭點となつてゐる。[ʃ]は[s]と[x]（ドイツ語 *ach* における子音）との同時調音によつて出來る複合的子音であるとする說もあり（ブリュッケ）、その見解をうけて、二箇所の調音のうち後方の調音は、隣のおんの如何によつて[ç]ともなり[x]ともなるとする說もある（テヒメル・ブレーメル）。この見解に對しては、すでにはやくから疑問が提出されてゐる（メルケル・グリュッネル）。ベルは、はじめ[s]を「舌尖をまじへた前舌」*front mixed with point* とし、[ʃ]を「前舌をまじへた舌尖」*point mixed with front* としたが、のち自分でこれをあべこべにかへたといふ。[5] スウィートは[ʃ]が[s]に似てしかも多分の「舌尖の要素」'*point element*' を備へてゐることを認め、これはつまり無聲の *r* に接近するからであるとし、[ʃ]は實は無聲の *r* に至らうとする途中にある[s]に外ならないと說いた。氏の特に着眼した調音上の差異は、[s]にあつては舌のへり（*blade*）、[ʃ]にあつてはへりさき（*blade-point*）が調音に關する部分であるといふにあつた。これは誤ではない。が、むしろジーヴェルスが見たやうに、[s]では舌の正中線に沿うて溝が出來、[ʃ]では舌の表面が鍋または匙のやうに凹むといふところにおもな差異があると

する方が、一層當つてゐるとおもふ。

しかし、これらはイギリス・ドイツなどの言語について觀察されたところであつて、國語における[s]と[ʃ]とに適用し得るものではない。この二種の子音に音色の上の判然とした差異があるが、その調音はそれ〴〵の言語についてかなりちがふ。國語についてみれば、スウィートの所說と事實が反對になつてゐ、ジーヴェルスの說く舌の形は[ʃ]に認めることができない。もちろん[ʃ]といつても國語のとドイツ語のとはかなり異なるから。調音の相違もしかあるべきことであるが、すでに國語における[s]と[ʃ]との別が他の事由によつて成立するならば、スウィートやジーヴェルスの所論は普遍妥當しないものであり、本質的のものを逸してゐるといはなくてはならない。この點では、パシやフィエートルの見解が正當に近いものと思ふ。

舌のさきを下げて調音する[ʃ]は、中ドイツ・南ドイツに行はれることジーヴェルスの認めるところであり、またスラヴ・ポーランドの言語に口蓋的[ʃ]のあることが知られ、ストルムの觀察の結果はノルウェー・スウェーデンの言語にこの種の[ʃ]の行はれてゐることを明かにした。著者もスウェーデン語 *skilling, sju* [ʃiliŋ, ʃʉ:] における[ʃ]が、すこぶる東京語における[ʃ]に類することを觀察した。かやうな次第で、舌尖の調音が、何等[s]と[ʃ]との本質的差異をなすものではないと斷定するこ

とが出來る。

イェスペルセンは、この點について獨特の一說を提供してゐる。氏によれば、[ʃ]の調音が種々あり、それに應じて幾種かの[ʃ]があるが、その間に共通なものがあつて、[s]との區別を可能にする。その截然たる判別點は、舌の正常の靜止狀態で相面接する舌と口蓋との部分が、[ʃ]の調音の際そのまゝ近づくのでなくて、前または後にずれて近づくところにあるとした。が、これに對しても、必ずしもさうでない事例を幾つか擧げることができる。かつ、平時に面接してゐないやうな舌と口蓋との部分を以てしても、ある適當の形狀をさへとることが出來れば、また[s]を出すことが可能であり、またその反對の場合もあり得る。特にドイツ語などについて見れば、氏のいふところも當るであらうが、一般に妥當な見方とは認められない。

呼氣の通路の形を顧慮する點で、エヴァンスの着眼の方向は正しいが、その觀察はまた特殊の言語に限られてゐて、その上粗であることを免れない。氏はイギリス語における觀察から出發して、[s]にあつては舌の調音が前方に普通の[θ]、後方に[ç]のあきの一層開いたものであり、[ʃ]にあつては反對に後方に普通の[ç]のあきがあつて前方は[θ]のあきの一層開いたものがあるとした。かつこの二つのせばまりの間の空洞が二子音にとつて重要なものであることを認めた。イギリス語における

［s］と［ʃ］とが、國語におけるこの種の子音にやゝ近似することの故に、氏の觀察は比較的によく國語の場合にあてはまるかと思はれる。しかしドイツ語などにおけるこの二子音が、舌尖でこれと異なる調音をしながら、何故に音色においてかへつて調音のちがふものに類似するかを說明しがたい。

　この點についての著者の見解は、ほゞ前に述べたやうであるが、その連音における特徵についてはなほ後に說かう。

　普通に破音［t］・［d］と擦音［s］・［z］または［ʃ］・［ʒ］との接合と解せられるアフリカータは、その調音が一回ですみ、たゞそのはじめとをはりとの時相にかはりがあるものであるから、これを半閉鎖音といふ單音と見るのが正當である。國語における「ツ・ヅ」にあらはれる子音および「チ・ヂ」にあらはれる子音がこれである。かういふ見地からは、それ〴〵一つの音字を與へてこれをあらはすに、前のを［ŝ］および［ẑ］とし、後のを［ʃ̂］および［ʒ̂］とする。(6)しかし實用音聲學では、これを連音として取扱ふ習慣であり、その方が說明に都合のよいこともある。本書でもやはり便宜上これを調音上まつたく「わたり」のない緊密な二子音の連音と見做し、これを［t͡s］・［d͡z］および［t͡ʃ］・［d͡ʒ］であらはし、連音の部で說くことにする。（第二二節參照）

　つぎに口蓋に舌のさきが近づいて別種の擦音を生じるが、これはドイツ語 ich［iç］における無聲の

〔ç〕と、je〔jeː〕における有聲の〔j〕のやうなものである。これらは東京語における「ヒ」の子音および「ヤ・ユ・ヨ」の頭音に〻似て、しかも異なるものである。たゞ實用上、この音字を以て國語においてこれと似たものをあらはすのが普通である。

「ヒ」の子音については、次の節に說く。いはゆる半母音については、すでに述べた。

口腔内の後部で調音する擦音は、無聲〔x〕、有聲〔ɣ〕であつて、〔x〕はドイツ語 *acht*, *Buch*〔ax, buːx〕などにあらはれ、〔ɣ〕はドイツの北部地方で往々〔g〕のかはりにあらはれるものである。いづれも國語では本來存立しない子音である。

口腔以後の部分で調音される擦音は、喉頭におけるもの、すなはち聲帶のせばまりによつて生じる「氣音」〔h〕である。これは國語では「ハ」行にあらはれ、その調音部位が喉頭であるところから、「こゑ」と特殊の關係をもつてゐる。ゆゑに次に特に節を設けてこれを說かう。

なほ咽頭において舌根が咽頭後壁に近づいて生じる一種の擦音があり、アラビア語に用ゐられてゐるといふ。これはその實際について觀察する機會を得ないし、國語の音聲には關係するところがないと思ふから、こゝには說かない。

一三　氣　音

氣音の成立

國語の「ハ」行の子音〔h〕は、おんの性質からいふと擦音の一つであるが、その發音のはたらきについて見るときは、他の子音と異なるところがある。

平靜な呼吸の際には、呼氣が任意の母音のかまへをした口腔を通過しても、耳にたつほどのおとを生じない。このとき聲帶は。もつとも廣くあいて呼吸聲門をつくり、自由に氣流をとほすのである。しかし、呼吸運動がはげしくて、多量の空氣を短い時間に出入させる場合には、聲門や口腔をひろく開いてゐても、氣流の通路の各所に摩擦を生じて耳にたつほどのひゞきを伴ふ。これは「あへぎ」において聞えるところのものである。

このいきづかひで母音の調音をしても、それ〳〵異なる色合のひゞきを得る。すなはち「ハーハー息をはづませる」とか「フーフーいふ」などゝ形容される場合には、身體の運動または感情のたかぶりから呼吸がはげしくなるとき、氣流が口腔の形に應じてそれ〳〵のひびきを立てるのである。

母音の口腔の形でこの種のひゞきを立てようとするには、强い氣流すなはち多量の空氣を短い時間

に通過させることを要する。ゆゑに言語における音聲として使ふには、きはめて不經濟なものであつて、實際また行はれない。

音聲の生理的觀察においてすでに述べたやうに、氣音［h］の發音に際しては、呼吸聲門から聲帶がずつと接近してせばまりを作り、氣音的聲位をとる。この場合のはさほど多量の呼氣を必要としないものであつて、擦音の一つに外ならない。しかし、それ〴〵の母音に特有な口腔の形によつて、異なりある色合を帶びることがすこぶる著しい點は、他の擦音と趣のちがふところであつて、喉頭擦音の特徵として母音に類するところあるゆゑんである。

この特徵は、聲門のせばまりの一層きびしい「さゝやき」の場合になほ著しくあらはれる。これも喉頭擦音の一つであるが、これをもつて各種の母音の特徵を代表するところの「おん」を發することが出來るのである。

以上は、いづれも聲帶の週期的サイレン樣運動による「こゑ」とちがつたひゞきであるが、「こゑ」のやうに口腔または鼻腔における共鳴域の大さと形とによつて母音のやうな色合をおびるものである。その點に共通な性質があるが、聲門のあき方によつてこの種のおんに三種を分けることが必要である。すなはち強い呼氣によつてはじめて發せられるやうな「いきのおん」と氣音［h］（ギリシアでは

「濃いいき」といひ、[ʻ]のしるしであらはした）と「さゝやきのおん」との三いろである。普通に無聲化された母音として連音にあらはれるものは、「いき」の母音であつて、こゝにいふ氣音とはちがふ。(7)

氣音[h]が喉頭に生じるとき、口腔の形が母音「ア」におけるものであるときは、ちようど「ハ」の頭音が出る。いひかへると、「ハ」といふ連音では、口腔の形は初から「ア」におけると同じ形をとつてゐるのであつて、たゞ聲帶が呼吸聲門から氣音的聲位を經て、連續的に發聲聲門に移つていくのである。その中間で氣音[h]が生じ、次第に母音にかはつていく。この場合の[h]は、すでに[ɑ]の色合をおびてゐて、「ホ」その他における[h]とはつきり區別が出來るものである。この種の關係は、他の子音についても見られ、[l]などにおいてよく說かれるが、[h]にあつてはもつとも著しい。これは[h]が喉頭で發せられるといふ特殊の事情による。

いはゆる「有聲のɦ」の發せられる具合は、前に述べたところであるが、母音と母音との間にはさまれた[h]が往々これになるのは、一旦發聲聲門から開いて氣音的聲位にいたる筈のものが、次の母音にひかれて、「こゑ」がまつたく振動を中絶するに至らず、たゞ瞬間的に弱められるによると考へることが出來る。國語で通常語頭にある[h]が十分氣音的であるのに、連音の中にあらはれるときは多く「有聲のɦ」となる。これをあらはすに[ʰ]をもつてする。（あるひは[ɦ]を用ゐる。）東京語においても、

「お葉（ハ）・お火（ヒ）・ご本（ホン）」などはごく普通にこの種の「おん」となるのである。

ドイツ語では、殊に強音節（*Drucksilbe*）をなさない二つの母音の間に、このおんがしば〳〵現れるが、マイエルの研究によれば、氏のいはゆる *'hauchstimmlaut'* の *h*、すなはち「有聲の *h*」は、ドイツ語および多くの他の言語においても 有聲音を先行させる場合には、強音節の頭音にもあらはれ、また母音にはさまれるとき強音節の母音の次にもあらはれる。(3) このおんが本來の[h]とちがふことは、耳で聞きわけることも出來るし、實驗的にたしかめることも容易である。國語における連音の強さの布置は、ドイツ語などゝ趣を異にし、強音節とすべきものゝ頭音に「有聲の *h*」があらはれることも普通にある。そして古來の假名づかひで「は・ひ・ふ・へ・ほ」で書かれてゐる連音中の介在音がまつたく有聲になつてしまひ、たゞ前の例のやうな接頭語をつけて出來たものだけにとにかく氣音のおもかげを殘してゐることは、國語における「こゑ」の同化の著しいことを示す事例である。(9)

かく國語の「ハ」行の子音は、語頭などに來るときは本來の無聲の氣音[h]としてあらはれ、連音中に介在するときはおほむね有聲の[ɦ]となる。で、「ハナ・ハオリ」などの「ハ」の子音は[hᵃ]であり、「ヘリ・ホン」などの「へ・ホ」の子音はそれ〴〵[hᵉ]・[hᵒ]である。「オヒル・ゴハン」などでは、普通に「有

聲の「ん」すなはち[ん]があらはれるが、もちろん「イ」なり「ア」なりの色合をおの／＼多分にもつてゐるのである。

ヒの頭音

こゝに述べた關係は「ハ・ヘ・ホ」における同樣に「ヒ」および「フ」における子音にも見るところである。しかるに、國語、殊に東京語の母音「イ」の調音の特色から、「ヒ」すなはち氣音と「イ」との連音における[h]は、從來しば／＼口蓋音として取扱はれたのである。エドワーヅもこれを[ç]であらはした。もつとも氏はこれをドイツ語の ç [iç] における[ç]と混同すべきでないことを注意ぶかく說いてゐる。「舌の中部が硬口蓋に近づく」とか、「これが日本語ではすこぶる軟かで、摩擦がごく僅かで、舌の筋肉の緊張がはなはだ弱い」とかいふのも、その舌の調音が母音「イ」と同一であるからである。舌の位置が母音「イ」と同樣であるのみならず、唇の形もそつくりそのまゝである。ゆゑに、「ヒ」の場合だけに別種の口蓋音があらはれるのではなくて、「イ」の口腔の形によつて色づけられた[h^i]が、たま／＼この種の擦音にやゝ似たのに外ならない。この有聲音はすなはち「イ」そのものである。

エドワーヅは東京語において[hi]のやうな連音が存在しないとしてゐるが、問題は[i]にある。東京

語における「イ」をもつて氣音に連ねるなら、當然東京語における「ヒ」を生じるのである。もちろん「ヒ」の子音が、たとへば「ヒト」のやうな連音にあらはれると、普通の「イ」におけるよりは音がも少し口蓋に近づくのが自然であらうと思はれる。しかしこの場合には呼氣がつよいことも考へなければならない。氣流の通路のあきが廣くとも、呼氣がつよければずゐぶん摩擦のひゞきを出すことが出來る。

古くは國語の「ヒ」をしばしば fi としたヨーロッパ人の文献がある。[11] これがひどい誤であることは今日一般に認められてゐる。しかるに「フ」を fu とした當初のやり方が[12]、今日なほ命脈を保つて、類似の兩唇的擦音の存立を國語に求めようとする者が少くない。

フの頭音

東京語「フ」における子音も、特殊の兩唇的子音〔F〕ではなくして、「ウ」の調音を以てした氣音〔h〕に外ならない。その音の位置や唇の形を母音「ウ」と「フ」の子音とについて比較してみるさ、ほとんど差異のないことを知るであらう。調音の強弱が無聲音と有聲音とでちがひ、一般に無聲音の調音が有聲音のよりつよいことは、すでに說いたところであつて、この場合にも無聲の〔h^{w}〕は、有聲の〔ɯ〕より

調音においてつよいのが普通である。しかしそれ以上の調音上の差異は認めがたい。その音色において「フ」の子音はやゝ〔F〕に類するが、その調音から見るときは、まつたく別の部類のものである。すなはち前者にあつては唇だけが相近づいて横にすきまを作り、喉頭には全く無關係であるが、「フ」の子音にあつては、口腔內に母音「ウ」に相當する調音が營まれると同時に、喉頭において氣音が生じなくてはならない。かつ「フ」の子音にあつては、唇における摩擦が、よしおこるにしても、極めて輕微であり、指のさきで唇を上下におしあけながら發音しても、かなりその特色を失はない。唇における調音がさほど重要でないことを見るべきである。

エドワーヅは述べていはく、「この日本語の擦音は、氣流を齒と、少し隅へ引かれ、ほとんど閉ぢられてゐる唇とに向はせるやうにして出來る。唇の位置はほとんど日本語の「ウ」におけると同じである。摩擦はよわい」と。この觀察は、大體當つてゐるが、これだけではこのおんを兩唇的擦音〔F〕と斷定することが出來ない。しかるに氏は、これ以外に他の理由らしい事實を掲げてゐない。強ひて求めるなら、この子音がドイツ語 Qual [kFa:l] などにあらはれる〔F〕にやゝ 'um pen' 似てゐるといふことぐらゐのものである。(13)

神保氏などの說明するやうに、蠟燭の火を吹き消すときや炭火を吹いておこすとき出るおとは、

兩唇的擦音で〔F〕に似てゐる。が、〔F〕の調音部位を嚴密にいふと、イェスペルセンの說くやうに、むしろ上の齒が下の唇の内面に接してゐるところである。(14) これと蠟燭の火を吹きけす「フッ」といふおとゝは、發音の機制において異なる。その點からはむしろ〔ɯ〕と近似してゐるが、普通には舌の位置が「ッ」におけると同樣であるところから、「フ」を思はせるやうな色合を帶びるのである。

もし岡倉氏などのいふやうに、「方今の本邦語の發音においては、ハ音はありながら「ウ」音の前にはこれを用ゐない(15)」とするならば、これが「ウ」だけに接續しない自然の積極的理由がなくてはならない。その接續を困難にするやうな原因があるべき筈である。しかるに、その理由・原因については、いまだ說明されたことを聞かないのである。

もし無聲の〔F〕が行はれるならば、それに伴つてこれに對應する有聲音もあらはれるのが自然であり多くの蓋然性を有するわけであるが、兩唇的有聲擦音〔β〕は、東京語において聞かれない子音である。「ワ」の頭音にも現はれず、もとより〔βɯ〕のやうな連音もないのである。

實際十分な摩擦のひゞきを伴ふ〔F〕を以て「フーフ」(夫婦)のやうな發音を試みるときは、かなり異樣な感じを與へる。たゞ母音の無聲化する場合には、「フ」の子音だけでは、なか〳〵明かに聞きとることが出來ないために、強ひて擦音を耳たゞせるやうにすることがある。「フサ・フク」などの

連音において、〔ɯ〕または〔F〕に類するおんを聞くことがあるのは、このためである。

調音域の問題をはなれて、耳に聞いたところから「フ」の頭音が、特につよい呼氣によつてたとへば〔F〕のやうな擦音に似た感じを與へるといふことは事實である。それはつまりその氣流の運動にもとづく。鼻から「いき」を急に出しても*f*類のひゞきが出る。その際には口腔の調音如何はおんの性質に關係しないので、〔m̥〕も〔n̥〕も同じ*f*様の、あるひは*s*様にも聞えるおんに過ぎない。調音域が一般に音色に關係するのは、發音器官の形をかへて種々の共鳴域をつくり、また種々の様式のおんのたて方をさせるからである。無聲擦音においては、共鳴域がさほど影響を與へないので、どこでせばまりが出來ても大體似よつた*f*様または*s*様のひゞきを出す次第である。

「フ」の頭音と　との間にかやうに耳で聞いた上の多少の類似があるので、これを耳にしたヨーロッパ人が、これを自家の言語にありふれた*f*類の擦音とし、唇のせばまりを見てこれを唇音とし、唇齒的〔f〕と異なることに氣づいてこれを兩唇的〔F〕とするに至つたのが、在來の見解の成立つた因緣であらう。「フ」が〔hu〕とかなりちがふのは、「ウ」と〔u〕との調音および音色の相違にもとづく。國語の「ウ」の特徴を仔細に觀察しなかつた外人が、この邊の事理を明かにし得なかつたのは當然である。

一四　破　音

破音の成立

通常破音の調音に三つの段階があり、これを甲・乙・丙の三段階に分けて考へる次第、および特に破音について（甲）しめこみ（遮斷）、（乙）しまり（閉鎖）、（丙）おしあけ（破裂・突破）の三過程を考へることが必要であることは、すでに見たところである。たとへば「アパ」と發音してみると、口の開かれた位置から唇の閉ぢられるまで、すなはちしめこみと、唇を閉ぢてゐる間、すなはちしまりと、閉ぢた唇をおしあけるとき、すなはちおしあけとの三時相をあきらかにすることが出來る。甲のしめこみ、および丙のおしあけの時間は、實驗的測定によれば、平均百分の三秒を要する。乙のしまりの時間は、もちろん「促音」的發音などになると異なるが、普通には平均約百分の十秒である。事情によつて時としてこの二倍に達する。

かく三つの時相が一つの破音について分けられるが、連音における位置によつては、必ずしも常にこの三時相をそなへてあらはれると限らない。語頭にあらはれるやうな場合には、甲の過程はおんに無關係であり、また語尾で閉鎖のまゝとめてしまふ支那語のいはゆる入聲（ニッシヤウ）のやうな發音では、丙の破

裂の過程がない。それでも知覺上に一種の印象を與へるのである。そのいづれにも共通な時相は、しまり（閉鎖）であつて、破音を靜的狀態において捉へようとすれば、この乙の時相を主な要素とする外はない。閉鎖音の名あるゆゑんである。

しかしこの狀態自體が發音を可能にするのではなくて、運動の連續中におけるこの時相がおんを生じる條件となるのである。ゆゑに、しめこみ或はおしあけの過程そのものゝうちに、この子音成立の能因を認めなければならない。そのもつとも普通にあらはれる過程は、丙のおしあけであり、こゝにこの子音の特色が著しく見えるところから、破音または破裂音・破障音の名が出たのである。甲のしめこみの過程だけで子音が成立するやうな場合には、「入聲」の名稱になぞらへてこれを入破音（また內破音）と呼ばう。これに對して破音の際だけのおんを出破音（また外破音）と名づけよう。

破音のそれ〴〵に特定の音色を與へる能因としては、次に述べる五箇條を數へる。

（一）聲帶のはたらき、これは有聲・無聲の別を生せしめる。

（二）發音器官のおしつけの度合、これは子音の強い弱いの別を立てしめる。

（三）調音域、その各部によつて、唇的の〔p〕・〔b〕、前舌的の〔t〕・〔d〕、後舌的の〔k〕・〔g〕が分たれる。

（四）口蓋帆のはたらき、これによつて口音と鼻音との別が立つ。

(五)接觸面の廣さ、これによつて「かたい」および「やはらかい」子音の區別が出來る。

破音とこゑ

子音總說に述べた子音におけるこゑの出し方の種々が、特に破音についてはどういふ差別をもち來たすか。これによつて破音に次の種類が出來るのである。

(一)(純粹)有聲破音。普通「バ・ダ・ガ」などに聞く子音で、聲帶の振動は、この種の破音にあつては、しめこみの過程のはじめからあり、甲・乙・丙の三時相を通じてつゞき、たゞちに母音に接續するのである。要するに甲の時相のはじめから、聲帶の振動は中絕されずに次の母音のをはりまで引續くわけである。ローマンス語・スラヴ語に普通のもので、イギリス語の母音の前に來るものは、またこれである。

二母音の中間に破音が介在すること「アダ・アバ・アガ」のやうな場合には、聲帶は第一の母音の最初から引續いて第二の母音の終まで振動する。

破音が母音の後に來るとき、たとへば〔ab〕・〔ad〕・〔ag〕などでは、二つの場合があり得る。破音がおしあけの時相まで進行するか、またはしまりの時相で停止するかの二途である。前者にあつては

「こゑ」が第三の時相までつゞく。後者にあつては、しまりの間までも聲帶の振動が止まずにつゞく。「こゑ」の終るとき子音がをはるのである。

(二)無聲化有聲破音。聲帶の振動がしめこみの時相にはじまるが、しまりの間にいつか中絶し、おしあけに際してはまつたく無聲となる。ドイツ語における語尾の*b*・*d*・*g*が、あたかも〔p〕・〔t〕〔k〕（または〔x〕・〔ç〕）のやうに（出破に際して）發音されることは、人のよく知るところである。

(三)半有聲破音。聲帶の振動が、しまりの時相にはじめておこるか、時にはおしあけの初にやつとおこる。この種のものでは、振動の力がよわく、容易に無聲のものを有する語と間違へられる。ドイツ人が母音の前の有聲破音をよくこれで發音する。南ドイツでは、この種の破音がしばしばほとんど無聲となつてしまふ。

(四)(純粹)無聲破音。しめこみにもしまりにも聲帶の振動があらはれない。おしあけには、種々の場合が出て來る。

(イ)破音のつぎにくぎりが來るとき、單に入破音ならば、問題はない。おしあけの過程まで進むとき、その出破音は無聲である。

(ロ)破音のつぎに子音が來ても、二つの子音が判然と發音されるとき、出破音が聞える。この場合

にその出破音は無聲である。二つの子音が融合するときは、破音のおしあけの過程があらはれないから、問題はない。

(ハ)破音のつぎに母音または母音に近い有聲子音が來るとき、おしあけの時相は次の有聲音の第一時相おんたてと合致し、したがつて有聲音である。聲帶の振動は、破音の第二時相しまりの終ると同時にはじまり、出破音は有聲となる。

すなはち「パ」のやうな音節の發音に際して、聲帶の振動は上下の唇がはなれる瞬間にはじまるのである。國語ではもつぱらかういふ破音をつかふ。ローマンス語・スラヴ語およびゲルマン語中のオランダ語のごときにおいても、同樣な發音をする。

(五)**帶氣無聲破音**。この種の破音にあつては、母音の前に來るときでも、いつもその三時相しめこみ・しまり・おしあけが無聲である。聲門はその間開きつゞけて、調音域におけるさへぎりによつてそこに呼氣がつめかけ、つひにおしあけるまでに至る。出破音と母音の第一時相との連る間に、聲門が「こゑ」を出す聲位をとる中途に氣音〔h〕に似た一種の擦音を生じる。破音が有聲子音に連る場合には、この子音は半有聲になる。

ドイツ語・イギリス語における無聲破音は、一般にこの種の帶氣的のものである。ゲルマン語

のうち數種、たとへばデンマルク語などでは、聲門の開きが母音の第二時相の一部分までつゞくことがあつて、いちじるしい帶氣的性質をあらはす。個人的發音についても、この特徴を見ることがある。

閉鎖の力

氣流をさへぎる閉鎖は、脣または舌の筋肉の收縮によつて遂げられる。この收縮による閉鎖は、筋肉において費されるエネルギーの大小によつて、或はつよく完全に、或はよわく不完全である。この點からジーヴェルスなどは破音につよいの '*fortes*' とよわいの '*lenes*' とを分けてゐる。しかし段階は二とほりに限らない。閉鎖面にはたらく壓力の度を一定の言語について同じ調音域の破音をとつて測定した結果、壓力の大きなものから小さなものへ排列して、次のやうな順序を得た。

純粹無聲破音
純粹有聲破音
帶氣無聲破音

古代ギリシア語には、この三種の破音（いはゆる默音(アフォーナ)）が存立したものと考へられる。そのうち帶

氣無聲破音は、のち無聲擦音に推移したものである。

國語(東京語)にあつては、右のうち純粹無聲および純粹有聲の二種の破音をもつのみである。現代のドイツ語、殊に南ドイツの言葉では、純粹無聲も純粹有聲もなくて、〔b〕・〔d〕・〔g〕は半有聲に、〔p〕・〔t〕・〔k〕は帶氣無聲に發音される。こゝでも半有聲音は帶氣音よりもつよく感じられる。

鼻音(通鼻閉鎖音)は、概してこれに對應する口腔の有聲破音よりよわい。

いはゆる促音にあつては、「はっぱ・あった・いっき」などにおける〔p〕・〔t〕・〔k〕の無聲破音が、他の場合の破音よりも力づよく閉鎖され、接觸面の壓力がすこぶる大である。もちろん同時に閉鎖の狀態がだいぶ長くなる。イタリア語における正字法的名稱で重複子音(*consonante doppie*)といふ *troppo fatto, ecco* 〔trɔpːo, fatːo, ɛkːo〕などにおける子音も同樣である。有聲破音についてはかやうな「促音」の現象を東京語において見ることがない。

口腔內の破音の閉鎖の力がある程度以下に弱くなると、その器官の閉鎖は氣流を十分くひとめることが出來なくなる。氣流がこの場合には關門をぬけて、或は調音の最初から、或は閉鎖の中途から逸出する。前の逸出によつて破音は擦音となり、後の逸出によつて半閉鎖音となる。かやうな轉化は、實際にはしば〳〵あらはれるものである。

唇の破音

國語の「パ・バ」などにあらはれる破音は、兩唇的〔p〕・〔b〕である。この破音はほとんど一切の言語において行はれる、ごく普通のものである。すなはち上下の唇をもつて閉鎖をつくる。「パ」にあつては、あらかじめ「ア」の調音が行はれる傾向があるから、しめこみの時相で比較的廣いあきから閉鎖に向ひ、おしあけの時相では閉鎖から廣いあきまで唇がうごく。「プ」にあつては狹いあきから出發して閉鎖に至り、さらに開くときも唇の動き方がすくない。

唇の破音を出すために、往々上の齒と下の唇とをもつてすることがある。ドイツ語の *Kopf* などのやうに、破音と唇齒的摩擦音とがいはゞ融合するやうな場合にこの種の調音があらはれる。

上の唇に舌を接觸させて一種の破音を出すこともできる。しかし、これは言葉にはほとんど用ゐられない。

國語における唇の破音〔p〕・〔b〕の閉鎖は、イギリス・フランスなどのよりだいぶ弱いとされてゐる。[17]

無聲破音〔p〕ではじまる單語は、國語にはごく少く、それも擬聲語などの外は、おほむね外來語である。語の中に出てくることも少く、その場合には、いづれも「促音」としてか、鼻音〔m〕のつぎに

あらはれる（または擬聲語にさうでない場合があるだけである）。有聲の〔h〕ではじまる單語は、これよりやゝ多いが、漢字の字音から出たものや外來語でないのは、すこぶる稀である。語の中には、いはゆる「連濁」といふ連音における現象から、比較的に多くあらはれる。が、他の子音にくらべると、よほど少いといはなくてはならない。

舌の破音

舌の前の部分で調音される破音は「タ・ダ」などにあらはれる〔t・d〕である。國語におけるこの破音の調音では、舌のさきが上の齒ぐきに接觸して閉鎖をつくる。フランス語では、大體舌のさきが上の前齒の裏面に、または齒と粘膜の境に觸れる。ドイツ語では、も少し後方にふれる。イギリス語では、もつと後方で、舌が硬口蓋の前部に觸れるほどである。ゆゑにサンスクリットにおける頂音 *ṭ*・*ḍ* と似て來る。國語の〔t〕と〔d〕とが、調音域から見て、フランス語における齒後的（*post-dentale*）破音と、イギリスの齒槽的（*alvéolaire*）破音との中間に位することは、エドワーヅのすでに見たところで[18]、その點でドイツ語のに近い。なほその際舌面がすこぶる平たくなつてゐると同氏は述べてゐる。これは舌の筋肉があまり緊張してゐないためである。

この無聲破音〔t〕は、國語の語彙にすこぶる多くあらはれ、つぎに說く後舌破音〔k〕には及ばないが子音中でも多きを占める方である。有聲破音〔d〕は〔b〕と同様に語頭においては字音から來たものや外來語を除くと、わりあひに少い。

後舌をもつて閉鎖をつくるとき生じる破音は、無聲〔k〕、有聲〔g〕であつて、國語では「カ・ゴ」などの子音である。その調音は後舌が口腔の天井に接觸するのであるが、次に來る母音によつて觸れる部位がそれぞれちがふ。「ク」や「コ」のやうに「ウ」や「オ」の前では、後舌が口蓋帆とふれ合ふが、「キ」や「ケ」のやうに、「イ」や「エ」の前に來るときは、調音域がすこぶる前進し、殊に「キ・ギ」の場合には後舌が硬口蓋の後部にふれるやうになる。國語における〔k〕・〔g〕についても、舌面が平たく接觸面が比較的ひろいといへる。[18]

破音の閉鎖における接觸面の廣がりが、破音のかたさ、やはらかさをきめる次第は、子音一般について前に述べたところがそのまゝ當てはまる。唇の破音についての軟化は、ロシア語に見られるといふ。舌尖の破音〔t〕・〔d〕において、その閉鎖面がうしろに廣くなるときは、軟化（口蓋化）した子音〔t〕と〔d〕とを得る。九州の各地において、「ダ」と「ラ」、「ド」と「ロ」などを混同する方言があるが、この種の軟化した破音を用ゐるためであらう。軟化は閉鎖の力のよわめを伴ひやすく、氣流の遮斷を十

分にしなくなる傾がある。かくて〔d〕が、のちに述べるやうな「ラ」行の子音と近似して來るものであらう。

舌面の中部がひろく口蓋に接觸する場合は、いはゞ中舌破音を生じる。これをあらはすには無聲のに〔c〕を、有聲のに〔ɟ〕をあてる。その部位の多少の異なるによつて、t様の色合からk様の色合までの趣異がある[10]。その調音の位置の關係から、中舌母音〔ï〕をつかふ東北地方の方言に、これと連つてしばしばあらはれるものである。

エドワーヅが「キョー」のやうな音節は、ほとんど〔coː〕であるとしてゐるが、それに似てゐるとはいへ、事實上東京語の發音としては明かにこれと區別される。

後舌破音〔k〕・〔g〕における調音の軟化（口蓋化）は、調音域を前方に向つていちじるしくひろげ、東北地方の發音〔kü〕に於ける子音になる。この際舌面の接觸は力がよわく、その閉鎖を十分にすることが少いので、おほむね半閉鎖音となり、s様の擦音がおしあけの時相に聞える。

後舌無聲破音〔k〕も、國語の語彙中にきはめて多くあらはれ、破音の語頭にあらはれるものについて比較するときは、語數がもつとも多く、擦音sに匹敵する。しかるに、有聲の〔g〕を語頭にもつ語彙は、また擬聲語を除けば字音から出たものと外來語とだけといつて差支ないほどである。

喉頭破音

喉頭に於ける擦音の成立が可能であり、すなはち氣音として子音のうちに特殊の地位をたもつやうに、喉頭における破音もまた存立し、種々の名稱によつて記載されてゐる。「こゑたて」の仕方に聲門の破音を伴ふものがあることは、すでに述べた。語頭における母音がかやうな仕方で發音されるのは、ドイツ語では普通のことである。「かたい發聲」とか「きつぱりした聲たて」とかいふのが、この場合に外ならない。この喉頭破音は、また聲門打開 *coup de glotte; glottal catch* (*stop*) などと呼ばれてゐる。

國語においては、間々個人的にこの種の發聲仕方をする者を見る外には、語頭にもかやうな喉頭破音があらはれない。たゞ特殊の感情のあらはれとして、「ア」のやうな母音（感動詞）のはじめおよびをはりに急激なこゑの出し方・とめ方をする。その際ある程度のつよさの破音を耳にすることがある。きつぱりしたこゑとめの場合には、破音を聞くのでなくて、本來のこゑについての「入聲」を聞くわけである。いはゆる「こゑ」をはげまして叫ぶとき、この種の語氣が用ゐられることは、前に述べたところである。

半閉鎖音

擦音の節に述べたやうに、從來音聲學でアフリカータと呼び、二つの音字を連ねてあらはしたおんは、仔細にその調音について見るとき一單音とすべきであり、ルスロがこれに名づけて半閉鎖音としたのである。國語における「ツ・ヅ」の子音、すなはち普通に〔ts〕・〔dz〕をもつて示されるもの、および「チ・ヂ」の子音、すなはち普通に〔tʃ〕・〔dʒ〕をもつて示されるものは、調音における感觸からしても、これを二子音の接合と見ることがすこぶる無理である。ヨーロッパにおける普通の正字法では、「ツ」の子音に*z*と*zz*（イタリア）を、また*z*（ドイツ）を「チ」の子音に*c*（イタリアで*e*や*i*の前に）、*ch*（イギリス・イスパニア）を、「ヂ」の子音に*g*（イタリア・イギリスで*e*や*i*の前に）、*j*（イギリスで*e*や*i*の前に）をもちゐてゐる。またドイツ語の*tz*のごときも、本來この種の子音である。

從來音聲學では、これらのアフリカータが一つの破音と一つの擦音との接合であると解して來た。しかし、この種の子音を自分で發音してみると、この考へ方が無理であるといふ感じをいだかずにはゐられない。便宜上これを破音と擦音との接合といふ原子化的行き方で見るにしても、その現象學的性質を看過してはならないのである。

もと音聲の論究に役だてるために作つた音字に、のちあまりに拘泥して、音聲の事實的・現象的考察を怠ることは、音聲研究者のもつとも戒心すべき點である。いはゆる「紙上音聲學者」(*paper phonetic'an*) は、まさにこの弊におちいつたものである。「チ」の子音などに關してテヒメルの觀察したところは、すこぶる首肯に價する。シチェルバのごとき、パンコンツェッリカルツィアのごときは、實用音聲學においても、單一の音字をもつてこれをあらはす方式をとつてゐる。(第七章二三參照)

一五　鼻音

鼻音の成立

口腔における調音による各破音に對應して、各種の鼻音がある。その口音と異なるところは、通鼻の點にあり、口蓋帆のあがると否とにある。口音では、その調音の始中終の三時相を通じて、口蓋帆が咽頭後壁に接着したまゝになつてゐる。鼻音では、その調音の始の時相から口蓋帆は下がつてゐ、中の時相すなはちしまりの間もその狀態をつゞけ、終の時相すなはち破裂と同時に上がるものである(たゞし語尾などの「ン」は、次に說くやうに別である)。口腔における閉鎖の間は、氣流が口內で遮

られてゐるが、鼻腔はずつと開いてゐて、自由に通ることができる。普通の鼻音は、みなこゑを伴ふものであつて、こゑが鼻腔および口腔の一部に共鳴域を得ることによつて、特色ある音色をおびる。鼻音としての共通の音色がいちじるしくあらはれ、口腔における調音域の與へる音色の差異が少いのは、共鳴域の大部が鼻腔によつて占められてゐる事情による。ゆゑに、それ〴〵の鼻音の間に、たがひに代用されるやうな發音上の現象がごく普通に存立するのである。かく有聲であるのを原則とするが、隣接のおんの調音運動、影響によつて、種々の程度の無聲化を生じる。そのつひに全く無聲となつた場合には、耳に*f*または*s*樣の擦音として感じられるのみである。

純粹有聲の鼻音にあつては、他の多くの子音とちがつて、その音色がすこぶる樂音的であり、その點で母音にもつとも近いといふ關係がある。この特質によつて、鼻音が音節形成に際して、母音に準じて重きをおかれるのである。

國語にあつては、五十音圖中の「ナ」行および「マ」行に鼻音があり、また東京語において鼻音的「ガ」行があり、それ〴〵破音〔t〕・〔d〕や〔p〕・〔b〕や〔k〕・〔g〕に相應じるものであることは、明かにされてゐたが、語尾などにおける「ン」がどういふ鼻音であるかは、久しく問題として殘されてゐたのである。

ヨーロッパ人にとつては、日本語の「アンアン・インイン・カンイ・ホンオヨム」などのやうな

連音を正當に發音することが、たいそう困難である。大抵この場合にもこの鼻音を〔n〕として、鼻音と母音との連りを〔na〕・〔ni〕・〔no〕のやうにせずには發音ができないやうな有樣である。かくて、この鼻音が國語に特有のものであるとは、容易に察せられるが、「このおんを分析し類別することには、なか〳〵困難を感じる」とエドワーヅも述べた[21]やうな次第で、これを正しく理解し得なかつたのである。

鼻音の種々

口音〔b〕に對應する唇的鼻音は〔m〕であつて、現代の國語では「マ」行の諸音節にあらはれる外、「アンマ・シンブン」のやうに、次に〔m〕・〔p〕・〔b〕と連る場合の「ン」がそれである。一般に鼻音がさうであるやうに、同じ調音域における破音〔p〕・〔b〕とくらべると、調音のきびしさがもつとも弱く、唇の緊張が少い。「アンマ」〔amːa〕のやうに〔m〕が長い場合には、接觸面の壓力は高まるのである。國語にあつては、この鼻音は十分有聲であつて、無聲化を生じるやうな場合はほとんどない。

イギリス語などには、この鼻音がつぎに來る〔f〕の影響で、齒唇的鼻音〔ɱ〕で代用されることがある。

口音〔d〕に對應する前舌的鼻音は〔n〕で、國語では「ナ」行の諸音節にあらはれる外、「カンタン・イン

ド・テンネン」などのやうに、次に〔t〕・〔d〕・〔n〕が來る場合の「ン」がこれである。閉鎖面の壓力については、〔m〕について述べたのと同樣のことがある。有聲の點もまた同樣である。

「ニ」においての調音域が後方にすべり、したがつてその音色の特異性を生じることは、注意すべきものがある。實用上これを〔ñi〕であらはす。

口音〔g〕に對應する後舌的鼻音は〔ŋ〕である。國語では、これと母音との接合した音節を、語頭以外に用ゐる地方とまつたく用ゐない地方とがある。東京語ではこれを用ゐて語頭以外の「ガ」行の音節を發音する。もつとも語彙によつて少しの例外がある。すなはち「ゴゴ（午後）・ハガキ」のやうな語は、東京語としては〔goŋo〕、〔haŋaki〕であるが、「ゴジューゴ（五十五）・ガラガラ」などのやうな特別の場合には、二番目の「ゴ・ガ」の子音が鼻音〔ŋ〕でなくて口音〔g〕である。

かく〔ŋ〕は、東京語において語や句のはじめにはあらはれないのが通則であるが、接續詞として用ゐた「が」は、その前にいきの切れめがあつても、意味の上からつゞくといふ心理的な關係から、やはり〔ŋa〕となる。

この鼻音は、ゲルマン系の言語によくあらはれ、フランス語にはないが、その他のローマンス語によく聞くものである。普通の正字法では *ng* であらはされてゐる。イギリスの *singer*〔siŋə〕、ドイツの

lang [laŋ] イタリアの *tengo* [tɛŋgo] などがその例である。このいづれの言語でも、この音は語の頭音としてあらはれることがない。イギリス語 *length* のやうな場合に次の無聲子音に影響されて多少無聲化することがある外は、一般に有聲である。

鼻音[ŋ]の調音は、やはり三つの時相に分解して考へることができる。その中の時相、すなはちしまりの過程では[g]とちがつて、こゑを帶びた呼氣が鼻から自由に流れ出ることが出來るから、おんが續いてゐる。おしあけの過程で鼻からも口からも呼氣が出るのが、普通の鼻音である。しかし中の時相の途中で、鼻腔への通路も閉ぢられると、終の時相すなはちおしあけの過程では、普通の破音のおしあけと同樣になる。この場合を普通實用音字で[ŋg]のやうにあらはすが、口腔内の調音は、たゞ一回で行はれるのである。イギリス語 *finger* [fiŋgə] における例がそれである。この際中途でこゑも止むときは、普通實用音字で[ŋk]のやうに示される場合、すなはちイギリスの *link* [liŋk]、ドイツの *Funke* [fuŋkə] イタリアの *banco* [baŋko] などのやうになる。

この關係は[nt]・[nd]や[mp]・[mb]でも同樣である。いづれにしても口腔における調音運動は一回だけである。しかるに、通鼻の部分と、さうでない部分とは、その音色において著しい相異を示すので、かやうな發音は明かに二つのおんとしてうけとられる。かくて口腔におけるおしわけの過程をもたない鼻

音いはゞ入鼻音が、語尾などにおいてしばしば一個の鼻音としての位置を占める。かやうな〔m〕や〔n〕や〔ŋ〕は、共鳴域のやゝ異なるに應じて音色が少しづつちがふものである。

かやうに鼻音の相互間には、音色に共通な特色があり、鼻音として他とすこぶる異なる性質をそなへてゐるので、從來國語では語尾および子音の前のこれらの鼻音をあらはすに、すべて「ン」をもちゐてゐたやうな次第である。

前舌的および後舌的鼻音が軟化（口蓋化）するときは、破音において見たと同様な趨異を生じる。そのうち典型的のものは、フランス語などのローマンス語族の言葉にあらはれるもので、これは普通の正字法で gn（フランス・イタリア）、ñ（イスパニア）、nh（ポルトガル）などと書かれてゐる。これに對する音字は〔ɲ〕である。その調音域は、必ずしもすべて同一ではなく、中について前舌的・後舌的および中舌的のものを區別することが出來る。國語では、破音〔c〕・〔ɟ〕に對應する中舌的〔ɲ〕が、東北方言などにおいて〔ï〕または〔ü〕と連つてあらはれる。

後舌的鼻音〔ŋ〕が次に來る「イ」と連つて「カギ」〔kaŋi〕などの第二音節におけるやうに發音されるとき、その調音域がすこぶる前方にすべり出ること、あたかも「キ・ギ」の頭音たる破音に於けると同樣である。そのためにその音色がよほど中舌的の〔ɲ〕に近づいて來る。一方では「ニ」における鼻音

が、また「イ」の影響をうけて、その調音域を後方にすべらせる。したがつて〔ṅ〕もまたすこぶる〔ɲ〕に近似する。そのために往々「カギ」と「カニ」とが東京語ではまぎらはしくなる。

エドワーヅは、「ニンギョー」が「ニンニョー」のやうに聞えるといふ例をあげてゐるが、これも同じわけである。

「ニ」の子音〔ṅ〕の調音域は、まさに「チ・ヂ」の子音のと同一であり、調音仕方もこれに類して半閉鎖的である。したがつて、「イチニチ」（一日）が調音の節約で「イチンチ」となり、その鼻音はやはり〔ṅ〕であつて、そのおしあけの時相が「チ」の子音と合致する。この場合に〔-iṅi-〕は一回の調音で發音されるのである。「シ」の子音〔ʃ〕のまへでも、鼻音は影響されて〔ṅ〕となること、百人一首のつゞまつた「ヒャクニンシ」のやうな例に見ることが出來る。かやうにつゞまる傾向も、その調音の近似と運動の節約とによるものである。

ンの特性

日本語の「アン・イン・エン・オン・ウン」などの「ン」で示されてゐる鼻音は、フランス人には通鼻母音のやうに、すなはちそれぐ〔ɑɑ̃, iĩ, ɛɛ̃, ɔɔ̃, ɯɯ̃〕のやうに受取られ。イギリス・ドイツの

人には[ŋ]または[n]に類するものと聞かれる。しかし、そのいづれともちがふことは、容易に知ることができる。この鼻音は、國語の音聲においてしばしばあらはれるものであるから、特にこれを取出してその性質を明かにすることが必要である。

この鼻音を出す場合に、まづ[ŋ]を發音するやうにして、それから聲帶の振動がにはかにとまり、こゑを帶びないいきが、しづかに鼻腔を通りすぎるといふのは、エドワーヅの觀察で、これによつて氏は、かりにこの鼻音をあらはすに[ŋ̊]をもちゐたが、これを無聲の[ŋ]と考へたわけでもない。1 神保氏は、「デンワ（電話）。コンイ（懇意）」などの「ン」が[ŋ]に甚だよく似てはゐるが、實はそれともちがふ鼻音で、これをあらはすべきものが國際音字（「萬國發音符號」）になく、これに一番近いものは[ũ]、すなはち「ウ」の通鼻母音であるとした。のち、これを[ŋ]に類する故に、かりにこの音字の上に[˘]をつけてつかふことにするといつて、エドワーヅのにだいぶ似たものを用ゐてゐる。(22)

著者がかねてから用ゐてゐる[ɴ]の音字は、國際音字として從來用ゐられたものではないが、インドゲルマン言語學者の間には、後舌的鼻音[ŋ]をあらはすためにつかはれてゐた。著者がこれを國語における語尾などに來る「ン」の音色を示すのに用ゐてゐるのは、すでに國際音字において[ŋ]が確定的に使用されてゐ、これと混同するおそれもなく、またその形から鼻音たること、および[ŋ]と近

い關係あることを察せしめるものがあるので、すこぶる適當と考へるためである。

すべて氣流の通路が口腔でふさがれて鼻腔からこゑが出るとき、連續した鼻音が出る。口の閉鎖が唇で行はれるときは、鼻音は〔m::〕であり、舌の前方と口蓋とで行はれるときは〔n::〕であり、後舌と口蓋帆とで行はれるときは、あたかも「ン」をのばしたやうな鼻音である。それは、「ウン、承知したなどいふときの「ウン」と書かれるものにあたる。もつとも場合によつては、〔m:〕であることも往々ある。が、口を少しあけていふ「ウン」は、大抵最初から後舌的鼻音であつて、母音「ウ」と鼻音「ン」との連りではない。語尾などの「ン」が性質上これと同じである。ゆゑに後舌的鼻音〔ŋ〕に於ける口腔の閉鎖についておしあけの過程のないおんに外ならない。すなはち前に名づけて入鼻音としたものである。それをあらはすに音字〔ŋ〕をもちゐるのである。前の例で普通に「ウン」とかゝれるのは、長い「ン」すなはち〔ŋ:〕である。

もちろん、〔m〕・〔n〕・〔ɲ〕についても、これを分解して考へることが出來るが、國語の「ン」を理解するために、特に〔ŋ〕をぬき出して考へる必要がある。

いはゆる鼻であしらふ場合の「フン」は、氣音的聲位で發音したもので、〔hŋ〕である。この際頭音たる氣音は、鼻腔を共鳴域として特定の鼻音的臭味をおびること、「ハ」の氣音が「ア」の色合をおびる

と同樣である。時としては〔hm〕とも發音され、「フム」のやうにも書かれるが、聞く方にとつては、あまりちがひがはつきりしない。國語では多く〔hŋ〕が行はれる。

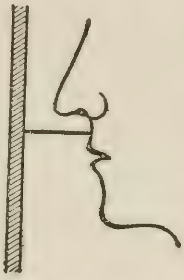
このやうな「フン」を、普通には無聲化した鼻音と本來の鼻音との連りとして說明し、よく西洋の音聲學書にも〔m̥m〕などとしてゐる。しかし、こゑたての仕方があたかも「ハ」などを發音するときと同樣で、漸次に氣音からこゑに移つていくのであるから、「ハ」などと同樣に見るべきものである。「ハ」を〔ɑ̃ɑ̃〕と見るのが不適當であると同樣に、「フム」を「m̥m」とし、「フン」を〔ŋ̊ŋ〕とするのも、適切でない。もちろんこの場合の氣音が鼻音的色合をおびたものであり、一般にこの鼻音がすこぶる母音的性質を示すものであることは、注意すべき點である。これに對して「鼻をクンクンいはせる」といふときのは〔ŋ̊ŋŋ̊ŋ〕である。

普通に行はれる「はなうた」といふ發聲の仕方は、この〔ŋ〕をもつて歌曲の旋律をうたふことであつて、たとへば母音〔ɑ〕をもつて何か旋律をうたふのと同樣である。この際こゑを高くしまたは低くする調子の變化が、すこぶる自由に營まれることを見るべきである。

ヨーロッパ人は〔m〕をひきのばして「はなうたをうたふ」'*humming a tune*' *on a lengthened* 〔m〕といふ。その効果において、日本流の仕方とほとんどかはりがない。

以上の觀察によると、語尾などの「ン」が、唇を閉ぢてゐても出すことのできる點で〔m〕に似、唇を開いてゐても出すことのできる點で〔n〕・〔ŋ〕に似、しかも母音の前に連つて一音節を形成しない點でこれらの鼻音とちがふことがわかる。また唇を閉ぢてゐては、通鼻母音は出せないわけであるから、これが通鼻母音でないことも知れる。なほこれを仔細にしらべて見るのに、次のやうな方法を施す。

(一) この鼻音で氣流はどこから出るか。これを知るために、(イ)唇を閉ぢてこれを發音し得るかどうかを見る。次に(ロ)唇を開いてこれを發音し、氣流が鼻から出るか口から出るか、或はその兩方から出るかを見る。そのためには、圖のやうに顔に鏡を近づけ、口と鼻との境界を厚紙で水平にくぎり、鏡に向つてこれを發音する。鏡の面の曇る方に氣流が出ることを知る。



第四一圖 鼻音の檢査

これによつて試みると、(イ)唇を閉ぢてゐても開いてゐても、この鼻音〔ŋ〕を發音し得ることを知り、(ロ)氣流は口の開閉にかゝはらず、鼻だけから出ることを確かめる。時として兩方から出ることがあると、有聲なら通鼻母音となり、無聲なら鼻音らしい色合をもつ〔h〕のやうなおんになつて、〔ŋ〕とちがつてくる。(唇を閉ぢた場合には、勿論〔m〕も出るから、混同してはならない。)

(二) それでは口腔における調音は、まつたく不必要か。いろ／＼試みると、口腔の前部における調

音は、全く無關係であることを知る。少くとも、舌の前部にあつては、エドワーヅの說いたやうに中性的位置（*a position neutre*）におかれる。そして食物などを口の中につめてゐるときも、なほよく〔ŋ〕を發音することができる。むしろかういふ場合には、他のおんを發し得ないので、この鼻音だけを用ゐて、返事などに際して肯定か否定かをその調子であらはすのである。口腔がこの〔ŋ〕の調音にあづからないことを、これらの事例について見るべきである。

（三） それでは何處で氣流が遮られて口腔に入らないかといふと、こゑの振動がすべての鼻音について、その閉鎖の部位において觸覺で感じられるものであるから、これをたよりにして檢査する。振動感覺が心理學的にどういふものであるかは別問題として、とにかく〔m:〕を長くつゞけてゐると、唇の接觸面にぶる〳〵といふ振動が觸知されることは、自ら試みればすぐわかる。〔ŋ〕においてはどこにその振動が感じられるか。この點に注意すると、口腔の奧の方に感じられることを知る。たゞしこの際のどびこが振動して、鼻音にr樣の反復的なひゞきを與へることがある（音字〔N〕で示す鼻音である）が、それと區別しなくてはならない。またたとへば「ホン」といふ發音をしたまゝの位置で、急に口から空氣を吸ひこむと、後舌と口蓋帆との接觸がはなれるのがわかる。その際に一種の破音を聞くことが出來るほどである。(23)

（四）エドワーヅの擧げてゐる「キン」（金）のやうな例では、〔ŋ〕はかなり短く發音される。しかし「バン」（晩）・「テン」（點）・「オン」（音）のやうな例では、前のよりは長く發音される。この際こゑのあるなしを調べてみる。その簡單な方法は、のどぶえの上に指先をあてゝ振動の有無を觸知するのである。あるひは實驗的に喉頭における振動を描錄する。これらの方法で檢すると、〔ŋ〕がかういふ場合に有聲であることは疑を容れない。もし無聲になるとすると、「晩・點・音」などの例におけるやうに、高さが「ン」において前の母音よりも高くなり一音節を成すことが出來ないわけである。

（五）前にのべたやうに、〔ŋ〕は〔ŋ〕の口腔におけるおしあけの過程を伴はないものである。「エマ」（繪馬）における〔m〕のしまりの時相をのばすと、「エンマ」（閻魔）になるやうに、「ゴゴ」（午後）〔goŋo〕における〔ŋ〕の閉鎖を少しつゞけると、「ゴンゴ」となる。いづれの場合も、中の鼻音は、口腔における閉鎖をそのまゝつゞけるのである。いま「ゴンゴ」における「ン」で示されるおんを「テン」（天）・「キン」（金）・「オン」（音）などの「ン」とくらべると、まつたく同じ音色のものであることが知れる。さらに「ゴンゴ」における「ゴン」だけ發音してとめてしまふと、最初から「ゴン」と發音した場合と同じになる。「ガンコ」を「ガン」までゞとめた場合と、はじめから「ガン」（雁）を發音した場合とくらべても、音聲の上から全く同一であることを見る。これを書くに「ゴンゴ」を〔goŋŋo〕

「ガンコ」を〔ganko〕のやうにすると、その關係がよくわかる。すなはち〔ŋ〕を〔ŋ〕と出破音〔g〕の鼻音化したものとの二部に分解してみるのが便利である。

（六） これを從來國語では「はねる」おん、「撥音」と名づけてゐる。この名稱を全く無意味のものとすることは、「つまる」おん、「促音」の名稱を排して單にこれを長子音と解し、この發音に伴ふ閉鎖の壓力の增大の事實を無視または輕視するのと同樣に、早計であることを免れない。擬聲語においてこの鼻音が特殊の役目をつとめ、ある種の感じをあらはしてゐることは、看過すべきでない。語尾における〔ŋ〕は、特に「キン」（金）のやうな場合についてみると、短く切られるといふ感じがある。エドワーヅの觀察したところによると、はじめ〔ŋ〕に對してするやうに調音して、それから急に聲帶が振動をやめ、舌は中立的位置に直り、口蓋帆が下り、いきがしづかに鼻を通りぬけるといふ。[21]が、その聲帶の振動のやむと共に鼻音は終るのであつて、他の事項は附けたりである。氏はこゝに聲帶が振動をやめるのは、どういふ仕方でするのかを明かにしてゐないが、そのすこぶる急におこるのは、聲門の閉鎖によるのでなくては出來ないことである。實にこの鼻音の終には、聲帶のしめこみによつて、これを中絕することが普通の仕方として行はれる。すなはち〔kiŋ〕のやうなのが實際の發音である。この聲のとめ方によつて、〔ŋ〕は急に終結するが、これによつて「はねる」といふ感じ

がおこつて來ると思はれる。「ホン」のやうな連音を「さゝやき」で發音して試みると、一層その終のかたいこゑとめを感じることが出來る。かく閉ぢられた聲帶の內側に呼氣がつめかけて、その壓力が高まつた場合には、おそらくは軟骨聲門をぬけていきとして鼻を通る。あるひは、こゑがやんでから暫くして聲門が開かれるから、少しの間をおいて、時としてこのいきの通るおとがするのである。またそれによつて、この鼻音が次に來る母音と結びついて音節を構成することをしないのである。「本をよむ」などは、[hoŋʔo……]となるので、鼻音が次の母音と結びつかないわけである。

一六　流　音

流音とは何

古い用語で流音といふのは、有聲のr類およびl類の子音をいふ。こゝにこの名目を用ゐるのは、國語の「ラ」行の子音を論じるために便宜であるからで、普通に近來の音聲學では、この二種を分けて說いてゐるが、その間に相似たところもあり、關係するところが深いのに着眼して、一緒に說明するを便とするのである。あるひは、これを擦音の一種と見て、その中に組入れてゐる人もある。ここには、有聲・無聲のr類およびl類子音の總稱として流音の名稱を用ゐることにする。

この子音は、それ〳〵の言語において種々の趨異を示してあらはれてゐる。すなはち、事實上いろいろ異なるrおよびlがあるわけである。その典型的なものについて見ると、判然として區別を立てることができるのであり、各種の流音についておほむねそのr類に屬するか、またはl類に屬するかを定めるべき目じるしがおのづから備はつてゐる。しかし、またその相近いものになると、幾分かづつ、兩方の性質をもつてゐて、いづれか一方に片づけることが困難な、或は無理な場合もある。かやうな種々の流音を、その相似の序列に排列するときは、一聯の系列を得るに至るであらう。

その典型的なものについては、區別が明かである。イギリス・ドイツなどの言語においてrとlとがはつきり分けて用ゐられ、舌の調音による場合について見れば、rは舌のへりを以てし、lは舌の側面から氣流を通すといふことにきまつてゐる。rには必ずしも舌があづからないのであつて、調音域によつて名づけることが出來ないものであるが、lでは舌の兩側または片側のへりが調音にあづかるので、側音の名がある。次にその普通に行はれるものを擧げて、その性質を考察し、進んで國語における「ラ」行の子音がどんなものであるかをしらべよう。

顫音

東京語などのいはゆる卷舌で發音した「ラ」行の子音では、口蓋の前部に向つてゐる舌のさきが反復運動を營むのがわかる。普通に舌尖のrと稱し、音字〔r〕をもつて示すものがこれである。その振動は、もちろん舌の彈性により個人的にも差異があるが、實驗的測定を試みたドンデルスによれば一秒に一五—三九回、フィエートルによれば二〇—三五回であるといふ。口腔はこの舌の振動によつて反復して開きまた閉され、氣流に斷續が生じる。かやうに反復的振動を特色とするので、この種の流音を、特に顫音（振動音）といひ、また輾音とも名づける。談話に用ゐられる實際の場合には、振動の回數は二回以上に及ぶことが少く、せい〴〵三回で、時には一回のこともある。古代ギリシア・ラテンの言葉の正常のrがこれであつたと考へられ、現代語にもイタリア・ロシアなどの言葉に著しくあらはれてゐる。ドイツ・フランスではこの子音のかはりに、普通には次に述べるのどびこの顫音がひろく使はれてゐる。しかし、ドイツの舞臺發音として悲劇の俳優や歌劇の歌手の用ゐるべきものは、この舌尖の〔r〕であつて、これがドイツ語のrの標準的發音と定められてゐる。

これと同じやうな位置で、しかも舌のさきが振動せず、呼氣がつゞいて舌面と齒ぐきうらとの間から流れ出るとき、一種の流音が生じる。これはイギリス語にしば〱見るもので、これを音字〔ɹ〕であらはす。南イングランドで母音の前のrを發音するときの普通の仕方である。

後舌が口蓋帆に近づいて狹い通路をつくり、同時にのどびこ、または口蓋帆までも振動するとき、のどびこの r といはれる顫音を生じる。これを音字〔R〕であらはす。前の位置で振動をおこさない場合に、また別種の流音が出る。これは實際にはひろく行はれてゐるもので、ドイツのある地方で、*Wagen* と *waren* とを混同するのは、この流音が後舌的擦音〔γ〕と近いからである。またかういふ流音がつひに隣接の母音のうちに沒入するにいたることは、音聲轉化においてしばしば見るところである。

この他にも r 類の流音があるが、いづれも普通に言葉に用ゐられるものとはいへない。

側音

側音すなはち l 類の流音は、口腔内でその兩側または片側から氣流を通じ、中央でこれを遮るものであつて、その閉鎖の出來る部位と接觸面の廣さとの異りに應じて、いろいろの變化を見る。これらはみな正字法で、l であらはされてゐるのである。

フランス語やドイツ語における側音〔l〕では、舌面がほゞ平らかで、舌の後部が一番奥の左右の臼齒の齒ぐきに觸れ、舌のさきが上のまへば（門齒、醫家のいふ「切齒」）とその齒ぐきとに向つてつき、

その接觸面がおほむね廣くない。普通に有聲である。これに對してイギリス語における側音〔l〕では、舌のさきが齒ぐきに向ひ、フランスなどのよりも後方で接觸し、舌の面がやゝ凹んで匙のやうになり、舌の後方が高まつて兩側の口蓋帆につくことと母音〔u〕におけるが如くである。

側音についても軟化（口蓋化）の現象が見られるが、かやうな側音はローマンス語に多い。すなはち正字法ではイタリア語で*gli*、イスパニア語で*ll*、ホルトガル語で*lh*をもつてあらはされてゐるものがこれであつて、音字〔ʎ〕はこの側音をあらはす。フランス語では、もと*ill*がこれをあらはしてゐたが、十八世紀末頃から轉化してパリ附近その他では〔j〕になつてしまつた。

スラヴ語における側音〔ɫ〕では、舌背が硬口蓋の後部や口蓋帆とも接觸し、兩側から呼氣を通すのであつて、ロシア語では子音の前、後舌母音の前および語尾にある*l*がかう發音される。その音色からいつて、すこぶる母音〔u〕に似たところをもつものである。

ラ行の子音

さて、國語における「ラ・リ・ル・レ・ロ」の諸音節の子音は、普通には*r*類の流音と考へられ、ローマ字がきにも*r*の字母が用ゐられてゐる。この子音とイギリス語における〔ɹ〕との類似がしばしば

說かれたものである。わが國でイギリス語が普及してゐ、その關係から從來國語の音聲考察もその影響を蒙つてゐる傾がある。ヘボン式ローマ字がきにおける *r* 字母の使用が、多少先入見をもたらした形跡もあると思ふ。その以前にはイスパニア人やドイツ人などに、*l* 字母を用ゐて國語の「ラ」行の子音をうつした者が少くなかつたのである。

エドワーヅは、この子音が「ラ」ではつねにイギリス語の *ran*〔ɹæn〕*right*〔ɹait〕における「まかない」〔ɹ〕に類するものであり、「レ」および「ル」においても、おほむねさうであると說いた。すなはち母音「ア・エ・ウ」の前では、ほゞ *r* 類の子音と認めたのである。ところが、「リ」の場合すなはち母音「イ」の前に來るときは、その調音域がイギリス語における〔d〕に接近することを說いて、「耳にきくところでは、摩擦のひゞきのごく少いこの種の *r* の變種は、破音〔d〕と區別がない。〔rjo:〕（龍）・〔medeto:〕は、間々〔djo:〕,〔mereto:〕と聞える」といひ、さらに「ロ」の場合、すなはち母音「オ」の前に來るときには、調音がすこぶる變つて〔lo〕のやうに聞えると述べてゐる。が、その調音を側方的とすることを肯んぜずに、「呼氣の通路は中線に沿うて開かれ、兩側では閉されてゐる」と說いてゐる。(5)

しかし一方には、國語の「ラ」行の子音を、むしろ *l* 類のものと見るべきである、あるひは、

*r*と*l*との中間にあるものであると考へた學者もなくはなかつた。[36] 元來かやうに、これを*r*とするか*l*とするかは、科學上格別大切な事項ではない。無理にこれを一方に組みこむことは、實用上にはともかく、研究上には必要のないことである。その子音の性質を明かにすることが、先決問題である。こゝに問題とするのは、東京語における、巻舌の〔r〕でない、普通の「ラ」行子音である。

こゝに「ラ」行の子音とイギリス語の〔ɹ〕(「まかない」齒ぐきうらの*r*)とを比較して、その異同をしらべよう。「ラ」行の子音では、舌のへりが一旦齒ぐきうらに觸れるので、この點で〔ɹ〕とちがふ。そのふれ方は、破音におけるほど力のはいつた仕方ではなく、ごく輕いのであるが、とにかく舌のへりまたはさきが、齒ぐきうらの出ばり（齒槽突起）の前後に觸れるのである。その調音域は、イギリスの*r*すなはち〔ɹ〕よりも前方であり、前齒に近いといはれてゐる。〔ɹ〕では、スウィートによれば、舌の前部と口蓋との間に〔θ〕〔s〕におけると同じ形のすきまが出來るといふ。時として舌が齒ぐきうらの邊にふれる場合もあるらしいが、いつもさうなのではない。イギリスの〔ɹ〕に摩擦のひゞきが少く、一體に母音めいてゐるとは、一般に認められてゐることであるが、「ラ」行の子音にもこのことが觀察される。〔r〕では舌面が少し凹形になるといふが、「ラ」行の子音では、普通にはそれがほとんど見られない。舌のさきを巻きかへすか否かは、「ラ」行の子音にとつて、さほど大切なことではない。イギリス

の〔ɹ〕では、いはゆる「まかない」*inverted* のであるが、間々舌のさきが上へ向つて曲ることがある。「ラ」行の子音は、次の母音の異なるにつれて、調音の部位が同一でない。舌の動き方もちがふ。調音域だけについて考へると、〔t〕・〔d〕・〔n〕のときと多少前後のちがひがあるが、同じ位置で破音を出すことも流音を出すことも出來るから、舌の觸れる位置が差別の目じるしとはならない。

かくて、この子音の特性は、その運動における特殊の樣式にあるとしなくてはならない。この子音において、舌のさきが齒ぐきに觸れるのは、破音などゝちがつて、口腔内で氣流を遮るためではない。一旦觸れて氣流に對して狹まりを作つたのち、舌のさきは跳ねかへつて急に氣流の通路を廣げる。多少舌面が凹むことのあるのも、この目的のために外ならない。破音における閉鎖は、舌面を底とし口蓋を天井とする嚢をつくることによつて遂げられ、呼氣は中線に沿うて進み、舌のさきの接着してゐる部分で突破が行はれるから、その部分に壓力を觸知する。しかるに「ラ」行の子音では、舌が全體として平たくならずに少し長くのび、左右の兩側において齒ぐきに接觸せずに氣流のとほる隙間を殘してゐる。この點が特色であつて、〔d〕の調音をしながら、〔d〕の兩側を左右の齒ぐきからはなすことを試みるならば、氣流が通りはじめると共に、この子音に類する一種の流音を聞くに至るであらう。これはすこぶる母音的であつて、lの一種に外ならないが、また「ラ」行の子音に類するものと認められ

るのである。

この氣流の通路における狀態は、イギリスの[ɹ]ともかなり似てゐる。スウィートによれば、[ɹ]は後方で調音された[ð]である。すなはちそのあきが[ɹ]と[ð]とでは全く同樣であつて、たゞその調音域に差があるだけであるといふ。しかし、イェスペルセンの說くところでは、[θ]・[ð]の場合には、あきが大體口腔の兩側におけるよりも中線に沿うて廣く、したがつてこゝに多量の呼氣を流出させるが、[ɹ]の場合には、その反對に中線に當つて舌の厚さが增してそれと口蓋とのつくるあきが狹く、左右に行くにしたがつてあきが廣くなるといふ(17)。これが一層尤もらしい。この點で「ラ」行の子音は、また[ɹ]に似てゐる。[ɹ]における舌の口蓋への接近が一層多くなり、つひに觸れるに至つたものとも考へられる。

かく「ラ」行の子音が、その調音域について見ればlに似、調音運動について見ればr類の流音に似てゐることを見るのである。これと同樣な流音を、東ノルウェーおよびスウェーデンの言語に見出すのである。これはいはゆる「厚いl」としてlの字母をもつて示されてゐるもので、スウェーデン語O.a などのlがそれである。

この子音についてストルムの記載するところを見るに、「舌尖が中部口蓋に向つてこれに接觸することなく曲げられ（ひつこめられ *zurückgezogen*）、つぎに急に一擧に前口蓋に沿うて再び舌尖の正常

の位置に復する。その際多くは最後の瞬間に舌尖が前口蓋をちよつと撫でゝいく（*Flüchtig berühren*）。これはしかし必ずしも常に然るのではない。その接觸がつよいときには口蓋頂的*d*がおこる。かうして種々のおんのニュアンスがつぎ〳〵にあらはれ、最初はむしろ擦音的口蓋頂的*r*であるが、次の瞬間には、間々*d*の氣味のある口蓋頂的*l*がおこる。このおん（のニュアンス）は引續いてあらはれるが、これを聞くに際しては、一つの混和したおんに融合する。私たち（ノルウェー人）にはむしろ*l*の印象を與へるが、外國人にはむしろ*r*のやうに聞える。外國人がこれをまねると、あまり*r*の方になり過ぎる。……このおんも比較的に瞬間的で、引延ばされたり重なつたりすることはない」といふ。(28) この記述における調音仕方に至つては、國語の「ラ」行の子音とすこぶるよく似てゐる。

またスウィートの觀察するところを聞くに、「こゝに機能的にも音質的にも純粋なわたりである一群の*Flap-consonants*がある。これはその發生に何等の定まつた點（部位）が全然ないものである。東ノルウェーおよびスウェーデンの「厚い*l*」といふのがこの種のおんである。これは舌尖を折りかへした*r*が、歯ぐきうらを舌尖で瞬間的に觸れながら舊位置に復するもので、折りかへされた時からつよい顫音を出して終るまでの間、舌は絶えず前方へ動いてゐる」と述べてゐる。(29)

さらにジーヴェルスは、まかない歯槽的*r*と*l*との中間音をパプア人および*Krelenser*から聞いた

齒を記載し、またノルウェーの「厚いｌ」に類して、たゞ前方で調音し、殊に折りまげない舌尖でするものをソマリ語で聞いたといふ。(30) カルツィアは、ｒの音色を帶びた口蓋頂的ｌを東インドやニューギニアの土人語に聞いた。(31) この種の流音を一つの種類とすれば、「ラ」行の子音もまたこれに屬すること明白である。

實に調音仕方の點に「ラ」行の子音は特色をもつてゐる。すなはち「ラ」の場合について見ると、初めある程度の舌と口蓋とのあきから出發して、舌尖は前口蓋の前端から突起にかけて輕くすべつていく。かくて漸次母音の口形に移るのである。その時相を三つに分け、(甲)舌尖が口蓋に觸れるまで(乙)觸れてゐる間、および(丙)はなれるとき、とすることが出來る。甲では、舌尖は多少後方にまげられるか、または後退して前後に短く厚い肉の塊の中に首をひつこめた形である。この位置は、多くの場合には、この子音の前に來る母音のわたりと合致する。次に舌尖がそり、またはのびて舌を長く平たくするために前へ動き出す際、口蓋前部にさはるのである。この乙の時相において、舌が口蓋をすべるといはれるやうに、接觸部が前方へ移動する。(舌面についていへば、舌尖から多少後方へ移るまたはひろがるともいへる。)これは「ラ」のやうな場合であるが、「ル・ロ」などの場合には、舌尖がかへつて前方から後方へ口蓋をすべるやうなこともある。そして前に述べたやうに、舌の兩側にあき

があつて氣流は遮られてはゐはい。しかし、普通のｌとちがふところがあるのは、ｌでは舌を細長くのばして、しつかり口蓋に接着するが、「ラ」行の子音には能動的に舌をのばすとか幅をつめるとかいふことをしないからである。ゆゑに、ｌでは兩側のあきがかなり大きく、從つてねいろが一層母音に近い。さて、丙の時相、すなはち舌尖がこの接着からはなれる際に、ｒに特有なひゞきを生じて、時としては［d］に似た感じをも與へる。次に來る母音が「ア」のやうなあきの大きいものであるときは、このひゞきは明かであるが、あきの狹い「イ」のやうなものであるときは、これが明かにひゞくといふわけにいかないことが多い。また「オ」のやうな母音が次に來るときは、多く舌の運動が前から後へと向い、舌尖は齒ぐきうらから口蓋前部へかけてすべる。その際舌のすべる範圍が他の場合よりは少くなり、はなれる際に十分ｒの特色を發揮することが出來ない場合が多く、つひにエドワーヅが、「ロ」について見たやうに、ｌの印象を與へるなだらかな流音になる次第である。

かやうにラ行の子音は、東京語にあつては、普通は舌尖がかるく口蓋をなでるといふ運動をもつて特色としてゐるが、少し不用意に發音するとき、往々舌尖が口蓋に觸れずにその位置をかへることもある。その場合には、これが母音のわたりのやうになり、一層イギリス語の［ɹ］に類して來るわけである。これと反對に力を入れて調音するとき、舌を曲げたりつよく口蓋におしつけたりするため、往々

〔d〕に近いおんを出すやうになる。

さてこの子音を音字〔ḷ〕であらはすことが出來る。（プレトネル氏のやうに〔ɹ〕を用ゐるのはいゝことと思ふが、現在のところ書くにも讀むにも不便の嫌がある。）さうすると、たとへば「スル」といふ場合に〔sɯ̈ḷɯ〕ではなくて、〔sḷɯ〕または〔sḷ〕となつてしまふことが少くない。この場合に〔ḷ〕が舌尖をはなさずに發音され、本來の〔l〕に一層近づく。殊に「スルンダ」のやうな連音では〔sḷnda〕となり〔ḷ〕の舌尖が口蓋をはなれずに、すべつて位置をかへ、そのまゝ次の〔-nd-〕につらなるのである。して、舌尖をはなさずになほよく「ウ」に似たおんを出し得るのは、また〔ḷ〕の一特色であつて、この點を捉へて母音的といふことも出來る。またこの例において、容易に〔ḷ〕がぬけおちて「スルンダ」が「スーンダ」または「スンダ」に轉化する東京語における傾向も、かうした調音仕方にもとづくのである。

註(1)Rousselot: *Principes de phonétique expérimentale*, Tome I, Nouvelle éd. p. 511. 「これは筋肉組織の緊張によつて、はじめでもをはりでもなく、中央で無聲化する有聲音である。こゝにある二つの描錄圖が筋肉緊張の增加さ「こゑ」の「ひきわたり」との間の關係をよく示してゐる」（意譯）。東京語においては、有聲子音のいはゆる「促音」がまつたくあらはれない。南總地方に往々行はれる有聲子音の「促音」、たとへば「ソッダラ」（それなら）のやうな場合に、この種の中無聲を見ることが出來よう。

(2) Rousselot: *Op. cit*, Tome I. p. 618 ff.

(3) 手あたり次第に例をあげると、エドワーヅはドイツで聞く〔F〕に少し似てゐるといふだけであるが（*Op. cit*, p. 41)、岡倉氏はこれだと斷定してゐる（岡倉由三郎『英語發音學大綱』明治三十九年、八三頁）。他の諸書は、今でもおほむねこの見解を蹈襲してゐる（たとへば加茂正一『萬國發音記號手ほどき』大正十三年、四五頁）。神保氏は、はじめこの見解をとつた（神保格『邦人本位英語の發音』大正十年、四八頁）が、のちには「フタツ(二つ)などのフでかく音にFのやうな音を發することがある」（同氏『國語音聲學』大正十四年、四七頁）といひ、また「特殊の場合には純粹のFを發することがある」が、「フデ(筆)フネ(船)フジ(富士)などでは純粹のhの音である」(同書七七頁)とし、以前の見解を改めたやうである。著者は在來の見解に反對して、これを謬見とし（『國語の發音とアクセント』前出、九一頁）、別の見解から「フ」の子音の說明を試みた（同書、一〇四頁）。これについて石黒魯平氏の批評が雜誌『國語教育』に載つたといふが、まだ見る機會を得ない。氏の近著においては、この邊の說明が不鮮明である（『國語教育のための音聲學』、五七頁）

(4) 唇の位置が「ウ」と大體同樣であることはエドワーヅが記してゐる（*Op. cit*, p 37)。

(5) Jespersen: *Op. cit*, p. 45, Anmerkung.

(6) これはイタリア語における半閉鎖音をあらはすためにパンコンツェリカルツィアが用ゐてゐるものである。G. Panconcelli-Calzia: *Italiano*, Leipzig 1911, pp. 5-6.

(7) 神保氏の〔h〕の說明には、この邊の混同があるとおもふ（同氏『國語音聲學』前出、八〇―八一頁）。著者が『國語の發音とアクセント』において試みた說明は、名稱のえらび方が適當でなかつたゝめに誤解を生じた。〔h〕が「母音の無聲化された

ものと同一視すべきでない」ことを說いて、しかも「これは「いき」の母音といふべきでもあらう」と名づけようとしてゐる（同書一〇二頁）。また「氣息的聲位」の名稱もよろしきを得ない（同書一二九頁）。ここに名稱を改めて、「いきのおん」といふのは *die geblasenen Lauten* を、氣音といふのは *die gehauchten Lauten* を、「さゝやきのおん」といふのは *die geflüsterten Lauten* をさすことにする。なほ氣音的聲位については、前述のほか、E. Barth: *Einführung in die Physiol., Pathol. u. Hygiene der menschl. Stimme*, 1911, p. 207 參照。

(8) イエスペルセンの記載による。

(9) [h] を沈默させる傾は、イングランドの方言に著しいといふ。イギリス人が「そのんをおとす」'drops his h's' のは、ロンドン人ばかりでない。特にこれを避けるために標準語にんのないところにもこれを入れて發音する 'misplaces his h's' とはおもしろい。

(10) *Op. cit.*, p. 39.

(11) Edward : *Op. cit.*, p. 39. § 77.

(12) Hofmann: *Japanische Sprachlehre*, 1877 などにも *f* が用ゐられてゐる。

(13) *Op. cit.*, p 41.

(14) *Op. cit.*, p. 13-14.

(15)『英語發音學大綱』前出．七〇頁。

(16) Sievers: *Op. cit*, p. 139. 氏も場合によつて *Fortes* と *Lenes* との中間のものゝあらはれることを說いてゐる。(*Ditto*,

p. 72)

(17)Edwards: *Op. cit.*, p. 27.

(18)*Op. cit*, p. 27. Gauntlett の說明はをかしい。"There is a slight difference between Japanese and English *t*. In the former, the tongue is placed against the division between the hard palate and the gums, but in English the tip of the tongue is placed at the point where the upper teeth enter the gums, or trifle higher." (*Op cit.*, p 18)

(19)イェスペルセンはこの種の破音をあらはすに、國際音字〔c〕・〔ɟ〕の二つだけでは不足を感じて、〔c^1〕・〔c^2〕のやうに區別して用ゐてゐる。*Op. cit*, p. 42.

(20)Techmer: *Phonetik*, 2Bde, Leipzig 1880.

(21)*Op. cit.*, p. 31.

(22)『英語の發音』前出、三八頁。同氏『國語音聲學』前出、七二頁、「特殊の通鼻母音」の項參照。

(23)神保氏は「ホをよむ」の「ホンオ」について觀察して、「ン」では後舌面と軟口蓋とが近づいて「ほとんど閉鎖をつくるが、中央の部にわづかの通路を殘す」點で〔ŋ〕とちがふと考へ、「ウ」の通鼻母音と見ようとするに傾いてゐる（『國語音聲學』七二頁）。鼻をふさいで發音しても「ホンオ」の場合に「息がつまらない」ことをその證據としてゐる（『英語の發音』三九頁）。しかるにこの場合には、他にも往々あるやうに通鼻的「ウ」を「ン」に代用してゐるのである。不自然にも鼻をふさがれたゝめに、息のつまらないやうに口へ呼氣をとほすのである。鼻のつまつてゐる人は「ホンゴー」をも「ホウゴー」といふことがあるのと同樣である。Gauntlett も「ん」の文字（の示すおん）を說明して "In this letter, it

must be noticed, the voice passes through both the mouth and the nose at the same time." としてゐるが、口の開かれた調音の觀察にもとづく誤解であらう。(前出、一二頁)。Pletner の見解も明瞭を缺いてゐる。(前出、四三—四四頁)。

(24) *Op. cit.*, p. 31 'Pour former ce son semi-consonne ou semi-voyelle, on commence comme pour (ŋ) faible japonais, puis très rapidement les cordes vocales cessent de vibrer, la langue tombe à la position neutre, la voile du palais est baissé, et l'air souffle passe doucement par le nez.'

(25) *Op. cit.*, pp. 84-85.

(26) Sweet: *Handbook of Phonetics*, Oxford 1877, p. 85. Ellis: *On Early English Pronunciation with special reference to Shakespeare and Chaucer*, 5 vols, London 1869 ff., IV. p. 1133.

(27) Jespersen: *Lehrbuch* (前出), p. 87.

(28) Storm: *Englische Philologie*, Heilbronn 1881, 2I Leipzig 1892, p. 42. なほ Sievers: *Op. cit.*, p. 125; Jespersen, *Op. cit.*, p. 41, Anmerkung 參照。

(29) Sweet: *Primer of Phonetics*,[3] Oxford 1906, p. 64. また *Handbook*, p. 21; *Swedish Sounds*, p. 14 (*Collected Papers* 中にあつたと思ふ) 參照。ルンデルも「厚いl」において、舌の位置が、口蓋に對して一定でなく、始終かはることを說いてゐる(ストルム、前出、四二頁脚註參照)。

(30) Sievers: *Grundzüge* (前出), p. 125.

(31) Panconcelli-Calzia: *Die experimentelle Phonetik in ihrer Anwendung auf die Sprachwissenschaft*,[2] Berlin 1924, p. 81-2. (Fig. 114).

第六章　調音の基底

一七　調音における一般的傾向

音聲機能の全體的傾向

ある特定の言語において、發音・發聲の器官の運動および位置について、おのづからその言語に特有な傾向を示すものであり、これが言語の習得についてすこぶる大切な事項であること、またこの全體的傾向を調音の基底と名づけることは、すでに說いたところである(「音聲の生理」參照)。

それ〴〵の言語にあらはれるいくつかの單音は、もと有機的全體たる音聲の流動について、分析抽出した結果であつて、單に種々の異なつた音聲を方々から寄せあつめたものではない。ゆゑにその個個は全體的發音傾向のうちにおいて實現されるものである。すなはちその一群の單音は調和ある全體を構成するところのものである。かやうにして、それ〴〵の言語に音聲上の全體的特徵があらはれて來る次第であつて、その音聲機能に着眼して、或は各の言語はそれ〴〵の調音の基底をもつといひ、或は獨自の不偏位置または機能的基點を有するといふ。さらに直截にいへば、音聲についての「くち

のきゝ方」または「くちのおき方」(ストルムの〝Mundlage〟)がおの〳〵特色をもつてゐるのである。

各個人にそれ〴〵特有の音聲の習慣があり、その話しぶり全體に特色を與へるやうに、各國人または各地方人の間には共通な傳統的な音聲傾向があつて、その言語、その方言に國民的あるひは地方的色彩をあたへるのである。その全體的傾向は、容易に直覺的に味讀されるのであるが、これを科學的に理會し記載することはすこぶる困難である。まことにルヂのいつたやうに、調音の基底とはいふが、これは一つの抽象的な名稱であり、舌または發音器官の一定の位置を指していふのではなくて、運動傾向の協合をいひあらはすのである。(1)

ヨーロッパ語の調音傾向

たとへばイギリス語についてこれを見るに、舌をひらたくかつ低くし、その前部をあけ後方にひき、唇をなるべく中立の位置におく。舌をひらたくする傾向から、その母音は調音がきびしくなく、舌を低くする傾向から重母音の副音が不明瞭になり、舌を後にひく傾向から前舌母音の構成に不利を生じ中舌母音を多くあらはすに至る。唇の中立的な位置をとる傾向から、圓口母音がすこぶる少いといふ結果を生じた。

フランス語について見ると、よほどこれと反對な趣がある。舌が高くもち上り、またできるだけ前進し、脣も十分にはたらく。そこで、母音においても子音においても、調音のきびしい、はつきりしたものが出來る。前舌的語音は、いはゆる齒的になり、圓口母音もすこぶる多くあらはれる。

ドイツ語における傾向が、ほゞこの二つの言語におけるものゝ中間にあるといふ。

かやうに各國語について大體の傾向を見ることが出來るのである。わが國語について見るならば、どういふ特色が擧げられるであらうか。

國語の調音傾向

前に述べたやうに、國語においては、脣の調音がごく少く、母音については、「オ」の場合の圓めもさほど著しくなく、「イ」などにあつては、かへつて上下にひろげるやうな有様である。脣の子音も、すでに見たやうに〔p〕・〔b〕ともにあらはれ方がすこぶる少く、たゞ〔m〕が比較的に多いだけである。これらにおいても、調音はきびしくない。脣の摩擦音に至つては、ほとんど偶然に出來る外は、東京語はもとより、國語の大部分において、まづ行はれてゐないといへる有様である。

これをイギリス語の場合と比較すると、舌の位置は前方に進み、かつ高くなつてゐる。多くの場合

に舌の筋肉が著しく緊張することもないので、舌の形は大抵ひらたくなつてゐる。舌のさきが鋭く尖らされて歯ぐきや歯のうらに向ふやうな調音は營まれず、むしろつねに鈍く厚くなつてゐて、自然の位置におかれるか、或はむしろ下へ向ふ傾がある。口腔の共鳴域は、むしろ横に幅の廣いものになりがちで、ドイツ語の〔u〕・〔y〕・〔ʃ〕などの場合に見るやうな、口腔全體を前後に細長くする調音は、國語の發音には見られない。

後舌および舌尖を用ゐることは、ごく少くて、多く使用されるのは、舌の中部に近い方である。調音域はドイツ・フランスなどの言葉におけるやうに前後にひろく亘ることなく、口蓋に向つての舌の接近の仕方にいろ〳〵の細かいちがひがある。

空氣の通路の遮斷にあたつて、舌面を比較的ひろく接着させるのは、エドワーヅも見たやうに、國語の調音における一つの特色であらう。[2]

註(1)Roudet, Leonce: *Elements de phonétique générale*, Paris 1910, p. 37.

(2)*Op. cit*, p. 83.—'Pour fermer le passage de l'air, on emploi les parties plus larges de la langue plutôt que la pointe elle-même.'

第二部　連音論

第七章　語音の結合

一八　語音のあらはれ方

第三章乃至第六章において述べたところは、語音を分析してその最も原子的な單音を抽象析出し、單獨に調音された「おん」についてその性質を論じたのである。すなはち、ある一定の條件を設定しその條件の下において語音の示す種々の性質を見るものであつて、その際における着眼點は專ら音質の方に向つてゐた。かやうな單純化と抽象とは、研究上必要な手段であるが、これらの語音も實際生活にあつては、かく單獨にあらはれるのではなくて、種々の連繫において、さま〴〵の成形をあらはすものなのである。

かく構成された單音の系列を連音と名づける。

一般に「おん」のあらはれ方を考へるに當つて、まづ考察を施すべき點は、單獨に發音された語音

のおこり具合（はじめ）と消え具合（をはり）とである。實際にある單一の語音を發音するに當つては、單に音質といふこと以外に、種々の能因が同時にはたらくのであつて、その經過について見れば、これは如何やうに始まり如何やうに終るかの過程の姿を示す。國語の語音において、この點に何の特色があるか。この問題を考察するのが、第一の課題である。次に接合した連音においての語音の間の移りゆき、すなはち「わたり」に關する考察が第二の課題である。改めていへば、一つの音から他の音へ移り行く過渡の時相にどういふ現象があらはれるか、これを國語について吟味する必要がある。次に語音の接合によつて、語音そのものがどういふ影響を蒙り變化をうけるか。すなはち隣接する語音の調音運動がどういふ變化を隣接の語音に與へるかといふ事柄を調べるのである。これを第三の課題とする。これらの現象を考察した上で、音節の形成といふことが解しやすくなる。音節も連音上の一つの現象であるが、前に擧げた諸事項と自ら異なる點もあるから、便宜上別個の課題としてこれを說く。さらに、音の長さ・强さおよび高さの考察は、連音における重要な問題で、種々の言語におけるアクセントの形成は、かゝる語音の流動における性質にもとづき、その性質の理解をまつて、はじめてアクセントの理法は明かなるを得るものである。本書においては、アクセントそのものゝ考察を語調篇においてするから、こゝでは國語の連音におけるこれらの諸性質のあらはれを概觀して、その

特徴を見るだけにとゞめる。

　國語における連音論は、國語において母音が子音の間に介在することが多く、子音と子音（または噪音語音相互の間）の連結をほとんど見ることが出來ないから、その點で比較的單純である。また「同化」の現象についても、いはゆる唇音化・喉音化のやうな同化はほとんど存立しない有樣である。ただ留意すべきものは、母音と子音との間に特に密接な結合があるといふ一事である。すなはち子音と母音との連接といふことが重要な題目になつて來る。次にこゑの同化が著しくあらはれ、無聲化および有聲化の現象をあらはす。そこで、以下これらの點について、國語の音聲現象における特徴を探らう。

　そも／＼音聲の形成に對して必要な條件は、主たるものに三つある。すなはち氣流の流出、聲帶の振動およびいはゆる附屬管（Ansatzrohr）の調音作用がそれである。生理的にいふと、その第一は肺中の空氣の呼出作用であり、第二は發聲作用であり、第三は發音作用である。母音の形成には、この三とほりの作用の協同が必要である。しかるに如上の三種の作用は、他に依存せずそれ／＼獨立に營むことの出來る筋肉生理的機制をもつものであるから、音聲の形成に際して必ずしも常に步調を同一にするといふ次第のものではない。中にも呼吸作用のごときは、人の生活上片時もやめることのできな

い機能であるから、呼氣の營みは普通には音聲の形成に無頓着である。一つの母音を出さうとするに、喉頭および口腔內の調音作用に先んじて呼氣がはじまり、かつ續いてゐる場合も少くない。あらかじめ某々の母音を出すべき調音が行はれ、聲帶は振動を、すなはち發聲を、口腔は發音を用意してゐるやうな場合もまたあり得べきである。

母音の形成に際しても、呼氣と聲帶の振動とが同時に始まるか、または呼氣がまづあつて後に聲帶が振動をはじめるかによつて、換言すれば聲帶のかまへの時期によつて、その母音のおこり具合と消え具合とに相異ができる。この異なりは、ころたて」および「こゑとめ」の名稱の下に、一般に發聲における「はじめ」と「をはり」との各種の形式として、すでに說いたところであり（第一章第二節『音聲の生理』參照）、有聲の語音にはすべてに適用される事理である。しかもその效果は特に母音の場合に著しくあらはれて、それ〴〵の母音におの〳〵特色のある味を與へるのである。

發音に際して、きつぱりした「こゑたて」を用ゐる場合、すなはちかたい發聲の仕方をする場合には、呼氣壓を高める必要が伴ふので、この仕方は殊に力づよい發音に用ゐられる傾向がある。東京語において往々聞かれるこの種の發聲の仕方は、唯個人的な特色としてあらはれるものであつて、かのドイツ語における一般的發聲傾向とは事情がちがふ。またかういふ發聲の習慣をもつ個人について

も、特に母音を明瞭に發音しようとする意圖がさうさせるのであつて、弱く發音された語音については此の事を見ない。ゆゑに、この種の「こゑたて」は、國語における發聲の仕方においてむしろ例外的な現象と見るべきものである。もつとも、言語心理の反映として、あるきつぱりした意志を表現しようとするやうな場合には、しば〳〵この仕方が用ゐられるのである。「こゑとめ」については、かやうな事態が特に著しく見えること、次に說くやうな次第である。

東京語において、またおそらくは多くの例外もなく國語全般において、普通に行はれかつ正則であるとすべき發聲の仕方は、しづかな「こゑたて」すなはちやはらかな發聲である。[1] 個人的には、強く發音する場合に前に述べた仕方を用ゐる者があるが、このやはらかな仕方でも十分強い發音を營むことができるのであつて、強い發音はこの仕方ではできないといふやうなわけではない。

氣音の發音過程については、やはり漸強的んが普通に行はれるものである。（第一章、註(3)參照）。

母音のをはりにおけるこゑのをはり方、すなはち前に述べた「こゑとめ」を國語特に東京語について見れば、普通ゆるい聲位を以てする「こゑとめ」の仕方が行はれる。この際こゑは次第に消えていくやうな趣を示す。たしかな聲位を以てする「こゑとめ」は、これと反對に、突然つよく聲門を閉ぢて呼氣を中斷する。したがつて聲門を閉ぢた後には喉頭以下の氣管などの部分の氣壓が高まるので、

再び更に聲門をおし開いて無聲の破音（喉頭破音）を生じさせることも往々ある。そして母音をはつきりいひ切るといふ感觸を與へるものである。この仕方が命令や氣合やかけごゑなどの場合に用ゐられることは、前に述べたところである（第三章第八節『母音の種々』のうち『國語の母音』の項參照）。語のをはりで急に音聲を中止するのは、語尾に〔k〕・〔t〕・〔p〕などの破音が來るやうなことのない國語では、この種の母音と鼻音〔ŋ〕との場合だけである。音聲の中止といふ點で、これを耳にしたところの感じがかの促音の場合と似てゐるから、かういふ「こゑとめ」を書きあらはすために、促音に用ゐると同一の仕方が行はれたわけである。すなはち

コラッ〔kolɑʔ〕　オイッ〔oiʔ〕

オヤッ〔ojɑʔ〕　バカッ〔bɑkɑʔ〕

この場合には、こゑの中止に先だつて、音聲がすこぶるつよめられるので、これによつて力強く言葉を對手にはたらきかけさせることが可能である。

氣音的聲位でする「こゑとめ」は、喘ぎながら物をいふやうな場合に〔ɑno neʔ〕のやうになることがあるだけであつて、普通には使はれないこゑのとめ方である。もちろんこれは呼氣の不經濟な使用法である。

こゑのたて方・とめ方における三樣の別は、すでに說いたやうに、鼻音〔ŋ〕の場合にも母音におけると全く同樣に存するのであり、その氣音的「こゑたて」の場合、すなはち〔ˀŋ〕は、「鼻であしらふ」といふ特別の表情的意味を寓せられるものである。肯定の意志をはつきりあらはすために〔ˀŋ〕といひ、とひかへしの場合に往々〔ŋˀ〕とし、子どもなどを叱るとき〔ŋˀ〕とするなど、この鼻音はいろ〳〵なこゑの出し方で、すなはちこゑの高さや強さや長さやその組合はせの變化によつて、發音される。たゞその普通の發音の仕方では、やはらかな仕方ではじまり、語尾などではかたい「こゑとめ」でをはる。この他の鼻音も、かたい「こゑたて」で〔ˀnanda〕（何だ？）とか〔ˀmadamada〕とかいふいひ方をする場合がある。〔ˀne, ˀne〕といふ感動的もしば〳〵聞かれるところである。

有聲の摩音・破音におけるこゑのたて方・とめ方の具合は、理論上いろ〳〵あり得るが、この場合に東京語において特別の意味でかたいこゑたてを用ゐるやうなことは、一般には認められない。個人的にかつ特殊の場合にあらはれるにすぎない。氣音的こゑたての仕方も行はれない。無聲の摩音・破音にあつては、こゑは問題外で、たゞ聲門の閉鎖を伴ふか否か、および氣音を伴ふか否かゞ問題である。摩音の場合には、口腔內での調音が先づ用意されて、そこを氣流が通過するとき、つねにやはらかな「おんたて」が生じる。氣音的おんたては連音における事情によつて生じることがある。たとへ

ば、「よこすはず」が〔jokosˤɑːdzɯ̈〕のやうになるが、これは〔s〕と〔hɑ〕との接合によつて生じた現象で、おんのたて方・とめ方といふよりも、むしろいきのさしひきである。すなはち〔s〕が〔h〕の聲門の位置で發音されたものである。さらに無聲の破音におけるはじめとをはりとは、たゞそのをはりに氣音を伴ふか否かの問題があるだけであるが、東京語における無聲の破音は、大體帶氣的には發音されないし、さうなつても著しい程度に及ばないことを注意すれば足りる。連音において「とくほん」が〔tokˤunʔ〕のやうになる例はあるが、他に〔kʽ〕・〔tʽ〕・〔pʽ〕のやうないはゆるアスピラータを聞かない。

一九　連音の結合點

音聲の連接において一般に妥當するところの一法則は、いはゆるウィンテレルの法則である。——二つの語音が接觸するときは、双方に共通な運動はなるべく唯一回ですます。

音聲の發生的見地からすれば、直接に與へられた端的は音聲の連續であり、單音のごときは、これを分析し抽象することによつて特定されたものであるから、運動の連續は所與における一因子である。すなはち連續した運動が個々の運動に先だつて存立するのであるから、この法則はこの立場からは面目を改めなくてはならない。しかし單音を連音の構成要素とし、その接合を與へる場合には、この法

則は運動の連續といふ經驗的事實を反面から說いたものとも考へられる。

いま音聲の連續を、その構成分子たる單音の連接結合によつて說明する普通の考へ方を以て進むにしても、その結合の成果たる連音は、各の單音が單に前後に並列し相續すると考へるべきではなくて、そこに單音の間にある種の交錯・滲透が生じるといふ風に考へなくてはならない。單音が互に前後に連るとき、前の語音のをはりと後の語音のはじめとが一つとなつて、いはゞ一つの過渡狀態をつくる。これを「わたり」（渉音）とする。たとへば〔ta〕において、前の語音〔t〕から後の語音〔a〕に移るにある長さの時間を要し、その中間はすなはち前の調音が終つて後の調音がはじまる過渡の狀態である。この場合には、やはらかな仕方でこゑが「さしひき」するので、どこにも切れ目とすべきところがない。その連結は直接である。しかし〔tʔa〕・〔tʻa〕のやうに、前の語音のをはり、卽ち後の語音のはじめに當つてかたいきまたは氣音的なこゑたてが行はれる場合には、二つの語音の間に、おのづから切れ目ができ、その「わたり」には喉頭破音または〔h〕のやうな氣音が間に挾まれるといふことになる。こゝに「わたり」は二つの音の間の過渡の狀態であるから、同じ「わたり」を〔t〕から見ればいはゆる「ひきわたり」（off-glide, Abglitt）であり、〔a〕から見ればいはゆる「さしわたり」（on-glide, Anglitt）である。「わたり」は連音を組立てるそれ〴〵の單音の音質を左右することなく、全くその前後の狀勢によつ

て規定され、前後の語音によつて制御されると考へられる。たとへば〔ama〕と〔imi〕とでは、母音と子音との間の「わたり」がちがふのである。そして連音のうち、その間に「わたり」を容れる餘地を存せず、きはめて直接に密に連結されるものがあつて、「わたりなし」と稱せられる。普通破音と擦音との連結のやうに考へられてゐるが、事實上半閉鎖音たるアフリカータも、便宜上「わたりなし」の連音と見做すことが出來る。たとへば「チ」の頭音は、普通には〔t〕と〔ʃ〕との連結したものと考へるのであるが、その考へ方は正當とはいへない。かりにこれを（パンコンツェリカルツィアのしたやうに）〔ĉ〕であらはせば、これは〔t〕や〔c〕と同樣な意味でむしろ一つの破音であり、あるひは破音に近似する「半閉鎖音」である。「ツ」の頭音も同樣である。これを普通の意味の單音の連接とすることは不可能であつて、連音と見做すにしても、〔t〕と〔ʃ〕または〔t〕と〔s〕との間が「わたりなし」で密に連結してゐるものと考へなければならない。わたりは〔tʃ〕と〔i〕または〔ts〕と〔ɯ̈〕との中間には存立し得て、國語においても特殊の場合には、稀に弱い程度の帶氣的「チ」すなはち〔tʃʻi〕および帶氣的「ツ」すなはち〔tsʻɯ̈〕を聞くことがある。しかし〔t〕と〔ʃ〕、または〔t〕と〔s〕との中間には何等この種の仲介者を容れないのである。

（第五章第十四節『半閉鎖音』の項參照）。

二〇　樂音的語音の連結

二つの母音が連結して一音節を構成するには至らない場合の連音を觀察するに、たとへば〔a-o〕（青）において母音〔a〕および〔o〕は、はおほむね截然たる區畫を以て相接續するのではなくて、次第に中間的時相を經て〔a〕から〔o〕に赴くのである。しかもその音聲運動は、おのづから二つの重心を卓立させて明かな音質の差異をその二點に凝集する。中間的時相におけるわづかな音色の變化は、まつたく知覺されないのである。〔o-i〕（甥）の場合には、その高低の進行は前の例と反對になるが、二つの母音を明かに二音節に發音するには、やはり二個の重心を構成するを要する。こゝにも〔o〕から〔i〕に移る調音運動における舌の位置の變化、したがつて口腔の共鳴域の變化は、必然種々のニュアンスある母音の一系列を與へるはずであるが、明かな二つの音質の繼時的對立を知る以外に、人はその中間的時相を覺知しないのである。

　しかるに〔ɯ-ẽ〕（上）のやうな連音においては、往々第一母音と第二母音との中間にわたりが耳だつに至つて〔ɯwẽ〕のやうになることがある。その他、あるひは〔gɯaĭ〕が〔gɯwaĭ〕となり、〔ɕiaĭ〕が〔ɕijaĭ〕となるやうな事例を見る。(2) これらの例で、〔ɯ〕と〔ẽ〕、〔ɯ〕と〔a〕、〔i〕と〔a〕との間のわたりが、重心に依属す

る關係の變化、音節的くぎりの如何によつて、後の音節の副音的位置に來るとき、〔wè〕・〔wɑ〕・〔jɑ〕のやうな連音、すなはち〔w̆è〕・〔w̆ɑ〕・〔ĭɑ〕のやうな漸强的重母音として把捉されるのである。特に前の母音をきびしく調音するとき、この種の現象があらはれ易い。この場合にまた前の母音の調音のきびしさが後の母音の調音にも影響して、そのあきを狹くするやうな傾向も見られる。

二つの母音の中間に喉頭破音を挿入するやうな發音の仕方は(3)、きはめて稀な特殊の場合以外には、普通行はれないことである。氣音的こゑたてを用ゐることは、やはり特殊の發音に限られてゐるのであつて、〔ohɑjoː〕などのやうに、もと〱〔h〕のあつた語を除外すれば、二つの母音間に氣音の挿入されることは、ほとんど行はれない。連母音において、こゑが中絶されることなく連續するといふことは、すべての場合に通じていふことができる。

重母音、すなはち二つ（又は三つ）の母音が連結して一音節を形成するものについては、前に述べたところが大要を盡してゐる。この場合の重心の所在は、主音に對する副音を從屬的のものとし、或は單に「わたり」とする。スウィートに從へば、重母音は一母音と「わたり」との結びつきであるとするが、かういふ見方も可能である(4)。等しく「ヤ」と知覺される連音のうちにも、仔細に見れば、〔ĭɑ〕があり、〔ĕɑ〕があり、また〔ɛ̆ɑ〕があるのであつて、注意して聽けば識別することのできる音質の異なり

も。大抵は看過されてゐる。また〔aĭ〕・〔aĕ〕・〔aɛ̆〕のいづれもほゞ「アイ」のやうな重母音の感じをあやまりなく與へるのである。かく副音の音質は一定したものではなくて、ある範圍内でかはつても差支がない。

重母音における各母音の長さは必ずしも一定の割合を示すものではないが、イギリス語の *high*, *now* における〔aĭ〕・〔aŭ〕や、ドイツ語の普通の〔aĭ〕・〔aŭ〕では、はじめの母音が短いのに反し、東京語でははじめの母音が長い。いはゆる長重母音（Langdiphthong）である。

二つの母音の連結が二音節の連母音となるか、あるひは一音節の重母音となるかは、そのアクセントや話し方の速さなどの條件によつてきまるのであるが、東京語では、重母音に發音する場合がすこぶる多い。高低の進行が下降的になつてゐるときの〔ai〕・〔oi〕・〔aɯ〕・〔ɯi〕などの連結は、大抵は重母音となり、高低進行の上に昇降のないものも、大體同樣である。しかしこれは各語について固定してゐるのではなくて、同じ語における二母音が重母音とならずに發音されることも可能であり、またしばしばある事實である。これは特に明瞭に發音しようとする場合などに、よく見られるところである。たとへば「おもひ（思）・うたひ（謠）」などは、普通には〔omoĭ, ɯtaĭ〕のやうに發音されるが、往々また〔omo-i, ɯta-i〕のやうにも發音される。しかし、二つの母音の連結において、その高低進行が上昇

的になつてゐるやうなアクセントをもつものでは、この種の重母音はあらはれない。たとへば「甥・舞」はそれ〴〵[o-i, mɑ-i]である。

母音と流音または鼻音とが結合する場合も、上に述べた母音と母音との連結の場合によく似てゐる。國語にあつては、この種の樂音的語音が母音と同樣に獨立の一音節を占有することが稀でないのであつて、母音と流音または鼻音の連結は、往々二音節を形成する。（第八章參照）。その場合には、あたかも二つの母音が連母音を構成するのと趣を同じくしてゐる。すなはち「音(オン)・點(テン)」のやうな連音では、母音と[ŋ]との間のわたりにくぎりがあり、[ŋ]が獨立して一音節を支持する。「恩・天」にあつても、しばしば二音節に發音され、しかもそれが叮嚀な發音と普通に考へられてゐる。もちろんテンポによつてこれが一音節になる場合がむしろ普通である。この場合には、[ŋ]はあたかも重母音における副音と同じ地位におかれるものであるから、[oŋ̆, teŋ̆]のやうに表記するが適當である。かやうに副音的の地位におかれた[ŋ]は、また往々單に母音の位置から[ŋ]にいたる「わたり」に過ぎないこともあり、さらに轉じては鼻音的母音[õ]・[tẽ]になつてしまふことさへある。

他の鼻音についても、同樣の事がある。たとへば[ɑ̃ndo:, ɑndoŋ]などの[n]、[ɑmmɑ, tèmbiŋ]などの[m]は、普通に獨立して一音節を占め、連母音の場合と同樣に前の母音に連るが、[kondo, tènto]の[n]

〔bimboː, dampan〕などの〔m〕は、おほむね前の母音と共に一音節を形成し、副音的になる傾向がある。この場合の鼻音もやはりアクセントおよびテンポなどの條件によつて、あるひは音節形成的に、あるひは副音的になるものである。

流音が前に來た母音と共に一音節を形成するのは、むしろ例外的の場合に屬するが、すこぶる「きこえ」に富む「ラ」行の子音〔l̩〕(6)は、音節支持の可能性をもつてゐるのを當然とする。たとへば「するんだ」は事實上〔suːl̩nda〕で、ほとんど同器官的(homorgan)な〔l̩〕と〔n〕との連結はわたりなしで行はれる場合が少くない。すなはちこゝに〔l̩〕は全く反跳しきらずに、たゞ口蓋における接觸面にすべりを生じるだけで、舌さきは口蓋を離れないのである。したがつて調音においておよび音色において、一層側音〔l〕に近似する。この場合に〔l̩〕は一音節を支持し、〔-l̩n-〕が一音節となつて、「きこえ」の一山をつくるのである。さらにアクセントなどの條件から、しばしばまた〔-ɤl̩n-〕のやうな一音節ができるわけであつて、流音はこの場合に往々すこぶる母音的な〔l̩ᵐ〕のやうなものになる。こゝにいづれも樂音的な鼻音と流音とが滲透しあつて重母音のやうな結合をつくる一例を見ることが出來ると思ふ。

二一　樂音的語音と噪音的語音との連結

噪音的語音のうち有聲擦音が樂音的語音と連る場合は、重母音の場合、または流音・鼻音と母音との連る場合と同樣に、こゑの因子を共有するから、連音を通じて發聲の機能は持續して營まれ、その間に口腔の發音器官が調音をかへる次第である。從つてこの場合には、中間に喉頭の閉鎖または氣音を挾むことが稀である。國語におけるこの種の連音は、〔z〕に母音、および〔ʒ〕に母音の連結するのが普通で、時としては〔z〕・〔ʒ〕に鼻音や流音が結びつくこともある。すでに說いたやうに、東京語にあつては、この際の〔z〕・〔ʒ〕は最初に異常のせばまりが形づくられるので、口蓋と舌さきとの接觸を生じて、〔dz〕・〔dʒ〕となるのがむしろ普通である。これは〔ts〕・〔tʃ〕のやうなアフリカータ、すなはち半閉鎖音の有聲なもので、前者をそれ〲〔ŝ〕および〔ĉ〕であらはすならば、この有聲半閉鎖音をあらはすに〔ẑ〕および〔ĵ〕を以てするのが合理的である。[7] あるひは〔ᵈz〕および〔ᵈʒ〕のやうなあらはし方を用ゐようとの考案もある。諸國語において、正字法上これに一字をあてるものが少くないのは、[3]「素音」（phonème）の考究上幾分の留意に價しないものではあるまい。

無聲擦音と樂音的語音との連結は、前の場合と異なつて、こゑを共通因子としないから、そのいづ

れが先になりいづれが後になるかの事態によつて、こゑのさしひきの仕方による相違を生じて來る次第である。そして國語における純粹の無聲擦音は、たゞ[s]および[ʃ]だけにとゞまるのであり、これと樂音的語音との接續は、[s]に母音、[ʃ]に母音のつくものが普通であるが、時には[s]・[ʃ]に鼻音・流音の連結したものが一音節としてあらはれることもあるのは、[z]・[ʒ]の場合と同樣である。しかし、またこれが單獨に句尾にあらはれて、「さうです、いらつしやいまし」[so:des̥, iraʃʃaĭmaʃ̥]のやうに音節支持的となり、すなはち一音節を形成するやうな場合もあり、或は母音に續いてそれを合して一音節を成すと見られるやうな場合もある。すべてこれらのいろ〳〵の場合を通じて、國語における發聲の仕方に關するかぎり、この連音間の結合は、ほとんど皆直接であり、喉頭破音はいふに及ばず、氣音を介在させるやうな仕方は、原則として見ることのできないものに屬する。

さらに破音と樂音的語音との連結を考へるに、有聲の破音たる[b]・[d]・[g]と母音との連る場合には、こゑが共通に存するのであるから、その二音間のうつりゆきは直接であるのが、いづれの言語にあつても普通のゆき方であつて、もちろん國語の場合には、もつぱらこの連り方が行はれるのである。[ba]のやうな一音節にあつて、[b]と[a]との間に、わたりの存することはほとんど絶無である。[b]の發音に先だつて聲帶はこゑを生じ、たゞちに兩唇における閉鎖の破裂となるのであつて、その際すでに口

腔においては、〔ɑ〕の調音が用意されてゐる。したがつて「わたり」なしに母音が破音の直後に生じ、たゞ唇を次第に開く間の制音の解除（Aufhebung der Dämpfung）が音色に多少の漸次的變化を色づけるにすぎないやうな次第である。

無聲の破音〔p〕・〔t〕・〔k〕と母音との連結は、國語にあつては口腔における破裂にすぐ續いて、聲帶が發聲の運動をはじめ、破音に踵を接して次の母音があらはれるといふ直接のうつり方をするのが常であつて　破音と母音との中間の「わたり」に氣音的の性質があらはれないものである。母音の口形は、破音の調音に支障のないかぎり、すでに前から用意されてゐるのが普通で、それだから破音のをはりが母音のはじめと合致する。東京語における〔pɑ〕・〔tɑ〕・〔kɑ〕などの連音にあつては、ほとんどつねにこの種の連り方が行はれてゐるものである。

しかるに、ある地方的發音では、破音と母音との連音において、往々破音の破裂と母音の發聲との間に多少の時間の間隙を挿むことがある。その「わたり」に一種の氣音を聞くが、それは破音と母音との間にこゑが氣音的こゑたての過程を以て生じるために、破音ののちに一種の氣音があらはれて來るのであつて、その「わたり」における氣音の强さと長さとは場合場合によつていろ〳〵である。特に著しいのは、東北地方における〔k〕と〔ï〕や〔ɯ̈〕との連音であつて、その「わたり」は、舌と口蓋とが接

近してゐるために、〔ɕ〕に似たおんを出すのである。すなはち普通の〔ki〕・〔kɯ〕は、この方言ではほゞ〔ksï〕・〔ksɯ̈〕のやうに發音されるのであつて、たとへば〔kimi〕（君）は〔ksïmi〕のやうになり、また〔kɯ̥tʃi〕（口）は〔ksɯ̈tʃi〕のやうになる。[10] またこの種の「わたり」は東北方言の擦音にも伴はれる。たとへば〔ɸsi〕（火）などがそれである。この種の「わたり」が東京語にあらはれて來る場合には、〔ki〕のやうな連音では、「わたり」が大いに〔ç〕に近くなり、すなはち〔hⁱ〕といふ氣音のやうに聞える。〔kita〕（北）のやうに〔i〕が無聲化（後節參照）する場合に、この種の氣音に類するおんが耳だつやうになるが、普通には破音と母音との間のわたりには耳だつほどあらはれない。

要するに、一般に通じて東京語における噪音的語音と母音との連結に際してのうつり方が、直接であり、間隙のないものであることは、概言し得るところである。支那語におけるいはゆる無氣音（不出氣）と有氣音（出氣）との別、すなはち北京官話における「骨」〔ku〕と「苦」〔kʰu〕や、「晝」〔tʃou〕と「臭」〔tʃʰou〕の別のやうな差異は、國語では定立しない。北京官話について見ても、この種の發聲の仕方による連音の差別は、無聲の破音と母音との連結の場合だけに限られてゐる。かういふ連音においてこそ、いはゆる「有氣音」を發する最も好都合な發音上の條件が存することを察し得よう。[11] しかるに、東京語では、この無聲破音と母音との連結の場合にも「有氣音」を聞くことがなく、よしあ

るにしても、きはめて弱いものであるといふことは、連音における子音と母音との連結が、すこぶる緊密なものであるといふことは思はせる一事例とすることができよう。その連結の緊密なことは、「わたり」におけるこゑの出し方。とめ方の關係だけでなく、その調音運動における關係を檢する場合に層一層明らかになるであらう。

二三　噪音的語音の連結

一般に諸種の噪音的語音が互に相連結することは可能であり、おほむねまた容易であるが、國語にあらはれるところの連音にあつては、特殊の場合を除く外は、それ〴〵の噪音的語音がおの〳〵樂音的語音を伴つて音節を形成するのが原則であり、したがつて、噪音的語音相互間の連結はきはめて例外的な現象に過ぎないやうな有様である。しかし國語においても、それ〴〵の子音がかならず母音と連結してあらはれるものであるかのやうに考へるのは、必ずしも妥當でない。すでに流音や鼻音が母音のやうに音節を支持して噪音的語音に連結されることを說いたが、これによつても、子音が單獨にまたは互に連結しては現はれないと考へることの事實に合致しないのを見るに足りるであらう。噪音的語音も、もとその中間に介在してゐた母音をある事情から篩ひおとして、互に直接に連接すること

が、日常の口語にあつてはしば〳〵生じるのである。もちろん、かういふ連り方は、もとあつた母音がこゝの同化などの理由から無聲化し、または子音の中に吸收されたと解して、その說明をすることができる。しかし言語のありのまゝを觀察するときは、そこに母音の痕跡をも認めることのできないやうな場合が多々あるのであつて、發音されたまゝの音聲を取扱ふ事實的科學たる音聲學は、說明を試みる前にまづ音聲現象の觀察のまゝの事實を忠實に記述しなくてはならないのである。

この種の連結において特に注意すべき事項は、いはゆるアフリカータと破音の聞えない閉鎖のうつり方とである。その他の事項は、こゝに說くまでもなく、おほむね上來の說述によつて察し得るところである。

さて、破音とその次に來る母音（一般に樂音的語音）との間に同一調音域における摩擦のひゞきを伴ふとき、［tsɑ, kxɑ］のやうな連音を生じる。破音と擦音とが音節の初頭にあつて一擧に（あるひはむしろ一回の調音で）發音されたものを、從來アフリカータ（affricata）と名づける一種の連音としたのである。すなはち、この種の連音は、その連結がきはめて緊密であつて、他と異なる特色を有するものとする。かく分析的に見るときは、二つの調音運動の複合とも考へられるのであるが、その運動における連續的過程を如實に觀察するときは、普通の破音と多く異なるところがない。發生的見地か

ら、すなはち音聲生理學的な立場からすれば、これは結局他の破音と同様な一子音であつて、ルスロの「半閉鎖音」と名づけるところのものに外ならない。

有聲の破音からは有聲のアフリカータを生じる。すなはち前にも述べた〔dz〕・〔dʒ〕の如きものがそれである。無聲の破音からは無聲のアフリカータを生じる。その國語にあらはれるものは、ほゞ〔ts〕・〔tʃ〕に限られる。これについても、一般に破音における同様に連音におけるこゑの出し方・とめ方による三様のうつり方が存立する。その三種は、特に無聲のアフリカータにおいて十分顯著にあらはれるのであるが、國語にあつては、アルメニア語に見るやうな喉頭閉鎖を以てその間を中斷するやうな事例はまつたく存せず、支那語に多くの例を見出すやうな、氣音をアフリカータと母音との間に挾む連音も行はれないのである。

國語における「チ・ツ」や「ジ・ヂ・ズ・ヅ」の子音を、それ〴〵〔tʃ〕・〔ts〕・〔dʒ〕・〔dz〕とするのは、これをアフリカータとしての破音と擦音との連結と見るからであつて、さういふ連子音と見て、從來普通に考へられたやうに、これをそれ〴〵の單音〔t〕と〔ʃ〕、〔t〕と〔s〕の連結などとするにしても、その結合の特に親密な種類に屬することを見のがすべきではない。すなはち、この見地からするならば、破音〔t〕のための調音においてすでに〔ʃ〕または〔s〕の口形が準備されてゐ、前後の調音が相互に滲透すると解

することが必要になる。他の連子音の場合と比較するならば、おのづから特徴が明らかになるであらう。すなはち、母音の無聲化乃至脱落によつて、國語の場合にも〔t-s〕や〔t-ʃ〕のやうな連結があらはれることがあるが、たとへば「ことし」が〔kot-ʃi〕のやうに發音される場合の破音と擦音との連りは、明白に「チ」におけると異なるものである。

かく實用的には「チ・ツ」の頭音に〔tʃ〕および〔ts〕を當てゝ用ゐるが、音聲の論究上にはこれを前述のやうな連子音と區別して、別個の音字〔ĉ〕・〔ŝ〕のやうなものを用ゐるか、または〔t͡ʃ〕・〔t͡s〕のやうにして區別しなければならない。前者は國語では「チャ・チ・チュ・チョ」の場合にあらはれるもので、後者は時として「ツァ」の連音にあらはれる外、もつぱら「ツ」の場合に成立するものである。

もちろん外來語には「チェ」や「ツェ・ツォ」のやうな連音もあらはれる。「ツァ」の連音はもとから行はれてゐるが、これは語源的には「テ・ト」などゝ「サ」とが連つて母音の無聲化および脱落するにより、また「ツ」と「ア」とが連つて前の母音がぬけるによつて生じたものである。式亭三馬の『浮世風呂』に「さ」であらはしてゐるのが、「ツァ」であらう。今でも「ツァ」は少數の俗語にあはれるだけであつて、「オトッツァン・カッツァライ」など。いづれも〔-tt͡s-〕のやうな連結を形成する。また「さうだとさ」のやうな語句が、しばしば〔so:dat-sa, -tt͡sa〕となる。かういふ風に前に

「促音」の來ないときは、〔s〕が長くなる傾がある。

大體これと同じ調音域で出される呼氣なしの一種のいはゞ破音に「したうち」のおとがある。これには「ツェ・ツォ」などに似た感じをおこすものがあるが、普通假名で「チェッ・チョッ」などゝ書きあらはす。調音運動および音色においていはゆるアフリカータに近似するものであるが、これをしも破音と擦音との連子音のやうに考へることは、何人も敢へてしないであらう。

次に破音の連結において、呼氣なしの破裂が行はれるやうな連り方が國語の場合にも行はれるか否かを見よう。國語にあつて、破音と破音とが直接に連結する場合は、まづ無聲のものに限られる。すなはちその場合に、中間に介在する母音は同化によつて「こゑ」を失つて、たゞ「いき」で發せられる(geblasen)のであり、その結果破音が互に接觸することになつたのである。〔hɑnɑk-tɑi, kɑt͡ots-ki〕などの連り方にあつては、普通二つのうちの前の破音(または半閉鎖音)が破裂をした後、次の破音が調音されるのであるから、二つの破音の間に呼氣が流出し、前の破音はあきらかに聞くことができる。しかし、日常のくだけた談話では、間々かういふ場合に前の破音の後に呼氣が出ずに、すなはちそのおしあけに際して何等の音も聞えずに、すぐ次の破音にうつるやうな連り方をすることがある。いひかへると、この場合には前の破音の閉鎖の過程中に次の破音の閉鎖ができて、前の調音の解除の過

程は呼氣なしに行はれる次第である。「むだ」が會話の中などで〔mdα〕のやうに發音されることがある。その口腔内の調音について見れば、〔m〕における唇の閉鎖は〔d〕まで保留されて、〔d〕の破裂とゝもに開かれるのである。これと同樣な移りゆきが破音と破音との連りの場合に行はれることがある。破裂の際に呼氣がないときは、大體その音が聞えがたいが、破音の閉鎖に至る「わたり」が一種の推移の感じを與へて、それ〈〜の破音を認識する手引となる。たとへばドイツ語 *Akte*〔αktə〕における〔-kt〕の連音は、〔k〕の破裂における呼氣が〔t〕の閉鎖における口腔の出口のない袋の中にとぢこめられてゐるから、〔k〕の出破による音を聞くことができない。しかも、〔k〕へ向つての〔α〕の「ひきわたり」(Abglitt)が幾分か〔k〕の印象を與へるのである。しかるに、さういふ不鮮明な印象は、國語のやうな音聲構造を有する語族にとつては、聽く耳からすこぶる遁れやすいものであるから、國語では二つの破音のこの種の連り方を避けるといふ傾向が出て來たと思はれる。さもなくば、ラテン語の *acta* からイタリア語の *atto* が出たやうな、〔kt〕から〔tt〕への、あるひは〔t〕の促音への音聲轉化がおこるわけである。

國語における字音の連結の音聲轉化のうち、〔sĕts-ki>sĕkki〕(節季)、〔its-hin>ippin〕(逸品)のやうなかはり方は、支那音からの影響をもたどることができようが、破音の連結における如上の行き方が、その根柢に存したことは、推定しなければならない。字音の終にある「ツ」が、連音において

次の音と一緒になつて、たゞ〔p〕・〔k〕のやうな破音の「促音」になるだけでなく、擦音の長子音ともなるといふことは、「ッ」の文字を促音の記號にもするやうにさせた所以であるが、その説明はいろ〳〵あらう。たゞその際、字音以外の、漢語以外の本來の（語源的にいふ）國語にあつては、この種の音聲轉化を見がたいといふ事實は、特に注意すべきであらう。

同じ破音が二つ連つてゐる場合は、以上に説いた破音の連結の特殊の場合にすぎない。この場合に二つの破音が一つの長い破音、すなはち促音に融合してしまふのは、自然の成行である。〔atatakai〕>〔attakai〕の音聲轉化において、後の〔tt〕は、はじめ〔t-t〕のやうに一々破裂をして發音されたのではなくて、むしろ最初から〔t:〕であるやうに調音運動の節約が音聲を切りつめたのである。音聲の轉化、ことに字音における連音の關係を見る際には、〔ts-t〕>〔t:〕や〔k-k〕>〔k:〕のやうな事例を多く見出すのであつて、特にこゝに論ずべきほどの連音上の特殊の現象ではない。

註(1)Edwards: *Op. cit.*, p. 21. (Arrivée et détente des voyelles).

(2)[baai]>[bajai] の例は、二つの〔a〕をきはだゝせるための一つの手段として、類推によつて前の場合に準じて出來たものと考へられる。

(3)デンマルク語に普通である、いはゆる stød は單語の内部に介在する喉頭閉鎖である (Jespersen: *Lehrbuch*,[2] p. 78-79)。

(4)それで〔iə〕も〔ĭə〕も〔ĭə〕も等しく〔jə〕(ヤ)として認められるのであり、ein allgemeineres Abstandsminimum od. -maximum der Konponenten を定まつたものとすることができなくなる。

(5)Sievers: *Op. cit.*, p. 165.

(6)第五章第一六節『「ラ」行の子音』の項參照。

(7)Panconcelli-Calzia: *Italiano*, pp. 5-6.

(8)古代ギリシア語におけるζは〔dz〕に相當するとされ、またイギリス語の *judge*, *general* における *j* および *g* はともに〔dʒ〕の音をあらはすとされてある。語音の分析がどこを究極とするか、單音とは何であるかの、共同的實現ならざるが一例ではあるまいか。(Sievers: *Op. cit*, pp. 43-45 參考)。

(9)いはゆる Blählaut がこれである。

(10)この種の現象は、音聲學上の古い用語法では、アスピラータのかはりにアフリカータがあらはれたといふのである。

(11)もちろん、音節の最後に無聲の破音が來るやうな場合は、こゝでは別問題である。

第八章　語音の轉化

二四　調音のすべり

前に〔ba〕の連音の例で、〔b〕の破裂に先だつて〔a〕の調音が用意されてゐることを述べたが、〔bi〕のやうな連音では一層明白にその事態を知ることができる。[1] すなはち國語に普通な行き方は、〔b〕の發音の後にはじめて〔i〕の口形が形成されるのではなくて、〔b〕と同時に〔i〕の口形が形づくられはじめるのである。唇において〔b〕が調音される間に、一方では舌が前口蓋に向つて隆起して、〔i〕の位置に至る運動をはじめる。また場合によつては、〔b〕に先んじて〔i〕の口形があり、〔b〕の調音の間を通じてその口形を存續することと、たとへば〔kibi〕のやうな場合がある。〔momo〕のやうな連音について見ても、最初の〔m〕が〔o〕の口形に先だつやうなことは、むしろ稀で、雙方の調音が同時に始まるか、またはむしろ〔o〕の口形がまづ形づくられるやうなわけで、その口形は、連音の初から終まで存續するものである。その關係は〔h〕と母音との連音の場合と相似てゐる。

調音の器官が相異なるときは、かやうに同時に調音が行はれるのであつて、二樣の調音は融合の狀

態にあるといふことができる。そして最初の音の調音する間に、次の音の位置が次第に滑走運動を以て形づくられる場合には、「なかわたり」(*Eingleiten*)があるといひ、次の音の調音域が最初から存立してゐるやうな調音の同時的存立については、「さきがまへ」(*Vorausnahme*)があるとする。前の場合には、[b╲i]、[m╲o]のやうに、各音のある位相において調音の共存があるので、これを混化と名づけて[bi, mo]とし、後の場合の全體的融合をあらはすに[b͡i, m͡o]を以てして前のと區別する。

調音の器官が同一であるやうな連音の場合では、その器官のある特殊の調音を加味するためには、加味された方の調音が多少の變化を蒙ることを免れない。たとへば[k]と[i]との連音において、最初[k]の普通の調音域で閉鎖が形づくられ、それから舌が口蓋をすべりながら漸次に前方へ推移し、次の[i]を形成するに便利な位置まで進んで、そこではじめて破裂をする段取になるやうな仕方がある。これは「なかわたり」によつて、一つの調音が他に讓歩するといふ一つの行き方である。これに反して[k͡i]にあつては、[k]の調音域が最初から普通よりも前方に、すなはち[i]に移るに最も好都合な箇所に選ばれてゐる。これは「さきがまへ」に對應する連り方である。

多くの場合にこの二様の連り方は併用されて、嚴密にたゞその一方だけが行はれるといふやうな事例は、ドイツ語などでは稀だとされてゐる。すなはち普通には、全然[·ki]のやうに前方にすべり出た[·k]

の調音域がとられるに至らず、しかも〔ka〕、〔ko〕などにおけるよりも餘程前方で調音され、それから次第にこの位置から移動して「なかわたり」を以て〔i〕の位置にわたつて行き、つひに破裂するに至るといふ過程を經る。すなはち二樣の行き方が部分的に互に結合するのである。

これと同樣なことは、國語の連音についてもいふことが出來るわけである。たゞ國語の場合では、〔ki〕のやうな連りが優勢を占めると考へるべき理由がある。すなはちこれを發音するためには、〔k〕を十分前方において、すぐ次に母音〔i〕を出せるやうな位置で調音する。その關係は〔gi〕にあつても同樣であり、また〔ŋi〕にあつても同樣である。そして後の場合の〔ŋ〕の調音域がすこぶる前方へせり出されてゐるといふことは、それが音色において〔ni〕や〔pi〕に接近し、聽者によつて往々これと混同される事實に見ても知られる。かやうに子音の調音域が次に來る母音〔i〕のために前方にせり出される傾向は、特に國語において著しいものがある。もちろん連音における如上の連り方は〔i〕の場合に限るのではないが、この母音にあつては、特に著しく調音域を移動させ、そのためによほど子音の音色に變化を與へるものであるから、取りたてゝ注意するを要する。

ヨーロッパ諸國語における母音〔u〕は、その調音が舌の後部の隆起を欲するために、これに先行する子音の調音域が後方に移動する。いはゆる「あとひき」(又は後顎音化 *Velarisierung*) の現象は、〔u〕母

音をもたないわが國語では、同一に律し得ないものがある。國語の「ウ」すなはち〔ɯ〕母音にあつてはおのづから事情が〔u〕と異なるのである。またヨーロッパ諸國語に著しい「まるめ」（圓口化、唇音化）の現象、すなはち唇を小さく圓くするを要する圓口母音〔u〕・〔y〕・〔ø〕などの母音の影響が先行の子音に及ぶところの現象も、かやうな母音をもちあはせない國語にあつては、見ることができないやうな次第である。たゞし〔o〕については多少その傾も見えるが、これがために耳だつほどの變化を子音が蒙るとはいへないので、特にいふに足るほどの著しい事項ではない。

ひとり〔i〕母音の及ぼす調音上の影響は、國語一般、特に東京語において著しいものがある。この現象は「まへのし」（または口蓋化。前顎音化 *Palatisierung*）の名の下に説かれるものである。しかし東京語における〔i〕の特異性は、この傾向を必ずしもヨーロッパ諸國語のと同樣なものとはしない。國語における「まへのし」または「口蓋化」は、口蓋的（前顎的）母音の口腔内調音に適應するための先行音の變化といふ意味で、この種の母音は東京語にあつては「イ」（音字〔i〕をあてる）である。これが子音の軟音化の一面であることは前に述べたが、國語における母音「イ」による調音のすべりの現象にあつては「イ」の調音の仕方に應じて子音における口蓋と舌との接觸面が他の場合におけるよりも廣くなるが、それは舌の筋肉の弛緩によつて生じるのではない。むしろその際顯著な舌の緊張がある

ことを觀察する。かういふ緊張が、ひろく舌面にひろがつてゐる感じがあるところに東京語における「まへのし」の特色が存する。

東京語における子音と〔i〕との連音では、子音の調音域のすべりが一般にかなり著しくあらはれてゐる。このすべりを生じた所以のものは、いふまでもなく母音〔i〕の影響であるが、前に說いたやうな東京語におけるこの母音の特色は、東京語における「まへのし」の傾向を著しいものにした。五十音圖における「イ」列の諸連音において、この傾向の著しいあらはれを見ることが出來る。たゞ唇音は、その調音域が舌と獨立してゐる關係から調音上の變化をうけないので、〔pi〕〔bi〕〔mi〕は〔ki〕などの場合と趣を異にする。〔hi〕もこれと同樣で、〔h〕それ自體はすでに〔ha〕や〔ho〕の場合とその音色を異にしてゐるが、喉頭におけるこの子音の調音は變化を蒙る筈もない。「唇音」乃至「喉音」の調音は、舌の調音と同時にすることが出來るものだからである。

ところが、舌を口蓋に向けて調音するやうな子音がこの母音と連る場合には、〔ki〕の例をもつて說いたやうな二音間の調音上の調停が生じなくてはならない。その調停は、東京語の場合には、とりもなほさず子音の「まへのし」としてあらはれてゐるわけである。〔k〕は本來口蓋の後部と舌の後部とで調音されるものではあるが、「キ」の場合に著しく調音域をかへることは、「カキ・クキ」などの例を觀

察してたやすく知ることができる。一層顯著に「まへのし」のあらはれるのは、〔t・d・n〕のやうな前口蓋で調音される子音と、〔i〕母音との連る場合である。この場合には、子音そのものゝ音色が、その調音域または調音仕方の變化のために著しく影響されて、それ〴〵の子音の變種とも見るべき別種の子音を生じるにも至る次第である。

國語の五十音圖において、「タ」行に「チ」〔tʃi, t͡ʃi〕=〔ʨi〕があり、「ザ」行および「ダ」行に「ジ・ヂ」〔dʒi, d͡ʒi〕=〔ʥi〕があり、「ナ」行に「ニ」〔ɲi〕があることは、みな國語の母音〔i〕の調音の影響による子音の調音の變化が惹起したところの音質變化の現象を示すのに外ならない。子音と母音との緊密な連結において、そしてまた母音のすわりが子音のに優るやうな言語の場合において、かやうな結果に出あふことは、むしろ當然であつて異とすべきではない。從來「シ・チ」や「ジ・ヂ」の場合だけが特に留意されてゐながら、國語における「まへのし」の現象がその全體における著しさを看過されてゐたのは、音聲研究者がはの手落であらう。一旦この點に留意するならば、國語における、特に東京語におけるこの連音上の傾向の著しいあらはれを何人も見のがすことはあるまい。

いはゆる拗音の系列は、おほむねまたこの種の口蓋化した子音と三種の母音〔a・o・ɯ〕との結びつきであつて、連音としての性質がおのづから他のいはゆる直音と異なつてゐる。「キ」および「キャ」

における〔k〕と、「ク」および「カ」における〔k〕とは、その調音においてかなりちがふので、これを速かに調音しかへるためには、異常の努力を要するものである。古來の發音遊戲に「はやくち」または「はやこと」といふのがあるが、そのうちの

　となり（隣）のきやく（客）は、かき（柹）くふ（食）きやく（客）だ。
　ひきやく（飛脚）かき（柹）むく、おきやく（客）かき（柹）くふ（食）。

の例は、この點をねらつたものであつて、この文句を幾遍となく早く繰返すうちに、「キャク」が「カク」となつたり、「ター」が「キュー」となつたりするのである。また

　ボーズ（坊主）がビョーブ（屛風）で、ビョーズがボーズだ。

の例も同樣な趣向のものである。かういふ場合の發音のぎごちなさを、たとへば「ココノコトダ」のやうな連音の發音のたやすさと比較してみると、そのちがひの著しいことがわかる。

「直音」・「拗音」の區別は、「科學以前」のものであつて、連音の分類として妥當ではないこと、神保格氏の說くとほりである。[3] その性質上「ヤ」行・「ワ」行の連音は、いはゆる拗音と同樣に「なかわたり」をもつて連るもので、前に述べたやうに重母音と目すべきわけもそこにある。他のいはゆる直音と趣を異にするものである。「ヒャ」・「シャ」・「チャ」のやうな連音における調音の連續的變

化も「ヤ」におけると同様である。たゞこの場合には、その推移のどこで「ころ」があらはれるかが問題になる。「シャ」も、單に子音〔ʃ〕と母音〔a〕との並列ではなくて、內面的推移を含む點で「ヤ」に比すべき連音であることを注意すべきである。

かやうに、調音域のすべりの現象は、子音と「イ」母音との連結した連音において著しいが、次に「ス」のやうな音節においてもこの現象が別樣の姿であらはれてゐる。東京語(關東語一般についても)において、〔s〕と〔ɯ〕との連結した〔sɯ〕が行はれずに、そのかはりに〔sü〕が行はれるといふ事實は、前にくはしく說いたところであるが、これも子音と母音との調音運動の妥協によつて生じた現象である。たゞこの際調音上多く讓步したものは子音ではなくて母音であるといふ點が、他の場合と趣を異にする。〔s〕と〔ü〕との調音域や仕方に相似たものがあるのが、この種の連音の成立を致させた所以である。この二つの音の調音が近似してゐることは、〔(d)zü(d)zü〕(數珠)が、しばしばもとのまゝのアクセントを保ちながら、〔(d)z:(d)z:〕のやうに發音されて、ほとんど何等の不自然を感じさせないといふ事例についても知られよう。

鼻音における口蓋帆の調整が、そのまゝ次の調音運動にまでも持續される傾向は、鼻音の同化としてひろく諸種の言語にあらはれる現象であるが、國語の場合にもある程度でこの事があるといふことと

を認めなければならない。エドワーヅの見解は、アメリカ合衆國の諸地方に見るやうな「はなごゑ」の現象が、東京語には認められないとするかぎりでは、正當であつて、[4] 鼻音化の現象をまつたく認めないのではあるまい。語の中間に母音に挾まれる〔g〕が東京その他の地方の發音で〔ŋ〕となることは、同化によるものとはいへないが、とにかく著しい鼻音化の例である。もちろん同化によるものは、東京語ではしばしばあらはれるのであつて、特に母音が鼻音の間に介在する場合に鼻音的母音となる事例は、最も著しいものである。發音遊戯の〔namaŋ'mɛ̀ namasɯ̈ŋ'ba〕のやうな一聯の連音では、母音の鼻音化される傾向が著しく、その間に介在する〔s〕や〔b〕の子音さへやはりその影響を蒙りやすいのである。したがつて最後の音節を〔ma〕としないためには、特にこの傾向に反抗する努力を要するのである。

もちろん、鼻音的色彩におのづから濃淡があり、かの口蓋に病理的缺陷を有する者において見る甚だ強烈な鼻音化は、その最も濃厚なものに屬し、次第に稀薄なものから、つひにすこぶる輕微なものに至る種々の程度が區別されることは、それぞれの言語にあらはれる鼻音化傾向の比較によつて知られ、また口蓋帆閉鎖の程度の等級によつて考へられることである。東京語における鼻音化は、その母音を例にとつて考へると、フランス語におけるほどの著しい通鼻母音となるに至らない。しかし往々〔anata〕が〔ãnãta〕となり〔ãːta〕となるにいたつては、通鼻母音の現前を看過し得ない。〔niːŋ̈jaka〕

はよく〔mi:ɑ̃i〕のやうに鼻音的母音をもつて發音されることがある。また接尾語の「さん」が、〔-sɑ̃:〕となるやうな轉化は、しば〳〵耳にするところである。現時の東京語にあつては、子音の鼻音化は、その音質を變じて純粹の鼻音とするやうな場合にはなるべく避けられてゐるとはいへ、國語の音聲轉化の歷史においては、有聲の破音が鼻音化によつて純然たる鼻音にかはつた事例は少からず見出されるであらう。靑森・秋田・盛岡・山形・仙臺の諸地方において鼻音化の著しいものがあることは、しば〳〵觀察されたところである。

いはゆる「はなごゑ」すなはち通鼻的發音は、物をねだるとか、あまえるとか、訴へるとかいふやうな場合、および「なきごゑ」の場合に著しい。これは感情表白の心理的理由にもとづく發音現象であつて、いはゆる「鼻をならす」ことの表情的意味は、一般言語心理學上の問題である。

二五　調音運動の節約

連音における子音と母音との關係は、前に說いたやうな次第であつて、母音が子音よりもすわりのよいものであることは、その點からも察せられる。子音は母音に對して比較的に從屬的地位にあり、したがつて、母音よりはすわりがわるい。その調音が時としてはきびしさを失つて、そこに語音の轉

化を孕むことがある次第である。もちろん場合によつては、母音もやはり隣接の語音の影響によつてかはるのである。

噪音的語音は、その調音のきびしさを失ふとき、そのひゞきがなくなる。すなはち、呼氣の通路における狹まりが弛緩して、十分に呼氣の摩擦を生じるに至らない。が、もう一つには、呼氣壓がその強さを減じるために、そのひゞきが聞えなくなることもある。かういふ場合には、擦音〔s〕は〔h〕に類する音を出すやうになる。京阪地方で「……さん」が〔……han〕のやうになり、「マショー」が〔-maho〕のやうになるのは、この種の轉化である。(5) しかし、東京語ではほとんどこの種の現象を見ない。「ワタシ・マワリ」などにおける〔wa〕、すなはち〔w̃a〕が、單に〔a〕となるやうな、また「ケレドモ」が「ケードモ」となるやうな語音の省略乃至脫落は、調音の仕方がすこぶる弛んで、つひにその消滅にまで至つたものであつて、この種の音の省略されやすいのは、それ〴〵の音の調音上の特性によると考へられる。

連音中における一つの音が調音をゆるめて、他の音へのわたりとなつて、たゞそのおもかげを留めるやうな現象は、すでに重母音の場合に見たところである。重母音における〔aĭ〕および〔ĭa〕のやうな連結にあつて、〔ĭ〕はつひにその本來の母音〔i〕の位置におちつかない以前に、またはその位置から出發せず

にその中途からこれに連る音に向つてわたりとなつて移行してゐることが多い。この場合には、正常の語音の調音をするだけの手順が省かれる次第である。

しかし、調音運動の節約が國語において重大な結果を生じるのは、有聲の母音を無聲にするところの「こゑの節約」といふ一事である。無聲の子音につゞく母音は、先行の子音の影響でそのこゑを節約しようとする傾向を示す。かういふ連音が句の終にあらはれて、その母音が〔i〕または〔ɯ〕のやうなあきの狭いものである場合には、母音はこゑを失つて「無聲の母音」となりやすい。「ソーデス」のやうな場合には、「ス」の母音の調音そのものがまつたく節約されて、たゞ子音だけを殘してゐる。他の擦音「カシ」（菓子）のやうな場合でも同様である。しかし「テンピ」〔tẽmpi̥〕のやうな場合には、〔i〕の無聲のものが添はつてゐるといはれる。母音のこゑの失はれる傾向は、その母音が二つの無聲子音の中間にはさまれたとき、一層増長する。この傾向を母音の無聲化 *devocalization* といふ。

東京語では母音の無聲化は著しい事實である。そのうちでも最も容易に無聲化される母音は、〔i〕と〔ɯ〕であつて、その他の母音も無聲になることがある。二つの無聲の子音の中間に挾まれた〔i〕・〔ɯ〕は、ほとんどすべて無聲化されるといつて差支ないほどである（この際〔ɯ̈〕は〔ɯ〕に準じる。）無聲化は一音節のみならず、時には二音節にわたることさへある。

無聲化された母音を示すのに、普通〔i̥〕や〔ɯ̥〕のやうに白い圏點を用ゐる。あるひは、いきで發音される母音として〔i〕、〔ɯ〕を用ゐ、發音を假名であらはす場合には、無聲化された母音の音節に當る文字に△のしるしをつける。たとへば

汽車	ki̥ʃɑ	キ△シャ
舌	ʃi̥tɑ (ʃtɑ)	シ△タ
近い	t͡ʃi̥kɑi (ʃkɑi)	チ△カイ
靴	kɯ̥tsɯ̈ (ktsɯ̈)	ク△ツ
月	tsɯ̥̈ki (tski)	ツ△キ

のやうに一音節内で無聲化が行はれるのみならず、次の例のやうに、無聲化が二音節にも及ぶことも往々ある。（ゆつくりいふときは、普通第一音節だけ無聲になる。）

口先	k(ɯ̥)t͡ʃi̥sɑki	ク△チ△サキ
七尺	ʃi̥t͡ʃi̥ʃɑkɯ	シ△チ△シャク
菊地	ki̥kɯ̥t͡ʃi	キ△ク△チ
筒袖	t͡sɯ̥̈t͡sɯ̥̈ sode	ツ△ツ△ソデ

かやうに母音の無聲化された音節は、きこえが急に減じてすこぶる聞きとりにくゝなる。特にそのためにまぎれ易くなる語の場合には、有意的に無聲化すなはちこゑの節約の傾向に反抗して、こゑを保存することがある。無聲化が二音節相次ぐやうな場合に、その一方だけこゑを復活して、たとへば「クチサキ・ツツソデ」[kɯ̥t͡ʃisaki, tsɯ̥̈tsɯ̈sode]とするのも同様である。しかし、無聲の子音に挾まれた母音の一音節だけの無聲化は、多くはしかと固定したものとなつてゐて、「クサ・チカラ」などの[ɯ]や[i]を有聲に發音することは、普通にはない。しひて有聲にすると、京阪・土佐あたりの方言ででもあるかのやうな異様さを感じさせる。たゞ擦音のやうな繼續し得る無聲の子音が相連る音節にあらはれる場合には特にその中間に介在する母音を有聲にすることが往々ある。「スソ・シソ」のやうな語では、第一音節の母音の無聲化によつて二者が互にまぎれやすくなるので、かういふ場合には有意的に無聲化をさけることも少くない。

きこえの大きい[a]母音は、一番無聲化されることの少いものであるが、場合によつて「ハハ・カカル」のやうな語において往々無聲の母音としてあらはれ、また不用意の發音では「タタク・タスキ・ハカマ」などこゑを省かれることがある。もつとも「ハハ」は別に無聲化を蒙らない發音も普通に行はれてゐるし、「カカル」と第一音節を無聲化せずにいふ人も少くない。母音[o]も無聲化されること

が少いものであるが、「ココロ」（心）は第一音節がいつも無聲化される。「ココ」（此處）はまた有聲に「ココ」とも發音される。不用意の對話などでは、「コトシ・ソトボリ」などのやうな無聲化を生じることがある。また「ケッシテ・テスキ・セッカク」のやうな場合の無聲化も、時として日常の會話などに聞くことがある。

この種の無聲化の傾向は、東京語のみならず、關東方言にひろく行はれてゐるものゝやうに思はれ、そのある地方では東京地方におけるよりも一層著しいものが存するやうに察しられる點がある。これを關西地方、殊に京阪及び四國地方における發音傾向について見ると、すこぶる程度上の異なりがあるやうに思はれる。京阪地方などの方言には、母音の無聲化を見ないのではないが、きはめて僅かであるといふべきである。かの京阪地方の言葉がなめらかな感じを與へ、東京語がキビキビと歯ぎれのいゝ感じを與へる理由は、一つはこゝにもひそんでゐると思はれる。

母音の無聲化は、何故に特に〔i〕・〔ɯ〕の場合に容易にあらはれるか。そもそも無聲の子音が一つの母音を挾んでゐるとき、その母音が無聲化されるのは、その母音の長さだけの間こゑが節約されるのである。その際こゑが出るか出ないかに對して、母音の長さが關係をもつことは容易に考へられる。母音が元來長さの長いものであるなら、こゑを發することがそれだけ容易であらう。母音の長さが短け

れば、これを整へる餘裕もないわけである。早口に物をいふ場合に無聲化のおこりやすいのも、母音の長さの短縮による點が多いであらう。そして後に説くやうに、(6)通常〔i〕・〔ɯ〕の母音は、〔a〕・〔o〕などに比してはすこぶる短いのである。特にアクセントの關係から低く弱く發音される語頭の音節では、この母音は著しく短くなる。さういふ關係から、この種の母音、すなはち一般に口のあきの狹い母音が容易に無聲化されるといふ事情がわかる。も一つは、調音運動の難易の關係から、同じやうな調音をする語音が近接してゐる場合には、たとへば「オトトイ」のやうになつてゐると「トト」の邊がきはめて速かに發音される傾向があり、音節が、したがつて個々の母音がその他の場合におけるよりも短くなるといふことがある。そのために、かやうに同じ調音をくり返す「ココロ・カカル」のやうな場合に、元來無聲化されにくい〔o〕・〔a〕の母音までも無聲化されるやうになるのである。

無聲化の現象によつて生じた「無聲母音」の本質は何であるか。その音響學的性質においては、それはもはや本來の母音のやうに多分に樂音的性質をもつものではあり得ないで、一種のひびきであり、著しくきこえを失ふのである。しかもなほ各母音の特色たる音質を保つて、それぞれの本來の母音に代用されることがある。その音響的構造は、近時の研究によつて明白になつたのであるが、音響物理學の專門的事項に屬するので、こゝには立入らない。これを音聲發生の見地からすれば、いきの聲

位で發せられた母音である。すなはち母音の無聲化されたものは、その聲帶における機制においてまつたく積極的調整を施さないもので、その點でかの[h]と異なることいふまでもないが、その聽取における感じが[i̥]は「ヒ」の頭音に類し、[ɯ̥]は「フ」の頭音に類するものであつて、その音響學的性質における近似を否むべきではない。こゝに注意すべきは、母音の無聲化されたものが該當の本來の母音よりも多大の呼氣流出量を要求するものであるといふことであつて、それがいきで發音されるものであることを想起すれば、この事柄は當然として理解されるであらう。いはゆる無聲母音は、單に消極的な、「こゑを伴はない母音」[i̥]や[ɯ̥]とせずに、むしろ積極的に「いきで發音した」一種の噪音[i,]乃至[ɯ,]とするのが、理論上むしろ妥當である。

二五　音聲轉化の方向

語音の連絡において、調音のすべり、または調音運動の節約を生じるのは、つまり調音の共通なものを作り出すといふ一般的傾向によると見ることができる。ある者がこれに隣接する者をひきつけてその調音に變化をおこさせ、自己と共通な調音の要素をもたせるやうにするのは、つまりなるべく一回ですまされるやうな調音を欲するためであつて、その本づくところは、筋肉運動における全體化的

傾向に存するわけである。連音における音聲の轉化は、主としてこの運動の經濟から生じることであつて、ある音にひきつけられて隣の音が全部または一部分それと共通な調音をするやうに變化される傾向は、特に同化（assimilation）の名稱で總括される。前に述べた調音のすべりも、こゑの節約も、同化といふ傾向のあらはれと見ることができる。同じやうな運動の經濟に本づいて生じた語音の脫落といふ現象は、同化といふ項の中に攝することができないが、その發生の能因にいたつては、まつたく別種のものではなく、いなむしろ全然同一のものであることを思ふべきである。

たとへば、〔ŋ—m〕や〔ŋ—n〕のやうな連音は、〔mm〕や〔nn〕となるので、この場合に〔ŋ〕が〔m〕または〔n〕に同化されたと考へることは、從來普通の説明法である。しかし〔mm, nn〕はそれぞれ〔m:, n:〕であつて、各二つの同一鼻音の連結ではなく、一個の長い鼻音である。〔ŋ〕が〔m〕または〔n〕となるといふのは粗雜ないひ方であつて、〔ŋ〕が〔m〕または〔n〕と異なる調音をすてゝ共通な調音をとり、その結果調音がことごとく共通となつて連續した一個の長い鼻音となつたのである。〔ŋ—k〕＞〔ŋk〕，〔ŋ—t〕＞〔nt〕の場合もまつたく同じわけで、たゞ共通な調音が一部分だけに存する點がちがふに過ぎない。音聲の同化といふが、それは種々の調音運動に規定されてゐる出來上つた結果としての音聲についていふのではないので、その音聲を規定する調音運動における共通能因の成立をいふに外ならない。

國語における音聲轉化は、母音の脫落と同時に同化が行はれて生じるものが多い。そして母音の脫落を誘致する所以のものは、つまりこれを挾む子音間の共通乃至近似の調音運動が連繋融合しようとする傾向であり、その傾向を助成するものは、ある種の母音の自己主張の力の薄弱と調音運動の節約の條件を具備する事態とに外ならない。語音脫落の要因は、子音の場合にあつても母音の場合と規を同じうする。そして一般に音聲轉化の現象を見きはめるためには、縱に歷史的に各時代の發音を系統的にたどり、橫に地理的に各方言の音聲差異を分布に從つて追ひ調べることが必要であるから、いまにはかに企及しがたい。以下たゞ東京語の現在にあらはれてゐる音聲轉化の有樣を概觀するにとゞめて、東京語における調音運動がどのやうな轉化を誘ひやすいものであるかを示し、いさゝかその音聲轉化の方向を察知しようとする。

國語において〔ŋ〕が同化によつて容易に〔m〕や〔n〕になることは、すでに人の知るところで、〔ŋ〕の項下に少し說き及んだことである。鼻音の本質的特色は、いふまでもなくその鼻腔內の空氣の振動による音の性質に存するのであつて、特に國語にあつては、鼻音における口腔の調音域如何はあまり重きをおかれない傾がある。〔m〕・〔n〕・〔ŋ〕が同化によつてきはめて容易に互に轉換するわけもそこにある。かやうにして、これらの鼻音は最もよく互に融通されるのである。

かやうな次第で、〔ŋ〕は「テンカ・テンキ」〔teŋka, teŋki〕のやうにそのまゝで連る場合もあるし（尤も後の場合にはその調音域はずつと前にすべつて「ニ」の頭音〔n〕に近い〔ɲ〕に傾くわけであり、〔ŋ〕を以てあらはすべき「まへのし」の〔ŋ〕になる）、また「シンポ・シンバシ・シンマイ」の場合のやうに〔m〕の部位での閉鎖で連ることもあるし、「トンチ・オンド・シンノリ」の場合のやうに〔n〕の部位での閉鎖で連ることもあるし、それから「ハンシ・ケンサ・デンワ」〔hanʃi, keŋsa, deŋwa〕の場合のやうに〔ŋ〕の調音が保たれてゐることもある。また母音の脱落によつて〔m〕・〔n〕が鼻音または破音に連るとき、「ヨミテ」→「ヨンデ」〔jomite>jonde〕、「ナニカ」→「ナンカ」〔nanika<naŋka〕、「イクモノカ」→「イクモンカ」〔ikɯmonoka<ikɯmoŋka〕のやうにかはる。それから「コンチ・マインチ」〔kontʃi, maintʃi〕のやうな「ニチ」→「ンチ」〔nitʃi<ntʃi〕の轉化はよく東京語で聞かれるところである。

さらに母音が調音運動を節約されて、單にわたりとなり、或は次の音に同化攝取されてしまふ例を「イヤ」→「ヤ」〔ija>ja〕、「ウマレ」→「ンマレ」〔ɯmare>mmare〕の語などに見ることができる。かういふ轉化に際して、アクセントの如何がその成立に關係することは注意すべきである。「ウミ」（海）のやうな場合には、現在の東京語では前例のやうな轉化を普通には示さない。アクセントの關係から〔m〕に先行する〔ɯ〕母音が輕く發音されるやうな場合に、この種の轉化がおこりやすい。「ウマウマト」は今

では「マンマト」を正常の發音としてゐるやうな次第である。そして特に〔ɯ〕と〔m〕との間にこの關係が存立するのは、〔ɯ〕における脣の接近が〔m〕の調音に同化されやすいのによる。

國語において最も變化しやすい音は、「ラ」行の子音〔ḷ〕である。前に述べたやうな、その調音における特異性がこの音をきはめてすわりのわるいものにする。特に〔t〕・〔n〕に同化されやすいのは、舌尖の調音運動において相接近した關係を有するために外ならない。動詞の活用に「て・た」のつく場合などに〔-ḷit-〕＞〔-tt-〕の轉化がおこることは、關東地方の言葉における一般的現象である。〔-ḷéḷ-〕のやうな連音が〔-dd-〕となる轉化は、東京語には存しないが、ある關東方言（房州など）には、「ケレドモ」を「ケッドン」とするやうな例が多々ある。またこれを「ケンドモ」のやうに鼻音化する方言もある。東京語では、この際〔ḷ〕を脱落させる傾がある。「ソレダ」を「ソッダ」とし、「ダレダ」を「ダッダ」とするやうに鼻音化を避ける關東方言のある方面の傾向は、(7)〔-dd-〕を避ける東京語にはあらはれない。しかし東京語には、

「ミルナラ」→「ミンナラ」〔miḷɯnaḷa＞minnaḷa〕

「スルナ」→「スンナ」　〔sɯ̈ḷɯna＞sɯ̈nna〕

のやうになる場合が不用意の口語には間々あるし、

「ヤリナ」→「ヤンナ」

「オトリナサイ」→「オトンナサイ」

「オオリノカタ」→「オオンノカタ」

などのやうに〔-ɾi-〕>〔-nn-〕の轉化の例はきはめて多い。また、

「イカレナイ」→「イカンナイ」

などのやうに〔-ɾe-〕>〔-nn-〕の轉化も行はれる。のみならず、

「タマラナイ」→「タマンナイ」

「アタラナイ」→「アタンナイ」

のやうに〔-ɾa-〕<〔-nn-〕の轉化も同樣にかなり行はれる。

〔ɾ〕と母音、または母音と〔ɾ〕との連音が、往々〔ɾ〕だけになることは、既に說いたところである。すなはち「アルノダ」が〔anda〕となるやうな音の脫落は、しば／＼行はれる。かやうな場合には〔ɾ〕は、つひに舌尖の反展といふ運動をも節約して、つぎの調音に移るのであつて、そのためにそこに聞かれるのは、〔ɾ〕の「さしわたり」(*on-glide*)だけといふやうな有樣になる。そしてさういふものとしての〔ɾ〕が、すこぶる母音的であることは、容易に想見し得るところである。かういふ成行から〔ɾ〕の調音はつ

ひに消滅して、まつたく母音となつてしまふことが、やはり往々觀察されるのである。「ケレド」から「ケエド」や「ケド」になるやうな轉化は、東京語に普通に見られるものである。一般にかやうな〔i〕の脫落は、國語の種々の方言にすこぶる廣く行きわたつた現象である。

　この同化は、母音の無聲化において著しくあらはれてゐるが、また子音と子音との間にもおこるはずであり、また母音の影響による無聲子音の有聲化もあり得るわけである。「コトダ」→「コッタ」〔kotoda〕>〔kotta〕の轉化は、前者の例と見做されようし、[8] いはゆる「連濁」は、後者の例に外ならない。常陸地方では、同化による無聲子音の有聲化、および母音のみならず有聲子音の無聲化が行はれる。

　つぎに東京語に

「バカリ・バッカリ」→「バカシ・バッカシ」
「ヤッパリ」→「ヤッパシ」
「カラッキリ」→「カラッキシ」
「コレッキリ」→「コレッキシ」

のやうな轉化が見られ、ある地方の方言に「マワリ」を「マワシ」とし、「ワタリ」（あたりの意）を「ワ

タシ」とし、「アカリ」を「アカシ」とし、「アンマリ」を「アンマシ」とするやうな轉化が行はれてゐる。これは〔ḷi〕が無聲化された結果生じたものと解することができる。〔i〕の口形を用意して發音された〔ḷ〕、すなはち「まへのし」の〔ḷ〕のこゑが取り去られると、〔ʃ〕のやうな音が出るのである。かの卷舌の〔r〕が舌尖を非常に齒に接近させる場合に、摩擦のひゞきを伴つて〔r〕の音色に〔z・ʒ〕の音色が加味されることは、チェク語に例がある。チェク語において用ゐられてゐるř の文字は、さういふ音を示すものである。すなはち名づけて擦音的卷舌齒槽的r と稱するもの (*spirantisches gerolltes Alveolar-r*) である。それの無聲になつたものは、イスランド語に於けるhr であるといふ。イギリス語の〔ɹ〕、すなはちいはゆる「卷かないr」は、*e.g. tree* などの場合のやうにtr と連つたとき、無聲となり擦音的となるのであつて、馴れない耳には *tried*〔tɹaid〕と *chide*〔tʃaid〕との區別がつかないといはれてゐる。これらの場合についても、r 類の音が無聲化されると、〔ʃ〕に類する擦音を生じることがわかる。國語の〔ḷ〕は、前に述べたやうにr 類とl 類との中間的性質の音であるが、これが口蓋化を蒙つて口蓋と舌とが接近してゐる位置にあるとき、こゑを伴はない呼氣が擦過するならば、やはり〔ʃ〕に似た音を出すのである。この點から見て、前の例の〔ḷi〕〉〔ʃ〕の轉化は、こゑの節約による無聲化の結果といふべきである。

調音運動の節約によつて、「ナシ・アカシ」のやうな古代語から「ナイ・アカイ」の現代口語が出、「マシテ」が「マイテ」となつたやうな轉化は、歴史的事項に屬するが、現時の東京語においても、この轉化のあらはれを時に觀察し得るのである。その適例は、「ワタシ」から「ワタイ・アタイ」が出たことで、「ワタシ」も「ワタイ」も現在並存してゐる。不用意の發音で「シ」の調音にきびしさが失はれると同時に有聲化されて「イ」となる例も觀察される。(9) しかしこの種の傾向は、無聲化の方が優勢である東京語乃至關東方言には、むしろ珍らしい事例で、これと反對に關西地方では普通に行はれてゐるものである。現在の東京語の關する限りでは、この轉化は例外的であつて、自稱の「アタイ」の語などもむしろ關西系統のものと思はれるのである。

その他、「テワ」が「チャー」となり、「デワ」が「ヂャー」となる轉化や、「ホッテオク」が「ホットク」、「オイテイケ」が「オイテケ」となり、重母音が長母音となる轉化や、語の初頭以外の〔g〕が〔ŋ〕になることなどは、前述の次第もあり、また一般にも知られてゐるところであつて、特に説明する必要もない。すべて音聲轉化の能因として數へられる、調音域のすべり、調音時間のすべり、强めのすべり、長短の伸縮などは、それ〴〵種々の程度で東京語にもあらはれてゐるはずであるが、現在の東京語といふ狹い範圍での觀察だけで　その轉化の方向を見きはめることはまづ出來ないのである。音聲

學的用意を有する各地方言の比較研究がもつと進歩し、一方には文献學的研究が遂げられて、兩者相俟つてはじめて音聲轉化の理法が明かにされるであらう。

さて國語における音聲の同化の現象を通じて總觀するに、いはゆる退行的（*regressiv*）に作用するものが、十中の八九を占めてゐて、進行的（*progressiv*）に作用する場合は、ほとんど先行の鼻音による母音の鼻音化および連濁における有聲化ぐらゐのものである。母音の無聲化は、多く退行的および進行的の二樣の影響によつて生じる。かのフィン・トルコ語系に見られる母音諧和（*Vokalharmonie*）といふやうな進行的同化は、國語にはあまり見られないと思ふ。[10]

註（1）Sievers: *Op. cit.*, S. 181 ff.

（2）「ザ」行の子音がむしろ〔dz〕であることは前に述べたところ。ただ時に〔z〕も聞かれるのである。

（3）神保格『國語音聲學』前出一二四頁。ただし氏が「キャ」行の連音は、口蓋化した〔k〕と〔j〕〔i〕と母音〔a〕などとの連結したものであるに對して、「シャ」行の連音は一箇の單音〔ʃ〕と母音との連結したものであるとして、これをひとしく「拗音」と呼ぶの不當を述べた點は、かならずしも首肯しがたい。音字の表記法をはなれて、ただちに調音の推移そのものを觀察するなら、「直音」と「拗音」との差別を立てる根本動機が、むしろ連音の樣式、すなはち調音運動の内面的推移の方式如何に存したことを察すべきであらう。かく解するならば、わづかの修正を以て、「直音・拗音」の別を存置することも、さして不都合ではなくなる。その修正とは、「ヤ・ユ・ヨ」の連音を拗音の部に編入するのである。これは『拗音といふ名稱を

單に「口蓋的な」音の意味にする』（同書一二四—五頁）のではなくて、さらにその根本動機にさかのぼつて、その連結の樣式、調音の推移に着眼して、その分類を認容するのである。この意味で、「クヮ・グヮ」のごときも、さしつかへなく拗音と名づけることができるわけである。

(4) » La nasalisation des voyelles et des consonnes plosives et fricatives, phénomène très fréquent dans plusieurs parties des États-Unis, est tout-à-fait inconnue à Tōkyō, excepté dans le chant professionnel, qui est excessivement nasillard, et dans le langage du théâtre classique, surtout les anciennes pièces historiques et les drames appelés *nō*. « Edwards: *Op. cit*, p. 78.

日本の歌曲「うたひもの」や「かたりもの」において、往々著しい「はなごゑ」が聞かれるのは事實であるが、しかしそれは「ほめたこと」とは考へられてゐない。

(5) 庄内地方では「ショー」が「ヒョー」のやうになるが、やはり同樣の關係から生じたのであらう。また「イカハッタ・イキナハッタ」などは、「イキナサレタ・イキナサッタ」から轉じたのであり、その他[s]が[h]に、[ʃ]が[hi]に轉化する例は、各地の方言に少くないやうである。

(6) 第十章三二參照。

(7) かういふ地方では、「ソッダラ」（それなら）、「ソッダッベ」（それならば）などといひ、「なぐるぞ」を「ナグッド」とするなど、同化による[l]の轉化がごく普通に行はれる。

(8) 方言には「コトヂャ」から「コッチャ」となるものがある。同じ理由によるものである。また「コトダ」を「コンダ」とす

る方言もある。

（9）ヨシコサン一が一ヨイコサン一のやうに發音されたことを聞いたことがある。

（10）Edwards: *Op. cit.*, p. 55. また石黒魯平『國語教育のための音聲學』（昭和三）、七〇頁「母音諧調」參照。

第九章　音節

二六　音節の意義

語音の一つながりにおいて、母音の變化によつておのづからいくつかの節が分たれ、數個の音節を形成して聞取られる。調音の原語たるラテン語 *articulatio* は、節をつくつて連結するといふ意味をもつてゐるといふが、これはやがて語音の連續における具節的といふ特徴を示すものである。かく音節は、ごく自然に聞分けられるもので、種々の言語において、その構成素たる單音を分析するに先つてまづ語音連鎖の一つ〳〵の環として拾ひ出されたのは、やはり音節であつた。したがつて、一音節を一つの文字であらはすといふ方式の文字が、諸種の言語について少くないのである。假名や諺文や漢字のごときは、かやうな音節文字の例と見ることができる。

ところが嚴密に音節とは何かと定義することになると、なかなか面倒である。國語については、たとへば歌謠などにいはゆる一音として數へられたものは、多くは假名の一字に該當するもので、「三十一文字」といふ稱呼も行はれた次第である。これは大體一音節にあたるものと見ることができるが、

きつとさうとは限らない。殊に話言葉について見る場合には、事情がすこぶるちがふのである。古代ギリシアでは、音節とは一つの母音または重母音が單獨に、あるひは一つのまたは一群の子音と結合して構成した音聲單位と考へられた。この定義は、事實上ギリシア語における音節の構成を考へるときには適當であり、ラテン語においても、また後のローマンス語においても、あまり大した不都合を生ぜずに適用されるであらう。國語の場合でも、ほゞ同樣である。ところが、さらに他の言語を考察するときは、この定義の妥當しないことを知るにいたる。すなはち母音を含まない音節が成立し、ある種の子音が母音のやうに音節支持の任務をはたすのを、イギリス語やドイツ語の例について見出すのである。

古代インドの文法家は、サンスクリットの l および r を「韻」すなはち母音に編入し、母音の數だけ音節が成立するといふ原則を以て臨んだ。サンスクリットについては、かういふ風に考へるのが適切であり、これによつて十分說明もできるのであらう。

音聲學の發達は、音節の見解を現實の話言葉に立脚して建設することを企てしめた。すなはちまづ音聲の發生における生理的機能から音節の成立を推究しようとし、さらにその言語の知覺においてこれを求めようとするのである。音聲の發生的見地からは、音節の能因を一に呼氣、二に調音に歸せら

れる。音節の特性を呼氣の條件および知覺の條件によつてすべて理解しつくさうとしたのは、十九世紀における音聲學者の試みであつて、或は呼氣壓の輕重の交互にあらはれる語音連鎖において、呼氣の強まる度數だけ音節が成立し、呼氣の弱まるところに音節の切れめがあると解した論者もある（メルケル・ストルムなど）。その一方には、音節の本質を音聲の「きこえ」（*Sonority, perceptibilité, Schallfülle, Schallstärke*）に求めるべきであるとする論者がもる（ブリュッケ・トラウトマン・フィエートル・イェスペルセン）。きこえは同じ強さの音聲について見ても同一ではなくて、音質に應じて異なる性質である。發音された句について、そのきこえの極大や極小の箇所ができる。その極大すなはち山の部分が音節に相當し、その極小すなはち谷の部分が音節のきれ目に相當すると考へる。これがこの論者の見解である。さらに以上の說を併せて、二種の音節、すなはち「呼氣音節」（*Drucksilben*）および「知覺音節」（*Schallsilben*）を認める人もある（ジーヴェルス・テヒメル・パシ）。そこで母音の連音〔aia〕のやうなものについては、呼氣壓の分布によつて音節が分たれるのであるが、子音と母音とで合成された音聲群にあつては、母音と子音との間のきこえの差異が音節を成立させる能因となる。たとへば、ドイツ語 *alle* のごときは、一呼氣頂を以て發音されるが、そのきこえからいへば、きこえの最小の部分によつてきれ目ができて、前後の二部にわかれる。それによつて二音節となると說くのである。

二七　音節の成立條件

音聲の發生において、呼氣が一つの必須條件であることは、すでに述べた。呼氣壓とは、大氣の壓力と氣道内部の空氣の壓力との差に相當するもので、この壓力の差は、胸腔の低下によつて生じ、その低下は横隔膜および肋間筋の弛緩の結果である。かくおほむね呼氣は筋肉の積極的收縮によるのではなくて、消極的弛緩によつて營まれること、吸氣と大いに異なる點である。そこで、普通の呼氣はまつたく所動的に營まれるものである。そして通常の談話に用ゐられる呼氣では、大抵この種の所動的運動が行はれるだけである。さうでなく、さらにいはゆる呼出筋がはたらく場合には、呼氣の範圍および速度が變化され、呼出の過程が一般に種々に修正される。何等かの抵抗に反して呼出するとき、すなはち力を入れた談話や叫びや、うたふ、吹くなどの場合には、積極的に腹筋の作用があづかつて、呼氣の時間的經過および强さを規定するのであつて、この際には、腹腔内の臟器とそれと共に横隔膜を胸腔に向つてもち上げるのである。

一定の音質（音色）。高さおよび强さをもつ音聲について、その呼氣の流出が終始一樣である場合に

は、その單位時間における流出量を測定することができる。これをそれ〴〵の條件の下におけるその音聲の「平均流出量」(*débit moyen* [Roudet]) と名づける。他の諸條件が一定してゐるときは、

一、流出量は音聲の强いほど多く、

二、流出量は音聲の高いほど少く。

三、流出量が最も多いのから最も少いのに至る音聲の系列は、無聲破音――有聲破音――無聲擦音――有聲擦音――あきの狹い母音――あきの廣い母音の順序になる。

この實驗的研究の結果は、音節の考察に對して重要な結果[1]をもたらすものである。

呼氣量に關するルデの實驗的研究の結果によれば、たとへば*d*の調子で(すなはち振動數一四五の高さで)一秒間できるだけ同一の强さを以て種々の母音を發音して試みると、各母音の平均流出量は、センチリートルを單位として次のやうな數値を示すのである。

[u]	二二・六	[ɔ]	二一・七	[o]	一六・五
[a]	一三・一	[ɑ]	一五・七	[ɛ]	一六・二
[ə]	一九・六	[e]	二一・三	[i]	二六・三

すなはち口腔のあきの狹い母音ほど、その呼氣流出量が大であり、その發音に多量の呼氣を要する

のである。

さらにルデは、種々の聲位における母音の平均呼氣流出量を檢して、やはらかな「こゑたて」でする母音が、かたい「こゑたて」による母音よりも多くの平均呼氣流出量を要し、いきの「こゑたて」では一層多くの流出量を要するといふ結果を得た。たゞし、レティやハーンの實驗成果はルデのとちがひ、やはらかな聲位のときの方がかたいのよりも少量の呼氣で足りるといふ。

また子音については、有聲子音が無聲子音より、また擦音が破音よりも少い平均流出量を要する等の事實も實驗によつて確められた。帶氣破音はもつとも大きな流出量を要するものである。

呼氣の速度についてルスロの試みた實驗成果を見ると　口腔の閉ぢ方の度を增すと共に速度も增すのである。トーリス(Thooris)は他の方法で試みてルスロと同じやうな結果を得た。また氏は實驗の結果から、口腔の閉ぢ方の增すと共に、その壓も加はると論じてゐる。

そこで他の條件が一定であるときは、呼氣の平均流出量は、

一、氣管內の空氣の壓力と共に增し、

二、聲門の開き方の度に伴つて增し、

三、口腔における通路の狹まり方の度合、したがつて調音の努力に伴つて增す。

呼氣流出量がこれらの條件の如何によつて急に變化を示すやうな場合に、音節が新しくなるといふ

感じが生じるのである。かくて流出量の差異によつて音節の知覺が成立つ。すなはち、

(イ)ある母音をある强さで發音し、急にその强さを變じて强くし、または弱くするときは、二音節との印象が與へられる。その差異は、氣管内の空氣の壓力の變化によつて生じ、流出量の變化がこれに伴つておこる。

(ロ)またある母音をある高さで發音し、急に他の高さに、すなはちそれより高いまたは低い調子に移るとき、もう二音節として感じられる。この場合の差異は、聲門の開き方の差異に相當する。しかしその移り方がなだらかで、きはだつたところがないこと、普通の話言葉における高さの變化のやうなものである場合には、單一の音節といふ印象が與へられる。

(ハ)また一つの母音を發音するとき、その呼氣を一時的に止め、または緩めるとき、その休止ごとに新しい音節が知覺される。

(ニ)一つの母音から急に他の母音に移るとき、二音節の印象を生じる。この場合には、その差異は口腔の通路（調音域）の狹まり方の度合がかはるのに應じる。たゞしその差異が漸次的にあらはれるときは、一音節二重母音の感じを與へられる。

(ホ)さらに一母音を發音しながら、發音器官の一部で氣流を狹めまたは沮むこと、たとへば[b]を出

すときのやうに唇を接觸させるか、〔s〕と發音するやうに舌を口蓋に接近させるかすると、かうして生じた子音は、呼氣の連續中において急激な變化をおこさせ、新しい音節の最初を形づくるのである。〔a ha ha ha, a sa sa sa〕など。それ〳〵の母音は、かやうにして隣接する子音によつて限られた音節の中心となる。

從來普通に、母音は呼氣の勢の極大な場合に、子音はその極小な場合に相當すると考へられた。實驗的研究の結果は、この考へ方のあやまりを示した。普通の談話の場合には、胸腔を下げるための筋肉の運動が行はれることは稀であつて、積極的な呼出の努力といふことが行はれない。しかし氣管の内部に幾分か强い壓力が生じて、そこに多少の勢乃至努力の感じが生じる。さて氣管内の氣壓は、口腔における氣流の通路の小さいほど、換言すれば調音の努力の大きいほど大である。それは母音の場合よりも子音の方に强く、擦音よりも破音につよく、あきの大きい母音よりもあきの小さい母音の方につよい。ゆゑに音節の中心たる母音が氣管内の最小氣壓に應じ、また調音の努力の最小にあたる。その一方では、音節のきれ目となる子音は、氣管内氣壓の最大に應じ、また調音の努力の最大に相當する。(3)

音節と音聲の知覺との關係

發音された一つの語、または一つの句について人がその音聲を知覺するのは、その成素たる語音の一つ〱を一樣に捉へるのではない。たとひ發音する者がなるべく同一の强さを始から終まで繼續するやうにつとめても、各語音が同樣の目だゝしさを以てあらはれるものではない。語句は平かにすべつていく音聲の流ではなくて、抑揚あり波瀾ある流である。聽覺にとつての印象を曲線にあらはすとすれば、それは極大・極小を示す波線となり、その極大すなはち波の山は母音に、その極小すなはち波の谷は子音に相當するわけである。それで、聽覺的知覺の點から見て、音聲にはその音色によつて知覺しやすさ、すなはち耳にたつ程度にいろ〱の差等がある。これが「きこえ」と名づけられるところの性質に外ならない。

「きこえ」とは、ドイツ音聲學者のいはゆる *Sonorität*, *Schallfülle* 〔Sievers〕, *Hörbarkeit* であり、イギリス音聲學者のいはゆる *sonority*, *audibility* であつて、フランスにはまた *perceptibilité* 〔Roudet〕の名稱も行はれる。

ある語音が他の語音よりも大きな「きこえ」をもつといふ關係を、種々の語音について次々に定めると、「きこえ」の序列が出來あがるわけである。他のすべての條件を一定にした場合には、すべて「きこえ」の大きな語音が他のものよりも遠い距離で聞取ることができる。この點をとらへて、實驗的に

各種語音の「きこえ」を比較した結果によると、

一、母音は子音よりも「きこえ」が大きい。

二、あきの大きい母音は、概してあきの小さい母音よりは「きこえ」が大きい。

三、孤立した語音についてゞなく、語または何について見るときは、子音のうち、顫音・側音および鼻音が摩音よりも、また摩音が破音よりも大きな「きこえ」をもつ。

四、短距離で聞くときは、有聲子音が無聲子音よりも「きこえ」は大きい。

五、他の條件が同一ならば、語音は强さの大きいほどよく聞える。またある限度内では、調子の高いものほどよく聞える。

如上の事實から音節成立の條件を考へることができる。語句は具節的流動であつて、「きこえ」の大きな瞬間を不連續的に呈露すると感じられる。この各の瞬間は、一音節の中心に相當する。聽覺印象の平滑な連續を切斷する一切の原因が、新しい音節の始を決定する。この効果を示すに至らしめる能因は、

(a)强さの急な變化

(b)高さの急な變化

(c)ころまたはいきの休止または減退

(d)一つの語音からきこえの相近い、しかも相異なる他の語音への急な推移(たとへば〔ɯ͡è〕(上)、〔oi〕(甥)などの場合)

(e)きこえのずつと大きい語音の調音(例、〔ababa, ajaja, atn̥ta〕)

この能因は、まさに呼氣流を變改するところの能因と同一であること、一見して明かである。呼氣流におけるあらゆる變化は、かく知覺におけるそれ〴〵の變化に照應するのである。それであるから音節は、もつぱら呼氣の條件によつてのみ、あるひはひたすら知覺の條件によつてのみ定義すべきではない。ジーヴェルスは呼氣の條件を隨意的とし、知覺の條件すなはちきこえの差異によるものを不隨意的とし、二種の音節、すなはち「呼氣音節」(壓の音節)と「知覺音節」(おとの音節)とを認めたのであるが、もはやかく二種の音節を別々に立てるべきではない。一方の呼氣の條件、調音の條件と、他方の知覺の條件との間には、完全な協合の關係が成立するのである。

呼氣の點からすれば、音節は一の呼氣的單位であつて、その中心が氣管内の氣壓の極小(數學上の意味における)に相應じ、その切れめが呼氣流の急激な變化の刹那に相應じるものである。

調音の點からすれば、音節は調音運動の一構造であつて、その中心が音聲の通路の開張に相應し、

その切れめが聲門の開き方の度合の急激な變化に相應するものである。知覺の點からすれば、音節は聽覺的知覺上の一單位であつて、その中心が比較的大きな「きこえ」を有する語音に存し、その切れめが知覺の急激な變化に相應するものである。

そこで、一つの音節から次の音節に移るときは、いづれにしても急激な變化が存し、それは同時に呼氣流と調音運動と聽覺的知覺とに影響を與へるところのものである。

音節の區分

一語または一句をその音節に分解することは、實際上しば〳〵必要な事項である。この音節の區分（*syllabation*）は、筋肉的および聽覺的作業として自發的に營まれる趣がある。教養のすこぶる乏しい人にあつても、語句を音節に區分すること、いはゆる「ひろひ讀」のやうなことは、自由自在にするのであつて、ブローカの中樞との聯合纎維の切斷によつて生じる一種の失語症においてさへ、患者はその調音不能の語中の音節數に相當するだけの回數の呼出運動を營むといふことである。

さて音節の區分は如何やうな法則によつて行はれるか。各音節の中心（重心）は、きこえの極大に應じ、同時に呼氣および調音のエネルギーの極小に應じることは、既に述べたところである。かく同時に極大と極小とに該當するものとして、まづ第一に擧げられる語音は、母音である。次に第二に流

音および鼻音〔l〕・〔m〕・〔n〕・〔r〕であり、第三には擦音および破音である。したがつて、(一)いづれの語音でも、相等しいまたは一層大きな「きこえ」、および相等しいまたは一層小さな呼氣力の語音によつてゞなくては、その所屬の音節の中心(重心)から分割し去るを得ないことを知るべきであり、(二)もし二つの語音が、きこえの一層小さくて呼氣と調音との一層大きなエネルギーをもつ語音によつて區ぎられるならば、この二語音は、相異なる二つの音節の部分となることを見るべきである。

音節の中心たる語音を知ることは容易であるが、音節の連鎖について各音節の終りまた始まる點を精密に決定することは、はなはだ容易でない。ルスロのいふやうに、幾何の環を有するかをのみ考慮されるやうな連鎖の環が音節である。そのつなぎ目は相隣る環の間において多少勝手に區分されるのである。理論的に精密にその境界を判定することは、實際上困難な場合が少くない。

しかし多くの場合についていへば、ある子音が音節區分において先行の母音に從屬するか、または後至の母音に附隨するかを知ることは、さまで困難ではない。特に國語の場合については、かやうな點はすこぶる明かである。

(甲) 一子音が二母音の中間に介在するとき。たとへば〔aka, asa〕などで、その子音のはじめ(始時相)がつよくて、をはり(終時相)が弱いならば、子音は先行の母音に附屬する。またはじめ

が弱くをはりが強いならば、子音は後至の母音に隨ふ。前の場合には事實上知覺　極小が子音の與へる聽覺的印象の終の方に存し、後の場合にはその始の方にある。スウィートによれば、イギリスの *a' a'l times* と *a ta'l man* となどにおける連音の間に存する相異がこれに相當する。

(乙) 二母音の間に長子音(「促音」・「二重子音」または *Gemination*)が挾まれてゐるとき。たとへば［alla, assa］などでは、子音のはじめ(始時相)もをはり(終時相)も、同樣につよい。知覺の極小すなはち「きこえ」の谷(最も弱い部分)は、子音の中程にある。なぜかといふに、子音の前部は先行の母音に、後部は後至の母音に從屬するからである。ゆゑにこれが普通には二重子音すなはち同一子音の二つ重つたものとして取扱はれるわけである。相異なる二つの破音が二母音の間に介在し、その一つが入破音だけで、他の一つが出破音だけで結びついてゐるやうなときも、これと同樣である。

(丙) 二母音の中間に破音とそれにつゞく［l］または［r］の連音が介在するとき、破音のはじめ(始時相)は一般によわく、二子音のをはり(終時相)は、ほとんど同時である。知覺の極小、すなはちきこえの谷、したがつてまた音節のきれ目は、子音群の前にある。

その他の場合には、音節のきれ目は、はつきり定めがたく、多少とも任意に區分が行はれる。それ

ぞれの言語に語法上の習慣が出來てゐて、それには音聲の事實に卽した音節區分をある程度までは容れてゐるが、しかしまたイギリス語法においてするやうな、語源的理由にもとづいてする區分の仕方も行はれてゐる。これは傳統的な規則によるものであつて、この場合には音聲學的な區分とすこぶるくひちがふことが少くない。

開音節および閉音節

一つの音節が母音で終るときは、その音節を「開いてゐる」といひ、また「開音節」と名づける。それが子音で終るときは、これを「閉ぢてゐる」といひ、また「閉音節」と名づける。また開音節の母音は「自由」であり　閉音節の母音は「拘束」されてゐるといはれることがある。比較言語學的に音聲の變遷を考察する上には、かういふ區別をすることが、かなり大切である。

ジーヴェルスは、母音と子音との連接において、子音が母音の力の極大な瞬間にあらはれるとき、その音節のアクセントを「つよぎりアクセント」(*stark geschnittener Akzent*)といひ、子音が母音の强さの衰へかけた瞬間にあらはれるとき、その音節のアクセントを「よわぎりアクセント」(*schwach gesch. Akz.*)と名づけて、二者の區別をしてゐる。[4] これは音節の開閉の事實を説明するための用意から出たのであるが、イェスペルセンも評したやうに「きり」(*geschnitten*)といひ、「アクセント」といふのは、こ

の場合には妥當を缺いてゐる。またスウィートのいはゆる *close stress* と *open stress* との差別も、やはりこの事實を說かうとして立てたものである。[5] 母音が次に來る子音と連接する樣式としては、イェスペルセンの用ゐてゐる「たしかなかゝり方」(*fester Anschluss*)と「ゆるいかゝり方」(*loser Anschluss*)との名稱を以てする區別が、むしろ適切であらう。[6] 前者にあつては、子音のはじめ(始時相)がつよく、したがつて母音の力の大きいうちに早くあらはれる趣があつて、かういふ場合には音節が閉ぢられたものになる。後者にあつては、子音のはじめがよわく、そのをはりに至つてはじめて聞えて來るのですなはちその瞬間には母音はもはや聞えなくなる。そのとき音節は開かれたものになる次第である。

二八　國語における音節

國語における語または句にあらはれる音節は、おほむね開音節であつて、母音が獨立して、または子音と母音とが結びついて一音節を構成する。五十音圖に示される母音および子音と母音との連音はみな一音節を構成し得るものであり、事實一音節たることを普通とするものである。ゆゑに從來假名一字の示す音聲はみな一音節と認められ、それについては多くの異論もなかつた。たゞ母音の長いものや二つ重なるものなどについては、多少見解の異なるものもあつた。またこゑの脫落によつてきこ

えが大いに減じるものであるから、無聲化した母音の音節構成に對する關係も、攻究すべきものがある。そして發音の實際について觀察すれば、國語においても鼻音や流音のごとき子音が音節の中心となるやうな場合も、時としてあらはれることを認めなければならない。また「促音」については音節をどういふ風に考へるべきか、韻文における音脚と音節との關係は如何などの事項が、こゝに問題となるのである。

子音と母音との連接によつて音節を構成するものは、破音と母音、擦音と母音、流音と母音、鼻音と母音などの場合を數へることが出來るが、いづれも子音が次に來る母音と結びついて開音節を構成すること、ほゞフランス語などのローマンス語におけると同樣である。すなはちその母音は、次に來る他の子音に對しては「ゆるいかゝり方」で連つて、そこに音節のきれ目を作るのである。たとへば、「カラカサ」においては、[ka—la—ka—sa] のやうに [a] が四つの音節の中心をつくり、それだけ次の子音との間にきこえの谷をはさんで三つのきれ目を立てる。

重母音の場合には [aĭ] または [ĭa] における [a] と [i] とは、その呼氣の流出において連續的に變化して、特にその中間にゆるいかゝり方のやうな連接を認め得ない。副音 [i] はおほむね定位音（*Stellungslaut*）たるに至らず、單にわたり（*Gleitlaut*）たるに止る。そのきこえは、>[aĭ] のやうに漸弱的に、または <[ĭa] の

やうに漸强的になる。この點において二母音の並立して ǎǐ ǐǎ のやうに連接する場合と趣を異にする。〔ǒǐ, ǐǒ〕、〔ɯ̌ǐ, ǐɯ̌〕 および 〔sɯ̌ǐ〕 などにおける重母音は、しば〳〵、それ〴〵一音節をなして國語の實際の發音にあらはれる。

鼻音は、その音質においてすこぶる母音的であるが、國語にあつては、やはり母音に連接して二重母音のやうに合して一音節を構成し、その副音たる地位に居ることもしば〳〵ある。〔ɑŋ〕（館）、〔ɛ̀ŋ〕（縁）など、大抵の場合にかういふ風に發音される。この際幾分アクセントも關係する。これと反對に、二母音の並立的連音のやうに、鼻音が母音の次に連つて別に獨立の一音節を營むこともしば〳〵ある。これは國語の場合には特に認めなくてはならない點である。東京語で普通に發音された〔ɔŋ〕（音）、〔tèŋ〕（點）などの語例において、これを認める。この場合には、母音〔ɔ〕または〔ɛ̀〕と鼻音との間に、ゆるいかゝり方があつて、きこえの谷を介在せしめる。すなはちこれらの語は、二音節に發音されるのが普通である。（この語例が前出の語例とアクセントの點で異なることを注意すべきである。）

子音〔l̩〕が音節の中心を形成する場合は、口ばやな會話などにたび〳〵見ることである。そしてその調音の關係上「スルンデス」のやうな語句では、〔ɯl̩n̩〕のやうな連結の出來ることが多い。この連音について見ると、〔l̩〕が音節の中心となり、〔n〕が副音的地位を占める。この際〔ln̩〕は、〔l̩〕における舌尖を

口蓋から離してしまはずに、たゞすこしその位置をすべらせるぐらゐで、(もちろん舌の兩側は閉鎖の位置まで動くのであるが、)たゞちに〔n〕の調音に移ることが多く、その連結はすこぶる密接である。

母音の無聲化は、母音が無聲子音の間にはさまつてゐる場合、または無聲子音の次に來てこれに續く有聲音のない場合に生じる。無聲化の行はれやすい母音は、前に述べたやうに無聲子音にはさまれた〔i〕・〔ɯ〕および〔ɯ̈〕であつて、語句のをはりでは「……デス」、「……マス」などの〔sɯ̈〕がしばしば母音を失ふ。すなはち無聲子音〔p〕・〔t〕・〔k〕・〔s〕・〔ʃ〕・〔ts〕・〔tʃ〕と母音〔i〕・〔ɯ〕・〔ɯ̈〕との連音において、母音が無聲化されまたは脱落することが少くないのである。

無聲の破音または擦音が母音〔i〕に連接して、その母音が無聲化した場合には、その子音は〔p〕・〔k〕・〔s〕・〔t〕と異なつて、母音〔i〕の口形をもつてした「いきのおん」(*geb'ascm? Laute*)を伴ふ「まへのし」の〔ʃ〕・〔tʃ〕である。これを示すのに普通便宜上〔pi̥〕・〔ki̥〕・〔ʃi̥〕・〔tʃi̥〕のやうにし、「無聲母音」〔i〕を書添へる。この際破音はその入破のみを以てすることなく、必ず出破を生じて、それによつて母音〔i〕に固有な一種の感觸を出すのである。かく母音〔i〕の口形を以てした破音は、その出破の瞬間にすでにその母音の感觸を帶びてゐるのであるから、それだけでも〔p〕・〔t〕・〔k〕とはつきり區別される。「ピカピカ・キク・シタ・チカラ」などにおける無聲化した「ピ・キ・シ・チ」において、無聲母音〔i〕は大いにきこえを減

じるから、これを普通の母音と同様に見ることはできないが、母音〔i〕の〔i〕たる特有の音質を保つ「いきのおん」であつて、その音響學的性質においてとにかく本來の母音に代り得るものである。

かやうに、こゑをぬかれた母音は、他の無聲子音と同樣に、母音としての「きこえ」をもたないのである。そして破音と連接して無聲化された場合、たとへば「キク」の例において、その〔ki〕は普通にはなほ「キミ」などにおける無聲化されない〔ki〕と等しい、またはそれに近い音時量をもつて發音されるのであつて、語頭の子音〔k〕の出破の瞬間と、次の子音〔k〕の發音との間に若干の時間がはさまり、そこには呼氣流出量の多くして「きこえ」のすこぶる小さな部分があらはれる。この部分を破音〔k〕のをはりと見ることもでき、また一種の「いきのおん」すなはち無聲の〔i̥〕と見なすことも出來る。かくて「キ」は、その「きこえ」が〔k〕の出破の瞬間に極大で、それにつゞく極小を經て次の連音にうつるのである。かうして「きこえ」の山と谷とをそなへて、知覺上にもおのづから獨立的地歩を保つ概がある。ゆゑに、こゝに〔ki̥〕は一個の音節を構成するとすべきである。この關係から「キキトル」のやうな連音において、〔k〕は必ず一々それぞれ破裂を遂げて發音され、破音の節約は行はれないのであり、母音の無聲化にもかゝはらず音節の數は變化なく保たれるのである。

この關係は他の破音および半閉鎖音（或はアフリカータ）の場合についても同樣に認め得るのであ

る。そしてかやうな音節を他の音節と比較してみると、「きこえ」の極大(山)がその絶對値においてすこぶる小さいものであるから、これを一種の「副音節」(*Nebensilbe*)と名づけて普通の音節と區別するといふのにも多少の理由があるとすべきである。

この關係は、破音と母音〔ɯ〕との連接して、しかも無聲化した場合にも存立する。「ククル」のやうな連音にあつても、語頭における無聲化した母音は、子音〔k〕の調音中に融合して〔ɯ〕の口形で發音された〔k〕になる。そして必ず破裂の過程を經て次の子音との間に調音運動の不連續を生じるのであるから、やはり「キ」の場合と同樣に考へるべきである。かくて「クサ」〔kɯ̥sa〕は事實上〔ksa〕である。たゞこの〔k〕は〔ɯ〕の口形を以て發音されることを必要條件とするのであつて、すなはち〔$k^{ɯ}$〕である。こゝでも破音〔k〕そのものが一音節を形成すると考へることは、妨げのないところである。その「きこえ」の微弱な點から見て、かやうな音節を副音節と呼ぶのが適當であるとしても、これがなほ一單位たり得ることは、普通の音節と異ならないのである。

かやうな場合に「無聲母音」の存立を想定するのは、言語學などで音節を說く際、破音そのものを一音節と認めるのに好都合な考へ方であつて、「無聲母音」があつて音節支持の役割を演じるのでそこに一音節が形成されると說くならば、よほど考へやすくなるわけである。「無聲母音」の本性の如何は

理論的に考へればすこぶるこみ入つた問題であるが、たゞ言語の史的考察において、語音の轉化のあとをたどるやうな場合に、こゑの同化によつて無聲化を生じたのであり、しかもいはゆる母音性、すなはち各母音の特色を保つてゐるのであるから、こゝに「無聲母音」の介在を認めることは、實際上の便宜が多大なのである。

無聲の擦音が母音の無聲化または脱落によつて次に來る無聲の子音に連る際には、二つの場合が生じる。その一は、次に來る子音が破音である場合で、すなはち〔sɯ̥, ʃi̥+p, t, k……〕のやうな連接である。こゝに連音〔sɯ̥〕は、〔s〕またはやゝ長い〔s:〕であり、〔ʃi̥〕もまたは事實上〔ʃ〕またはやゝ長い〔ʃ:〕であるゆゑに、こゝに連音は事實上〔ʃ〕+p, t, k……〕である。さてこゝに擦音から破音の入破に至るまでは、破音の出破以後と明かに分れるのであるから、擦音はある程度で獨立すると考へられる。たゞ前に述べた破音の場合とおのづから異なるところがある。一般に擦音は破音よりも「きこえ」が大きいといふ關係から見て、「スッパイ・アシタ・ケシキ」〔sɯ̥ppaĩ, aʃta, keʃki̥〕などにおける擦音と破音との連接について、「きこえ」の點から音節の數をきめることができる。すなはち〔sɯ̥p-paĩ, a-ʃ-ta, ke-ʃ-ki̥〕のやうに分たれる。ただし發音時の條件、すなはち「かゝり方」によつては、〔aʃ-ta, keʃ-ki̥〕のやうに二音節に分たれることもある。

第二の場合は、次の子音がやはり擦音〔s〕・〔ʃ〕であるやうな場合で、そこに「スソ・シソ」などの語頭の子音〔s〕・〔ʃ〕は、たゞちに次の擦音に連接して、その中間にきれ目をつくり得ないから、獨立した地位を得がたい。二語はかくて、ともに〔so, sːo〕のやうな一音節となつてしまつて、辨別することができなくなる。この種の連音にあつては、おほむね無聲化を避けて母音を發音するといふ手段で、語義の混同をさけるといふことが有意的に行はれる。無聲化の條件が十分にそなはつてゐるにもかゝはらず、〔sɯ̈so, ʃiso〕のやうに母音を特に無聲化せずに、いかしておくのである。「スシ・シシ・スス」などの語例で、第一音節が無聲化されないのも、同じ理由によると思はれる。

そも〳〵國語における音節に關する見解は、從來多く文字に牽制されて、往々正當な理解を與へないうらみがあつた。大體假名一字が一音節に當るといふ考へ方は、子音と母音との連音については格別の不都合を生じないけれども、重母音や長母音や「促音」の場合には、そのまゝでは當はまらない。實際の發音においては、國語にも重母音や長母音があらはれ、また母音の脫落のごとき現象も著しいのであるが、音聲の變遷の史的考察においては、從來かういふ經驗的立場よりも、むしろいはゞ可能的に音節を考へる方を便宜とする傾向がある。すなはち母音の連接は、つねに重母音とせずに並立的連音として取扱ひ、また無聲の子音と子音との間に母音を挾んで、いはゞもとの母

音を復活させて發音することができるといふ可能性にもとづいて、某語の音節は幾個であるといふ風に考へるのである。これは、いはゞ可能的または理想的音節として、實際に發音されるまゝの言葉について觀察された經驗的・現實的音節と區別しなくてはならないものである。言語史においてむしろ可能的音節を考へるのを便宜とするやうな事情があると思はれるのは、古代の國語の音聲學的性質がその巨細の點まで明かにされてはゐないといふ理由によるのである。

エドワーヅは〔s〕・〔ʃ〕について、句尾において音節的となることを見た[7]。

二九　長母音と促音

長い母音は、その強さも高さも變化なく平かに進行するとき、その音質が前後を通じて同一であるはずだから、呼氣の流出量の點からも、また知覺における「きこえ」の方面からも、前後相等しい平滑な流動である。この場合には音節區分は生じないのである。また、おとの強さについていへば、漸強<aまたは漸弱>aのやうに、ある一方に向つて推移するか、あるひは<>a、<=>aのやうに推移する場合には、母音の中途で切れ目を見出すことができない。高さ、すなはち調子の變化についても同様である。かういふ場合には、音節は區ぎりがなくて、始から終までたゞ一つである。これに反して、

強さにɑまたはɑのやうな、あるひは一層精密にいへば<><>ɑのやうな推移があるときは、その強さの山と谷とによつて「きこえ」にも異なりを生じ、全體が二つの部分に分れるといふ感じを生じる。高さについても同様な關係が成立つ。

國語の語彙における長母音は、〔ɑː〕が比較的に稀で、字音を除くと〔èː〕も少い。感動詞に〔ɑː〕の長母音が用ゐられること、他の言語と共通なところがあるが、いづれも著しい高低および若干の強弱の變化があらはれて、感情表出の役目をするのが常である。その高低運動は、かなり複雜なすがたを示すのであるが、〔ɑː〕や〔mɑː〕や〔sɑː〕や〔jɑː〕などが、往々二つの音節に分れるといふ感じを與へるのは、高低運動およびこれに伴ふ強弱變化が、ある區ぎりを示すやうな効果を生じるによる。しかしその區ぎりは、日常の談話、特に口ばやな對話における發音では、さほど著しくなく、むしろかの重母音における「きこえ」の分布を思はせるやうな、ジーヴェルスのいはゆる「二つの頂を有する」(*zweigipflig*) 一音節を形成することが多い。(8) もちろん、ゆつくり丁寧に發音された「鳳凰・兵營」〔hoːoː = hoooo, hèːèː = hèèè〕などの語例における長母音は、その始と終とにかなりの高低の相異を示すと共に、強さの分布についても、時としてはかなりはつきり分けられることがある。しかし普通には、長母音の内部にきれ目を求めることは困難であつて、あるひは二つの頂點を示すやうなものであつても、全體として一音節と

見做すべき呼氣および知覺上の推移を營むものが多い。

　言語史的に觀察すれば、國語における長母音は、字音を除外すれば、おほむね同化によつて生じたものと見られる。「おほい・とほい・とほる・もうす（まをす）・いふ・ぬふ」などの歷史的假名づかひの示すところが、大體古代の國語の發音をあらはすものとすれば、最初二音節の連音であつたものが中間に介在する子音を撤し、または相異なる母音が一つの母音に融合して、同じ母音をつらねるやうになつたのであらう、その場合に、もとの音節の傾向が殘つて、往々同一母音が二音節に發音されたとも想像される。そして重母音の副音を主音から獨立させて二音節に發音することが、格別語義の上に影響をするものでないやうに、今日でも長母音を別々に二音節のやうに發音することは、格別異樣な感じを伴はずに（よし多少のわざとらしさは避けられないにしても、）しば／＼行はれるのである。殊にゆつくり丁寧に發音しようとする場合には、往々この仕方が用ゐられるのであつて、國語における重母音や長母音が、忽ち二音節になるやうなこと、二音節の連母音がたちまち重母音または長母音になるやうなことは、きはめて普通にありふれたことゝいはなくてはならず、この間に互に變換し得る關係の存すると想定するを適切とすべきものがある。たゞ、それ／＼の語彙に固有な一定型のアクセントによつて、ある種の連母音を重母音または長母音に、他の種の連母音を二音節にするやうなお

のづからの傾向を示すといふことは認められるのである。

國語にいふところの「促音」は、事實上長子音であるが、單に音時量の大きな子音といふだけのものではない。その特色は、「促音」とか「つまつた」音とか名づけられるやうに、知覺の上からするときは、一種の緊張の感を與へるところにある。それが何によつて然るかを見ることは、音節における「促音」の地位を知るために必要である。

ひとしく「促音」といはれるうちにも、連續する語音と連續しない語音、すなはち擦音と破音との場合がそれ〴〵趣を異にする。すでに見たやうに、東京語では、ほとんど有聲子音の促音といふものが行はれないやうな有様で、促音は無聲の子音に限るといつて差支ない狀態である。[9]

さて「促音」としての擦音は、つまり擦音の時間を長くしたもの、また「促音」としての破音は、その閉鎖の過程を長くして音の中絶をしばらく維持するものであるが、それ以外に「促音」としての特性、すなはち「つまる」といふ感じをひき起すものがある。たとへば(atta)における〔at-〕の連結は、〔ata〕におけるもののやうに、ゆるいかゝり方をせずに、かたい、たしかなかゝり方をする。〔assa〕にあつては、母音〔a〕から子音〔s〕への連接の仕方がゆるいのであるが、「アッサリ」などゝいふ場合の〔as-〕の連りは、かたくたしかなかゝり方である。したがつて、〔assa, atta〕にあつては音節區分は〔a-sa, a-ta〕

のやうであるが、〔assa, atta〕のやうな連音では、さうではないのである。[10]

この種の促音において、どこに音節のきれ目があるか。促音に類する有聲の連續的語音について見れば、明瞭にこの邊の關係を解することが出來る。たとへば「マイヤ」〔mai-ia〕のやうな連音にあつては、その「きこえ」の關係が、〔mai-ia〕のやうになつて、〔i〕母音の連續の中間に「きこえ」の極小が存する。連音の前半は前の〔a〕を中心として一音節を形成し、後半は後の〔a〕を中心として一音節を形成する。連續的〔i〕は、そこで一面前半に從屬して重母音を閉ぢ、他面後半に依存して重母音を始める。「アンマ」〔amːa＝amma〕のやうな連音にあつては、アクセントの理由によつて長い〔mː〕の前部が「きこえ」の優越を得て一音節となり、〔a-m-ma〕のやうに區分される場合もあるが、またしばしば〔am-ma〕のやうに二音節に區分されることもある。この場合には、長子音〔mː〕は、その中間に音節のきれ目をもつのである。

また「タッシャ」のやうな無聲擦音の「促音」たる場合では、前と同樣の關係で〔taʃ-ʃa〕の二音節が長子音〔ʃː〕の中間に區ぎりを見出すのである。擦音は場合によつては一音節を形成して、〔ss〕または〔ʃʃ〕のやうな場合にもなほ〔s-s〕、〔ʃ-ʃ〕のやうな連り方をすることが全然不可能であるといふのではない。母音の脱落によつて〔su-ski〕のやうな連り方をするときにも、時としては〔s〕を音節的にして〔su-su-ki〕また

は〔a:-ri〕のやうになることがある。しかし「促音」におけるものはこれと全く異なり、「アッサリ」においては〔as-sa-ri〕のやうに區ぎられる。すなはち音節のきれ目は長い〔s〕の中間に見出されるわけである。「促音」としての破音は、その閉鎖の時間、すなはち入破と出破との間の沈默の時相を延引されるのである。たとへば〔atta〕の例において、〔t〕の入破は、母音のこゑの强さの衰へないうちに强く行はれるので、そのかゝり方はかたい、たしかなものである。次にその出破もつよく行はれる。調音における努力は、普通の破音〔t〕の場合よりも著しく大である。かく最初音の〔at-〕間には、たしかなかかり方があつて音節のきれ目を容れないから、音節の區ぎりはその次に來る無音の中間過程のうちに落ちる。そこで全體は〔at-ta〕のやうな二音節に分けられるのである。

かく、破音における促音の特徴は、その入破におけるかゝり方の他と異なるところに存し、これに伴つて調音の努力も大となるのであり、かの急激な聲門閉鎖によつて結果される發聲中止の場合に見るやうな一種の急迫の感、つまるといふ感じも生じるのである。「促音」、「つまる」音の名稱の由來もこゝにあると思はれる。擦音の場合にも、そのかゝり方は同樣であつて、氣流が狹められた通路を過ぎる際、また急迫の感がある。これは呼氣の流出量、したがつてその壓力に關聯する事項であつて、共に流出量の增大、したがつて氣管內の氣壓の增大を見るのである。

この「促音」の中間時相は、無音（破音の場合）または「きこえ」のごく小さい擦音の繼續であるから、その前に連る母音と對比するとき、この點に「きこえ」の著しい變化を見るのである。こゝに相當の長さを保つ「きこえ」の極小は、連音の全體的結構において一種の潜勢的語音たる價値を帶びて來、主として語音の時間的布置によつて規定される國語の音律において、一つの拍子單位を占めるやうな觀を呈することは、人の知るところである。客觀的には無刺戟の間隙であるところのものが主觀的には意識の零でなく、かへつて內容を以て滿された緊張の狀態であることは、拍音系列の主觀的リズム化などの心理的事實において例證されるところである。[11] かういふ關係において促音たる破音の無音の間隙や、同じく促音たる擦音の中間過程も、なほあるひは潜勢的音節の意義と價値とを保つと見ることが出來よう。後に說くやうに、語の複合におけるアクセントの形成について見るに、促音をもつ語音が、あたかも促音の間隙を一音節と見做して數へた音節數の語音と同樣な關係を示すといふ事實は、[12] 促音の意義を考察する場合に逸することの出來ない事項である。たゞこの種の事實は、特に促音だけに限つてゐるのではなく、これだけの理由で［atta］のやうな連音を三つの音節に分けることが必要だとするのは、妥當ではない。さうすることは、音節の本義に適合しないのであるが、たゞ促音の特殊の意義性能を認めることは必要である。

「促音」に相當する音聲現象は、ヨーロッパ語にあつては特にイタリア語に見ることができる。またドイツ語・イギリス語などでも、連語の場合にこの現象を見ることがある。ゆつくり發音した場合の *gibt Trost* [gipt tro:st], *Lärm machen* [lɛrmmaxn] などに生じることのある「子音重複」(*Konsonantenverdoppelung*) すなはちゲミナチオーン (*Gemination*) は、[13] 大體において「促音」である。そしてドイツ語で長母音または重母音の次にゲミチチオーンが生じにくい傾の見えるわけは、ジーヴェルスの解するところによると、長母音又は重母音が漸弱的に發音されるのを常とするからである。たとへば、*not tun* をゲミナチオーンすなはち「促音」に發音することは不可能ではないが、普通 [no:-tu:n] のやうに發音されることが多いのは、長母音 [o:] における漸弱的進行によるのである。また一般に「促音」を導くにもつとも好都合なものは短母音であつて、長母音と短子音とが結合し、短母音と長子音とが結合しやすいといふことは、イタリア語において特に著しい表現をもつところの傾向である。[14] その關係は、ある程度まで國語でも見られる。もつとも國語の場合には、長母音の次にも促音のあらはれることがしばしばあり、一見かならずしもヨーロッパの諸語と一律に論じがたい觀があるが、「促音」に先行する長母音の強さの布置を考へると、結局また同一の理法に規定されてゐるとも思はれる。アクセントの關係によつて輕重の漸強的進行をする場合には、次に「促音」の來ることが容易であり、こ

れに反する場合には、「促音」の來ることが必ずしも容易ではない。「ズーット、サーット、ピューット」などの例をもつて察すべきである。

長子音は必ずしも「促音」ではなく、「促音」は單に長子音といふだけではない。力づよい發音をするために、普通の子音（主に無聲破音）を「促音」にするといふ一種の音聲轉化を、むかしは軍記物などに見たが、いまはまた東京語において往々聞くのである。すなはち「アカッツラ、カマッキリ、カタパシ、ウデップシ、クビッタマ、クイッパグレ」など。これはおそらく昔からの關東方言の一特色であらうが、そこにおのづから「促音」の心理的意義を察せしめるものがある。

三〇　可能的音節

母音と母音との連接が重母音を構成するか否かは、多くその語のアクセントの如何によつて定まる。〔ɑ〕と〔i〕との連音が漸降的アクセントを示す場合には、その強さの進行もまた漸減的となつて、〔ɑĭ〕といふ重母音を構成する傾向が著しくあらはれる。しかし次に説くやうに、國語のアクセントは必ずしも常に強さと相伴ふものではないので、この種のアクセントの場合でも〔ɑ-i〕のやうに、二音節を形成することも可能である。もちろん普通の談話の際には、殊に東京語でさうであるが、かういふアクセント

の場合に重母音として一音節に發音するのが原則といふべき有樣である。

ところが、アクセントの關係が異なると共に、同じ〔ɑi〕の連音も容易に各個獨立の音節として區分されることがある。「貝」は單獨では〔kɑĭ〕と一音節になるのが普通であるが、「貝がら」のやうに複合してもとの漸降的アクセントを保たなくなると、〔kɑ-i-ŋɑ-ɾɑ〕のやうに〔i〕が獨立の一音節となつてくる傾がある。かやうな重母音〔ɑ-ĭ〕と連母音〔ɑ-i〕との間の相轉じる關係は、他の重母音〔oĭ〕・〔ɑŭ〕などの場合についても同樣であつて、國語で單語の音節を固定的に考へることの困難な事情がこゝにある。長母音についても、時としてはこれが長母音となり、時としてはまた（大抵アクセントの如何によつて）二音節の連音となると見做すべき場合がある。

ある音節の母音が無聲化された場合について見るに、發音時の事情またはアクセントの關係から無聲化の條件が取去られるとき、母音は容易にまた自然に「こゑ」を回復して來るものである。「アリマス」のをはりにおける無聲化された〔sü〕の音節は、「アリマスガ」の連音において容易に母音の「こゑ」を回復して、〔-süŋɑ〕となる。また「クサ・クキ」のやうな語では、「ウ」のこゑは回復される機會を得ないが、しかも一音節たる職能をもつてゐる。その「きこえ」は貧少であるから、これを正常の音節と見ることが不適當の觀があり、副音節の名によつてわづかにその地位を保たうとする有樣であ

るが、アクセントにおける諸種の關係に徴しても、これに一音節なみの待遇を與へることが、言語史的の考察、語法上の論究に便利である。

經驗的音節は、上に述たやうに、その時々の話しぶりの緩急により氣分により前後の關係によりアクセントによつて、すなはち內外の事態によつて必ずしも一定してはゐない。特定の時處における發音について特定の姿をとつてあらはれる次第のものであるから、ある單語が何箇の音節から成立つかは一概にいふことができない。かやうな事情は、語法などの論究に當つて多少の不便を來すことを免れない。そこで、如上の經驗的音節に對して、いはゞ理想的な可能的音節を考へ、某語の音節はしかじかであつて、その特殊の塲合に應じて或は變化することがあるとするのは、便宜上普通に行はれる說き方である。これは音聲の事實的研究に對しては關係するところが少いのである。この種の假想的音節を以て經驗的音節を律しようとするのは、事理の混同であつて、ために音節の眞義を不明にする。この點は從來しばしば人の陷つた謬見であつて、また國語の音節論の徹底を缺いてゐた所因である。しかるにアクセントの說明に際しては、可能的音節の考へ方を便利とする事情があるので、この種の音節と事實上の經驗的音節との關係について、こゝに少しく說明を試みよう。

五十音圖における連音は、おほむねその連結がすこぶる緊密であること、既に述べたとほりである。

國語においては、これらの連音が音節または語形成の單位として、從來これを分析することをさほど必要とはしなかつた。さういふ點でこれを連音上の單位と認めることができ、その理由を調音運動の融合または混合といふところに求めることができる。いはゆる「直音」にあつては、おほむねその調音運動が一部分で融合してゐるし、「ヤ・ユ・ヨ・ワ」の諸連音およびいはゆる「拗音」にあつては、調音運動がある位相において混合してゐるとすることができる（事實上は調音の漸次的推移であるが）。かやうな次第で、重母音たる本性を有する「ヤ・ユ・ヨ・ワ」のやうな連音や「拗音」をも便宜上連音上の單位と見なして、普通の重母音〔aĭ〕・〔aŭ〕などゝ別にして考へることができる。この種の重母音は、場合によつて〔a-i〕・〔a-ɯ〕のやうに二音節にされる可能性をもつてゐるが、〔ĭa〕・〔ŭa〕のごときは、二音節となることがないといふ點から、語法の論究などの上で、本來同樣な重母音であるこの二種の連音もその取扱方をかへることが必要になる次第である。

さういふわけで、五十音圖における單音（母音）および連音（子音と母音との連結）、その他「拗音」および「ン」の音を、通常一つの單位と見なすことに便利がある。これを「つゞり」または「熟音」と名づけて特徴づけるならば、一つゞり、一熟音は、經驗的には必ずしもそれだけで一音節を構成するものではないが、特に一音節として發音しても妨げのないやうなものである。「挨拶」は〔aĭ-sa-

ts(ɯ)〕となるのが普通であるが、また〔a-i-sa-ts(ɯ)〕のやうにすることは、國語ではたゞに差支がないのみならず、むしろ丁寧ない ひ方とされる。普通の會話などでは〔dam-paŋ〕のやうに二音節にするものを、時にはゆつくり〔da-m-pa-ŋ〕（談判）のやうに四音節に發音することができるだけでなく、かへつてその方が本格の發音とされてゐるやうな次第である。

そこで、事實上音節は發音時の事態如何によつてかなり差異があるが、某語は幾音節から成るといふ場合には、一種の理想的な可能的音節が考へられてゐるのである。かういふ事がらは、音聲學におけるよりも、むしろ多く語法の說明などの場合に必要がある。ドイツ語の *ja*, *können* は、それだけ場合にとつて二音節に〔ja-a, kœn-n〕のやうに、または一音節に〔ja:, kœn:〕のやうに發音されるが、理想的・抽象的に考へて前者は一音節、後者は二音節といふことにしてゐる。あるひはむしろこゝにも音節の語を避けて「つゞり」または「熟音」の語を用ゐるならば、混同を救ふに利があらう。

國語において從來考へられたのは、おもにこの可能的音節である。その數が各語について一定してゐるのは、經驗的音節と趣を異にする點である。辭書においてするやうに各語の音節の構成を說く場合には、これを以てするのが便利である。たとへばアクセントを考察するに際して、二熟音の語と三熟音の語とのアクセントの形式は、或は同規を以て律しがたいものがある。熟音の數に應じて、アク

セントのあらはれ方に變化がある。そしてアクセントの種類によつて、重母音が生じやすいとかいふやうな傾向があらはれる次第である。從つてこれらの點を解明するためには、熟音の考へ方が必要でもあり利するところもある。熟音すなはち可能的音節いはく、一熟音とは、きこえの適當な布置を以てすれば一音節となることができるやうな連音の單位である。

註(1)Roudet: De la dépense d'air dans la parole et de ses conséquences phonétiques, *La parole*, 1900, n° 10, p 210-230; (Roudet: *Phonétique générale*, p. 182. 所載による)

(2)Réthi: Experimentelle Untersuchungen über den Luftverbrauch etc., *Wiener med. Woch.* 1913; Dahn: Traciati volumetrici del diverso consumo d'aria nell'attacco di voce ecc., *Archivio ital. di otologia, rinologia e laringologia*, 1914. (Panconcelli-Calzia: *E per. Phon*,[2] S. 23 所載による)

(3)ルデの所說による。それは呼氣の平均流出量に關する氏の實驗の成果に立脚するもので、これによつて音節に實驗音聲學的根據を與へようと試みたのである。が、これは一つの定說ではなくて、一方には音節を實驗音聲學的に定立し得ないものと見る者も少くない。例へばスクリプチャは、音節を以て「物理的にまだ定義されてゐない、そして多分定義されることのあり得ない」概念とし、「恐らく音聲の流動における異同の感じにもとづいてゐる本來心理學的な概念であつて、辭書編纂には必要だが、言語の物理學的考察にあつては、音節の如きはもと〳〵存在しないもの」と述べてゐる。(Scripture: *Anwendung der graphischen Methode auf Sprache u. Gesang* 1927, p. 43-4) カルツィアも、音節を eine von Psychologen und Linguisten aufgestellte Fiktion とし、音聲學的に研究し、その根據を求めようとするいは、夢想にすぎず、數學上の根(平方や立方などの)を求めるのに植物學的方法を以てするのと一般であると極論し、心理學的および言語學的概念

としてのみ存立すると斷じた。（Panconcelli-Calzia: *Exper. Phon.*,[2] S. 119）いまその所説を檢討することはできない。暫くルテの見解による次第である。

(4)Sievers: *Op. cit.*, p. 223.

(5)Sweet: *A Primer of Phonetics*,[3] p. 67.

(6)Jespersen: *Lehrbuch*,[2] p. 202. この名稱は Olaf Broch: *Slavische Phonetik*, 1911, p. 265. によつたものである。

(7)Edwards: *Op. cit*, p. 75.

(8)Sievers: *Op. cit.*, p. 219-220.

(9)mm＝m: nn＝n: のやうなものは、性質上促音に似るところがあり、いはゆる重子音（*Konsonantenverdoppelung, Gemination*）であるが、國語では普通促音の中に數へられてゐない。

(10)この關係をかつて金田一氏はかういひあらはした――「日本語は開音節を原則とする國語であるが、促音の場合の第一音節だけは閉音節だ」云々（金田一京助『日本語の音節法について、特に促音の研究』國學院雜誌第十九卷第八號、一五頁、大正二年）。なほ同氏の「國語の發音の根柢における特質」東亞之光第八卷第八號、大正二年參照。

(11)佐久間鼎「リズムと人生」その他高橋穣「心理學」、須藤新吉「ヴントの心理學」等のリズムに關する叙述參照。

(12)第十四章第四節參照。

(13)Sievers: *Op. cit*, p. 214.

(14)Panconcelli-Calzia: *Italiano*, p. 18. なほ次の第十章第三三節參照。

(15)Jespersen: *Lehrbuch*, p. 201.

第十章　語音の長さ

三　絶對と相對の長さ

語音は、その調音運動において、ある最少限度の時間を要求するもので、その時間は、語音の音質によつてかなりの出入がある。普通の場合には、語音の調音に要する最少時間を幾分超過して、實際の發音は行はれるものである。これを超過することが少く、最少限度に近い調音を以て語音の發せられる場合には、その話し方は速かであり、これを超過することが多くなればなるほど、その話しぶりはゆるやかなものになる。かく、語音の長さと話し方の速さとの間には一定の關係が成立ち、またその程度によつて種々の段階が分れる。音樂における速度（いはゆる歴時、また進動速 *tempo*）にグラーヴェ（*grave*）・ラルゴ（*largo*）・レント（*lento*）・アダージョ（*adagio*）・モデラート（*moderato*）・アッレグロ（*allegro*）・プレスト（*presto*）などの種々の別が立てられると同様に、話し方の速さにも緩急のさまざまが見られるわけである。

さて、話し方における速さを左右する能因は、次の數件である。

（一）話す人の生理的體質および心理的性格によつて、個人的差異があらはれる。心身の活潑に動く少年は、老年の人よりも話し方が速く、性急な人は氣の長い人よりも話しぶりが速かである。

（二）感情によつて時處的差異があらはれる。怒や喜の情緒においては話し方が速かになり、悲しみや心配などの場合には遲くなる。すべて興奮した場合には、同じ人について見てもその他の場合よりも早口になる。

（三）習熟した言語、たとへば母國語を話すときは、外國語をつかふときよりは速かである。また會話のときは演說のときよりはやい。それから丁寧にいはうとする心持がある場合には、話しぶりがおそくなる。

かういふ次第で、話し方の速度にはかなり差異がある。演說などではやいのになると、一分間に三百音節に及ぶといふ。日常親近者間の會話や、暗記してゐる文句の朗誦や、大急ぎの讀書などでは、速度がこれ以上にも達するやうである。

音節乃至單音の絕對の長さは、あきらかに話し方の速さ（*Redetempo*）によるもので、話し方の遲いほど音節乃至單音の長さはそれだけ長い。しかし音聲學上最も重要なのは、音節乃至單音の絕對の長さではなくて、むしろその相對の長さ、すなはち相隣る音節または單音に對しての比較的の長さまた

は語音の一集團全體の長さにおける割合である。これは樂曲における各音の相對的の時價がその絶對的の長さよりも重要であり、演奏は明白にその長さの關係、すなはち相對的長さを示すところの音符に適合するやうにしなければならないのと同樣なわけである。話し方にあつても音樂におけると同樣に、そのテンポの差異に應じて各音の絶對の長さに差異を生じるが、相對的の長さはほとんど變化しない。かやうな語音の相對的長さは、語法上「音時量」(*Quantität*)と呼ばれる。

古代ギリシアの文法家にとつては、語音の長さといへばすなはち母音の長さのことであつた。ギリシアの音律法では、いはゆる短母音と長母音とが區別され、短母音の構成する音節の長さが音律上の時間の單位「原時間」(*Χρόνος πρῶτος*)であつて、長母音の構成する音節の長さは、まさにこれの二倍に當るとされてゐた。國語における長母音も短母音の二倍時程と普通に考へられてゐて、音律法においては、ギリシアの長母音と同樣に取扱はれてゐる次第である。

音時量は音質や語音の他の量別的性質たる高さや强さと同樣に、重要な音聲學的性質である。單語の音聲上の形式は、他の諸性質と共にその語音殊に母音の音時量にも規定されるのである。ゆゑにこれをみだりに變更することは許されないのであつて、それ〳〵の單語における音時量は一定の限度内において多少の趨異を示すのであるが、その限度を超えることはできない。特に國語において、長母

音と短母音とを混同すべきでないことは、ほとんど自明の事柄である。

音時量は他の音聲現象と關聯して、その條件に應じて趨異を示すことがある。たとへば、イギリス語・フランス語・ドイツ語などにおいて、アクセントによつて強められた母音が他の母音よりも長くなるとか、一群の子音の次に來る母音が短いとかいふ關係を見るのである。これは「音聲的條件による音時量」(*phonetisch bedingte Quantität*)または「外的に定められた音時量」(*äusserlich bedingte Quantität*)といはれる。[1] また音時量がまつたく傳統によつて定まり、音聲的條件から豫見し得ないやうな姿を示す場合がある。これは「歷史的・語原的條件による音時量」(*etymologisch bedingte Quantität*)または「內的に定められた音時量」(*innerlich bedingte Quantität*)である。この二種の音時量は、いつも容易に辨別し得るわけではない。また音時量の差異が同時に音質の差異を伴ふことは、イギリス・フランス・ドイツの諸語において見られる事實である。イギリス語に普通長母音といはれるものが、南イングランド地方の發音では重母音になるやうなことも、こゝに留意すべきである。

同一の音質の母音の長短は、ほゞ耳に聞いて辨知することができ、これに習熟するときは、長短の二種別のほかになほ數階の別をも立てることができる。ところが子音の音時量は、耳に聞いただけでは容易に知りがたい。また母音の音時量も誤認されやすいのであつて、同一の長さの母音も、聞く人

によつて長くも短くも聞こえることがある。(2) また話し手が長く發音したつもりでも、母音によつてさほど長くなつてゐないといふやうな場合もある。かやうに音時量の感じとその客觀的な價との間の關係は、單純ではない。

長さを精密にはかるためには、實驗音聲學において用ゐる時間的測定法を施さなくてはならない。それは、音聲を記錄する種々の裝置によつて得た記錄曲線を、同時に記錄した時間線と對照して、ある語音がどれだけの時間を持續したかをかなり適確に知るのである。

國語における母音の長短を測定するために著者の主として用ゐた手續は、喉頭記音器(Krüger-Wirth の *Kehltonschreiber*)。マレー氏タンブールおよび毎秒百回の複振動を營む電氣音叉をヘーリング氏動力用キモグラフィオンに適用するものである。

この實驗は、もつぱら東京語について、特に母音と子音との別を明かにするために、おほむね各音節に無聲の子音を含むやうな語例を選んだ。喉頭記音器は聲帶の振動すなはちこゑのあるなしを示し、他のタンブールは口腔からの呼氣の記錄曲線を與へるので、大體いづれの時間點で母音がはじまり、いづれの點で終るかを知ることが容易である。

たゞ實驗の結果の解釋について多少考慮すべきものがある。母音が子音と連結されたとき、母音の

はじめが先行の子音のをはりと重なり、母音のをはりが次の子音のはじめと重なり合ふ。その中間にわたりが存し、母音と子音との兩者に共通な調音運動が極めて短い時間（一秒の百分の二または三）であるが挿入される。これはむしろ母音に歸した方がよいやうである。それは、このごく短い時間には、まだ子音がその獨自の音質を得るに至らず、またはすでに失つてしまふからである。またその一方には、聽覺に對して十分な印象を與へる母音の繼續だけはあるのである。かくて、二母音の間に介在する子音の長さは、子音の第二時相のみとなつてしまふわけである。子音が無聲の破音であるときは、その第二時相すなはち閉鎖の間はまつたく音が發せられず、耳に聽えるものがない。しかしこの時間は破音に屬するものと見るべきである。

ある母音が純粹に無聲の子音の間に介在するとき、その母音の長さは比較的明かに檢出することができる。聲帶の振動のはじまると同時に母音がはじまると見なし得るからである。

三二　母音の長さ

母音それ自體は、いくらでも「こゑ」のつゞくかぎりのばすことが出來る。古來の文法家は母音に長と短とを分けた。實用上にはこれで大抵事が足りたのである。さらに細分する必要があるときは、

ごく短い、半ば長い、ごく長いなどの語を附加して區別する。精密を要するときは、もとよりその繼續の時間を數字を以て示すべきで、その際あるひは百分の一秒を單位とし、あるひは千分の一秒（σ）を單位とする。

短母音の絶對の長さは、話し方の速さに應じてかはる。實驗的研究の示すところによると、子音の長さにおけるよりも、母音の長さにおける不平等の方がずつと大きい。普通の速さで發音した場合に耳で聞いて短い母音と思はれるものは、大體百分の六秒乃至百分の十二秒の間にあり、長い母音と思はれるものは百分の十二秒乃至百分の三十秒の間にあるといふことが、實驗の結果判明した。無論話し方の緩急によつて、長短母音の絶對の長さは、或はこれより長く、或はこれより短くなることがある。また單獨に發音された母音と、句の中にあらはれたものとでは、同樣な母音でも長さがちがひ、前者はいつも後者より長いものである。

次に著者の試みた二三の測定の結果を揭げよう。（第七表）こゝでは各單語を單獨に普通の速さで發音したものについて、前に述べた方法で記錄し、その繼續時間を算出したのである。なほ他の表をも參照すべきである。（第八、九表等）

第七表（單位 $\sigma=\frac{1}{1000}$ 秒）

（合羽）	k	ɑ	pp	ɑ
1.	(—)	120	(140)	97
2.	(—)	130	(150)	120
3.	(—)	130	(193)	135
（喇叭）	l ⏟ ɑ		pp	ɑ
1.	115		(192)	107
2.	142		(153)	108
	k	ɑ	pp	o:
1.	(—)	75	(150)	147
2.	(—)	70	(143)	160
（鐵砲）	t	è	pp	o:
1.	(—)	100	(130)	210
2.	(—)	127	(199)	236
		ɑ	k̇	i
（秋）	…………	103	(48)	147
（明）	…………	112	(52)	138
（飽）	…………	92	(55)	113
	k	ɑ	k̇	i
（柿）1.	(—)	128	(80)	150
（柿）2.	(—)	125	(82)	128
（牡蠣）1.	(—)	132	(80)	147
（牡蠣）2.	(—)	113	(65)	103
	h	ɑ	ʃ	i
（端）	(—)	108	(98)	168
	(—)	109	(53)	151

この表について見ると、〔a〕の長さは第一音節において最短〇・〇七秒から最長〇・一三二秒に及んでゐ、第二音節（語尾）では最短〇・〇九七秒から最長〇・一三五秒に及んでゐる。そのうちでも多くは〇・一秒、すなはち十分の一秒前後のものである。この表だけで見ると、アクセント形式における語音の高さが長さの大小に關係するといふ事實は、認められない。ピピングは語音の高さと長さとの二者から出發して調子アクセントの數量的關係を定めようとしたといふが、さういふ考へ方は、國語特に東京語について、一般には適用されないと思はれる。

短母音と長母音との間の長さの關係については、かつてブリュッケがドイツ語において一般に三對五に近い比をもつと唱へたが、これはすこぶる疑はしい。近來の研究によれば、大體において長母音はつねに短母音の二倍乃至三倍の長さを保つことが明かになつた。國語についての著者の所見によれば、同じ母音について見るとき、すなはち〔o〕と〔oː〕とを比較するやうな場合には、長さにおいて後者が前者の二倍に近い（三倍よりは二倍に近い）といふことができる。それ〳〵の母音を任意にとつて互に比較することはこの際無意味であつて、それによつて何等の確定的な結果をもたらし得ないであらう。國語における長母音の長さが、すこぶる偏差に富むといふことは、著しい事實であつて、これは長母音が短母音とちがつて引延ばすことのできる、かつ引延ばすことを要するものである故であら

う。引延ばすことを要するとは、短母音と區別されるために長さを異にすることの必要があるからで、これと區別されさへすれば、その長さは嚴重に何程と制限されるわけではないから、ある程度に自由に引延ばされるのであらう。

母音の長さ（音時量）がしば〳〵一定の音聲的條件に依存することは、前に述べたところである。音時量に影響するおもな音聲現象は、音色、隣接の語音、その母音の屬する連音の長さおよびリズムなどである。

（一）母音の音色、すなはち音質と音時量との間に相關の關係があることは、疑を容れないところである。マイエルがイギリス語について見出した母音の長さと音質との關係、(3)すなはち一つの母音の絶對的持續（長さ）は、その母音の調音に要する舌の高さによつて異なり、他の條件が同一であるかぎり、舌の高さの高いことを要する母音ほどその長さが短くなる傾向を示すといふ關係は、のちまたドイツ語についても確められた。すなはち、これらの言語では、同じ短母音のうちでも、〔ɑ〕が一番長く、〔o〕と〔e〕がその次で、〔u〕と〔i〕とが一番短いのである。國語についても短母音〔ɑ〕と〔i〕とを語頭の音節において比較するに、その間に著しい長さの差異を見るのである。（第八表）

第　八　表（單位 σ）

（磯）	i 60	s (84)	o 130
（いっそ）	i 58	ss (155)	o 115
（一層）	i 60	ss (170)	o: 230
（遺書）	i 50	ʃ (58)	o 92
	i	ʃ	o:
（衣　裳） （┌ーー）	60	(78)	158
（意　匠） （└ーー）	78	(70)	255
（一生）	i 127	ʃʃ (164)	o: 275
（息）	i 90	k˙ (90)	i 105
（一氣）	i 112	k˙k˙ (152)	i 82

すなはち語頭の音節における短母音〔i〕の長さが多くは十分の一秒以下であつて、しば〳〵二十分の一秒に近く、これを前の表の語頭の音節における〔a〕の長さと比較すると、共に短母音であるこの二母音の間に、すこぶる大きな差異のあることを見出すのである。すなはち〔i〕については〇・〇六

秒内外の長さを示すことが多いのに對し、〔ɑ〕の場合には〇・一二秒——〇・一三秒の長さが多くあらはれるのであつて、前者の長さは後者の半分にも及ばないほどである。なほ〔otɑmɑ〕（〔o〕=85σ, 〔t〕=49σ, 〔ɑmɑ〕=310σ）における〔o〕や、〔ɯtto:ʃi:〕（〔ɯ〕=80σ, 〔tt〕=190σ, 〔o:〕=180σ, 〔ʃ〕=107σ, 〔i:〕=220σ〕における〔ɯ〕の長さを見ると、ほゞ〔ɑ〕と〔i〕との中間の地位を占めることを知る。

ルスロはフランス語について母音の音色と音時量との間に次の關係を見た。すべて口のあきの廣い母音（〔ɛ〕・〔ɔ〕・〔œ〕など）と狹い母音（〔e〕・〔o〕・〔ø〕など）とが長く、中等度のあきの母音〔è〕・〔ò〕・〔ø̀〕が短く發音されるのである。しかしこれが母音の必然的關係によるのではなくて、フランス語に於ける傳統的習慣によると考へるべきことは、また氏の說いたところである。ドイツ語では、あきの狹い母音が長い母音で（たとへば、〔bi:tə〕における〔i:〕や〔zo:nə〕における〔o:〕）、あきの廣いまたは中等度の母音が短い母音である（たとへば〔bɪtə〕における〔ɪ〕や〔zɔnə〕における〔ɔ〕）。イギリス語にも同樣なことがある。この種の關係は國語の長母音と短母音との間には見られない。少くとも知覺される程度では行はれない。

（二） 隣接の語音がやはり母音の長さに影響する。これはしばしば音質の變化と相伴つてゐ、隣接の語音が母音の音色を少し變化するので、母音の音時量もかはるといふ次第である。

フランス語について觀察されたところでは、一般に有聲擦音が隣接の母音を長くする。その際母音はあきの小さいものになる傾を示すのである。〔r〕は先行の母音を長くするが、この場合にも母音の音色が幾分かはつてくる。すなはち、〔r〕に隣る〔e〕•〔o〕•〔œ〕はあきが大きくなり、〔i〕•〔u〕•〔y〕などはあきが小さくなる。子音群または重子音は、これに先行する母音を短くする傾がある。これはドイツ語でもさうであるが、こゝでは同時に音色の變化をも伴ふ傾がある。フランス語の子音の前にある通鼻母音はいつも長い。マイエルによれば、イギリス語では他の條件の同一なとき、無聲子音の前においてよりも有聲子音の前において、また破音の前においてよりも擦音の前において母音が長くなる。

國語においては、隣接の子音が母音の音色を變化するやうな現象も見られないのであり、そのために音時量が規定されるといふやうな場合も認めがたい。マイエルの指摘したやうな事實は、國語についてはまだ確められない。音時量のあらはれ方は、言語によつて必ずしも一樣でなく、それ〳〵の言語に特有の方式がある。前に述べた傾向は、すべての言語に共通な法則とは認められない。

(三) 語音の强さが音時量に對して著しい影響を與へる事實は、諸種の言語について觀察されたところである。すなはちアクセントと長さとがこゝに交渉する次第である。强められた音節における母音は、この種の言語においては同時に長められる。グレゴアールはこの事實をフランス語について實

驗的に立證した。またカルッィアは、[4]イタリア語についてこの事實を見た。

國語の語彙における强さの布置は、のちに示すやうに國語のアクセントを規定するものではない。それ〴〵の單音において、强い音節の所在が必ずしも一定してはゐない。强さの音時量に對する著しい影響は、國語の塲合にはあまり認められないのである。

單獨に發音された短い單語などでは、その最後の音節の母音が、その强さにおいて漸衰的な著しい變化をとげるのを例とするが、その長さは往々すこぶる長く、縷々としてきはめて微弱な振動をつゞけるのである。この塲合には、どの點でまつたく振動がやむかを決定することが、よほど困難である。かく、弱くてかへつて長い塲合を生じるのは、おのづから別箇の能因に歸して考へなければならない事柄である。

（四）音聲集團の長さがその部分たる音節の長さを左右する。集團の音節數が多く、全體として長いときは、それに伴つて母音の絕對の長さは短くなる。これはつまり長い系列を一つの全體として發音しようとかまへるので、それだけ大きな速さを以て發音するのによる。

この關係は、フランス語についてグレゴアールの測定によつて、またドイツ語についてマイエルの算定によつて確められ[5]、すなはち單音節語における母音〔a〕は二音節語における母音〔a〕より長く、二音

節語におけるものは三音節語中にあるものより長く、かくて次第に多音節語に及ぶほど、中の母音の絶對の長さは短くなるといふことがわかつた。

國語の單音節語は、そのアクセントの關係によつて二樣に分れる。すなはち下型および上型で、「帆・柄・鬆・氣」などは下型に、「穗・繪・酢・木」などは上型に屬する。これを同一條件の下にそれ〴〵數回づつ著者自身が發音して、その記錄曲線について音節における母音の長さの平均値を出して見た。シグマを單位として示せば第九表のやうになる。

第九表

帆	˪ho	228
穗	˹ho	228
柄	˪é	230
繪	˹è	245
鬆	˪sɯ̈	254
酢	˹sɯ̈	227
氣	˪k'i	…
木	˹k'i	221

しかるに「穗と帆と」のやうな連語を一集團として發音したときは、その長さの關係は次のやうになつた。(6)

穗	h	o
	(—)	117
と	t	o
	(150)	280
帆	h	o
	(100)	130
と	t	o
	(120)	160

また「蜂」および「八」を單獨に發音したときは、それぞれ

「蜂」

h	ɑ	tʃ	i
(—)	95	(115)	118

「八」

h	ɑ	tʃ	i
(—)	73	(85)	134

であつたが、「蜂と蚊」および「八と七」のやうな連音の中では共にその各音節の長さを減じること次のやうであつた。(たゞしこの場合には、特に「蜂」の第二音節「チ」を無聲化せずに發音した。「七」の「シ」はもちろん無聲化して「シ゜」となつてゐる。)

「蜂と蚊」

h	ɑ	tʃ	i	t	o	k	ɑ
(—)	74	(85)	88	(108)	97	(89)	109

「八と七」

h	ɑ	tʃ	i	t	o	ʃtʃ	i
(—)	73	(73)	123	(77)	143	(208)	116

この例によつて見るときは、一集團に屬する音節の數が增すにつれて、各音節の長さが減じ、したがつて母音の長さも減じることが察せられる。いはゆる「速度の法則」(*Tempogesetz*)がこゝでも成立つといへるであらう。

語音の進行の速さが加すといふことは、音聲集團の大きくなる結果としてだけではなく、調音の條件によつてあらはれることがある。その顯著な例は、同じ調音をする語音が前後に相連るやうな場合たとへば相連る音節の母音が同一であるといふやうな場合である。すなはち、「アカカッタ、カラカサ」のやうな連音では、發音の速さが容易に亢進して、これだけの音節數の他の連音（各音節の母音の同一でない）を發音するよりも一層みぢかい時間ですむのである。こゝでは各音節に共通な母音〔a〕が、全體の連音の發音運動における口のあきを變化する運動を大いに省略して、調音の進行を容易にするわけである。そしてその上に子音も同一なものがつゞくならば、すなはち「タタタ・コココ」のやうに同じ子音と母音との連りを生じた連音ならば、速さの增大は一層容易に行はれる。いま「東京と京都」および「京都と東京」の二例を比較して見ると、このことがわかる。

この例で、（甲）における全體の語音の進行が、（乙）におけるものより遲いことは、全時間の數量の比較によつてわかる。その全時間において（甲）および（乙）における短母音を含む音節の長さがどういふ比を示すかを見ることが必要である。

(甲)			(乙)		
(東)	t	o:	(京)	kj	o:
	(—)	225		(—)	190
(京)	kj	o:	(都)	t	o
	(90)	220		(70)	100
(と)	t	o	(と)	t	o
	(85)	180		(55)	90
(京)	kj	o:	(東)	t	o:
	(115)	210		(85)	250
(都)	t	o	(京)	kj	o:
	(90)	130		(65)	210

(甲) ノ全時間＝1345＋t

(乙) ノ全時間＝1115＋kj

ココニ t ハ (甲) ノ第一音節ノ子音ノ長サ, kj ハ (乙) ノ第一音節ノ子音ノ長サデアル. カリニ t=85, kj=85 トスレバ, (甲) ト (乙) トノ比ハ 1430 : 1200 デ約 7 : 6 トナル. 各音節ノ全長ニ對スル百分比ハ

(甲) ノ (と)……18.5%	(乙) ノ (都)……14.2%
(甲) ノ (都)……14.7%	(乙) ノ (と)……12.1%

更ニ母音ダケチトツテミルト

(甲. と) ノ母音…12.6%	(乙. 都) ノ母音… 8.3%
(甲. 都) 同……… 9.1%	(乙. と) 同……… 7.5%

トナル.

(五) 高さと音時量との關係は、強さと音時量との關係についてもおそらくいひ得るやうに、單に高められた母音が長くなるといふやうなことではなく、高さを能因としてのアクセントの形成が、あのアクセント形式内の音時量の布置を規定するといふ關係において考へるべきものであらう。高さアクセントを有する國語にあつては、この意味においての高さと音時量との間の交渉が見られる次第で

ある。

單音節またはその他の語の第一音節においては、音節の母音が高い調子をもつに伴つて音時量が大であり、低い調子をもつにつれて音時量が小であるといふやうな事實は、著者の實驗した範圍では認めこるとができない。しかし第二音節以下においては、多少ともこの種の關係が認められるやうである。第一音節の低いアクセント形式の語について、その第一音節の母音と第二音節以下の母音との間に、著しく音時量の差異があらはれることは前に掲げた諸例について見てもわかるが、さらにたとへば「かたき」[ka-ˈta-ki] の實驗例にあつては、音時量が次のやうな布置を示したのである。

a	68	a	105	i	110
k	(—)	t	(43)	k	(75)

この例では、第一音節の〔a〕が第二音節の〔a〕に比して三分の二の長さを保つにすぎない。また次の例でも、第二音節の母音が、あきらかに第一音節の母音より長い（同じ條件の下では〔a〕が〔è〕よりも長くなるはずである。この節の（一）參照）。

あてこす（る）

ɑ 90		è 130		o 115		…
	t (65)		k (40)		s (70)	

あて（こする）

ɑ 90		è 120	……
	t (80)		

この傾向は、第一音節が低くて第二音節が特に高くなるやうな語（アクセント形式で下上中型などにあたるもの）において、一層著しくあらはれる。「あさひ」（朝の太陽）[ɑ-⌈sɑ-hi の一例では、次のやうな比をさへ示したのである。——

あさひ

ɑ 62		ɑ 175		i 180
	s (55)		h (30)	

こゝでは第二音節の〔a〕の長さが第一音節の〔a〕の長さの二倍八分、すなはち約三倍になつてゐる。もとよりこれは特別の例に屬しようが、以てその一班を察するに足りる。(こゝに第三音節が長くなつてゐる點については、次に説明すべきものがある。)

調子の高いために長さが増すといふ、高さと長さとの間の協調は、從來學者の說くところでピピングの考案も生じた次第である。國語についてもこゝに述べるやうに、場合によつてはこの種の關係が成立つとも考へられる點があるが、しかし必ずしも常に然るのではない。高い調子の母音がかへつて短く、低い調子の母音がかへつて長く發音されるやうな事も決して少くないのである。

特に連音の最終の母音が、いつも大抵きはめて低い調子に下つていくにも拘らず、しば〳〵かなりの程度で長められるといふ事實は、前に示した種々の語例について看取し得るところである。これは發聲におけるこゑの强さの變化と關聯して考へるべき事項であつて、語尾において十分にこゑを弱めるためには多少の時間を要し、かくて母音のこゑは弱まりつゝも相當に長くつゞくものである。前掲の例で、「東京と京都」に於ける助詞「と」と次の語音との間には短い音休止が挾まれるやうに感じられるのであるが、それは事實上母音のこゑが非常に弱くなつても繼續して、絶えざること縷の如き趣を呈するのである。したがつてその母音のこゑのつゞく時間は、普通の短母音としてはすこぶる長い

ものになる。しかも、この助詞「と」は、もとよりアクセントにおいて何等の重みをもたないのである。同樣な事態は「穗と帆と」の連音の例についても見られる。「穗」における母音は、その高さにおいては勿論、その强さにおいても次に連る助詞「と」の母音にまさることは明かであるが、その長さについて比較すると、かへつて前者が短くて後者が長いこと、前揭の數字の示すところである。

助詞「と」の音節の時間的優越は、前に例示した「八と七」の例についても見られる。また數音節の母音の最後の母音が長くなるか短くなるかは、發音の際において、言葉を「いひ切る」といふ態度に出るか否かによることがすこぶる大である。この例では「七」はいひ切られて比較的みぢかくなつてゐるが、「蜂と蚊」の例では、「蚊」がいひ切られずに終つて、かなりの長さを保つやうな次第である。語尾においてかやうに言葉をいひ切るといふことは、主としてアクセントの關係でその母音が高い調子を有する場合に多いと思はれる。その反對に、いひ切らないといふことは、母音のこゑを自然に減衰させることに外ならない。數音節の連音における最後の母音が往々長くなるのは、一面リズムの關係による强まりにもとづくこともあるが、また徐々に自然に衰へ行くにまかせるといふことによる場合が多いと思ふ。(7)

三三　子音の長さ

子音のうち擦音は、いきのつゞくかぎり續けることの出來るものであるから、これを「續音」といつて、この點で破音のやうな「斷音」と區別される（第五章第二節）。したがつて、これには理論上長短の種種の等級があり得るわけであるが、實用上では、やはり長いのと短いのとの二通りを立てれば足りる。一般に短い擦音の長さは、いふまでもなく話し方の速さによつて規定される。中等度の速さでは、短い擦音の長さは、諸種の言語においておよそ同樣で、一秒の百分の六乃至十（六〇―一〇〇シグマ）である。勿論この數値は呼氣流の速いか遲いかによつて多少かはる。長い擦音（國語ではやはり「促音」としてあらはれる）にあつては、その長さが大略短い擦音の二倍である（第八表の〔s〕と〔ss〕・〔ʃ〕と〔ʃʃ〕とを比較せよ）。

子音のうち破音にあつては、その入破と出破との時間はほとんど不變であつて、ほゞ一秒の百分の三（三〇シグマ）に當る。破音の前後に母音があるときは、入破および出破の音色は母音のはじめとをはりとに合致して母音的特性を示すのであるから、普通長さの測定には、これを母音のうちに算入する。破音の第二時相たる閉鎖の過程は、長くも短くもなり得る。その過程の長短によつて、破音に

長いものと短いものとを區別するのである。中等度の速さの話し方では、短い破音の長さが一秒の百分の八乃至十二（八〇―一二〇シグマ）であつて、長い破音の長さは、ほゞその二倍と見ればよい（第七表・第八表參照。「いき」の〔k˙〕と「いつき」の〔k˙k˙〕との長さの比は一對一・七である）。

ルスロは自己の發音を檢して次の立言をしてゐる。$^{8)}$ ――

單獨に發音した語中の破音は、擦音より少し短い。百分の一秒を單位として次のやうである。

ɑ $\overset{8}{p}$ ɑ　$\overset{9}{p}$ ɑ ―― ɑ $\overset{12}{f}$ ɑ　$\overset{15}{f}$ ɑ

ɑ $\overset{9}{t}$ ɑ　$\overset{13}{t}$ ɑ ―― ɑ $\overset{15}{s}$ ɑ　$\overset{15}{s}$ ɑ

―― ɑ $\overset{15}{ʃ}$ ɑ　$\overset{16}{ʃ}$ ɑ

また有聲の子音は、無聲の子音より短い。

ɔ̃ $\overset{8}{f}$ ɔ̃ ―― ɔ̃ $\overset{15}{v}$ ɔ̃

ɔ̃ $\overset{14}{t}$ ɔ̃ ―― ɔ̃ $\overset{13}{d}$ ɔ̃

語の音節數が增せば、一般にその語中の子音の長さは減じる。いはゆる二重子音は、實は長くかつ强い單個の子音である。また子音群は個々の子音が單獨にあらはれる場合の長さの總和より短い時間で發音される。

マイエルの測定によれば、母音に挾まれた子音のうち、短い母音の次に來るものは、長い母音の次に來るものよりも長い。しかしこれを語尾に來る子音と比較すると、この二つともずつと短くて、語尾の子音が時間的優越を示すのである。この事實は、特にイギリス語において精細に研究されたが、ドイツ語についても同様の結果が得られた。(9)

これらの音聲現象における事實は、かなりの程度において諸種の言語に共通に認め得るところのものであらう。この點における實驗研究は、國語についてはまだ不十分であるが、語尾に擦音のあらはれるやうな特殊の場合、すなはち「ソーデス・クダサイマシ」のやうな例では、おほむね擦音の長さが著しく長くなること、知覺上明かにし得るところである。これを「促音」などとは異なる別種の長子音としても失當ではなからう。

イギリス語・ドイツ語などにおいて、普通の正字法で二つの子音字母を並べて書きあらはすものが多くは事實上短い子音であることは、音聲學の初歩を學んだ人の知るところであらう。特に母音に挾まれたこの種の子音をドイツ語について見ると、語尾の子音よりも短いものであること、フィエートルの記錄の示すところである。(10)

*m*it (m = 0.1^{s}), ka*mm* 〔kam:〕 (m: = 0.3), ka*m* 〔kɑ:m·〕 (m· = 0.29), Hohenhei*m* 〔ho:ənhaim〕

(m = 0.12), Ka*mm*er 〔kamər〕 (m = 0.12), ka*m*en 〔ka:mn〕 (m = 0.14), Bau*m*eister 〔baŭmaĭ-stər〕 (m = 0. 15), Bau*mm*eise 〔baŭmmaĭzə〕 (mm = 0.33)……

かやうな *Baummeise* や *Tauffeier* のやうな複合語における同一子音の重なつたものが本來の二重子音であつて、普通の子音（短い子音）よりも著しく長いのである。イギリス語の *home-made* 〔hoŭm-meĭd〕 や *well-looking* 〔wèllukiŋ〕 や *head dress* 〔hèddrès〕 の例も同樣である。これは國語の「カンナ・アンマ」などにおける〔nn〕・〔mm〕と同樣なものである。

長い子音を種々の語彙に有する點で、國語と似るところの少くないイタリア語は、長子音と母音との連接において、長子音は先行の母音の長さを半減し、または三分の二に縮める傾を示すといはれる。百分の一秒を單位として、先行母音と長短子音との長さの割合を示せば、次のやうになる[11]。

c	$\overset{26}{a}$	$\overset{16}{p}$	o	f	$\overset{24}{a}$	$\overset{26}{t}$	a
c	$\overset{14}{a}$	$\overset{29}{pp}$	o	f	$\overset{10}{a}$	$\overset{37}{tt}$	a
c	$\overset{20}{a}$	$\overset{20}{d}$	e	l	$\overset{20}{e}$	$\overset{19}{g}$	e
c	$\overset{9}{a}$	$\overset{36}{dd}$	e	l	$\overset{12}{e}$	$\overset{32}{gg}$	e

（上の二行 c は括弧で一括）

しかし國語については、必ずしもかうはならない。「促音」の前で母音の長さが減じるといふことが

一般には認められず、かへつて增してゐるやうな例も見られる（第八表「遺書」および「衣裳・意匠」對「一生」の例、および「息」對「一氣」の例參照）。イタリア語の *capo, fata* などの第一音節の母音は長母音であつて、*cappo, fatta* などのは短母音になつてゐるが、これは一面傳統的にその語に卽して定まつてゐるやうな事情もあつて、おのづから國語の場合と同様ではない。たゞこの種の傾向が國語にあつても自然にあらはれる場合のあることを否認すべきではない。

鼻音「ン」は、前に述べたやうに、その調音上連續的に發音することも出來るものであり、アクセントの關係において多少の重みを加へられることもあるから、自然に長短さま〴〵の度合を保つことができる。たゞ普通の語においては、これと〔n〕との連音は同化によつて〔nn〕あるひは〔nː〕となり、〔m〕との連音はまた同化によつて〔mm〕あるひは〔mː〕となり、普通の見解では特にこの子音「ン」だけを長くされることがないとする。エドワーヅもまたさう考へた。しかし「言語」〔gèŋgo〕「天狗」〔tèŋgu〕などの例で、この鼻音「ン」が引のばされてゐるのであることは、鼻音の節で詳説したところである。たゞ語尾などの「ン」は、最も普通にはいひ切られた、「はねられ」た〔ŋʔ〕であるので、これを引延ばすことが出來ないやうに考へるのである。これを長くし得るか否かは、音質の問題について考へるべきで、いひ切られた場合の「ン」は、特定の「こゑとめ」によつて中斷されたものに外ならないから、音質上

一般に「ン」が他の鼻音と異なつて續音ではないと主張するのは、いはれのないことである。

さて、一つの音節の長さは、これを組織する單位の長さの和に等しい。ゆゑに音節の絶對の長さは、語句の發音の速さによつて定まる。中等度の速さでは、一つの音節の長さは近似的には百分の十五乃至五十秒（一五〇—五〇〇シグマ）の限界内にあるとされてゐる。特別の場合には、この限界外へ出ることがある。かく話し方をほゞ一定の速さでするにしても、アクセントや音質の差異から、各の音節の長さには、かなりの出入不等がある。從來國語の音節論において一音節ほどの長さといふ音時量を想定し、さうした長さを音節構成の一準度とも見ようとした人があつたが、音節の長さがすこぶる不定なものであることは、今や明白である。ある一定の長さを音節の長さと定めて、これを音節の區分の標準にしようとする如きは、まつたく無謀な行き方といはなければならない。

註（1）前者はジーヴェルスの命名。後者はイエスペルセンの命名。

（2）Rousselot: *Principes*, p. 996.

（3）E. A. Meyer: *Englische Lautdauer, eine experimentalphonetische Untersuchung*, Uppsala und Leipzig 1903; *Zur Vokaldauer im Deutschen* (Nordiska Studier tillegnade A. Noreen. 1904). なほ Jespersen: *Lehrbuch*,[2] p. 181 參照。

（4）強い母音は一般に弱い母音より長く、殊に強い母音のあとに來る弱い母音よりもずつと長い。連音群のをはりに來た弱い

母音は、他の弱い母音より長い。——Panconcelli-Calzia: *Die experimentelle Phonetik in ihrer Anwendung auf die Sprachwissenschaft,* 1924, p. 118.

(5)Grégoire: Variation de durée de la syllabe française. *La Parole,* 1887, 1, 161, 263, 418. マイエル、前出。

(6)この場合に〔ho〕の母音が短くなるのには、次に來る子音の影響も考へ合はせられる。子音〔t〕がすこぶる長くなつてゐるのは〔ho〕をいひ切るといふ心持から母音が短くなり、それに伴つて生じたことゝ思はれる。しかしその一面には「速度の法則」がはたらいてゐることを認めるべきである。

(7)ルスロの實驗、Binet et Henri の實驗參照(Scripture: *Elements,* p 492 所載)。また註(4)のカルツィアの所見もここに思ひ合はせるべきである。

(8)Rousselot: Les modifications phonétiques du langage, 81, *Rev. des pat. gallo-rom,* 1891, IV, V. (Scripture: *Elements,* p. 491 參照)。

(9)Meyer: konzo'i antndaoer ?im doytʃn, *Maître phonétique,* 1901, XVI, p. 114.

(10)Viëtor: *Elemente d Phonetik,*[4] Leipzig 1898, p. 273.

(11)Joselyn: *Etude sur la phonétique italienne,* Thèse. Paris 1900, p. 146 (*La Parole,* 1901, III. p. 226).

第十一章　語音の强さ

三四　語音の强さの一般的性質

語句における强さ

一つの語または句における音聲の連りについて、その高さすなはち調子の變化のほかに、なほその强さすなはち力の變化を觀察することは、たやすい。連音におけるある音節またはある調音が强く、他がよわいといふ關係は、ぢきに聞きわけられることである。語音の强さの變化は、種々の能因にもとづいてあらはれ、種々の姿を示すこと、高さの變化と相似てゐる。

（一）　感情の表出が語音の高さの變化と共に强さの變化によつて音聲を介して營まれることは、一般に觀察される事實である。この際の强さの變化を「感情的」と名づけることができよう。

（二）　格別感情を含まないやうな語句において、その意味の大切な部分がつよく、あまり重要でない部分がよわく發音されるといふ事實も、しば〳〵觀察されるところである。この際の變化は「論理的」と名づけてよからう。

（三）　ある種類の言語にあつては、感情的でもなくまた論理的でもない、その言語自體の構造から生れて來たやうなある種の強さの變化が營まれる。それ〴〵の單語またはある連音節において、一定の音節が、感情表出や思想發表の關係の如何にかゝはらず、他の音節よりもつねに強く發音されるといふ關係が成立つ。たとへば、ラテン語やイタリア語において、多少の例外は別として通則として各語の最終の音節の一つ前の音節、すなはち終から二番目の音節が、いつも他の音節に比して強く發音されるとか、フランス語において、各語の最終の音節を他よりも強く發音することが普通であるとかいふ傾向は、それ〴〵の言語について定まつてゐるものがある。これは、いはゞ「語系的」または「歴史的」の強さの布置で、この事實は普通に「強さアクセント」または「力アクセント」の名で知られてゐるものである。

（四）　さらに、前記のいづれの能因にも歸し得ない強さの變化がある。これは一般にリズムの法則にもとづく事實であつて、すなはちすべて人の心理的生理的活動における普遍的樣式のあらはれに外ならない。自然に發音された連音節は、一樣な平等な強さを以て進行するのではなく、種々の方式での强弱の音節の配合や交錯を示すものである。かういふ强さの變化をリズム的變化と名づけることができよう。音律の考察は、これにもとづくのである。

二つの語音の高さすなはち調子が同一であり、音色も同一であつて、强さだけが異なるときは、大抵耳に聞いて强さのちがひを知ることが容易である。また同一の音色の語音が調子を異にしてゐるとき、その强さの相對的な强弱關係を判定することも、前と同樣な手段でできる。器樂の演奏において、樂人のいはゆるピアニッシモ（*pianissimo*）・ピアーノ（*piano*）・メッヅォフォルテ（*mezzo-forte*）・フォルテ（*forte*）・フォルティッシモ（*fortissimo*）などの强さの區別や、クレッシェンド（*crescendo*）・デクレッシェンド（*decrescendo*）といふ强さの變化などを聞きわけるのは、格別むづかしいことではない。音色も調子も相異なる語音の相對的强さを判定するのは、前の場合より困難は加はるものゝ、ある程度までは可能である。それも樂器から出るねについては、强さの判斷がしやすいが、噪音については困難が一層增す。とはいへ、種々のひゞきの强さを聞きわけることは、時計のカチカチとボンボンとの間の强さのちがひのやうに、必ずしも不可能ではない。ところが音聲にあつては、樂音的なものと噪音的なものとの參差交錯によつて關係が錯雜してゐるから、その强弱を判定することも、たやすくはない。たゞ、句または語を形成する音節の相對的强さをきゝわけることは、不確實ながら耳によつて普通に行はれてゐる。研究の方法としてはもとよりこれだけでは適確を期しがたく、そのためにしばし

ば特に强さアクセントに關して種々の異論を生じることがある。

そこで、强さの客觀的準度を確定することは、物理學や心理學にとつて必要なだけでなく、言語の研究にも重要である。物理的に考へた量としての「おとの强さ」(*Tonstärke*)、すなはち音響學にいふ「强度」(*intensity*)は、前に述べたやうに、一般に單位時間に單位面積を通過する音波のエネルギーに比例するものである。音波傳播の媒體が一定し、發音體の振動數が一定してゐるときは、波動のエネルギーは振幅の自乘に正比例する。空氣を媒體とする一定の調子のおとについて見れば、その强度は振幅の自乘に正比例するわけである。いま、おとの强度をI、その波動の振幅をa、その振動數をnとすれば、

$$I = a^2 n^2$$

こゝに振幅と振動數との相乘積anは、また「力學的强度の指標」(*indice d' intensité mécanique*)として、强度の比較に用ゐることができる。

かやうな波動のエネルギーの相等しいおとが、人の耳にいつも等しい强さあるひは大さのものとして聞えるかといふと、必ずしもさうではない。またそのエネルギーの比が甲と乙とで二と一のやうであるとしても、甲が乙の二倍だけつよく聞えるといふわけにはいかない。おとの强さまたは大さの感じ

は、それをおこす音波の力學的强度から簡單にわかるものではない。一般に感覺の强さとその感覺を生じる刺戟の量との間には、心理學上いはゆるウェーベルの法則に示される規則正しい關係が成立つといはれる。この法則は、殊にフェヒネルの創唱した精神物理學において、種々の感覺について精密に檢討され、ある限界内において定立されるにいたつたものである。すなはち相對的差異感受性の恒常性（*die Konstanz der relativen Unterschiedsempfindlichkeit*）を確立したものに外ならない。

その詳細は心理學の成書にゆづる。こゝに簡單に述べると、それぞれの感覺には、强さといふ屬性があり、最小（やつと氣がつく）から最大の値までの間に增減する。この二つの値の感覺强度の增減は連續的であるが、差異感受性は不連續的段階をつくる。刺戟の量が變化するにつれて差異感受性がどういふ法則に從つてあらはれるかを研究して、多くの場合そこに相對的差異感受性の恒常を認めたのがウェーベルの法則である。すなはち感覺の差異のやつとわかつたときの刺戟差異、いはゆる辨別閾（*Unterschiedsschwelle*）と原刺戟（標準刺戟）との比が一定であることを立言する。おとの感覺については、種々の精神物理學的測定法を以て精密な實驗が行はれたが、その結果はウェーベルの法則がすこぶるよく妥當することを示す。その實驗の多くは、音響刺戟として落下する小球が木板上に當つて生じるおとなどの噪音を用ゐたものである。ルスロの實驗はこれと手續を異にし、

數個の音叉を用ゐて一定の振幅を有する振動をおこさせ、これを聞き得る最大距離を測定することによつてこの問題を檢した。[1] こゝではおとの聽覺的强さを前に定義した「きこえ」と同一視し、最も遠い距離で聞えるものが、最もつよいおとであるとする。その結果は大略次のやうである。

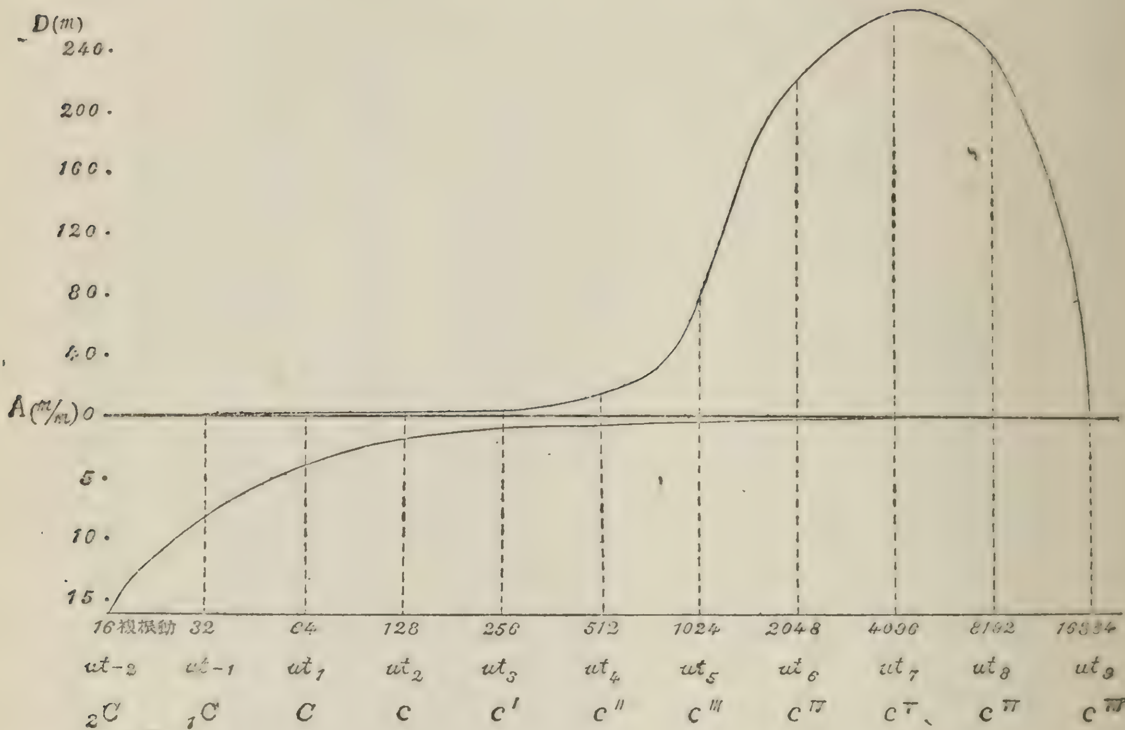
(イ)同一の高さのおとでは、きこえは振幅の增すと共に增す。たゞし嚴密に比例するのではない。それ〴〵の高さに對して、力學的强度ときこえとの間の關係を實驗的に定立することができる。その關係は、連續的曲線として圖示される。

(ロ)この關係をC_2(フランス流でut_{-2}。毎秒一六振動のもの)からc^7(フランス流でut_9。振動數一六、三八四)までの音叉のおとについて試みた。その際相等しい力を與へ、力學的强度の指標anを等値にするやうに振動させる。その結果は、きこえが高さに伴つて c(ut_2) までは徐ろに增し、それから次第に c^3(ut_5) まで急速度で增していく。c^3 から c^5(ut_7) までは增加率が少し減じ、c^5 においてきこえの最大値に達する。c^5 からは c^7(ut_9) の附近にある聽覺の生じ得る上限まで、きこえが急速度で減じていく。その有樣は次の圖の示すところである。こゝで縱軸は聽取の最大距離を、その橫軸はおとの高さをあらはす。(第一五圖)

こゝに思ひあはせるべきは、男聲の聲域が G(sol_1) から c^2(ut_4) まで、女聲のが g(sol_2) から

第一五圖

「おと」の高さと強さとの關係



A……振幅　　D……きこえノ距離

c^3（ut_5）までの間にあるといふ一事である。

以上は音叉を用ゐて試みた精神物理學的實驗の概要である。さらにルスロは、本來の音聲學的實驗を試み、人の音聲についてその高さおよび音色に應じてのきこえを定めようと企てた。その結果は次のやうである。——

（i）人の音聲によつて發せられた種々の高さのねを比較すると、一切

の他の條件が同一なとき、きこえの最大なところはそのこゑの中等度の高さ（聲域の中央）に相當する。

(ii)母音〔u〕・〔o〕・〔ɑ〕・〔e〕・〔i〕・〔ø〕・〔y〕を種々の相異なる力を以て、すなはち相異なる振幅を以て、それぞれ $G(so'_1)$、$H(si_1)$、$d(ré_2)$、$g(so'_2)$、$h(si_2)$、$d'(ré_3)$、$g'(so'_3)$ の調子でうたふとき、もしその音聲がわからなくなるに至る距離を測定するならば、一切の他の條件が同一なとき、それぞれの母音について、こゑの中等度の調子に對して「わかり」(*compréhension*)の距離が最大であることを知る。その距離は振幅に伴つて增す。「わかりやすさ」(*compréhensibilité*)の大から小への順序に母音を排列すれば、次のやうになる。

〔ɑ〕・〔o〕・〔e〕・〔ø〕・〔i〕・〔u〕・〔y〕

(iii)子音に對しては、その成績が母音に對するほど確實ではない。子音のわかりやすさは、單にその子音の性質によるだけではなく、これと連結する他の語音すなはち母音または他の子音によつて規定される。その上他の子音よりもずつと遠い距離でそれと聞きわけられた一つの子音が、双方とも耳からごく近いところで發音されたときには、かへつて他方の子音よりもよわく感じられるといふことも、度々ある。それは等しい調音および呼氣の力で發音した〔sɑ〕と〔zɑ〕とについて試み

ると、前者は後者よりも遠いところでわかるのに、この二つの音節を耳から同じだけの距離で發音したのを聞く場合には、後者の方が前者よりも強く感じられるのである。

さういふ次第で、この研究は重要なものであるが、またすこぶる困難である。現在のところ、強度・きこえ・わかりやすさの三概念は、相似てしかも別箇のものであるから、一を以て他を置かへることは、危險を伴ふをまぬかれない。

強さの生理的條件

語音における強さの變化は、各語音に用ゐられる呼氣量に關聯する。しかも語音の強さとこれに要する呼氣量との間に比例の關係が成立つといふやうなことはいへないのであつて、その間の關係はよほど複雜である。

（一）もし同一の母音を同一の調子で異なる強さを以て發するならば、呼氣の平均流出量は、母音の強いものほど多い。氣管内における氣壓は、胸腔が急に下るので增大する。そこで呼氣の壓力は、聲帶を隆起させまた引はなすやうにはたらき、よつて同時にその長さとその張力とを增させる。呼氣の壓力による聲帶の緊張は、所動的緊張であつて、喉頭の筋肉の收縮にもとづく能動的緊張とは別箇の生理的現象である。普通にいはれる聲帶の緊張は、この能動的および所動的緊張の總和であつて、

緊張された聲帶はその振動に際して振動數を增し、よつてこゑの高さを高めるのである。この事實は喉頭鏡およびストロボスコープによつて、たやすく見ることができる。そこで、一層大きな氣壓を以てして、しかもこゑの高さをかへずに依然として同一の調子を保たうとすると、この際聲帶の能動的緊張を減じなくてはならない。發聲生理においてかういふ代償作用の行はれることは、すでに生理學者ヨハネス　ミュレルの明かにした事がらである。[2] この作用によつて聲帶の張力は一定に保たれ、その長さだけが增してこれを振動させるに增大した機械的エネルギーを以てし、よつて振動の振幅を增大してこゑを強くするのである。

（二）　同一の母音を同一の強さにおいて異なる高さで發するときは、こゑの高くなるにつれて流出量が減少する。もし流出量を一定に保つなら、こゑは高められると同時にそれだけ強められる。強さをかへることなくこゑの高さを高めようとするには、聲帶の緊張を營む筋肉をさらに一層收縮すると共に、胸腔の低下をもつと緩かにすることが必要である。これはミュレルの記載した代償作用に對しては逆の代償作用であつて、また同等に重要なものである[3]（ルデ）。

以上の事實は、日常經驗するところの語音の高さと強さとの相關關係を說明するものである。喉頭の筋肉の收縮を一層弱くして胸腔の速かな低下を代償することがない限り、音聲を強めればいつも同

時に音聲を高めることになる。胸腔の低下を一層緩かにして喉頭の筋肉の收縮の强まるのを代償するのでない限り、音聲を高めることは、やがて音聲を强めることである。語音における强さと高さとの關係は、この事理を顧みてはじめて適切な説明を與へられるのである。

（三）同一の强さと同一の高さとで種々の母音を發するときは、口のあきの狹い母音ほど流出量が大である。この事實は、同一量の呼氣の流出を以てしては、あきの狹い母音があきの廣い母音よりも弱くなることを示すものである。これによつて、强さアクセントを有する多くの言語において、母音がアクセントによつて强められると否とによつて、何故にその音色すなはち音質を變化するかが説明される。

（四）子音の强さは、調音の力によつて、ならびに呼氣流出量によつて定まる。同一の子音について考へると、この二能因は聽覺的强さに伴つて增すのである。同一の强さを以て發音された種々の子音を比較するときは、調音器官の狹めと流出量とは、有聲擦音から無聲擦音へ、無聲擦音から有聲破音へ、有聲破音から無聲破音へと進むにしたがつて同時に增大することを見る。

三五　音聲の强さの測定

音聲の實驗的研究において、强さの精密な測定ほど困難な問題は他にはない。理論上音叉の發するやうな「純音」(*simple tone*)については、その振動數と振幅とを測定して力學的强度の指標 a_n を得、これによつて力學的强度を算定することができる。純音でなくて複雜な音響學的構造を有する樂音はすなはち「成音」(*Klang*)であつて、物理學的にこれを數個乃至數十個の分子音と名づける純音に分析することができる。成音の强度は、これを構成するそれ〴〵の分子音の强度の總和である。そこで成音を分子音に分析し、各分子音の强度を知ることができれば、成音の强度は算出されるわけである。

音聲のうち多分の樂音的性質を有する母音は、果してその音響學的性質において成音と目すべきものであるか。まさにこの點が母音論の繫爭點である。ヘルムホルツ等の見解では、母音も一種の成音であつて協和分析(成音分析)を施して分子音を取出し、これを原音と陪音との結合と見なすことが出來る。ヘルマンのフォルマント說によれば、母音は「ね」と「ひゞき」との中間にあるいはゆる "*Klanggeräusch*" であつて、理論上協和分析の遂行を不可能にする。子音が成音であるかどうかに至つては、ほとんど全くこゝには問題外である。

單獨に發音された母音については、すこぶる精密な音聲寫眞的實驗手續によつてしば〳〵分析を施

され、その構造が研究されるに至つた。また干渉裝置による分析や分析の反對の手續でする合成の方法による母音の構造の研究も、前に述べたやうにシトゥンプなどによつて成功を見るに及んだ。しかし連續した母音における強弱の變化を、客觀的に精細に測定することは、依然として方法上幾多の困難がある。かやうな次第で、科學的に批議を入れ得ない實驗成果は、まだ見られない。

　音聲の發生的方面からは、マレー氏タンブールなどの簡單な裝置で、口や鼻から出る呼氣の壓力が測定される。ロザペリ・ルスロ・フィエートル・マイエルの諸氏が、それ〲工夫を施してこの種の實驗を試みた。これは音聲の強さについて何等かの手がゝりを得たいといふ希望から行はれたものも多いと思はれる。ところが、すでにツワールデマーケル（Zwaardemaker）が實驗的に立證したやうに、呼氣の強まりは音聲の力學的強度を判定する確實な根據を與へるものではない。なぜなら、聲門を吹きならす呼氣の力が同一であつても、喉頭以上における氣道の開き方に大小があるにつれて、氣流の速度が異なるのである。ゆゑに氣道の形が精密に同一である場合にのみ、呼氣の強まりの差異が音聲の強さの差異を示すのであり、しかも單に相對的に決定させるのみである。グツマンは呼氣の強まりを呼氣流出量について精細に檢して、この問題を考察した。その際同一の人に一定の發音法でつねに母音［a］をc（振動數一二八）の調子でうたはせた。この場合には、こゑの強さが

全く呼氣の流出量に依存することが認められた（前節「强さの生理的條件」（一）參照）。ところで、これは單にある一定の個人についての一定條件の下における結果であるから、たゞちにこれを一般化するわけにはいかない。

かやうに音聲の力學的强度の測定には、方法上種々の困難があるが、音聲學において重要なのは、かういふ强度よりもむしろ聽覺的强さ、すなはち知覺上における力の感じである。聽覺的强さの力學的强度に對する關係は、まだすこぶる不明であり、また一方には高さ・振幅および音色にも關係してゐる。ルスロは「わかりやすさ」の最大距離を各母音について定めてゐるが、この性質はすぐには音聲の强さと同一視されない。ところで、言語の研究者がまづ第一に知りたいのは、音節の相對的强さである。音節の强さはたしかにその母音の强さによるのであるが、子音の强さもそこに全く無視するのは不當であらう。たゞ子音の强さについては、われ〳〵の知るところがごく僅かで、これに正當な地位を與へることができないのである。

一般におとの聽覺的强さについてその程度を定めることは困難であつて、音樂上の强さの區別ピアノ・フォルテなども、相對的にその地位を定め得るのみである。そしてアクセントのごとき、またリズムのごとき音成態によつて、その主觀的評價にかなりの變化を生じるものである。拍音系列の主觀

的リズム化の現象にあつては、客觀的强度の等しいおとが主觀的に强弱の差異を生じるのであつて、これによつて種々の拍子形式が出來る。これは成態における强さの現はれ方の變化の顯著な一例である。また異なる强度の拍音系列における種々の布置について、强さの主觀的評價は大いに心理的な構へ方に左右されることを見るのである。かやうな事態は、必ずやまたアクセントといふ音成態において著しいあらはれをもつことを豫想させる。たゞ强さの客觀的および主觀的計量が困難であるために、アクセントについてこの邊の事理をいまだ明白にすることができないのである。

三六　語句における强さの布置

一般に話言葉における强さの布置は、前に述べたやうな四項の能因によつて規定される。すなはち一は感情的、二は論理的であつて、共に言語の心理的事象に屬し、三は强さアクセントの成形にあらはれる言語の史的發達、各國語各方言の傳統的事實に屬し、四はリズムによるものであつて、主として音聲生理的關係に交渉をもつ。

感情殊に情緒と音聲の變化との間の關係は、種々の方面にあらはれ、中にも著しく音聲の高さの變化において見られるが、それと共に音聲の長さにも、換言すれば話し方の速さにも變化が生じ、さら

に音聲の强さにも變化をきたすのである。感情が如何やうに音聲の强さを變化させるかは、大體において感情と音聲の高さとの間の關係を示す感情的語調（*intonation émotionelle*）の法則によつて知ることができる。

（イ）發揚的情緒はこゑを强め、その反對に抑制的情緒はこれを弱める。

（ロ）この二種の情緒も、極端にはしるときは、その効果が同樣のものになる。すなはち共にこゑを强めるが、言語の正常の機能を抑止して、話し方をとぎれさせ、また間投詞的にさせる。

（ハ）强さの變化も高さの變化と同じやうに、單に心に動く情緒だけによるのではなくて、話し手の生來の性格や、その習性、すなはちその意志や習慣にもよるのである。

論理的能因による强さの變化は、やはり感情的のものと關聯してゐるのであつて、話し手の思想の中で、ある概念が特に重要な地位を占める場合には、これを表現する語句が他のものよりも特につよく發音されるのが普通である。すなはちある語句に重きをおき、これを力說するのである。

他の句に對してある一句の全體に力を入れて發音するときは、大體において句の內部の强さの相對的關係は保たれるのであるが、しかし本來弱い音節の强められる割合が自然に大になるので、もとの相對的强弱の布置が幾分變容されて、いはゆる一本調子になる傾がある（*die Perspektive in der Spra-*

ch wird verwischt)。これは叫び聲などの際によくおこる事がらである。

他の語に對してある語が一つの句の中で重きをおかれる場合には、すなはちその語の示す概念がいはゞ思想の中心となるときは、それの發音が强く行はれるのが自然の傾向である。諸種の品詞のうちには、おのづからしばしば論理的な中心を形成することのあるものと、さうでないものとの別が立てられる。支那のいはゆる「虛字」に相當するやうな前置詞（國語では後置詞・助詞）や代名詞の多くのもの、冠詞や助動詞や接續詞のたぐひは、「實字」に相當する名詞・形容詞・動詞に對して普通には從屬的位置にあり、論理的に重きをおかれる場合が多くないといはれるが、大體これは各種の言語を通じて同樣と考へられる。

新しい概念は、大體論理的に重きを置かれると共に感情的に興味をいだかれるものであつて、句中にあるそれの代表者たる語が强められる。これが新奇といふ特色を失ふときは、當初よりも弱く發音されるやうになる。(4) また反對の事柄をいふ場合、あるひは物事をあれとこれと互に對照していふ場合などにも、その語や句が强められるのは、普通に知られてゐる言語心理である。

語における强さの布置が感情的・論理的およびリズム的能因のいづれにもよらず、その言語の歷史的發達につれてそれぞれの語彙に固定した傳統的形式を示し、その語の構成の一要素となつてゐると

きは、その言語は「強さアクセント」または「力アクセント」をもつといふ。

「強さアクセント」(*accent d'intensité*) または「力アクセント」(*accent de force; accent dynamique; dynamischer Akzent*) は、のちに說く「高さアクセント」または「調子アクセント」と區別して用ゐたもので、時にあるひは「りきみ」(*stress*)「おし」(*Druck*) などゝもいはれる。「呼氣アクセント」(*accent expiratoire*) とも呼ばれるが、これは不適當な名稱である。

言語の歴史的過程の一時期において、それ〴〵の語にある程度で一定した強さまたは高さの布置を示すところにアクセントの成形があらはれることは、從來知られてゐる事實である。強さの布置は種種の言語について見れば、それ〴〵の特色を有し、種々の方式を示すのであつて、古代ギリシア語では、強い音節の所在が必ずしも一定せず、定着的でなくて可動可變的であるが、しかもその變動の範圍はおのづから限られてゐたといふ。これは強さアクセントのまだ成形を得ないものと考へなければならない。古代のラテン語では、語中の強い音節の所在が、ごく單純な法則によつて規定された。すなはち各音の最後の音節の一つ前の音節に長母音があるときは、その音節が特に強められ、またそこに短母音があるときは、も一つ前の音節すなはち最後から數へて三番目の音節が特に強められるのである。これは強さアクセントの成形が一定の型を示すに至つたもので、アクセントの能因が強さの布

置を定立したのに外ならない。そのアクセントの型は、大體そのまゝ今のイタリア語に繼承されてゐるが、強い音節の次の音節が脱落してラテン語から一轉したフランス語においても、強さの布置には幾分古風が殘つて、最後の音節が強められるといふフランス語における一定のアクセント傾向を生じたのである。ゲルマン語系の諸國語でも、それ〴〵一定の強さの布置が定立してゐる。

國語における語音の強さが言語心理的および音聲生理的規定によつて消長するほかには、傳統的形式としてこの構成にあづかるといふやうな一定型の布置を示さず、強めの所在が可動的可變的であることは、ゲルマン語などと異なるところで、この點で古代ギリシア語およびサンスクリットについて知られてゐるところと共通な性質をもつてゐる。

たとへば「柿」と「牡蠣」との二語を比較するに、その音質からいへば共に[kaki]であつて、いはゆる「同音」の語(*homonym*)である。が、東京語では二語の各音節間における輕重の關係が相異なつて、それによつて二語が發音上および知覺上區別される。しかも強さの布置は、必然的な一定樣式をそれ〴〵示してはゐない。普通には「柿」における第一音節が低くかつ弱いのに對して第二音節がそれより高くかつ強いのであり、「牡蠣」における第一音節が高くかつ強いのに對して第二音節がそれより低くかつ弱いのである。いま試みにその強弱關係をかへずに高さの布置を變化し、つぎにその高

低關係をかへずに强さの布置を變化したならば、どうなるか。それはたやすく實驗することができるが、强さの布置を保つて相對的高さをかへるときは、二語が入れかはり、それと反對に高さの布置を保つて相對的强さを加へるときは、二語はもとのまゝの「柿」と「牡蠣」として知覺される。呼賣などでは二語ともに第二音節が强められかつ長められるのが普通であるが、その際高さの相對的關係はもとのやうに保たれるのである。また「氣」と「木」との二語をとつて見るに、やはり「同音語」であるが、その句の中でとる位置のちがひによつて互に區別される。すなはち「氣にかける」と「木にかける」とを比較するに、「氣」の方は次の音節「ニ」の高さよりも低いといふことによつて「氣」といふ語として認識されるものであつて、その際「氣」は强く發音されることを少しも妨げないのである。「木」の方はこれと反對に、次の音節「ニ」よりも高く發音されることによつて「木」といふ語として認識され、たとひこれを弱く發音しても高さの關係さへ變へなければ、やはり「木」となることを失はない。かういふ事態は、他のすべての語彙について見ても同樣である。

東京における「新宿」[ʃindʒikɯ] といふ地名は、第一音節が低く、第二音節に至つてやゝ高く、第三・第四の音節もやはり第二音節と同じ高さで連るといふ高さの樣式で發音されるかぎり、さういふ地名として認識される。そのいづれの音節が强められるかは、こゝには沒交涉である。そこで、こ

の地名（省線の驛名）を呼ぶのに、ある車掌は「シンジーク」と「ジ」をつよくかつ長く發音し、他の車掌は「シンジクー」と「ク」を引延ばしかつ強く發音する。かやうに同一の語を別樣の强さの布置を以て發音しても、その高さの關係がかはらずに保たれてゐるかぎり、一つの驛名たる「新宿」として通用するのであり、何等異樣の感じを伴はずにさういふ語として理解されるのである。

國語における音聲の强さの布置は、かのドイツ語やイギリス語に見るところとちがひ、普通の場合にはむしろフランス語などに見られるやうに、大體それ〴〵の音節に等分に配布されてゐると考へられる。各音節の强さがさほど大きな出入を示さない。もとより精細に觀察すれば多少の不同があらはれることは否定すべくもない。たとへば、同樣な高さの音節が連亙する場合について見ると、その最終の音節がやゝ强くなる傾がある。また一語の第二音節または第二以後の音節が高さの優越を示すときは、强さもその邊で增大する自然的傾向が見える。ある語の第一音節が高さの低いものである場合には、それに伴つて强さも弱く、長さも短くなるといふ關係が、國語についてもごく自然な成行としてあらはれる。しかし、かういふ强さの分布は、各語にとつて自然ではあるが必然ではない。前に例示した「柿」では、第一音節「カ」の高さが低いのにつれて强さも弱く、第二音節「キ」の高さのやゝ高いのにつれて强さも强くなるのが自然で、また普通である。とはいふものゝ、その强さの布置は

高さの布置とはちがつて、必然的にその語「柿」に卽した、語の構成要素となつてゐるものではない。その自然的な强さの布置を都合によつて變へてみても、高さの布置にかはりがない以上は、語義の知覺にも格別のさしさはりはおこらない。

註(1)Rousselot: *Principes*. II, p, 1017—1037.

(2)Johannes Müller; *Über die Compensation der physischen Kräfte an menschlicher Stimmorgane*, 1839.

(3)Roudet; *De la dépense d'air dans la parole*.(前出)

(4)この種の强めをイェスペルセンは Neuheitsdruck と名づけて Gegensatzdruck と共に Satzwertdruck の一種とした。*Lehrbuch*[2], p, 214—216.

(5)Jespersen; *Lehrbuch*[2], p. 223.

第十二章　語音の高さ

三七　語音の高さの一般的性質

語句における高さ

句または語における連音は、ずつと同じ高さでつゞくといふことがない。音聲の高さが句または語の中で變化することは、觀察によつて大體を知ることができるのであつて、高さの變化に際してそこに一種の旋律が認識されるのである。かやうな言語旋律（*Sprachmelodie*）すなはち「ことばのふし」を一般に「語調」（*intonation*）といひ、また特に句・話段にあらはれる全體的な高さの變化を、高さアクセントと區別して、言葉調子・抑揚または狹い意味での語調といふ。

一般に音聲の觀察によつて、語調の能因として次の項目を見出すことは容易である。

（一）語句に伴ふ特殊の感情によつて特殊の語調があらはれる。同じ語句でも、種々の語調の差異によつて、相異なるいろ〳〵の感情をあらはすことができる。これは「感情的」語調である。

（二）格別感情を伴はないやうな場合の發音でも、語句にはおのづから特定の語調がそなはつてゐて、

けつして一本調子ではない。その際音節の高まりまた低まるのが、思想の流の姿を反映する。かやうな語調を「論理的」と名づけることができよう。

(三)ある種の言語には、感情または思想の表白に伴ふ高さの變化のほかに、なほこれらに拘はらない、しかも語句そのものゝ構成にあづかるやうに思はれる高さの變化を示すものがある。この場合には、ある單語または連語のうちの一定の音節が、いつも他の音節よりも高く、または低く發音されるといふことが傳統的に定まつてゐて、これをまちがへると語句の意味の認識を損ふのである。單音節語を多く有し、したがつて同音異義の語もまた多い言語において、しばしば高さの差異または變化によつて同音の語が區別されることを見る。支那語のごときはその適例であつていはゆる「四聲」は、音節內部における高さの布置の樣式に外ならない。[1] この種の高さの變化はいはゞ語系的または歷史的語調であつて、普通に「高さアクセント」または「調子アクセント」の名で知られてゐる現象である。のちに說くやうに、日本語も、支那語・安南語・シャム語などゝ共にこの種のアクセントをもつものである。

語音の高さの測定

音聲學で取扱ふ語音の高さは、聽覺における調子の感じに外ならない。調子に對する感じはすこぶ

る精妙であつて、これを材料として音樂における音階が構成され、旋律も和聲もこれによつて成立つのである。この高さが音形成の外的條件の一つである音波の振動數に對して一義的な關係をもつことは、既に述べたところである（第一章第一節「音聲の物理」）。そこで音聲の高さの叙述にしばしば客觀的相關者たる音波の振動數を用ゐるのである。これは色彩を叙述するに光の波長幾何といふ風に物理學的與料をかりるのと同じわけで、感覺の質を刺戟の數量的値で代表させるのである。

音聲を構成する聲帶におこるところ、および口腔等におこるおんの二つは、それぞれ引はなしてその高さを考へることができる。しかるに口腔におけるおんは、各母音および各子音について一定の高さをもつ固有音であつて、それぞれの母音性および子音性を形成するものであるが、語音の全體の調子には關係しない。かつまた語音の高低運動に際して、その調子を變化し得るものではない。すべて有聲音にあつては、ところこそその語音の高さを規定するものであつて、口腔における固有音はその音色を構成するにあづかるだけである。噪音たる無聲子音も、ある種の振動によつておこるのであるから不鮮明ながら大約の高さをもつのであるが、これはそれぞれの子音に固有のもので、變化することがなく、特に音聲の高さ、言葉調子として知覺されるものではない。

かくて語音の進行において、その高さを自由に變化して高低運動を營むものは、聲帶の振動による

こゑを外にしてはないのである。そこで、音聲の高さといへば、すぐにもこゑの高さと合點される。普通に語音の高さとは、特に音節の中心たるべき母音および有聲子音のこゑについていふのである。

音波の振動を描錄する裝置は、いづれも同時に時間の測定のための時間線を描錄することによつて、容易に振動數を知らしめるに役立つものである。この種の裝置のうち喉頭音記器[2]は、直接に喉頭の振動を描錄するもので、音聲の高さの檢出のためにはすこぶる便利である。

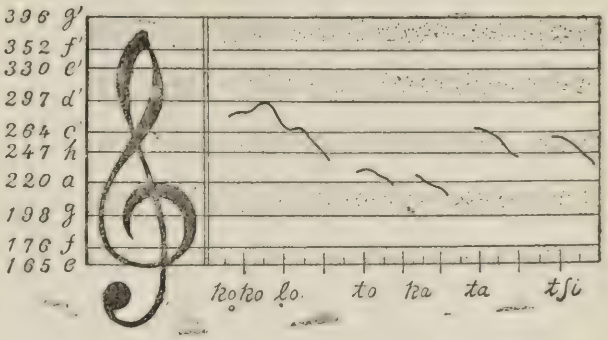
これらの方法で話のときの語音の高さを檢するに、(一)相隣る振動が週期を異にし、すなはち同一の語音の進行中にも高さは絕えず變化してゐること、(二)檢出し得た振動數の系列は、音樂における音階に合致することがすこぶる稀であることを見出すのである。

話にあらはれる高さの進行のこの二樣の特色によつて、語音の高低運動を普通の樂譜の上に表示することはできない。かつ普通の音符の時間價では、話における語音の長さの差異を十分精密にあらはすことができない。耳で感じる大體の語音の高さの進行は、ジョウンズの試みたやうに[3]、普通の五線紙に連續的の曲線を以てかきあらはすのを以て足りるのであらう。振動數の實驗的測定の結果を表示する場合には、一般の圖表(グラフ)の方式により、横軸に時間の目もりをつけ、縱軸には直接に振動數に比例する目もりでなく、振動數の對數に比例する目もりをつける。これによつて音程が正しく表示さ

れ、耳に感じるはずの高さの割合が明示される。これにそれ〴〵の調子の名稱とそれに相當する振動數とを記入しておく。この坐標の上に、連續した曲線を以て語音の高さの進行を精密に描き出すことができる。（第一六圖以下高音部記號を用ゐて示してあるが、いづれも實際はこれより八度だけ低いもの *ottava bassa* である。）

第一六圖
語音の高さの進行

Ottava bassa



「心　と　形」（女　聲）

かやうな手續によつて得た結果をひろく比較考察して、ルスロは次のやうな一般的法則を見出した。（イ）各母音は異なる音節においてすこぶる變化に富む高さで發音されるもので、それにきまつたところの調子といふものはない。（ロ）子音は普通母音より少し低く發音される。（ハ）母音に近い部分では子音の高さが引上げられ、子音に近い部分では母音の高さが引下げられる。（ニ）强さアクセントで强められた母音がたいていまた高められる。

高さの生理的條件。

音聲の高さは、一定時間における聲帶の振動の回數の如何に規定されて、種々の變化を呈する。その聲帶の振動の頻度は、やがてこゑの振動數であるが、これは本質上聲帶の長さとその緊張度とに依

繋する。聲帶の長さは、本來個人的に差異があり、女のは男のより短く、こどものはおとなのより短い。聲帶の短いものほど、その振動數が多く、そのこゑの調子が高い。同じ人について見ると、音聲の高さはもつぱら聲帶の緊張度によつて上下される。聲帶の相接觸してゐる場合には、その緊張度は二群の拮抗筋（すなはちその筋肉が收縮して聲帶を弛緩させる *musculi thyreo-arytaenoidei interni* と收縮して以て甲狀軟骨を環狀軟骨に近づけ、したがつて聲帶を緊縮させる *musculi crico-thyreoidei* と）の作用によつて變化される。この二つの筋肉の間に成立つ一つの平衡狀態は、特定のこゑの調子に應じるもので、それには個人的に差異があり、これを以てするときは最少の努力で發聲ができるのであるから、この狀態で發せられるこゑの調子をそれ〴〵の個人の「正常語調」（*intonation normale*）といふ。正常語調は、一般に男聲バッソでは *e* (mi_2)、バリートノでは *e* 乃至 *g* (mi_2—sol_2)、テノーレでは *g* 乃至 *a* (sol_2—la_2) であるといふ。[4] 話の場合にあつては、故意に一本調子に發音しないかぎり、前に述べた各種の能因によつて、二つの拮抗筋の間に勢力の消長が生じ、その平衡が絶えず失はれてはまた回復され、かくてこゑの高さが或は高まり或は低まつて、不斷に高低運動が營まれるのである。

積極的筋肉作用にもとづく聲帶の緊張を能動的緊張と名づける（これは *musculi crico-thyreoidei* の收縮および *musculi thyreo-arytaenoidei interni* の弛緩による）。他の事由、すなはち前に述べた氣管内の

空氣の壓力にもとづく聲帶の所動的緊張にあつては、かやうな筋肉作用を伴はない。この際喉頭の筋肉は同一態度を持してゐて氣管內の氣壓が增し、すなはち胸腔低下の運動が急速に營まれるのであつて、そのために聲帶が呼氣の重壓のためにさらに緊張するのである。

かくて人の音聲は、聲帶の長さとその緊張度とによつて、その高さを規定される。聲帶の長さは喉頭の形狀・大さおよび構造によつて定まり、緊張度もおのづから制限があるから、ある個人の音聲の高さは、高い方と低い方との二方面において局限され、その限界を超えた高い調子の音聲または低い調子の音聲を發することは出來ないといふことになる。この局限內において變化し得る音聲の範圍を「聲域」（また「音域」Stimmumfang）といふ。聲域は聲帶の構造などゝいふ先天的能因と、聲帶の緊張における生理的機能の練熟と否となどの後天的能因とによつて個人的に差異があり、とりわけ性別および年齡によつて異なる。一般に練習を積んだ音樂家にあつては、その聲域が普通の人よりも大きい。

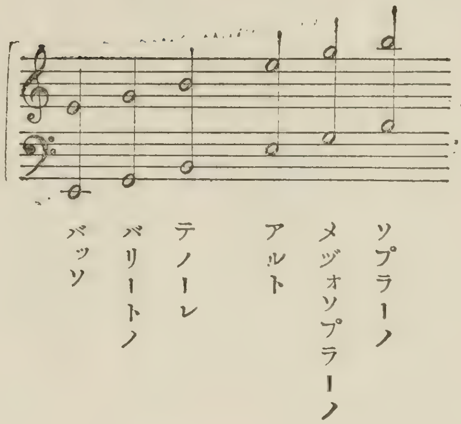
聲帶の振動可能の最大限および最小限については、今までに比較的多くの研究がある。グッマンは、かなり成績佳良な成年の男女歌手について平均の聲域を檢して、これを音樂上の傳統的區分であるバッソ・バリトーノ・テノーレ・アルト・メッヅォソプラーノ・ソプラーノの主な範疇に分けた。元來この名稱は、單に音聲の高さだけでなく、同時にその音色の特色をもいひあらはすものであるが、ここに

はその點を說かない。かくて成人における聲域として次のやうな結果を得た。(括弧内は振動數)。

第一七圖

聲　域

(グツマンによる)



男　聲

basso	E (81.5)—e' (325.9)
baritono	G (96.9)—g' (387.5)
tenore	H (122)—h' (488.3)

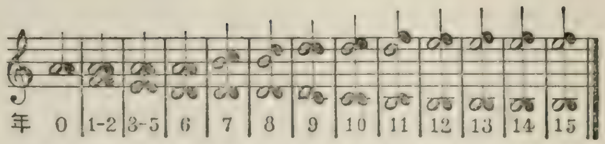
女　聲

alto	e (162.9)—e''(651.8)
mezzo-soprano	g (193.8)—g''(775.1)
soprano	h (244.1)—h''(976.5)

思春期における急激な聲帶の發達は、その前後における著しい聲域の變動を來たす。いはゆる「こゑがはり」(*Stimmwechsel*)または「變聲」がこれである。グツマンによれば、この變化の前後における聲域の平均は次のやうである。

男聲 前 h（二四四・一）—e''（六五一・七）　女聲 前 h（二四四・一）—f''（六九〇・五）
　　 後 G（九六・八）—g'（三八七・五）　　 後 g（一九三・七）—g''（七七五　）

第一八圖　こゑの發達
（グツマンによる）



少年期にあるこどもについてパウルゼン（Paulsen）・グツマン・フラータウ（Flatau）等が試みた實驗は、年齡の增すとゝもに聲域が次第に大きくなる有樣を明かにした。またグツマンおよびフラータウは、乳兒についてその聲域を檢し、やはり同樣な傾向を見た。グツマンはこれにもとづいて音聲の發達に伴ふ聲域擴大の圖表を描いた（第一八圖）。こゝに白圈は男兒の、黑圈は女兒のこゑを示す。

三八　言語と音樂とにおける音聲の差異

人の音聲が應用される主たる方面は、言語と音樂である。言語における音聲の使用は、すなはち話すことであつて、音樂におけるものは歌ふことである。さて、話と歌とにおける音聲は、すこぶる著しいちがひを示してゐて、まるでちがつた音聲の機制によるものであらうと想像されるほどである。

言葉を話すときは、その語義を發揮するのを目的とするところから、おんの音質を明かにすることを主眼とし、歌をうたふときは、その旋律を正しく演じることを本領とするところから、こゑの高低・强弱・長短を整へることを第一とする。かやうな次第で、この二つの場合における心理的用意がだいぶちがふので、聽覺的知覺の上にはすこぶる異なる印象を與へられるが、その音聲そのものゝ發生の過程・機制にいたつては、別に本質的差異が認められない。話の場合でももとより長短・强弱のリズムがあり、高低の一種の旋律があるといへる。

それでは、話すことゝ歌ふことゝの間のちがひは、どういふ點にあるか。いま音聲そのものについての立場から見て、これを考へよう。

(一)音樂のリズムは規則正しく、かつ一定法則に從ふ。樂音(こゝには音聲)の時間的關係は「長短律」(*Agogik*) によつて合法的に規定され、その力的關係は「强弱律」(*Dynamik*) によつて一定の拍子形式を與へられる[5)]。言語では、リズムが不規則で、かつ可變的である。詩における音律はある方式に從ふとはいへ、音樂のリズムから見るとずつと不規則である。

(二)いづれの民族の音樂でも、人の耳に聞える範圍における種々の調子のうちから、必ず一定の音程を隔てた比較的少數の調子が選び出されて、それだけが樂曲の構成に用ゐられ、他の中間的調

子は使はれない。話言葉の場合には、その反對に話し聲の高さの範圍におけるあらゆる調子が用ゐられる。そこで、音樂にあらはれるやうな音程に合致することもあるが、一致しないものゝ方が普通である。

(三)音樂では各の樂音(特に聲樂では音聲)が耳に聞いて捉へ得るほどの長さを保ち、また一つの樂音(音聲)から他のへ移るとき、中間的な段階を經ずに一定の音程を飛躍するといふ趣を呈する。その反對に、言葉では高低の移り方がいつも漸次的で中間の調子をすべつていく。

(四)歌における母音は、いつもその調子のわかるほどの長さをもつが、話では各母音がごく短くて、その何母音たるかゞわかつてもその高さを判斷しがたいのが普通である。

(五)聲樂では音聲が約二オッターヴァにわたる聲域のうちのかなり廣い範圍を大きな音程を以て上下するが、話における音聲は、聲域の下限に近い低い方を比較的狹い範圍で上下するだけである。感情的な話しぶりなどでは、かなり高さの變化が著しくなることもあるが、普通話し聲の高さの範圍は、全體の聲域に比してすこぶる小さい。

かやうにその相異は根本的なものではなくて、むしろ主に高低の進行の樣式に存すると思つて差支なからう。そこで、二者の中間に過渡的のものが出て來る。詩歌の朗吟や讀經のごとき、または聲曲

における「かたりもの」、オペラ・オラトーリオにおける「レチタティーヴォ」のごときはそれである。ここには、各音節が普通の話でよりも長く延ばされ、それに伴つて各母音の高さが明かになり、かつ一音聲の間の高さは一定に保たれ、普通の言葉が歌謠にちかづく。たゞ語音相互間の高さの關係は、多くもとの言葉のおもかげを殘してゐるのである。

音樂の發達において初期の産物たる歌謠、ことに素朴な童謠・民謠などは、このいはゆる「話し歌」(*Sprechgesang*) の境を去ること遠くないもので、話し言葉における高さの布置が、おほむね多少の潤飾を施して取入れられてあるに過ぎない。卑近な大衆藝術たる浪花節や琵琶歌などは、まさにこれである。その語句の聞きとりやすく、俗耳に入りやすい所以もこゝにある。

「話し聲」(*Sprechstimme*) は通例聲域の低い方にあつて、靜かな話し方の場合における句の終の調子を計算に入れても、大抵男では A から d (グッマンによる)までまたは A から e (バウルゼンによる)までゞあり、女では a から d' または e' までである。

もとより場合によつては、話の全體の調子を高めることもある。大きなこゑをつかふときには、それにつれて同時にこゑが高くなりがちである。また個人的にも民族的にもその全體の調子に特色がある。うたふことゝはなすことゝの關係について、ヘルマンが簡單に次のやうに説明を與へてゐる。[6]

『うたのときの調音と話のときのとの差異は、もつぱら次の點にある、それは音節の、もつと正確にいへば母音の調子の高さと强さと長さとが、うたでは旋律および拍子によつて支配され、はなしでは意味と構造との强めの法則（*Betonungsgesetz*）によつて支配されることである。そこで單個の母音をとつて見ると、うたはれたものと、話されたものとの間に絕對に何らの差別も求められない。單獨の「ア」といふ母音は、うたはれたものにしても話されたものにしても、いつも何かの調子をもつてゐるのであつて、たゞその調子がうたの場合にはこれと定めてえらんだもの、はなしの場合には偶然にまたは習慣にまかされたものであるといふだけのちがひである。「ア」といふ母音をはなしたとき、すぐつゞけて一つの音階をうたひのけることができるのは、誰でもやつて見ればぢきわかる。これははなされた「ア」がとりもなほさずうたはれた「ア」である證據なのだ。』

これは、なるほどさうである。が、なほ母音の高さの進行について、二つの場合に相違のあることを考へあはせなければならない。

ちかごろイセルリーンが客觀的方法で研究したところによると、[7] はなしに際しては母音の音色が絕えず變化していくのであつて、ある音節に「ア」なり「オ」なりがあるともいへない、「オ」

の音色を次第に帶びてくる「ア」などゝいはなくてはならないことになる。その反對で、うたはれた母音にはかういふ音色の漸次的變化は見られないといふ。

とにかく、うたとはなしとにおける母音が、それ自體においては相異なるものではないとは、いままで多くの學者の一致したところである。ところが、またそれと意見を異にする見解もある。それは、はなしの際の母音に「音樂的性質」の意味における調子がないといふのである[8]（ケーレル・イェンシ）。そのいはゆる「音樂的性質」(*musikalische Qualität*) とは、振動數の二倍・三倍になる毎に回歸する性質、同一の「ド・レ・ミ・ファ」の名稱によつて指示されるやうな性質（ある調子の「ド」とそれより一オッターヴァだけ高い「ド」、すなはち c と c' との間の共通な性質）をいふのであつて、ホルンボステル（v. Hornbostel）はこれに *Tonigkeit* の名を與へた。そこに音響心理學上なほ研究すべき問題があるが、こゝでそこまでは立入らない。

三九　語句における高さの布置

人の心における感情の動きは、表情として容子や擧動にあらはれる。これは特に情緒について著し

いが、そのわけはこの際の心理的作用が、一面には內外の分泌や血行や呼吸などの機能に變化を與へ、他の一面にはある種の筋肉運動を解發し、または停止するためである。音聲の方面でも、種々の情緒がそれ〴〵の特有の姿にあらはれ、なきごゑ・わらひごゑ・さけびのやうに、言語から獨立した音聲現象として放出されるほかに、なほ言葉調子すはは ち語調・言葉のリズムなどにおいて發現されるのである。これは情緒の全體的効果として、筋肉運動や呼吸作用が影響をうけ、呼吸の頻度・深さおよびリズム・聲帶の緊張度などが變化するによる。

さういふわけで、實驗心理學上、この語調の變化を考察して感情の研究の資料としようとする試みが、心理學者によつてしば〳〵實施された。これに關するブールドンの著書は興味ふかい事實を載せてゐる。(註(9))。

語句における高さ、すなはち語調は、かやうに情緒によつてごくたやすく變化される。が、情緒と語調との間の關係を一般に嚴密に規定することは、種々の理由からかなり困難である。情緒の動きがあらはれるのは、單に語調においてだけでなく、語音の音色やその發音の速さや語氣のつよさなどの變化をも伴ふのであつて、その總體を考へてはじめて全きを得るわけである。また語調の變化を規定するものに他の能因があり、殊に論理的能因がしば〳〵感情的能因と不可分的に結合する。で、感情と語調との關係は、まだ十分精密に說きがたいところがある。

しかも、次の事實については、確かにいふことができよう。

（一）感情に二とほりあり、一つは發揚的・興奮的であつて生活機能を促進し筋肉運動を解發する。すなはちよろこびの如きがそれで、この場合には、語調が全體として高まり、その變化が著しく、すなはち大きく上下する。他の一つは前と反對の抑制的・沈靜的感情であつて、生活機能を遲滯させ筋肉運動を控制する。かなしみの如きがこれで、この場合には、語調が全體として低まり、その變化がわづかで單調になる。

（二）ある程度をこえると、二種の感情が同樣な反應を生じる。非常にかなしくて苦痛を感じるやうになれば、語調の變化が非常にうれしいときと同時に著しくなるのである（ブールドン）。

（三）他の表出運動と同樣に、語調も單に感じた情緒だけできまらずに、その話し手の性格・氣質にもよる。反應の速やかな、興奮しやすい氣質（多血質および膽汁質、すなはち陽氣・むら氣やおこりつぽいもの）の人にあつては、反應のおそい、興奮しにくい氣質（憂鬱質および粘液質、すなはち陰氣な、內氣なものやねちねちしたもの）の人よりも抑揚に富み、變化のある語調の話し方をするものである。概して男よりも女、年長者よりも年少者の方が語調の變化に富むのは、その感情の動きがさかんであり感受性がつよいのによる。

自然民族の言語は、一般に文化民族の言語よりも語調の變化が大であるといふ。スペンサ・リヒャルト・ヴァーグネル・ヴント・イェスペルセンのいふやうに、原人の言語は、一種のうたであつたと推定される點がある。ヴントの考では、まだ人間の理性と本能との分化しない時代には、言語と歌謠とが身振や表情を伴ふ原始旋律（*Urmelodie*）のうちに融合してゐたのである。進化の道程において理知が本能から分化するにつれて、言語も旋律から分化したもので、それが概念的・抽象的になればなるほど、いよ〳〵音樂的要素を失つたのである。この見解はある程度まで言語の發達の歴史が立證するところとして、言語學者の多くが是認するところであるが、必ずしも悉く正當ではない。支那語のごときは音樂的といはれるが、その故にたゞちに支那語を發達の程度のひくい言語とすることはできない。古代ギリシア語は高さアクセントをもつてゐたが、古代ギリシアの文化は、燦然たる哲學を有し、崇高な藝術を有し、高級な社會生活を有してゐたのである。

論理的語調。

語句の論理的内容に應じて、叙述・疑問・斷言などを表現し、またその構成部分の關係を明かにするやうな語句における高さの布置を論理的語調と名づけることができよう。しかも事實上、論理的語調は、感情的語調の一つの特殊の場合である。疑問に伴ふ好奇心や、肯定または否定に伴ふ信念など

において、感情が重要な役目を營んでゐる。たゞこの場合には、喜怒のやうな情緒とちがつて、理知的要素も大いにあづかる。さういふ次第で、論理的語調とはいふが、その實感情的語調と同一の能因によるもので、その心理現象と音聲にあらはれた高低運動とを結びつける關係を精密にきはめることは、やはりすこぶる困難である。そしてその樣式は言語によつて一樣でなく、一般的にしかぐといひ定めがたい。

國語における思想の表白の樣式が語調の變化とどういふ關係をもつかについては、別に項を設けて細論を試みよう。

語における高低の成形。

以上の能因以外の能因によつて、語における高さが一定の布置を示し、その樣式が語の構成の必須條件となつてゐるとき、その高低の姿、高さの成形を「高さアクセント」または「調子アクセント」と名づけた。この場合に一つの單語は、單にしかぐの音質の語音の連接として成立つのではなくて、さらに一定の高さの布置による統一的な姿を示して、一語としての地位を要求するのである。

「高さアクセント」または「調子アクセント」(*pitch accent*)は、いはゆる「音樂的アクセント」(*musikalischer od. tonischer Akzent*)にあたる。

この種のアクセントを有する言語は、古代にあつてはサンスクリットがあり、古代ギリシア語（キリスト出世の時代頃までの）がある。現代の言語にはヨーロッパにスウェーデン語・ノルウェー語・リトゥアニア語・セルビア語があり、東洋には支那語・安南語・シャム語などがある。そしてわが國語のアクセントが、また實にこの種の高さアクセントであることは次に説くところである。

國語における語の高さは、どういふ風に進行するか。次の表（第一〇、一一表）は「八」（hatʃi）および「蜂と蚊」（hatʃi to ka）における各母音のこゑの振動數がどういふ進行を遂げたかを、東京語のアクセントを以て發音した女聲の一例について示すものである。たゞしその振動數は、喉頭音記器を以て描錄した曲線から算出したもの、以下の例もみな同樣である。

第一〇表

「八」（hatʃi）

a	i
振動回數 16	振動回數 38
繼續時間 73σ	繼續時間 134σ
214	266
212	260
207	256
209	260
216	263
218	270
222	274
223	286
217	294
219	294
223	304
225	304
235	304
	304
	304
	313
	323
	319
	319
	319
	319
	319
	312
	310
	310
	304
	294
	286
	280
	267
	260
	……

第一一表

「蜂と蚊」(hatʃ͡i to ka)

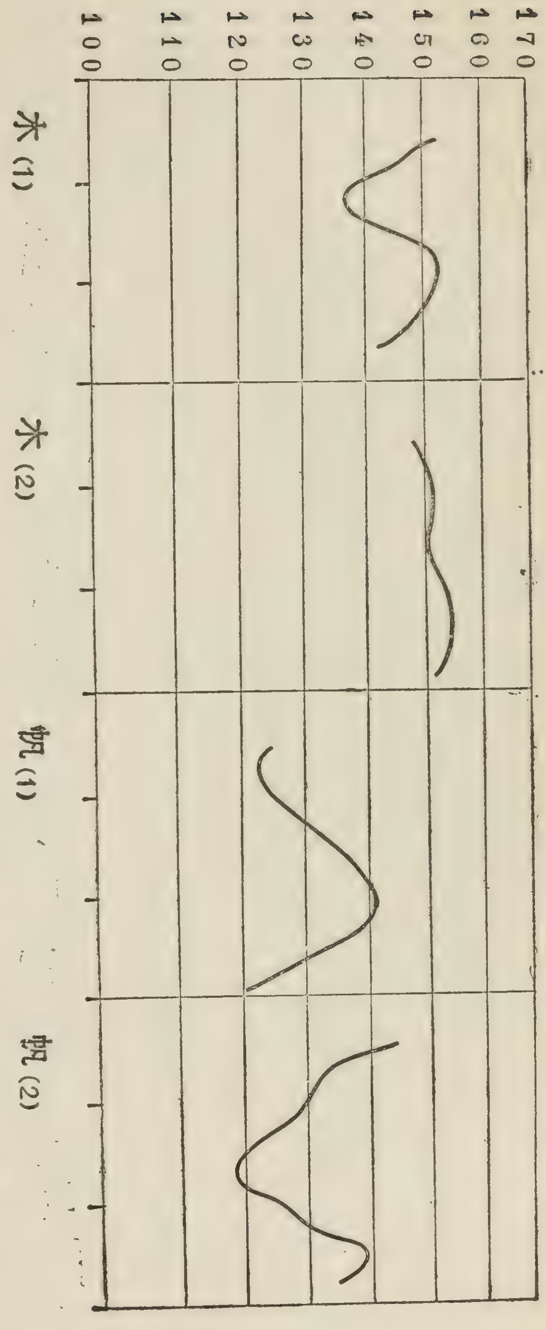
	a	i	o	a
振動回數	20	21	25	23
繼續時間	74σ	81σ	107σ	106σ
	232	260	252	252
	232	265	250	252
	223	260	245	254
	224	262	247	256
	226	262	250	252
	226	262	243	248
	224	262	243	242
	224	262	243	239
	224	256	242	234
	223	258	240	232
	220	260	236	223
	229	260	232	214
	248	260	232	210
	248	260	236	203
	242	258	236	199
	242	252	236	199
	238	240	242	192
		235	243	184
		218?	242	169
			232	165

振動數の變化は、かやうに一つの音節の內部、一つの母音の進行中においても、かなり著しいものがあり、特に最後の音節は、アクセントのために特に高くなるものでない場合には、普通よりも一層いちじるしく低下する傾向がある。これは語句の終にあらはれる一般的傾向であつて、音樂の方面でいはれる「靜止」(完全靜止)に應じるところの事實である。その能因は、やはり終止にのぞむ心理的および生理的緊張の漸衰に求めるべきであつて、それ〴〵の單語に固有な高さの布置とは區別して考へなければならない。とにかく、かやうに聲帶の振動の週期は刹那々々に變化するが、これを聽覺に

おける高さの變化として知覺することは、元來一音節の長さがごくわづかなものであるのと相俟つて、普通には不可能に屬する。聽覺的高さの知覺は、一つびとつ振動數の變化を逐つて忠實にこれをうけ入れるのでなくて、普通には一つの音節、一つの母音の全體について、しかも大體の高さを知るのみである。たゞ長母音をもつ音節については、時としてはその上昇または下降の方向を知覺するぐらゐのところである。

一つの音節內の高さは、かやうに客觀的な振動數の變化をそのまゝに變化していくといふ感觸を生じるのでなくて、むしろ全體として隣接の他の音節に比してそれより高いまたは低いと判斷される。一層現象的事實に卽していふなら、語句の高さは、全體的な上昇または下降の動きとして感じられるのであつて、そこに調子の布置によるアクセントの姿があらはれるのに外ならない。これに分析を加へ反省を施してはじめて、ある音節が他の音節よりも高いまたは低いといふ關係を見出すのである。振動數の系列における谷、すなはち振動が減じてのちさらに增す運動の位相において、判斷はその部分の高さを低いとし、これに反して振動數の系列における山、すなはち振動數が大きくなつてのち小さくなる運動の位相において、判斷はその部分の高さを高いとする。たとへば、前例の「蜂と蚊」の第一の〔ha〕の音節において、振動數は最初の二三二から、やゝ減じて二二〇におよび、次に增して二四

第一九圖　音節內部の振動數の變化（ロ譯）



八にいたり、その曲線は第一九圖に示した他の語の例にも見るやうに、前半において下降から上昇への位相を示すが、その高さを判斷するに當つては、全音節を次の音節への傾斜の關係において低いとするのであつて、その際振動數の谷に當る部分の高さが、かなり有力な程度においてその音節の高さの判斷を決定する一能因としてあづかるのである。

かやうに高さの知覺・判斷において問題になるのは、音節の高さであり、これが所依となるものは、

その特色を有力に示す振動數の漸增・漸減の轉回點であると考へられる。音節の高さがそれ自體明かな調子として獨立に知覺されることは、特にそれを招致するやうな心理的な構へ方をするのでないかぎり、通常にはおこらないことである。熟練を經た耳を以てしても、ある語句の中の音節が談話の際の普通の速さで發音されたとき、これを何の調子の音と判定することは、ほとんど不可能である。ただ漠然とその大體の調子（*Tonlage*）を感じるだけであらう。

ところで、それ〴〵の音節における高さは、語句全體の高低運動によつて、各自その位置を與へられる。語句の全體の高さを背景として、はじめて各語の高低の布置が明確な姿をあらはして來る。すなはち一つの語「蜂」なり「橋」なりが、一句一文のうちに投げこまれたとき、そこに全體的高さのうちにある一定の位置をとり、さらに同時にその語の內部において高さの一定の成形を示すのである。第一音節の高さが何程、第二音節の高さが何程と、別々に定められるはずのものでなくて、その二つの音節が相倚つて高さについての一定の相對的關係をあらはし、さらに語句全體における地位によつて、その高さが定まつて來るものである。各音節の絕對の高さは一定したものではあり得ず、その事態に應じて種々に變化する。同じ個人について見ても、もとよりつねに同じではない。たゞ一つの語の中の音節間の相對的關係はおのづから不變的なものを有し、語そのものゝ構成要素として、各語に

固有な姿を與へるものである。その姿、その高さの成形こそ、國語のアクセントなのである。

かやうな高さアクセントの成形を認識するためには、語の各音節が相對的に示すところの高さの段階的關係を定めることが必要である。これは現實の話しぶりにおける國語の觀察、およびその客觀的方法による實驗記錄にもとづいて研究すべき問題であつて、前揭の例「蜂と蚊」について見れば、「チ」の母音と「ト」の母音とのおほよその高さは同等と見ることができ、これに對して「ハ」と「カ」との音節における母音のおほよその高さは、これより一段低いと見られる。かやうな比較から母音の高さ、したがつてまた音節の高さの段階を設定することによつて、種々のアクセントの成形を科學的認識の對象とすることができる。

四〇　國語における高低の三段階――アクセントの表記法

日常の話しぶりにおける語音の高さの測定は、聽覺的知覺と主觀的判斷とによるときは、すこぶる曖昧であることを免れない。語句における高さは、全體としての傾斜、すなはち上昇的・下降的または昇降的などの姿で感知されるのであつて、いはゆるアクセント感は、かやうな全體的姿の把捉に外

ならない。その各音節の相對的高低を知り、アクセントの形式を知るに至るのは、實地には多少人工的な、ゆつくりしたテンポで各音節を引のばして發音した場合の各音節の高さの比較による圖式的な觀察にたよることが多い。多くの場合にアクセントの形式は、かうした手法によつて、聽覺的にもはつきり知覺され、主觀的にもよく判斷されるのである。こゝに注意すべきことは、この手法を以てする際、本來の高低運動のあらはれ方をなるべくそのまゝ變化せずに保つことである。主觀的方法の一つの短所は、觀察者みづからの個人的習慣や先入見が、自分の氣のつかない間に入りこんで、つひに一種の確信ともなるに至るところにある。事實をありのまゝに見るといふ態度、特定の立場から離れて自由に考へる態度は、いづれの科學においても必要な事がらである。

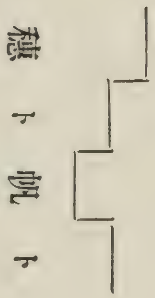
聽覺的知覺による直接の方法は、かやうにまづアクセントの形式を定立しようとするやうな場合に、その高低の相對的關係を明かにするために、多少人爲的な、時としてはしば〳〵不自然な發音をするやうになるから、周到な注意を拂ふことを忘れるならば、ともすれば不適切な形式觀に導かれるおそれがある。この短所を補ふものは、間接な客觀的測定法である。語句における高さの布置は、客觀的方法によつて、振動數の分布として算出される。かやうな客觀的與料が知覺上のアクセントの素とどういふ法則的な連繫を保つかを研究して、聽覺的觀察の結果をこれによつて補正することができる。

客觀的測定法がアクセントの理解に對して重要な意義をもつわけは、つまりこゝに存するのである。

高さアクセントの考察は、各音節の高さを數種の相對的な段階に攝して、かやうな段階の高さの種々の結合による形式と見ることによつて、すこぶる單純化され、また大いに理解を助ける。高低運動の上昇および下降などの傾向の樣式を以てしては、これほど單純で明瞭な形式觀を得がたい。そこで從來種々の言語において、いくつかの高さの段階を立てゝ、これによつてアクセントを說明することが行はれた。この點では、强さアクセントにも全く同樣なことがあるが、いまは說かない。もとより語音の高さの變化も、その範圍は音樂における歌謠に及ばないとはいへ、なほかなり廣いことは廣い。そこでその微細な差異について考へれば、三四の段階だけでは足りない。しかし、實際の言語の運用には、おのづから區別されてゐさうな段階は、さまで數が多くはない。高さアクセントが四種あるといはれるシャム語では、上方へ四度および三度の高まりと、下方へ五度の低まりと、一全音の內部で上下するものとが算へられてゐる。ハーン（Th. Hahn）によれば、アフリカのホッテントットの言葉には、c・f・c′ の三種の高さの段階が區別されてゐるといふ。[10] パンコンチェッリカルツィアは、さらに精細に研究した結果、[11] 必ずしも嚴密にこの高さに相當してゐるとはいはないが、三段階の區別を認めるについては同意見である。支那語のいはゆる四聲は、おほむね一音節の長母音における高さの傾斜であつ

て、段階的に考へるだけでは十分でないが、北京官話で上平・下平などの稱呼をつかふところに、やはり段階的見方の行はれることを察し得る。

國語においては、從來高い音節と低い音節との二級の高さの段階が考へられ、この高低の二種の高さの種々の配合としてアクセントの形式が説明された。山田美妙の見解のごときはこれである。[12] しかるに、かういふ二段階に分ける方式では、國語にあらはれるアクセントの形式を十分それ〴〵の特色において明示することができない。これは實例について見ると、ぢきわかる。たとへば、「穂と帆と」のやうな連語における高さの布置を見るに、「穂」が次の「と」の音節より高く、「帆」が前後の「と」よりも一段低く發音されることは、主觀的な觀察によつても、たやすく知れよう。これを圖式的にあらはせば、



のやうになる。實際の發音では、その場合の事情で高低變化の時間的または音程的性質がいろ〳〵になり、二つの「と」がその前の音節との對比によつて、必ずしも同じやうな高さになることは期せら

れないが、高低の相對的關係は、おほよそ右の圖式によつて表はされるのである。これで見ると、少くとも三段階の區別がいる。さらに同じ語句の發音を客觀的に記錄したものから、振動數の變りかたを算出したものについて見ると、思ひ半ばに過ぎるものがある。次に掲げるものは、男聲の「穗と帆と」の發音の一例である。

第一二表

「穗と帆と」(男聲)

(h)o	(t)o	(h)o	(t)o
149	136	127(?)	131
150	134	118	130
153	133	112	130
158	131	110	132
158	127	107	134
158	122	108	140
158	119	111	149
158	118	111.5	154
163	116	111.5	154
163	118	111.5	156
163	122	111.5	156
169	124	112	156
169	124	112	154
169	124	……	151
……	119		147
	116		144
	114		
	113		
	112		
	111		
	111		
	111		
	111		
	111		
	113		
	113		
	113		
	104		
	104		
	……		

右の例で、「穗」の音節の高さを「上」の高さ、兩方の「と」の音節の高さを「中」の高さ、「帆」の音節の高さを「下」の高さとし、上・中・下の三段階をかりに八分音符を用ゐて次のやうに示す。横

線は中位の水準的高さに相當するのである。また三段階をそれぞれ、「┌ ― └」で示す。

1) 

2) 

3) ┌ ― └ ―
(上) (中) (下) (中)

4) |ho to|hoto

音符を用ゐる方式（1・2）は、高低の關係をわかりやすく示すに適し、「かぎのて」の符號を用ゐる方式（3・4）は、音字に添へて記すに適する。(4)では中の高さの符號を省略してある。

さらに發音を「かたかな」の「たてがき」で示すときは文字の左側に細い線を施して下を、その右側に太い線をつけて上を示すことホ(穂)トホ(帆)トのやうである。この際いづれの線をも施さないのは中である。「かたかな」では、しひて〔g〕と〔ŋ〕との別や、「ジ」と「ヂ」との別をかきあらはさない。これについては子音の條下の叙述によつて、すでに理解されてゐるはずである。

つぎに、二音節に見る三様のアクセント、すなはち「明・秋・飽」の高さの布置は、この方式を以

てすれば的確にあらはすことができる。

1)

a ki
（明）

2)

a ki
（秋）

3)

a ki
（飽）

またこれをアキ（明）・アキ（秋）・アキ（飽）のやうに示せば、一層簡單である。在來の二段階の見方では、往々第一の型のアクセント（下中）と、第三の型のアクセント（下上）とが混同されるか、または山田美妙のしたやうに第一の型のアクセントを「全平」として第三のと區別しなくてはならない。この二つを混同するのは、のちに說くとほり大きな間違であるが、「明(アキ)」のやうな型のアクセントを「全平」として、二つの音節の高さの差異を無視しようとするのも、妥當ではない。かういふ形式觀は、觀察上の事實をまげると共に、實驗上の成果とも明かにくひちがひ、それどころでなくアクセント形式の說明や考察を困難にする傾がある。

國語、少くとも東京語において、この高さの上中下の三段階を以てアクセント考察にとつて十分であるとする理由は、各種の語彙の高低關係を表示し得てその骨子をとらへ、語の相互の區別を可能にする特異性を呈示し得る故である。そしてこれ以上別に段階を想定することを必要としない。さうい

ふ次第で、この上中下の高さの三段階は、アクセント形式の考察における段階として、必要であつてかつ十分なものである。

それから、國語、殊に東京語の高さの布置について見ると、中の高さが最も多くあらはれて、高さの水準を形づくる趣がある。上および下の高さは、この水準からはなれて上下し、さらにこの水準に向つて歸着するといふ觀を呈する。かくて中の高さの水準面に對して、上の高さは山であり、下の高さは谷である。この見方によるときは、國語の高さアクセントにおける高低運動は、およそ中位にある高さから、一方には上方へ高まり、一方には下方へ低まるやうに、上下の二方向に向ふといふことになる。すなはち中の高さから、上または下へ偏るのである。かういふ考へ方が、アクセント形式觀を單純化することは、次のアクセントの說明において明かに示されるであらう。

單音節語については、支那語の四聲において見られるやうな高さの傾斜があつて、それがその語のアクセントとして知覺されると想像することもできる。ポリワーノフは、國語の單音節語について一般に上昇的および下降的の高低運動の存在を認め、これによつて單音節語のアクセントを分けて二種とし、東京語における「繪」にあらはれるやうなものを上昇的、また同じに「柄」にあらはれるやうなものを下降的としたことがある。[13] ところが、普通の會話などにおける速さで發音された短母音の五

分の一秒以下の長さにおいて、明かな高さの傾斜があらはれて、以てアクセントの特徴を知覺させることは、事實上困難のやうに思はれる。さらに客觀的測定によつて得た振動數の逐次的系列について見ても、高さの傾く方向は各語において一定してゐない。單獨に發音された「柄―繪、帆―穗、鬆―酢」などの描錄曲線からその振動數の變り方を出して見たら、大體次のやうな結果が出た(男聲)。

第一三表 (單音節語の高さ)

語例型	母音の長さ(σ)	振動數	方向
柄 è 下	(一)二二〇	一二四―一三〇―一三五	昇
	(二)二五〇	一四〇―一五〇―一五八―一六〇	昇
	(三)二二〇	一一八―一一九―一一五―一一八	平
	(四)二三〇	一一九―一一八―一一六―一一五	平
繪 è 上	(一)二五〇	一六〇―一五八―一五七―一六〇	平
	(二)二四〇	一四七―一四六―一五〇―一六〇	昇

帆	ho	下	(一)二一〇	一四五―一四一―一四〇	降
			(二)二四七	一二三―一二八―一三四―一三五―一三五―一三〇	昇
			(三)二二八	一三〇―一二五―一二五―一二七―一三〇―一三二	昇
穗	ho	上	二二八	一二〇―一一五―一一四―一一二―一一一……	降
鬆	sü	下	二五四	一四五―一四九―一四六―一四三―一四〇―一四〇	降
酢	sü	上	(一)二三二	一五五―一五四―一五〇―一四五―一四二……	降
			(二)二一五	一四七―一四五―一四五―一四五―一四一	降
木	ki	上	二二一	一四七―一四八―一四八―一四八―一四九―一四七	平

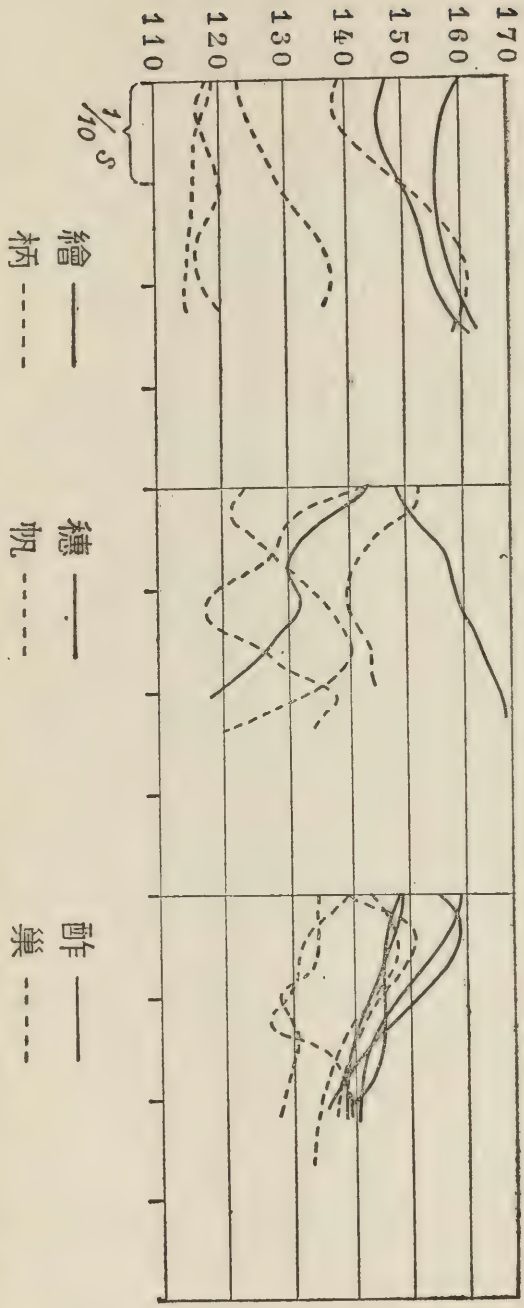
これによつて見ると、上昇的・下降的および平進的などが各語について定まつてゐるのでなくて、他の能因によつて規定されるものであることが思はれる。またこの表中において高低がアクセント形式と反對になつてゐるのがあるが、それは各語が比較されずに、別の機會に單獨に發音されたゝめである。連語中における單音節語のアクセントは、前揭の「穗と帆と」の例で見ると、「穗」の高さが上昇的で、「帆」がやゝ下降的である。(第二〇圖參照)

かやうに、音節內部における高さの變化の方向は、語のアクセントとして固定したものでなくて、

他の能因によつて規定されるものとしなくてはならない。たゞ單音節語の高さが語句のうちでとる位置、すなはち語句の高さの水準から偏る方向は、それ〴〵の語について一定してゐるのである。

第二〇圖

單音節語の高低



ところが、長母音・重母音および母音と[ŋ]との連音を含む單音節語においては、高さの變化の方向がきまつてゐるのであつて、この場合には上昇的および下降的の區別が成立つ。これを音節の章で説

いたやうに二つの可能的音節、二熟音から成る單語と見なすと、そのアクセント形式は、二音節語のアクセントの諸型と同じものになる。

長母音を含む單音節語について見ると、次の對立が認められる。

上昇的—ボー（棒）　棒をふりまはす。
　ホー（法）　そんな法はない。
　ヂョー（錠）　錠をおろす。
　クー（空）　のぞみも空になつた。
下降的—ボー（坊）　坊はきゝわけがある。
　ホー（方）　こつちの方がいゝ。
　ヂョー（上）　これは上の部だ。
　クー（食ふ）　人並に食ふ。

また二つの母音を含むものについても同様である。

上昇的—カイ（効）　はる〴〵來たかひがある。
　マイ（舞）　一さし舞をまふ。

　　　　サイ（栞）　栞が氣に入つた。
　　　　トイ（問）　人の問に答へる。
下降的―カイ（貝）　濱で貝をひろふ。
　　　　マイ（繭）　蠶が繭になつた。
　　　　サイ（賽）　ひとつ賽をふる。
　　　　トイ（樋）　こはれた樋をなほす。

この種の語のうち下降的なものは、その高さの傾斜に伴つて强さも漸弱的となり、二つの母音は〔aĭ〕・〔oĭ〕などのやうな重母音を形成して、語は單音節のものとなる傾向が著しい。ところが、上昇的の高さの方向を示すものは、重母音を形成することが稀であつて、二つの母音がそれ〳〵獨立して二音節となる。まれに重母音となる場合には、その高さの布置もおのづから變化して、上昇的よりはむしろ水平的となる傾を示す。

いま男聲の「効」と「貝」との描錄曲線から、その振動數を算出して、その變化の模樣を見るに、次のやうである。

「効」　一二〇―一一五―一二二―一三〇―一三六　昇

「貝」　一三三—一三六—一二〇—一一五　降

これによつて高さの上昇的および下降的のそれ〳〵の姿を想察することができよう。

二つの母音の連つて上昇的な進行を營む語のうち、「醉」〔joi〕、「肥」〔koe〕の二語は、他と異なつて上昇の傾斜が一層大である。これは語句の水準に對するこの語の地位を見るとき明かになるものであつて、あたかも二音節語「飽」〔ɑ⌈ki〕、「橋」〔hɑ⌈ʃi〕などゝ同樣である。

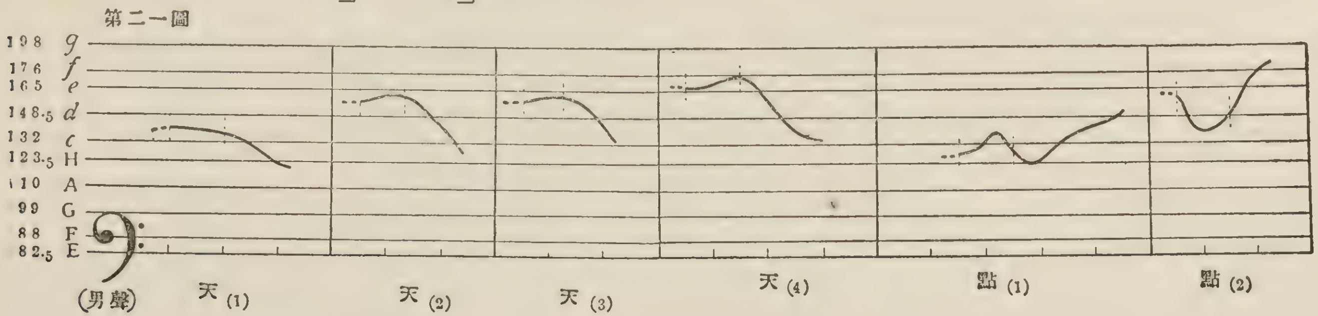
母音と〔ɴ〕との連音を含む語にあつても、長母音や重母音を含むものと同樣で、上昇的および下降的のものが對立すること次の通りである。

上昇的—カン（疳）　あの子は疳がつよくてね。
　　テン（點）　あの先生は點がからいぜ。
　　バン（晩）　晩になるとずつと涼しい。
　　オン（音）　この字の音をわすれた。
下降的—カン（寒）　やつと寒があけた。
　　テン（天）　天から降つて來る。
　　バン（番）　よく番をしておいで。

オン(恩)　　　そんなに恩におきせなさんな。

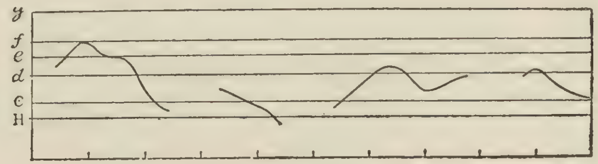
第二一圖

「天」と「點」



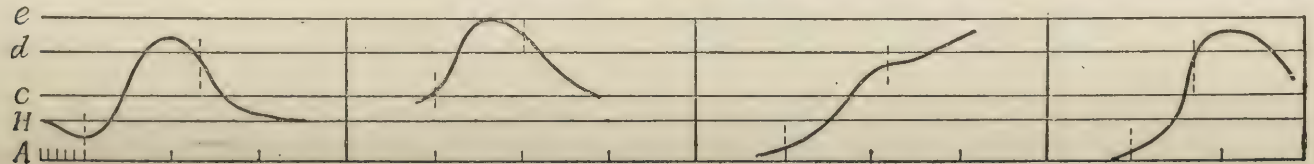
第二二圖

「天と點と」



第二三圖

「番」と「晩」(前の二つは「番」の、後二つは「晩」の例)



この場合にも、上昇的の高さの語では、連母音的に二音節を構成するのが普通であるに對し、下降的の高さのものでは、重母音的に一音節を形づくるのが通例である。

いま男聲で發音した「點」と「天」との音聲の描錄曲線にもとづいて、振動數・變化を算出し、これを圖にゑがいて示すと、右のやうな形の高さの曲線ができる。（第二一圖「天」および「點」、第二二圖「天と點と」參照）

これまでに述べた種類の語について、連母音などを含んで二音節に發音されるのを普通とするものはもとより、その他長母音・重母音または母音と〔ŋ〕との連音を含む一音節の語も、その可能的音節、すなはち熟音の數を考へることによつて、これを等しく二音節語と見なし、各の熟音に適當な段階の高さを配當して按排するときは、本來の二音節語と同樣にそのアクセントの形成を理解し得るであらう。すなはち上昇的な高さの傾斜を示す「棒・効・音」などは、それ〴〵〔bo-o, kɑ-i, o-ŋ〕の二音節とし、その前部が低くて後部が高いところはまさに「明(アキ)」におけると同樣であるとし、これをそれぞれ⌊bo-o, ⌊kɑ-i, ⌊o-ŋ のやうに記す。これに對して下降的な高さの傾斜を示す「坊・貝・恩」などもまたそれ〴〵前に述べたやうに二音節に分け、その前部が高くて後部が低いところはまさに「秋(アキ)」におけると同樣であるとし、これをそれ〴〵 ⌈bo-o, ⌈kɑ-i, ⌈o-ŋ のやうに記す。「醉(ヨイ)」の場合は、前部が低

くて後部がずつと高くなり、語句のうちに占める地位によつて他の類型の語と異なる姿を示すのであり、まさに「飽(アキ)」と同様な高さの姿をあらはすから、これを ⌊•○-⌉• のやうに記す。

かやうに種々の語における可能的音節について、その相對的な高さを求め、これを上中下の三段階に適合させると、語の高さアクセントの姿が圖式的に理解されるやうになる。そこで、次の數章において國語のアクセントを考察するに際しては、もつぱらかういふ仕方を以て進んでいく。

かく長母音・重母音などを含む音節を、便宜上二音節と見てアクセントの形式を考へ、あたかも子音によつて導かれる普通の音節の二つだけある場合に準じて取扱ふことは、何等妨げるところもないことである。たゞこゝに一言注意すべきことは、特に長母音の場合には、テンポの速い實際の發音において、上昇的のものとして豫想される部分に事實上往々平板な高さの進行を見ることのあることである。たとへば會話などの中に出て來る「東京」といふ語の「トー」が、ほとんど上昇的進行でなく大體平板な高さを示すやうな事例がある。これは注意ぶかい觀察によつても知り得るが、客觀的記錄もこれを明示する。前に例示した「棒」のやうな場合にも、この平板的進行のあらはれる傾が見え、一般に長母音・連母音などを含む連音のその部分の高さが平板になる傾向が往々觀察されるのである。しかも、この故に、これらの語が他に見ることのない特別のアクセント形式、

すなはちいはゞ本來の意味の「全平」の型のごときを具へるのだとすることは、アクセント形式觀をいたづらに多端にするだけでなく、直接なアクセントの感じを正當に解釋したものとはいはれない。むしろこゝには、アクセント形成の力に他の能因が參加して、かやうな趨異をあらはすものと解するが妥當である。

語句の末尾において語音の高さが著しく下降する傾向は、直接に知覺することも困難ではないが、特に客觀的描錄の方法によつて、すこぶる明かに指摘し得るのである。これを音樂の上における「靜止」に比したが、またいはゆる論理的語調として考へることもできる。そして語のアクセントとは別の問題として取扱ふべきものである。單獨に發音された單語または連語の終においても、この種の著しいこゑの低下があらはれる。それで、アクセント形式の定立に際しては、かやうな別箇の能因にもとづく現象を除外しなくてはならない。普通かやうな結末のこゑの低下は、同時に强さの著しい減衰を伴ふから、知覺上ではこの部分がほとんど無視される有樣である。あるひは全く知覺の圈外に逸し去るともいふべきである。この弱く低い部分は、往々かなりの長さをもつてゐ、特に助詞などのいはゆる「虛辭」の終において、しばしばかすかな命脈をつないでゐる。こゝではこの極めて弱く低い部分が、ほとんど語音の存在しないのと同樣な、すなはち音休止と同樣な意味をもつて考へられる。む

しろ積極的に音を休止するために發音運動を中絶するだけの勞を省いて、これを以て休止にかへるものと思はれる。とにかくアクセントにおける高さの布置に對しては、この終末低下の傾向は本質的に沒交渉な事がらである。

註(1)古く行はれた「入聲」は例外だが、今の北京官話における四聲、すなはち「上平・上聲・下平・去聲」はいづれもさうである。

(2)これは著者が國語のアクセントの實驗に際して主として用ゐたもの、クリューゲルおよびウィルト (Krueger, Wirth) 二氏の考案にかゝる *Kehltonschreiber* で、ライプチヒの E. Zimmermann の製作である。その他種々の裝置については、ルスロ・スクリプチャ・グツマン・カルツィアなどの實驗音聲學參照。

(3)Daniel Jones: *Intonation curves*, Leipzig 1909.

(4)Lermoyez による。

(5)H. Riemann: *Musikwissenschaft*; *Musikalische Dynamik u. Agogik* など參照。

(6)L. Hermann: Pflüg. Arch. Bd. 58, p. 258.

(7)M. Isserlin: *Psychologisch-phonet. Untersuchungen.* (Stumpf: *Sprachlaute*, p. 89 參照)

(8)W. Koehler: *Akustische Untersuchungen*, III. Zt. Ps., Bd. 72 (1915) p. 103—. E. R. Jaensch: *Die Natur der menschlichen Sprachlaute*, Zt. f. Ps. II, Bd. 47. (1913), p. 255—.

(9)Bourdon: *L'expression des émotions et des tendances dans le langage*, Paris 1892, ch. 1.

(10) W. Wundt: *Völkerpsychologie; Sprache* I, p. 421 參照。

(11) G. Panconcelli-Calzia. *Einführung in die angewandte Phonetik*, p. 125—130.

(12) 山田武太郎（美妙）著『日本大辭書』（明治二五年）。

(13) これは土佐方言などで、この種の單音節語が長母音に發音され、そこに高さの變化があらはれるのから思ひついた考ではあるまいか。大正五年（一九一六年）頃著者が氏に面接した際に、この考は熱心に主張されたのである。

後篇　語調篇

語調論

- アクセント論
  - アクセント總説
  - アクセントの形式
  - アクセントの分布
  - 語の連接におけるアクセント
  - アクセントの保存と轉化
- 話における音聲進行の姿
  - 音聲進行の全體的傾向
  - 音聲の心理的表出
  - リズム

第三部 アクセント論

第十三章 アクセント總説

四一 アクセントの意義

「アクセント」(イギリス・フランスの *accent*、ドイツの *Akzent*、イタリアの *accento* など)の名稱は、ラテン語の *accentus* (＜*ad*＋*cantus*) から出たもので、このラテン語は、ギリシア語の *προσῳδία* (＜*πρός*＋*ᾠδή*) の逐語譯であり、文字そのまゝに解すれば、'song added to' であつて、特に言葉についていはれたといふ。[1]

ギリシア語 prosōdía の譯語としてのラテン語 *accentus* は、最初 'das zum Sprechen hinzugesungene' といふ意味で、少くとも主として言語の旋律、すなはち語音の高さについていはれた。たゞし語源の prosōdía は轉じてイギリス語 prosody として語音の長さの論究を意味するに至り、アクセント論とは別のものとなつた。さういふ次第で、古代ギリシアのアクセント論は、もと〳〵語音の高さについて

の考察である。

古代ギリシアの文法家は、音節における語音の高さの推移を考へて、次のやうな三種のアクセントを分けた。すなはち、

(一)するどいアクセント(ὀξεῖα=acutus)。高い調子をもつもので、語句の他の部分に比して約五度(διὰ πέντε)だけ高いとされるもの。

(二)にぶいアクセント(βαρεῖα=gravis)。前記のアクセントを示さない、他のすべての音節に亘るもので、平準の高さにあたると思はれるもの。

(三)起伏アクセント(περισπωμένη=circumflexus)。長母音だけにあらはれるもので、文法家のいふところによると、鋭いアクセントとそれに次ぐ鈍いアクセントとの結合したもの、すなはち音節の前半で高く後半に至つて低くなるもの。

この三種の形式は、ラテン語についても說かれ、アレクサンドリア時代のギリシア流の文法と共に、このアクセントの種別と理論とが、近世の言語の考察にまで套襲された。古代ギリシア語におけるアクセントとは、語音の高さの布置によるもので、そのアクセント理論は、やはり高さアクセントの性質に着眼して出て來たものに外ならないが、後人はこれを強さアクセントを有するヨーロッパ近代の諸

言語に適用して格別の不都合を感じなかつた。今日普通には、アクセントの語がもつぱら强さアクセントを指すと考へられるまでにもなつてゐる。それが音聲の事實的研究に當面するに及んで、アクセントに關する新現象を見出して、新しい形式觀や新しい名稱を作り出すやうになつた。そこで、注意ぶかく舊來の名稱や理論と、新しい見解にもとづくものとの間に區別を立てることを怠るならば、往往混同と不理解とを生じるやうな事態を來したのである。

近世ヨーロッパ語のうち、イギリス・ドイツ・フランスなどの諸國語が强さアクセントをもつてゐるものであることは、一般に認められるところである。現時のヨーロッパにおいて、古代ギリシア語と相似て高さアクセントをもつものは、わづかにスウェーデン・ノルウェー・リトゥアニア・セルビア・クロアチアの地方の言語だけである。フランス語は、ある時代に强さの大小を著しくあらはしたやうであるが、現代のフランス語では、强さのあらはれ方がドイツ語などよりは僅かであつて、その强さの布置もまたかなり趣がちがつてゐる。

一方において高さアクセントを有する現代語について見るとき、そのあらはれ方においてそれぞれ特色を有し、强さアクセントのあらはれ方のおほむね單純なのに比して、往々すこぶる複雜な樣式を示すのである。

かくアクセントを構成させるものが、あるひは强さの布置であり、あるひは高さの布置であるといふところに、アクセントの深い二種別が成立つ。が、アクセントのアクセントたる所以において、二者もまた共通な性質を具へてゐる。すなはち、音聲の强さまたは高さの變化としてだけでは、ある種の强弱高低を示すといふに過ぎないが、語句の意味內容をかへりみるとき、ある一定の意味を有し一定の概念を表示するところの音節集團が、强さまたは高さのある定つた樣式を示すのである。これをいひかへるならば、單語またはあるまとまつた意味を示す連語に、それぐ〱アクセントといふ强さまたは高さの固有の姿があらはれる。これはそれらの單語をしてさういふものとして認識させる一つの固有の性質として各單語に具はつてゐるのである。かやうに語句の意味を考へるとき、はじめてクセントの概念が重要なものとなる。すなはちアクセントは、單に語音または音節の强さまたは高さの差異を曖昧にいひあらはすためのものではなくて、積極的な意義を有し、具體的な對象として知覺されるものである。

音樂における旋律は、これを組成する部分たる個々の樂音の累積・總和ではなくて、個々の樂音に見るを得ない、全體に卽してのみ見ることを得る性質を有し、その性質は全く別個の樂音の集團を以てした成形においてもあらはれ得るのである。すなはちエーレンフェルス（v. Ehrenfels）の指摘した

やうに、第一に全體性（*Ganzheit*）、第二に移調可能性（*Transponierbarkeit*）といふ主要な二特徴を有する。氏のいはゆる「成態性質」（*Gestaltqualität*）の一例であり、すなはちまた近時の心理學にいふ「成態」（*Gestalt* また「形態」ともいふ）の一例である。アクセントは、また實に旋律に近似し、かの主要な二特徴を具備するところの成態に外ならない[三]。

かくてアクセントの考察においては、語の構成要素たる各單音の絶對的の強さまたは高さは問題とならないのであり、相對的強さまたは高さがアクセントの特質を示すものである。すなはちその強さまたは高さの成形こそ、アクセント研究の對象である。そしてその最も簡單な成形を示す單音節語のやうな場合には、全體の語句においてとる地位が、必ずやまたアクセント知覺の必須條件となること、單純な空間成態、すなはち幾何學的圖形の如きものがその背景をまつてはじめて成立すると同樣である。たとへば、單音節語「氣」および「木」は、單獨に唐突に發音されたときは、各のアクセントの特色を認めることができないが、それが語句の中にあらはれた場合について見るときは、あきらかに相異なるアクセントを識別し得るのである。この場合には、他の語句の高さは、一つの水準を構成し、その水準から一層高まるか一層低まるか、すなはちこれと相異なる高さを保つことによつて、アクセントが知覺されるのである。かやうな水準が客觀的に語句によつて與へられてゐないときでも、主觀

的にこれを想定し得るやうな事情がある場合には、なほかつアクセントを辨じ得る。これは、たとへば或人の日常の談話における普通の音聲の高さをあらかじめ知つてゐる場合などに可能である。いづれにしても、かやうな水準が存して、それによつてはじめてアクセント知覺が可能である。これは成態の第二特徴たる移調可能性を顧慮するとき當然であつて、「氣」または「木」の高さは、音階の何に相當し振動數の幾何に該當すると絶對的に定まつてゐるのではなくて、この語を含む語句の全體の水準的高さに應じて相對的に定まるものに外ならない。その絶對の高さは、もちろん個人的に異なり、また同じ個人にあつても時に應じ場合によつて異なる。なぜかといふと、それ〴〵の場合における水準が、感情その他の能因によつて變化するからである。その種々の異なる高さにおけるアクセントの同一または別異を判定させるものは、背景のうちに立つところの地位、形勢に處してとるところの態度に外ならない。かゝる語句の強さや高さの水準の上にあらはれる音聲の姿こそアクセントである。

二音節語、三音節語などにあらはれるアクセントは、語句の水準において立つところの地位と共にそれ自體のうちに簡單または複雜な結構（*Struktur*）を有し、その內部に相對的關係形式を藏する。かやうな語彙のうち最も簡單な二音節語のアクセントは、その背景たるべき語句から切はなしても、その內面的成形を多くかへることなく保持するところから、國語のアクセント考察において從來もつと

も注意された次第である。しかし、この場合にも、水準たるべき語句のアクセント知覺における職能を認めないならば、アクセントの理解がすこぶる不完全なるべきことは、次第に明白になつた。この事もまた成態としてのアクセントの當然の要求といはなければならない。

アクセントにおいて、言語の意味内容と音聲との間に緊密な交渉を見る所以は、上來說くところである。これ〳〵の程度においてまとまつた、自足的な意味内容が、アクセントによつて音聲的表現の上に一つの成形を得るといふ相關の關係において、言語心理の作用發現が認められる。アクセント形式の定立は、言語の歷史的發達における傳統によるのであるが、そのアクセントが發音された語音の系列にあらはれるのは、單に生理的習慣によるのではない。語音の系列をアクセントの成態として統一するところの作用において、心理的なものを認めなければならない。

そこで、一派の音聲學者（特にジーヴェルス）のやうに「音節アクセント」を「語アクセント」に對立させるのは、アクセントの語義の含蓄を抛棄するものといはなければならない。この場合には、音節内部における强さまたは高さの差異あるひは變化を說けば足りる。語の一局部たる音節の强さまたは高さを、語全體の强さまたは高さに沒交涉に計量することは、もはやアクセントの考察にとつては無益である。なぜならば、全體の結構においてアクセントが存立するのであつて、これをその部分の

要素に求めることはできないからである。思ふに、いはゆる音節アクセントを說くのは、單音節語における（語の）アクセントを顧慮するに出たのであらう。しかるに、この塲合には、一つの音節が、その客觀的に與へられた、または主觀的に思ひうかべた水準と相俟つて自足的な成態を構成するのであつて、語のアクセントたるにおいて異なるところがない。何等別種の「音節アクセント」といふやうなものとして、區別するいはれはない。

從來强さアクセントの塲合に、普通には單語の數音節中のある一つの音節がアクセントを有するとか、アクセントを與へられてゐるとか說くが、これはその强められた音節の外は、みな强められない音節で、さういふ强さの布置において、アクセントが數音節を結束して全體として一定の成形をあらはすことを手短かに通俗的に物語るものである。ある音節の强めがアクセントなのではなくて、ある單語において一定の音節がその語中の他の音節よりも强いといふ、語の內部における一定した强さの布置の樣式において、その語のアクセントを認めるべきである。ゆゑに、ある單語について「第何音節にアクセントがある」といふいひ方は、嚴密にいふならばほとんど意味をなさないといはなければならない。高さアクセントの場合について見れば、音節の高い調子をもつものにアクセントがある、アクセントがおかれてゐるなどゝいふのは、アクセント成形の半面的特徵を指示するに過ぎないので

あつて、すでに示したやうに、特に水準より低い高さを示すことによつて、その語音の進行において占める自己の位置を目だゝせる單音節語のアクセントのごときは、かやうな見地からはまつたく解しがたい謎とならずにはゐないであらう。

四二　強さアクセントと高さアクセント

一般に強さアクセントについて見ると、この強弱繼起の様式が比較的單純であつて、ある語の某音節に「強壓」(Druck) または「りきみ」(stress) があるといふ考へ方が從來普通に行はれてゐて、大きな不都合をも生じなかつたやうに見える。その際某音節にアクセントがあるといふのは、ある語がその音節を強さの頂點として強さについての一成形をなすといふ意味を暗に示すものである。強さアクセントの形式は、種々の言語についてそれ〴〵異なるものを示すが、概して簡單であつてその種類も少いのである。たとへば、チェク語やホンガリア語においては、必ず語の第一音節が強いといふやうなアクセント形式を示し、ポーランド語においては最終の一つ前の音節が強く、トルコ語および蒙古語では、必ず語の最終の音節が強いやうなアクセント形式が行はれるといふ。またマライ語は、小數の例外を除けば、二音節語を以て構成されたもので、そのアクセントが、母音の短く開音節である場

合のほかは、最終の一つ前の音節の強いものであるといふ。

ゲルマン語系には、おのづから共通なアクセントの傾向があり、すなはち語の最初の音節を強くすることが通有の性質であるが、この一般的傾向は他の種々の能因によつて多少とも變化される。外來語も類化されると、そのアクセントがやはりこの傾向に支配されて、ドイツ語の *Dutzend*, *Leutnant* やイギリス語の *honour*, *nature* のやうに最初の音節を強めるが、さうならずにまだ原語のアクセントを保存するもの、たとへばドイツ語での *Maschine*, *Ingénieur* とか、イギリス語での *hotel*, *caprice* とかいふ類の語もなか／＼少くない。またドイツ語・イギリス語において、多くの單語が強めをうけない接頭語を冠して構成されてゐる（ドイツ語で *be-*, *emp-*, *ent-*, *ge-*, *ver-* など、イギリス語で *a-*, *be-*, *for-* などのついたもの）から、かういふ單語は、第二音節の強いアクセント形式を示すのである。

ローマンス語系にあつては、各語彙はその母語たるラテン語において強めを與へられた音節に、やはり強めを保有してゐる。しかし時には史的變遷によつて變化を蒙つたものもある。さういふ次第で、イタリア語・イスパニア語およびポルトガル語においては、（一）最終音節に強めをもつ少數の語（*oxytons*）、（二）最終の一つ前の音節に強めをもつ語（*paroxytons*）、（三）最終の二つ前の音節に強めをもつ語の三通りになる。フランス語では、ラテン語における強められた音節の次の音節が消滅し、又

はいはゆる「默音」となつてしまつたので、おほむね最終音節の強いアクセント形式を示す。かういふ大體の傾向は、かなり著しくあらはれてゐるものである。

單語が連接してあるまとまりのある連語となつた場合に、その全體における強さの布置がやはり一つのアクセントを形成する。これは、往々「句アクセント」などゝ呼ばれるものである。この場合には、その意味の點で重きをなさないものや主たる概念を限定し修飾するだけの役目のものが從屬的となつて、主たる概念をあらはす語または意味の上で重きをなす語のアクセントに統一される。アクセント形式の頂點を示す強めは、從屬的の語では失はれて、主たる語において顯著にあらはれるのである。たとへばドイツ語やイギリス語について見れば、冠詞・指示および所有の形容詞・關係代名詞・人代名詞・助動詞・接續詞・前置詞・否定詞が、アクセントにおいてこの種の從屬的位置におかれるのである。かく從屬的位置にある語は、その強さが弱められると共に、またそれにつれて著しく音色がかはる。そのことは、特にイギリス語などにおいて見られるところである。すなはち

a boy, *the* man, *he* has, *to* go, *it* is, I have *not*.

などにおける *a*, *the*, *he*, *to*, *it*, *not* はその例であつて、その獨立して發音される場合の 'strong form' とは異なつてゐるところの、いはゆる 'weak form' が、かういふ場合にあらはれるわけである。

	strong form	weak form
a	[eĭ]	[ə]
the	[ðiː]	[ðə]
he	[hiː]	[iː, hi, i]
to	[tuː]	[tu, tə]
it	[it]	シバシバ ['t]
not	[nɔt]	[nət, nt, n]

またドイツ語にあつても、

ein Kind, *der* Mann, *er* ist, ist *es*

における *ein*, *der*, *er*, *es* が弱く發音されて從屬的位置をとる。もとよりこゝに掲げたこれらの語も、いつもきつと他に附隨するとはかぎらない。その意味の上で重きをおかれる場合に際會すれば、十分の强めをもつて發音され、一つの獨立のアクセント形式を存立せしめるのである。

　ところが、フランス語にあつては、この邊の事情が少しちがふのであつて、冠詞・指示形容詞・所有形容詞・關係代名詞（*qui*, *que*, *dont*, *où*）・助動詞・前置詞は、つねにアクセントにおいて從屬的地位にあり、次に來る語のアクセントによつて統括される。これはフランス語におけるアクセント形式

が、ドイツ語・イギリス語におけるものと類を異にするのと、これらの品詞が語法上語句のうちでとるところの位置は、連語におけるアクセントの頂點に當らないといふやうな理由によるのであらう。その他になほ、時としては獨立してアクセントの一形式を示し、またはアクセント形式の主位を占め、時としては非獨立的にアクセントにおける從位に下るやうな語がある。たとへば un excellent homme における形容詞 excellent は從屬的であるが、un homme excellent におけるこの形容詞は、アクセントの主位を占めるのである。また人代名詞 moi, toi, vous, lui などが動詞の前に來るときはいつも從位にあり、さうでないときは主位を占めるやうな事例がある。かやうな次第で、ひとしく強さアクセントであつても、フランス語ではその形式のみならず、その現はれ方が、ドイツ語やイギリス語の場合とまつたくちがふのである。

高さアクセントを有する諸國語のうち、支那語・安南語のやうな、單音節語を主要な要素とするものにあつては、アクセントによつて同音異義の語を區別する必要をしば〳〵生じるわけである。したがつて、その際アクセントの形式と現はれ方とが、重要な役割をつとめるのである。支那の北京官話の「四聲」は、(一)上平、(二)下平、(三)上聲、(四)去聲であるが、たとへば「マ」といふ音節は、そのアクセントによつて、それ〳〵(一)媽、(二)麻、(三)馬、(四)罵のやうに區別され、「パオ」とい

ふ音節は、(一)包、(二)雹、(三)保、(四)報と區別され、また[ti]といふ音節は、(一)的、(二)笛、(三)底、(四)弟としてそれぞれ異なるアクセントを示す。廣東語では、單音節語のアクセントがさらに多種となつてゐる。安南語では、六種の異なるアクセントが行はれてゐるといふ。シャム語では、上方へ四度および三度の高まりと、下方へ五度の低まりと、一全音のうちで上下するものとの四種のアクセントがある。ハーン(Th. Hahn)によれば、アフリカのホッテントットの言葉には、c・f・c'の三種の高さが行はれてゐて、同音の語もその高さで區別されるといふ[3]。かく絶對の高さが一定不變であるとは首肯しがたいところであるが、高さの變化およびその樣式において、種類の多いことは察し得るのである。

古代ギリシア語にあつては、語における高さの布置が音聲的條件、すなはち音節の數およびその音時量に關係して定まつてゐた。いはゆる鋭い調子(オクセーア)は、最後の音節が短い母音をもつものであるとき、その位置が最終から三番目を越えず、また最後の音節が長い母音をもつものであるとき、最終から二番目を越えることがない。いはゆる起伏的のもの(ペリスポーメネー)は、かならず長母音を含む音節にあらはれるが、これは最後の音節が短い母音をもつものであるとき、最終から二番目を越えることなく、最後の音節が長い母音をもつものであるとき、その最後の音節より外には出

ることを得ない。その範圍內では、この調子のあらはれる音節が傳統によつてきまつてゐる次第である。

まとまりのある連語における高さアクセントは、やはり全體としてある成形を示すのであつて、その部分たる單語のアクセントは、この際ある規則的な方法で變化されるものである。

高さアクセントの形式やあらはれ方についての科學的考察は、多少スウェーデン・ノルウェー・支那・リトゥアニアなどの諸國語について施されたものがあるが、いづれもいまだ十分といふ程度に及ばないやうである。以下詳說する國語におけるアクセントの現象の理解は、高さアクセント一般の攻究に對しても、新しい光を投げかけるものであり得るであらう。

四三　國語のアクセント

國語における語音の强さが、著しい變化を示さずにほゞ同樣な程度で配置されることは、前に述べたところである。强さアクセントを示す言語にあつては、多くは音節中のある一音節だけが特に著しい强さをもつてあらはれ、强さの頂點を形づくる趣がある。普通には「その音節にアクセントがある」といふが、この場合のアクセントとは、强さの頂點だけを取出していふのである。これと事情を異に

して、國語にあつては、强さが數音節にわたつて大體同樣に分布されてゐる點に特色をもつが、仔細に觀察するときは、一樣の强さといふうちにも多少の出入はあることを免れない。

ほゞ一樣な强さで發音した連音節について見ると、フランス語の *un, deux, trois, qua're, cinq* の速かな發音についての實驗に示されたやうに（ビネおよびクルティエ[4]）、いきほひ最終の音節にやゝ大きな强めが與へられるものである。たとへば、「ハカマ・アブク」のやうな語にあつては、普通最終の音節が他のものよりも一層强められる傾向がある。それに伴つて、その高さについても最後の音節がその前の音節よりも少しまさるやうな傾向が、しばしばあらはれる。これは强さと高さとの相伴ふ自然的傾向の一つのあらはれであらう。「カラカサ・アカゲット」などの場合では、普通には第三音節に最大の强さが與へられ、それに伴つてその音節の高さが第二音節のよりも幾分高められる傾向が東京語において觀察される。この種の關係から、從來しばしば「ハカマ・アブク・カラカサ・アカゲット」はいづれも第三音節に「アクセントがある」といふ風に考へられた次第である。

國語についても、某音節にアクセントがあるといひ、いづれの音節にアクセントがつけられてゐるかと尋ね求めるのが、從來普通の言語硏究者の態度であつた。[5] かういふ態度が國語のアクセントの十分な理解を結果しなかつたのは、むしろ當然である。强さアクセントについては、語のうちの一音節

だけが強められていはゆる主アクセントとなり、次の段階の強まり、すなはちいはゆる副アクセントがあらはれる塲合には、一音節乃至數音節を隔てゝあらはれるといふことが一般に認められてゐる。かくて一語のうちには、たゞ一つの最も強い音節があり、その所在を定めることによつてその語のアクセントに關する特徴は大體知られ、さらに塲合によつては第二の強まりを求めれば一層明かに知られるといふのが普通の見解である。そして相つゞく二音節または數音節が等しく強められるやうなことは、普通には考へられてゐない。しかし語のアクセント形式としてゞなく、實際にこのことのあるのは、修辭上力強く發音するとき、特に呼びかけなどに見るところで、イェスペルセンの說いたやうに[6]、このとき一語中に同じ強さの強められた音節の相次いであらはれることがしばしばある。またアクセント形式としても、同じやうに強められた音節が相續いてあらはれる事實は、ブロッホがチェク語について用心ぶかく說いてゐる。[7] かく、語の內部における強さの布置が必然的に強い二音節乃至數音節の相續くことを拒むといふわけではない。まして高さアクセントについては、事情も大いにちがふのであつて、ある一音節だけが語の水準的高さから特立することを豫定すべき理由はないのである。

たとへば「ハカマ」の語におけるどの音節に「アクセントがある」かを尋ねることは、どの音節がアクセント形式において重みを有するか、すなはち高さの頂點がどの音節にあたるかといふ意味に外

ならない。その態度は、一音節の卓立を豫想してかゝるものである。一方においてある種の語では、かういふ卓立した一音節を求めることが容易であつて、たとへば「コネコ」（子猫）・「アサガオ」（朝顔）における第二音節「ネ」・「サ」は、卓立して一種のアクセント形式を構成してゐる。しかし「オトコ（男）・「カミナリ」（雷）において卓立する一音節を求め出すことは、困難であり、むしろ無理である。この場合には、二音節または三音節がならんで高まつてゐるのである。さらに「トモダチ」（友達）とか、「イロイロナ　オハナシ」といふやうな連音節の中から特に秀でゝ高い音節を求め出すことはできない。したがつて、この態度で進めば、「アクセントのない語」を認めなくてはならない。

かくて、この態度を徹底するときは、ある種のアクセントについては、音聲現象にあらはれる事實を曲げて、この形式觀によつて作られた形式（一音節卓立の形式）に無理にはめこむと共に、一方には多くの語彙をアクセントをもたないものとして、アクセント考察の圏外に放置することになる。かうして國語のアクセントは、正當に理解される機會を失ふのである。

すでに說いたやうに、國語の語彙にあつては、その强さの布置が必ずしも一定せず、また著しい强弱の出入變化をも示さない。そして事實上多くは高さと相伴ふ。その高さの布置は、語の內部において一定の關係を保つて、それ〳〵の語の固有な屬性となつてゐる。いはゆる語の「形態的價値」を定

立するものである。[8] かやうな高さアクセントが國語のアクセントである。

こゝにアクセントとは、ある音節における母音のこゑの高まりを意味するのではない。語における音節の相對的高低によつて布置された成態、特に音成態 *Tongestalt* に外ならない。その理解のためには高さの全的結構を考へなければならない。そしてその高低は上・中・下の三段階に配當して考へるべきであるから、その形式も趨異に富み、變化にゆたかである。かくて國語のアクセントの理解には、「アクセントの所在」を個別的音節について尋ね求めるべきではなくて、「アクセントの形式」を單語乃至連語の統態の上に描き出すべきであり、アクセントの研究は、こゝに內在する能因と理法とを、その生々しい現象のうちに見出すにいたつて完成するのである。

かやうにアクセントを一つの自足的成態として考へる見地は、[9] 從來の傳統的見解を改める力をもつものである。ギリシア文法家の傳統的アクセント觀にわづらはされなかつた支那語では、古くから「四聲」といふ見方で、とにかくそのアクセントの特色を表示した。國語については、音聲研究者がとかく事實の觀察を二の次にして、外來の理論を輸入することを先にし、古くは支那の「四聲」の考を國語にあてはめようとし、後には西洋文法風のアクセント觀によつてこれを理解しようとした。しかし、國語の音聲事實に當面した研究者たちは、多少ともアクセントの形式を問題にしない

わけにはいかなかつた。E・A・マイエルのごとき、ルスロのごとき、卓越した音聲學者は、その取扱つたわが國語音聲の材料は極めてわづかであつたやうであるが、その取扱つたかぎりではかなり正當な理解を國語のアクセントに對して示したやうに思ふ。マイエルは一九〇三年八月、たまたま藤岡勝二氏の發音について、ウプサラ大學生理學研究室において實驗的研究を施す機會を得、東京語および京都語の二音節語のアクセントに關して二三種の形式を見出したのである。[10]（この年エドワーヅの論文が出版されて、そこには、國語の高さアクセントによつて單音節および二音節の同音語が互に區別されるといふことが說かれてゐた。）すなはち、二音節語については、東京語について二種、京都語について三種の型が存することを見た。その東京語についての二つの型は、前に述べた「アキ」（明）および「アキ」（秋）に相當するもので、二音節語の第三の型はまだ注意されなかつた。ルスロは岡倉氏の發音について東京語の單音節語の高さのちがひに本づく二種のアクセントを區別し得ることを察した。[11]その記錄では、一方は振動數一〇〇―一一〇で「日」などのアクセント（下型）であり、他方は一八〇で「火」などのアクセント（上型）である。

さらに國語のアクセントを音聲現象に直面して觀察し、ひろく資料を事實に求めて研究した人には、古くは山田美妙を、後にはロシア人ポリワーノフを數へることができる。また「日本のローマ

字」社の人々も、實際的要求からこの問題を考察した。山田美妙が東京語について二音節語のアクセントに三つの型を區別してゐたことは、當時世人にあまり注意されなかつたらしいが、のち次第にその正當な考であることを認められるに至つた。[11] 全平といふ型を認めたのも氏が最初である。二音節語について比較すると、次のやうである。

語例	山田の見解	アクセントの型
ハナ(鼻)	全平	下中
カサ(笠)	一上(第一音節が上)	上中
ハナ(花)	二上(第二音節が上)	下上

すなはち「鼻」と「花」との相異は、山田によれば、前者が平調であるのに對し、後者が上昇的であるところに存する。神保氏は、さらに精細にその異同を考察して、そこに音程の差異を認めたといふ。[13] ポリワーノフは、これらの見解を比較考究して、東京語の二音節語について三種の型を認めるべきことを力説し、山田美妙のいはゆる「全平」を支持するにつとめた。[14]「全平」すなはち「平調」‘a'ɩn’の存立は、「日本のローマ字」社同人なども認めてゐたところである。[15]

これらの先人の考察において、暗中に模索されながら、まだアクセントの型といふ考、すなはち

ポリワーノフにあつては、成態としてのアクセントの知見は、まだ啓示されなかつたやうである。「鼻」の型と「花」の型とは互に區別されたが、前者を「全平」とするところに觀察上の事實と相反するものがあり、後者における終音節の高まりを任意的（*facultative*）としたところに、許容しがたい誤がある。山田において見られた、かなり正しい國語のアクセントの理解が、ポリワーノフの古代ギリシア風のアクセント觀で解釋を加へようとした試みのために、かへつてゆがめられたやうな形跡を示す。が、氏の功績は、國語のアクセントの研究に對して種々の示唆を與へ興味を新にした點で、決して低く評價されてはならない。國語の各地の方言におけるアクセントの異同について比較研究を試み、多くの材料を蒐集した勞はすこぶる多とすべきである。（その研究の成果をいまだ聞知し得ないのは、遺憾である。）

従來公表された國語のアクセントに關する著述や論文の書目は、著者の『國語アクセント講話』[16]に掲げてある。その後の出版で注意すべきものは、神保氏の『國語音聲學』[17]である。この二書はともに實用上の參考とするに足りるものである。

本書に取扱ふ國語のアクセントは、もつぱら現時の東京語において行はれるものを中心とする。各地方の言葉におけるアクセントについては、たゞ時々參考として述べることがあらう。以下の論述に

おいて、特に斷りがきを施してないものは、すべて現時の東京語におけるアクセントである。

こゝに國語におけるアクセント乃至一般に語調の地方的相違が、單音乃至すべて語音の地方的相違にもまして、すこぶる著しいものであるといふ事實に留意することが必要である。この現象は言語研究者にとつて興味ふかい事柄であつて、その比較研究は大いに言語の學理に寄與するところがあらう。

註(1)Oxford New English Dictionary による。Century Dictionary は、その語源について L. *accentus*＜*accinere*＜L. *ad*+*canere* と説明してゐる。

(2)『哲學大辭書』(同文館)追加「形態心理學」の項參照。なほ『哲學辭典』(岩波書店)「形態性質」の項參照。こゝに *Gestalt* の語を、從來通用された「形態」の譯語を以てせずに、「成態」としたのは、一應の考慮の末に出たのである。「形態」はむしろ Morphus の譯語として、生物の形態學などにおけるやうな特殊の意味を帶びてゐる。*Gestalt* の語はむしろ「すがた」に當る。しかもなほ廣義に用ゐられるので成態としたのである。

(3)P.-Calzia: *Angewandte Phonetik.*

(4)Binet et Courtier: *L'Influence de la musique sur la respiration, le cœur et la circulation capillaire.* L'Année psychol., tome 3 (1897) p. 104—

(5)Edward: *Op. cit.*, p. 61ff. その他、伊澤修二『國語小學校讀本正讀法』、金田一京助「國語の發音の根柢における特質」

(『東亞之光』第八卷第八號)、今村明恒『東京繪』、柴田猛猪『國漢辭典』。

(6)Jespersen: *Lehrbuch*, p. 213.

(7)Olaf Broch: *Slavische Phonetik*, Heidelberg 1911, p. 301 ff.

(8)J. Vendryes: *Le langage*, Paris 1921, p. 90.

(9)なほ最近の論文矢田部達郎「日本語アクセント理論に關する一貢獻」(心理學研究第二卷第三輯(昭和二年六月))ならびに「アクセント論について」の佐久間・矢田部の所論は、成態論の立場から特殊の場合のアクセントを取扱つてゐる。ただ多少の見解の相違を示してゐるのは、著者の對象としてのアクセントの定めの態度と矢田部氏のアクセントの素朴な知覺の態度との相違に由來すると思ふ。いはゆる「よい」成態としての、すなはち十分に結構された成形としてのアクセントを著者は取扱つてゐるわけであるが、實際上の知覺においては、必ずしも常に「よい」成態が與へられてはゐない。いな種々の程度におけるアクセント現象があらはれるのである。この點は一般に Gestalttheorie において論ぜられるところである。

(10)E. A. Meyer: Der musikalische Wortakzent im Japanischen. *Le Monde Oriental*. Vol. I Fasc. I. Uppsala 1906. p. 77—86. この論文中東京語の上中型(「秋」などのアクセント)を示す例(八一頁第一圖)は、氏の説明によると「花」(すなはち下上型であるべきもの)の曲線だといふが、それはポリヴーノフも指摘したやうに、人名(女の名)の「はな」か、または京都風のアクセントでの「花」であるべきもので、明白な間違である。

(11)Rousselot: *Principes*, tome II, p. 1011.

(12)山田武太郎（美妙）『日本大辭書』明治二五年七月。

(13)神保格「日本語語調」（東京帝國大學卒業論文）。こゝには專ら「鼻」と「花」とのアクセントのちがひを論じてあるといふ。（著者未見）最近の同氏のアクセント觀では、音程の差を相對的に考へ、「僅かに高い」に對して、「それよりも一層高い」といふ風に區別するより外には、いひやうがないとしてゐる。（『國語音聲學』後出、一五四頁）。

(14)ポリワーノフ「東京語における樂的語調」（一九一五年ロシア學士院文學部會議における報告。原文ロシア語）。

(15)波岡茂輝等「國語讀本の讀み方」（『ローマ字世界』第一卷第十號―第五卷第八號。明治四五年）。今村明恒『東京辯』（大正二年〔一九一三年〕）。

(16)佐久間鼎『國語アクセント講話』（大正十二年、東京、同文館）、なほ『國語のアクセント』（大正六年）、『國語の發音とアクセント』（大正八年）參照。

(17)神保格『國語音聲學』（大正十四年、東京、明治圖書株式會社）。なほ註(9)に出てゐる矢田部氏の論文およびそれに附帶する佐久間・矢田部の所論は、アクセントの原理の問題を取扱つたもので、注意すべき點がある。

第十四章　アクセントの形式

四四　アクセントの型

いま語彙を音節の數によつて分類し、一音節でできてゐる語を單音節語とし、二音節でできてゐる語を二音節語とし、以下次第にさうする。その際可能的音節を以て數へることゝするが、「棒（ボー）・貝（カイ）・天（テン）」などのやうに、長母音・重母音・鼻音を含むものは、本來の二音節語と異なる關係を示す場合もあるから、時に應じてこれを準二音節語と稱する。さてかやうな語の音節數とアクセントの形式との間に、かなり密接な關係がある。いまそれぞれの音節數における語のアクセントを、まづ主として名詞の場合について觀察しよう。

單音節語のアクセントは、前に說いたやうに語句の水準的高さを背景にして知覺され、また水準を想定して表象されるものである。さて、

キ　ニ　カケル

ハ　ガ　ナイ

ヒ	ニ	ヤケル
ナ	オ	ツケル

のやうな連音節において、「キ・ハ・ヒ・ナ」の高さが全體の水準より高く發音されるときは、それ〴〵「木・齒（または及）・火・菜」として理解されるが、これがその水準より低く發音された場合には、それ〴〵「氣・葉・日・名」として受取られる。この際全體の水準が高さをきめる標準となるが、助詞「ニ・ガ・オ」（ni・ŋa・o）などの占める高さをもつて、その水準を代表させることができる。この助詞に對してそれより高いときは、「木…」として、それより低いときは「氣…」として知覺するのである。そこでこの水準に相當する助詞「ニ・ガ・オ」などの占める高さを「中」とし、一方のこれより高いのを「上」とし、これより低い方を「下」とする。「木」はかならず上の高さで中位の高さの助詞「に・が・を」などに連り、「氣」はつねに下の高さで中位の高さの助詞「に・が・を」などに連るといふ次第である。「木がない・木になる・木もある」と、「氣がない・氣になる・氣もある」とを比較して見ると、すべて同樣にいくことがわかる。その他「は（ワ）・へ（エ）・で・と」のやうな助詞との接續について見ても、高さの關係はまつたく同樣である。そこで語句の水準に對してとるところの位置が、それ〴〵の單音節語について一定であり、それに二通りの仕方のあることがわかる。で、

單音節語について二つのアクセントの型を區別するわけである。すなはち「氣・葉・日・名」はつねに下の高さをとるものであるから、この種のアクセントを「下の型」とし、これに對して「木・齒(刄もおなじ)・火・菜」はいつも上の高さをとるものであるから、この種のアクセントを「上の型」とする。すべての單音節の名詞は、下型または上型のいづれかのアクセントを示すのである。

かういふ單音節語を單獨に發音するときは、その絶對的高さは、往々すこぶる不定であつて、その音節がいづれの語にあたるかを知覺することの不可能な場合が多い。しかし心理學にいふ絶對印象[1]、すなはち主觀的または常習的水準が音聲の高さについても存立し得るのであつて、これによつて比較が可能になり、アクセントの型が知覺されることも、しばしばあるのである。

この二種の型の對立は、はやくから注意されてゐたもので、エドワーヅもすでに高さの上・下の別を說いてゐる[2]。いま單音節語のアクセント分屬の有様を表示すれば、次の通りである。

アクセント

2. 上型(厂)

繪—餌
木
氣(ケ)
粉
酢—(巢)*
ち(羽織などの)
地(ヂ)
砥
菜
根
箕
齒—刄(ハ)
火
眼
穗

單音節語の

1. 下型(L)

〔 è 〕 柄
〔 ki 〕 氣キ
〔 kè 〕 毛
〔 ko 〕 子
〔 sɯ̈ 〕 洲ス—鬆ス—巣
〔 t͡ʃi 〕 血
〔 d͡ʒi 〕 痔
〔 to 〕 戸
〔 nɑ 〕 名
〔 nè 〕 値ネ—音ネ
〔 mi 〕 身—實ミ
〔 hɑ 〕 葉
〔 hi 〕 日
〔 mè 〕 め(目方)
〔 ho 〕 帆

次に準二音節語におけるアクセントは、前に述べたやうに二音節語におけるアクセントの型の示すものと同じと見ることができる。二音節語アキ（明・秋・俺）に三つの型があり、それを下中・上中および下上の型と名づけるが、準二音節語におけるアクセントは、ほとんどそのうちの下中と上中との型だけに限られ、下上の型をもつものは數例を見るだけで、その數例はみな連母音の場合にあらはれるものである。長母音の後部だけ、または「ン」だけが上の高さを示すやうな例は、東京語に まつたく見られない。京阪の方言にしば〳〵見られるこの種の高さの布置は、特異の感觸を與へるものである。

準二音節語のアクセント

		1. 下中型 (∟－)	2. 上中型 (┌－)	3. 下上型 (∟┌)
母音を含むもの	[hèè]	塀	兵	—
	[hoo]	法	方	—
	[d͡ʒoo]	錠—情	上	—
	[kjɯɯ]	急—灸	級—舊	—
	[ḷèè]	禮（謝禮，返禮）	禮（敬禮，禮儀）—例	—
重母音または連母音を含むもの	[kɑi]	效—粥	貝—櫂—會	—
	[sɑi]	菜[サイ]	妻	—
	[joi]	宵	善い	醉
	[mɑi]	舞	眉—繭	—
	[koè]	—	聲	肥
〔ŋ〕を含むもの	[kɑŋ]	癇—甲（調子）	管—寒—環	—
	[koŋ]	こん（根氣）	紺	—
	[sɑŋ]	三—産（出産）	棧—酸	—
	[bɑŋ]	晩	番	—
	[oŋ]	音	恩	—

二音節語のアクセントの型は、最も古くから注意されたものである。その最も普通に注意をひくのは、上昇的と下降的との高さの進行方向の相異である。その上昇的なものについてさらに二つの型を分けるに至つたのは、山田美妙の創見に歸すべきであらう。かくて東京語における二音節語のアクセントの型は、下中型(└─)・上中型(┌─)・下上型(└┌)の三つであることが明かになつた。たゞし各地の方言のうちには、このほかに上上型(┐┐)をもつものがあり、また型として定位するに至らないとも思はれるが、下下(└└)の高さで助詞に連るやうなものをも見出すのである。

二音節語のアクセント

1. 下中型 (└─)	2. 上中型 (┌─)	3. 下上型 (└┌)
アメ(飴)	アメ(雨)	ヤマ(山)
ホシ(星)	ソラ(空)	イシ(石)
カキ(柿	カキ(牡蠣)	コメ(米)
ハコ(箱)	ハシ(箸)	ハシ(橋)
スギ(杉)	マツ(松)	スミ(炭)
セミ(蟬)	ハト(鳩)	マメ(豆)
カシ(貸)	カシ(菓子)	ナシ(梨)
ク̂チ(口)	カタ(肩)	カタ(型)
ゲタ(下駄)	カサ(傘)	クツ(靴)

例: ┌kasa to └geta.

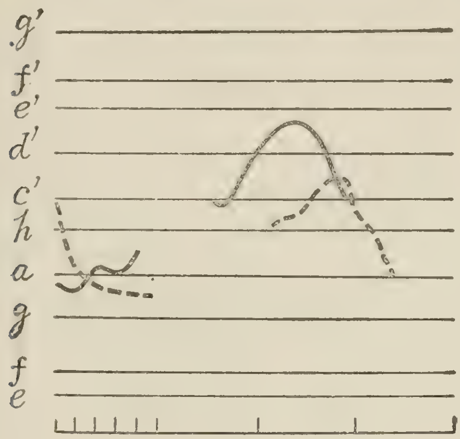
└heʃi ŋa ┌sola ni.

┌ハト ニ └マ┌メ オ……

下中型と下上型とのちがひは、「星が（見える）」と「山が（見える）」とを比較すれば明かであり、すなはち前者は下中、中（下上中）のやうになり、後者は下上、中（下上中）のやうになるのである。

第二四圖

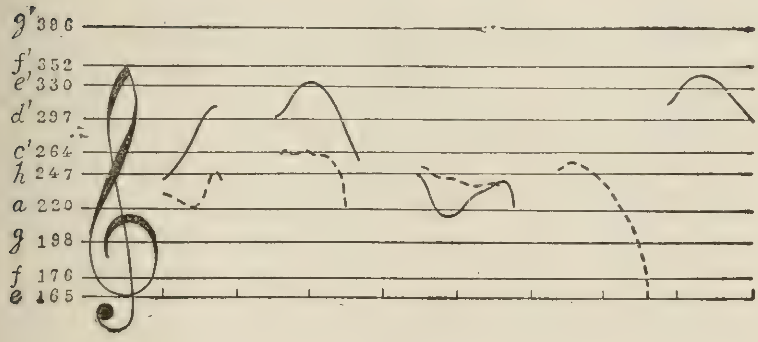
ハチ（蜂〔點線〕）、ハチ（八〔實線〕）



第二五圖

ハチ ト カ（蜂と蚊）……點線

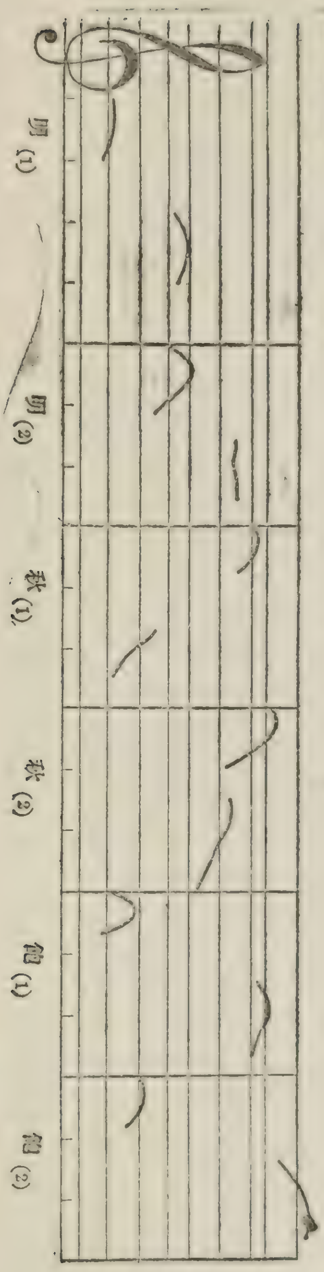
ハチ ト シチ（八と七）……實線



二音節語の上昇的なアクセント、卽ち下中型と下上型とは、單獨に發音された語については往々區別しがたい。しかしなほその上昇の緩急により、すなはち二つの音節の間に成立つ高さの差異（廣義の「音程」）により、兩者の別を立てることのできる場合も少くない。この音程は一つの型について必ずしも一定してはゐない。そして多くの場合には、知覺上これを過小に見積つて、實際の振動數の相異に相當するだけの高さの相異よりも小さな音程と判斷する傾がある。

下中型の語について施した著者の實驗記錄によると、各個の場合を通じて音程は、二つの音節の最低から最高までの間をとれば、少くとも一全音（二度）以上に及び、短三度に近いものも少くない。まゝ四度に及ぶものも見られた。その範圍内で種々の値を示してゐるのである。これを見ても、アキ（明）・

第二六圖　明と秋と館

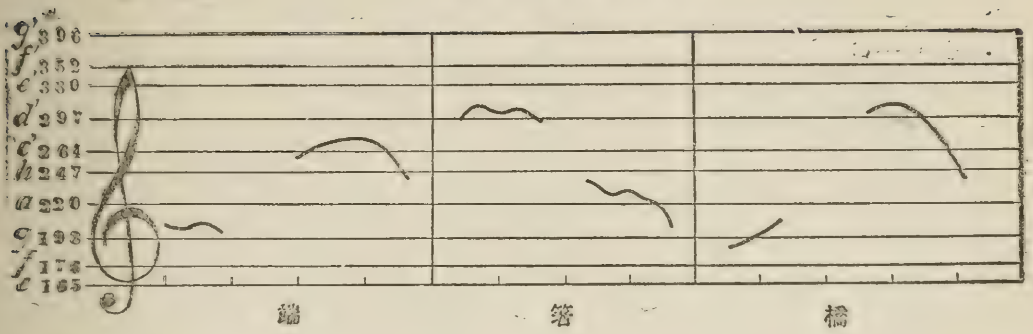


カキ(柿)・ハシ(端)は、上昇的であつて、かの高さの差異を示さない「全平」とすることが不當であり、客觀的事實に合致しないことを知り得る。

上中型はアキ(秋)・カキ(牡蠣)およびハシ(箸)の例について見られるやうに、その高さが明白に下降的に進行してゐる。單獨に發音された場合には第二音節において著しい下降を示すのであつて、それに伴つて強さが急激に減少するから、ずつと低くなつた部分はもはや耳に聞きとれなくなる。無聲の子音につゞく第二音節の母音が〔i〕または〔ɯ〕・〔ɯ̈〕であるとき、たとへばハシ(箸)・マツ(松)などの第二の母音は、かうした單獨の發音では無聲化するのが常である。

たゞしこの實驗では、かういふ語の第二音節を特に無聲化しないやうに發音させたものである。

第二七圖　「端」と「箸」と「橋」



この型についても、音程が幾何かといふことを定めるのは困難である。一つの例(二六圖「秋」の曲線參照)では、高い點(三四〇振動)と低い點

(二〇〇振動)との差異が、音程にして $gis—f'$ である。これは例外的とも見るべきであらう。語句のうちにあらはれ、次に助詞を伴ふやうな上中型の名詞にあつては、第二音節の終における高さの低下はおのづから制限されて來る。そこで普通の場合でなく、特別に單獨に發音された場合の高さの姿を以て律すべきではない。單獨に發音された場合に、ある程度を超えての著しいこゑの低下を語尾に見るのは、かの語句の終にあらはれるものと性質を同じくするもので、音樂における「靜止」(終止 *Kadenz*)に相當する現象である。すなはち語のアクセントを規定する能因以外の別個の能因による現象と考へるべきものであるから、アクセントの型の論究においては當然これを除外するわけである。

下上型の高さの進行は、前揭の「八」、「八と七」などの例を下中型のと比較して見ると、その相異點を明かにすることができる。また「橋と…」の例では「ハ」と「シ」との高さの差がまづ $a—dis'$ に相當し、すなはち音階における五度の音程に近く、四度と五度との中間にある。それから|アキ(明)•アキ|(秋)•|アキ|(飽)について各二回の實驗を試みた結果を見ると、下中型|アキ(明)の場合には二音節間の高さの差が、それぞれ $g—c'$ および $c'—c'$ にあたり、約三度乃至四度の音程に近いが、下上型の|アキ|(飽)の二例はそれぞれ $gis—f'$ および a (ais)$—gis'$ の差を示し、ほとんど七度の音程に近い。上中型ア|キ(秋)の二例は、音程が各すこぶる異なつてゐる。こゝにも、下中型と下上型との高さの進行にかな

り著しい相異のあらはれることを見る（なほ前掲「端・箸・橋」の曲線參照）。

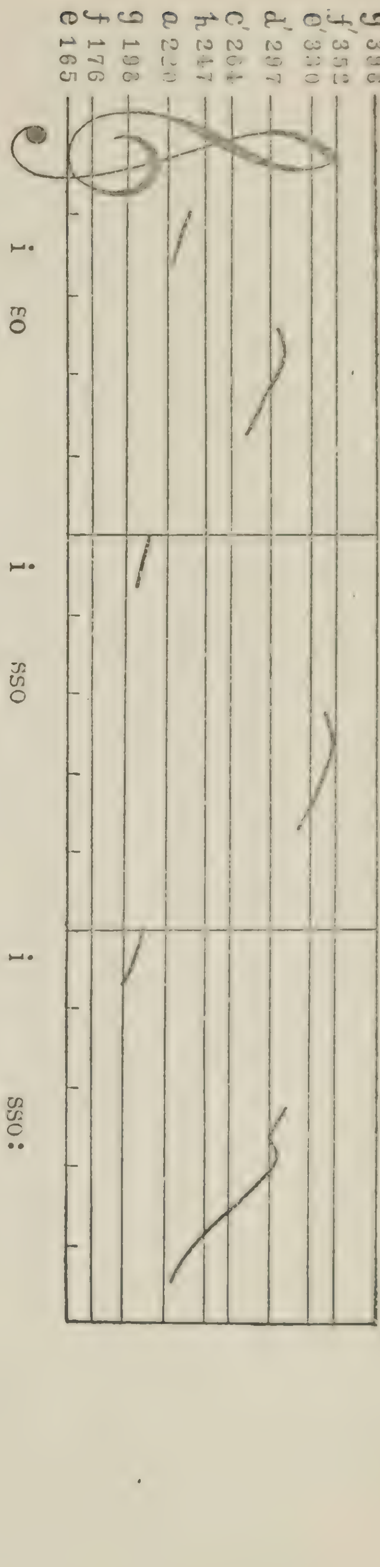
發音するときの心持を省みると、「蜂(ハチ)・端(ハシ)・明(アキ)」などではこゑが少し高まる。ちよつとあがるといふ感じがあり「八(ハチ)・橋(ハシ)・飽(アキ)」などではこゑがもつと高まる。ずつとあがるといふ氣味がある。注意ぶかく自分の發音の際の心持を省みるなら、かういふ心理的事實は多くの人に認められるであらう。これを知覺する場合にも、大體音程の大小によつて、いづれの單語であるかを判定することが、かならずしも困難ではない。かやうに、助詞をつけてはじめてその型が區別されるといふ程度を越えて、型がそれ〴〵の語に固定してゐる。いはゞ絶對印象として高さの水準が暗默のうちに與へられてゐて、その高さの傾斜によつてアクセントの型のいづれであるかを直ちに知る場合が少くないのである。かやうに成態の內的結構が固執性を示し、現在ではそれ〴〵の型に內在して一定限度の音程の差があるとも考へられるほどになつてゐる次第である。

單獨に發音された上中型については、音程幾何とにはかにいひ得ない。同じ條件の下では、客觀的測定を施し得たかぎりにおいては、四度の音程がほゞ下中型と下上型との分岐點にあたるやうに思はれる。すなはち下中型にあつては、二音節の間の差が多く短三度から四度の間にあり、下上型におけるものは、四度と五度との中間から七度にも及ぶといふやうな有樣である。もとより他の種

種の條件に制約されて、多少の出入があらはれることは豫想される。

二音節語のうち中間に「促音」を含むものは、促音につゞく母音が高まる傾を示すと思はれる。イソ(磯)・イッソ(寧ろ)・イッソー(一層)の高さの進行を比較するに、イッソにおいて短三度に近い音程を

第二八圖



示してゐるものが、イッソおよびイッソーでは、さらに大きな音程を示してゐる。「促音」がこの場合に第二音節の母音を一層高めたと解釋し得るであらう。同樣にイキ(息)における第二音節は、イッキ(一氣)における第二音節よりも著しく低下してゐる。いひかへれば、イッキにおいては第二の母音があま

り低くなつてゐない、イキの場合よりも高いのである（圖參照）。この點については、なほ後に說かう。

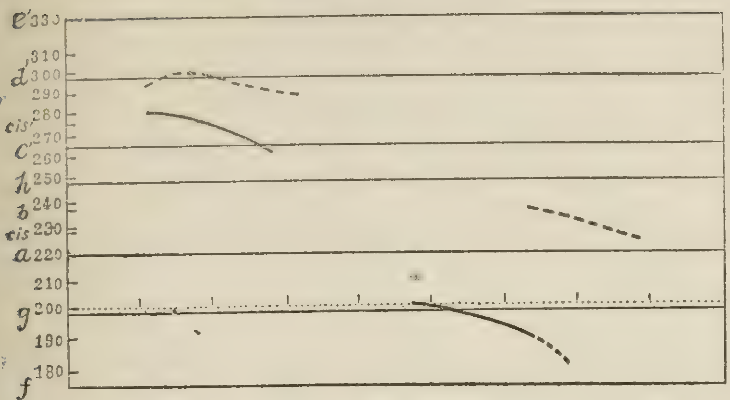
三音節語（準三音節語を含む）におけるアクセントは、二音節語におけるよりも型の數を增してゐる。實際東京語において成立してゐるものは、次の四とほりである。

1. 下中中型（└──）　コドモ・サクラ
2. 上中中型（┐──）　スガタ・テンキ
3. 下上中型（└┐─）　オモチャ・オタマ
4. 下上上型（└┐┐）　オトコ・カタキ

このうち第二の「すがた・てんき」は下降的で第一音節が高く、第三の「おもちや・おたま」は昇降的で第二音節が高いことは、すぐわかる。第一の「こども・さくら」と第四の「をとこ・かたき」とは、共に上昇的でありながら、語句の中でとる位置に相異があることは、二音節語における下中型と下上型との間の關係と同樣である。

第二九圖

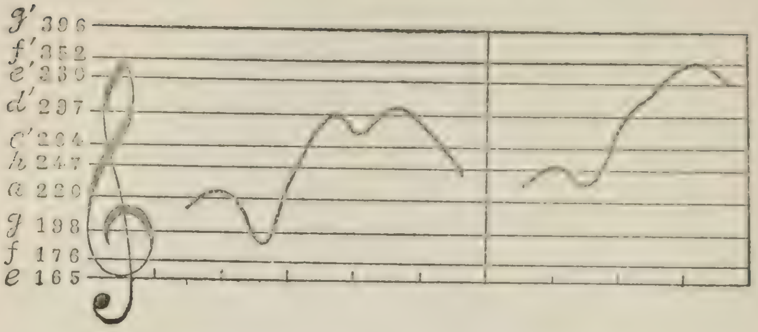
イキ……實線、イッキ……點線



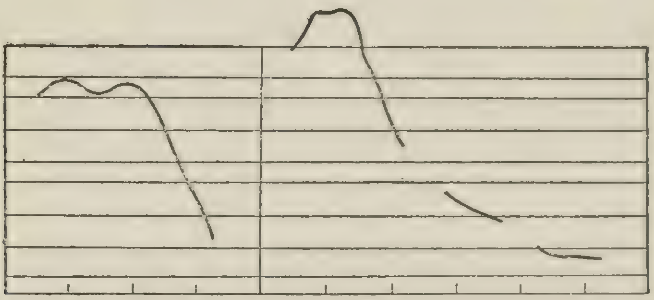
三音節語のアクセントのうち、下中中型と下上上型とが從來し

ばしば混同されて、正當に區別されなかつたのであるが、それはこれを單獨に發音してその高さの頂點を求めてゐたためである。これも助詞「が・に・を・へ・と」などをつけて試みると、容易に區別がつく。

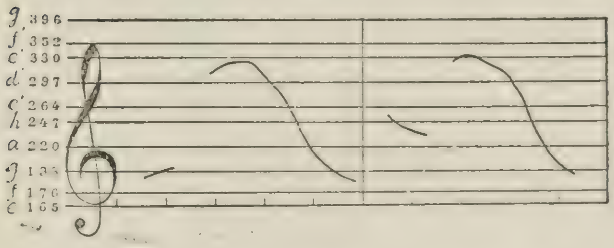
第三〇圖「さくら」（二回）



第三一圖「ひばち」（二回）



第三二圖「おたま」（二回）

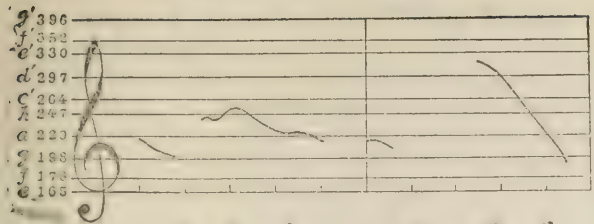


從來の觀察者のうちで、この二型の相異に氣づいた者は、その判別點を、「こども」などの平調なのに對して「をとこ」などの最後の音節に「アクセントがある」ところにおいたのが普通である。たとへば、ハカマ（袴）とハオリ（羽織）との間のア

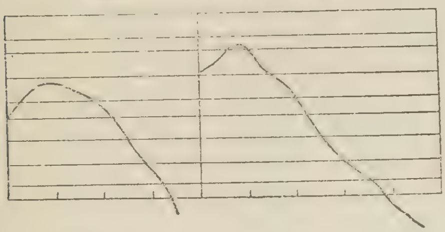
クセントの相異は、後者が平板であるのに反して、前者には「アクセントがあり」、その最後の音節が高まるのによると考へられた。(3)

實驗的所見は、サクラ・ヒバチ・オタマにおける高さの進行が、それ〴〵特有の姿を示すことを明かにする(第三〇—三二圖)。すなはちそれ〴〵上昇的・下降的および昇降的の高低曲線をあらはしてゐる。

第三三圖



第三四圖

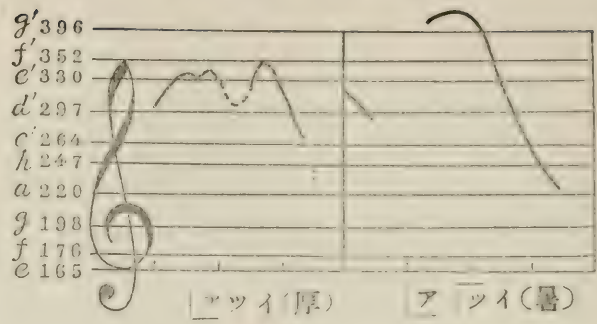


またアサリ(淺蜊)とアッサリとの二語は、その子音の長さにおいてのみならず、その高さの進行についてはつきり異なること、エマ(繪馬)とエンマ(閻魔)とが高さの進行において相似てゐること、同音異義の形容詞アツイ(厚)とアツイ(暑)とがその高さの姿の明かな相異によつて區別されることなどは、こゝに揭げた高低曲線が明かに示すところである。(第三三—三五圖)

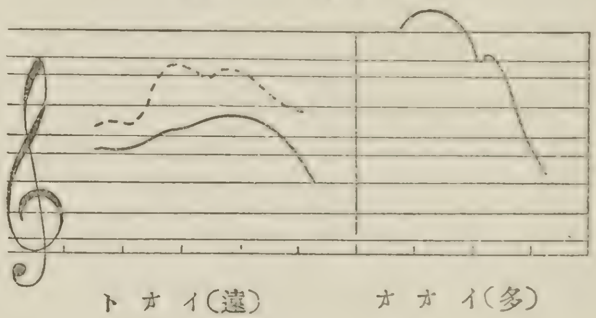
準三音節語についても、以上の三種の型をその高低曲線から看取することができる。たとへば形容詞トーイ(遠)およびオーイ(多)の高さの進行を比較すると、前者の高低曲線がサクラのに類し、後者のがヒバチのに似、

二者の間には明かな相異が認められる（第三六圖）。語頭に長母音・重母音または母音と〔n〕を含む語において、長母音・重母音（連母音）の後部または〔n〕の部分だけを高めて下上中型を作るやうな語例は、東京語にはほとんど全く存しない。アオイ（青）などは稀な例外的のものである。これはかの準二音節語において下上型が例外的であるのと同一の事由にもとづくのであつて、長母音・重母音などにおける高さの布置が普通の二音節の場合とおのづから異なる傾向による。

第三五圖



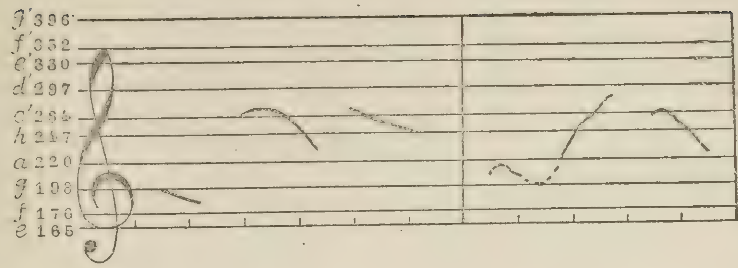
第三六圖



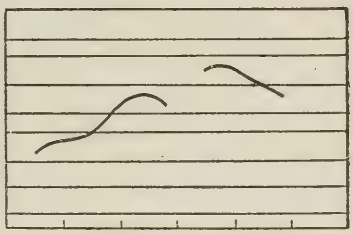
以上の三とほりの型は、一見區別しやすいが、カタキ・ハカマなどを單獨に發音した場合には、その高低曲線において往々サクラなどゝ區別しがたい類似が見られる。すなはちカタキの例について見ると、第一音節が低くて第二・第三の音節が高い（第三七圖A）。アブクの例について見てもほゞ同樣であるが、漸層的に第二・第三音節と高まつていく趣がある（第三七圖B）。その曲線にはかやうに少しの差異が見えるが、その知覺における型の感じ

は二語ともに同一である。この下上上型が下中中型の|サクラなどゝちがふことは、助詞をつけたものを發音してその高低曲線を比較して見ると、明かにあらはれる。すなはち「櫻と橋」における|サクラ

第三七圖(A)「かたき」(二回)



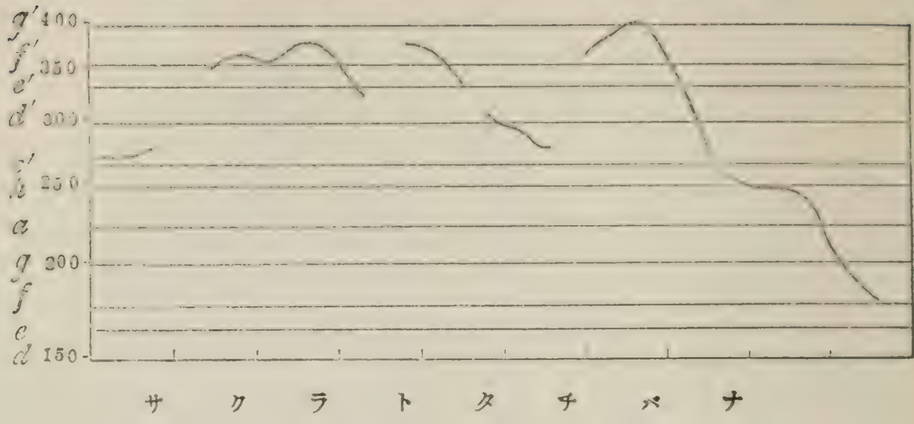
第三七圖(B)「あぶく」



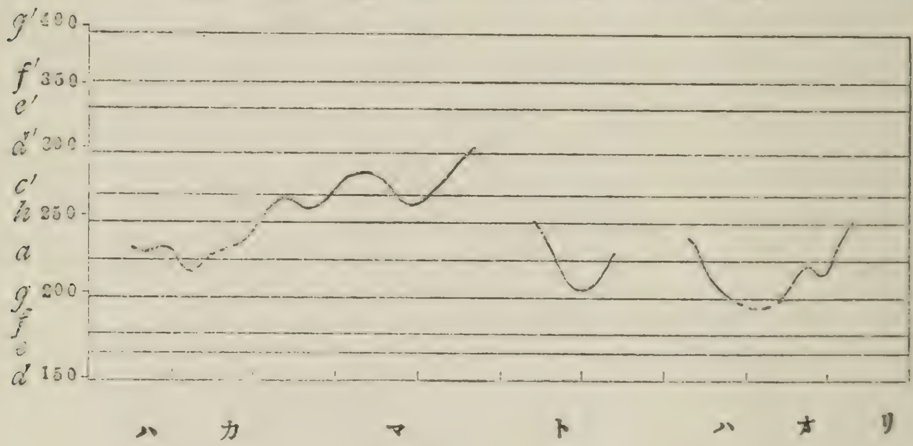
トでは、サの音節だけ低く、ク・ラおよびトがほとんど同じほどの高さの水準にあるが、(第三八圖)「袴と羽織」における|ハカマトでは、カマの部分が特に秀でゝ高く、トに至つて降つてゐる。(第三九圖)この振動數の變化は、知覺上の事實と吻合する。すなはち|サクラトでは、その高さの進行が下中中中〔[sa kɯ [ɑ to〕であるが、|ハカマトでは下上上中〔[hɑ [kɑ mɑ] to〕になる。なほ「心と形」の高さの進行(第三三九頁、第一六圖)と、「いくさと役者」の(第四〇圖)とを比べてみても、三音節語または準三音節語における下上上型の特徴を見出すことができよう。

この|ハカマ。|アブクの二語において、第三音節が第二音節よりもいさゝか高くなつてゐるのは、同

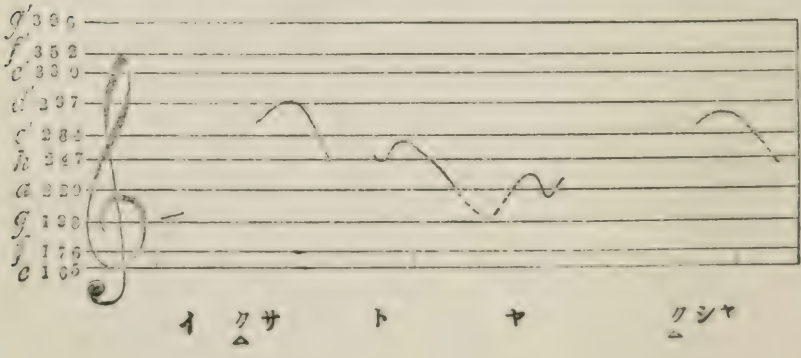
第三八圖「さくらとたちばな」



第三九圖「はかまとはおり」



第四〇圖「いくさとやくしや」



じ母音の相つぐために漸强的な强さの布置を生じ、これに伴つて高さに多少の増加があつたものと考へられる。これが型そのもの〻本質的特徴と認められないことは、カタキの例についてさういふ高さの傾向の見えないといふ事實によつて察し得る。ポリヷーノフのやうにハカマを hakama とするのは、妥當ではない。最後の一音節だけを特に高めたものは東京語のアクセントとしては異樣な感觸を與へ、偶然的にあらはれることがある外には、一つの型として存立しがたいのである。

東京語における三音節語のアクセントの型は上述の四とほりだけである。このほかに上上中型・下下上型のやうな形式を用ゐる方言もあるやうに思はれるが、[4] もちろんそれ〳〵の方言だけに行はれるに過ぎない。

なほ次に三音節の語例をあげよう。

1. 下中中型―クルマ(車)・カマド(竈)・サカナ(肴)・スズメ(雀)・トナリ(隣)・ツバメ(燕)・トンボ(蜻蛉)
2. 上中中型―カラス(烏)・タヌキ(狸)・タヨリ(音信)・トンビ(鳶)・メガネ(眼鏡)・ホタル(螢)・ヤシロ(社)
3. 下上中型―アサヒ(朝日)・タマゴ(卵)・カキネ(垣根)・コメヤ(米屋)・テホン(手本)・オコシ(おこし米)

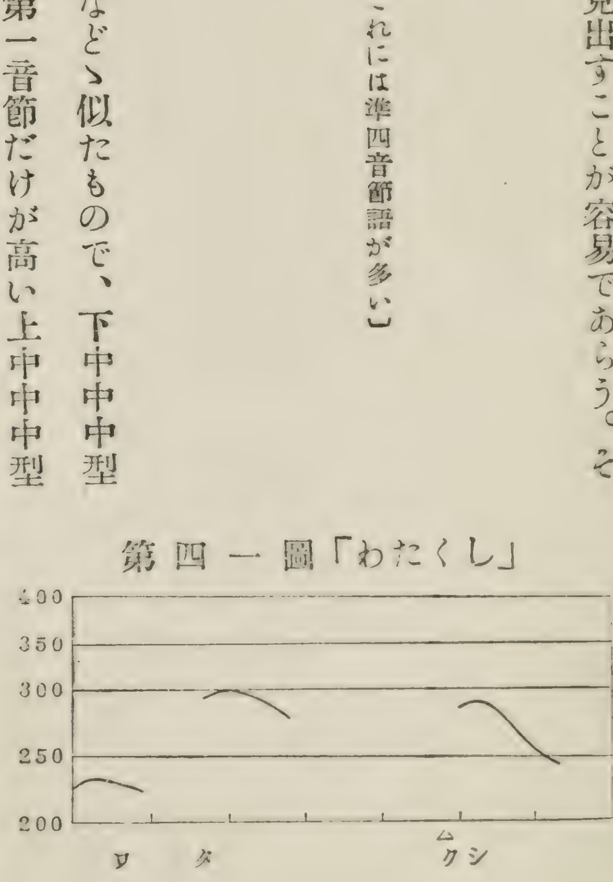
4. 下上上型—アタマ(頭)・カガミ(鏡)・オモテ(表)・チカラ(力)・ハナシ(話)・タモト(袂)・オンナ(女)

以上のやうなアクセントの型を定める手續を四音節語（準四音節語を含む）の幾多の語例について施すなら、東京語において五とほりの型を見出すことが容易であらう。それは次の語の示すアクセントの型である。

1. シナモノ(品物)・クチビル(唇)
2. コンニチ(今日)・カイグン(海軍)〔これには準四音節語が多い〕
3. アサガオ(朝顔)・ムラサキ(紫)
4. カラカサ(傘)・キタカゼ(北風)
5. ホバシラ(檣)・オトート(弟)

このうち第一は三音節語におけるサクラなどゝ似たもので、下中中中型であり、第二はスガタなどゝ似たもので、第一音節だけが高い上中中中型であり、第三はオモチャのやうに第二音節だけが特に高い下上中中型であり、第四はオトコのやうに第二・第三音節がともに高く、しかも第四音節が中位に降る下上上中型であり、第五は第一音節だけ

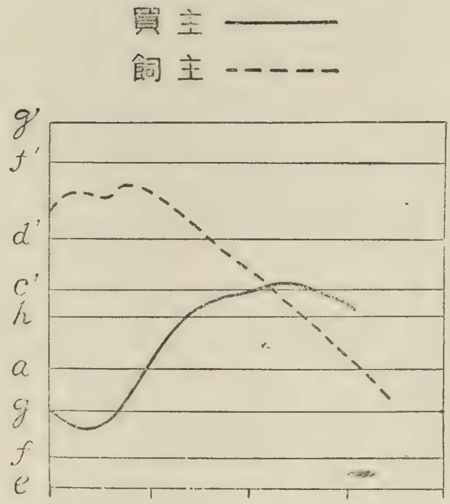
第四一圖「わたくし」



が低くて他の音節がみな上位を占め、助詞との接續においてハナやオトコの場合のやうになる下上上上型である。

主觀的印象は、四音節語についてかやうな五種の型を區別させるが、高低の進行の客觀的測定の結果も、またそれ〳〵の型の特色を提示する。ワタクシの例では、第三音節が無聲化を受けて、こゑのあるのは第一・第二および第四音節だけであるが、第一音節の母音が他に比して低いことは、高低曲線について明白に見られる。これは下中中中型に該當するものである。この型と上中中中型との同音語をもつ「かひぬし」では、この二型の高低進行の方向が相反してゐる。下中中中型のカイヌシ（買主）では、こゑが漸次上昇して、知覺上大體平板であるが、上中中型のカイヌシ（飼主）では、はじめ高く發せられたこゑが次第に低下していく様を見ることができる（第四二圖）。マイヒメ（舞姫）の例も下中中中型の平板的特色を示してゐる（第四三圖）。次にアサガオ・ムラサキでは第二音節が特に秀でゝ高められるものであるが、高低曲線

第四二圖

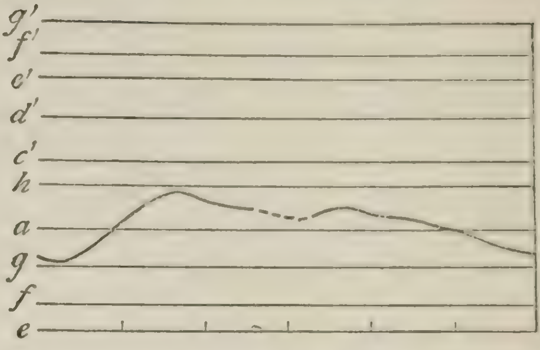


も第二音節において著しい山をつくるところに特色を示してゐる（第四五、四六圖）。

圖における「ムラサキ」の最後の音節が著しく低下してゐるのは、この型の本質的高低運動ではない。

第四三圖

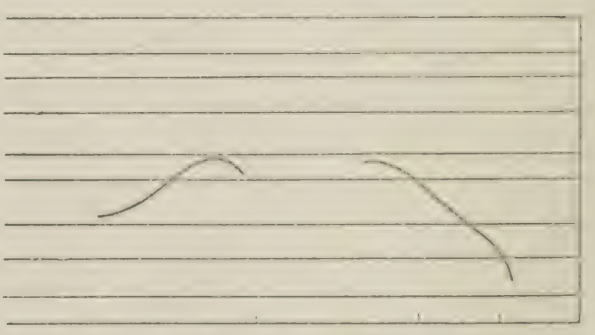
「まひひめ」（舞姫）



（備考）　マイヒメのヒの頭音が、こゝではいはゆる有聲のhになつて、かすかに母音的振動をあらはしてゐる。その部分を圖中では點線で示してある。次の第四六、四七圖などに於ける點線も、かすかな振動によつて算出したもので、その部分が純粹無聲にはならなかつたと解すべきものであら

第四四圖

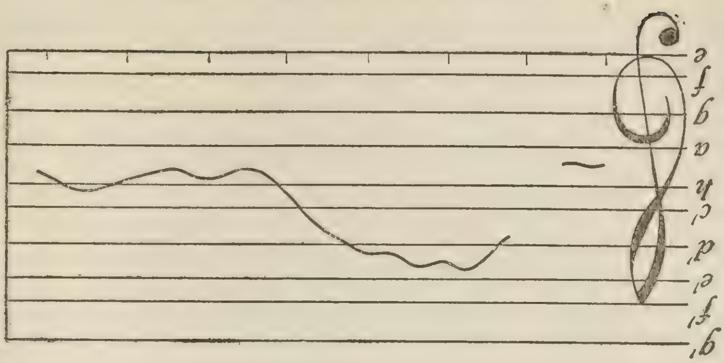
「せんせい」（先生）



「むしぼし」のやうな語は、下上上中型ともなり下上上上型ともなり得る語の一例であるが、こゝの實驗例は下上上中型に「ムシボシ」と發音された場合である。その高低曲線はこのアクセントの型の特色をありありと示してゐる。（第四七圖）この種の型は、もと第三音節だけが高いものと考へられたが、(5)

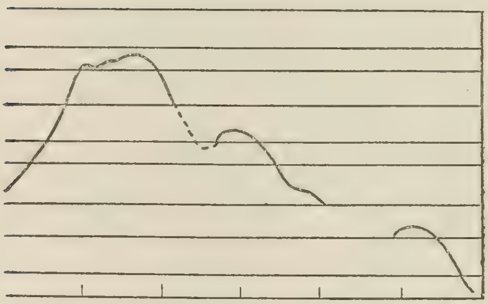
これは事實上不適切な見方である。「せんせい」の例、すなはち下上上中型|センセー|をもあはせ見るべきである（第四四圖）。下上上型に對しては、こゝに實驗例を缺く。

第四五圖「あさがほ」



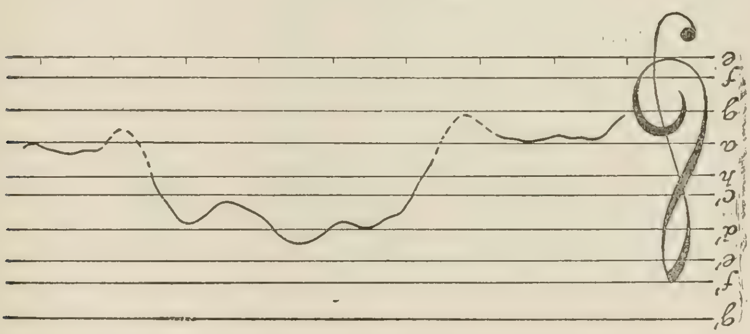
第四六圖

「むらさき」



第四七圖

「むしぼし」



さらに若干の語例をあげよう。

1. 下中中中型（└│││）

トモダチ（友達）・タケノコ（筍）・ニワトリ（鷄）・サカナヤ（肴屋）・テッピン（鐵瓶）・オコナイ（行）・センタク（洗濯）・ソーダン（相談）。

2. 上中中中型（┐│││）

アイサツ（挨拶）・コーモリ（蝙蝠）・タイショー（大將）・モンツキ（紋付）・シンネン（新年）・タンポポ（蒲公英）・ソーメン（索麺）・カンヌシ（神主）。

3. 下上中中型（└┐││）

ハマグリ（蛤）・ウグイス（鶯）・クダモノ（果物）・チヨガミ（千代紙）・マツムシ（松蟲）・ブランコ（鞦韆）・シマグニ（島國）・ミナサン（皆樣）。

4. 下上上中型（└┐┐│）

アキナイ（商）・オクノテ（奥の手）・ハナタバ（花束）・ミヅガシ（水菓子）・イリウミ（入海）・カキカタ（書方）・オーアメ（大雨）・イノシシ（猪）。

5. 下上上上型（└┐┐┐）

カメノコ（龜）・カミナリ（雷）・ノコギリ（鋸）・モノサシ（尺度）・ワタイレ（綿入）・タノシミ

（樂）・カネモチ（金持）・モノオキ（物置）。

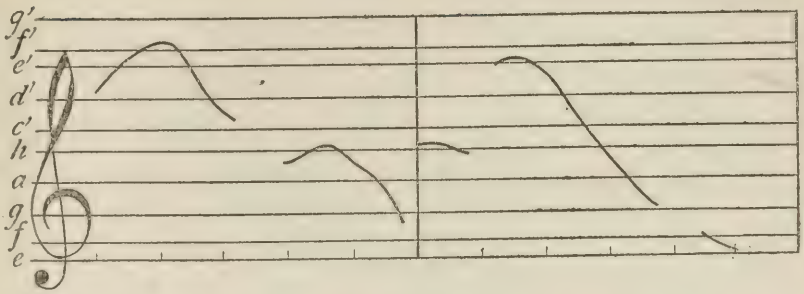
このうち上中中中型のやうに、一般に語頭に上の高さをもつものを、すべて擡頭的アクセントと名づけて他の型と區別することが、往々必要になる。この上中中中型は、四音節語の名詞のうち語頭に長母音・重母音または母音と「ン」との結合をもつ準四音節語に多くあらはれるが、その他には極めて例が少い。（たとへばオニババ（鬼婆））。「卯の花」なども一語となつたものと見れば、その一例である（第四八圖）。その他の語がたまたまこの型をとるやうなことがあつても、それは極めて不安定であつて、容易に他の型にかはらうとする勢がある。たとへばカミ（神）からカミサマ（神様）が出るが、一轉してカミサマとなる方がすわりがいゝ。四音節の名詞でかやうな擡頭的形式を示すものがほとんど準四音節のものに限られることは、東京語のアクセントの一特徴といふべき一つの點で、關西方言などゝ趣を異にするところである。

第四九圖

「ごふうふ」（御夫婦）

第四八圖

「うのはな」（卯の花）



關東方言では、東京語で擡頭的形式を示すオーカミ（狼）。コーロギ・コーモリ・カンヌシなどを

下上上中型などを以て發音するものが少くない。さういふわけで、この種の關東方言には、擡頭的形式が東京語におけるよりも一層稀である。

下上上上型の語例の多くは、また下上上中型で發音されることが少くない。カメノコ・タノシミ・ノコギリ・フデタテ・カミナリ・イネムリ・ホバシラなどは、同じ東京語で人によつて下上上上型にも、下上上中型にも發音される。それは個人的習慣にもとづくことが多く、そのいづれをとるかは個人的におのづから一定してゐるやうである。

この種の語例に對して、關東方言では多くは下上上上型を用ゐてゐる事實から推測して、これを下上上中型に發音するのは、東京語に及ぼした關西語の影響であらうと思ふ。なほ著者の想像では、後の型がむしろ多く女子によつて用ゐられてゐるやうである。

長母音における高さの現はれ方は、他の場合と少し趣を異にする。その點については後に述べるが、こゝに一例として「御夫婦」（第四九圖）をあげる。

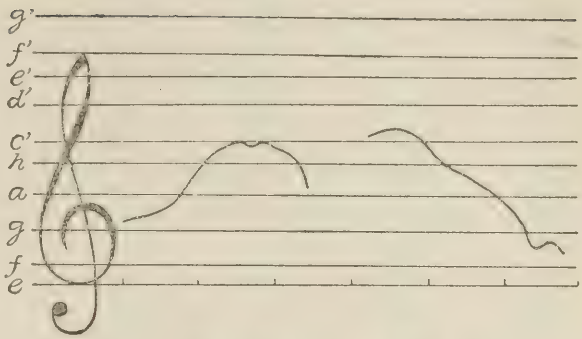
五音節語（準五音節語を含む）におけるアクセントの型を求めると、次の六とほりの成立つことを知るであらう。

1. 下中中中中型（└｜｜｜｜）

トナリムラ（隣村）・ニギリメシ（握飯）・ヒデリメン（緋縮緬）・サシムカイ・ナマハンカ。

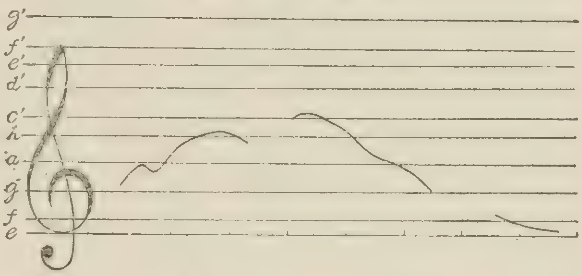
第五〇圖

植木鉢



第五一圖

かたきうち



2. 上中中中型（┐ーーー）

アカトンボ（赤蜻蛉）・テンシサマ（天子樣）・ヂンバオリ（陣羽織）。

3. 下上中中型（└┐ーー）

ミゴシラエ（身拵）・ナグリガキ・イッポンバシ（一本橋）・チガイダナ（違棚）。

4. 下上上中中型（└┐┐ーー）

ホトトギス（郭公）・ヒナマツリ（雛祭）・クロケムリ（黑煙）・イチリヅカ（一里塚）。

5. 下上上上中型（└┐┐┐ー）

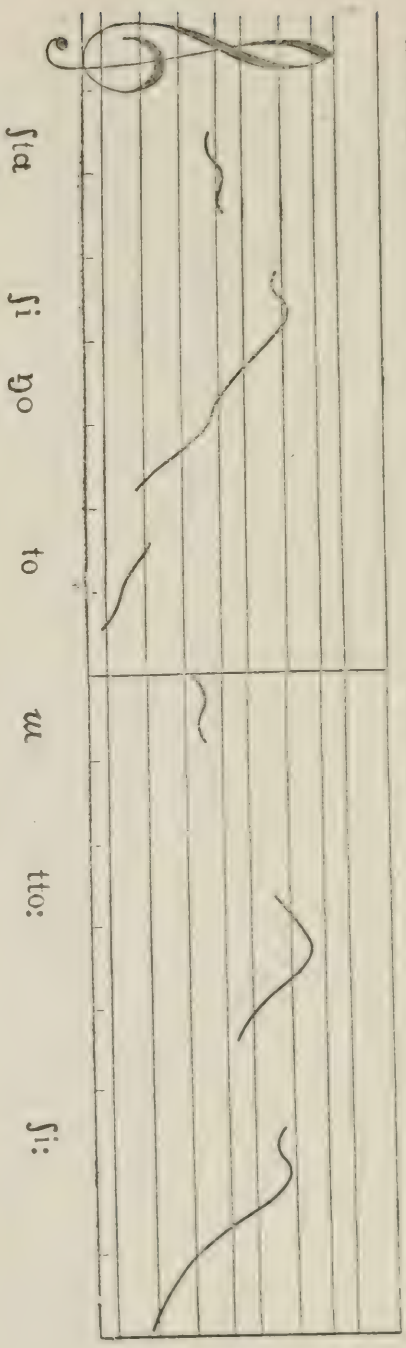
コマモノヤ（小間物屋）・マツバヅエ（松葉杖）・ヤカタブネ（屋形船）・ドーマゴエ（胴間聲）。

6. 下上上上上型（└┐┐┐┐）

ココロモチ（心持）・タカラモノ（寶物）・ヤツガシラ（八つ頭）・ヨマイゴト（世迷言）・ヒザガシ

ラ(膝頭)。

五音節語においては、擡頭的形式を示すものがます／＼數を減じて稀になり、一般に昇降的アクセント、殊に下上上中中のやうな型のものが、はなはだ優勢になる。下上中中中型を示す語例のごときは、よほど少いのである。



第五二圖　下仕事

第五三圖　うつとうしい

こゝに高低曲線を示したものは、ウエキバチ(植木鉢)。カタキウチ(仇討)。シタシゴト(下仕事)。など下上上中中型のもの、ウットーシーのやうな下上上上中型のものである(第五〇―五三圖)。前者において漸層的に第三音節まで高まりが增していく點は、たとへばアブクの高低曲線について見たと同じ

やうな傾向である。

さらに六音節語について見ると、下中…型、上中…型、下上…型が各一つ、下上…中…型の種々が四とほり、合せて七種の型が考へられる。これが語例を求めると次のやうなものがある。

1. 下中中中中中型（└─────）
   ムラサキイロ（紫色）・テンヂクダマ・キヨミズヤキ　清水燒）・ツメキリソー（爪切草）。
2. 上中中中中中型（┐─────）
   オイナリサン（稻荷ずし）・シューカイドー（秋海棠）。
3. 下上中中中中型（└┐────）
   オテントサマ。
4. 下上上中中中型（└┐┐───）
   アサガミシモ（麻上下）・オニセーバツ　鬼征伐）・コシギンチャク（腰巾着）・ユービンキョク（郵便局）。
5. 下上上上中中型（└┐┐┐──）
   イナカナマリ（田舍訛）・シダレヤナギ（枝垂柳）・ヨシノザクラ（吉野櫻）・ヤツメウナギ（八

目鰻）・ヒトサシユビ。

6. 下上上上上中型（└┐┐┐─）

アイアイガサ（相合傘）・アゲハノチョー（鳳蝶）・オコソヅキン（お高僧頭巾）・クサカリガマ（草刈鎌）・ノリアイバシャ（乗合馬車）。

7. 下上上上上上型（└┐┐┐┐┐）

ホーシノタマ（寶珠玉）・オモワセブリ（思はせ振）・ミカヅキサマ（三日月樣）・カンガエモノ（考へ物）。

擡頭的形式はいよ／＼稀となり、名詞などにはその例をほとんど見出しがたい。第二音節だけ上である第三の型も、すこぶる稀である。しかも第二・第三の型は、こゝに示した例のやうに、準六音節語ではあるが、實際には三音節（ʃɯ:-kaĭ-do: など）、四音節（oĭ-na-ri-saŋ など）、五音節（ten-to-sa-ma など）に發音されるものである。そして下上上中中中または下上上上中中のやうな型を示すものが、次第に大きな數の割合を占めるやうになる。

七音節またはそれ以上の數の音節から成る語にあつても、前と同樣な手續で型を定立することができる。ところで、かやうな多音節語は、おほむね短い單語が二つか三つ複合して出來たものと考へら

れるもの、すなはち複合語である。複合語のアクセントは、後に説くやうに（第十五章）、その成素たるそれ〲の單語のアクセントとおのづからある法則的な關係をもつてゐて、ある程度まではもとの單語のアクセントから推定することができるほどである。で、複合語がどういふ型を多く示すかは、別に述べよう。

四五　アクセントの式

國語のアクセントは、語にあらはれてその語の固有の屬性をなす高さの姿であり、これに種々の型（*Typus*）を區別することは、アクセント考究の第一歩である。こゝにおいて、語を構成する幾音節における高さの布置を考へることが型を確定する手續として行はれるべき事がらであつた。しかし、一語の各音節には固定した高さが備はつてゐるのではなくて、語全體について一定の型があらはれるのであり、かつ成態の特質として移調可能性をもつのであるから、それ〲の音節は、全體に規定され、語句の水準に應じて、その範圍内で種々の高さをとり得る次第である。

アクセントの型においては、高さの布置が一定であつて、上中下の三段階に配當される。語句の高さの水準から上方へまたは下方へ偏るその方向は、一つの型においては一定してゐるのである。が、

かやうな型を構成するある單語について、その各音節間の高さの差異、すなはち語音における音程、または客觀的な振動數の比が一定であるといふことは、こゝには必ずしも要求されない。これは旋律の場合と異なる點である。もとより大體の音程は、ある上限および下限の間に適當な位置を見出すであらう。しかし、アキ(明)・アキ(秋)・アキ(飽)の各二音節語のそれ〳〵の音節の間の高さの割合が、つねに一定であり、すなはちその音程がそれ〳〵何度であるといふ風にきめることは出來ないのである。

それで、國語のアクセントは、その語における絶對的高さによらず、その音節間の高さの差、すなはち音程も、つねに同一であるとは限らない。單獨に發音された單音節語において、その絶對印象を與へる水準を客觀的にも主觀的にも伴はない場合は、その型を判定することが不可能である。これはアクセントの型が、音節の絶對的高さによつて定まるものではないからである。また孤立的に發音された二音節語において、下中型と下上型とが往々區別されないのは、前後の音節の高さの差、すなはち「音程」がそれぞれ型において必ずしも確定的でないからである。

アクセントの型を國語の方言分布について見ると、一定の語については地方々々の方言において一定してゐるが、甲の方言と乙の方言との間には、種々の點で相違を示すことが多い。東京語のアクセ

ントの型の種類は、大體において他の地方の方言にもあるが、地方の方言ではなほこれ以外の型もあらはれること、折にふれて說き及んだところである。たとへば、東京語においては、語頭に上の高さのあらはれる型が必ず上中…となつてゐて、第一音節だけが高いのである。しかるに、地方によつては、上上、上上中、上上中中などの型をもつ方言がある。また東京語においては、語頭に下の高さのあらはれる型は、下中…、下上…、下上…中となつて、下の高さははじめの一音節だけに限られるのである。ところが、地方によつては、あるひは型として定立するまでに至らないとしても、しばしば下下、下下中、下下上…中…などのやうな高さの進行を見るのである。

かやうなアクセントの地方的相違も、單に偶然にあらはれた現象ではなくて、方言分布のうちにおのづから脈絡があり傾向があると同樣に、またひろくかつ深く考察するときは、そこに法則性の存立を見出すに至るであらう。またある一方言のうちについて、語のアクセントが種々の狀勢の下に如何やうな變化を遂げるかを見きはめるならば、そこにもまた全體を通じての連繫と傾向とを見出すに及ぶものである。國語のアクセントの地方的分布は、いまだ十分な調査を經ないので[6]、いま暫定的なかつ幾分豫想的な立言をなし得るにとゞまる。東京語において、語のアクセントが語句の中での種々の狀勢の下に如何やうな變化をとげるかは、次に述べようとするところである。

この際各種のアクセントの型の中について、その性質上相近いものと、すこぶる異なるものとを區別することが必要である。しかも、アクセントの型の外觀的類似によつてこれを彙類することは、ほとんど何等の効果をも與へない。アクセントの本質にもとづいてこれが彙類を試みるとき、アクセントの類型（*Typus*）に對してその樣式（*Modus*）を分つべきことを知るにいたる。この樣式を名づけて**アクセントの式**といふ。

この見地から、すべて下中…型を示し、全く上の高さをもたないアクセントの諸型を一括して、その他のものと區別する。かくてアクセントに二大別を施すのである。下中…型を示すもの、すなはち單音節語の下型　二音節語の下中型、三音節語の下中中型、四音節語の下中中中型などのアクセントは、他の型に比してその高さの進行がむしろ平板であることを特色とするので、これを平板式アクセントと名づけ、これに對してその他の型、すなはち一音節または數音節に上の高さを有するすべてのアクセントを包括して、これを起伏式アクセントと名づける。その分屬は次のやうである。

	平板式	起伏式
單音節語	下　　型	○上　　型
二音節語	下　中　型	○上　中　型

	平板式	起伏式
		下上型
三音節語	下中中型	〇上中中型
		下上中型
		下上上型
四音節語	下中中中型	〇上中中中型
		下上中中型
		下上上中型
		下上上上型
五音節語	下中中中中型	〇上中中中中型
		下上中中中型
		下上上中中型
		下上上上中型
		下上上上上型

（備考）六音節語も同樣。起伏式中○印のついてゐるのは、擡頭的アクセント。

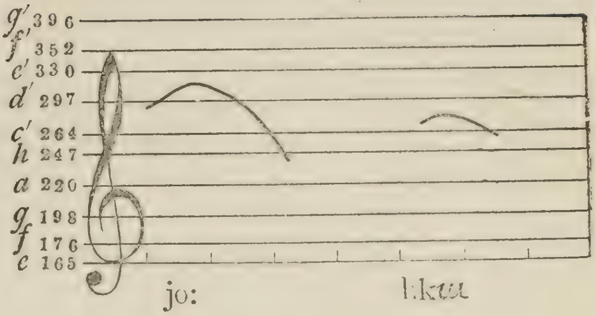
かやうに、二音節語について見るときは、三とほりの型のうち、外形の區別による上昇的な二型すなはち下中型と下上型との間においてよりも、同じ起伏式たる二型、すなはち上中型と下上型との間にむしろ親近の關係が存立するのである。そしてこれが平板式アクセントたる下中型に對立するのである。四音節語における下上上上型のごときは、外觀上從來しば／＼下中中中型と混同されたのであるが、その本質上かへつて下上上中型と相通じて用ゐられるやうな密接な關係をもつのである。

高低の三段階に配當されたアクセントの型は、アクセントの圖式的理解の必要から考案されたものであつて、もとより實際の高さの進行は、かやうに飛躍のあるものではなく、高低曲線の示すやうな漸層的のものである。音質の構成、すなはち口腔におけるフォルマントの發生と相伴ひ、時間においてあまり前後することなく聲帶の緊張が調節されて、適當の母音に適當の高さが與へられる次第であるが、その緊張は平板式アクセントの場合においては著しく大ではなくて持續的であり、起伏式アクセントにおいては一張一弛、擒縱の自在を具現する趣がある。かくて生じた波瀾が音質の構成とは時間的に前後してくひちがひを生じるときに後に說く「アクセントのすべり」の現象を見るに至る。かういふ原因に由來すると思はれるアクセントの地方的相違もしば／＼觀察されるのであつて、東京語の

ハシ(箸)が京都・長崎・土佐の方言ではハシ(箸)であり、かへつて東京語のハシ(橋)が京都・土佐でハシ(橋)となつてゐる例や、東京語のウミ(海)を京都・長崎・土佐でウミ(海)、すなはち東京語のウミ(膿)と同じやうにし、東京語のハナ(花)を京都などでハナ(花)といふなどの例のごときはこれである。この際アクセントの型は異なつてゐるが、アクセントの式にいたつては變るところがない。

第五四圖

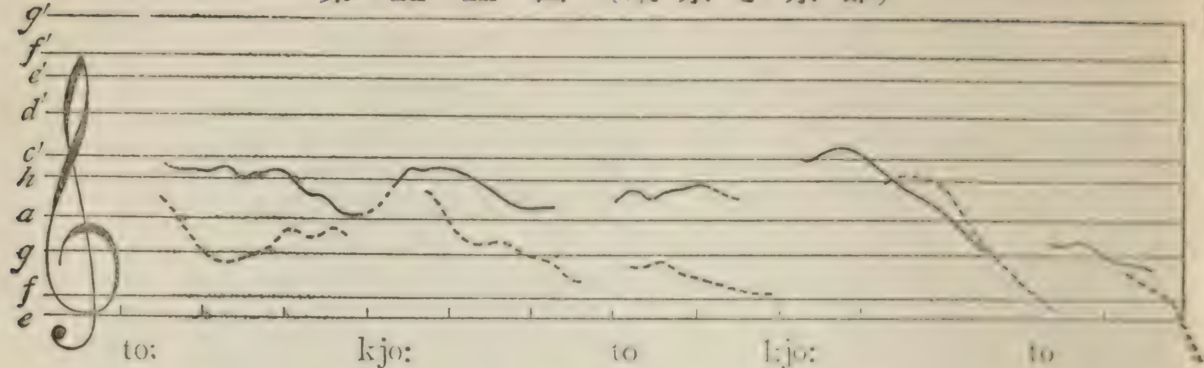
「洋服」



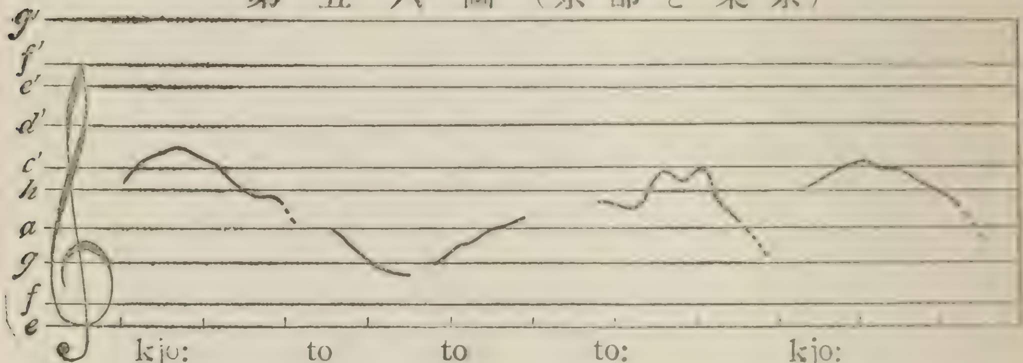
なほ語頭に長母音のあらはれる語の場合には、その高さの進行が、ゆつくり發音する場合を除いては、前にのべた下中…の型にはまらないやうな趣を示すことが多い。第五四圖における「洋服」、第五五圖、第五六圖における「東京」の如きは、語頭が低く始まつてはゐない。しかもその平板式アクセントたることは明白に示されてゐる。かういふ場合にこの種の高低進行が、不用意のうちに多くあらはれる傾向を示すのである。

なほ次に說くやうに、事情によつてアクセントの型が變化を蒙ることがあつても、その式はよく保たれてゐるといふ場合がすこぶる多いのである。かういふ點から見て、アクセントの構成において式

第五五圖（東京と京都）



第五六圖（京都と東京）



が型よりも一層根本的なものであり、固執性を有するものであると考へることができる。すなはちアクセントの式は、アクセントの型に內在して、その形成の能因たるところの原本的事實であると思はせるものがあるのである。

註(1)高橋穣『心理學』三二一頁。

(2)Edwards: *Op. cit*, p. 73. 氏は「巣」を上、「酢」を下としてゐるが、「巣」は東京語で下型（または上型）、「酢」は必ず上型のアクセントをもつものである。

(3)ポリワーノフは、波岡茂輝等の「國定讀本の讀み方」において、ハカマをアクセントのない語としてゐることを指摘して、「全平」と最後の音節の高まる型との區別を單に單音節語と二音節

語とにだけしか認めなかつたことを批難した。ポ氏によればハカマは *aton* でなくて haka┐ma である。（ポリワーノフ、前出）。

(4)東京語で上中中型のものを上上中型にする傾向が關東方言の中に見える。また下下中・下下上のやうな高さの進行は、東北方言などによくあらはれるやうである。

(5)ポリワーノフはこの型を ーー┐ー のやうに考へた。それは山田美妙の「三上」によつたわけである。日本のローマ字社同人の見解も同様である。

(6)ポリワーノフの比較研究については、會見の當時簡單に聞知したのみで、その後發表されたものを見ないが、日本語の言語學及び方言に關する著書があるといふ。

(7)佐久間鼎『國語アクセント講話』（前出）「アクセントの地方的相違」（九六―一一二頁）。

第十五章　アクセントの分布

四六　語の種別におけるアクセント

語はその由來、すなはち語源といふ點から區別されると共に、その語句において占めるところの論理的地位、すなはち語法といふ點からも區別される。アクセントの型と、これらの種別との間に成立つところの關係を探るときは、一面においてアクセントの心理的意義を察することが出來る。すなはちある種の語彙にはある種の型がもつぱら現はれ、または多くあらはれるといふやうな關係を見るときは、その種のアクセントの意義に對して、おのづからある心理學的な解釋を與へることが可能になるであらう。

ある特定の型が多く現はれるといふことは、方言の音聲現象における特色としても注意すべき一事項であつて、東京語および關東語が、關西語に比して一般に平板的アクセントを多くもつといふ事實のごときは、一つの著しい特色である。現在のところ、各地方の方言におけるアクセントの分布については十分には說き得ないが、東京語における種々の語彙について、どんな型又は式が多くあらはれるかといふ關係を見よう。そしてさらに進んでアクセントの型に對する心理的解釋を試みよう。

單音節・二音節、さらには三音節の語彙について見るのに、一般に外來語が多くは擡頭的アクセントを示すもので、すなはち上型・上中型・上中中型になつてゐるのである。常用の國語のうちにすこぶる多く混入してゐる漢字の字音から出た語は、往々他の型のアクセントをも有するが、その大多數についていふなら、擡頭的アクセントを示すものである。もつとも單音節語の場合には、字音から出たと思はれる語彙にも**下型**のアクセントを示すものが比較的多く、ほゞ次にかゝげるやうなものが數へられる。

イ（胃）	キ（氣）	シ（詩）
シャ（紗）	ショ（書〔筆蹟〕）	シュ（朱）
チャ（茶）	ブ（歩・分・部）	
ヂョ（序）	ヅ（圖）	ガ（我・畫・蛾）
ギ（儀）	ゲ（下）	ゴ（後）
ム（無）	リ（理・利）	ロ（爐・艪・絽）

（備考）なほこのほか往々**下型**に發音されるものにシ（死）・ハ（派）・ザ（座）・サ（差）などが

あるが、これは上型にする人もあつて一方に確定しがたい。

もとより字音の單音節語で上型のアクセントを示すものは、これよりずつと數が多いのである。しかしその割合から見て、二音節語の場合よりも單音節語の場合の方が比較的多くの平板式のものを有するやうに思はれる。もつとも下型のアクセントをもつものには、ロ(絽)・ギ(儀)のやうにそれ〲もとの漢語の意味を轉じてきて、字音とはいへないものもあり、キ(氣)・リ(理)・ガ(我)・ゴ(後)・ム(無)のやうに一定の熟語成句の中にだけ主として用ゐられる習慣のものもあり、そのいづれにしても一般の漢語と趣を異にして、すでに文字をはなれて語として理解されるもの、漢語といふ外來語的の感じを生じないほど國語になりきつたものである。語源的にいへば漢字の字音であるが、慣用久しくして純然たる國語となつたと認めるべき語である。そこで漢字のもとの語義から轉じたものや、特殊の意味だけに限定されたものもある。たとへばショ(書)は下型のアクセントによつて「筆蹟・書法」の意味をあらはすことが出來るが、「書」の漢字の表現する他の語義、すなはち「ほん」、「てがみ」、「かきもの」などをいふ一層漢語的な用法(漢籍よみなどでの)では、上型に發音されたショでなくてはならない。しかもこの上型のショは、まだ多分の外來語臭を帶び、漢文脈の文語中でなくては用ゐがたいものであつて、純然たる國語とは見做されない。およそかやうな、國語としての慣用のない漢語には

（漢語以來の新しい外來語にはなほさら）單音節の場合には上型アクセントを與へて特別の地位におき、これに注意をひくやうにするのが常である。用ゐなれない古語に對しても同様な仕方を施すのである。

つぎに、長母音・重母音（または連母音）を含む準二音節語には、字音から由來するものが多く、特に長母音を含む語は大部分この種のものから成る。また〔ŋ〕を含む準二音節語も、その語源について見ると、ほとんどすべて外來語といつて差支ないほどである。これらの語彙における上昇的および下降的のアクセントの現はれ方の多少は、單音節語の場合のやうに、耳慣れない字音（漢語）を持ち出せば、上中型のものをいくらでも並べることができるやうな次第であるから、さうするなら到底比較にならない。たゞ常用語といふ標準で比較するなら、大體次のやうにならう。

まづ長母音を含むものについて平板的アクセントを示すものを求めると、

下中型―ホー（法）　ボー（棒）　ヘー（塀）

ヂョー（情・錠*）　クー（空）

キョー（與・經）　キュー（急・灸）

チュー（註・宙*）　ノー（能（樂*））

レー（返）禮*

*（備考）「錠」は「鏁」の字音で、「鏁」は「鎖」の俗體であるといふ。「宙」は「宙で・宙に」などゝ成句に用ゐるとき平板式、「能」は「能樂」の意味では平板式で、普通にオノー（お能）ともいふ。「能力」の意味ではノーである（「能ある鷹は…」などの場合）。「禮」もこゝには轉義的の返禮・謝儀の意味。

などが、まづ考へ及ぶ限りである。しかるに擡頭的アクセントを示すものは、普通の用語で考へ得るかぎりでも、次に掲げるほどある。

上中型―ボー（坊）　ドー（胴・堂・銅）

ジョー（十・住）　ゼー（税・贅〔ぜいたく ノ略語〕）　ジョー（上・丈）

ゾー（象・像）　チョー（腸・蝶・町・兆・長）

チュー（中・忠）　ツー（通）

トー（塔・黨・籐）　テー（丁）

セー（生・精・姓）　ソー（相・想・僧・層）

スー（數）　シュー（週・州・衆）

ショー（小・升・賞・證・章・笙・性）
ケー（計・罫）　コー（甲・香）
キョー（京・凶）　キュー（舊・級）
ゲー（藝）　ゴー（合・號・業）
グー（寓）　ギュー（牛）
ギョー（業・行）　ヘー（兵・丙・弊）
ホー（方・砲）　フー（風・封）
メー（銘）　ミョー（妙）
ノー（腦・農・能（力））　オー（王）
レー（禮・零・例）　ロー（牢・蠟・勞）
リョー（獵・兩・領・量）　リュー（龍）
ヨー（用）

重母音（連母音）を含む字音から出た準二音節語について見ると、下中型が少くて上中型が大多数を占めることは、長母音を含む語の場合とほゞ同様である。下中型を有する語は、純國語や字音か

ら出た語を通じて甚だ少數であるが、わけても後者の例が乏しい。すなはち次の數例に過ぎない。

下中型─ダイ（代〔代價・代理・代人〕）

サイ（菜〔おかず〕）

ハイ（肺〔肺病〕）

なかでもサイ（おかず）は「そへ」から轉じた語であるとの語源説もあるから、除外しなくてはなるまい。これに反して、上中型のものはすこぶる多く、全體として重母音を含む準二音節語の數が少くないだけに、字音から出た上中型の語もやはりかなり多いのである。

つぎに〔ŋ〕を含む準二音節語では、平板式たる下中型も十數語を數へるが、これを擡頭的な上中型に比べると、もとより大差がある。

下中型─イン（韻）　オン（音）　カン（癇・甲・勘〔さとり〕）

ケン（驗〔きゝめ〕）　コン（根、氣）　クン（訓）

サン（三・（出）產）　シュン（旬〔季節〕）　ジュン（順）

ゼン（膳）　タン（痰）　ヘン（偏〔漢字の〕）

ヒン（品〔位〕）　メン（（假）面）　ワン（椀）

テン（點）　ハン（晩）　ボン（盆）

上中型―アン（案・餡）　イン（印）　ウン（運）

エン（縁・圓・宴）　オン（恩）

カン（寒・貫・罐・鐶・管・官・棺）

キン（金・斤）　クン（勳）

ケン（劍・縣・拳・件）　コン（紺）

ガン（雁・願・癌）　ギン（銀）

グン（群・郡・軍）　サン（棧・酸・讃・產）

セン（千・線・栓・先）　シン（心）（心棒）

スン（寸）　ソン（損）

ヂン・ジン（陣・仁・腎）　タン（反）

ダン（段・壇・談）　テン（天）　デン（傳）

ドン（鈍）　チン（賃・亭）

ザン（讒・殘）　ゼン（前・善・禪）

ナン（難）　ネン（念・年）
ハン（半・判・版・藩）　ホン（本）
ヒン（貧）　ヘン（邊・篇・變）
バン（判〔紙の〕・番・盤）　ビン（瓶・鬢）
ベン（便・瓣〔はなびら〕・辯〔舌〕）　ボン（盆〔盂蘭盆會〕）
ブン（分・文）　マン（萬・滿）　メン（綿・麺）
モン（門・紋）　ラン（蘭・欄・亂）
リン（厘・燐・輪）　ロン（論）　ワン（灣）

かやうに單音節語および準二音節語においては、平板式の語が起伏式のものに比してすこぶる少數である。こゝには字音から出たものについて見たのであるが、それ以外のものは少いから、一般を察し得る。この場合に起伏式のものは、みな撞頭的である。ところが普通の二音節語においては、字音から出た語にも三とほりのアクセントの型が分布されてゐる。そのうち、いづれの型が多きを占めるかと尋ねて見ると、やはり上中型が最も優勢で、過半數を占めてゐることを知るであらう。

字音から出た二音節の語彙は、全體としてその數もだいぶ多いが、そのうちで下中型および下上型

を示すものはほゞ次に掲げるだけである。たゞしこゝには漢字一字の字音から由來したものだけを掲げる。

下中型—サク（作（作品・できばえ））　ガク（額（扁—））
キャク（客）　キョク（曲（おもしろみ・與））
カク（格（—式））　ギャク（逆）
コツ（骨（—法））　ショク（職・食）
セツ（說）　ザツ（雜）
ゾク（俗・賊）　トク（德・得（利—））
タク（宅）　チャク（着（到—））
テキ（敵）　テツ（鐵）
ベツ（別）　エキ（益・易）
ボク（木（盆栽・庭園などに用ゐる切株））

下上型—イチ（一）　シチ（七）
ハチ（八）　バチ（罰（神のとが、てんばつ））

△キク（菊）　　△キチ（吉）
ヒャク（百）　　マク（幕）
ハク（箔）　　ミャク（脈）
ニク（肉）　　シャク（尺）
△シキ（式）　　△シク・△シュク（宿）
△チツ（秩）　　ヂク（軸）
ヤク（役）　　ヨク（慾）
ラク（樂）　　ロク（六）

×（備考）ガク（額）に對して「金額」などの意のはガク（額）である。シャク（癪・酌）の二語は字音に似て、しかも漢語ではない。「刑罰」のはバツである。

なほ二字の漢字から成る二音節語にも三種の型が分布されてゐる。そのうちで、やはり上中型のものが多數を占めてゐる。下中型または下上型のものは、國語の中に慣用されることが久しくなつてゐるものである（たゞし第一音節の無聲化のためにこの種の型をとるに至つたものは別である）。たとへば、下中型のイシャ（醫者）・ブジ（無事）・セジ（世辭）・ゴマ（胡麻）・ヒフ（被布）・シソ・△シソ（紫

蘇）・ゲリ（下痢）など、また下上型のチェ（智慧）・デシ（弟子）・ギリ（義理）などは、慣用久しくしてまつたく國語になりきつたものである。

二音節語および準二音節語に新しい外來語について見ると、パン・ピン・ペン・トン・キュー・バテなど、すべて擡頭的であるが、促音を含むものでコップなどのやうに國語化したものには、平板式のものがないでもない。

要するに、外來語または漢語のうちでまた國語になりきらずにゐる單音節乃至二音節語は、すべて擡頭的アクセントを有し、國語として慣用されてゐるものには、一方に起伏式のものあり、また平板式になつたものもある。かういふ例から考へると、外來語・漢語などの二音節ぐらゐのものは、そのはじめとりあへず擡頭的アクセントを與へられたものであるが、國語化するに至つて漸次に分化してアクセントの型がそれぞれに固定するやうになつたのであらう。この擡頭的アクセントは、多音節語になるにつれて現はれ方が次第に少くなることを既に見たのであるが、近くイギリス語などから輸入された外來語では、三音節語または四音節語でも、なほこの種の型が少からず見られる。これらは三音節語（準三音節語も）でも上中中型を保つが、たゞ促音を含むものや、慣用が久しく國語化したものには、下中中型を見ることもある。さらにまた、この擡頭的アクセントから平板式のものに移らう

といふ過渡期にあると思はれる語もあるのは、注意すべきことである。

一般に長母音・重母音（連母音）を含む準三音節語または促音を含む二音節語は、普通口語に用ゐられないやうな漢語であつても、漸く下中中型のやうなアクセントをとることが多くなつて來る。かやうな平板式アクセントが次第に優勢になる傾向は、三音節語においても著しく、四音節語に及んで更に甚だしくなり、その一方に擡頭的アクセントは次第にその數を減じて、五、六音節などの多音節語にはきはめて稀になること、東京語のアクセント分布において著明な傾向である。

漢語その他外來語における一つの特色ある擡頭的アクセントは、四音節語（準四音節語）においてすこぶるその數を減じ、多くの語彙は下中…型またはその他の型をもつて發音されるやうになる。たゞし無聲化その他の理由により、音節內部の構成に尋常と異なるものを生じた場合に、まゝ擡頭的アクセントの保たれることがある。たとへば、ライオンのやうな準四音節語は、〔ɑi〕の連母音を〔ɑĭ〕のやうに重母音にすることによつて、[lɑĭon] のやうな擡頭的アクセントを保つことができ、ダイヤモンドは音節を省略してダイヤとすることによつて、上中中型を得る次第である。

三音節以下の漢語その他外來語において、擡頭的アクセントが優越を示すのに對して、同數の音節の普通の語、すなはち純然たる國語（こゝには特に名詞を念頭におく）では、どの型がもつとも多く

あらはれるか。普通に用ゐられる單音節語について、大體の比較を試みると、下型のものが上型のものより少し多いやうである。[1] 二音節語において下中型と上中型その他とを比較すると、下中型がはるかに群をぬいて多きを占めてゐる。三音節語においても、下中中型が優勢である。四音節語にあつては、諸種の型のうち、下中中中型がもつとも多い。かくて、四音節までの語については、一般に外來語に上中…型の語例がすこぶる多いといふことができるのに對し、純國語には下中…型がもつとも多くの語數を占めてゐるといふ次第である。こゝに兩者の著しい對比を見出すわけである。

語法的種別とアクセント

語法上の語の種別、すなはち品詞におけるアクセントの型の分布は、中んづく「體言」と「用言」との對比において顯著なものがあるが、體言といふうちにも、用言といふうちにも、仔細に見れば多少の趨異の存することが知られる。[2] こゝに品詞のうちいはゞ「實辭」たる獨立語のみがアクセントの型を保ち得るものであつて、「虛辭」たる非獨立語、すなはち他の語に接着して語句を成し、それ自體は獨立の地位を占め得ない助詞・助動詞のやうなものは、こゝには除外する。これらは別に語の接續におけるアクセントのあらはれ方について闡說されるのである。

體言には、前述のアクセントの型のすべてがあらはれる。すなはち單音節語における二型、二音節

語における三型、三音節語における四型といふやうに、次第に音節數のふえるにつれて型の種類も增していくが、しかし四音節以上の語では、漸く擡頭的の型の存立が困難になつて、それ〳〵の型を示す語數の增加率が著しく偏頗になる。しかし、如上の諸型は、體言にはこと〳〵く具はつてゐる。體言のうち、さらに語の種別（むしろ語義の上からの種別）によつて型の分布に差異がある。名詞のうちで普通名詞と固有名詞とに一種の對比が見られ、代名詞のうちで不定稱のものが多くはその型において他と異なる特色を示すのである。

固有名詞のアクセント。

外來語を除いた普通名詞には、一般に下中……型の平板なアクセントが多いが、固有名詞は、その點ですこぶる異なるところがある。特に三音節またはそれより少い音節數の固有名詞は、むしろ多く擡頭的アクセントをとる。その最も徹底的な例は、二音節でできてゐる女の名のアクセントで、この場合には、すべてが皆上中型であるといつても差支がない。普通に女の名として用ゐられるやうな二音節の連音三百二十一例を求め得たが、そのうち第一音節が無聲化されるもの（すなはち第一と第二との子音が共に無聲であつて、その中間に〔i〕または〔ɯ〕・〔ɯ̈〕の母音を挾むやうなもの）十二例を除けば、他はすべて上中型であつて、まつたく例外がない。いま試みに第一音節に「タ」を有する名前をあげ

ると、

タイ　タエ　タカ　タケ　タキ
タダ　タマ　タメ　タミ　タネ
タン　タツ　タチ　タヅ

のやうである。第一音節が無聲化するものにあつては、第二音節が上の高さを得て下上型となるのであつて、その十二例は次のとほりである。[3]

キク　キタ　キセ　ステ　シカ
ツタ　チカ　チセ　ヒサ　フキ
フク　フサ

これは一般的法則の例外といへば例外であるが、後に說くやうに、上中型が一轉すれば下上型となるといふ密接な關係があり、こゝではつまり第一音節の無聲化が、もと上中型であるはずのアクセントを一轉させて下上型としたと解すべき十分の理由がある。そこで例外といふよりも、むしろ上中型をあらはすやうな原則が無聲化といふ別個の能因と共に作用して、かやうな變容を實現したものと見るべきものである。で、二音節の女の名における上中型は、例外なくすべてに妥當するといひ得るので

ある。そして、この型は、接頭語「お」や接尾語「さん」をつけた場合にも、また「こ」をつけた場合にもそのまゝ新しい合成語のうちに保たれて、オハナ・オタマサン・キミコ・コトコサンのやうになり、またオキク・チカコサンのやうになる。普通名詞の場合には、接頭語「お」のついたゝめにもとの型だけでなくアクセントの式さへもかはり、平板式のものが起伏式に、起伏式のものが平板式になることが多いのであつて、こゝに見るやうに型が變らずに保たれるのはすこぶる特別の場合だけにあることなのである。

二音節の名字（姓）および地名も、多くは上中型を示す。特に地名では大部分がこの型を有し、その割合は名字の場合を凌ぐ。こゝに地名について數例をあげる。地名はその土地における稱呼やアクセントが、他の地方の人のいふところと、しばしば異なつてゐる。こゝにはもとより東京におけるアクセントを問題にするのである。

下中型―イヅ（伊豆）　ギフ（岐阜）
ミト（水戸）　ミタ（三田）
上中型―アキ（安藝）　イガ（伊賀）
イセ（伊勢）　イキ（壹岐）

ウゴ（羽後）　サド（佐渡）
ノト（能登）　キイ（紀伊）
シマ（志摩）　ヒダ（飛彈）
ヒゴ（肥後）　デワ（出羽）
オキ（穏岐）　モジ（門司）
クレ（呉）　ナラ（奈良）
サガ（佐賀）　シバ（芝）
ヨド（淀）　フジ（富士）

下上型―トサ（土佐、またトサ）
チバ（千葉）　ノダ（野田）

三音節の地名についても、また比較的多く上中中形で發音される傾が見える。たゞし、擡頭的形式は三音節の人名におけるほど多くはないやうである。地名でウエノ（上野）は人名でウエノであり、地名でヨシノ（吉野）は人名でヨシノである。また一方には、ミタ（三田）・ネヅ（根津）・シバ（芝）・カンダ（神田）・ナカノ（中野）・トヤマ（戸山）などのやうに、人名と地名とが同型のアクセントであるもの

もある。

一音節の名字（姓）には、地名におけるよりやゝ多い割合の下中型や下上型を見るが、普通名詞における割合から見ると、上中型の多い點で普通名詞とやはり違ふ。特に對比の著しいのは、同音のものが各の場合にアクセントを異にすることである。すなはち普通名詞として平板なアクセントの

オカ（岡）　オキ（沖）　スギ（杉）　タキ（瀧）

フヂ（藤）　ニシ（西）　ホシ（星）

や、下上型を有する

サカ（坂）　サワ（澤）　タニ（谷）　ハシ（橋）

シマ（島）　マチ（町）

などが、名字としてはみな上中型で、オカ・オキ・スギ・サカ・サワのやうに發音される。もつとも時には下中型の名字もあらはれる。すなはち

ホリ（堀）　ツジ（辻）　モリ（森）

などがこれである。[41] この際も、普通名詞で下上型をもつものが、アクセントをかへて下中型となるのである。

同じ傾向は三音節の名字についても見られる。三音節になると、平板式下中中型も少いのではないが、やはり上中中型が普通名詞におけるよりも比較的多くあらはれるところに特徴が見える。

上中中型—マキノ(牧野)	ミヅノ(水野)
サトー(佐藤)	ムトー(武藤)
ハヤミ(早速)	カトー(加藤)
ウカイ(鵜飼)	フルヤ(古谷)
ノナカ(野中)	コミヤ(小宮)

下上中型は特別の塲合だけしか現はれない。これも人名のアクセントにおける一特徴である。下中中型を示すものは、その數からいふと、かなり多い。

下中中型—カネコ(金子)	ウチダ(内田)
イザワ(伊澤)	イトー(伊藤)
ゴトー(後藤)	カワイ(河井)
ムライ(村井)	タナカ(田中)
ニシダ(西田)	アオキ(青木)

その数からいへば、平板式の方が多いであらうが、割合からいふと普通名詞の場合とちがつて、やはり擡頭的形式がずつと多くあらはれるのである。そして同音の普通名詞をもつ次のやうな名字が、特に擡頭的形式をとつて特殊のアクセントを示すことは、二音節の場合に見たのと同様な趣がある。すなはち普通名詞の

アサヒ(朝日)　イノリ(禱)　タワラ(俵)
ヤナギ(柳)　ヒガシ(東)　ウエキ(植木)
ミナミ(南)　シラベ(調)

と同音の名字は、みな上中中型である。普通名詞のハヤシ(林)は下上上型であるが、名字のはハヤシで下中中型である。

名乗の方になると、女の名の三音節のものは下中中型を以て一貫するといつても差支ないほどである(たゞし二音節の名に「こ」のついてできたものはユキコ・タツコのやうに上中中型であること、前述のとほりである)。すなはちハナヨ・イクヨ・テルヨなどの「よ」のつくもの、キミエ・ハツエ・イトエなどの「え」のつくもの、その他ミサオ・カオル・ヤヨイ・シゲミ・マサヤ・マツノなど、おほむね同型である。男の名の方は、さう簡單にはいかない。キイチ(喜一)・ゲンヂ(源治)・ゴンタ

(權太)・タロー(太郎)・ジロー(次郎)・ゴロー(五郎)・カツヂ(勝治)などの上中中型のものもかなりある。しかし多くはやはりマサオ・ヒデオ・ヨシオのやうに「雄・男」のつくもの、ギスケ・ゴスケのやうに「助」のつくもの、タサク・ニサクのやうに「作」のつくもの、その他カツミ・ステミなど、ツトム・イサム・ハジメ・タキチ・モキチ・トール・ヒロシ・タカシ・マサル・アキラなど、下中中型である。

四音節以上になると、語頭に長母音・重母音または母音と鼻音との連音を含む準四音節の語を除いては、一般に擡頭的形式の形成を見ることが難く、固有名詞について見ても、その點は同様である。したがつて固有名詞の特色として擡頭的形式を擧げることが、もはやできない。準四音節の名字にはオーイシ(大石)・オーカワ(大川)・トーゴー(東郷)・トージョー(東條)・ナンジョー(南條)・アイカワ(相川)・カンザキ(神崎)・エンドー(遠藤)・アンドー(安藤)・バンザイ(阪西)のやうな上中中中型もあるが、一方にはオーシマ(大島)・オーツカ(大塚)・オーヤマ(大山)・オーハシ(大橋)・ナイトー(内藤)・サイトー(齋藤)・コンドー(近藤)のやうに下中中中型のものもある。準四音節語における上中中中型にかはつて四音節語では下上中中型が比較的多く固有詞にあらはれる傾が見える。しかし大體から見ると、人名・地名などの固有名詞と普通名詞との間におけるアクセントの型の相異は、著し

くにあらはれず、時として普通名詞のアカマツ(赤松)に對して人名のアカマツのやうな型の對比も見られるが、イシバシ(石橋)のやうに兩者に共通な型のものも少くない。四音節にもなれば、普通名詞と固有名詞とが同音であるやうな場合も大體少くなり、アクセントの差異によるまでもなく、その語構成において固有名詞には固有名詞らしい特徴があるので、格別アクセントの上で異色を示すに及ばないのであらう。四音節以上のものについても同樣である。

數詞のアクセント。

數詞もまたアクセントにおいて異色を示すものゝ一つに數へることが出來る。これを一般的にいふならば、數詞は特に起伏式アクセントを示す傾向を有し、またなるべく擡頭的形式をとらうとする趣をあらはす。數をかぞへるときに用ゐる數詞

イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク、シチ、ハチ、ク、ヂュー、ヒャク、セン、マン、オク……

および

ヒトツ、フタツ、ミッツ、ヨッツ、イツツ、ムッツ、ナナツ、ヤッツ、ココノツ、トー

などは、ほとんどみな起伏式である(サンが例外)。

また數詞が接尾語を伴ふ場合にも、この起伏的傾向は著しくあらはれる。それは「いちー、にー、さ

んー」のやうな接續でも、「ひとー、ふたー、みー」のやうな接續でも同樣である。すなはち

イッポン(一本)、ニホン、サンボン、シホン、ゴホン、ロッポン、シチホン、ハチホン、クホン、ヂッポン、ヂューイッポン、…ニヂッポン、サンヂッポン、シヂッポン、ゴヂッポン、ロクヂッポン、…ヒャッポン、センボン、マンボン。

イチワ(一羽)、ニワ、サンバ、シワ、ゴワ、ロッパ、シチワ、ハチワ、クワ、ヂッパ、ヒャッパ、センバ、マンバ。

イチネン(一年)、ニネン、サンネン、ヨネン、ゴネン、ロクネン、シチネン、ハチネン、クネン、ヂューネン、ヒャクネン、センネン、マンネン。

イチヂ(一時)、ニヂ、サンヂ、ヨヂ、ゴヂ、ロクヂ、シチヂ、ハチヂ、クヂ、ヂューヂ、ヂューイチヂ、ヂューニヂ。

ヒトツキ(一月)、フタツキ、ミツキ、ヨツキ、イツツキ、ムツキ、ナナツキ、ヤツキ、ココノツキ、トツキ。

イッカゲツ(一箇月)、ニカゲツ、サンカゲツ、シカゲツ、…ヂッカゲツ、ヂューイッカゲツ、…

ヒトカケ(一掛)、フタカケ、ミカケ、…

ヒトサラ（一皿）、フタサラ、ミサラ、…

のやうに、おもに前の造語節（數詞の部分）だけに起伏の傾向のあらはれる場合と、

イッサツ（一冊）、ニサツ、サンサツ、シサツ、ゴサツ、ロクサツ、シチサツ、ハッサツ、クサツ、*ヂッサツ。

イッピキ（一匹）、ニヒキ、サンビキ、シヒキ、ゴヒキ、ロッピキ、シチヒキ、ハチヒキ、クヒキ、ヂッピキ、ヒャッピキ、センビキ。

イッセン（一錢）、ニセン、サンセン、シセン（ヨンセン）、ゴセン、ロクセン、シチセン（ナナセン）、ハッセン、キューセン、ヂッセン、ニヂッセン、サンヂッセン、ヨンヂッセン、ゴヂッセン、ロクヂッセン、…

ヒトリ（一人）、フタリ、サンニン、ヨニン×、ゴニン×、ロクニン、シチニン、ハチニン、クニン×、ヂューニン、ヒャクニン、センニン。

*この場合に下上上（└┐┐）の型にならないのは、もと上中中（┐ーー）の型であるべきのが、無聲化によつてアクセントのすべりを生じたゝめ、下上中（└┐ー）の型をとる故と思はれる。

×副詞的に用ゐて「四人來た」のやうにいふときは、平板にヨニンといふ。

のやうに後の造語節（接尾語）にも起伏の傾向の波及する場合とがある。いづれにしても、一般に起伏の傾向が認められるのである。

たゞ日數をかぞへていふ場合は、やゝ多く平板式があらはれる點で例外的といふべきである。

イチニチ（一日）、ツイタチ、フツカ、ミッカ、ヨッカ、イツカ、ムイカ、ナノカ、ヨーカ、ココノカ、トーカ、ヂューイチニチ、ヂューニニチ、ヂューサニチ、ヂューヨッカ、ヂューゴニチ、ヂューロクニチ、ヂューシチニチ、…ハツカ、ミソカ（サンヂューニチ）。

この際〔-nitʃi〕はしば／＼つゞまつて〔-ntʃi〕となること、イチンチ、ニサンチ（二三日）、シゴンチ（四五日）、ヒャクンチのやうである。

順序・次第をいふに用ゐる接尾語「第」〔dai-〕のつく場合には、次のやうに擡頭的形式、または連語のアクセントの形式があらはれる。

ダイイチ　第一*、ダイニ、ダイサン、ダイシ、…ダイーヂューイチ、ダイーヂューゴ…

*學生などが第一高等女學校などいふべきを略して「第一」といふとき平板式にしてダイイチといふことがある。かういふダイイチ、ダイニ、ダイサンは、普通の順序數詞たる意味を感じとを失つた固有名詞である。

また順序數詞で、終に「め」をつけて用ゐるものは、次のやうにすべて下上…型のアクセントで發音される。

ヒトツメ(一つ目)、フタツメ、ミッツメ、ヨッツメ、…ココノツメ。

イチバンメ(一番目)、ニバンメ、サンバンメ、ヨバンメ…(イチバン(一番)、ニバン、サンバン、ヨバン…)

ニケンメ(二軒目)、サンゲンメ…

かく固有名詞・數詞・漢語・外來語などにおいて、他の種の語には稀である擡頭的形式を見ることが多く、また普通の語に最も多い平板式のものを見ることがすこぶる少いといふ事實は、おのづから音聲の心理的能因にもとづくものであることを察せしめる。アクセントの諸型における目だゝしさは、一般に平板式のものにおいて最小であり、起伏式において大きく、特に擡頭的形式において最大である。固有名詞・數詞などのアクセントが、あたかもこの擡頭的形式を體現することの多いのは、決して偶然ではない。ヘルウィクが速記作業において觀察したのによれば、最も耳から逸しやすい語は、第一に數詞、第二に固有名詞であつた。[5] 耳どほい漢語や外來語についても、その理は同一である。かやうな語彙をそのアクセントの特異性によつて、語句中において耳だつやうに仕向けるのは、自然

の要求にかなふものといふべきである。まさにかやうな事態のうちに、語義と音聲との心理的交渉を見る次第である。そして慣用の久しい語においてアクセントの平板化があらはれる傾向は、のちに說くやうに外來語・固有名詞などにも見られるのであつて[6]、このことがまた如上の事理を立證するものである。

疑問詞のアクセント。

代名詞には、普通名詞のやうに種々の型があらはれるのであつて、コレ・ソレ・アレの下中型、ワタシ・オマエ・キサマの下中中型のやうな平板式もあり、一方にはショクンの上中中型、アナタの下上中型のやうな起伏式もある。しかるに、特に擡頭的形式をとる一群の語があつて、その語義と關聯して特色を示してゐるのは、注意すべきものである。それはいはゆる不定稱の代名詞である。が、その疑問をあらはす職能においてこの種の代名詞と共通な性質をもつ諸種の語、すなはち疑問的形容詞や、疑問的副詞も、やはり擡頭的形式を示すのであつて、品詞によつて然るよりは、その語義の心理的內容によつてアクセント形式との聯繫が生じたものである。

かやうな疑問詞には、二音節のものに

ナニ(ナン)、イツ、ドレ、ドコ、ドッチ、ダレ、ドー、ナゼ…

三音節のものに

ドナタ、ドンナ、ドイツ、ドチラ（また不定にいふナンカ）…

四音節のものに

ダレダレ、ドコドコ、イツイツ、ドーシテ、ナニナニ（不定にいふダレソレ、ドコソコ）…

などがあつて、すべて接頭的である。

また疑問または不定の數をいひあらはすために名詞に冠して用ゐる「幾・何」のやうな接頭語は、三音節および四音節の複合語においても、よく接頭的形式を保つのである。

「何」―ナンチ（何時）　ナンバ（何羽）

ナンニン（何人）　ナンボン（何本）

ナンバン（何番）　ナンプン（何分）

ナンベン（何遍）　ナンサツ（何冊）

ナンニチ（何日）　ナンダイ（何代）

※老人などのつかふナンドキ（何時）などの「何」はナンピトなどのと同じで、數に關するよりもむしろ時の性質 whatness をいひあらはすものであらう。

「幾」――イクド・イクタビ（幾度）

イッカ・イクニチ（幾日）

イクニン・イクタリ（幾人）

イクサツ（幾册）　イクホン（幾本）

たゞし、音節の數が四つ以上になると、擡頭的形式を支持することが困難になるので、かやうな複合語も、あるひは下中…型に、あるひは下上中…型になる。（たゞし中には擡頭的にはいはれることのあるものもある*）

*ナンヂカン（何時間）　*ナンプンマイ（何分前）

ナンベングライ（何遍ぐらゐ）

イクニンマイ（幾人前）　イクニチブン（幾日分）

イクネンメ（幾年目）〔これは「目」のついたゝめの下上…型である〕

かく疑問的不定稱のこれらの語には、代名詞たると形容詞的たると副詞的たるとを問はず、すべて擡頭的形式をあらはさうとする傾向があることを察すべきであり、そこにまた心理學的解釋を容れる事情があるのである。

なほ擡頭的形式またはそれから（アクセントのすべりで）一轉して出來た形式を示すものに、反對または相異なる意味の語を二つ重ねて組立てた複合語がある。たとへば

イキキ（來往、關東方言にイキキの型がある）　オヤコ（親子、轉じてオヤコともいふ）

メハナ（目鼻、轉じてメハナともいふ）　カゲヒナタ（またカゲヒナタともいふ）

などで、そのうちオヤコのやうに、造語節「おや」の單語の型オヤ（└┐）が複合語で上中（┐｜）のやうになることは他の場合には稀なのである。

副詞（殊にオノマペア）のアクセント。

副詞にも種々の型の語がある。下中…型、下上中…型も多く見られるが、他の品詞におけるよりも擡頭的形式のものを比較的多くもつてゐるといへる。殊に次のやうな構造の四音節語は、ほとんど皆擡頭的形式を示すのである。

バタバタ	ボリボリ	ブツブツ
グングン*	ガタガタ*	ゴロゴロ*
ゴリゴリ*	ゴシゴシ*	グルグル*
ポツポツ	バラバラ	プンプン

ソロソロ　ノコノコ　ネバネバ
チョイチョイ　チラチラ　トントン
ゴタゴタ＊　キラキラ　キョロキョロ
ヅンヅン　ヅカヅカ　ドキドキ
ヒョコヒョコ　ピョンピョン　ニョロニョロ

＊この場合には第二の「ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ」の子音は〔ŋ〕でなくて〔g〕である。

また次のやうな四音節語にも、上中中中型が少くない。（もつとも一轉して下上中中型になることもある。）

アクセク　チラホラ　カレコレ
テキパキ　ガタピシ　ノラクラ
ムシャクシャ　ドギマギ　ヂタバタ

かういふ語の第一音節が無聲化されたときは、アクセントの型がすべて下上中中型をつくること、次のやうである。

ピカピカ　チクチク　スバスバ

しかし、普通の單語を重ねたやうな語は、シヅシヅ、マダマダのやうな上中中型に對して、イロイロ、トキドキ、ナカナカ、タビタビ、オリオリ、アラアラ、ダンダンなどのやうに下中中型の方が多くなつてゐる。

前に揭げたオノマトペア的副詞のうちには、單獨に用ゐられるほかに、また助詞「と」と接續して、クルクルト、ヒラヒラト、ツルツルト、ゴシゴシトのやうにも用ゐられることがあり、また「して」・「する」などに連つてガタガタスル、ネバネバシテ、アクセクスル、ドギマギシタなどゝいふことが多いのである。この場合には、すべて擡頭的形式がかはらずに保たれる。ところが助詞「に」がついて、ツルツルニ、ネバネバニ、バラバラニ、ヘナヘナニなどゝいふときは、平板式の副詞になる。ツルツルシテイルといひ、一方ではツルツルニナッタといふ。ザラザラスルに對して、ザラザラニナルである。

「一番・一杯・一遍・全體・大勢・澤山・きのふ」などの語は、意味・用法・品詞などによつてアクセントを異にするものである。このうちで、「いちばん・いつぱい・いつぺん」の語は、その意味が數をいひあらはすものであるときは、イチバン、イッパイ、イッペンのやうに起伏式になるが、轉義的に數の意味が輕くなりまたは數には關係のない意味で用ゐられるときは、イチバン（最も）、イッパイ（溢

れるほど)、イッペン(まあとにかく)のやうに平板式になる。

「一番」—《平板式》イチバン長い(比較の最上級)。

イチバン(一番列車)でたつた。

《起伏式》あの男がイチバン(首席)だ。

イチバン(どれひとつ)やつてみよう。

「一杯」—《平板式》イッパイで、こぼれさうだ。

《起伏式》イッパイで、たくさんだ。

イッパイ、くはされた。

「一遍」—《平板式》イッペン(ともかく一度でも)いつてみよう。

《起伏式》イッペン(一回)には、できない。

「たくさん」は名詞として助詞を伴つていふときは起伏式下上上中型で、副詞としてそのまゝつかふときは平板式となる。

「澤山」—《起伏式》だいぶタクサンになつた。—タクサンです。

《平板形》もうタクサン頂戴しました。

「おほせい・きのふ」なども同樣で、名詞としてまたは助詞「は・が・に・へ」などを添へていふときは起伏式となり、オーゼー、キノーのやうな型を示すが、副詞としてそのまゝ用ゐるときは、オーゼー、キノーのやうに平板式になる。

接續詞などについては、種々の型のアクセントがあつて、一概に傾向を豫斷することを許さない。ソコデ、ソレデ、シタガッテ、スルト、ソレカラなどのやうに平板式のもの、シカシ、ソンナラ、ソレデワ、ソレデモ、トコロデなどのやうに起伏式昇降的なものなどもある。しかるに一方には、ダガ、デモ、ダッテ、デスガ、トワイエ、ケレドモ、デスカラ、デスケレド、デワゴザイマショーガ、サモナケレバ、トワユーモノノなどのやうに擡頭的形式を示すものが少くない。會話の中途などには、よく「が」や「で」を接續詞的につかふが、その場合にはかならずこれを話し聲の高さの一般水準よりもずつと高めていふのであつて、それによつて接續の心持を出すのである。これは、この多くの擡頭的形式の存立と默契するところある心理的事態である。

用言すなはち活用ある動詞・形容詞などのアクセントは、その活用といふ語法上の特性に關聯しておのづから特定の形式をあらはすものである。そこで、次にその活用における變化を顧みつゝ、用言のアクセントのあらはれ方を考察しよう。

四七　語の活用におけるアクセント

一般に用言のアクセントを察するに、體言のアクセントとすこぶる著しい對比を示すことを見るのである。語法上用言といふうちにも、活用がなくて助動詞と見なされてゐるものもあるが、こゝにはそれを除外して、活用するところの動詞・形容詞をとつて見る。助動詞はおほむね獨立しては用ゐられない補助語であるから、語の接續におけるアクセントを論じるに當つて說くことにする。

動詞（基本形）のアクセント。

まづ動詞の種々の活用形のうち、普通に文の終止にあたつて用ゐるものを、その基本形と見る。いま動詞の基本形のアクセントに着眼して分けるならば、これは平板式および起伏式の二種にわかれるのである。平板式は、もとより下中、下中中、下中中中などの型をもつものであるが、動詞の起伏式のものもまた一定の型を示すのであつて、すなはち上中、下上中、下上上中などの型のやうに、一般に下上…中型を示すものである。すべての動詞は、この二つの種類のいづれかになつてゐるから、平板式動詞、起伏式動詞といへば、その型がどうなつてゐるかもわかるのである。もつとも二個の單語たる動詞が複合して一つの動詞となつてゐるものゝうちに、時としては、この二樣の型の混合とも見る

べきものがある。これもアクセントの種類からいへば起伏式であるが、起伏式動詞の定型たる下上…中型とは相異なる特別の種類のものである。そこでこゝに區別を立てる必要があるときは、これを混合式動詞と呼ぶことにする。

□平板式動詞の例（下中…型）

（二音節）　スル（爲）　イク（行）　キル（着）

（三音節）　アケル（明）　ネムル（眠）　マワル（廻）

（四音節）　ハタラク（働）　ウカガウ（伺）

（五音節）　メシアガル（召上）　タチドマル（佇）

（六音節）　クリアワセル（繰合）　デキソコナウ（出來損）

□起伏式動詞の例（上中型および下上…中型）

（二音節）　アル（有）　クル（來）　キル（切）

（三音節）　シメル（締）　オキル（起）　ヤスム（休）

（四音節）　ツトメル（勤）　トドケル（屆）

（五音節）　クチバシル（口走）　ヨビトメル（呼止）

（六音節）　メヅラシガル

□混合式動詞の例（下上中…型）

（五音節）　ニヂリヨル　　カヂリツク（またカヂリツクと平板にもいふ）

（六音節）　タタキコワス　　タタキオコス（またタタキオコスとも）

ナグリツケル

すべての動詞は、この三形式のいづれかに屬する。すなはちアクセントの型の種類が、體言のにくらべるとかなり少くなる。たゞし重母音・長母音を語頭に含む少數の語例、カイル（歸）・カイス（かへす）・ハイル（はひる）・マイル（參）・トール（通）・トース（とほす）・モース（申）などは、すこし上述の型と異なる觀がある。しかしその活用なり、助動詞との接續なりにおけるアクセントの有樣を考察すれば、まつたく起伏式動詞の上中型乃至下上中型と同樣であるから、起伏式動詞の變種に外ならず、これに準じるものであることが明かである。

形容詞（基本形）のアクセント。

形容詞の活用形のうち、文の終止にあたつて用ゐられるものをその基本形とする。形容詞の基本形のアクセントを見ると、不思議にもその型がまつたく動詞における平板式および起伏式におけるもの

と合致することが見出される。たゞすこしちがふ點は、形容詞には動詞における混合式のやうなものがないことである。

□平板式形容詞の例（下中…型）

（三音節）アカイ（赤）　カタイ（堅）　クライ（暗）

（四音節）ツメタイ（冷）　アブナイ（危）

（五音節）ホソナガイ（細長）　クスグッタイ

□起伏式形容詞の例（上中型、下上…中型）

（二音節）コイ（濃）　イイ（善）

（三音節）アオイ（青）　ホソイ（細）　クロイ（黒）

（四音節）ミヂカイ（短）　ウレシイ

（五音節）アタラシイ（新）　オモシロイ（面白）

（六音節）カワイラシイ

なほ起伏式形容詞の異型としてオーイ（多）のやうな語もあるが、これは活用などにおけるアクセントの變化から見て全く上中型や下上中型と同種である。むしろオオイの一轉したものと見るべきであ

る（これをオイーイとする方言がある。東京の口語には、「多い」のかはりに「たくさんだ」などゝいふ方が普通である）。エンドーイ（緣遠）のごときも、起伏式中の異型で、實質上は異なるところがない。

助動詞には、その活用が動詞に似てゐるものと、形容詞に似てゐるものと、その他のものとの三とほりある。活用が動詞または形容詞に類するものは、上述の動詞・形容詞の型にはまるのであるが、その職能上單獨にあらはれずに、つねに他の動詞などに連接して一つの複合語ともいふべき一聯を構成するから、そのアクセントは複合語の全體としてある型を示す。そこにあらはれる型は、助動詞の基本形の場合についていへば、やはり下中…型または下上…中型である。この點はなほ次に詳しくのべよう。

用言の種々の活用形において、その基本形のアクセントの式、すなはち平板式および起伏式の特色は保存される傾を示す。すなはち平板式の動詞・形容詞は、その活用形においても、おほむね平板式アクセントを保ち、起伏式の動詞・形容詞は、その活用形においても起伏式アクセントの面目を維持するものである。用言の活用形におけるアクセントは、のちに說くやうに、次に來る助動詞や助詞の種類によつては、それに左右されて式を變へることもある。しかし大體の傾向を察するときは、種々の活用形において、おのづからその基本形のアクセントの式を維持しようとする著しい傾向を有する

ものである。

動詞の活用におけるアクセント。

いま、動詞の活用においてアクセントの型がどう變化するかの關係を見よう。(活用形の順序・名稱はしばらく『口語法』〔文部省國語調査委員會編〕による。)

まづ平板式動詞スル(爲)の活用形を見るに、第一活用形は「せー」、「しー」となつて、「ない、ず」のやうな助動詞と連り、シナイ、セズ(ニ)(またはシズ(ニ))となり、第二活用形「しー」は「たい、て、た」のやうな助動詞・助詞に連つて、シタイ、シテ、シタとなり、第四活用形「すれー」は「ば」といふ助詞に連るために起伏的となつてスレバ、轉じてスリャー(あるひはシリャー)となり、第五活用形はショーの型をとるのである。命令の「しろ」はシロである。

右のうち「ば」に連る場合の型は、「ば」の高さがいづれにしてもその前の音節よりも一段下つてゐるのであつて、「すれば」のやうな語句が、文中の分節肢たる句の句尾を形成する點から見て、これを

sɯ̈ɾ̣èbɑ

のやうに、すなはち「ば」に到つてさがるやうな進行と解することができる。かく解するときは、

平板式はこの場合にも保たれてゐるといへる。多音節の平板式動詞について考へれば、かういふ解し方も是認されるであらう。

「しよう」がショーのやうに起伏式になるのは、起伏式動詞の同じ活用形からの類推とおぼしく、これが場合によつては下中中型の平板式を保つこともあるやうである。とにかくかやうに東京語では、一般に平板式動詞の第五活用形が起伏式動詞のと同じ型になるのであるが、關東方言のうちには、平板式動詞の第五活用形がかならず下中…型で、よく平板式を保ち、起伏式におけるものと判然と區別するものがある。東京語でも「さうしようと思ふ」、「いかうとした」などゝ連るときは、ショート、イコートのやうに平らにいくのであつて、「あらうとあるまいと」、「こようとして」などにおけるアロート、コヨートと明かな對比を示すのである。アクセントの型の照應は、こゝでは一層よく行はれてゐるわけである。

さらに「はたらく」のやうな平板式動詞をとつて見るに、第一活用形は「ない・せる・ず」に連つてハタラカナイ、ハタラカセル、ハタラカズ(ニ)となり、第二活用形は、そのまゝハタラキといふ下中中中型の派生名詞となり、或は助動詞「たい」に連つてハタラキタイとなり、或は「て・た」に連り、轉化してハタライテ、ハタライタとなり、第四活用形が命令に用ゐられるときは、そのまゝハタ

ラケ hata]ra]ke。といひ切つてしまひ、助詞「ば」に連るときはハタラケバ（あるひはハタラケバ）となる。第五活用形はハタラコーである。

　これに對して起伏式動詞の活用形におけるアクセントを見るに、たとへばミルについていへば、第一活用形「みー」は「ない・せる・ず」に連つてミナイ、ミセル、ミズ（ニ）となり、第二活用形「みー」は、「たい」に連つてミタイとなり、「て・た」に連つてミテ、ミタとなり、第四活用形「みれ」は「ば」に連つてミレバとなり、第五活用形はミヨーとなる。また命令のミロは基本形のミルと同型である。すなはち活用形のいづれにも通じて起伏式たる性質を保つてゐるのである。

　さらに「やすむ」の例についてみるなら、第一活用形の「ない・せる・ず」に連つたものは、ヤスマナイ・ヤスマセル・ヤスマズ（ニ）であり、第二活用形のそのまゝ派生名詞となつたものは、ヤスミとなつて下上上型を示し、また助動詞「たい」に連つたものは、ヤスミタイで、「て・た」に連つて轉じたものは、ヤスンデ、ヤスンダであり、第四活用形はそのまゝ命令に用ゐてヤスメといひ切り、または「ば」に連つてヤスメバとなる。「ば」のつく場合にも、平板式動詞に「ば」のついたのとは、おのづから型がちがふ點を注意すべきである。第五活用形は、ヤスモーである。すなはち、活用形の全般を通じて、起伏式たる所以を保持することと前例と同樣である。

動詞の活用においてアクセントの保たれる傾向は、平板式動詞と起伏式動詞との對立を、すこぶる明確にすべての動詞の語彙において顯示してゐるものであつて、一二の例から全般を通じて推察することができるのである。そこで、活用におけるアクセントを次の典型によつて對比して示すことができる。

動詞の活用におけるアクセント (1)

	平板式動詞	起伏式動詞
基本形	ikɯ(行)	kɯḷɯ(來)
第一活用形	ika-{naĭ / dzɯ̈ / sèḷɯ}	ko-{naĭ / dzɯ̈} ko-sasè ḷɯ
	iki-taĭ	kị-taĭ
第二活用形	it-{tè / ta}	kị-{tè * / ta *}
第四活用形	i kè-ba	kɯḷè-ba
（命令）	ikè?	koĭ?
第五活用形	i koo	ko joo

動詞の活用におけるアクセント (2)

	平板式動詞	起伏式動詞
基本形	tomaḷɯ(止)	a ḷɯkɯ(歩)
第一活用形	tomaḷa-{naĭ / dzɯ̈ / sèḷɯ}	a ḷɯka-naĭ a ḷɯka-dzɯ̈ a ḷɯka-sèḷɯ
	tomaḷi-taĭ	a ḷɯkị-taĭ
第二活用形	tomat-{tè / ta}	a ḷɯĭ-{tè / ta}
第四活用形	tomaḷe-ba	a ḷɯkè-ba
（命令）	tomaḷè?	a ḷɯkè?
第五活用形	to maḷo o	a ḷɯko o

語尾〔-ijɯ〕を有する規則動詞（「上一段活用」のもの）および〔-ejɯ〕を有する規則動詞（「下一段活用」のもの）の命令の形は、それ〴〵〔-ijo〕および〔-ejo〕である（『口語法』に說く「よ」のついた形は東京語で實際にはつかはない）。そのアクセントは、みな基本形と同じである。

第五活用形において平板式動詞も起伏式動詞の型と同じやうになり、したがつてカウ（買）から出たカオー（買はう）も、カウ（飼）から出たカオー（飼はう）も區別ができない。たゞし、次のやうな場合に平板式が保たれることが東京語でも行はれるやうである。

し（爲）よう（ショー）とおもふ。

のせ（載）よう（ノセョー）とした。

あた（當）らう（アタロー）はずがない。

前に述べた關東方言のあるものでは、カオー（買はう）とカオー（飼はう）とを判然と區別するから、混同をおこさない。

語尾に〔-ɯ〕または〔-ɯ̈〕を有する規則動詞（〔-ijɯ〕および〔-ejɯ〕を有するものを除く）、すなはち「五段活用」の動詞の第一活用に、〔-ɾejɯ〕がついて受身や可能をあらはすが、これがさらに一轉して語尾〔-ejɯ〕を有する動詞となつたものは、一般にもとの動詞のアクセントの式を與へられ

る。たとへば、オス(押)。ユー(イウ、云)から出たオセル、イエルは平板式であり、カツ(勝)。ヨムから出たカテル、ヨメルは起伏式である。なほ數例——

あすは、うかゞへる(ウカガエル)と　おひます。

あれは、なか〳〵はたらける(ハタラケル)をとこだ。

だいぶ、てがはぶける(ハブケル)。

もうあるける(アルケル)やうになつた。

いつたてる(タテル)かわからない。

この種の造語上の手續から生じて來たと思はれるミエル(またはメール)、キコエルなどゝ、ミル(見)、キク(聞)などとの間にもアクセントの式の照應がある。また

アク(明)——アケル

ムク(向)——ムカウ——ムケル

トブ(飛)——トバス

アレル(荒)——アラス

アガル(擧)——アゲル

アタル(當)——アテル

などにおける平板式アクセントの照應や、

トドク(屆)——トドケル
イタム(痛)——イタメル
ハゲム(勵)——ハゲマス
ナヤム(惱)——ナヤマス
サガル(下)——サゲル
オチル(落)——オトス

などにおける起伏式アクセントの照應のやうな現象は、[7] 極めて少數の例外を除いて、ひろく國語において行はれてゐる事がらであつて、これが動詞の諸種の活用形におけるアクセントの照應と相默契するところの事實であることは、想像しがたくないのである。

形容詞の活用におけるアクセント。

形容詞における平板式および起伏式の區別も、その活用形においておほむね保持される。すなはち例へば平板式形容詞アカイ(赤)は、アカクの場合にもとのとほり平板式である。「ば」といふ助詞に連

るアカケレバの場合には一種の起伏をするが、その型は起伏式形容詞のこの活用形におけるものと異なつてゐる。これに對して起伏式形容詞コイ（濃）・シロイ（白）・オモシロイなどは、それ〳〵コク、シロク、オモシロクとなつて、あるひはもとの型を保ち、あるひは型をかへてしかも式をかへず、依然として起伏式の面目を留めてゐる。そして「ば」に連るコケレバ、シロケレバ、オモシロケレバにおいて、平板式形容詞と異なる別種の起伏式の型をとつてゐる。そこで、活用におけるアクセントの型の保存および變化の模樣を次のやうな範式を以て表示することができる。

	平板式形容詞	起伏式形容詞
基本形	下中…（└─…）	上中（┐─）、下上…中（└┐…─）
「く」の活用形	下中…（└─…）	上中（┐─）、上中中（┐──）、下上…中中（└┐…──）
「けれ」の活用形	下上…中中（└┐…──）	上中中（┐──）、上中中中（┐───）、下上…中中中（└┐…───）

すなはち一般に平板式形容詞は「く」の活用形において平板式のもとの型を保ち、「けれ」の活用形において└┐…──のやうに起伏し、ケレの二音節だけが中の高さになつて「ば」に平らに連る。これに對して起伏式形容詞は、常に起伏式たる特質を失はないのであつて、二音節の場合には、もと

上中型で、「く」の活用形でも基本形と同じ上中型をとり，「けれ」の活用形では上中中で平らに「ば」に連る。三音節の場合には、基本形は下上中型で、「く」の活用形のとき式は同じであるが型がかはつて上中中型となり、その勢を以て「けれ」の活用形でも上中中中で平らに「ば」に連る。その他多音節の起伏式形容詞は、一般にその基本形では下上…中型で、「く」の活用形において下上…中中型となり「けれ」の活用形において下上…中中中で平らに「ば」に連るものである。

「く」の活用形の語尾クが「音便」でカルー(輕)のやうに〔ɯ〕となり、さらに〔a-ɯ〕または〔o-ɯ〕の連音における同化によつて〔oː〕となること、アコー(赤)。アオー(青)のやうな場合にも。この活用形のアクセントが保たれる。このアコー、アオーのやうな形は、東京語では、「ございます」または「ぞんじます」に連る場合にのみつかはれるものである。次の例を比較せよ。

クロー(暗)　クラク
クロー(黒)　クロク
ツメトー(冷)　ツメタク
キタノー(穢)　キタナク

「く」の活用形に過去の意味を示す「あつた」が連つて「…かつた」となるときは、平板式形容詞は

次のやうに式をかへる。起伏式形容詞は、この際にも、やはり「く」の活用形の高低關係を保つのである。

(平)アカク(赤)——アカカッタ
　　ツメタク(冷)——ツメタカッタ
　　クスグッタク——クスグッタカッタ
(起)アオク(青)——アオカッタ
　　アッタカク(暖)——アッタカカッタ
　　オモシロク(面白)——オモシロカッタ

註(1)『國語のアクセント』(前出)六四—六五頁。
(2)この點についての最初の記述は、著者の「アクセントの型と品詞」(大正七年三月十九日提案、アクセント案第十號、文部省國語調査室)および「國語のアクセントに關する調査」(大正七年七月、文部省國語調査室)である。
(3)地方には「きく・ふく」などをも無聲化せずにキク・フクなどといふところもある。
(4)これをホリ・ツジ・モリといふ人もあるが、東京風のアクセントとは認めがたい。
(5)第一章第三節「音聲の心理」參照。
(6)第十七章第五三節參照。
(7)佐久間鼎『國語の發音とアクセント』(前出)二一六頁になほ多くの例をのせてある。

第十六章　語の連接におけるアクセント

四八　複合語のアクセント

思想表白の一段落たる語句のつながりにおいて、おのづからの分節があり、單語と目すべき若干音節の集團を檢出することは、おほむね困難でなく、いづれの連音節を一語とすべきかは、まづ習慣的に定まつてゐる。しかも仔細にその語義の自足的および非自足的限定の程度や語法的位置などを考慮するとき、いづれの程度を以てはたして一語とし、どこに語のくぎりがあるかを判定することは、往往すこぶる困難である。これを論定するのは語形論の一つの課題であるが、實際にこれを究竟的に決するのは、もと不可能の事に屬する觀がある。

この際語義をはなれて一種の「音聲學的單語」を考へることは、また便益がないとはいへない。しかし、言語を取扱ふにあたつて、全くその意義内容を顧慮することなく、音聲的方面だけを切離して來るといふことは、またむしろ不可能でもり、かつ無意味である。いはゆる音聲學的單語も、任意の數の音節の集合ではない。語音の連續における含蓄ある分節肢、概念表現の一單位を求め定めるにあた

つて、その音聲的條件を顧みることによつて得られるものに外ならない。これを國語の場合について見れば、その音聲的條件のうちには、長さの關係や强さの關係が參與するのがもとよりの事であつて、これを考慮外に放置すべきではない。しかし、高さの關係によつて成形されるアクセントの統一力の著しいあらはれに比較するときは、むしろ不問に附しても可である。

語の連接において、いづれを主副の統制關係によつて結ばれた一語とし、いづれを單に語の並列として連ねられた連語とすべきかは、しば〳〵判定しがたいのである。ところが、その際におけるアクセントの變化と否とが異なる程度であらはれ、それが語の連接の緊密の度合と比例するやうな趣を示すのである。その緊密の度合をもつて、語の連接が融合の程度に進んでつひに二語を合して一語とする複合語生成の事に及ぶか、またはたゞ二語を連ねて連語とするのみであるかの目安ともすることができるやうに思はれる。これがどの點まで語法的見地からする語の區分と合致するかは、まだ問題であるが、こゝに少くとも「音聲學的單語」を定める準度をおくことができる。體言における複合語と連語との別は、語法的見地からも一見明瞭である。用言においてこの別を立てることは、語法上なほ不分明の點が多々あるを免れない。音聲的見地からの考察は、この點に對してかならず何等かの示唆を與へるものがあらう。

二つの語が結合してつひに一つの複合語を成すには、その意味の上の統一が成立つとゝもに、その發音の上にも緊密な統合が行はれる。いはゆる「連濁」すなはち語音の同化のやうな事象もその一つであるが、これを複合語の特有の徴表とするわけにはいかない。そのアクセント形式における一體的成形こそ、顯著な、かつ重要な徴表であることを認めなくてはならない。すなはち語の複合に際してはその肢節たるもとの單語のアクセントは改められて、ある一つの型に統一されるのである。實にその統一の要求のために、もとの單語のアクセントの型の改造變革は、それぞれの程度で必要となるのである。その必要に應じて改造が行はれるが、しかしその必要以上にこれを變化することはしないのである。したがつて、もとの單語のアクセントの俤を、それぞれの程度において複合語のうちについても見出すことができる。そこに暗默のうちに、アクセントの維持保存の意圖がはたらいてゐるかの趣を示すことは、すこぶる興味ある事柄である。複合語においては、一つの型を形成する必要上、もとの單語の型を變化することは多くの場合當然であるが、平板式・起伏式の種別・特性はすこぶるよく保存される。つぎに少しくこれを例證しよう。

およそ東京語の四音節以下の語について見ると、平板式下中……型のアクセントが優勢を占めてゐるのは、著しい事實である。もとより品詞などの種別によつて型の分布は一樣ではないが、大體から

見てさういふことができる。複合によつて出來たものにも、四音節以下のものには平板の型のものが多く、次第に音節の數を增すに從つて漸く起伏式昇降的アクセントが多きを占めて來る。そして、その昇降的アクセントを示す語が、ほとんど皆複合語であるといふことは、複合語のアクセントの考察において、まづ注目すべき事柄でなくてはならない。一般に昇降的アクセント（∟┐……|…）が名詞その他の複合語に頻出するといふ一事を顧みるならば、これを複合語に適順したアクセントの形式であると見て差支ないであらう。

以下主として名詞の例について複合語のアクセントを見るが、間々他の品詞についても闡說するであらう。もつとも用言の場合については、助動詞の連接の場合に說くことにする。

さて、語の複合におけるアクセントの改造は、最もしばしば複合語の第一音節を低く始めようとする一般的傾向によつて促される。單音節語に下型および上型の二種があるが、これが他の單語と連結して一つの複合語を構成するとき、その多くの場合について見れば、先部を構成するものがもと下型であつたか、或は上型であつたかに頓着なく、皆下の高さまで低められるのが普通である。すなはち上型の單音節語コ|(粉)・タ|(田)・ヒ|(火)・メ|(眼)・ハ|(齒)がコグ|スリ(粉藥)・|タウエ|(田植)・|ヒモト|(火元)・|ヒケシ|(火消)・|ヒノシ|(火熨斗)・|メアキ|(目明)・|メモト|(眼許)・|ハミ|ガキ(齒磨)のやうな複

合語において、下の高さまで低められてゐる。が、時にはこのもと上型の語が、複合語の先部を構成しながら、なほ上位の高さを保つ場合も少からず見出される。もとよりこれは多音節の複合語では見ることが難いが、二音節・三音節のものにはかなりの數の例が存する。すなはち

コズミ（粉炭）
タハタ（田畑）（またタハタ）　タニシ（田螺）
ヒバチ×（火鉢）　ヒバシ×（火箸）　ヒノコ（火粉）
メガネ×（眼鏡）　メイシャ（眼醫者）　メツキ△（眼附）
ハグキ（齒齦）　ハイシャ（齒醫者）　ハシオ（齒石）

×平板の型でいふ人もある。

などでは上の高さが保たれて、複合語はいづれも上中……型の擡頭的形式を示すのである。

これは一例に過ぎない。この種の例は求めるに從つてもつと見出されるであらう。いつたい東京語で三音節語の上中中型は、前にいふやうに比較的少く、かつこれを支持することが困難であるのに、前例のやうな關係のたどられる複合語には、この型のかなりの數を見出すことが出來るのである。

三音節の複合語について擡頭的形式を示すものを見るに、も一つもとの單語のアクセントの型を導

き入れてゐるものがある。それは二音節語上中型の語と單音節語との複合語である。これは例が少くてむしろ特例に屬する。つぎに、二音節語下上型の語と單音節語との複合したものでその先部にもとの下上の高さを保つものがある。これを實例について見ると、次のやうである。

□上中中型複合語の例

（一）上型單音節語と二音節語との複合

エジキ（餌食）	オヒレ（尾鰭）
ヨナキ（夜泣）	
ユセン（湯錢）（「湯煎」の方はユセン）	
ニモツ（荷物）	ノハラ（野原）
キザラ（木皿）	キグチ（木口）
キバチ（木鉢）	テアテ（手當）
テダシ（手出）	テハズ（手筈）
テジナ（手品）	テジュン（手順）
テカズ（手數）	テクビ（手首）

テナミ(手並)（またテナミとも）　テツキ(手附)

テマメ　テヅル（またテヅルとも）

(二)上中型二音節語と單音節語との複合

オクバ(奥齒)　マイゲ(眉毛)

テンピ(天日)

ロ下上中型複合語の例（先部に下上型を保存するもの）

ツキヒ(月日)　シオユ(鹽湯)

ヤミヨ(闇夜)　カワド(革砥)

クサキ(草木)　ユミヤ(弓矢)

スミビ(炭火)

以上の例は、いづれも起伏式のものであつて、もとの單語のアクセントの型が、そのまゝ複合語の先部に導き入れられてゐる。平板式のものについては、さういふ型の保存が、少音節語について見ると起伏式におけるよりも一層ひろく行はれてゐる。平板式アクセントに比較すると、もとの單語の起伏式アクセントが型をかへずにそのまゝ複合語の先部になつてゐる場合は、むしろ少數であつて、も

との上中型の語が下上の高低關係に型をかへて複合語の先部をなすやうな仕方の方が普通である。たとへばアサ（朝）が複合語において擡頭的形式を保つのは、アサバン（朝晩、またアサバンとも）などの一二例にすぎず、他はみなアサヒ（朝日）・アサネ（朝寝）・アサユ（朝湯）・アサオキ（朝起）・アサガオ（朝顔）・アサボラケなどのやうに型をかへる。この場合には依然として起伏式であるから、型はかはるが式は保たれるのである。なほ式もかはつて平板式になつたものにアサメシ（朝飯）・アサナギ（朝凪）などの少數の例がある。

三音節の起伏式複合語について見れば、下上中型が上中中型よりも安定であり、また實際多くの語例をもつてゐる。もと下上型の單語を先部にもつ場合には、もとの型がそのまゝ保存されるといへるが、これはたま〳〵複合語として安定なこの型に合致する結果に外ならないと見るべきである。かく語の複合によつて、多くはもとの單語のアクセントの型がかはるものである。これを「型がはり」といはう。さらに場合によつては、もとの起伏式のものが、複合語において全體としての平板式なものに融解するやうな場合、すなはち型だけでなくその式もかはる場合がある。これを「式がはり」と呼ばう。これはいづれもアクセント形式のかはるといふ方から見て名づけたのであるが、もとのアクセントがかはらずに保たれ、複合語の形式においてもその一部に本來のおもかげが殘つてゐるといふ見

方からすれば、アクセントの保存といふことも考へられる。その際、もとのアクセントの型がそのまま保存されることもあり、また型はかはるが式が保存されることもあること、前例について見れば明かである。前の場合は、「型保存」と名づけて、後の場合の「式保存」と區別する。この概念を以て前に述べたことをいひかへるならば、複合語における起伏式アクセントの保存（たゞしこゝには複合語の先部についていふ）は、型保存よりも式保存を常態とするといふことが出來る。

上型單音節語と二音節語との複合について、型保存の例を示したが、かういふ複合語に型保存でなくて式保存のあらはれる場合も多い。この際複合語の先部は下の高さに低められるから、いきほひ後部において上の高さをあらはすのである。たとへばエカキ（畫家）・メウチ（目打）・メクラ（盲）・テマリ（手毬）・テワケ（手分）・ジビキ（字引）・ネワケ（根分）・ノワキ（野分）・ミモノ（見物）・ユノミ（湯呑）・ユドノ（湯殿）などがその數例である。

語の複合に際しての先部における式がはりも、もとより生じるのであつて、たとへはオヤ（親）の起伏式が、オヤイヌ・オヤネコ・オヤユビ（オヤイビ）・オヤドリなどの複合語で平板化するやうなことが時としては見られる。またオヤコ（親子）などのやうに、もとのと型がかはつて、かへつて擡頭的になつてゐる例も稀にある（もつともこれはオヤコともいふのである）。かういふ例もあることはある

が、大體から見て、もとの單語の平板式および起伏式が、複合語の式と相照應するといふ全般的傾向は見のがすべきではない。この點については、のちにアクセントの保存を說くにあたつて詳しく述べよう。

三音節語が複合語の先部に來て、四音節乃至五音節の複合語をつくるときは、一方には平板式の保存を示すこと、たとへばクルマ（車）―クルマザ（車座）、コドモ（子供）―コドモヅレ（子供連）、タタミ（疊）―タタミザン（疊算）、ミナミ（南）―ミナミムキ（南向）、トナリ（隣）―トナリムラ（隣村）、サカリ（盛）―サカリバ（盛場）、ハシゴ（梯子）―ハシゴノリ（梯子乘）のやうな場合が少くない。しかし、他の一方には、複合語をつくるために式がはりして起伏式となることもすこぶる多くなる。たとへばアブラ（油）からアブラエ（油繪）。アブラナ（油菜）。アブラミ（脂身）。トンボ（蜻蛉）からトンボツリ、ボーシ（帽子）からボーシカケ。サクラ（櫻）からサクラモチ（櫻餅）。ドビン（土瓶）からドビンシキ、ヒダリ（左）からヒダリキキ（左利）、クスリ（藥）からクスリユビができるなどである。もとより起伏式のものは、複合の際にも式保存をする傾向がつよくあらはれるので、五音節語などでは、昇降的形式、特に下上上中中型などが多くあらはれるやうになるのである。

かういふ傾向は、多音節語になるにつれて、いよ／＼著しくなり、ために昇降的形式がます／＼そ

の語數において優勢になる。勿論複合語の後部を構成するものゝ影響も加はつて、昇降的形式を優勢にするにあづかるのであるが、とにかく多音節語における接頭的形式の衰滅や、少音節語においてはすこぶる優勢な平板式さへもこゝには次第に數を減じていくことなどは、つまり複合語のアクセントとして昇降的形式がよほど適合するといふ理由にもとづくのである。

三音節語が名詞の複合語の先部となるときは、その高さの進行は起伏的な下上上かまたは平板的な下中中かの二樣であつて、下上中のやうになることは（長母音・重母音などのためにさうなるものを除けば）きはめて稀である。動詞の複合においても時として下上中の進行を示すことがあるのは、前にのべた混合式動詞の場合で、これも特例に屬する。

複合語の後部を構成する造語節のもとのアクセントは、複合語そのものゝアクセントとどういふ關係をもつか。いま、まづ後部を構成する一乃至二音節の造語節がもと平板式の單語であつた場合を見るに、一般に先部からの起伏傾向の波及がない限り、中または中中の高さで進行するのが通則である。複合語の後部では、平板式二音節語の下中の進行はそのまゝ保つことができないので、その式を保つ中中のやうな平進的進行をするわけである。

後部がもしもと上中型の單語であつたものならば、複合語においても型保存が可能である。事實上

この種の型保存は、次に示すやうにかなり行はれてゐるのである。またもし下上型の單語であつたものならば、もとの型を保ち得ないこと明かであるが、その式を保つて複合語を下上…型のものにすることが可能である。事實上かういふ例も少數ではあるが見出される。

後部におけるアクセントの型保存は、上中型二音節語について次のやうな語例を見出すのである。この際には、後部が複合語全體のアクセントを制約するのであつて、たとひ先部がもと平板式の語であつても、その式をかへて下上…の進行を營ましめ、これに上中の進行を以て癒着し、以て下上…中型の複合語を形成するものである。

□後部における上中型の型保存の例

エダコ(繪凧)　コネコ(子猫)　スミソ(酢味噌)
ナキゴエ(泣聲)　ナガアメ(長雨)
ミヅガシ(水菓子)　ヒヤアセ(冷汗)
マメカス(豆粕)　シオジャケ(鹽鮭)
ヒキマド(引窓)　オームギ(大麥)(またオームギとも)
アマガサ(雨傘)　スギバシ(杉箸)

ハナムコ(花婿)
トタンヤネ(―屋根)
ヤカタブネ(屋形船)
サカサフジ(倒富士)
ヤクモゴト(八雲琴)
マツバヅエ(松葉杖)
ホリヌキイド(堀抜井戸)
ゴシンルイスヂ(御親類筋)

ソトウミ(外海)
ダイリビナ(内裏雛)
サツマジル(薩摩汁)
ミツメギリ(三目錐)
ヒッコシソバ(引越蕎麥)
カクベジシ(角兵衛獅子)
ゲンゴロブナ(源五郎鮒)

多音節語における下上…中型のアクセントを示すものは、おもにこの種の複合語なのである。かういふやうな上中型の保存は、後部においてのアクセント保存のうちのきはめて著しい例である。もつとも上中型がいつも後部において保存されるといふ次第ではない。平板化を見るやうな例もある。

後部における下上型の單語たる造語節は、大體上平板化されるものが多いが、時として先部に起伏的傾向をもつ造語節の來たとき、それの影響をうけて上上の進行をあらはすことがある。またもと平板式の先部をうけて起伏的複合語を造る場合もないではない。かやうにして出來た下上…型の名詞に

は、後部に動詞からの派生語をもつものがすこぶる多いのは注意すべき點である。

□後部における起伏式の式保存の例

ユアカ（湯垢）　　メヤニ（眼脂）
アシオト（足音）　　エリモト（襟元）
チカラコブ（力瘤）

「あしあと」、「ゑりもと」はまたアシオト、エリモトともいはれる。

ヒケシ（火消）　　ヒノシ（火伸し）
ユノミ（湯呑）　　モノサシ（物差）
ムシボシ（虫干）　　ケムダシ（煙出）
キバラシ（氣晴）　　ココロモチ（心持）

右の例のうちヒケシ以下は、後部に動詞からの派生語をもつものである。（これらの下上…型をすべて下上…中型に發音する傾向のある人もあることは、前に述べたとほりで、さういふ習慣の人は、ヒケシ、ムシボシ、ケムダシなどゝするのである）。

つぎに複合語の後部を構成するものが三音節である場合には、アクセントの改造が今まで述べたものと少し趣を異にする。すなはちもと上中中型のもの丶外は、多くはもとのアクセントを棄てゝ上中中の進行を營むものである。したがつて、もと平板式下中中型のものを起伏化することも多く、かつもと起伏式下上上型のものをも型をかへて上中中の進行を營ませる。たゞ下上中型の語が後部に來るとき、時として上上中の進行を營んで、部分的にその型を保つことがある。

□後部に上中中の高さを示す複合語の例

（一）もと下中中型のもの

ユワカシ（湯沸）
メグスリ（眼藥）
アカガエル（赤蛙）
ウラバシゴ（裏梯子）
ツボスミレ（壺菫）
ヒナマツリ（雛祭）
ハツカネズミ（廿日鼠）

ハザクラ（葉櫻）
ニグルマ　荷車）
ホシアカリ（星明）
ユキダルマ（雪達摩）
ハナズモー（花相撲）
ナワノレン（繩暖簾）
ハシラドケー（柱時計）

ナベヤキウドン（鍋燒饂飩）

（二）もと上中中型のもの（型保存）

ハマチドリ（濱千鳥）
ハナメガネ（鼻眼鏡）
ヤサスガタ（優姿）
ハシブトガラス（嘴太烏）
ヒルトンビ（晝鳶）
ナツミカン（夏密柑）
ゲンジボタル（源氏螢）

（三）もと下上上型のもの

オクザシキ（奥座敷）（オクザシキともいふ）
スミダワラ（炭俵）
ハナバサミ（花鋏）
アワセカガミ（合せ鏡）
カチイクサ（勝戰）
カミヅツミ（紙包）
ムカシバナシ（昔話）
アンドンバカマ（行燈袴）

□後部に上上中の高さを示す複合語の例

アワオコシ（粟―）
イタズラコゾー（徒小僧）
オコソヅキン（御高僧頭巾）

複合語の後部においては、促音を含む二音節語は、三音節語と同様な關係を示すものであつて、カッパ（合羽）・キップ（切符）・ケット（毛布）・コップ・ラッパなどが後部にある複合語を見ると、それぐ＼起伏化してアマガッパ（雨合羽）・アカゲット（赤毛布）・ノリカイギップ（乗替切符）・ミヅノミコップ（水呑ー）・キショーラッパ（起床ー）などのやうになる。

四音節語についても、ほゞ同樣である。すなはち、**先部**でアサクサノリ（淺草海苔）・モノホシザオ（物干竿）・マツカワビシ（松川菱）のやうに**下上**…の進行を示す起伏的のものもあり、イマガワヤキ（今川燒）・シャチホコダチ（鯱立）・ノコギリソー（鋸草）のやうに**下中**…の進行を示す平板的のものもあること三音節の場合と同樣であり、**後部**でもイロエンピツ（色鉛筆）・ナカバタラキ（仲働）・トーモロコシ（玉蜀黍）・ハカタニンギョー（博多人形）のやうに**上中**…の進行をあらはすものが多數を占めることも三音節の場合と同樣である。さらにもと**下上中中**型の語が後部を構成するとき、部分的型保存を見ることがあるのも同樣である。たとへば、ヤキハマグリ（燒蛤）・イマナリヒラ（今業平）・ウスムラサキ（薄紫）などがその例である。また**下上上中**型の語であるオトトイが後部を構成するサキオトトイにあつても、やはり部分的型保存を見るのである。

かくて、多音節の複合語ムギワラザイク（麥藁細工）・カイガンドーリ（海岸通）・テーコクダイガク

（帝國大學）・オンセーガクキョーカイ（音聲學協會）のやうなものも、一つのアクセント小節をつくりアクセントの一形式を以て統轄されるのであり、その音節はすこぶる多くとも、その型はやはり複合語のアクセントとして理解されるものである。

複合的名詞のうち、名詞または動詞の第二活用形に「もの・かた」のついて出來たものや、動詞の第二活用形に「て」がついて「何々する人」の意味を示すもの、同じ活用形に「さう（ソー）」・「やう（ヨー）」がついて様相・仕方などをいひあらはすものにおいては、複合語の先部にあたるもの〻本來のアクセントを保存する傾向が著明に見出されること、のちに說くところである。[1] この場合に、複合語の後部を構成する「もの・かた・て・さう・やう」は、いづれも同樣に接尾語と見なすべきものである。もとより「もの・かた」は獨立した名詞としても用ゐられるのであるが、語構成の機能といふ點から見て、他の接尾語と同等に取扱ひ得るものであらう。

かやうに接尾語が、先部を構成する語のアクセントによつて規定されるやうな關係をもつとき、接尾語は被制約的・所規的であるといはれる。ところが、複合的名詞をつくる接尾語のうちにも、かならずしもかういふものばかりあるとは限らない。名詞につく接尾語のうち、人の複數なのをいふに用ゐるものには、名詞についてすべてを平板式複合語にするやうな接尾語「れん（連）」のやうなものが

ある。この場合は、接尾語が全體のアクセントの型を定めるものと見做すべきであるから、アクセントについて接尾語が制約的であり、能規的であるといふ。

接尾語「れん」(連)がついて出來た平板式複合語

オトコレン(オトコ(男)+「れん」)　オンナレン(オンナ(女)+「れん」)

コゾーレン(コゾー(小僧)+「れん」)　シンシレン(シンシ(紳士)+「れん」)

もと平板式なショセー(書生)・テング(天狗)などから出來た「書生連・天狗連」などは、もとより平板式である。さらに一方には、同種の接尾語のうち、「がた」(方)のやうに、おほむね平板式複合語をつくるが、もと平板な名詞に連つてかへつて起伏式のものをつくるものがある。

接尾語「がた」のついた複合語

(一)平板化の例

ダイジンガタ(ダイジン(大臣)+「がた」、たゞしダイジンガタともいはれる)

アナタガタ(アナタ(貴方)+「がた」)　センセーガタ(センセー(先生)+「がた」)

(二)平板式保存の型

ゴフジンガタ(ゴフジン(御婦人)+「がた」)　ミヤサマガタ(ミヤサマ(宮様)+「がた」)

(三)起伏化の例

オマイガタ(オマイ(お前)+「がた」)　　キミガタ(キミ(君)+「がた」)

また同種の接尾語「たち・ら」は、一段下つて名詞に接續するので、これを複合語として見るときはそのアクセントはすべて起伏式になること次のやうである。「ども」もこれに似て少し型がちがふ。

接尾語「たち」の接續（下上……+(中中)）

コドモタチ(子供達)　　ワタシタチ(私達)
アノヒトタチ(彼人達)　　オマイタチ(お前達)
ジブンタチ(自分達)　　オコサンタチ(お子樣達)

×普通オマイタチ、ジブンタチ、オコサンタチとなる。重母音的の場合にさうなるのである。

接尾語「ら」の接續（下上……+(中)）

コドモラ(子供等)　　ワタシラ(私等)
アスコラ(彼處ら)　　ココイラ(此處ら)
ジブンラ(自分等)　　オマイラ(お前等)

×前と同樣にジブンラ、オマイラが普通である。

※ヤツラ(奴等)、キャツラ(彼奴等)は例外。

接尾語「ども」の接續（下上……＋(上中)）

ワタシドモ(私共)　テマイドモ(手前共)

ヤクニンドモ(役人共)　オトコドモ(男共)

※オヤドモ(親共)、ケライドモ(家來共)などの例外も少しある。

形容詞の語根に接尾語「さ・げ・み」がつき　また種々の品詞に「け」がついて名詞が出來るときは、形容詞その他のもとの單語のアクセントが、出來た語のアクセントを規定する。すなはち接尾語から見ると、被制約的である。平板式形容詞などからは平板式名詞ができ、起伏式形容詞または名詞からはやはり起伏式の上中……型、上上……中(中)型、または下上……型が合成される。たゞし「さ」のつく場合には例外がある。

接尾語「さ・げ・み・け」の接續

(平板式)アマサ、アマミ(アマイ、甘)　マルミ(マルイ、丸)

アラサ(アライ、粗)　カタサ(カタイ、堅)

ツラサ(ツライ)　オモサ、オモミ(オモイ、重)

アッサ、アツミ（アツイ、厚）　アブナゲ（アブナイ、危）（またアブナゲとも）
オトナゲ（オトナ）（またオトナゲとも）　ネムケ（ネムイ、眠）
カゼケ（カゼ、風）

（起伏式）イタサ、イタミ（イタイ、痛）　オシサ、オシゲ（オシイ、惜）
カワイサ、カワイゲ（カワイイ、可愛）　アタラシサ、アタラシミ（アタラシイ　新）
サムサ、サムケ（サムイ、寒）　ニクサ、ニクゲ（ニクイ、憎）
ネツケ（ネツ、熱）　シオケ（シオ、鹽）
クイケ（クウ、食）　イロケ（イロ、色）
オンナッケ（オンナ、女）

※「長さ・太さ・廣さ・强さ・高さ・深さ」などの語は、「長いこと」などの意味では起伏式にいふのが普通である。「あの人の氣の長さと來たら」などの場合はナガサである。ところが、「長い度合、尺度」などの意味では、おほむね平板式になる。「長さが一尺二寸に幅が六寸」などの場合にはナガサとなることが多い。

接尾語のうちには、他の語に接續して用言をつくるものもあるが、かういふ種類のものは、おほむ

ね制約的であつて、多くは起伏式の動詞・形容詞を形成する。たゞし、中には被制約的のものもあつて先部を構成する語のもとのアクセントに從ふ。「ぶる・がる・めく・めかす・じみる・くさい・らしい・がましい」は、名詞などに接續して、すべて起伏式の動詞・形容詞を組立てるものである。また「つく」といふ接尾語はつねに平板式動詞をつくる。

用言をつくる制約語接尾語

(一)起伏式にするもの

ぶる——モッタイブル(勿體)　オトナブル(オトナ)

イキブル(イキ、粋)　サイシブル(サイシ、才子)

がる——ネムタガル(ネムタイ、眠)　アブナガル(アブナイ、危)

イタガル(イタイ、痛)　イヤガル(イヤ、厭)

クヤシガル(クヤシイ、口惜)　ウレシガル、オモシロガル

めく——ハルメク(ハル、春)　コドモメク(コドモ、子供)

イナカメイタ(イナカ、田舎)

めかす——シンシメカス(シンシ、紳士)　ツージンメカス(ツージン、通人)

じみる——ヒャクショージミル(ヒャクショー、百姓)
　　　イナカジミル、コドモジミタ

くさい——ミヅクサイ(ミヅ、水)　イナカクサイ、シャラクサイ

らしい——ホントラシイ(ホント、本統)　タシカラシイ(タシカ、確)
　　　コドモラシイ

がましい——カッテガマシイ(カッテ、勝手)　タニンガマシイ(タニン、他人)

×關東方言には「がる」を被制約的にするものがある。ネムタガル、アブナガルを平板式にイヤガル、ウレシガルを起伏式にするものである。「がましい」をもこれと同様にするものがある。

(二)平板式にするもの

つく——ゴタツク(ゴタゴタスル)　コセツク、マゴツク、
　　　ビクツク、ニコツク

用言(形容詞)をつくる被制約的接尾語

っぽい(平板式)コドモッポイ(コドモ)　ミヅッポイ(ミヅ)

アラッポイ(アライ)　ツヤッポイ(ツヤ)
シメッポイ(シメル、濕)　ワスレッポイ(ワスレル、忘)
(起伏式)ヤスッポイ(ヤスイ、安)　シロッポイ(シロイ、白)
クロッポイ(クロイ、黒)　アワレッポイ(アワレ、憐)
イロッポイ(イロ、色)　ホネッポイ(ホネ、骨)
アキッポイ(アキル、飽)

※東京では起伏式にもいはれる。關東方言では區別がはつきりしてゐる。

っこい(平板式)マルッコイ(マルイ)　アブラッコイ(アブラ)
(起伏式)ヒヤッコイ(ヒヤッカイ)　ヤニッコイ(ヤニ、脂)
ナツッコイ(ナツク)　スベッコイ(スベル、スベスベ)
マダルッコイ(マ、ダルイ)

▽アブラコイともいふのは、「こい」を「濃い」の意味と思ふためか、または起伏式の多くの例に類化されたゝめであらう。同様に「まるつこい」もマルッコイともいはれる。

接尾語のついてできた語と、その後部を構成する語のもとのアクセントとの間の關係は、かならず

しも一様でない。「お」についてはアクセントの保存と變化とのすべての場合があらはれるが、「ご」(御)についてはアクセント保存の傾向が顕著である。この場合には、もとのアクセントの型は、語の構成に要する最小限度の變化を蒙るのみであつて、式保存以上にその型の大部分が保存されるのであるから、むしろ型保存の一變態といつてもいゝであらう。

接頭語「お」の接續

(一)平板化の例(もと起伏式のもの)

オヒ(ヒ、火)
オス(ス、酢)
オユ(ユ、湯)
オハシ(ハシ、箸)(またハシとも)
オヤド(ヤド、宿)
オコエ(コエ、聲)
オハチ(ハチ、鉢)
オテラ(テラ、寺)

オメ(メ、眼)
オテ(テ、手)
オハナ(ハナ、花)
オハリ(ハリ、針。裁縫の義)
オフネ(フネ、舟)
オサル(サル、猿)
オトシ(トシ、年)
オイモ(イモ、芋)

オナベ（ナベ、鍋）
オコメ（コメ、米）
オミミ（ミミ、耳）
オモリ（モリ、守）
オザシキ　ザシキ、座敷）
オナカマ（ナカマ、仲間）
オワカレ（ワカレ、別）

（二）平板式保存の例

オハ（ハ、葉、菜の義）
オナ（ナ、名）
オハナ（ハナ、鼻、鼻汁）
オサラ（サラ、皿）
オボン（ボン、盆）
オカマ（カマ、釜）

オホリ（ホリ、堀）
オハカ（ハカ、墓）
オナカ（ナカ、腹の義）
オテホン（テホン、手本）
オハナシ（ハナシ、話）
オルスイ（ルスイ、留守居）
オキノドク（キノドク、氣の毒）

オコ（コ、子）
オチャ（チャ、茶）
オクチ（クチ、口）
オゼン（ゼン、膳）
オワン（ワン、椀）
オサイ（サイ、菜）（ガサイともいふ）

オシナ（シナ、品）
オキュー（キュー、灸）
オカオ（カオ、顔）
オレー（レー、返禮）
オモチ（モチ、餅）
オトナリ（トナリ、隣）
オカラダ（カラダ、體）（オカラダともいふ）
オトモダチ（トモダチ）
オトシダマ（トシダマ）

オカネ（カネ、金）
オサン（サン、産）
オヨメ（ヨメ、嫁）
オキャク（キャク、客）
オコモ（コモ、菰、こじきの義）
オシタク（シタク、仕度）
オダンゴ（ダンゴ、團子）
オハキモノ（ハキモノ）
オルスバン（ルスバン）

（三）起伏式保存の例

オカサ（カサ、傘）
オカシ（カシ、菓子）
オルス（ルス、留守）
オミソ（ミソ、味噌）

オクツ（クツ、靴）
オカタ（カタ、カタ、方）
オムコ（ムコ、聟）
オコト（コト、琴）

オネギ（ネギ、葱）　オチチ（チチ、乳）

オセワ（セワ、世話）　オトモ（トモ、供）

オスシ（スシ、鮨）　オタマ（タマ、玉。お玉杓子）

オテンキ（テンキ、天氣）　オショーガツ（ショーガツ、正月）

（四）起伏化の例（もと平板式のもの）

オサツ（サツマイモ）　オテツ（テツビン）

オミヤ（オミヤゲ）　オツマ（ツマミグイ）

オクスリ（クスリ、藥）　オテガミ（テガミ、手紙）

オジバン（ジバン、襦袢）　オボーシ（ボーシ、帽子）

オゾーリ（ゾーリ、草履）　オハオリ（ハオリ、羽織）

オクルマ（クルマ、車）　オムコー（ムコー、向）

オセナカ（セナカ、背中）　オカワリ（カワリ、御飯などの）

オセンタク（センタク、洗濯）

「お」が形容詞につくときは、かならずこれを平板にして例外を許さないこと、次の例のやうである。

他の場合にも平板化の傾向が見られるが、そのうちにも動詞から派生された名詞に接續した場合にかなり徹底的な平板化が見出される。

（五）起伏式形容詞の平板化

オアツイ（アツイ、暑）	オサムイ（サムイ、寒）
オツヨイ（ツヨイ、强）	オタカイ（タカイ、高）
オハヤイ（ハヤイ、早）	オヒロイ（ヒロイ、廣）
オワカイ（ワカイ、若）	オワルイ（ワルイ、惡）
オヨワイ（ヨワイ、弱）	オヤスイ（ヤスイ、安）
オメデタイ（メデタイ）	オウツクシイ（ウツクシイ、美）
オヤカマシイ（ヤカマシイ）	オハヅカシイ（ハヅカシイ）
オカワイラシイ（カワイラシイ）	

（六）動詞からの派生名詞の平板化

オオキ（オキル、起）	オタチ（タツ、出發）
オアイ（アウ、合）	オタベ（タベル、食）

オカエリ（カエル、歸）　オマネキ（マネク、招）

オヤスミ（ヤスム、休）　オイワイ（イワウ、祝）

オトーリ（トール、通）　オアツマリ（アツマル、集）

オヨロコビ（ヨロコブ、喜）

もつとも子どもにむかつて「おすわりして」などいふとき オスワリといひ、「きもの」の意味でオメシといふことがある。しかし「おすわり（おめし）になる」などのときはオスワリ（オメシ）であり、それが本來のつかひ方である。「きもの」のオメシは、「おめしもの」の略で、省略によつて起伏化した一例である（第十七章）。これらの語が後に來る制約的な助動詞「なさる・もうす・くださる」などゝ接續して、「おやすみなさる」、「おいはひもうす」、「おかへりください」などゝなるときは、もとよりまた全體として起伏式動詞のやうなアクセントを示すのである。すなはち オヤスミナサル、オイワイモース、オカエリクダサイのやうになるのである。

接頭語「ご」（御）の接續

（一）平板式保存の例

ゴジュン（ジュン、順）　ゴブジ（ブジ、無事）

ゴジブン（ジブン、自分）
ゴチソー（チソー、馳走）
ゴビョーキ（ビョーキ、病氣）
ゴアンシン（アンシン、安心）
ゴケンブツ（ケンブツ、見物）
ゴキゲン（キゲン、機嫌）
ゴエンリョ（エンリョ、遠慮）
ゴエンポー（エンポー、遠方）
ゴショーチ（ショーチ、承知）

（二）起伏式保存の例

ゴイン（イン、印）
ゴオン（オン、恩）
ゴモン（モン、門、紋）
ゴエン（エン、緣）
ゴコンイ（コンイ、懇意）
ゴトーニン（トーニン、當人）
ゴハンジョー（ハンジョー、繁昌）
ゴジョーダン（ジョーダン、笑談）
ゴウン（ウン、運）
ゴホン（ホン、本）
ゴソン（ソン、損）
ゴヨー（ヨー、用）
ゴホーコー（ホーコー、奉公）
ゴゾンジ（ゾンジル）
ゴヨージン（ヨージン、用心）
ゴネッシン（ネッシン、熱心）

ゴモットモ（モットモ、尤）　ゴユックリ（ユックリ）

×ゴホービ（ホービ、褒美）は稀な例外。ゴハン（御飯）も例外的。ゴメン（御免）、ゴラン（御覧）

はもとのアクセントを知りがたい。

これらの例について見ても、語の複合におけるアクセントの形成が、まつたく偶然に無拘束にきめられるのではなくて、そこに規則正しい方向があり、全體を貫いてあらはれる傾向があることを十分察知することができる。かやうにアクセントのあらはれを種々の事態について考察して、つひにそのうちに行きわたつてゐる法則性を明らかに認めるに至るのである。

こゝには主として體言についての語の複合を見たのであるが、用言におけるものも、アクセントの點からすればその本質において異なるものではない。つぎに節をあらためてそれを説かう。

四九　助動詞の接續

助動詞が、動詞または形容詞などに接續して一種の複合的用言を形成するにあたつて、その複合語の全體的アクセントが助動詞によつて規定されるか否か、すなはち助動詞がアクセントについて制約的であるか、あるひはその前に接續する動詞・形容詞などのアクセントが全體のアクセントを規定す

るかの二様の可能性が成立つわけである。

助動詞がこの際制約的であるか否かは、その助動詞の種類によることであつて、前に活用におけるアクセントを說くに當つて取扱つた助動詞「たい・ない」の如きは、動詞に連つてその動詞の基本形のアクセントに規定されるものであつた。かやうな助動詞はアクセントについて被制約的・所規的であり、また他律的だともいへる。一方にはかういふ種類のものがあるが、また他方にはこれとちがつてどういふ型の動詞に接續しても、その複合的用言全體のアクセントを一定の式に（ほとんどみな起伏式に）つくりかへるものがある。これは全體の型を自己に適するやうに規定するものであるから、アクセントについて制約的・能規的または自律的助動詞といふべきである。

活用の仕方が動詞に似てゐる助動詞には、

（受身）れる、られる

（使役）せる、させる

がある。これは動詞に連つて、そのアクセントに從ふ被制約的、他律的のものである。

被制約的助動詞の接續の例

（一）平板式――|オサレル・|オサセル（|オス、押）　|ヤカレル・|ヤカセル（|ヤク、燒）

アテラレル・アテサセル（アテル、當）
ヒロゲラレル・ヒロゲサセル（ヒロゲル、擴）
カカレル・カカセル（カク、書）　ヨマレル・ヨマセル（ヨム、讀）

（二）起伏式――コラレル・コサセル（クル、來）
トドケラレル・トドケサセル（トドケル、屆）

活用が形容詞に似てゐる助動詞には、

たい　ない　らしい

があり、そのうち「たい」は動詞に連つて前述の助動詞と同樣に被制約的であること、活用におけるアクセントについて述べたところである。「ない」は動詞に連つて、その前に連る動詞のアクセントの式をもかへず。また助動詞自身の高さの關係をもかへずに、いつも平らかに進行する點で、特色を示すものである。そこで、平板式動詞に接續しては、これと結んで全體が平板となり、起伏式動詞と接續しては、これと結んで全體が一種の混合式アクセントの觀を呈する。その型は次に例示するやうである。（「まい」は活用しないが、アクセントの點で「らしい」と同樣だから、こゝに關說する。）

助動詞「たい」および「ない」の接續の例

（一）平板式――シリタイ、シラナイ（シル、知）　アケタイ、アケナイ（アケル、明）
ネムリタイ、ネムラナイ（ネムル、眠）
ハタラキタイ、ハタラカナイ（ハタラク、働）

（二）起伏式――ミタイ、ミナイ（ミル、見）　トリタイ、トラナイ（トル、取）
オキタイ、オキナイ（オキル、起）　トドケタイ、トドケナイ（トドケル、屆）

この「ない」は「ぬ」に外ならないと見れば、やはり被制約的助動詞の一つとすることができる。ただし東京語では、普通に「ぬ」または「ん」をつかはないで、もつぱら「ない」をつかふのである。

*關東方言には、「ない」を東京語と少しちがつて「たい」と同様な型にするものがある。したがつてトラナイ、オキナイのかはりに、トラナイ、オキナイといふのである。

この「ない」の活用形「なく」に「あつた」がついて「なかった」となるときは、これに連接する平板式ならびに起伏式動詞は、いづれも起伏式アクセントを示すが、その型について兩者の間にちがひがあらはれる。

「なかつた」の接續の例

（一）平板式動詞との接續（一般に」「……十（「……）

シナカッタ（スル、爲）　アケナカッタ（アケル、明）
ワスレナカッタ（ワスレル、忘）

（二）起伏式動詞との接續（一般に「……＋（―……）」）

ヨマナカッタ（ヨム、讀）　ワカラナカッタ（ワカル、分）
ウレシガラナカッタ（ウレシガル）

前揭の助動詞のうち、「らしい」（および「まい」）は、どの動詞に連つても、これと融合して全體として起伏式形容詞のやうになるものであつて、その際助動詞の部分がいつも上中中（および上中）の高さを保つ。すなはち制約的・自律的助動詞である。もつとも、「らしい」は動詞だけでなく他の品詞にもついて、同樣なアクセント改造をするもので、こゝに助動詞といふのと、前に接尾語として說いた「らしい」とは、本質的にちがふものではない。いまはたゞ便宜上普通に口語法に說かれてゐる名目によるのである。

助動詞「らしい・まい」の接續の例

アケルラシイ、アケマイ（アケル、明）　シッテルラシイ、シルマイ（シル、シッテル、知）
トドクラシイ、トドクマイ（トドク、屆）

かやうに、すべてを同様な型の起伏式にしてしまふのである。「らしい」は形容詞についても、同様で

　アカイラシイ（アカイ）　オモシロイラシイ（オモシロイ）

複合的な起伏式形容詞をつくるのである。また動詞について複合形容詞をつくる「やすい」および「にくい」（事の難易をいふに用ゐる）も、「らしい」と同様なアクセント關係を示すもので、語法上でもこれと同一に取扱ふべきものである。すなはち

　イキヤスイ、イキニクイ（イク、行）　アケヤスイ、アケニクイ（アケル、明）
　キヤスイ、キニクイ（クル、來）　ヨミヤスイ、ヨミニクイ（ヨム、讀）

のやうに、すべて起伏式になる。

これに似た用法のある「いい」および「づらい」は、むしろ被制約的・他律的であつて、動詞の式に應じてアクセントがきまる。もつともそれは徹底的に行はれてゐるとはいひにくい。

（平板式）シイイ、シヅライ（スル、爲）　イキイイ、イキヅライ（イク、行）
（起伏式）キイイ、キヅライ（クル、來）　カキイイ、カキヅライ（カク、書）

以上の助動詞は、それぞれ用言としての活用をもつてゐて、動詞などに連つて全體としての複合的動詞または形容詞を構成するものであつて、その複合語のアクセントは、やはり用言のアクセントに

見るところの形式を出ないのである。たゞ「ない」が少し趣を異にするが、大體において同種と見ることができる。次に説く助動詞は、活用などの點で少しちがひ、一様にいへないものがあると共に、そのアクセントについても別に考察する必要のあるものである。

過去の助動詞「た」が動詞について複合語をつくる場合には、もとの動詞のアクセントをそのまゝ保つことが特徴である。助動詞「ない」の場合には、二音節動詞上中型のものなどが下上の高さになつて接續するのであるが、この場合には上中の高さのまゝで「た」に接續する。その接續におけるアクセントは、助詞「て」と同様であつて、さういふ點から「て」を「た」の活用形と見ることも考へられる。そこで、便宜上「た」と「て」とを一括して、動詞との接續の具合を説かう。三音節の起伏式動詞、すなはち下上中型のものは、その基本形のアクセントの型を上中中の高さにかへて「た」および「て」に連接する。もつとも、促音のある語は例外で、四音節語に準じる。

動詞と助動詞「た」、助詞「て」との接續の例

（一）平板式動詞との接續（└┃……＋（┃））

|ニタ、|ニテ（|ニル、似）——|ニテル（似てゐる）

|ヤメタ、|ヤメテ（|ヤメル、止）——|ヤメテル

トンダ、トンデ（トブ、飛）――トンデク（飛んでいく）

（二）起伏式動詞との接續（┐＋（｜）、┐｜＋（｜）、└┐｜＋（｜）など）

カイタ、カイテ（カク、書）――カイテル（書いてゐる）

ミセタ、ミセテ（ミセル、示）――ミセトク（見せておく）

ノコッタ、ノコッテ（ノコル、殘）――ノコッテタ（殘つてゐた）

オヨイダ、オヨイデ（オヨグ、泳）――オヨイデッタ（泳いでいつた）

普通に助詞と見なされる「たり・たら」や「たつて」（時として「だり・だら・だつて」となる）は、接續において「た・て」と似てゐるところがあるが、この助詞自體が下降的な高さの進行を有し、「たり・たら・たつて」は高低といふやうに布置される。この際複合語が構成されると見れば、この助詞は制約的にアクセントを定め、しかも起伏的にすると見なすことができる。

ニタリ　ヤイタリ（ニル、煮、ヤク、燒）

トンダリ　ハネタリ（トブ、飛、ハネル、跳）

ミタラ、キイタラ、シッタラ（ミル、見、キク、聞、シル、知）

ニタッテ　ヤイタッテ（ニル、煮、ヤク、燒）

この際にも、前に述べた「ば」の接續の場合にしたやうに、「たり・たら・たつて」の最後の音節だけが一段下るので、これを下の高さに配當することにすれば、まつたく「た・て」の接續と同じやうになり、平板式動詞もそのアクセントを保つと考へ得るに至る。すなはち平板式のときは

⌊dɑitɑɾi, ⌊kiitɑɾɑ, ⌊ittɑttĕ

起伏式のときは

⌈mitɑɾi, ⌈kɑĭtɑɾɑ, ⌈misĕtɑttĕ

となる。しかし、前のやうに解しても、平板式動詞との接續に際してあらはれる平進的傾向を見あやまらないならば、しひて形式を複雜にしなくともいゝと思ふ。そこで、同じく起伏的になるといつても、平板式動詞についた場合と起伏式動詞についた場合とで、その型に相違があり、傾向に異同あることを察すべきである。

助動詞の「ます・ました・ませう・ません」が動詞に連る場合には、全體として起伏的な語句を生じる。これを全體として下上……中型のアクセントと見れば、これらの助動詞は前述の「らしい」などと同樣に制約的のものである。こゝに「ます」は、次に「が」などを伴はない場合には、いつも移の母音の脫落を生じ、をはりの音節的の〔s-〕がこゝの要素をもたないので、こゝにこゝの高さを考へ

ることができない。しかもなほ「ます」は全體として下降的進行を營むと感じられる。それはつまり〔a〕の母音に下降的進行の位相があらはれるによつてゞある。たゞアクセント形式觀においては、かやうな一音節内部の高さの漸變を考へることの必要をあまり感じないので、漸降的進行の〔mas〕をやはり「ー(上中)のやうな高さに配當して考へることを以て滿足することができる。かやうにしてこれらの助動詞のついた動詞、助動詞の複合體は、同樣の型をとつてすべて下上……中型を示すのである。ただし混合式動詞に連るときは、この助動詞内部における下降的進行が、ほとんど知覺されないまでに平板化されるから、これを無視して然るべきである。

助動詞「ます・ませう・ません」の接續の例

イイマス、イイマショー、イイマセン(ユウ、云)
ネムリマス、ネムリマショー、ネムリマセン(ネムル、眠)
アリマス、アリマショー、アリマセン(アル、有)
アルキマス、アルキマショー、アルキマセン(アルク、歩)
ナグリツケマス、ナグリツケマショーなど(混合式動詞ナグリツケル)

あるひは助動詞とされ、あるひは助詞に組入れられ、用言に直接連ることなく、體言にだけ連る

「だ・で・です」は、中の高さでそのまゝ接續する。たゞし「です」は、「ます」のやうにそれ自體のうちに下降的進行を藏してゐるもので、これを高、低の布置をもつ二音節語と見れば、次の「だらう」などと同樣に考へなくてはならない。

體言に連る「だ・で・です」の接續の例

（平板式）ワタシダ、ワタシデ、ワタシデス　コレダ、コレデ、コレデス

（起伏式）テンキダ、イヤデス　ミッツダ、ハカマデ、モットモデス

たゞし、體言に助詞がついて、さらに「だ」などが接續する場合には、助詞より一段低くなる。これをあるひは前の助詞までが一段高まると見ることもできる。

koɺèmo dɑ　またはコレモダ（コレモ）

imɑ kɑɺɑ dès　またはイマカラデス

「これだけだ、それつきりです」などは

コレダケダ　ソレッキリデス

となる。

動詞・形容詞および名詞に連る「だらう・でせう」は　接續の模樣が「だ・です」の場合に似てゐ

るが、それ自體の中に下降的進行を示すものであるところから、形式上次のやうにする。

助動詞「だらう・でせう」の接續の例

(一)平板式用言との接續

アガルダロー、アガルデショー(アガル、上)

イクダロー、イクデショー(イク、行)

カタイダロー、カタイデショー(カタイ、堅)

(二)起伏式用言との接續

サガルダロー、サガルデショー(サガル、下)

クルダロー、クルデショー(クル、來)

モロイダロー、モロイデショー(モロイ、脆)

こゝにも(一)における平進的進行の傾向が見えるが、「だらう・でせう」の高さを中、中、低のやうに考へると、(一)と(二)とにおける傾向の相違がはつきりする。

用言に連る助動詞「のだ(んだ)」およびその活用ともいふべき「のだつた・のです・のでした」は分解して助詞「の」と「だ」などの助動詞との接續に歸することができる。助詞「の」が平板式用言につらなるときは、次に示すやうに(代名助詞の接續、五五九頁)、いつもその前の部分を上の高さに改めてそれに中の高さで連ると考へるのが適當である。

助動詞「のだ(んだ)」の接續の例

(一)動詞との接續

シルノダ、シルノデス(シル、知)　トマルノダ、トマルノデス(トマル、留)

ミルノダ、ミルノデス(ミル、見)　ナゲルノダ、ナゲルノデス(ナゲル、投)

(二)形容詞との接續

ウスイノダ、ウスイノデス(ウスイ、薄)　アブナイノダ、アブナイノデス(アブナイ、危)

ナガイノダ、ナガイノデス(ナガイ、長)　キタナイノダ、キタナイノデス(キタナイ、汚)

この例に見るやうに、動詞との接續では、兩式について型が異なるが、形容詞との接續では、兩式とも同じ型になつてしまふ。したがつて「暑いのだ」と「厚いのだ」との差別ができなくなる。これは平板式の場合に動詞におけるやうに、アツイノダ(厚)となるべきのが、重母音の關係からアツィノダとかはつて起伏式の場合の型と同樣になつたからである。

關東方言には、「の」を一段低くせずにつけるものがある。それによると、平板式用言との接續の場合はシルノダ、ウスイノダ(またはシルノダ、ウスイノダ)となつて、あきらかに起伏式用言との接續の場合(東京語におけるアクセント)と對照される。

動詞に助動詞が二重または三重についた場合も、上述の傾向から推斷して、アクセントの成形をたどることが困難なく出來る。たとへば、「讀ませられない」のやうな語句における全體的アクセントについて、その成素たる單語のアクセントの形成傾向のあらはれを見ることができる。ヨ|ムは起伏式動詞で「せる」は被制約的助動詞だから、その複合したものは起伏式動詞と同樣な下上上中型ヨ|マセルである。つぎに「られる」はやはり被制約的なので、これと連つて全體として起伏的な型ヨ|マセラレルとなる。助動詞「ない」の接續におけるアクセントは、前につく動詞の型をかへずに中中の高さで添はつたやうな型なので、すなはちヨ|マセラレナイとなる。かやうな推究を加へることなく、實際の發音では自然とこの通りにしてゐるのである。これに對して、たとへば「賣らせられない」のやうな語句では、動詞「賣る」(ウ|ル)の平板的傾向が最後まで助動詞を制約して、結局ウ|ラセラレナイの平板的進行を遂げる。しかも實際には、まつたく言葉の感じ、いはゞアクセント感に導かれて、何等の思慮をも費さずに、自然にこのとほり發音してゐるのである。この例でその一斑を示すやうに、すべてはかやうに推究し得るやうに成形されてゐるのであつて、日常談話の際にかういふことに無頓着で話されてゐながら、心のまゝに語つておのづから法則に合致する趣があるのはまことに微妙な心意作用によるものといはなくてはならない。不用意の間に、もしあるべき形式にはまらない場合が生じた

ならば、一種の具合わるさ、異樣さの感をおこすであらう。かくて容易に間違に氣がつき、いひなほしをするに至るのである。

五〇 助詞の接續

語法上に助詞として一括されてゐる語のうちには、種々の職能のものがあつて、これを概括的に取扱ふことは不可能である。これを分類する仕方も、立場によつていろ〳〵になるであらう。いま當面の問題としては、助詞が體言や用言に連接してどういふアクセント關係を示すかの點を考へる。接續におけるアクセントは、助詞についても助動詞の場合に見たのと同樣に、その連りの全體にある一つのまとまつた成形を與へるので、その點では助動詞の場合と似てゐるが、アクセントの型の連接が助動詞と用言との間におけるやうなものほど緊密でない。概していへば、助詞の接續は、助動詞のよりはゆるいといふことが出來よう。助動詞の接續の場合には、複合的名詞の形成に際して生じるやうなアクセント形式の改造がしば〳〵あらはれるが、助詞の接續の場合には、たゞ輕く添着するといふ趣のものが多い。前の場合は、語の連結が癒合の程度に及ぶものといふべく、後の場合はたゞ添着の程度にあるものと考へるべきである。

いま各種の助詞について、その接續のアクセントを考へるにあたり、便宜上かりに助詞を分類して(甲)關係助詞、(乙)狀況助詞、(丙)代名助詞、(丁)接續助詞、(戊)終止助詞とする。

（甲） 關係助詞

體言・用言または他の助詞に接續する助詞、および體言または他の助詞に接續する助詞（『口語法』にいふ第一類および第三類の助詞）の多數、いはゆる後置詞の稱ある助詞を、しばらく關係助詞と名づけて他と區別する。これは大體において前に連る語のアクセントを著しくかへず、助詞自らの高さもあまりかへずに連る添着的のものである。たゞ若干の例外がある。これをさらに分けて、(一)單音節の「が」、「は」、「を」、「に」、「へ」、「と」、「も」、「で」、「か」、「や」を一類とする。これはいづれも平らに前の語に連つて、たゞ音節の數を一つましただけの趣を呈するものである。つぎに、(二)二音節の「から」、「だけ」、「きり」、「なり*」、「して」、および(三)「さへ」、「こそ」、「など」、「なら」、「まで」、「なり*」、「だの」、「だか」、「やら」、「より」、その他一音節の助詞が二つ重なつて出來た「でも」、「とも」、「かも」、「では」、「には」、「とで」など、それから、(四)「しか」、「ほか」がある。それから、前に連る語のアクセントをかへて、これと密接に結びつく助詞には、(五)一音節の「の」、(六)二音節の「ほど」、「づつ」、「とも」、(七)三音節の「くらゐ(ぐらゐ)」、「ながら」、「どころ(どこ)」、

「ばかり（ばかし）」、「ぐるみ」、「だらけ」、「まぶれ」がある。このなかには接尾語とも見るべきものがある。

添着的關係助詞の接續におけるアクセントは、體言と連るとき助詞が前の語のアクセントを改めることなく、そのまゝ連接して一系列をつくるのである。動詞と連る場合にもこれとアクセントの關係を全く等しくするものがある。また用言だけに連る助詞と同樣なアクセントを示すものも少くない。さらに形容詞との接續においては、動詞との接續と少しちがひ、助動詞「のだ」が形容詞に連る場合のやうな少しの型の改修を生じる。たゞし「のだ」の「の」は、こゝにいふ關係助詞ではなくて、用言だけに連る別種のもの（こゝに代名助詞と名づけるもの）である。この場合にも例外があつて、型を全くかへずにつく例も存する。また副詞や他の助詞の後に接續する場合には、助詞が自らの高さを一段下げて連るといふ關係がある。以下それぐの語例をあげよう。

（一）「が・は・を・に・へ・と・も・で・か・や」の接續

（イ）體言との接續（中の高さで平らにつゞく）

「が」――カゼガふいて、ユキガとぶ。　「は」――クチワうまいが、アタマワからだ。

「を」――スミオすつて、テガミオかく。　「に」――タケニすゞめ。ハナニあらし。

「へ」――ムコーエいけ。コッチエこい。

「と」――オマイトわたし。カガミトくびつぴき。オハナトいひます。

「も」――ハナモミモある。アレモコレモほしい。

「で」――フデデかく。メデみる。ミミデきく。

「か」――フデカカミカかふつもりだ。

「や」――ウシヤウマヤ〔mi ma ja〕ぶたを飼つてる。

（ロ）動詞との接續（中の高さで平らにつゞく）

「が」――すぐデカケルガいゝ。はやくハシルガかちだ。

「は」――イクワいくとして……

*イキワしないが……。床にはひつても、ちつともネムレヤ（眠れは）しない。――のやうに用ゐるときは例外。

「に」――クルニきまつてる。イクニちがひない。ユウニまさる。

「と」――すぐイクトいひました。スルトなれば、精一杯やりませう。さうナルトいゝ。

「も」――イクモいゝが、氣をつけろ。キクモなみだのたね。

*イキモしないのに……。いつときだつてネムリモしません。(「は」の用法参照)

「か・や」——問をあらはす「か」、ならべていふ「や」は一段さがつて動詞につく。その關係を」「……+(ー)と見れば、

こゝにイルカね。スルカシナイカわからない。(たゞし「か」をならべていふとき、時としてシヌカイキルカ……、ノルカソルカ……のやうに平らにつく。)

クウヤくはずだ。ミヤキキヤして書く。

(ハ)形容詞(基本形)との接續(たいてい一段さがつてつく。で、これを重母音の關係から」「……ー+(ー)の型のやうに解する)

「が」——*目方のオモイガいゝ。ハヤイガかち。

「は」——*カルイワはねで、オモイワいしだ。

「に」——*ぴーるはツメタイニかぎる。ウレシイニつけ、カナシイニつけ……

「と」——*ツメタイトアツイトであぢがちがふ(物事をならべていふとき)。

※(指し定めていふときは形容詞の型がかはらない)よつぽどツライト見える。

「も」——スイモアマイモよくごぞんじです。

「か」――オモイカカルイカはかつてみろ。

「や」――ツライヤカナシイヤで日を過す(普通つかはない)。

右のうち＊印のついたのは、普通代名助詞「の」をつけて、オモイノガ、カルイノワなどと用ゐるもので、こゝのはこれを省略した形と見られる。

(ニ)形容詞の「く」の活用形との接續(一段さがつてつく。平板式との接續ではその關係を」「……十(一)とする)。

「が・を・へ」――トークガ見えない。トークオ見る。トークエ行く。

「は」――オソクワあるまい。ハヤクワいけない。

「も」――オソクモあすはできる。

(ホ)他の助詞との接續(一段さがる。そこで「には・にも・とは・とも・とか・へは・へも・では・でも・かは・かも」などは、みなそれ自體に高低の高さの布置を有するにいたつた。これを上中の高さに配當すれば、前につく平板式の語を下上……の高さになつたものと解さなくてはならない)。

「が」――コレカラガだいじだ。ソレダケガ私にはわからない。

「は」——ソコトワ知らなかつた。　「を」——ドレカオとれ。ソレダケオお殘し。

「に」——アレダケニしたのはだれだ。　「へ」——ワタシナンカエくれやしない。

「と」——ミギカラトヒダリカラトいちどに來た。

「も」——ヨクテモワルクテモかまはない。アチラカラモしらせがあつた。

「か」——ツライトカナントカいつてゐた。

右の接續において、助詞の前に來るものが助動詞と他の語との複合したものである場合には、その助動詞の活用が動詞に似てゐるか、形容詞に似てゐるかによつて、それ〴〵動詞と助詞、形容詞と助詞との接續の場合に準じるのである。

(二)「から・だけ・きり・なり」の接續

(イ)體言との接續

「から」——アサカラばんまで。クレカラ正月へ。ハナカラ花へ。

「だけ」——ソレダケ。カワダケ殘した。　「きり」——コレッキリ。アシタッキリだ。

「なり」——ソレナリやんだ。

これにさらに助詞を添へて用ゐるときは、

(一)の(ホ)に示したやうになる。すなはち——コレカラワ(モ、デス)。ソレダケニなつた。フタリッキリデでかけた。アレナリニしてしまつた——などゝなる。

(ロ)用言との接續

「から」——「はじまるからしまふまで」のやうないひ方は、あまりつかはれない。まづ、ハジマルカラシマウマデといふのが、普通のやうである。

「だけ」——ユウダケやぼ。ミルダケ見ておく。少しツライダケダ(二重接續による起伏)。

(ハ)他の助詞などゝの接續

「から」——トークカラ。ハヤクカラ。キョートトトーキョートカラ(二重接續による起伏)。

「だけ」——アマイノダケ。シンルイエダケ話しておく。

(三)「さへ・こそ・など(なんか・なんぞ)・なら・まで・なり・だの・だか・やら・より」の接續

(イ)體言との接續（自體の高低布置によつて、一般に助詞の後の音節が一段下つてそのまゝつく。形式的理解のため平板式につく場合を」「……＋(「ー」)とするが、本來の起伏化と異なるその際の平進的傾向を注意すべきである。)

「さへ」——ワタシサイ。アナタサイよければ……。ウデサイたしかなら……。

「こそ」――コレコソ私のだ。アメコソ降るが……。

「など」――キミナドワいゝ方さ。ツキナド見ながら……。ホシナンカ出てやしないよ。

「なら」――オレナラさうするが……。ヒルスギナラ見にいくがね。

「まで」――バンマデニできる。テンマデあがれ。

「なり」――ユナリミヅナリ持つてこい。イチドナリニドナリ見た人は……。

「だの・だか・やら」――ウシダカウマダカ。ウシヤラウマヤラ。ヤリダノナギナタダノもち出した。

「より」――アレヨリましさ。ヤマヨリ高い。ダレヨリお前がすき。

(ロ)用言その他との接續

「さへ」――イッテキカセルサイ(サイ)骨がをれる。キイテサイ腹がたつ。イイサイ(サイ)したら……。カルクサイなればいゝが。

「こそ」――ステコソしないが。ツライコソくすりだ。ソレデコソ(コソ)をとこだ。

「など・なんか・なんぞ」――だまつてイクナンテいけない。あいつにマケルナンテどうしたんだ。クルマニナンゾ(ナンカ)のれもしまい。ツライナドといふな。

「なら」――イクナラ（イクンナラ）いつしよにしよう。スルナラしてみろ。クライナラあかるくしろ。（また平板式用言に連つて……ナラともいふ。）

「なり」――イクナリヤメルナリはやくきめよう。ツメタイナリアッタカイナリおのぞみ次第。

「より」――うちにイルヨリましだ。ツメタイヨリあつたかな方がいゝ。

「まで」――わたしのイクマデおまち。

「やら」――オドルヤラハネルヤラ……。ツカレルヤラオモイヤラデへたばつた。

この種の助詞の接續におけるアクセントは、體言に連る場合と用言に連る場合とで少しちがふところに特色がある。（關東方言における一傾向は、後の場合をも前の場合と同樣にするところにある。）また「では・でも・とも・かも・には」のやうな複合的助詞もこの種のアクセントを示すものであつて、たとへば體言には（平板式のものをあげる）

ソレデワ、アレデワ、コレカモ、ワタシニワ

のやうに連るが、用言につくときは、

ハタラクデワ（カモ、ニワ）　クライデワ（カモ、ニワ）

のやうになる。一般にこの種の助詞が形容詞と連る場合には、平板式形容詞も起伏式形容詞と同一の

型をとるのであつて、この傾は東京語における一特色と思はれる。

（四）「しか（ほか）」の接續（一般に一段さがつて他の語に連る。「だけしか」のやうに用ゐることがむしろ多い。）

（イ）體言との接續

これだけのニモツシカない。トコロドコロシカしらない。コレシキャありません。

（ロ）用言その他との接續

ハタラクシカ法がない。アヤマルホカてがない（普通かういふ場合に「よりほか・よか」など丶用ゐる。）

「ふたりして運んだ」などの「して」も、これと同樣である。

癒合的關係助詞の接續においては、前に連るアクセントが變化されて助詞と緊密な一つの結合體を構成するのである。この場合に助詞そのもの丶高さも多くは一定したものと見なすことができない。一音節の助詞では體言および他の助詞につく「の」が特殊のアクセントの關係を有するものであつて、はやくから注意されてゐる。(2) この助詞のアクセント關係は、體言に接續して體言の最後の音節と助詞自身とが同じ高さになるといふ點に特色を有するものである。すなはち、體言のアクセントの型をも

とのまゝと見れば、助詞の高さが上または中になるとすべく、助詞の高さをいつも中とすれば體言のアクセントがかはると見なくてはならない。たとへば上中型、下中……型、下上中……型、下上……中型のフジ(富士)・オイワイ(お祝)・ハマグリ(蛤)・コマモノヤ(小間物屋)に「の」が連るときは、フジノ(ヤマ)・オイワイノ(シルシ)・ハマグリノ(スイモノ)・コマモノヤノ(バントー)のやうに、「の」を中の高さとするに異論があり得ないが、ハナ(花)・ハカマ(袴)のやうに下上型、下上上型など最後に上の高さのある體言の後に來るときは「はなのやま、はかまのすそ」におけるナノ・マノは平らに連るのであるから、ナやマを依然として上の高さとすればノも上の高さになり、反對に「の」を中の高さとすればナとカマとをも中の高さとしなくてはならない。

しかるにこの助詞「の」は、前の語をさらに後に來る體言に結びつけるのを普通とするので、「とりのこゑ、はなのくも」のやうな連音節を一つの複合語と見ることもできるが、前に述べた複合語形成の場合とおのづからアクセント關係において異なるところがあり、むしろ一般には「の」を中の高さに配當して、トリノコエ、ハナノクモ、イヌノセンゾのやうな高さの布置として考へるのが便利である。もとより緊密に結合した場合には、全體を一語として取扱ふべきで、タカノハ、オクノテ、テノヒラなどはこの著しい例である。この程度の複合語と認められない語の連接にあつては、「の」を中位の

高さとして、この助詞の接續のために前に連る體言の下上型は下中の高さに、下上上型は下中中の高さに低められると考へるのが適當になる。實際上でも「花を」のやうな連音と「花の」のやうな連音とにおけるナの音節の高さに差異の存することを認められる場合が多いのである。そこで、

(五)「の」の接續

(イ)體言の型のかはらない場合——ウチノひと（複合語としてはウチノヒト）。エノほん（一語としてはエノホン）。キノもちやう。キシャノなか（次のいひ方もある）。

(ロ)體言の型のかはる場合——ユキノけしき。ハナノさかり。カワノみづ。キシャノなか。

この助詞に似てしかも異なる「の」は、體言にも用言にも連り、「の……の」と重ねて物事をならべていふ場合に用ゐられるものであるが、そのアクセント關係は、同じく物を並べていふ「か……か」および「や……や」と同樣である。

(の)——カミノフデノトいろ／＼ほしがる。カウノウルノトはなしてゐた。ツメタイノナンノッテお話にならない。

(六)「ほど・づゝ・とも」の接續

(イ)體言との接續（平板化の傾がある）

「ほど」――ヤマホドつんだ。ミッツホドいれてある。
「づゝ」――フタツヅツわけた。ココノツヅツもらつた。
「とも」――ワタシトモ三人です。フタリトモかへつた。

(ロ)用言との接續（平らにつく）

「ほど」――ウワササレルホドのこともしないのに。ネルホドらくはない。アツイ(厚)ホドもちがいゝ。

この種の助詞は、大抵體言の終の音節の高さと同じ高さで連るといふことである。で、ある場合には平板化すると見做される。この助詞がついて全體として一種の副詞的の連語となる有樣は、名詞における複合語の構成と多少の類似がある。さういふ點でおのづから他の助詞と異なるところがあると思はれる。

(七)「くらゐ・ながら・どころ・ばかり」の接續

「くらゐ」――コレクライ、アノクライ(これらはむしろ一語と見られる)。ワタシグライ、アナタグライ(またアナタグライ)。タマゴグライ(またタマゴクライ)ノ大さです。――手のトドクグライノところだ。ちつとイタイグライ(またイタイクライ)がまんしろ。そ

れをスルクライ（またスルグライ）ばかげたことはない。

「ながら」――ジプンナガラをかしい。ワレナガラ、オンナナガラモ。――キキナガラ、タチナガラ、イツモナガラおかまひ申しません。

「どころ」――チューガクドコロカ小學校さへ出ない。アナタドコロデワありません。イケドコロカ海ほどある。――アンシンスルドコロぢやない。ミセルドコロカ聞かせもしない。カイイドコロカいたくてたまらない。アツイドコロデワない。

「ばかり」――ジブンバカリ、アメバカリ、ハナバカリ。――口にユウバカリでしない。イクバカリニなつてる。アカルイバカリデワいけない。

この助詞の高さの關係を見るに、複合語の後部の三音節である場合によく似てゐる。すなはち癒合的な連結にいたる場合が多いのである。

用言だけにつく助詞および用言と他の助詞とにつく助詞（『口語法』にいふ第二類および第四類の助詞）のうちには、四種の區別を立てることができる。（一）動詞・形容詞またはこれと助動詞との複合したものに連つて、風說・推量・狀況の繼續をあらはす「さう・やう・まゝ」のやうな助詞、（二）前に連る語句をまとめて體言のやうにする「の」といふ助詞、（三）用言に連つて句と句とを接續させる

用をするもの、すなはち接續助詞ともいふべきもの。(四)語句の終に來て感動詞のやうな意味を寓するもの。そのうち(一)の「さう・やう・まゝ」のやうな助詞は、その語法上の關係においても、前記の「きり・ほど・ながら・くらゐ」などゝ同趣のものと解せられるものであり、そのアクセントの關係においても、前記のものと多く異なるところがない。次に「の」は、「こと・もの」のやうな名詞に代つてその意味をあらはす一種の代名詞的のものである。そのアクセントにも特色があらはれてゐる。さらに接續助詞と稱すべきものは、關係助詞と異なる特色を示す助詞中の主な種類のものであつて、種々の助詞を含んでゐ、前にのべた體言にも連る「なら」のやうなものも、本來はこれに屬すべきものと見られるのである。「太郎といふ」などの「と」もまたむしろこの類に入るべきものであらう。とにかく用言に連る助詞の大部分を占めて、特色のあるアクセント關係を示すものである。語句の終につくものは、語句に感情的効果を與へるためのものが多く、その高さの關係は特に注意すべきものがある。體言にもつく「か」のやうな問の意味をあらはす助詞は、むしろこゝに編入すべきものであらう。これをかりに名づけて終止助詞といはう。

(乙) 狀況助詞

「さう」——あにもイクソーだから……。まだハヤイソーだ。アカルイソーだ。

「やう」——おとがスルヨーだ。ちつともシラナイヨーだ。キツイヨーです。

「まゝ」——ユウママになつてる。シタイママにさせる。ツメタイママのむ。フクロノママやらう。

（丙）　代名助詞の接續

「の」が用言につく場合には用言の語尾より一段低くなるのが常である。この際「の」の前の音節までを中の高さのが上の高さになるさし、「の」を中の高さと見るのが便利である。

「の」——そんなことをスルノワよせ。マッテルノガいやなんだ。アカイノがあの人の本だ。ツライノォがまんしろ。

この例に見るやうに、平板式形容詞は「の」のつくために起伏式の型をとるのである。

（丁）　接續助詞の接續

この種の助詞が用言に連るときは、前例「の」と同樣なアクセント關係のあらはれる場合が殊に多い。すなはち一段低くなつてつゞくし、また特に平板式形容詞を起伏式の型にかへる。すべてこれらは、動詞に前項の「の」がついたものに連るとも考へられるから、そのアクセントもおのづから「の」の場合と同樣になる。したがつて「の」の前のアクセントが「の」のつくためにすべて上の高さにな

ると考へるならば、こゝに述べる助詞の高さは體言につゞく場合と同様になる。これに屬する助詞には、一音節のもの、二音節のものがあり、そのうちで二音節のものは、前に掲げた體言にもつく「なら・なり」が用言につく場合と同様である。

「が」――あたまはハタラクガ氣だてがよくない。かたいことはカタイガかめないことはない。

「し」――讀みもスルシ書きもする。あかるさもアカルイシ風もとほる。こゝにもイタイシ行つても見たい。

「にも」――ナクニモ泣かれない。何をスルニモ人が第一だ。ツメタイニモ程がある。

「には」――オモイニワ重いが、もてないことはない。ハタラクニワ働くが……。イワレルニワいはれても……。

「のに」――ヨンデルノニ返事もしない。アカルイノニあかりがついてらあ。このサムイノニ火がない。

「ので」――スワッテルノデ(ンデ)あしがいたい。クライノデ(ンデ)よく見えない。

「つゝ」――何もかもシリツツちつともいはない。理くつをイイツツまちがつてる。

體言にもつく「かも・では・でも・さへ・より」が用言に連つて、この種の助詞と同様なアクセン

ト關係を示すのは、むしろ普通となつてゐる。たゞし時として體言に連ると同じやうに用言に連ることもある。

「ば」といふ助詞は、用言の〔è〕に終る活用形（假定形）に接續して癒合的に連結し、一段低くつく。そのアクセントを右と同様に理解することができる。

動詞	平板式	イク――イケバ、アガル――アガレバ
	起伏式	フル――フレバ、タタク――タタケバ
形容詞	平板式	カルイ――カルケレバ（カルケレバ）ツメタイ――ツメタケレバ
	起伏式	コイ――コケレバ　オーイ――オーケレバ タカイ――タカケレバ　キタナイ――キタナケレバ（キタナケレバ）

用言だけにつく「と」は、平らに連る點で他と異なり、一つの例外と見るべきものである。

「と」――ミルトいけない。ヨルトサワルトうわさする。あんまりナガイトつかへる。ミヅッポイトまづい。

もと名詞と助詞とが連つて出來た接續的の助詞に「ものなら・ものを・もの〻・ところが・ところで」のやうなものがある。しかし「もの」のつく分はそのアクセントが、おほむね名詞モノと助詞と

の接合してできたものとして考へ得る。すなはちモノナラ、モノオ、モノノのやうである(例へばイクモノナラ、スルモノオなど)。「ところが・ところで」はおほむねトコロガ、トコロデとなる。
「ものか」はむしろ終止助詞であるが、アクセントは「ものを」と似てゐて、モノカとなる。
「て・ては・ても・たら・たり・たつて・たつても」など、すべて助動詞の「た」と同様な接續をするものは、そのアクセントも「た」におけると似てゐるが、中でも「て」はまつたく「た」と同様であること、用言の活用のアクセントについて見たところである。「ては・ても・たら・たり・たつて・たつても」は、自體に下降的高低布置をもつてゐるので、前例のやうに解すれば、もと平板式のものを下上……の高さにして上中、または上中中で前を承けると見る。すなはちイッタッテ、シタラなどのやうになる。また動詞・形容詞に連る「といつても」の意味の「たつて」も同様である。

「たつて」――いくらハタラクタッテ年が年だしね。ムツカシイタッテ考へればわかる。

「て・ては・ても・たつて」は、形容詞の「く」の活用形にも連つて、形容詞のアクセントをかへる。形容詞の「く」の活用形のアクセントが起伏式のものでは基本形のと型を異にするといふこと、すなはちフルク(古)とフルイとに型の相違があることは前に述べた。しかるに、「て」などの動詞がこの活用形について、さらに平板式のものゝ型をかへるのである。その例、

「て」——（平板式）オモイ（重）——オモク——オモクテ。ツメタイ——ツメタク——ツメタクテ
（起伏式）イタイ——イタク——イタクテ。オカシイ——オカシク——オカシクテ。

「たつて」——（平板式）オモクタッテ、ツメタクタッテ。
（起伏式）イタクタッテ、オカシクタッテ。

（戊）終止助詞の接續

終止助詞、すなはち用言またはその他の語に連つて語句の終にあらはれ、感動詞のやうな意味を寓するものは、用言に連るだけでなく體言にも連る若干の助詞を含む。すなはち體言にも用言にも連る助詞のうち、問の助詞「か」、かるくいひはなす意味の「さ」がこれである。また用言だけにつく「ぜ・ぞ・て・わ・わい」や、用言と助詞とにつく「な・なあ・ね・ねえ・の・のう・よ・え」などは、いづれもみな感情を寓するものである。そしてその高さの關係は必ずしも一樣にいふことが出來ないが、この種の助詞の特色として、感情のまたは意志の異なりをその助詞の種々の高さまたは高さの進行によつて示すことが出來るといふ性質を具へてゐる。そして文における感情の表白が、この助詞の高低運動の如何によつてさまざまの態を生じることは、注目を價する點である。例へば「か」や「の」がその高さの進行の仕方如何によつて或は問の意味をあらはし、あるひはたゞ獨白的または確定的の意

味をあらはす二様の場合がある。このことはさらに後章に說かう。

五一　連語のアクセント

複合語のアクセントにおいて顯著な點は、一つ〳〵の單語のアクセントの型が變へられて一つの語のアクセントの型に合成されるといふことである。すでに見たやうに、名詞における語の複合と相似たアクセントの型の變化が助動詞の接續においてもあらはれてゐる。ところが助詞の場合には、その少數のものを除き、多くは型をあまりかへずにそのまゝたゞ添着するやうな趣がある。こゝにアクセント關係から見た複合語と連語との差異が求められるやうに思はれる。アクセントは口語における言語心理の一つのあらはれであつて、さうした限りでこの點から語の連接の緊密の程度如何をトすることは、まつたく無謀ではあるまい。

もとより名詞の複合語または助動詞の接續におけるアクセント關係を全く助詞の接續におけるものと別異のものとしてわけてしまふことは、不可能であり不都合である點も少くない。すでに說いたやうに、助詞といはれてゐるもののうちに、癒合的接續を遂げてそのアクセントが語の複合におけるやうに變化し、むしろ接尾語とも見るべきものがあり、助動詞の名目のうちに包括されるもののうちに、

單に動詞・形容詞に添着するだけであるやうなものがある。かやうな次第で、アクセントの方面から見て、語音の連接の關係を分けると、必ずしも語法上の分類と一致しないものがあらはれる。その癒合的接續をするものを複合語と見、添着的接續を營むものを連語と見るといふ、きはめて大體の見當は、音聲的立場から立てることができる。

さて今まで見て來たところから、アクセントの連結がもとの單語の型を大いに變革して癒合といふ程度におよぶか、或はほとんど從前の型をかへることなくたゞ添着といふだけの程度にとゞまるかゞ大體語の意義における接合の程度如何にも應じてゐると考へられる。語の複合における平板式保存の場合は、助詞との接續の場合と區別すべきアクセント關係上の特徴をもたないのであるが、平板式の起伏化のやうな現象は、特に複合の場合においてあらはれる特徴と見られる。(たゞし、助詞などの場合に一段低くなつてつくといふ風に述べたものは、形式上起伏的に解するにしても、本來の起伏式の語との接續とはその型がちがひ、なほ平進的傾向を認め得るのであるから、これを本來の起伏化と區別する必要がある。)また起伏式アクセントにおける型の變化は、語の接續の癒合的であるか添着的であるかを判別させる目標と見るべきで、從つてこれに據つてアクセントの變化の程度と語義連接の密接の程度とを關聯して考へることができる。幾多の實例について考察した結果、私はこの比較におい

てもアクセントと語義との照應を看取することができると思ふ。

しかし實際上、複合語と連語とをきつぱりわけることは、往々すこぶる人爲的に失し、かへつて現象的事態を正しく理解することをさまたげるおそれがある。たとへば名詞に關係助詞の接續する場合は、これを連語と見るのが適當であるが、「いま」といふ名詞と「まで」といふ助詞との接續したイママデが、兩部互に癒合して一體となる趣のある如きは、一種の副詞的複合語と見るべきものであらうか。マモナクなども同樣である。

大體において、語の複合にあつてもまたはその程度に及ばない連接にあつても、その高さは一つの中絶されない一連りを形成するのが原則である。語を單獨に發音するときはその最終音節に著しい音の低下を見るし、また一つの語句の末尾はいつも音の目だゝしい低下を以て終止してゐる。この際强さの減弱を伴ふことはいふまでもない。連語の中間においては、この種の音の低下を許すことができない。複合語の内部においては、なほさらの事である。なぜかといふと、かやうな著しい音聲の低下は、心理的に話の區ぎり、話段を指示する役目をもつもので、複合語乃至連語の中に介在することを得ないこと明白である。かくて複合語の場合にあつては、多くはその單語の接觸點に上位の高さがあらはれて、渾一統合して一語とするといふ意味が明瞭に示されてゐる觀がある。語頭における下位の高

さは複合語の内部においては全然失はれて或は中位の高さを得、或は上位の高さに昇る。これは語音連續における必然の現象であつて、連語においても事情はまつたく同一であるべきはずである。

　およそ連語において各語のアクセントの蒙る影響の第一、しかも最も一般的のものは、語の一聯を作るために高さの中絶を避ける必要から、連語中に入り來る單語の語頭の下位の高さを中位の高さまで引上げることである。たとへば「手をひいてあげます」は、テオヒォテアゲマス となる。事實上日常の會話などでは、かなり長い語句を一つながりにするものである。かやうな一區ぎりの語句は、音聲の著しい低下をその中間に置かない一つながりであり、音聲が著しく低下するところに、それぞれくぎりが生じるのである。もつとも、くぎりを作る音聲の低下は、語句・話段を終止するところのものに比すれば、その著明の程度においてまたかなり差異があるべきはずである。で、音聲の低下と語句の分節との間に深い關係のあることは、看過し得ない事實である。

アサッカラタチドーシダ。　　オヤニサイシラセナイ。

この例で語句の初頭における起伏のほか、普通にはあまり高さが變らずに續くのである。

　そしてかやうな場合には、全體として平板になるわけであるが、もと低い音節をもつてゐた部分、すなはち語頭における下の高さの存した部分は、弱くかつ短く發音されて、やはりもとのアクセント

の型を高低以外の關係で代償的に表示するのである。こゝにアクセントの代償作用を認めることができる。あるひは、もと〳〵語頭にある下位の高さの音節は、多くは低いと同時に弱くかつ短いといふ性質をかね備へてゐるものであるから、この場合に低いといふ性質を失つても他はそのまゝ存續してゐるのだと考へることもできよう。ともかく連語の一聯を生じるには、高さが著しく低下することなく進行することが必要である。

連語においてアクセントの蒙る影響の第二は、前に上の高さが來るやうな場合には、その起伏の著しさに伴つてその後に來る高さの相違がほとんどあらはれない、または知覺されないといふ事實である。すなはち顯著の高さが前景に突出すると共に、他は背景にひつこむといふ關係である。單獨に發音された場合のカラス（烏）・ホタル（螢）のやうな語は、むしろ第一・第二・第三の音節と漸次低下する進行を營むと見るべきものである。すなはち第二・第三の音節が精密に平らに進行するとは、多くの場合認めがたいのである（これは切りはなした單語の發音の場合で、語句中における同じ語の高さの布置とは、もとより同樣でない。）もしこの各音節を三段階に配當して上中下とすると、中から下への同樣な下降的進行を次の場合の助詞「にも」などに見出すであらう。

アメニモ（ニモ）カゼニモ（カゼニモ）

しかし「あめ」の第一・第二の音節間における高さの變化がアクセント知覺における前景に活躍して助詞のうちにおける高さの差異の ときは背景にひそむ。かつ一面には連語における平板化の傾向が「あめにも」の語句の場合にもあらはれて、「にも」の間における客觀的な高さの變化をもわづかなものにし、つひに平らなものにする。それは、「あめにも」を一聯の連語として區ぎりもおかずにいふやうな場合に生じる事がらである。さほどの平板化のない場合、たとへば「あめにも、逢つた」aménimo atta のやうにくぎりが次に置かれるやうな場合にも、上述の主觀的評價が助詞の内部における客觀的な高さの差異をいはゞ輕視しさらに無視して、これをほゞ變化なく知覺するのである。

助動詞の接續にあつても同樣の事實が見出される。すなはち平板式の動詞に「だらう」といふ助動詞が接續した場合に、たとへば|イクダロー|のやうに助動詞の内部における下降的進行がはつきりあらはれるが、|クルダロー|のやうに、前に上位の高さを有する連語にあつては、「だらう」の部分においての下降的進行ははつきりあらはれない。「でせう・でございませう」などにおける關係もやはり同樣である。そこで連語におけるアクセントは、次のやうに或は客觀的に或は主觀的に、助詞・助動詞などの内部における高さの差異を沒却し去る傾向を示すのである。

ヒトオフミツケル ニモ　ホドガアル（またホドガアル）

ナンテシッコイヤツダロオ

連語においてアクセントの蒙る影響の第三は、「あぶらをとる」、「ごまをする」などゝ熟して用ゐられるもの、または「ほどがある」とか「方圖がない」とかいふものなどで、もと〳〵上中型である用言「とる・する・ある・ない」などが必ずしも特に助詞の「を・が」よりも高くならないことである。すなはち連音節の高さにあまりきはだつた差異がなくなつてしまふのであつて、また一種の平板化といふことができる。もつともその形式的理解のために、往々アブラヲトルなどのやうにするが、その實際においては、全體としての高さが高くないのを常とする。この種の現象は、語義の上できはだつた地位を占めないやうな語が連音中でしば〳〵示すところの事柄である。

ひとり連語においてだけでなく、複合語の場合においても、一般に語のアクセントにおいても注意すべき一事項は、相接する二つの音節の後のものが前の音節の高さを同化しようとする傾向を、ある特定の場合に、ほとんど常に見出すことである。その特定の場合とは、前の音節が長母音・重母音または鼻音を含むものであり、後の音節が比較的低い高さをもつやうな場合である。語のアクセントにおいて、子音を伴はない單獨の母音（連母音の後部にあたるもの）が、孤立して上の高さを保つやうな ヨイ（醉）・アオモノ（青物）のごときは、ごく稀であることを述べたが、これもやはりこゝに想起

すべき事項である。「多い」が起伏式形容詞たること明白であるが、オオイのやうな型を支持し得ずにオーイとなるのや、トール、カイル、オボエルのやうな起伏式動詞たることとその活用におけるアクセントに徴して確かなものが、普通の下上中型または下上上中を保ち得ないのをも、またこゝに想起すべきである。

※大阪言葉にはオーサカ（大阪）とか、ナンヤ（何や）とか、ンマ（馬）といふやうな高さの布置を示す發音傾向があつて、こゝに述べた東京語における傾向との對照を示してゐる。またオーイ（多）・トオル（通）・カエル（返）のやうなアクセントが關東方言において聞かれるのも、東京語における傾向との興味ある對比である。

また、もと平板式である形容詞が、助詞などの接續に際してアカイガ、ツメタイノなどのやうに起伏化すると說いたのは、やはり助詞の低まる（平板式動詞にこの助詞がついて――アトカライクガ……などゝなるのは、助詞が一段低くつくためと見做される）に引きずられて、前の重母音の副音たるイが一段さがるのだと解釋される。さう見る方が、その然るべき所以を說明するためには妥當であるとおもふ。また複合語において擡頭的上中中中型を示す語が、ほとんどみな語頭に長母音・重母音または母音と鼻音との連音を含むものであるといふ事實も、こゝに想起されるべきである。四音節語に

おいて一般にこの型が極めて少いのに、かういふ特殊の構成をもつものに限つてその多數の例を見るのは、またこゝに説くところの高低運動の退行的影響にもとづくところがあると思はれる。すでに語の複合のアクセントを論究してその一般的傾向を示したやうに、先部が三音節の起伏式複合語は、その後部がもと上中型でない二音節の語に癒合するとき、下上上中中型を形成すると豫期されるのであるところが、オナイドシ、アライハリ、ヤタイミセ、ヤトイヌシ、ヨバイボシなど、みな下上中中中型を示してゐる。また接尾語がついて普通にはコドモタチ、アノヒトタチ、ワタシラなどゝなるのが、オマイタチ、オコサンタチ、ジブンラなどの例が少し型を異にするのも、こゝにさうなるわけを説明されるであらう。

東京語において長母音・重母音および母音と鼻音との連音を含む音節、したがつてかういふ音節を有する準二音節・準三音節・準四音節等の語が、アクセント關係において特異のものとして取扱はれるべき理由は、實に上述の傾向の存在によつて説明ができるのである。そしてこの音節を便宜上二音節と見做すことを許すと共に、一方においてはその特異である所以を見のがすべきでない。

註(1)第十七章第五二節「アクセント保存の傾向」參照。
(2)「國語のアクセント」(前出)六九頁

第十七章　アクセントの保存および轉化

五二　アクセント保存の傾向

前章に述べたところから知れるやうに、アクセントの二種別たる平板式および起伏式の二つの樣式が維持され保存される傾向は、複合語においても連語においても、助動詞や助詞の接續の場合についても、それ〳〵の程度であり〳〵と見出されるのである。添着といふ程度における語の連續においては、多くはその型も保存されるが、癒合といふ複合語形成の場合におけるやうな連續にあつても、アクセントの保存が、著しい傾向としてあらはれてゐることは、すでに少し說き及んだところである。そも〳〵複合語の形成に際しては、一つの統一的全體をつくるために、その成素たるもとの單語のアクセントは改造されなければならないのであつて、一般にアクセントの變化のもつとも現はれるのは、この場合である。しかもこの場合になほ、もとの單語のアクセントの姿がいろ〳〵の程度で殘り、高さの進行における傾向がおのづからある成形を示すことは、注目すべき事實といはなくてはならない。

そこでいま一層仔細に複合語形成に際して見られるアクセント保存の傾向を考察しよう。その傾向のあらはれに二樣の態樣があり、これをそれ〴〵「型保存」および「式保存」とすることは、すでに述べたところである。(1) 上型の單音節語が複合語の先部を構成するとき、その起伏式たる所以を潛勢的に保持して、その後部に至つて起伏の姿をあらはすやうなものも、式保存の特殊の場合に外ならない。そこで、アクセントの保存はこの二樣に限られるのである。

すべて複合語については、その成立のはじめに溯つて二つの成素に分け、先部および後部を區別することができる。三つまたはそれ以上の成素に分解し得る複合語にあつても、まづ二つの部分に分けることができる。のみならずそれが正當な順序である。先部を構成する單語のアクセントの複合語における保存は、その單語が起伏式アクセントをもつものであるときは、型保存もあり、また式保存も成立つ可能性があるが、その單語のアクセントが平板式のものであるときは、すべて型保存である。また後部を構成する單語のアクセントの複合語形成に際しての保存は、この單語が起伏式アクセントをもつものであるときは、型保存もありまた式保存もあるが、その單語のアクセントが平板式のものであるときは、すべて式保存である。これは複合語の全體としてのアクセント形式の形成のために必然的に生じる事がらである。

その關係をつぎのやうに表示すれば、一見して明瞭であらう。

複合語における
アクセントの保存

- 先部
  - もと平板式——型保存
  - もと起伏式
    - 型保存
    - 式保存（型がはり）
- 後部
  - もと平板式——式保存（型がはり）
  - もと起伏式
    - 型保存
    - 式保存（型がはり）

複合語の先部におけるアクセント保存の著しい傾向を次に實例について示さう。種々の單語または派生語が先部を構成し、「もの」が後部を構成する多くの語彙について、この關係を見ると、保存の傾向のきはめて強いことがわかるのである。殊にその先部が動詞からの派生語でできてゐる場合に、ほとんど例外なくその動詞の基本形のアクセントが保存されることは、單にこの場合だけでなく、他の場合に通じて一般に認められるのであつて、こゝにその一例を見るべきである。

（甲）平板式アクセントの保存—型保存

（一）體言に「もの」のついた語例

｜ケモノ（｜ケ、毛｜獸）
｜シナモノ（｜シナ、品）
｜△フタモノ（｜△フタ、蓋）
｜ヨコモノ（｜ヨコ、横）
｜イナカモノ（｜イナカ）
｜オタナモノ（｜オタナ、お店）
｜ムカシモノ（｜ムカシ、昔）
｜シバイモノ（｜シバイ、芝居）
｜モメンモノ（｜モメン、木綿）
｜ヤオヤモノ（｜ヤオヤ）
｜ガサツモノ（｜ガサツナ）
｜ウワキモノ（｜ウワキ、浮氣）
｜ローズモノ（｜ローズ）
｜ハクライモノ（｜ハクライ、舶來）

｜マモノ（｜マ、魔）
｜カナモノ（｜カネ、金）
｜キズモノ（｜キズ、疵）
｜サキモノ（｜サキ、先）
｜オトナモノ（｜オトナ）
｜コドモモノ（｜コドモ）
｜ジダイモノ（｜ジダイ、時代）
｜カワラモノ（｜カワラ、河原）
｜ヤサイモノ（｜ヤサイ、野菜）
｜△ゴフクモノ（｜△ゴフク、呉服）
｜アイヅモノ（｜アイヅ、會津）
｜ハンパモノ（｜ハンパ、半端）
｜ユ△シツモノ（｜ユ△シツ、輸出）
｜トーキョーモノ（｜トーキョー、東京）

アメリカモノ（アメリカ）　ローゼキモノ（ローゼキ狼藉）
ローニンモノ（ローニン、浪人）　イタヅラモノ（イタヅラ）
カイチューモノ（カイチュー、懐中）　トーライモノ（トーライ、到來）
ナイカイモノ（ナイカイ、內海）　モクアミモノ（モクアミ、默阿彌）
イカサマモノ（イカサマ、贋）　ランボーモノ（ランボー、亂暴）

※（例外）複合語として平板式なもののうち、先部のアクセントを保存しないものが少しある。平板化の例參照。

（二）動詞の活用形に「もの」のついた語例

キモノ（キル、着）　ニモノ（ニル、煮）
アゲモノ（アゲル、揚）　イレモノ（イレル、入）
アテモノ（アテル、當）　オキモノ（オク、置）
ウリモノ（ウル、賣）　カイモノ（カウ、買）
カリモノ（カリル、借）　キキモノ（キク、聞）
キケモノ（キケル、キク、利）　シキモノ（シク、敷）

｜シャレモノ（｜シャレル、洒落）
｜ソメモノ（｜ソメル、染）
｜△ツケモノ（｜ツ△ケル、漬）
｜ナリモノ（｜ナル、鳴）
｜ヌリモノ（｜ヌル、塗）
｜ノケモノ（｜ノケル、除）
｜ハキモノ（｜ハク、履）
｜ハレモノ（｜ハレル、腫）
｜マゲモノ（｜マゲル、曲）
｜ヨビモノ（｜ヨブ、呼）
｜ワレモノ（｜ワレル、割）
｜アバレモノ（｜アバレル、暴）
｜ウタイモノ（｜ウタウ、謡）
｜カザリモノ（｜カザル、飾）

｜スイモノ（｜スウ、吸）
｜タキモノ（｜タク、焚）
｜ツギモノ（｜ツグ、継）
｜ニセモノ（｜ニセル、｜ニル、似）
｜ヌレモノ（｜ヌレル、濡）
｜ノリモノ（｜ノル、乗）
｜ハリモノ（｜ハル、張）
｜マキモノ（｜マク、巻）
｜ヤキモノ（｜ヤク、焼）
｜ヨセモノ（｜ヨセル、寄）
｜アタリモノ（｜アタル、當）
｜アライモノ（｜アラウ、洗）
｜オクリモノ（｜オクル、贈）
｜カコイモノ（｜カコウ、圍）

カワリモノ（カワル、變）
サラシモノ（サラス、晒）
ツカイモノ（ツカウ、使）
ヒロイモノ（ヒロウ、拾）
マワリモノ（マワル、廻）
ミツケモノ（ミツケル、見附）
ナクシモノ（ナクス、無）
スタレモノ（スタレル、廢）
ワタリモノ（ワタル、渡）
ホリダシモノ（ホリダス、掘出）
キラワレモノ（キラワレル、キラウ、嫌）
クイツメモノ（クイツメル、食詰）

クラベモノ（クラベル、比）
ツモリモノ（ツモル、積）
ツヅキモノ（ツヅク、續）
ヒカレモノ（ヒカレル、ヒク、引）
マワシモノ（マワス）
フキデモノ（フキデル、吹出）
ヨゴレモノ（ヨゴレル、穢）
ワスレモノ（ワスレル、忘）
ワライモノ（ワラウ、笑）
ハタラキモノ（ハタラク、働）
コシラエモノ（コシラエル、拵）
ナリアガリモノ（ナリアガル、成上）

（乙）起伏式アクセントの保存

（い）型保存

（一）體言に「もの」のついた語例

ハモノ（ハ、刃）

シマモノ（シマ、縞）

ハナモノ（ハナ、花）

タカラモノ（タカラ、寶）

（二）動詞の活用形に「もの」のついた語例

イキモノ（イキル、生）

キレモノ（キレル、キル、切）

ツキモノ（ツク、附）

ミセモノ（ミセル、見）

スネモノ（スネル）

シタテモノ（シタテル、仕立）

ナマケモノ（ナマケル、怠）

コワレモノ（コワレル、壞）

イロモノ（イロ、色）

シオモノ（シオ、鹽）

チクモノ（チク、軸）

ショージキモノ（ショージキ、正直）

カケモノ（カケル、掛）

タテモノ（タテル、建）

タベモノ（タベル、食）

デキモノ（デキル、出來）

バケモノ（バケル、化）

カブリモノ（カブル、被）

カンガエモノ（カンガエル、考）

クワセモノ（クワセル、食）

トドケモノ（トドケル、届）
ハナレモノ（ハナレル、離）
ソナエモノ（ソナエル、供）
モーケモノ（モーケル、儲）

（ろ）式保存

（一）體言に「もの」のついた語例

アンモノ（アン、餡）
スノモノ（ス、酢）
ヒトエモノ（ヒトエ、單衣）
フーフモノ、フーフモノ（フーフ、夫婦）
ノンキモノ、ノンキモノ（ノンキ）
キヌモノ（キヌ、絹）
タネモノ（タネ、種）
ヒトリモノ（ヒトリ、獨）
フダンモノ（フダン、不斷）
ヤクザモノ（ヤクザナ）

（二）動詞の活用形に「もの」のついた語例

イモノ（イル、鑄）
ヒモノ（ヒル、干）
アミモノ（アム、編）
ウチモノ（ウツ、打）
エモノ（エル、獲）
ミモノ（ミル、見）
オリモノ（オル、織）
カキモノ（カク、書）

クミモノ（クム、組）
サシモノ（サス、指）
タチモノ（タツ、裁）
ダシモノ（ダス、出）
ホリモノ、ホリモノ（ホル、彫）
モチモノ（モツ、持）
ヨミモノ（ヨム、讀）
オトシモノ（オトス、落）
イワイモノ（イワウ、祝）
コマリモノ（コマル、困）
△ツクリモノ（△ツクル、作）
ノコリモノ（ノコル、殘）
ヨワリモノ（ヨワル、弱）
アヅカリモノ（アヅカル、預）

クリモノ（クル、繰）
スリモノ（スリ、刷）
トキモノ（トク、解）
ホシモノ、ホシモノ（ホス、干）
メシモノ（メス、召）
ノミモノ（ノム、飲）
クイモノ（クウ、食）
オモイモノ（オモウ、思）
カブリモノ（カブル、被）
トーリモノ（トール、通）
ナブリモノ（ナブル）
ユルシモノ（ユルス、許）
ハヤリモノ（ハヤル、流行）
マヤカシモノ（マヤカス）

(丙)起伏式アクセントの平板化

(一)體言に「もの」のついた語例

オトコモノ(オトコ、男)　オンナモノ(オンナ、女)

ナツモノ(ナツ、夏)　フユモノ(フユ、冬)

(備考)「夫婦者・正直者・やくざ者」なども時として平板式になるやうである。

(二)用言に「もの」ついた語例

デモノ(デル、出。たゞし名詞「で」はデである。)

ヤスモノ(ヤスイ、安)　エラモノ(エライ、傑)

ワカモノ(ワカイ、若)　ワルモノ(ワルイ、惡)

フトモノ(フトイ、太)

※ウスモノ(ウスイ、薄)・アオモノ(アオイ、青)などはアクセントを保存する。

複合語の先部におけるアクセント保存の傾向は、この例についてよく認められるであらう。この種の語例で多音節の起伏式をもつと豫期されるもののうち、たとへば「なまけもの・正直者・道樂者・のらくら者」などは、時として平板式にいふことがあり、往々いづれかにきめがたいものがある。し

かし大體についていへば、そんな場合にもアクセント保存の傾向のすこぶる顯著な事實たるを承認せしめるに足りる。

この傾向を名詞と接尾語とで構成される複合語について、なほ一應觀察しよう。いまその後部に「や」(屋)をもつやうな語例をとつて見るに、アクセントの保存は、次のやうに行はれてゐるのである。

接尾語「や」をもつ複合語

(一)平板式アクセントの保存

アメヤ(アメ、飴)　カシヤ(カシ、貸家)
カブヤ(カブ、株)　タケヤ(タケ、竹)
タルヤ(タル、樽)　トコヤ(トコ、床)
トンヤ(トイヤ、問屋)　トリヤ(トリ、鳥)
ハイヤ(ハイ、灰)　ハコヤ(ハコ、箱)
モチヤ(モチ、餅)　ムシヤ(ムシ、蟲)
フデヤ(フデ、筆)　ゲタヤ(ゲタ、下駄)

マキヤ（マキ、薪）
イカケヤ（イカケ、鑄掛）
ウエキヤ（ウエキ、植木）
クスリヤ（クスリ、藥）
カザリヤ（カザリ、飾）
コーリヤ（コーリ、氷）
ゲシクヤ（ゲシク、下宿）
ゴフクヤ（ゴフク、呉服）
タバコヤ（タバコ、煙草）
トケーヤ（トケー、時計）
シャカンヤ（シャカン、左官）
ダンゴヤ（ダンゴ、團子）
フルギヤ（フルギ、古着）
ハチャヤ（チャ、茶）

アサリヤ（アサリ）
ウドンヤ（ウドン、饂飩）
ウナギヤ（ウナギ、鰻）
オワイヤ（オワイ）
クルマヤ（クルマ、車）
コウリヤ（コウリ、小賣）
ゲーシャヤ（ゲーシャ、藝者）
*キドリヤ（キドル、氣取）
タタミヤ（タタミ、疊）
サカナヤ（サカナ、肴）
シャシンヤ（シャシン、寫眞）
フトンヤ（フトン、蒲團）
ハタゴヤ（ハタゴ、旅籠）
ムキミヤ（ムキミ、剝身）

ペンキヤ（ペンキ）	アマザケヤ（アマザケ、甘酒）
ウンソーヤ（ウンソー、運送）	インバンヤ（インバン、印判）
インサツヤ（インサツ、印刷）	カッパンヤ（カッパン、活版）
カンブツヤ（カンブツ、乾物）	カナモノヤ（カナモノ、金物）
ギューニューヤ（ギューニュー、牛乳）	セトモノヤ（セトモノ）
センタクヤ（センタク、洗濯）	ソメモノヤ（ソメモノ、染物）
シンブンヤ（シンブン、新聞）	セーホンヤ（セーホン、製本）
シャミセンヤ（シャミセン、三味線）	トーブツヤ（トーブツ、唐物）
シューセンヤ（シューセン、周旋）	テンプラヤ（テンプラ）
ユービンヤ（ユービン、郵便）	

（二）起伏式アクセントの保存

（い）型保存

ホンヤ（ホン、本）	パンヤ（パン）
イモヤ（イモ、芋）	カミヤ（カミ、紙）

コメヤ（コメ、米）
スシャ（スシ、鮨）
マメヤ（マメ、豆）
ハナヤ（ハナ、花）
ワタヤ（ワタ、綿）
ニクヤ（ニク、肉）

（ろ）式保存

カサヤ（カサ、傘）
クヅヤ（クヅ、屑）
ヤネヤ（ヤネ、屋根）
バシャヤ（バシャ、馬車）
ショーバイヤ（ショーバイ、商賣）
サシモノヤ（サシモノ、指物）
コマモノヤ（コマモノ、小間物）

スミヤ（スミ、炭）
シチヤ（シチ、質）
メシヤ（メシ、飯）
フロヤ（フロ、風呂）
クツヤ（クツ、靴）
ハタヤ（ハタ、機）

カシヤ（カシ、菓子）
コーヤ（コン、紺）
ソバヤ（ソバ、蕎麥）
ユーヤ、ユヤ（ユ、湯）
リョーリヤ（リョーリ、料理）
アラモノヤ（アラモノ、荒物）
ジドーシャヤ（ジドーシャ、自動車）

（三）起伏的アクセントの平板化

オケヤ（オケ、桶）　　イシヤ（イシ、石）
タビヤ（タビ、足袋）　　ヤドヤ（ヤド、宿）
イトヤ（イト、糸）　　カジヤ（カジ、鍛冶）
オモチャヤ（オモチャ）　　キンギョヤ（キンギョ、金魚）
タテグヤ（タテグ、建具）　　トーフヤ（トーフ、豆腐）
ドーグヤ（ドーグ、道具）　　ナットヤ（ナットー、納豆）
シルコヤ（シルコ、汁粉）　　センベヤ（センベ、煎餅）
オデンヤ（オデン）

これらの實例によつて、式保存および型保存のよく行はれることを知ると共に、一面には平板化の傾向の存立することをも認めることができる。平板化が特にあらはれて、起伏化はこゝに見出せないことも注意すべきである。

さらに複合語におけるその關係を、先部に同じものを有する語彙について比較して示したい。たとへば、先部にキ（氣）をもつものと、キ（木）をもつものとについて示すと、前者に平板式のもの、後者

に起伏式のものがあらはれる傾向を認めることができる。

（平）先部に「氣」をもつ複合語（漢語をはぶく）

（イ）平板式を保つもの丶例

キアイ（氣合）　キバヤ（氣早）
キボネ（氣骨）　キダテ（氣立）
キマイ（氣前）　キモチ（氣持）
キママ（氣儘）　キノリ（氣乘）
キヌケ（氣拔）　キラク（氣樂）
キサク（氣さく）　キガル（氣輕）
キウケ（氣受）　キガネ（氣兼）
キドル（氣取）　キバル（氣張）
キミヂカ（氣短）　キヤスメ（キヤスメともいふ）

（ロ）起伏式になるもの丶例

キバラシ（氣晴）　キガカリ（氣懸）

キグライ（氣位）
キオクレ、キオクレ（氣後）
キヂョーブ（氣丈夫）
キチガイ（氣狂）

キグロー（氣苦勞）
キヅマリ、キヅマリ（氣づまり）
キマグレ、キマグレ（氣紛）
キマヂメ

（起）先部に「木」をもつ複合語

（イ）起伏式を保つものゝ例

キド（木戸）
キヂ（木地）
キザラ（木皿）
キノコ（茸）
キヅチ（木槌）
キドル（木取）
キイチゴ（木苺）

キハダ（木肌）
キブリ（木振）
キバチ（木鉢）
キヅタ（木蔦）
キチン（木賃）
キボリ（木彫）
キツツキ（啄木鳥）

（ロ）平板式になるものゝ例

キコリ(木樵)(キコリともいふ)　キヤリ(木遣)
キヘン(木偏)

こゝに「きどる」といふ動詞が「ようだいぶる」のやうな意味のは平板式で「氣」のアクセントと照應し、材木について施す工事の意味では起伏式で「木」のアクセントに照應してゐる例のごとき、明かな對比を示す。さらに「日」と「火」、「茶」と「湯」などを先部とする複合語についても、全く同樣な關係を見ることが出來る。

(平)先部に「日」をもつ複合語

(イ)平板式を保つものゝ例

ヒブ(日歩)　ヒアシ(日脚)
ヒドリ(日取)　ヒガケ(日掛)
ヒガラ(日柄)　ヒガサ(日傘、起伏式下上中型にもいふ)
ヒゴロ(日頃)　ヒグレ(日暮)
ヒカゲ(日影)　ヒナタ(日向)
ヒノベ(日延)　ヒノデ(日出)

ヒワリ(日割)　　ヒヨケ(日除)
ヒヨリ(日和)　　ヒヅケ(日附)
ヒノマル(日の丸)　　ヒグラシ(日暮)
ヒノイリ(日没)　　ヒノクレ(暮)

(ロ)起伏式になるものゝ例

ヒドケー(日時計)　　ヒアタリ(日當)
ヒガイリ(日歸)　　ヒオーイ(日覆)

(起)先部に「火」をもつ複合語の例

(イ)起伏式を保つものゝ例

ヒバチ(火鉢)　　ヒバシ(火箸)
ヒバナ(火花)　　ヒブタ(火蓋)
ヒノコ(火の子)　　ヒノテ(火の手)
ヒイレ(火入)　　△ヒケシ(火消)
ヒノシ(火斗)　　ヒモト(火元)

ヒッケ（放火）　ヒゼメ（火責）
ヒアブリ（火炙）　ヒバシラ（火柱）
ヒブクレ（火脹）　ヒノバン（火の番）
ヒノヨージン（火の用心）　ヒドル（火取、火にあぶる）

（ロ）平板式になるものゝ例

ヒノミ（火の見）　ヒノクルマ（火の車）

（平）先部に「茶」をもつ複合語

（イ）平板式を保つものゝ例

チャバラ（茶腹）　チャボン（茶盆）
チャダチ（茶断）　チャダイ（茶代）
チャメシ（茶飯）　チャミセ（茶店）
チャノマ（茶の間）　チャノユ（茶の湯）
チャサジ（茶匙）　チャセン（茶筅）
チャシャク（茶杓）　チャタク（茶托）

チャシツ(茶室)　チャシブ(茶澁)
チャソバ(茶蕎麥)　チャウケ(茶請)
チャウス(茶臼)　チャワン(茶椀)
チャヅケ(茶漬)　チャヤ(茶屋)
チャバン(茶番)　チャイロ(茶色)
チャダンス(茶簞笥)

(ロ)起伏式になるものゝ例

チャガマ(茶釜)　チャガシ(茶菓子)
チャツミ(茶摘)　チャドコロ(茶所)
チャバシラ(茶柱)　チャドーグ(茶道具)

(起)先部に「湯」をもつ複合語

(ハ)起伏を保つものゝ例

ユバ(湯葉)　ユバナ(湯花)
ユゲ(湯氣)　ユナ(湯女)

ユセン（湯錢）　ユブネ（湯槽）
ユアカ（湯垢）　ユドノ（湯殿）
ユモト（湯元）　ユーヤ（湯屋）
ユノミ（湯呑）　ユザメ（湯冷）
ユアガリ（湯上）　ユガク（湯がく）

（ロ）平板式になるものゝ例

ユカタ（浴衣）

以上の語例のうち、先部の語のもとのアクセントを保存しないものには、後部の語のもとのアクセントによつて影響されたものが少くないことも、こゝにあはせて留意すべき點である。

平板式對起伏式の對立は、用言の場合に最も著しいのであつて、アクセントの保存が動詞の活用形に接尾語を連ねた語例において最も徹底的に最も遺憾なく行はれてゐるのは、「もの」のつく場合にも見られたが、それはむしろ當然であらう。動詞の活用形に「て」といふ接尾語がついて「何々する人」の意味をあらはすとき、そのアクセント保存は例外なしに行はれ、平板式動詞からは平板式の名詞を作り、起伏式動詞からは起伏式下上……型の名詞を作ること、次の例の示すとほりである。

接尾語「て」のついた語例

(一)平板式動詞との接續

シテ(スル、爲)　キキテ(キク、聞)

イイテ(ユウ、云)　ノリテ(ノル、乘)

カタリテ(カタル、語)　ウタイテ(ウタウ、歌)

ハタラキテ(ハタラク、働)

(二)起伏式動詞との接續

キテ(クル、來)　ミテ(ミル、見)

ヨミテ(ヨム、讀)　カキテ(カク、書)

カセギテ(カセグ)　ハナシテ(ハナス、話)

モグリテ(モグル、潛)

また接尾語「さう・やう」が動詞の活用形につき、「さう」の方は形容詞の語根にも連つて、平板式用言からは平板式の、また起伏式用言からは起伏式下上……中型の語を構成する。この場合のアクセントの保存も例外なしに行はれる。

接尾語「さう・やう」のついた語例

(一)平板式の保存

シソー、シソー(スル、爲)
アタリソー(アタル、當)
アサソー(アサイ、淺)
ショー(スル、爲、しかた)
アライヨー(アラウ、洗)
イキソー(イク、行)
ハジマリソー(ハジマル、始)
ツメタソー(ツメタイ、冷)
ヤリョー(ヤル、遣)
コシラエヨー(コシラエル、拵)

(二)起伏式の保存

デソー(デル、出)
ハイリソー(ハイル、入)
コソー(コイ、濃)
ナサソー(ナイ、無)
イタソー(イタイ、痛)
ミラレソー(ミラレル、ミル、見)
フリソー(フル、降)
カタヅキソー(カタヅク、片附)
ヨサソー(ヨイ、善)
ンマソー(ンマイ、旨)
オモシロソー(オモシロイ、面白)
アイタソー(アイタイ、アウ、會)

ミヨー（ミル、見、みかた）　ツケヨー（ツケル、附）
アルキヨー（アルク、歩）　アツマリヨー（アツマル、集）

複合語の先部においては、その程度に多少があるものゝ、右に述べたやうなアクセントの保存の傾向を認めることができる。複合語の後部においては、その後部を構成するものが制約的である場合について、アクセントの保存を說き得るのである。複合的體言の語例には、後部におけるアクセント保存を認め得るものが多くはないのであるが、複合的用言の語例について見るならば、この種の傾向を示すものが少くない。

派生語ともとの語との間のアクセントの照應も、アクセント保存の傾向の著しいあらはれである。活用におけるアクセントの變形に際しても、やはりこの傾向を看取することができることは、すでに詳細に說述したところである。

かやうに、語の複合・派生・活用・接續に伴ふアクセントの變形に際しても、アクセントの二種別たる式が保存される傾向は、すこぶる廣くあらはれ、その根づよさを思はせるものがある。たゞにその式がかく保存される傾向を示すのみならず、アクセントの型も大抵の語の連接に際しては保存される傾向を示し、かなり安定な成形たる所以を示すのである。語のそれぞれにおのづから一定のアクセ

ントの型を表象することが出來るのは、種々の連接においてその姿をあらはすことの可能性があり、一定の高さの進行を保持することを認められるが故に外ならない。そしてまた、かやうな一定のアクセントを發現させる條件は、心裡における語の表象の不可分的屬性をなすアクセント成態に外ならない。このアクセント成態は、必ずしもその結構を明瞭に知覺されてゐず、多くの塲合にいはば渾然たる一種のアクセント感として意識に上るにすぎないであらう。しかも發音者はその一種の感じに統制されて、日常特に心を用ゐてするといふのでもない會話などにおいても、よく型にはまつた、しかも機に應じて變化のよろしきを得る高さの進行を營むのである。また聽取者は、このアクセントの如何によつて語義の理解を適切にすることを得、特に意をアクセント形成の如何といふ點に用ゐずに、しかもよくその効用を享受するのである。

實に普通の塲合、また普通の人にとつて、語のアクセントが一定の型として明瞭に表象され知覺されるといふことはないのである。上述のごときアクセントの形式は、學的態度を以てする觀察と比較研究との結果によつて定立されたものである。アクセント感は、單一で渾然たる未分の感じである。旋律やリズムの印象も、その音程や强弱の關係をまだ知らないでゐるかぎりでは、含蓄あるしかも不分明な單一の經驗である。これに反省の眼をむけ、その部分と部分との關係を摘出し、その細部をつ

ぎ〳〵に照明することによつて、その構造を知るに至るのである。アクセントの印象も、まつたくそれと同樣であつて、日常の談話において見るやうに、話し手も聞き手も、もつぱら注意を言葉の意味の方に向けるので、したがつてどんな言葉・文句を用ゐたか、アクセントがどうであつたかを後に回想するさへ出來ない場合が多い。ところが、日常の談話に際しても、特に異樣なアクセントは、一種のショックを與へて、つひにはそれに注意をひくやうになる。そこに全體としての感じの色合にちがひがあり、いはゞ調子にそぐはないところを生じるのである。これは音樂の演出における失策、調子はづれの場合と趣が似てゐる。たとへば東京語の談話中に急に大阪言葉のアクセントを入れた場合にはそこにたちまち不調和が感じられ、チグハグの思ひ、または異色の情趣があらはれる。そしてその印象はつよく意識を捕へるのを常とするが、しかし果してどこに相違がひそむかの追究に至ると、この異樣の感じそのものゝ分析を以てしては成就しがたいのである。すなはちその定立のためには、觀察し、模倣し、比較するなどの用意を要する次第である。

かくて、日常生活における言語のアクセントの使用は、直接に明瞭なアクセント形式の知覺に導くのではなくて、それに伴ふそれ〳〵の感情、すなはちアクセント感に導くものである。そしてこの感じが、かの平板式と起伏式とにおいて大いに色合を異にする。そのことは、アクセント保存の傾向を

察するとき、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。起伏式中の諸型にも、それ〴〵特異の感觸を伴ふことはいふまでもないが、その相互間に相似たところの感情的効果を有するやうな型の一對を見出し得るであらうとの豫期は、起伏式における型の變化と式の保存とのすこぶる正規的に行はれてゐるといふ一事が、十分これをはぐゝむに足りる。特に用言の活用において、或種の型と型との間に照應の關係の存することを察せしめるに十分なものがある。のみならず、體言のアクセントが時代を閲して次第に變遷したものゝうちに、この種の親近の型から型への推移を遂げた例を比較的多數に見出し得るのである。こゝに一つのアクセント轉化の方向を探り求めることができる。

しかし、起伏式の一型から他型への推移だけにアクセントの轉化を限ることはできない。アクセントの式の變化、すなはち平板化および起伏化のやうな式がはりも、事實上あらはれるのである。この場合については、照應の關係を云爲することができないが、どういふ種類の語彙においてこの種の轉化が行はれるかを見るならば、おのづから悟るところがあるであらうし、一般に東京語のアクセントの推移に關して推定を下す據りどころを與へるものがあらう。

五三　アクセントのすべりおよび平板化

一般にアクセントの推移ば、きはめて徐々に行はれ、多くの年代を經てつひに新しい型を確立するにいたるものと考へられる。その點は、一般に音聲の轉化についても通じていふことができる。したがつて、その研究は歷史的に各時代におけるアクセントを比較してその差異の如何を探り、沿革を尋ねることを必要とする。が、この問題に對しては、ほとんどいふに足るほどの史料がなく、語音の轉化に關してよりも一層徵すべき文献に乏しいやうなわけである。いまこゝに少し說き及ばうとするのは、わづかに現時の東京語においてアクセントの動搖しつゝあるものを見出し、これを推測の所依とし、かたはら各地方言のアクセントの模樣をも參照して描き出した、アクセント推移の推定方向である。

まづ東京語のアクセントにおいて、往々見るところの型がはりは、どういふ風にあらはれるか。すでに說いたやうに、二音節の固有名詞に上中型が多く、特に女の名が原則としてみな上中型であることは、著しい事實である。たゞ第一音節が無聲化される場合には、この上中型が支持されないこと明白であつて、必然何らか他の型をとらなくてはならない。元來無聲化の現象は、二つの無聲子音の中間に介在する母音、特に「イ・ウ」が、同化によつてこゑを失ふのであるが、その際アクセントの如何がこれをあまり左右し得ないのである。强めのおかれてゐる音節における母音が轉化しないとか或は

しがたいとかいふことは、ヨーロッパ語については普通に說かれることである。しかし國語のアクセントの場合には、上位の高さを與へられるべき音節も、無聲化の條件が具備するときは、すこぶる容易に無聲化をうけるのである。もとより無聲化を抑制する傾向を示す場合も、まつたくないのではない。しかし上位の高さをもつ筈なのに、無聲化の條件に規定されて無聲化したやうな例は、東京語において事實上非常に多く、その反對の場合はむしろ稀である。たとへば固有名詞でも、名字（姓）にはキタ（北）・クキ（九鬼）のやうに無聲化される例が多く、キシ（岸）のやうにいふものは少い。女の名の場合には、この種の母音がみな無聲化されるのであるが、その際アクセントの型はどうなるかといふと、前に述べたとほり、かならず下上型になるのである。(2)

動詞と助動詞との接續に際して無聲化を生じることがしばしばあるが、その場合にもゝとよりアクセントの式保存の傾向は認められる。平板式動詞「する（爲）・しる（知）・ちる（散）」などが助動詞「た」に連るときは、それぞれシタ・シッタ・チッタなどのやうにやはり下中型を示すのである。これと反對に、「くる（來）・きる（切）・ふる（降）」などが「た」に連るときは、普通ならば上中型でキタ・キッタ・フッタなどゝなるはずであるが（そして現に各地の方言にこの種のいひ方があるのであるが）、第一の母音が二つの無聲子音に挾まれてゐるために無聲化を蒙らずにはゐられないので、したがつて上

中型は支持されなくなる。そしてその代りにあらはれる型は、外でもない起伏式のも一つの型である下上型であつて、すなはちキタ・キッタ・フッタとなるのである。その平板式動詞から出たものとちがふことは、これに「さう・やう」などをつけて見ると明らかにわかる。またこれらの動詞に「て」がついた場合にも同様で、兩式の相違は、これにさらに「ゐる・しまふ」のやうな語をつゞけてみるとよくわかる。シテイル・シテシマウはイッテイル・イッテシマウなど〻同じく平板式であるが、キテイル・キテシマウはミテイル・ミテシマウなど〻同じく起伏式であつて、たゞその型がちがふ。そこで「きた・きった・ふつた」や「きて・きって・ふって」は、もと〳〵上中型であるべきのが、無聲化されたために下上型になつたとしなければならない。

單獨に發音されたときの「拭く」と「吹く」とは、普通區別しがたく、共に第一音節が無聲化されて、共に高さの進行が上昇的である。[3] ところがその活用形において第一母音のこゑが囘復されると、二つの動詞のアクセントは、平板對起伏の明かな對比をあらはすのである。たとへばフイタといへば「拭いた」であつて、フイタといへば「吹いた」である。さういふ點を思ひあはせると、「拭く」は平板式動詞でフクであり、「吹く」は起伏式動詞でフクであることがわかる。なほ接續助詞「と」をつけてみると、

かぜがフクトさむくなる。

よくフクト、つやが出る。

のやうに、一方が下中型で、他の一方が下上型たることを、たゞちに知ることができる。そこで、もと〳〵二音節の起伏式動詞として上中型をもつべき「吹く」が、無聲化といふことのために下上型になつたものと見なければならない。

動詞から派生された名詞を、そのもとの動詞の基本形と比較して、アクセントのかはり方を見るにまた規則正しい照應の關係を見出すのである。すなはち一般に、平板式動詞からは平板式名詞を、起伏式動詞からは起伏式名詞を派生する次第である。特に二音節語について見るに、下中型の動詞からは同じ下中型の名詞が出、上中型の動詞からは型がはりの下上型の名詞が出ること、次の例の示すところである。

(一)平板式名詞の派生

オス(押)――オシ　　ウル(賣)――ウリ

カス(貸)――カシ　　ヒク(引)――ヒキ

タス(足)――タシ　　ヌル(塗)――ヌリ

ヘル(減)――ヘリ　　マウ(舞)――マイ

ナル(鳴)——ナリ　　ヤク(燒)——ヤキ

(二)起伏式名詞の派生

カツ(勝)——カチ　　サス(差)——サシ
ソル(反)——ソリ　　トグ(研)——トギ
ホル(掘)——ホリ　　ウム(膿)——ウミ
モツ(耐)——モチ　　ヨウ(醉)——ヨイ

こゝにも上中型と下上型との親密な關係を見るべきである。すなはち上中型が一轉すれば下上型となるといふ關係の存することを、一般に察することができるであらう。語の複合におけるアクセントのかはり方についても、この傾向のあらはれを見たのである。してみると、語のアクセントが、上中型から下上型へ、またはその反對の方向へ轉化することの可能性が認められる。この種の轉化は、方言におけるアクセントの比較において、多くの實例を見出し得るものである。いま推測を恣にすることが許されるならば、關西語に數多く聞くところの上中型の諸語は東京語において下上型となつてゐるものが少からずあり、さらに關東・東北方言などにおいて時々上上型となつてゐるものが見出されるのであるが、奥羽地方において一層多くの下上型を見出すにいたるといふやうな分布が想像される

のである。

上中型から下上型への轉化、またはその反對の方向への轉化は、アクセントの山が一音節だけ後方へ、または前方へずれるために生じるものと見て、これをアクセントのすべりと名づけることができる。アクセント成形は前例における第一音節の無聲化に際して一音節だけ後方へすべり、また用言の活用形の轉用（名詞の派生）に際してもまた後方へすべつたのである。オヤコ（親子）の複合語の先部は、もとオヤといふ單語である。もとの下上型は、複合語の先部において上中の高さにかはつたのであつて、アクセントの前方へのすべりの一例と見られる。前方へすべる場合はあまり例が見當らないが、後方へのすべりは、すこぶる例が多く、二音節語については、もつとも普通の轉化の仕方である。

三音節または四音節の起伏式動詞から下上型の名詞が派生されることは、一々例をあげることを要しないところである。また形容詞の語根に「み」や「げ」などがついて出來た名詞にもこのことが見られた。タヨル（頼）といふ動詞から出た名詞がタヨリのやうに上中中型になつてゐる例は、動詞からとしては比較的めづらしいものであるが、形容詞の基本形とその「く」の活用形との關係は、前に示したやうにまさに下上中型から上中中型への推移である。

※ナガスㇾ（流）から出たナガシは、井戸・臺所などの一部の名稱に用ゐられ、ナガシといふ別の型が浴場の一つの術語として用ゐられる。

また複合語における起伏式アクセントの潜勢的保存と見られるヒモノ（干物）・エモノ（獲物）・ミモノなどの例、およびメダマ（眼球）・タウエ（田植）・ヒノシ（火斗）などの例は、ハモノ（刄物）・メガネ（眼鏡）・タニシ（田螺）・ヒバチ（火鉢）などの例と比較して、上中中型と下上上型との間に存する親密な關係を思はせるに足りる。こゝに、もと上中中型のものが一轉して下上上型となるといふことを想定すれば、前に述べた下上中型からの下上上型の派生、および下上中型から上中中型への推移のほかに、なほ上中中型から下上上型への轉化を認めることになる。この第三の場合は、二音節語における上中型から下上型への轉化と相似るものであるが、そこにアクセントのすべりと共に、潜勢的保存の力のはたらくことを考へるべきであらう。

上中中型から下上中型を生じるアクセントのすべりは、ごく普通の現象である。固有名詞においてはキタノ（北野）・フタミ（二見）に見る下上中型以外に、姓氏におけるアクセントは、ほとんど上中中型と下中中型とに限られてゐる。下上中型が前者に親近であることは明かで、これから出たものであると察しられる。また文語における三音節の形容詞の起伏式のものは、ナガシ（長）・ツヨシ（强）・シ

ロシ(白)などのやうに上中中型に發音されるものであつて、口語における下上中型ナガイ・ツヨイ・シロイなどがこれから轉じて出たと見るのは不當ではなからう。現に關西語にはかうした擡頭的形式を口語に用ゐてゐるものが多く、大阪などでは東京語における起伏式形容詞ナガイをナガイとするのみならず、平板式のものツライ(苦)・アライ(荒)をもツライ・アライなどゝするやうな次第である。かやうに、この起伏式の三つの型の間には、互に相通じる密接な關係があり、そのアクセント感においてもおのづから相似た色合をもつものと認められるのである。

四音節の複合語の先部においては、もとの上中型は下上の高さに、上中中、下上中または下中中型は下上上の高さに改造されること、すでに說いたところである。しかるに、まれにはオニババ(鬼婆)のやうに、オニ(鬼)といふ下上型がかへつて上中型の高さにかはつた例を見るが、これは興味ある事實である。また形容詞でオーキー(大い)がオーキクとなり、またオーキニといふ副詞を派生するなど、語頭に長母音重母音および鼻音を含む語のアクセントが特殊の關係を示すことなどから、上中中中型が起伏式の他の型から導き出されることを推定しがたくはない。

複合語における先部の起伏式の波及を示す例は、少數ながら前に揭出したところである。下上中中型を豫想されるもので、しかも下上上中型となり、あるひは下上上上型となつた語は、アクセントの

波及といふことで說明されるが、その說明はとにかくとして、この種の諸型相互間に親近の關係の存することを察せしめる例と見ることは、何等の差支もないことである。

下上上中型の起伏式用言から活用によつて、または接尾語の接續によつて下上上上型の名詞が派生されるといふ事實も、すでに述べたところによつて明かであらう。かういふ手續で出來たもののうちニギワイ(賑)・アラソイ(爭)・ハカライ(計)のやうに最後に重母音を含むものが下上上中型となることは當然であるが、タノシミ(樂)・サエズリ(囀)なども、まゝ下上上上型のかはりに下上上中型で發音されることが東京語において觀察されるのである。一部において下上上上型のカミナリ(雷)・ノコギリ(鋸)・ナギナタ(薙刀)のやうな語をも下上上中型に發音するものがある。この事實は、この二つの型の間に轉化の可能なことを示すものであつて、方言の比較においてこの關係が一層明白に實證されるであらう。

その他の多音節語についても、如上の關係を認めることは困難ではない。かやうにして起伏式の諸型の間に轉化の迹が示され、これによつてそこに轉化の可能であることを推察させるのであるが、さて實例において如何やうにあらはれてゐるかを求めるときは、これを擧示することが困難であることを免れない。何となれば、アクセント轉化が長年月を經て行はれる事がらであるのに、これを過去に

徵すべき文献が存しないからである。そこで勢ひ現時において實際あらはれてゐるアクセントの動搖の點を捉へ、これを近い過去におけるあらはれに比較して、その推移の方向を推測するといふ道に出るより外はない。すでに轉化の可能性を推究した上からは、この種の推定は必ずしも不可能事ではないと思ふ。

語のアクセントは、長い間の發音上の習慣から、つひに固定して一定型を示すに至つたものと考へられるのであつて、今日においてはいはゆる新語を除く外、みなそれぞれ一定の型をもつてゐる。しかし、諸種の型の中について見れば、比較的に不安定なものがあつて、往々動搖を示すことを免れない。かつ、品詞の轉用または語の連接上の習慣などが新に生じるために、語のアクセントが影響を蒙ることは、勢の然らしめるところである。新語でなくても特に不安定なアクセントの型を有するものが、不用意の發音に際してまゝ型をはづれることは見られるのである。

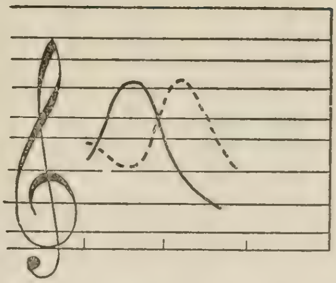
たとへば「雨が降つて來た」といふ語句を不用意に發音するとき、その高さの進行が次のやうになることもないではない。

アメガフッテキタ

これを耳にしても、多くはあまり不自然な異樣な感じを起さないで、アクセントの型からはづれてゐ

ることに氣がつかず、間違が聞きもらされるといふことがある。もしこの際アメガ……のやうに間違へて發音したとするならば、發音者も氣づかずに棄てゝおくことがなからうし、聞く人は必ず「飴が……」と解してをかしいと思ふであらう。アクセントの型としては上中型と下上型とは、はつきり區別されるものであると普通に考へられるが、實際の高さの進行について見ると、上中型といひ下上型といふも、高低曲線の山と谷との位相の異なりと見做しても大きな間違ではないほど、兩者の間に親近の關係が認められるのである。すなはち波の山がアの音節に當つてゐるか、メの音節に當つてゐるかの異なりと見ることが出來るのであつて、高低曲線の波形が一音節だけ後方へずれることによつて上中型のアメが下上型のアメとなる次第である。しかもこの際高低曲線の波形の山が生じることは兩者に共通であつて、すなはち起伏式アクセントの起伏式たる所以のものがこゝに存するのである。かやうにアクセントのすべりの可能であるわけは、語音の高さがもつぱらこゑの高さ、換言すれば聲帶の振動の頻數によつてゐて、それ〳〵の語音と相卽的關係をもたず、獨立に變化し得るものであるところに存する。

第五七圖



同樣な事情の下に、ヒバチ（火鉢）・メガネのやうな上中中型の語が、ヒバチ・メガネのやうに下上

中型に類して發音されたのを觀察したことがある。これも疑もなく同樣に說明されるであらう。カチマケ(勝負)ともカチマケともいはれ、カミサマ(神樣)ともカミサマともいはれ、オテダマに對してテダマとされるなども、かういふアクセントの轉化の一例とすることが出來よう。

かやうなアクセントのすべりは、もし語が單獨に發音されてゐるならば、おそらくは生じる機會を得ないであらう。名詞は主語とし、或は客語として助詞を添へて用ゐられるので、その連音上の位置は、いつもそれ〳〵の連音系列の先頭にある。名詞に形容詞が冠せられるやうな場合にも、形容詞だけ連音の一系列を作り、また名詞と助詞との連りだけが一系列を形成するといふ風に、おのづから區ぎりが出來るのが普通である。かく連音系列の先頭に來る名詞は、語のアクセントの一般的傾向としてあらはれる低頭的傾向、すなはち第一音節を低く始めるといふ傾向に影響されずにはゐないのである。アメを單獨に發音すれば、二音節の全體を通じて高低曲線の一つの高まりがあり、その頂點がアの部分に當るといふ次第である。しかるにアメガの連音系列にあつては、やはり全體の三個の音節が高低曲線の一つの高まり、一昂波に包括されるのであるが、三音節の語彙に漸く上中中型の少くなるやうな傾向と同じ傾向がこゝにもその萠芽をあらはすことは、豫想しがたくない。三個の音節を統一するためには、高さおよび強さの頂點が二個の音節を統一する場合よりも一層後方に位することを利

益とすると想像される。この關係は、强さアクセントの場合にも見られるところである。また語の連接の緊密となるに伴つて、だん／＼アクセントの重心が第一音節を去つて第二音節に移る傾向の著しくなることは、すでに語の複合について詳細に吟味を遂げたところである。これらの事情からして、アクセント轉化の趨動が孕まれ、アクセント感の明瞭を缺くに乘じて型の動搖を生じるに至る。これはアクセント轉化の過渡的狀態であつて、すなはち前揭の例にあらはれるものはその微弱なあらはれ方と見るべきものである。この種の傾向は、つひにアクセントの型を變化し定立して、アクセント轉化を完了するにいたるのであるが、これはもとより一朝一夕のことではない。

アクセントの轉化は、たゞアクセントのすべりによつて結果されるだけではない。諸方面にかすかにその趨向をあらはし、その消息をうかゞはせるところのかの平板化の營力が、語のアクセントを改造するにあづかつてゐるものであることを察しなくてはならない。すなはち起伏式の一つの型から他の型への轉化ではなくて、そも／＼起伏式そのものを平板式に改めようとする傾向がそれである。

單音節または二音節の字音から出た語彙について示したとほり、概して支那傳來の字音は、上型・上中型であるが、その慣用すでに久しく、國語として十分消化されてゐるやうな語には、下型・下中型（まゝ下上型）を見ることが多い。そして當初これらの語彙がみな上型・上中型をもつものであつ

たらうといふことは察しがたくないのである。傳來の當初は上型・上中型であつたものが、漸く慣用されてその型に分化を生じ、これが定立して今日見るやうな分布を示すに至つたものに相違ないと思はれる。たとへば「書」が「ほん」の意味で用ゐられる場合には上型であるが、これは口語に緣の遠いものであつて、普通に用ゐられる「筆跡」などの意味では下型である。二音節語について見ると、「曲・俗」などが二とほりのアクセントをもつてゐる。文語に「曲直・淳風美俗」などにおける意味で用ゐるものは必ず上中型であるが、「曲もない」や「俗に……といふ」などの場合には、下中型である。漢文風に「東海の產」などいふときの「產」は上中型であるが、分娩の意味では下中型である。「禮」については前にのべた。「代」は、ダイとダイとの二とほりがあり、前のは「世代・代々」などの意味に用ゐられるもので、後のは「代金」の意味または「代理・代人」の意味でのみ用ゐられる。これらは語義も轉じアクセントも轉化したもので、そのもとの語義では擡頭的であつたのである。

前に述べたやうに、アクセントの動搖は特に新語について例を求めるべきである。いまその顯著な例として揭げないわけにいかないのは、自稱の代名詞「僕」および時を示す名詞「午前・午後」である。これらは、或は上中型、上中中型に、或は下中型、下中中型に發音されるといふやうに、場合に應じて異なるものである。しかもそれが必ずしも個人的に定まつてゐるのではなくて、むしろ語句の

中におけるその語の位置によつて型がちがふやうな有樣である。或はまつたくさういふ規定をはなれて任意であるとも思はれる。とにかく平板、起伏の二樣のアクセントが共に行はれてゐるのである。この種のアクセントの二樣性は、新しく出來た漢語にも例を求めることができる。「電話・電車・會社・映畫・檢查・店員・敎員・病院・軍艦・藝術・音樂」などの語例において、平板式および起伏式（撞頭的）の二樣のアクセントが多少とも行はれるのを見ることができる。「試驗」のごときもシケンを普通としようが、また、シケンのやうにもいはれるのである。バシャ（馬車）をバシャといふのやケンサ（檢查）をケンサといふのは、東京語にあつてもまだ耳なれないやうな感じをいだかせるであらうが、カイシャ（會社）・ビョーイン（病院）・グンカン（軍艦）などゝ發音するのは、もはや普通とはいへなくなり、ダイガク（大學）のやうなアクセントが、もはやすたれて用ゐられないやうな形勢になつたのは、注意に値ひする事實である。かやうにアクセントの動搖を示す語が、漸次平板式の方に傾くといふ有樣は、特に使用の頻繁なものについて根氣よく觀察するならば、次第に明かに眼底に映じてくるであらう。

このアクセントの推移の傾向は、現時頻繁に使用される卑近な外來語について一層容易に看取することができよう。すなはちこの種の外來語に、今アクセントの過渡的狀態にあるものゝ少くないこと

を見出すのである。著者の觀察によるに、外來語ボール（球）について甲乙は共に上中中型および下中中型の二樣のアクセントを認め、丙はボール（球）に對して別の語ボール（ボール紙）を區別した。ボート・ボールについては、甲は上中中型だけを認め、乙はその他に下中中型をも認め、丙は前者に上中中型を、後者に下中中型を認めた。ピヤノについては、甲は二型を共に認め、乙は二型を認めながらもむしろ下中中型を可とし、丙はもつぱら下中中型に限つて、上中中型ピヤノを田舍風のアクセントとして感じるといふ。この種の語例については、同じく東京語を語る人であつても、その年齡と周圍とによつてアクセントの趨異を示すのである。殊にその語を頻繁に使用する社會においては、たとへば野球やボートの選手とかファンとかいふやうな人の間では、ボール・ボート・オールの方が行はれてゐる有樣である。インキについても、甲は二型インキおよびインキを認め、乙は多少の疑問を挿みながら二型を認め、丙はもつぱらインキをとる。すなはち大體インキがこゝでは優勢である。あるひはインキ（陰氣）との混同を避けるために平板化されにくいのであらう。ガラスにいたつては、乙だけがガラスおよびガラスを認め、甲と丙とは共にガラスの方だけを認めて擡頭的のものを排した。ボーイのごときも今日ではほとんどボーイで、ボーイはすたれた觀がある。ビールはまだビールの型を殘してゐるやうであるが、ビールとする方が優勢になつて來た。かやうな語例に對する各個人のアク

セント感に、かうした不一致が見出されるのは、興味ある事がらである。アクセントの動搖を示すデンワ(電話)・デンシャ(電車)の例では、甲乙丙の三人共に一樣のアクセントを認めてゐるのであるが、外來語については、かやうに一致しないのである。この事態は、アクセント推移の種々の位相を示す言語社會の並存・混在を思はせるものである。

アクセント平板化の傾向は、さらに固有名詞の場合についても見ることができる。三音節の名字(姓)には上中中型のものと下中中型のものとがあること、前に述べたとほりであるが、同じ固有名詞が個人的に異なる型を示す例も見られる。もと〳〵固有名詞の二音節・三音節のものは、普通名詞とちがつて擡頭的形式を示す著しい傾向があるが、語の使用の頻繁であるのに伴つて平板化の營力の作用する機縁が與へられ、形式の漸變を生じるにいたるのである。このことは、次の事實についても察することが出來るであらう。たとへば三音節の地名について、遠隔の土地で東京生活とあまり交渉のないやうなものは、多數が上中中型を保つてゐること次に示すやうである。

キョート(京都)　　ナゴヤ(名古屋)
オタル(小樽)　　サカイ(堺)
トヤマ(富山)　　オーツ(大津)

ナガノ（長野）　クルメ（久留米）
コーチ（高知）　ヒメヂ（姫路）
コーベ（神戸）　アキタ（秋田）
ツルガ（敦賀）
※フクイ（福井）　コーフ（甲府）
ヤワタ（八幡）　コクラ（小倉）

これらの地名は、その土地の發音でどうなつてゐるに拘らず、東京語ではまづ多くこのやうな擡頭的形式を與へられるのである。これに比して、東京市内または近郊におけるものを見ると、この種の型が大層少くなつて、平板式のものが優勢であることがわかる。

（平）ギンザ（銀座）　ウエノ（上野）
ヒビヤ（日比谷）　カンダ（神田）
シタヤ（下谷）　アザブ（麻布）
ヨツヤ（四谷）　ホンジョ（本所）
メジロ（目白）　スサキ（洲崎）

ヨヨギ（代々木）　コマバ（駒場）
ハシバ（橋場）　ダイチ（代地）
△ツキヂ（築地）　ヤナカ（谷中）
シブヤ（澁谷）　アライ（新井）
センジュ（千住）　オージ（王子）
ヒロオ（廣尾）　ネリマ（練馬）
ナカノ（中野）
（起）ネギシ（根岸）　ワセダ（早稲田）
クダン（九段）　メグロ（目黑）
スガモ（巣鴨）　タバタ（田端）
ミノワ（三輪）

かやうにアクセント形式の平板的に傾くところに推移の方向がおぼろげながらあらはれると思ふ。
平板化と名づけるのは、起伏式の語、またはアクセント保存の理から起伏式を與へられることを當然豫期されるやうな語に平板式アクセントが與へられることをいふのであつて、アクセント形式の改造

における有力な規定原理であることを認めないわけにいかない。東京語における平板化の傾向の存立は、上來の說述によつて首肯されるであらう。東京語が比較的多數の平板式の語彙をもつ所以は、[4]この平板化によつて生じたところであると考へられる。語の複合に際してのアクセントの起伏化に對しこれと抗爭するところの平板化の傾向を併せ考へるとき、はじめてアクセント化成の趨向の那邊に究極するかを推究することができるのであらう。

平板化は東京語におけるよりも關東方言において一層著明であり、東北方言においてさらに優勢であるやうに思はれる。その點は、一般に關西語に對して著しい對比を示すのである。こゝに注意すべきことは、特に東北方言などにおける單語のアクセントの定立にあつては、單語を切りはなして高低關係を考察するのでは、その眞相を得がたい。かならず語句のうちにおけるものについて、或は少くとも助詞をつけたものについて、平板ならびに起伏の傾向を察しなければならないのである。アクセントのすべりがすこぶる頻繁にあらはれて、型がはりが生じやすく、起伏の勢が往々助詞にまでも及ぶと考へられるのである。

五四　アクセント化成の能因

アクセントの型の變化を生じる因緣たるアクセントのすべりと、アクセントの式の變化を來す因緣たる平板化および起伏化の傾向については、前二節において一應考察を遂げたのであつて、特に新しい造語・外來語および複合語の場合についてその實例を見た。しかるに、アクセント形式を變化する能因は、單にこの種の語彙に作用するだけでなく、すべての語のアクセントがその作用を蒙るわけであり、不安定な形式が次第に動搖して一旦その適歸するところを失ふやうな過渡的時期を經過し、次第に在來の語と異なるものに安定を見出すに至つて、つひに新しい型を獲得し、アクセントの變化を完了する次第である。そこで、アクセント形式を改め變へる力は、やがて別の形式のアクセントを定める力であるとしなければならない。すなはちアクセントを變化し、さらにこれを成就する力である。このアクセント化成の營力は、所在にその作用を加被するものであるから、今日において語のアクセントがおほむね固有の型を示してゐるのであるが、涓滴の石を穿つやうな絶えずはたらくところの力の「場（バ）」におかれるならば、漸く變化してその「すがた」をかへるにいたるのが當然である。

その歴史的變遷の證左を各地の方言におけるアクセントの異同に求めることは、一般に音聲轉化の迹を方言における音聲の異同に察すると同樣に、言語研究　通義として許さなければならないところである。交通の不便な、生活環境の狹隘な地方において、上代の言語のおもかげのすこぶる保存され

てゐることは、その例に乏しくない。かやうな事情の下にあつて、古い時代のアクセントも、やはりその幾分を保存されてゐるといふことは、容易に考へられる。語音に地方的分布があるやうに、アクセントにも地方的分布がある。これが果して歴史上のある時代の語音またはアクセントをそれぐ異なる程度において保存してゐる故にあらはれたものと見るべきかは、一概に論ずべき限りでない。が、各地においての語音およびアクセントの變化の速度が異なるものがあつたと共に、その變化の方向も同じではなかつたと解する方が、今日見るやうな分布を理解する上には妥當な行き方であらう。

アクセントもやはり常に時と共に推移するものでなくてはならない。もとより今日見るところの東京語のアクセントが常住のものではない。さうすると、今後東京語のアクセントは、どの方向に進むであらうか。これを推測することは、必ずしもアクセント論の當然の任務ではない。かつそのためには、種々の材料を必要とするのであつて、方言のアクセントの比較研究の成果を大いに參照しなくてはならない。たゞこゝでいひ得るのは、上來說き及んだアクセント化成の能因が、さらに語句全體の言葉調子にもとづけられること。すなはち單語のアクセントがあつまつて語句の調子を成すのではなくて、語句の言葉調子、話段全體の抑揚が發生的に單語のアクセント形式を規定するものであるといふ事である。

アクセントのすべりは、音聲の系列における數音節を統一總括する自然的必要からおこることが多いのであつて、複合語における低頭的起伏式アクセントは、多音節を一語として緊結するに好都合な型に外ならないのである。上中中型の語が時として下上中型のやうな進行を示すやうな事がらは、その個々の場合について見れば、すこぶる偶然であらうが、しかし比較的不安定な擡頭的形式を脱しようとする傾向のあらはれの一端と見ることもできる。四音節語において上中中中型の擡頭的形式が漸く影をひそめて他の型に推移することは、またこの點から考へることができる。下上中中型はよくその全體の連音節を統合する力量をもつものであるが、第二音節の高まりの傾向が往々第三音節にまでも波及することがある。その邊にもアクセントのすべりが考へられる。かく一語の音節の數の多くなるに從つて、起伏式アクセントの頂點または高原（plateau）は、語の中央に近づくともいへるのである。

名詞に關係助詞のつくやうな場合には、たゞ輕く添はつてあまり名詞のもとの型をかへないのが普通であり、さういふ特徴によつてこれを複合語とせずに單純な連語と見て來たやうな次第である。しかしその區別は根本的なものではない。イ|マ（今）といふ名詞にマデといふ助詞がついてできたイ|マ|マデは、名詞のもとの型がかへられて全體として一つの複合語におけるやうな型を示す。またド|コ

（何處）にマデがついて、ドコマデとなるのは普通であるが、さらにモがついてドコマデモとなると、もとの型はかはつて來る。かやうに型の複合の際はもとより、形式上單に助詞の接續による連語とも見られる場合にも、アクセントのすべりによる型がはりは、往々起るのである。

名詞は語句の配列の點から見て、語句の一分節（呼氣小節またはアクセント小節）のはじめにおかれ、それに助詞が接續して連音節を形成するので、多くは上昇的形式すなはち第一音節の低くはじまるものとなるのが自然である。名詞のアクセントにおける異例ともすべきアカンベー、オニババのやうなものは、呼びかけやののしりの語として獨立しても用ゐられるやうな特殊の語である。

多音節語におけるアクセントの重心が、語の先頭にあらはれることを困難とする傾向は、多くのヨーロッパ語においても見るところであるが、そのフランス語におけるやうに語の最終音節に、またはラテン語やイタリア語におけるやうに最終音節の一つ前の音節に重心がおかれるやうな傾向を示す一群の言語もあることを念頭におくべきである。かやうに重心がむしろ單語の先部でなくて後部に局在するやうなアクセントの傾向は、日本語にあつても地方的にはしば〳〵觀察される。これはつまりその語調が、語の高低進行を制約してかやうなものにするからであつて、いはゆる「尻上り」の方言において見るところである。こゝでは、名詞などにつゞく助詞の方がむしろ高まつて、名詞だけについて

型をきめると、語頭において下下のやうな連續的な低まりもあらはれると認めなくてはならない場合にも出會ふのである。

語句乃至話段の全體の調子が、往々アクセントの型をかへるといふ例は、東京語においても見られるのであつて、活潑な感情をもつて發音された場合には「いつたい何をさがしてゐるの？」などにおけるナニオが、むしろナニオのやうな進行を示すやうなことも稀でない。いなむしろさういふ事態の下においては、當然さうなる傾向があるともいひ得る。かくて、アクセントを靜的形式的に考へるべきでなく、動的機能的に理解すべきであるといふことが、こゝでもいへるのである。アクセントの型はかはり得る、アクセントの式こ　根づよく保たれるのである。いひかへれば、アクセントにおける平板か起伏かの形成的機能がアクセントのすがたを規定する根本である。

方言におけるアクセントの分布については、從來調査されたところから見て、平板式アクセントが東西を通じてかなり一致することを顯著な點としなくてはならない。これに對して起伏式アクセントは、その式を共通にしながらその型において趨異を示してゐるのである。關東・東北などの方言には、起伏式に上中型と下上型との二つのほかになほ上上型のアクセントが認められるやうである。この型は前の二つの型の過渡的中間位を占めるもの〻やうで、タコ(凧)。マゴ(孫)などのやう

な例がある。これらは東京語で上中型タ|コまたは下上型マゴ|とするところのものである。かやうな中間的の型の存立を全く許さない東京語にあつては、アクセントの推移は、上中型からたゞちに下上型へアクセントのすべりによつて行はれる。

要するに、東京語におけるアクセント化成の傾向は、一に平板式單語の複合に際してあらはれることのある起伏化であり、二に起伏式の語彙の一定の事態の下における頻繁な使用にもとづく平板化である。新造の複合語や新規の外來語は、その音節の數に應じて或は本來のアクセントを保存するか、或は本來のアクセントを變化するものであつて、その大體において擡頭的起伏式アクセントは、この種の語彙に多く存するものである。しかもこれが盛に使用されてほとんどその語源に對する感じを失ひ、長い年所を經て國人の口に耳に熟するに及べば、漸く平板化の傾向をあらはすものがある。東京生れの人々にとつて|ヒビヤ（日比谷）と|シブヤ（澁谷）との混同がしばしば大きな不都合を生じるのにも拘らず、また地方人の口からはヒビヤ|だのシブヤ|だのといふアクセントが發せられ、これによつて一方を擡頭的にすれば容易に混同を免れることができるにも拘らず、東京人は|ヒビヤのかはりにヒビヤ|ともいはず、|シブヤのかはりにシブヤ|ともいはない。一旦平板になつたものは、そのまゝはすぐ起伏式のものとはなり得ないやうな氣勢が見える。平板式アクセントは東京語では最も安定なものといへ

るであらう。スイドーバシ（水道橋）のごときは、複合語の成立から考へてかういふ起伏式の型をとるのが本來であらうが、やうやくスイドーバシのやうに發音されることが多くなつてゐる。ニホンバシ（日本橋）のごときは、もしニホンバシのやうにいふならば、東京の日本橋とは理解されないのである。

註（1）第一六章第四八節。また『國語の發音とアクセント』第十章「アクセントの保存」參照。
（2）第一五章第四六節、女の名のアクセントの型についてその項參照。
（3）關東方言には、これを區別して「拭く」はフク（下中）、「吹く」はフク（上中）と無聲化せずにいふものがある。かうすれば混同は生じない。
（4）『國語アクセント講話』中の「東京語のアクセントの特徴」（一一二―一二八頁）參照。

第四部　話における音聲進行の姿

第十八章　音聲進行の全體的傾向

五五　種々の話態

人の日常語り合ふ談話の具體的なものにあつては、意味と音聲とが融け合つて一つの直接所與として含蓄のふかい、それ自身の姿をあらはすところの全體を描き出す。その際話す人および聞く人の態度は、主としてそこに表現された意味を直下に味解しようとするのであつて、その立場から具體的な談話などにおける意味、または內容が、言葉の使用における中心的のものとなる。かやうに話の全體によつて表現され、または示唆された意味內容を全體的に理會することが、言葉の認識における普通の態度であるが、この態度によらず、別の態度を以て具體的な話を觀察することも出來る。その場合に知覺されるところのものは、また別箇の景觀を呈するのである。音聲學的觀察は、話における音聲の種々相を現はれるがまゝに捉へ、種々の事態におけるその姿を定立しようとする意圖をもつてする

から、しばらく意味内容の方面を捨象し、括弧づける。現象としての音聲が、どんな能因にどういふ風に規定されるかを知るために、分析的觀察を試み、單獨に發音された音聲をも觀察の對象とするのである。しかもこれは學的探究の一道程に過ぎない。具體的な話における音聲の進行は、抽出された單音の總和の示す性質以上に、その全體に即して存する著しい特徵を示すものである。

かやうに音聲學的態度は、具體的な言語經驗から、その意味內容の方面を一旦捨象して、音聲現象としての姿を浮き出させるのであるから、その際語法的關係や心理的表出の問題を離れるわけである。しかし言語の本來的具體者にあつては、意味內容とその音聲的性質とが相融合滲透して有機的に結合してゐるので、音聲現象における種々相を意味內容に全く沒交涉に考察しようとするときは、言語機構の本然的なものを逸するに至る。すでにアクセントの如き音成態が單語乃至モルフェームに即して定まり、語の複合・活用などによつて現はれ方の變化を規定されるといふ事實を見た。一つのまとまつた思想內容を表現する話段・文といふやうなものにおける音聲進行の姿は、その內面的規定をかやうな心理的能因から受けることを當然といはなければならない。

音聲學は、種々の事態における音聲の現はれ方を純粹に捉へるために、まづ具體的言語について意味內容の方面を捨象しなければならない。かくて音聲現象の姿をしかじかと定立することが出來るの

である。しかし一歩を進めて、その現象の裡にはたらき、現象をしてかく姿づくらしめる所以の能因を探り求めることは、說明科學の要請として必然の事に屬するのである。こゝに至つて再び言語の意味內容、さらに一般にその心理的表出が、いかに音聲現象を姿づくるかを考察することは、また音聲學の一使命でなければならない。

語法、特に文章法において、話段または「文」を分類するに當つて、種々の名目を立てゝゐるが、通常その類別は語法的・論理的または心理的の見地の混淆してゐるやうな嫌がある。すなはち單文と複文・重文とを分け、その一方には疑問文・叙述文・條件文などとも分けてゐる。この見地の混雜は首尾一貫的な類別を與へないといふ結果を招來してゐる。いま語の心理的表出の機能が音聲現象に如何に影響するかを見るに當つては、話段又は「文」の心理的類別を試みることが最も必要である。

普通に文章法で「文」の性質上の種別[1]と見られる平叙・質問(疑問)・命令・感嘆の四とほりを、その心理的意義について考へるときは、知的・情的・意的の三種に配當することも出來る。平叙、すなはち對象の知覺または判斷を客觀的に叙述するものは、むしろ知的機能によるものであつて、主として客觀的事物または事實に向ふ。そのうち對象の狀態または性質について述べるもの(措定的・說明的)と、對象の運動・變化や數個の對象の間の交涉を語るもの(說話的・報道的)との二樣に分ける

ことが出來る。これらはその内容がそれだけで完結し自足したものであり、はつきり分節された、よく整へられた結構を保ち得る點で、論理的なものといふべきである。平叙に對し、ごく密接に關係する質問は、何かの對象に關する叙述を得たいとの質問者の希望を表出するものであるが、いづれも回答を期待するといふ點で、いまだ論理的に完備した形式を得ず、内容において未完結であり、自足しないものであるところに、平叙と異なる著しい特色を有する。質問には肯定又は否定のいづれかの答を欲するもの、すなはち選言的のものと、未知の内容に關するもの、すなはち特定の疑問詞「誰・何・いつ・どこ・どう」を以てするものとの二樣がある。このそれ〴〵において、音聲現象に相異のあることは、後に說くところである。つぎに命令は、發言者の意志を實現させる目的のために發する語句であるから、音聲が意志傳達および感銘の効果を十分に發揮することは、多くの場合に必要である。これが怒のやうな情緒を帶びたときは、一層表出が力強くされる。その點で感嘆と相通じたところがある。ゆゑにヴントは感嘆文の中に感情文と希望又は命令文とをこめて、一つの綱目とした。しかし、命令と感嘆とは、一方相通じるところがあるが、心理的にも音聲現象に現はれるところも自ら異なるところが少くないので、やはり別に二種とするのが適切であらう。感嘆は何等か情緒の動きを發表するものであつて、語法的には間投詞のやうなものがこれを代表する。音聲現象において著しい

特色を示すものである。

以上のいはゆる文の性質上の種別は、心理的にはそこに表出される思想感情の內容に關するものである。言葉の發せられる塲合の對人的態度について考へるときは、またいろ〳〵の話態の相違が見られる。すなはち對者を豫想せずに單に事柄を述べる敍事態のほかに、座談などにおける對話態と、大衆を相手にして一定の題目について述べる公演態とが區別される。對話態のうちには丁寧ないひ方とぞんざいないひ方とがあり、ごく丁寧な崇敬態とごくぞんざいな卑罵態との間に國語では種々の段階が立てられてゐる。この對人的心的態度は、その言葉づかひ卽ち語法的構成においても種々にあらはれ、音聲的表現卽ち語氣・語調などにもさま〲にあらはれるものである。しかもこの二方向は、大體相伴ふものであるが、つねに步調をそろへて進むとは限らないのであつて、丁寧な言葉づかひをしながら親しい間がらではくつろいだいひ方・くだけた話しぶりをすることもあり、下級のものに對してなど改まつた話しぶりで必ずしも丁寧な言葉をつかはない。そこでこの二方向、すなはち語彙・語法的方面と音聲的方面とを區別することが必要である。改まつた話しぶりのうちに、切口上といふ特別の話態があつて、別趣の音聲現象を示す。公演態には、講話態・朗讀態などがあり、芝居の「せりふ」や「口上」の如きもこれに準じるものである。これはその音聲の用ゐ方に次第に音樂的要素を加

味するに至つて、つひに一種の舞臺藝術となつたものである。

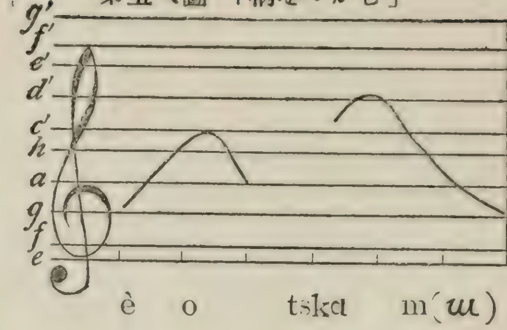
言葉の發達から考へると、對話によつて次第に形式を整へて來たものであらう。おもに書きしるすための叙事やこみ入つた事がらを秩序だてゝ話す公演の態のごときも、特別の工夫により特有の發達を經て、獨特のいひ廻しや話しぶりを得るにいたつたのであるが、その基本となるものは、やはり日常もつとも頻繁に用ゐられる對話態であるといはなければならない。語法を說き音聲現象を論じるにも、まづこれを目標として進み、その理法を究めてのち、他の話態における特有の現象にも及ぶべきである。何となれば、言語の發展の尖端、いはゞ生長點がまさにこゝに存するからである。

五六　音聲進行の基準

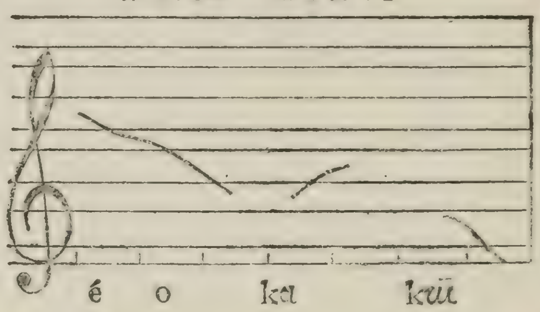
いま情意活動による興奮を伴はない平靜な心境においてある事實を平叙する場合の話の音聲は、いふまでもなくあまり强弱・高低などの變化も著しくなく、その速度もさまで大きくなく、まづ種々の話態における音聲進行を考へる際の基準として認め得るやうなものであらう。その進行は個人によつて異なり、環境・性別などによつてまた各種の類型を區別されるであらうが、とにかく比較的に變化の著しくない音系列といふことができる。

話の音聲の進行において、あまりに變化の乏しいものは、いはゆる一本調子の單調の感じを與へて興味を殺ぐのみでなく、話の內容を適切に理會させることも出來ない。話段、すなはち文の論理的結構を適切に指示するがためにも、ある程度における音聲の緩急・強弱・高低の變化を必要とする。一般に音聲の發生を規定する主として發聲生理的な事情による強弱・高低の布置の外に、意味內容をその重み 從つて整頓しその親疎に從つて群別するところの論理的分節の過程が、こゝにもあらはれるのである。

第五八圖「柄をつかむ」



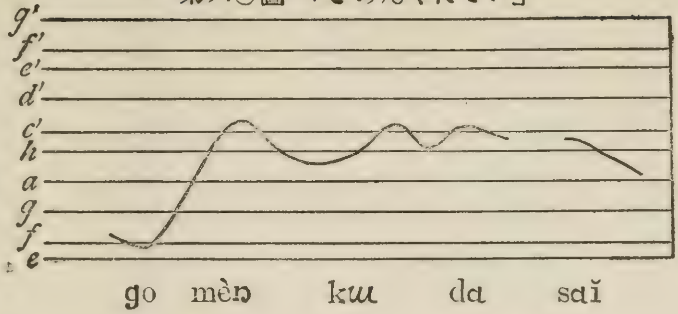
第五九圖「繪を書く」



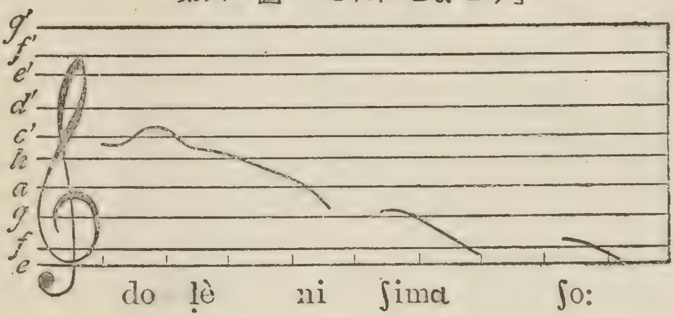
單獨に發音された單音節または數音節の語について見ても、普通の場合にはその初發部が強さおよび高さにおいて小さく低いものであり、次に強まり且高まつた後その終末部において再び弱くかつ低くなるといふ音聲の經過があらはれるといふことは、すでに述べたやうに、發聲における聲帶が弛緩の狀態から漸次に緊張の狀態にうつり、その任務をはたした後再び緊張を解いて弛緩に復歸しようとする筋肉生理的事實に想到させるものである。このこ

とは、普通の話態の場合においても一般にいふことができるのであり、かやうな經過を示すことによつて、その内容が完結した一體であるといふ感じをも與へるのである。

第六〇圖「ごめんください」



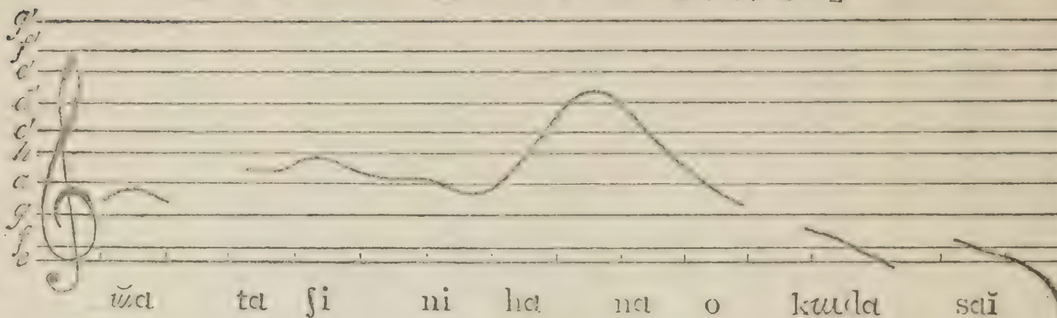
第六一圖「どれにしませう」



通常話段の初發部は、なほかつ聽者の注意を惹くことを要するために、ある程度の强さと高さとを以て出發するのであるが、その終末部に至つては、往々きはめて著しい程度の音聲の減弱と低下とを示すものである。これによつて話段の終結がはつきり印象される次第である(第五八圖—六二圖參照)。

かやうに一つながりの話段は、その意義内容のいはゞ内面的統一を以て一全體をなすと共に、これを音聲進行の一まとまりとして表現するのであり、普通の話態における初發部の漸强漸昇と終末部の漸弱漸降とがその輪部をつくる。話段の内部における進行の有様は、おほむね强さと高さとが相提携して意味の輕重に應じて重みをそれ〲の語に加へるといふ風に述べることができる。その際各語のアク

第六二圖　「わたしに花をください」



セントはそれ〴〵の形式を保ちつゝ、重みの加はることによつてかへつて一層明かにその特色を發揮するのである。意味内容において重きをなさず、したがつて音聲的にも重みをおかれないやうな話段中の語は、そのアクセントが時としては不分明になることを免れない。すなはち話段または文の重みは、ある單音またはある音節を强め高めるのではなくて、話段中文中における思想的に重心をなす概念の代表者たる語または句を、そのアクセントについてきはだゝせるのである。たとへば單色畫の表現的手段において、構圖の重心を最高の白と黑との對照によつて浮き出させ、すなはちある圖形そのものを全體としてきはだゝせるやうに、この場合にも語形の全體をいはゞ視野の中心にもたらすのである。

通常一呼氣で發音される呼氣小節[2]（いきの段落）は、破音のやうな子音の閉鎖の位相を除く外、音聲の切斷を見ないものであるといふので、これを表記するにも、全體をつゞけて書くのが正當だと主張する音聲學者もある。なるほど音聲が繼續してゐて、きれめ卽ち音聲休止の點を呼氣小節内

部に求めることは不可能とされる。事實上普通の話態で音聲休止が呼氣小節の內部にあらはれることは、ごく稀であるとしてよい。國語の場合にあつてその呼氣小節中における一見音聲休止とも思はれるくぎりは、實はさうでなくて、おほむね多少の音聲の低下と、やゝ著しい音聲の力の減弱とによつて代償される。それでこの種のくぎりの前に來る音節の長さが、他の音節のよりは長くされてゐるやうな實例にしば〳〵逢着する。この際强さがすこぶる弱く、高さもかなり低くなつて、そのために具體的な音聲進行においては、その効果においてほとんど音聲休止と同樣であり、その音聲の連續は主觀的には全く知覺されないほどである。それが事實上連續した音聲の力および調子の低下であるといふことは、話段の實驗的測定によつて示すことができる。さういふ風に、絕對の音聲休止ではない呼氣小節內のくぎりも、これを心理的に見れば一種の分節であり、その肢節はかのアクセント小節のやうなものに相當するのである。語法的にいふならば、多くは連語のやうなものがそれである。

もしかやうな自然的な代償的分節によらずに、この種のくぎりに一々適確に音聲休止を挿入していふときは、こゝにいはゆる「切口上」が生じる。切口上にあつては、呼氣小節內部のくぎりに對して音聲休止を適用するのであるから、もはやその部分における音聲の減弱と低下とを要しないのであり、その反對にむしろきれめを明瞭にし、意味の統一連絡を絕たないやうに、休止の間際に却つて音

聲を強めかつ高めるといふ仕方をしば〱用ゐるのである。したがつて語氣・語調の點において、すこぶる異樣の感觸を與へるわけである。そしてこの塲合の音聲休止は、呼氣小節の終における吸氣のための呼氣の休止とはちがひ、呼氣を一瞬時停止するだけであるから、その休止時間はすこぶる短くかつ急激な音聲中止のためには多く喉頭閉鎖の仕方を應用するのである。要するに、「切口上」はかういふ極めて特殊の發聲法によつて遂げられるところの、すこぶる不自然な話しぶりである。

五七　國語における高低の進行

原則として「開いた」音節から構成される國語の話における進行を考察するに、强弱の變化はおほむね高低の變化と相伴つてゐるが、その顯著な變化を示すものは、高低の進行の方である。わが國語では、語における强さの分布はドイツ語などにおけるやうに著しい姿を示すことはない。むしろ高低の進行において著明な變化が見られるのである。そこで、今この高低の進行の方面から國語における音聲の運動を考へよう。

前節において述べたやうに、話段の初頭における始め方が低い音節からであり、次第に上昇的、または若干の昇降的進行があらはれて、話段の終末部で著明な音聲の低下が生じるといふ事實は、國語

について能く觀察されるところである。單獨に發音された語の高低の姿がすでにこの事をうべなはせる。普通には、話段の終末部における音聲の低下は、その初發部におけるものよりも程度が甚だしいのであつて、殊に一話段の初發と終末とは、すこぶるその高さの水準を異にする場合が多い。その初發部においても、音聲のすこぶる弱いものを見出すことは既に見たところであるが、それにも增してその終末部において音聲の甚だしい衰弱を見るのは、きはめて普通のことである。その語音が全くきこえを失つて聽識することができなくなることも、人のしばしば經驗するところである。

話段の初頭にあつては、强さは最初の弱いところから急速にある相當の程度の强さに達するものである。低頭的アクセントを有する語の場合について見ると、第一音節はすこぶる弱くとも、第二音節以下において十分明瞭な聽識を結果するやうな强さを得るのであり、擡頭的アクセントにあつては、弱から强への進行が第一音節の內部において急速に行はれる次第であるが、話段の初頭における强さの推移もおほむね同樣である。ところが話段の終末における强さの減弱は、これに比するとかなり徐ろであり、ゆるいデクレシェンドを以て耳に聞えない弱さに融けこんでしまふのである。その場合に振幅の漸減の時間は往々すこぶる長いのであるが、その終極までいかないうちに强さが識閾以下に沒し去るのがむしろ自然的話態における常態的傾向である。最後の音節に到達しないうちに、音聲が

「消え」てしまふといふ言葉尻のはつきりしない話し方は、やゝ變態的だとしても、この種の强さの漸減といふことは、話段の終末部における音聲進行の自然的傾向のあらはれに外ならない。一方において、話段の末句が多くは思想表白の意義重要において重きをなさないといふ關係から、いよ〳〵この傾向は助成される。終末における音節の母音が往々脫落するやうな傾向も、これと關聯してあらはれる。かやうに話段の終が不明瞭になるために、これが語法的に終結する構造になつてゐるか、または更に他の句を接續させるやうなものであるかを判定しがたい場合もおこるわけであるが、すでに音聲の進行そのものにおいて、すなはち「こゑ」の著しい低下と減弱とによつて、話段の終結が直接に表示されてゐるから、通常對話の際などには、言葉尻が瞬昧模糊の裡に葬られるがために大きな支障を生じるといふやうなことは、あまりないといつてよい。

話段の終末における「こゑ」の低下と減弱とにくらべると、「くぎり」におけるものはその規模が小さい。ことに高さの低まりは「くぎり」の性質によつて多少異なるけれども、大體からいへばたゞ僅かな程度にとゞまる場合が多い。速度のゆるやかな談話は、その個々の音節が長められると同時に、くぎりも多くあらはれ、こゑの低下はくぎりの長いほど一層著しくなる。しかし、くぎりといつてもいきのつぎめでないかぎり、多くはこゑが中絶するのでなくて弱くかつ低く連續してゐるのである。

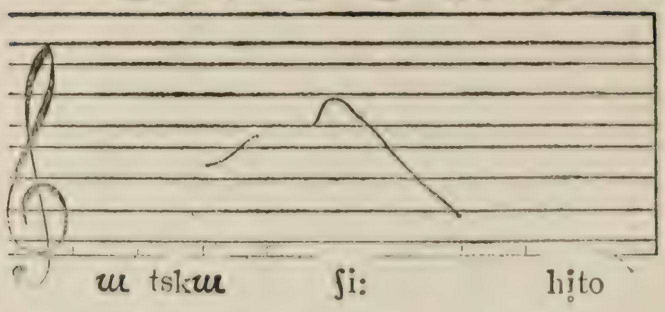
たとへば前に述べたやうな助詞の「と」が低くてしかもその長さにおいては高い音節に優越してゐるやうなことは、「と」の次に一種のくぎりがおかれてゐるために生じたものであつて、低くかつきはめて弱く持續してゐる「と」の波動曲線の後半部は、このくぎりに相當するものと認めるが至當であらう。話の速度の急なものにあつては、くぎりが一般の音節と同樣に短縮され、くぎりにおけるこゑの低下や減弱も著しい程度に及ばないのである。

この話段の終末における音聲の縮小の事實は、通常の話態において一般に見られる現象である。さて、その話段の內部・中部における高さの推移はどうであるかといふに、それはアクセントの型を中に含みつゝ、なほ全體の話段構成のモメントがはたらいて、やはり全體的な姿をあらはすのである。アクセントの型の連接といふ形式的な考へ方では、話段の全體にわたつての具體的な統一的結構を捉へることができない。思想表白においては、必ずや主眼とし骨子として力說すべき中心點がある。その中心の位置に居るものが力づよく發音されることは、自然の手續である。そしてその音聲の强めに伴つて、高さがまた影響を蒙ることは、發聲上の自然の勢である。

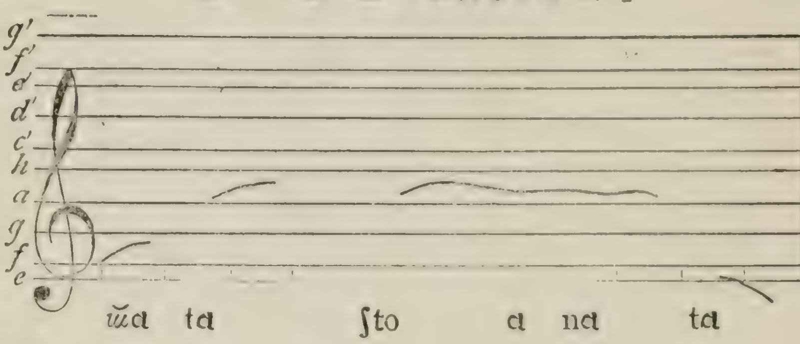
話段または句において、意味の上で特に重きをおかれる語は、その高低關係をきはだゝせるものである。すなはち上昇または下降の傾斜を大きくし、音程を增大するといふやうな手段によつて、その

アクセントがいはゞ誇張されるのである。しかも連音の中絶といふ印象を與へるおそれのある「こゑ」の著しい低下を避けなければならない關係上、何まの語音は、その活動範圍を主として高さの上昇的方向に求めなければならない。かつ注意をひく手段としては、「こゑ」を強めると共に高めるのが普通の仕方であるので、高低の變化を著しくすることは、やがてある部分の高さを著しく增すといふことにあらはれる。かやうに高さの頂點を占める音節は、同時に強さの優越をも保つて他の連音節の上に卓立し、他を牽ゐて進むといふ概を示す。あたかも拍音系列のリズム化におけるやうに、この卓立する音節が一群の主位に坐して群別化を可能にする一因素となり、群を統括する趣がある。かくある部分の高められる現象は、もとより各語のアクセントの型の保持を妨げない限度においては、何等意味內

第六三圖「美しい人」



第六四圖「わたしとあなた」



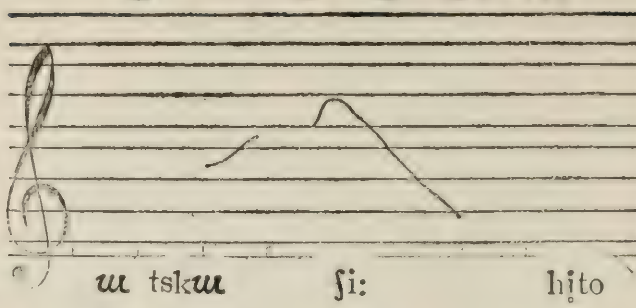
たとへば前に述べたやうな助詞の「と」が低くてしかもその長さにおいては高い音節に優越してゐるやうなことは、「と」の次に一種のくぎりがおかれてゐるために生じたものであつて、低くかつきはめて弱く持續してゐる「と」の波動曲線の後半部は、このくぎりに相當するものと認めるが至當であらう。話の速度の急なものにあつては、くぎりが一般の音節と同樣に短縮され、くぎりにおけるこゑの低下や減弱も著しい程度に及ばないのである。

この話段の終末における音聲の縮小の事實は、通常の話態において一般に見られる現象である。さて、その話段の内部・中部における高さの推移はどうであるかといふに、それはアクセントの型を中に含みつゝ、なほ全體の話段構成のモメントがはたらいて、やはり全體的な姿をあらはすのである。アクセントの型の連接といふ形式的な考へ方では、話段の全體にわたつての具體的な統一的結構を捉へることができない。思想表白においては、必ずや主眼とし骨子として力說すべき中心點がある。その中心の位置に居るものが力づよく發音されることは、自然の手續である。そしてその音聲の强めに伴つて、高さがまた影響を蒙ることは、發聲上の自然の勢である。

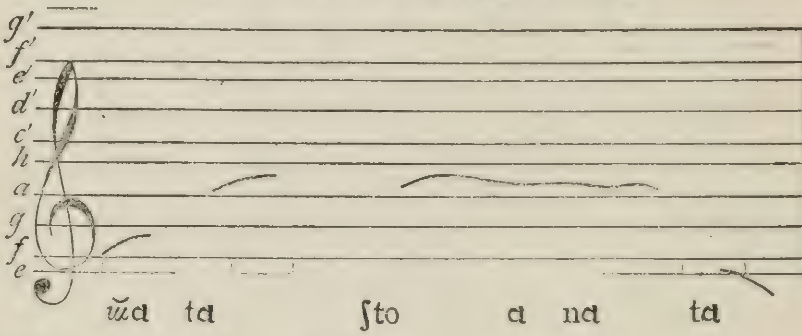
話段または句において、意味の上で特に重きをおかれる語は、その高低關係をきはだゝせるものである。すなはち上昇または下降の傾斜を大きくし、音程を增大するといふやうな手段によつて、その

アクセントがいはゞ誇張されるのである。しかも連音の中絶といふ印象を與へるおそれのある「こゑ」の著しい低下を避けなければならない關係上、句または話段中の語音は、その活動範圍を主として高さの上昇的方向に求めなければならない。かつ注意をひく手段としては、「こゑ」を强めると共に高めるのが普通の仕方であるので、高低の變化を著しくすることは、やがてある部分の高さを著しく增すといふことにあらはれる。かやうに高さの頂點を占める音節は、同時に强さの優越をも保つて他の連音節の上に卓立し、他を率ゐて進むといふ概を示す。あたかも拍音系列のリズム化におけるやうに、この卓立する音節が一群の主位に坐して群別化を可能にする一因素となり、群を統括する趣がある。かくある部分の高められる現象は、もとより各語のアクセントの型の保持を妨げない限度においては、何等意味內

第六三圖「美しい人」

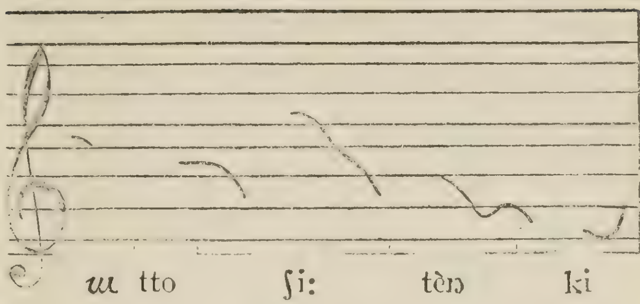


第六四圖「わたしさあなた」

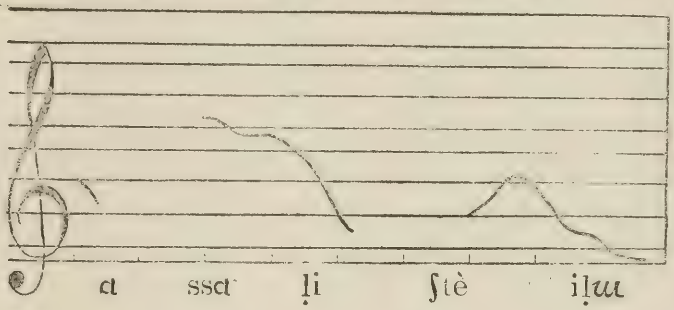


容の顯現發露とその知覺理會とを損ふものではなく、かへつて全體を一把握において内的結構ある成態として會得させるに役だつものである。話し手のいはうとする事の中核を端的に認識させるためにもつとも有効な方法である。

第六五圖「うつとしい天氣」



第六六圖「あつさりしてゐる」



ウックシイヒト（第六三圖）、ワタシト、アナタ（第六四圖）、ウットシイテンキ（第六五圖）、アッサリシテイル（第六六圖）のやうな語句において、全體の重みが前の部分にかゝつてくるのが普通で、高低曲線はクシ、シ、ッサの音節の高まりを示してゐる。また「あなた」のアクセントは、はつきりあらはれないのである。連語について見た助詞・助動詞のアクセントがはつきり出ないといふ傾向は、やはりその意味内容の方からの制約によるのであつて、話段においても比較的重要でない部分は、そのアクセントを明かには示さない。

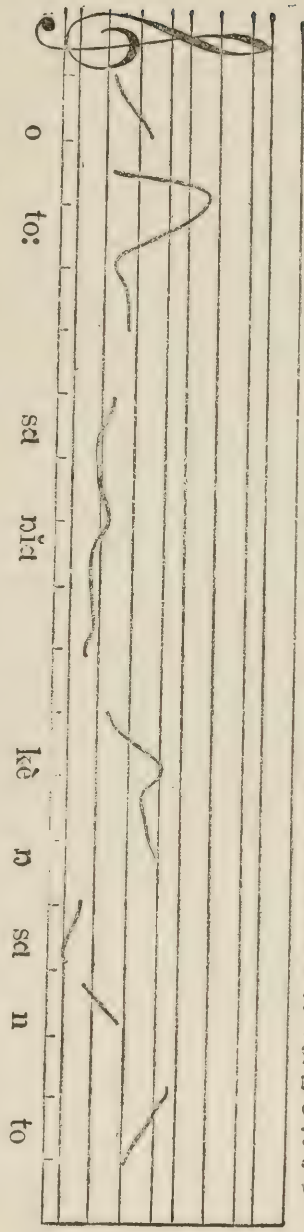
かやうに話段におけるアクセントの明かにあらはれる部分と、その反對に不明な部分とが出來るこ

とは話段全體を明晰のある一つの結構として姿づくる所以で、重心の所在はかやうな音聲進行によつて指示され、受取られる。もしかやうな用意がなく、話段を通じて平等の强さと高さとが與へられ、そこに明晰のニュアンスを認め得ない場合には、話の中心點を直ちに捉へることは困難となり、無味單調の感觸を與へずにはゐないであらう。のみならず、この際話の理會もやはり困難になる。初心の者が外國語を操る場合には、話段中のそれ〴〵の語を一々同樣に强め高めてはつきり發音するやうに氣をつけるが、その重きをなす中心を手際よく浮出させることを努めないので、その全體の意味を十分徹底させることが出來ず、かへつて最も緊要な一語乃至數語を提示する方が有效であるやうなことをよく經驗するものである。また外國語や耳慣れない方言を聞く人の立場になつて、まんべんなく一々の單語を注意し、不明瞭に發音された語句にかへつて力を入れて耳を聳てるやうなことをすると、やはり全體の意味をとり損ふことが普通である。日常の對話などにおける話の理會は、分析的論理的ではなくて、全體的直覺的であるといふべきである。語法を考へる前に話の主旨を捉へ、個々の語義を漸次にのみこむに先んじて全體の表はす思想を直下に會得するやうな境地に達しなくては、眞に言語の驅使はできないのである。國語の發音において多少言葉尻が不明瞭であつても、ある程度までは國人にとつてそれが格別苦にならないが、外國語を聴くときや外國人に對して日本語を話すときには、

言葉尻や不明瞭な發音が聴き手の困惑を來たすこと想像以上である。

くぎりまたは話段のをはりで「こゑ」が種々の程度で低下するのが普通であることは、上來述べて來たやうな次第である。[4] ところで、もしかやうな「こゑ」の低下がなくて一つながりの連音節が急に止められるならば、そこに音聲の休止があるにも拘らず、まだ何か續いて現はれて來るものがあると

第六七圖 「おとうさんや健さんと…」（あとをつづける心持で發音したもの）



いふ感じ、話がまだ終になつてはゐないといふ印象を受けるであらう。この印象は、連音節の休止の直前で「こゑ」が低下しないだけでなく、かへつて高く昇るといふやうな場合には、一層著しくなるものであつて、次に果して何事が起り、どんな言葉があらはれるかを心を留めて期待するやうな態度を聞き手に起させるに至る。從つて話段を完全に終結するためには、その終で著しく「こゑ」を低下することが必要條件である。

公演態にあつては、その講話なり演說なりの手法上の理由から、くぎりを明かにするために休止を置くことが多いが、その場合にも休止の前で調子を下げずに保つことが必要であり、さらに聽衆の注意を強く次の語句は向はせ、期待を以てこれに臨むやうにするために、むしろその點で調子を高めて言葉を切るといふ仕方をさかんに利用する。その心理的効果は、音聲の休止をして音聲進行において ある積極的意義を有するものたらしめるのである。

それから、一旦話段を完了したのち、なほ思ひ出したことを附加しようとか、さらに內容を補足しようとかいふやうな場合に、接續詞を用ゐて次の話段をはじめるのであるが、その際「が」や「での やうな接續的な語を特に著しく高い調子で發音した後、ちよつと休止をおいてそれから語句をいひ續けるやうな仕方が多く用ゐられる。これもその心理的意義に至つては、前述の塲合と同樣であると考へられる。もと〱用言に接續する種類の「が」とか、「けれども」のやうな接續助詞がかういふ際にも用ゐられる理由は、前話段の末尾をたゞちに受けるといふ心持から出たのであらう。この助詞は、次の話段に對しては先驅的使命を有し、あらかじめ期待させる効果を與へるのを役目としてゐるが、その接續といふ任務をも兼ねてゐるものであることは、これを全體の話の初頭に用ゐることが出來ないのに徵して明かである。

以上は特に情緒的でない場合の叙事的話しぶりにおける音聲進行の一般を述べたものである。つぎには、情緒的な心の動きがどういふ風に音聲の進行の姿に反映して來るかを見よう。

註(1) W. Wundt: *Völkerpsychologie, II. Die Sprache, Teil II.* S. 247ff. 參照。ヴントは感嘆(Ausrufung)。叙述(Aussage)。質問(Frage)の三大別を立てゝゐる。

(2) 第二章第五節參照。

(3) 第一〇章第三二節參照。

(4) 各地の方言においては、こゝに例外とすべき言葉調子を示すものもあらう。それにはまたその由來するところを探ることによつて、興味ある一つの研究題目を得るわけである。

第十九章　音聲の心理的表出

五八　心理的表出の方面と因素

言葉は何物かを表現するために人に役に立つのみならず、また人自身を表現する役をするといふやうに、對象における性質・關係・狀態・動作などをいひ表はすだけでなく、話し手の心の狀態や動き方をさながらに表現する役目をもつとめるのである。いはゆる叙事の場合は、對象についての供述であつて、多く主觀の態度や狀勢を問題とはしない。客觀的な觀察の報告であり、または論理的思考の展開である。これを論理的といひ、また對象的と名づけて他と區別することにすれば、前章において取扱つたところの事項は、主としてこの種の表現に關するものである。[1]

つぎに對境に向ふ話し手の關心的態度、換言すれば主觀の働きかけまたは愛憎などの情意活動の如きは、やはりそれぞれの手續によつて言葉に表現されるのである。原始的言語はむしろこの種の情意の表出のために用ゐられたものだとの說もあるほどである。

もとより對象についての叙述と情意運動の表現とが必ずしも相容れないものではなく、普通の論理

的平叙の語法的形式に、なほかつ情緒的色合を多分に與へることも出來るのである。情意に屬する狀態意識および作用意識も、通常純粹無雜の有樣で經驗にあらはれるのではなく、やはり客觀對象を指すところの對象意識といろ〳〵に結合してあらはれるわけであるから、多くの場合にやはり對象の表示をも伴つて來るのである。[2] しかし狀態意識の如きは、その純粹な形では主觀的狀態の內面的知覺に終始して、いはゆる對象への指向性を示さない。「あゝ、うれしい」とか、「おゝ、いたい」とかいふ場合の表白には、論理的意味における主辭といふやうなものが形式上にもまた心理的にも存立しないのである。さういふ次第で、これに對しておのづから言葉の上にもそれ〳〵に適切な表現の方式が具つて來るのであつて、かの種々の話態の分化の一能因として、やはり心理的表出の一事が重きをなすのである。

言葉におけるかやうな心理的表出は、どういふ因素によつて實現されるかといふに、勿論意味內容の方にも關聯して、語彙や語法においてそれ〳〵の特徵を示すのが普通に行はれる一つの手段である。すなはち平靜な心持でする論理的な敍述の場合には、感動詞のやうな語彙を用ゐないし、倒置句のやうないひ廻しをもしない。いはゞ正格の文章、言葉づかひをする。これに對して、命令のやうな意味表出や自分の決意をはつきり示さうといふやうな場合には、語法上のいはゆる命令法を用ゐると

か、「決して……しない、どうしてもさうする」などと、意志を表出する特殊の副詞的語句を用ゐるほか、他の情意的表出と同様に感動助詞「ぞ・ぜ」などを語尾に添へる等種々のいひ廻し・言葉づかひをするのである。また情緒的な表出にあつては、感動詞を用ゐたり、語法的に常態と異なるいはゆる感嘆文の表現をとるなど、やはりその言葉づかひの上で特有の姿をあらはすのである。文字に書きあらはされた言葉では、これ以外に、適切に情意的表出を遂げしめる手段はないのであつて、感嘆符のやうな符號は單に他の有力な情意的表出の不完全な指標たるに過ぎない。言葉づかひ以外の有力な情意的表出の手段とは、すなはち音聲の進行において あらはれるさまぐの抑揚頓坐曲折に外ならない。

音聲の進行における心理的表出の因素を求めると、ほゞ三様を區別することができる。その第一は話し方の速度であつて、こゑづかひの緩急は、多分に心的狀態を反映するものといはなければならない。その速度の急なのは、一般に感情の激してゐる、平靜を缺いてゐる心の狀態の反映であるといふことができる。もつとも性格・氣質によつて、「口の早い」人とゆつくりした口をきく人とのやうに個人差があるが、それにしても、その氣質の如何、すなはちその感情的素質がそこにあらはれるわけである。すべて音響が連續して作用する場合に、その速度卽ちテンポは、興奮對沈靜の心理的効果を示

すのであつて、最も單純な拍音系列のリズムにおいても、すなはち太鼓なり拍子木なりの拍子においても、明らかにその効果を認めることができる。音樂においても、テンポの効果は、樂曲を生かす上に重要な契機となつてゐる。たとへば謠曲における「のり地」を思ひ合せれば、その間の消息が察しられよう。

第二には音聲の强さである。論理的要求からはつきりいひ表はさうとする場合には、前にも述べたやうに音聲の强さを適當に配置して、話段の重心を提示すると共に、重要でない部分を輕くいひなすことが、やはり必要である。それにも增して心的狀態の緊張と弛緩とを表出するために、音聲の强さの變化が要求される。その點では音樂における發想上のピアノ・フォルテの變化やクレシェンド・デクレシェンドの意義もまた軌を一にするものである。一般に語音の强弱はその高低と相伴つて進行するのが普通であるが、場合によつては、特に强さが高さから獨立して變化することがあり、また生理的機制においてそれが可能であるのは、既に說いたところである。その特に顯著にあらはれるのは、命令または決心をいひあらはす語句の末尾をつよくいひ切る場合である。これは意志的表出を一きは有力にするための手法であつて、急な發聲中止、すなはち「かたいこゑとめ」の仕方で、强さを「こゑ」の終る最後の瞬間まで持ち越すのである。この手法によると、普通の場合よりもずつと强い「こゑ」を

以て語尾（句尾）を終結することができ、從つてその言葉をもつとも有力に對者に投げかけることができる。命令のうち號令の如きは、その典型的な例である。たとへば、「氣をつけ」といふ號令において、最後の音節を引延ばしただけでは、効力はきはめて薄く、弱いのである。その最後を截然といひ切る、すなはち急に聲帶をとざして「こゑ」を斷ちきるので、はじめて力づよくひびくのである。これを書きあらはすに、普通キオツケーッ（kiotskė:ʔ）のやうにするが、音字では最後に〔ʔ〕の符號をつけて示す。

語法的には命令法でなく禁止の語「な」を用ゐたり、「……てはいけない」のいひ方をつかつたりする場合、それから人をしかりつける場合、「あぶない」と警告する場合なども、自分の決心をいひあらはす場合と同樣で、つよく言葉を働きかけさせるためには、いづれも最後の音節をつよくいひ切るのである。勿論全體としてもつよい音聲を用ゐ、また急なテンポを以てするのが普通である。いはゆるあらい語氣であつて、一般に短時間における多量の呼氣の排出と、音聲器官における筋肉の緊張とをその生理的條件とするものである。言葉をあらゝげるといふことは、すでにその興奮・緊張の心理的狀態を表出する形容に用ゐられてゐる次第である。その反對の場合の言葉をやはらげるといふことはすなはちおだやかな語氣をつかふといふことで、平靜な音聲進行の基準に近づくわけである。

かやうに音聲のつよさ、特に言葉尻におけるそれの現はれ方は、語し手の情意運動を反映するものであるが、いづれかといふと、むしろその意志的方面を表出するに適する趣がある。いはゆる輕くいひはなす助詞の「さ」のつく語句と、念をおすとき、またはおどすときにつかふ助詞の「ぜ・ぞ」のつく語句とを比較して、その「こゑ」の强さの變化を考へるとき、意志の硬軟がその言葉の語氣にどうあらはれるかを察することができよう。

それはさうさ。 soɟèwa so:sa ∨

おれがいくぜ。 oɟèga ikɯbzè ∧

きちやいけないぞ。 kitʃa ikènaĭdzo ∧

この際高さが特定の進行を遂げるものであることは、のちに說く。

第三に心理的狀態あるひは態度を表出する因素として重要な役目をつとめるものは、語調あるひは言葉調子である。言葉調子が特に感情の表出に密接に關係することは、あたかも顏面の表情運動と同様なものがある。その表出手段の豐富なこととその効果の著しいこととにおいて、言葉調子はすこぶる優越した地步を占めるものであつて、音聲の心理的表出については最も重要な因素である。そこで、次にやゝ精細にその關係を述べよう。

五九　問答における言葉調子

質問を表示する語法上の樣式は、おのづから一定したものがあるが、日常の對話においては、必ずしもその樣式に從はずに、語法的には通常の叙事と異ならない樣式を用ゐ、その言葉調子において特有の變化を示すことによつて質問を發するのが、むしろ普通である。一體問答の文は、その心理的意義において一つの對照をなすものであつて、それが言葉調子に反映して著しい對比を示すのである。

質問はその內容において論理的に完結したものでなく、自足的な統一態を成形するに至らないこと、前章に說き及んだところであり、この點で大いに平叙などの文と趣を異にする次第である。內容の自足的成態は、言葉尻におけるこゑの低下によつて輪郭づけられるのであるが、その反對である未完結的內容については、別趣の音聲進行が期待されるわけである。すなはち問の文における言葉調子は、その終において高められるのを本則とし、一つの主張をいひあらはす答の文は、その言葉尻において調子を著しく下げることによつて、きつぱりした自信を以て語られ、動かせない氣味を以て耳にひゞくものである。

一般に平叙の文で言葉尻における調子の下げ方の如何は、その確信の度合を表示する指標とも見ら

れる。きはめて簡單な語「えゝ・はい・はあ・ふむ」のやうなものにあつては、その調子の變化で、種々の心持があらはされるが、これを高いところから動搖なく低い方へ下げていつて、うけひき・合點・肯定の意志・態度をいひあらはすのである。もしこの同一語の調子を、それぞれ次第に高めて「尻上り」に發音するならば、そこにいひ表はされる事柄は、もはやうけひき・肯定ではあり得ない。前のと全く別な質問の態度となるのである。すなはちこの場合には、言葉調子を次第に上げることによつて話相手の尋ねることを又はいふことを問ひかへすといふ反問の態度となるのである。

この短い語「えゝ・はあ・はい」などの言葉調子は、やが話段全體の調子を代表し集約するものである。話段の言葉調子が、その純粹な姿でこゝに現はれてゐるのである。そこで、かやうな單純な語音をとつて、そこにあらはれる高さの變化をしらべ、その心理的表出を察しよう。この種の間投詞的なもののうち、鼻音〔ŋ〕を以てするものがあり、そこに與へられる種々の調子に從つて、さまざまの意味が表はれニュアンスが示される。そして日常の對話ではしばしばつかはれるものである。すなはちその調子の變化によつて、反問の意味をもち、また答として肯定の意味にもなり、また或は否定の意味をも示すことができる。その判別は一に言葉調子によつて定められるのである。

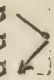
一體鼻音〔ŋ〕は、前にも說いたやうに、まつたく口を開かず、また口腔內の發音器官をつかはずに發

することが出來るもので、場合によってはその點で便利とされる。通常の呼吸の場合には空氣が鼻腔から出入してゐるから、その際呼氣をやゝ強くして聲帶の振動を生じるだけの勢をとるならば、〔m〕は容易に發音されるのである。そこで口の中にいつぱい食物や水などを含んでゐるときとか、また口を開くことを欲しないときとか、さういふ場合にも自由に發音し得るといふ長所がある。さういふ點から、この母音的な子音の調子によつて、そこに種々の意味を寓し、これで當座の間に合はせるといふ仕方が發達して來たものと見える。で、話しかけられた事柄の意味がわからず、それを問ひかへすとか、人のいふ事に疑をもつとかいふ場合には、一般に問において用ゐられる言葉調子、すなはち高さの上昇的進行を以て〔m〕を發音する。また「その旨、承知した」といふうけひきの意味をあらはすときには、一般に肯定・主張の態度を表出するためにつかふ言葉調子、すなはち高さの下降的進行を以て〔m〕を發音する。さらに他人のいふこと、或は問ふことを否定して「さうではない」とか、「不承知だ」とかいふ意味をあらはすには、特に高さの昇降的進行を遂げるやうな言葉調子を以てこれを示すことになつてゐる。すなはち

肯定・うけひき　mm ／

反問・とひかへし　mm ＼

否定・いなみ　ŋ̊ŋ̊ŋ̊

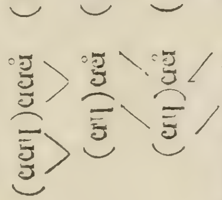


なは鼻音[ŋ]を發音するにあまり調子をかへずに短くいひ切ると、やはり一種の答であるが、他人のいふことを輕くあしらふといふ氣持が現はれる。普通この場合には全體の調子がいつもより高くなるやうである。またはじめ「こゑ」が出ずに氣音だけで、中途から有聲になつた[ŋ̊ŋ](むしろ[hŋ])は、鼻からわらひごゑを出すときに出るもので、いはゆる鼻であしらふ、或は「ふんといふ」態度を表示するものとなつてゐる。この際その調子が下降的であるならば、笑ひながら、或は輕しめながら肯定する態度を示すのであり(たゞし關西・九州などでは、この種の表情的意味を含まずに、普通のうけこたへに用ゐられる。)上昇的の言葉調子ならば、笑ひながら又は輕んじながら反問する(からかひ半分になど)といふ心持をたゞよはせるのである。否定も同樣で、「そんなことがあるものか、ばかな」のやうな意味になる。

微(苦)笑的の答(肯定)　ŋ̊ŋ(hŋ)

同　(反問)　ŋ̊ŋ(hŋ)

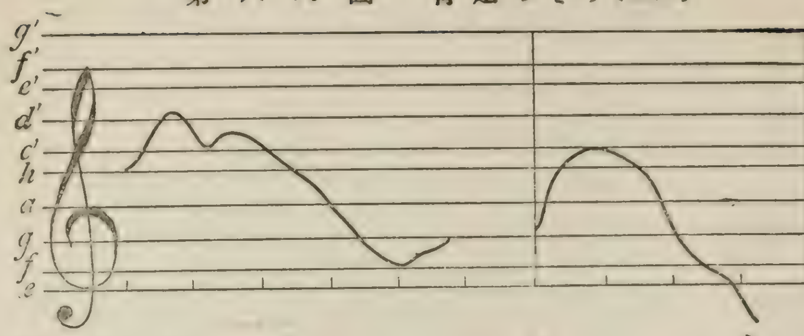
同　(否定)　ŋ̊ŋŋ(hŋŋ)



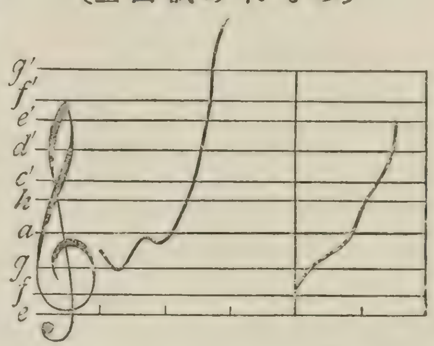
こゝに圖示するところは、鼻音[ŋ]の言葉調子の變化であつて、(一)肯定の場合の「こゑ」の下降、(二)問ひかへしの場合の「こゑ」の上昇、(三)否定の場合の「こゑ」の昇降、および(四)短くいひ切

つた場合の「こゑ」の高さの有様を實驗的に測定して、高低曲線に按排したものである。問ひかへしにおける「こゑ」の急な上昇・否定における著しい高低變化が、それ〴〵肯定の場合の下降的進行とちがふことは、これによつてもはつきり認めることができる。さらに「さう」（ソー）のやうな語についても、この種の言葉調子の著しい對

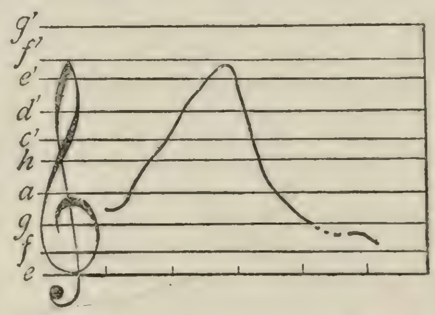
第六八圖　肯定の〔ŋ〕（二回）



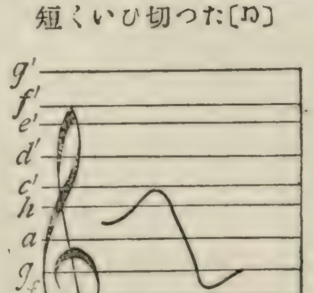
第六九圖　反問の〔ŋ:〕
（二回試みたもの）



第七〇圖　否定の〔ŋ:〕



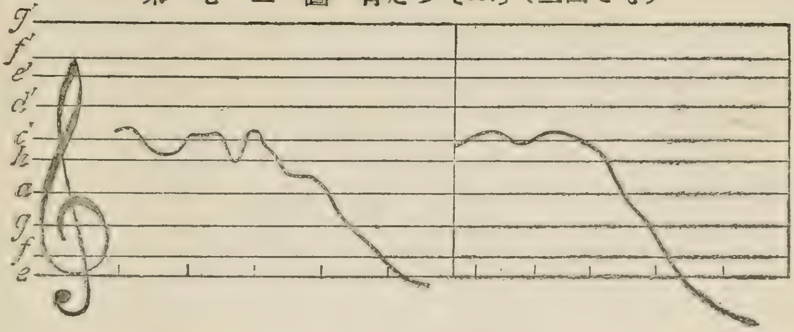
第七一圖
短くいひ切つた〔ŋ〕



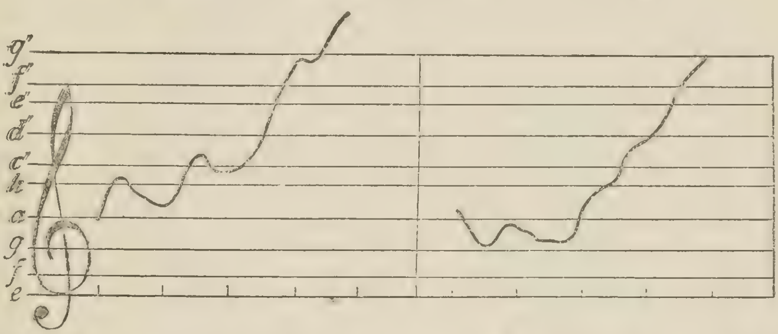
比を見ることができる。たとへば、ソーダ、ソーナンデスのやうにある一つの主張・肯定をいひあらはす場合には、次第にこゑを低めて、soo のやうな下降的進行を示すものである。これと反對に、これだけで「まつたくさうなんですか」との反問をいひ表はす場合には、前に述べた〔ŋ〕の問のときと同樣で、次第にこゑを高めて、

＼soo のやうな上昇的進行を遂げるのである。たゞ問ひかへしの〔ɒ〕とちがふのは、その進行の前半がほぼ平らであつて、その後半に至つて急に昇ることである。「さうですかねえ」のやうな意味で、「さう」を用ゐて感動的の心持をあらはす場合には、高さの變化を著しくして、∧soo のやうな進行を遂げるのである。

第七二圖　肯定の〔so:〕（二回とも）

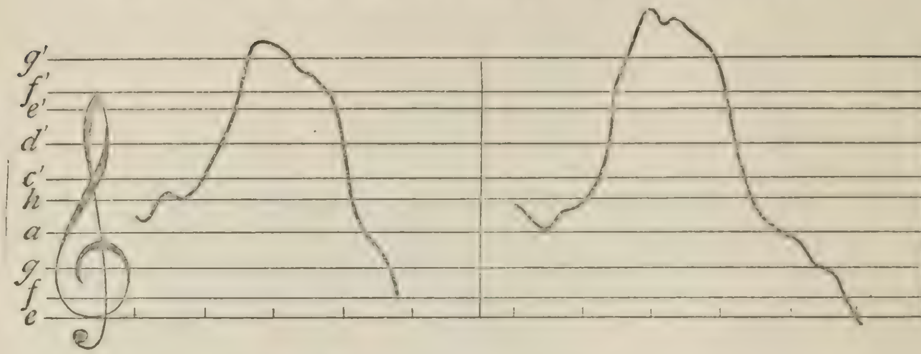


第七三圖　反問の〔so:〕（二回とも）

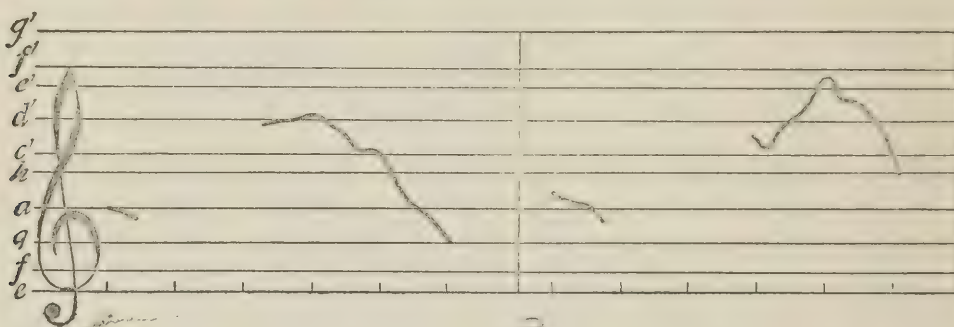


こゝに種々の場合における「さう」の言葉調子のかはり方を高低曲線を以て例示しよう。すなはち、（一）肯定の場合、（二）問ひかへしの場合、（三）感動的の答の場合、（四）「あ、さう」と輕くいひはなした場合を、それぐ二回づゝ實驗的に記録測定した結果を掲げる。（第七二—七五圖）この場合における高低變化の範圍の大きいことは、普通にアクセントの型において現はれるところを遙に超えてゐる。言葉調子が心持をいひあらはすためには、

第七四圖　意外なごの場合の〔so:〕（二回とも）



第七五圖　輕くいひはなした〔a⌈so.〕（二回とも）



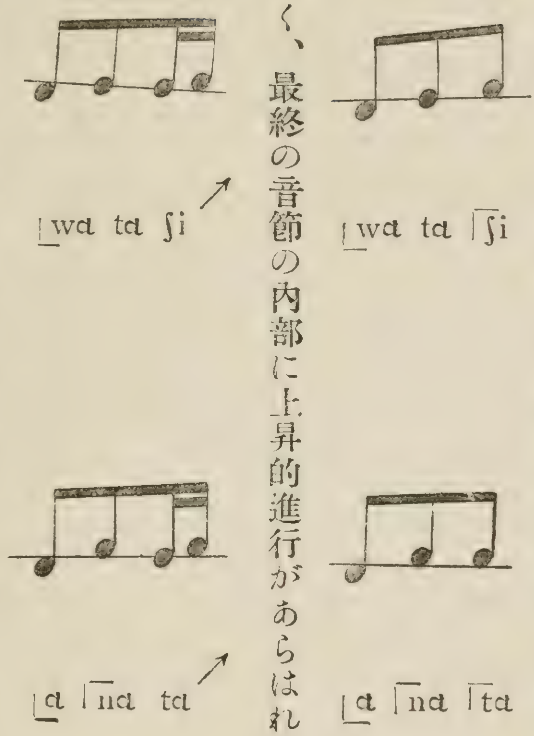
かほど異常な特別の運動を營むものであることを、この例についても想見し得るであらう。

アクセントの型の一定してゐる語、すなはち感動詞のやうな種類のものを除いた名詞その他の語にあつては、單獨に問として用ゐられる場合に當つて、多くは一方でアクセントの型を保持すると共に、他の一方では問の言葉調子を帶びて、最終の音節の内部で高さを次第に上げるといふ進行を營むのである。そこで例へば、ア|メ（雨）？　では、第二音節の母音〔e〕が一旦中位の高さにおちついたのち、さらにその「こゑ」を高めて終に向つて上つていく。それゆゑにア|メ（飴）と混同されるやうなことは、容易にかつ自然に避けられる。それを圖式的に示せば

「わたし？」「あなた？」といふ場合にも、最終の音節が一音節だけ上つて



となるのではなく、最終の音節の内部に上昇的進行があらはれること、次のやうである。



その上昇の程度はすこぶる著しく、普通アクセントの型にあらはれる中位から上位へといふやうな高まりの程度ではなくて、前出の簡単な語例の言葉調子について見たやうに、ひろい音程を包括するやうなものである。

質問のうち、前に疑問の意味をもつ代名詞なり副詞なり形容詞なりがある場合に、話段の終で調子が昇らないといふことは、ヨーロッパ語について普通いひ古されてゐることである。疑問の意味をもつ代名詞・副詞または「幾・何」のやうに數量に關した接頭語が、それ自身またはその複合語に擡頭的形式をあたへることは、言語心理的見地から意味のあることで、さういふ語が通常言葉調子によつて高調されると共に、强めをも與へられるといふことは觀察によつて容易に知り得るところである。その疑問の語のおかれた部分が高調されて、疑問の話段たることが明かにされるので、さらに特別に話段の終において調子を張り上げる必要がないともいはれる。問をあらはす「か」といふ助詞が話段を終結するときも同樣で、必ずつねに言葉尻を高めるといふわけでもない。たとへば、

このごろは、どうですか？　konogoɾowa | dǒo dès ka (?)

だれをよびませうか？　dǎɾèo jobimaʃoo ka (?)

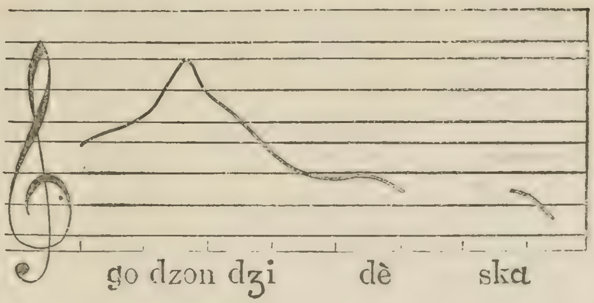
なぜそんなことをした？　naddzè sonna ko to o ʃta (?)

はなはおすきですか？　ha na wa oski dès ka (?)

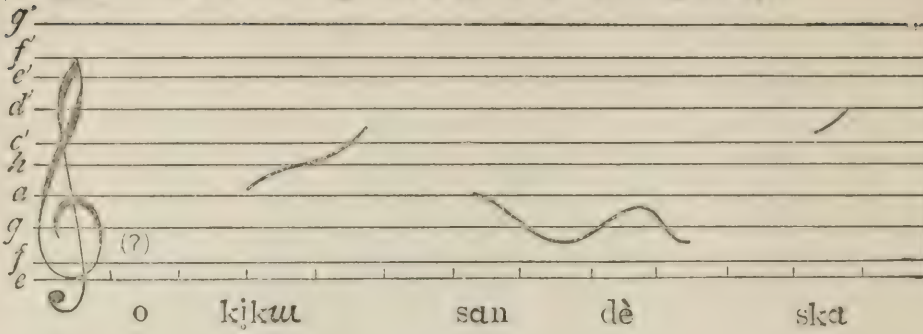
のやうな例で、言葉尻の調子のさがることが少くない。しかし、その場合にしても、必ずかういふ下げ調子にしなくてはならないといふわけではない。むしろ往々言葉尻を高めることがある。特にそれ

は助詞「か」がついてゐても疑問の語のない場合に多く行はれる。かういふ調子で問ひかけるときは、話相手に對して、その答をまちうけるといふ心持をはつきり表出するので、返答はどうかと迫つていくやうな趣がある。疑問の語が前にある場合には、これを高調することによつて問の心持をはつきり出すことができるが、さうでない場合には、助詞の「か」がついてゐても、その心持の表出について不十分の嫌があると感じられることが少くない。もし「か」のついてゐる話段の言葉尻を全く下降的に發音し、音樂にいふ完全靜止のやうな形に言葉調子をずつとおとすやうにすると、そこには問の意味、答をまちうける心持が出ないで、「なるほど、さうなのか」とか、「なあんのことだ、そんな事だつたか」といつたやうな、自分一人で合點する、自分自らにいひ聞かせる自答の心持をいひあらはすことになる。（第七六圖參照）これは本來の質問といはれない。かういふ言葉調子の話に對しては、答は要求されてゐないので、話相手はこれに答へることをしない。さういふ次第で、問であることのはつきりした印象を與へるには、やはり「か」のついてゐるやうな話段をも、言葉尻で調子を上げ、特に「か」の音節内部における著しい上昇進行を言葉調子に營

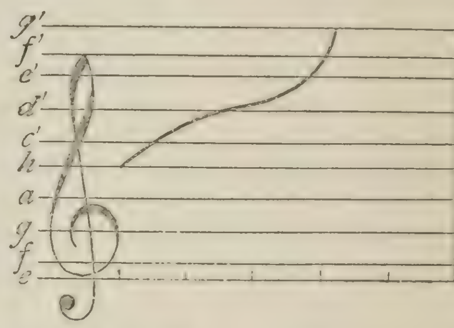
第七六圖 〔ご存じですか〕（自答の心持）



第七七圖〔お菊さんですか？〕（問の心持）



第七八圖〔いゝえ〕（答―否定）



ませなければならない。すなはち

ha na wa oskides ka (?)

のやうにするのである。（第七七圖參照）

實際には格別疑問の語又は問たることを示す助詞「か」をつけない話段を、普通の問としてつかふのである。その際言葉調子がすこぶる大切な役目をするのであつて、その話段が問であるか否は、まつたく言葉調子によつてきまるわけである。親しい者同志の普通の對話では、東京語であまり「か」をつかはない。そのかはりにやはり終止助詞の「の」をつかふことが多い。ところが、これは問にも答にも用ゐられるのであつて、それが問をあらはすためには、一定方向の言葉調子を以て發音しなければならない。たとへば、

姉さんは今日來るの？　nèèsanwa kjoo kɯɾɯ no (?)

あすこへ行くつもりなの？　asko è ikɯtsɯ̈moɾi na no (?)

のやうに發音すると、「……來るか、……つもりなのか」といふ問になる。 ところが言葉尻を↘〔no〕のやうに下げてしまふと、「……來るよ、……いくつもりなのさ」と告げ知らせる心持をあらはすことになる。

こゝに注意すべきことは、「の」といふ助詞が接續する場合に一段下つてつく點である。「來るの、行くの」のやうに平叙に用ゐるときは、「の」の音節が前の音節よりも低くなる。 問の場合にもその關係は保たれるのであつて、言葉調子はその關係を損はないやうにして加へられるものである。すなはち「の」の音節の前半で一旦前の音節よりも低くなつて、さらにその後半に至つて次第にかつ急速に高まるといふ高さの進行を營むわけである。「か」についてもほゞ同樣の事がいはれる。 その有樣を次のやうに表記することが便利である。

行くの？　⌊ikɯ ⌊no↘(?)

つもりなの？　⌊tsümoji na ⌊no↘(?)

問の心持をいひあらはす日常の對話では、「か」をあまりつかはず、その代りに前に述べた「の」を添へて用ゐたり、または他のいひ方をするのが普通である。すなはち「い(行)くか？」の意味を「いくの？」のほかに、「いく？」、いつて？」、いくこと？」〔⌊ikɯ↘(?), ⌊itte↘(?), ⌊ikɯ̥koto↘(?)〕など、

いひ、「いくといふのか」の意味を「いくつて？」[ikɯ̥ttě↗(?)]などゝいふ。そのいづれの場合にしても、言葉尻をずつと上げることが、問といふことを表現する場合には絶對に必要である。もしさうしなければ、問でなくてうけひきの心持、または自らのさうした意志をいひあらはし、または單純な叙事になるのであつて、この場合そのいづれになるかは、まつたく言葉調子、殊に言葉尻における調子の如何によるのである。

この言葉調子と問の心持との間の關係は、一般的な言語心理の事實である。その原由は前に述べたとほり問の話段における論理的意味の非自足性・未完結性に求めるべきで、その點で前章にのべたところの話の論理的分節における言葉調子の高めおよび低めの意義と、根柢において同一であるといはなければならない。

六〇　言葉尻における表情

言葉尻における自然的な調子の低下は、問の場合において著しい變化を蒙つてゐるが、さらに感情を表出する話段においても別様の趣を呈することが多い。前に助詞をかりに分けて終止助詞とした感動詞的なもののうちに、念をおしていふやうな心持を表現するものがある。それは話段の終につける

「ぜ・ぞ・わ・え・な・ね・よ」などである。これらは上昇的進行を遂げて、それによつて念をおすといふ心持をあらはすのであるが、そのうちにも接續の仕方に二通りある。「ぜ・ぞ・わ」は、前の音節に接續するとき、一段低くなつてつき、それからずん〳〵調子を高めていくこと、前に述べた問の場合の「の」と同様である。その關係を ↗dzè のやうにして示すならば、

「ぜ」——たくさんあるぜ　tɑksɑn ɑɾɯ dzè (!)

　　おれがいくぜ　olèŋɑ ikɯ dzè (!)

　　なか〳〵重いぜ　nɑkɑnɑkɑ o moĭ dzè (!)

「ぞ」——それ、なげるぞ　solé (!) nɑ ŋèɾɯ dzo (!)

　　いひつけるぞ　itsɯ̈kèɾɯ dzo (!)

「わ」——ありますわ　ɑɾimɑsɯ̈ wɑ (!)

　　あたしがいくわ　ɑtɑʃiŋɑ ikɯ wɑ (!)

　　あぶないわ　ɑbɯnɑĭ wɑ (!)

かく前にくる平板式の動詞・形容詞をも起伏化するやうな趣を示すのは、一段低く接續するといふこの助詞の接續によつて生じるのである。

念をおす意味をあらはす終止助詞のうち、「な・ね・よ」などは、前の用言などに平かに連つて、すぐ上昇的進行に移る。すなはち一旦中位以下に低まることをせずに、中位の高さから漸次に高まつていくのである。

「な」――たくさんあるな　takɯsaɴ aɾɯna ↗ (!)

　　かなりおもいな　kanaɾi omoĭ na ↗ (!)

「ね」――だいぶもつてるね　daĭbɯ motteɾɯ ne ↗ (!)

　　すこし輕いね　sɯ̈koʃi kaɾɯĭ ne ↗ (!)

「よ」――あとからいくよ　atokaɾa ikɯ jo ↗ (!)

　　そりやつらいよ　soɾja tsɯ̈ɾaĭ jo ↗ (!)

この種の助詞に類して、必ずしも上げ調子で發音するときまつてゐないものもある。たとへば「太郎や」のやうに呼びかけるときの助詞は、上げ調子にも下げ調子にも用ゐられ、それぐ\異なる心持をあらはす。

　　taɾoo ja ↗ —— taɾo ja ↘

たゞし「行かうや」のやうにつかふときは、下げ調子だけがつかはれる。「さうだい」などの場合の

「い」も、輕く添はつて下り調子になる。

感動的の助詞のうち、さらにその意を強めて長く引延ばして用ゐる「なあ・ねえ」（「のお」も地方的に行はれてゐる）のやうなものがあり、他の助詞に重ねて用ゐる「かい（かえ）・のよ・わよ・わねえ」のやうなものもある。「な・ね」は前に述べたやうな進行をするが、「なあ・ねえ」（「のお」）は、一旦上昇的に「こゑ」が次第に高まつて、それからさらに下降的に次第に低まるものである。たとへば

たまらないなあ　tamaɭanaĭ na:

いゝ景色だことねえ　ii kèʃkidakoto nè:

しかし念をおして、何といふかと相手から意見を徴するやうな心持では、やはり［na:］［nè:］のやうに進行する。重ねて用ゐるものでは、問には

おまへにもできるかい………dè kiɭɯ kaĭ（？）

のやうに上げ調子になり、その他では

こつちの方があまいのよ……a maĭ no jo

それは〳〵ひどいのよ………hi doĭ no jo

いはなくたつてするわよ……sɯ̈ ɭɯ wa jo

ずゐぶんつらいわねえ………[tsɯ̈ ˥ɾaĭ wɑ nɛ̈: ↘]

など〻、その心持によつて上り調子または下り調子になり、話し手の感情をいろ〳〵に反映するのである。とにかくかやうな感動詞的な助詞において、言葉調子の變化が著しくあらはれ、そこに表情的効果が多分に漲るといふことは、日常の對話についてわれ〳〵の手近に經驗するところである。感動的な女性の間の對話に感動詞や感動的の助詞がさかんに用ゐられ、全體として著しい言葉調子の變化を示すのは、言語心理の自然的發現に外ならない。

かやうに、念をおしていふとき言葉尻を上げる傾向のあることは、言語の心理的表出上何等かの理由があることゝ思はれる。その心持について考へてみると、成程さうなづかれる一事がある。たとへば、「いくぜ、いくよ」[˥ikɯdzě (!), ˥ikɯ jǒ (!)] のやうないひ方を用ゐる場合を考へると、話し手の方では相手がこの發言に對して無關心であり得ないことを豫想してゐるのである。その事柄については、何とか分別・覺悟があるだらうと想像してゐるのである。相手がその意見をのべることをさへ待ち設けてゐるのである。その心持は、おのづから念をおす意味の「ぜ・よ」といふ助詞に含蓄されてゐる。その言葉は餘韻を含み、餘情を包んで話しかけられるのであつて、その言葉の意味を補つてみると、「いくがどうだ、いつてもいゝか、何か文句はないか」といふやうな意味が言外にあるとい

ふことができる。何か對手がこれに對して對應策を廻らす機會を與へるといふやうな、何かそれに對して言分があるならいへとおし迫るやうな氣勢があるものである。これを、かの事柄を手輕にあしらひ、何事もないやうにいひ放すとき、「さ」のやうな下げ調子の助詞を用ゐる事實と比較すれば、そこの心理的表現の意義が自然に納得されるであらう。

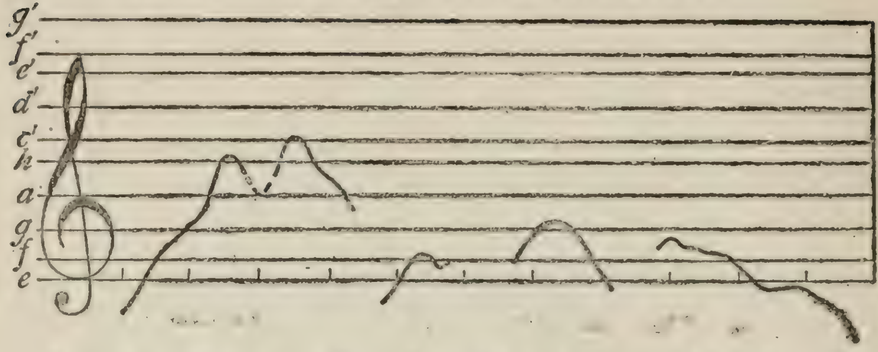
「そりやさうさ」 ⌊soljɑ ⌈soo sɑ↙

といへば、「あたりまへだ、文句はない」といふことを自分できめてしまつて、相手に物をいふ餘地をも與へないやうな氣味がある。すなはち一方は相手の意向を探らうとする話し手の策略があり、相手からまだその考を聽取らうとする態度であるが、他の一方は相手の思はくに頓着なく自分の考をおしつけようといふ態度である。前者は相手が何かいはうとすること、いふかも知れないことを待ちうける心持であつて、その點で問の文と似通つてゐるわけで、話段として論理的組織については未完結といひがたい場合が少くないが、とにかく餘韻を殘した物のいひぶりである。その反對に後者は、一種の主張の心持を表出するものである。以てその調子の相異なる所以を察すべきである。

かやうな言葉調子の表情は、いはゆる感嘆文において最も著しくあらはれるものであつて（第七九—八〇圖、調子の變化が著しいことを見よ）、特にその感動詞や感動的終止助詞について調子の典型的な進行を認

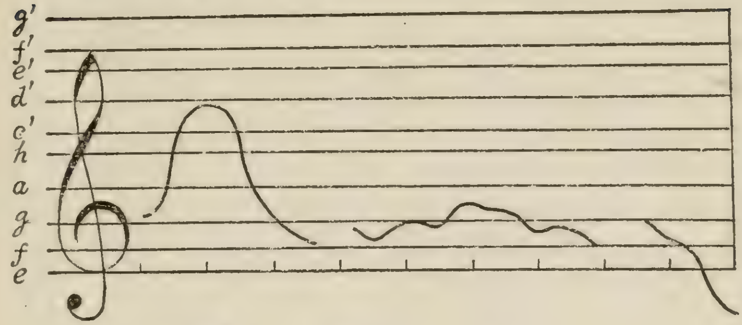
めることができる次第は、こゝに說いたところである。しかし、感情の表出には必ずしも語法的の感嘆文を用ゐることを要しない。感動詞のやうなものがなくとも、感嘆のいひまはしをしなくとも、言葉調子だけで十分に感情・心持をあらはすことができるのである。そしてその際の言葉調子も、結局今まで說いたところと異なるものではない。畢竟感動詞のやうなものは、その音質に意味の寓せられるやうなものでなく、特に感情表出のための言葉調子その他語氣や緩急を代表的に荷ひ得るやうな音聲なのである。すなはちその點で「こゑ」を主要素とするものたるを要し、母音（または母音的であること）を最も必要とする。場合によつては、母音でさへあれば、その音色はどうでもいゝのであつて、「あゝ」も「おゝ」も同樣な價をもつ。もつとも母音の音色そのものにも、おのづから感情的ニュアンスがあるから、アとエとオとが全く同じとはいへないが、音質そのものだけでは、ほとんど表情的効果はないといつて差支ない。語調・語氣・緩急および「こゑ」の出し方・とめ方を除外しては、「あゝ・おゝ」といふ感動詞も、どういふ感情を表出するか

第七九圖「ごうでせう(!)その風は」

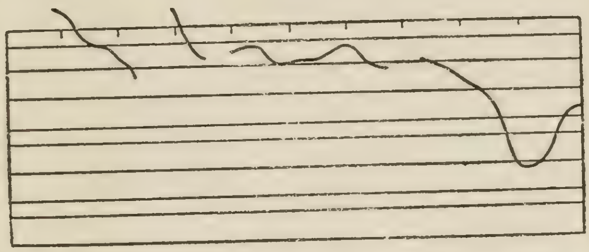


わからない。すなはち具體的な、發音された言葉について、その音聲進行の姿に卽して、そこにはじめて生々した感情が効果ある直接性を以て語られるのである。かういふ諸性質を除いた單なる母音アーやォーは表情價においてむしろ零に近い。これを感動詞とするのは、すでに言葉調子などをそこに豫想してはじめて正當なのである。

第八〇圖「どうでせう(!)あのことは」その一



その二



公演態における演説的効果を期待する種々の方法、話術における種々の手法は、いづれも普通の對話態における言葉の心理的表出の原理を應用し、効果を大にし、適所に活用するやうに工夫されたものに外ならない。その反對に「お經よみ」のやうな一本調子の朗讀は、この心理的表出を顧みずにするものであるから、その効果はむしろ催眠的で、論理的主意の徹底をも缺くことが常である。

朗讀乃至朗誦はその形式美を高調するに及んで、次第に音樂化してつひに歌謠となる。歌謠におけ

る心理的表出も、音聲に關するかぎりその原理において言語におけるものと全く異なるものではない。むしろ言語における音聲進行の形式的整齊を歌謠において見ることができるのである。殊に衆人の聲から生れた民謠・童謠のごときは、その原始的なものほど多分に言葉のアクセントをそのまゝ容れて、日常の言葉に近い。地方唄は地方の方言・方音を含むと共に、地方的アクセントを保存してゐる。琵琶歌の如きも、アクセントや語氣・緩急・語調を誇張して、單純な音階その他の音樂的形式にはめこんだものに過ぎない。さらに音樂的に進んだ諸種の語り物や、あるひは謠ひ物においてさへ、國語の時代的および地方的アクセントが保存されてゐること、母音の無聲化が多くの聲曲においても日常の言葉におけると同樣にあらはれてゐることなど、言語と歌謠との間の關係は、またすこぶる注意すべきものがある。

江戸に發達したいはゆる豐後三流、すなはち常磐津・淸元・新內または地方的な說敎節のやうな語り物、さては江戸長唄のやうな謠ひ物にも、母音の無聲化がすこぶるよく保たれて、關東地方の發音の傾向を示してゐることは、特に歌詞と樂曲との關係について考へさせるものがある。近來の作曲家にこの點を顧慮してゐる人があるであらうか。語のアクセントが聲曲においてそのおもかげを存してゐることも注意すべきことで、京阪地方に發達した上方唄(地唄)や義太夫節における節づ

けは、江戸を發祥生育の地とする長唄・常磐津などにおけるものと、すこぶる相異なるものである。この點についても將來の作曲家は、留意するところがなければならない。歌詞と樂曲との關係は、一面では言語殊にその語音の特質と、他の一面では音樂的表現の心理的意義との十分な理解に基づくときはじめて見事に解決されるのであらう。[3]

註(1)ガベレンツの語。
(2)經驗における意識の姿を比較考量することによつて、そこに類型あるひはむしろ典型を見出し、それを對象意識・狀態意識および作用意識の三點に特質づけることは、著者の心理學的述作において試みるところである。
(3)山田耕作「歌謠曲作曲上より見たる詩のアクセント」(『詩と音樂』第二卷第二號〔大正十二年二月〕)において、詩の言葉と作曲との關係が說かれ、作曲上アクセントに注意すべきことが述べられてゐるのは、會心の所說である。たゞし、氏の言葉のアクセントに對する見解が十分徹底しないために、折角の作曲家としての骨折にも遺憾の點を殘してゐる。たとへば、平板式と起伏式との二樣のアクセントの區別を見のがしてゐる點などは、惜むべきだ。

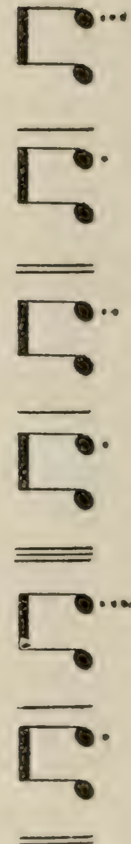
第二十章　リ　ズ　ム

六一　リズム總說

柱時計の振子の音のやうに、一定の間隔をおいて聞える拍音の系列を聞いてゐると、その二つづゝまたは四つづゝの拍音が一群となつて、全體をいくつかの群に分けるやうにカチ〳〵カチ〳〵と聞えて來る。その際一群の中のそれ〴〵の拍音は、平等の重みをもつて聞えるのではなくて、中の一つに特に重みをおかれてゐるといふやうな氣がする。かういふ風に聞くことは、リズムの經驗であつて、もと客觀的には强さも間隔も平等であるやうな拍音系列についてかやうにリズムを聞き取るのは、主觀的リズム化の現象である。その場合に、拍音間の間隔も、主觀的には平等でなくなり、離れたところと近づいたところとを生じる。さういふ時間的關係は、リズムの間（マ）であり、長短律[1]である。拍音に主觀的に與へられた强弱の關係は、拍子（ヒョーシ）であり、强弱律[2]である。かく時間的の相と力的の相とを分解して考へることができるが、リズムそのものはかういふ相をあらはすところの具體的な經驗である。たゞ普通には、その形式を抽象し來つて、これをリズムと名づけてゐるやうな有樣である。

おゝの系列における一定の客観的な強弱の布置、または長短の排列によつてすれば、もちろん容易にリズム經驗を生じる。この場合にも種々の程度で主觀的な補充作用が行はれるのである。または主觀的リズム化は何の作爲もない態度で無意的にも生じるが、有意的にもある構へ方をとつて、たとへば平等な拍音系列の中から三拍子のリズムを聞き出すといふやうなこともできる。普通に拍音の系列は、もつとも單純にリズムを生じる材料として用ゐられるが、リズムの經驗は、一般に「おと」の系列すなはち聽覺的刺戟の場合について觀察されるのみならず、身體の運動や視覺的刺戟系列についても觀察されるものである。畢竟客觀的刺戟における強弱などの配置は、リズム發生の縁となるものであるが、リズムそのものは心理的な内面的な起源をもつのである。

ヴントによれば、拍音系列の主觀的リズム化における拍音の繼起の速さは、あまり遲いとき群別を生じないが、やゝ速いとき、まづ二拍音づゝが一集團をつくる傾を示す。速さが增すにつれて、一群を成す拍音の數もふえ、強勢の配置も複雜になる。即ち二拍子からはじまつて四拍子、六拍子八拍子といふ風に平等拍子[3]で進んでいく。あまり速くなるとリズムの知覺を生じない。いはゆる不等拍子である三拍子の如きは、無意的、非作爲的にはまづ現れない。強勢はその複雜な形式においては三段階まで進み、これに應じて間隔にもそれぞの相違が生じる。すなはち



のやうになる。こゝに八分音符は各拍音を示し、その上の黒點は主觀的強めを、たての線は主觀的の間を示す。強めにも三段階の差があり、それに應じて間隔の時程にも三とほりの差が生じるが、いづれもこれ以上の段階には及ばないといふのが、いはゆるリズムに關するヴントの三段昂揚の法則である。[4]

コフカは純粋に視覺的な刺戟を規則正しく反復させて、何等リズムの豫想をも與へずに提示するといふ實驗手續によつて、リズムの成立條件を檢した。[5] これより先、電氣火花の一様な繼起的系列を見る際、リズム知覺を生じ易いことは、知られてゐた。その經驗の本質においては、音の場合と光の場合とで相異なるところもないのである。視覺的刺戟を以てした場合には、かへつてリズム成立に參與する運動性の因素を明かにし得るのであつて、内省上運動表象がほとんど一切の場合に現はれ、これを抑へることがよほど困難であるとは、コフカの述べたところである。氏は、統一形式(Einheitsform) がリズムには必須の特徴であるが、一般的な單純な反復とちがふ點が強勢的關係の存立にあるとし、強勢すなはち重みをつけること (Betonung, Betontheit) が重要な事項であると

する。この點はウェルネルも力說してゐる。コフカの見解は、リズムを音・光・筋肉運動の背後に存する「內的發動性」に求めるところに存する。

そのいはゆる內的發動性は何者であるか。そこにリズムの本質に關する課題がある。いまこれを心理學の研究に讓り、こゝに問題としてこの發動性のあらはれであるリズムに特有なその姿、リズム成態の結構を考へるにとゞめる。

以上にのべた心理的意味から離れて普通にいはれるところでは、リズムは一定週期における現象の反復であつて、その一週期內におのづから一種の輕重交錯の結構をもつてゐるのである。生物の生活現象が、しば〳〵リズム的運動を示すことは、人の知るところで、中にも心臟の皷動や呼吸運動や步行など、人間が日常營む生理的作用に手近にその例がある。反復して營む有意的運動も、規則的なリズムを示す傾をもつてゐる。單純な反復的な手足の運動による勞働にも、簡單なリズムがあらはれるのである。

リズムの構成のやゝ複雜なものは、筋肉運動にもあらはれることがあるが、主として音の系列において見られる。すでに說いたやうに、單純な拍音の系列においても、主としてその繼起の速さの緩急によつて、種々のリズムが生じる。この場合は、その間隔時程が客觀的には無刺戟であつて、音響は斷續す

る。これに反して、連續的な音響にあつては、客觀的に空虚な間隔がなく、それ〳〵の「おと」が長さをもつてあらはれる。長短・强弱・高低の種々相が、言語における音聲の系列や音樂における樂音の繼起について認められるが、その間におのづから輕重の反復的交錯があらはれて、週期的運動を示すのである。

リズム形式の單純なものは、輕重がかはる〳〵現はれるもので、これを普通詩の音律についての名稱により强弱格（揚抑格）および弱强格（抑揚格）と名づける。つぎに輕い部分の二單位を隔てゝ重い部分の反復して現はれるものを、その輕重の先後によつて分けて强弱弱格（揚抑々格）および弱弱强格（抑々揚格）とする。これらはギリシア傳來の詩論に用ゐられる形式で、その他輕重の種々の組合はせから種々の格を作り出してゐるが、普通に用ゐられるのは、右に述べた四種である。しかし、リズムの形式は、實際にはいろ〳〵の複雜なものを發展させるのであつて、リズム知覺の精細化に伴つて、形式もます〳〵分化するにいたるものである。音樂における拍子形式の如きは、詩の音律を以ては律しがたく、單純拍節の場合にあらはれるリズムの所見によつても解し盡すことができないやうな、複雜多樣のものとなつてゐるのである。

客觀的に長短・强弱・高低の差異あり變化ある「おと」の進行について、輕重の交錯とその週期的反復とを認め得るとき、そこに與へられた「おと」の系列にリズムが備はつてゐるといふ。主觀の態

度によつては、必ずしも明かなリズム知覺を生じないこともあるが、順當の構へ方・態度を以てすれば、リズム成態が明かな姿を示すといふ場合に、客觀的リズムの存立をいふことができる。この意味で言葉や音樂についてリズムを說くのであつて、しばらく知覺心理の機能的事實を括弧づけ、その形式を抽象するわけである。ゆゑに現實には必ずしも知覺されてゐないが、知覺されてリズム經驗を與へる可能性をもつものである。

詩における音律（メートルム）や音樂における拍子は、必ずしも容易に知覺されるものばかりではない。いはゆる音律的自覺・リズム感乃至拍子の把握は、相當の素養と主觀的の構へとを要求する。詩形論の敎養が詩の鑑賞に必要であるのは、樂曲構成の知識が音樂の味解の豫備であるのと同樣である。熟練した指揮者は、樂曲のはじめに當つて、相當の强勢を鹽梅して、拍子を効果的に示唆するといふ。これは聽者に對して或種の構へを請求することに外ならない。

六二　話のリズム

話における具體的な音聲系列については、週期的反復のリズムも單純な姿であらはれるものではない。週期的變化の內容をなすものは、こゝでは單に强さと間隔とだけではない。母音子音の音色や高

さや强度や長さをも考へたくてはならない。しかも言語によつて、その間かなり趣を異にするものがあるので、一を以て他を律することは、往々誤に陷るを免れない。

(一)同一の子音が反復して現はれるのは頭韻といはれ、同一の母音が反復して現はれるのはアッソナンスといはれる。これはおのづから擬聲語・小兒語やある種の成語などに同時に採用されて、一種のリズム效果を示すものである。たとへば

ガラガラ　トントン
ピカピカ　メチャメチャ
アクセク　ドタバタ　ドサクサ
マンマ　オテテ
すつたもんだ　つんつるてん
てんでんばらばら　のこのこさいさい
ねほりはほり　やすりかすり
とつたかみたか　しんねりむつつり

など。そこには、これらの數音節を一つのアクセント形式に取り入れる外、前後の二部にわけて同音

の反復によるリズム効果をあらはす傾向が認められる。歌謠にもかういふ手法によつて、リズム効果を與へることが往々行はれる。「かけごゑ」などでもこの種の反復を用ゐることが多いのは、リズムを托するに好都合だからといふ理由もあると思はれる。

(二)高さのリズム、すなはち「こゑ」の高まりと低まりとの交代によつて生じるリズムは、話段における言葉調子のうちについて見出される。言葉調子は話段において大きな抑揚抑の週期をつくるがその句においてそれ〴〵短い週期の高低のうねりを作り出す。その週期の交代は、必ずしも規則正しくいかないのであるが、多くの場合強さの週期的消長と伴つて、やはりリズムを與へる。その言葉調子は、論理的よりも感情的、丁寧なものよりもぞんざいな場合の方が、規則正しいリズムに近づく傾がある。日本語や支那語などのやうに、語音の系列における強さの變化が著しくない言語では、そのリズムは他の因素においてむしろ著明にあらはれる。言語調子においてやはり一種のリズム効果を得ることの可能性は、リズムが單に「おと」の強さの進行についてのみならず、いな「おと」でない他の刺戟系列を以てしても知覺・經驗されるといふ一事に徵しても首肯することができる。

(三)强さのリズムは、强さアクセントを用ゐる言語において、ごく普通に觀察されるものである。すでにドイツ語やイギリス語のアクセント形式が、リズム的布置を示してゐるのであつて、强められ

た音節の次には强められないものがあり、さういふ輕い音節を挿んで、次の强めの部分が來るといふのが一般的法則である。そこに强弱の交代といふことがリズムの要素的形式（强弱格・弱强格などの）を示してゐるのである。これらの言語における、接尾語の附加による派生語のアクセントの轉位のやうな現象も、このリズムの强弱交番的な布置によつて規定されるのに外ならない。たとへば

（ドイツ語）

Professor　　　　Professoren

◡ ◡́ ◡　　　　◡́ ◡ —̋ ◡

（イギリス語）

Phonetic　　　　Phonetician

[fo'netik]　　　　[ˌfou(ˌfo)ne'tiʃən]

◡ ◡́ ◡　　　　—́ ◡ ◡̋ ◡

この種の例は一々擧げるまでもない。

一つの句について見ても、冠詞や前置詞のやうなものがリズム的配置における弱い部分に當り、語義上重要なものなどの强い部分と交番的にあらはれて、强弱參差のリズム的進行を營むのである。冠詞・前置詞の如きも必ずしも常に强勢のない位置におかれるのではなく、時としては語義の重要さを

得るにつれて音聲の强みを與へられるが、概していへばかういふ場合は稀である。かくていはゆる弱い形 *weak form* で句の中にあらはれるのが普通となつてゐる。

（四）音聲の繼續の時間の長短も、週期的にあらはれてリズム的効果を示すことがある。これは拍音系列においてその時間的配置を變化することによつて、實驗的に立證することができる。その際やはり主觀的リズム化の補助的參加がある。ところで具體的の場合には、長さの變化だけが單獨に現はれるのでなく、强さや高さの變化を融合して印象的な進行を示す。ギリシアの音律は、時間的單位としていはゆる「原時間」Chronos protos をとり、短い母音はその一單位に、長い母音はその二單位にあたるとして、これを以て音律論の出發點としてゐる。すなはち長短が音律を定める目安となつてゐた。そこにリズム効果に對する長短の時間的形式の意義も考へられるのであらう。たゞ古代ギリシア語にもアクセントは存し、しかも高さアクセントが行はれてゐたことは、たしかに推定されるのであるから、リズム効果を單に長短の時間的形式に歸することは稍早計といはなければならない。具體的言語においては、單に長短の關係の週期的變化のみがあらはれるとは考へられない事である。

すべて話における具體的な音聲の進行にあつては、これらの四つの因素が互に獨立に任意に變化するのではなくて、それぞれ種々の割合に融合混和して、その全體について一種の輕重の配置を示し、

頓挫曲折のうねりをあらはすのである。ウォリンはかういふ諸因素の融合によつて音聲進行の所々に「重心」(centroid)ができるとし、その重心の反復回歸が時間的に規則正しくて、リズムの時間的關係の要求を滿すのでなければ(心理的)リズム形成を生じないとした。[6] こゝに要求されるリズムの時間的關係とは、音脚乃至それを連ねた句體が均等の時間量をもつといふことである。すなはち等時性(isochronism)である。この要求をよく滿足させるものは、意識的にリズムを顯示する韻文律語であり、格調を具備した詩である。しかも、詩句內における輕重交錯の樣式が主要なものか、或はこの等時性の方が重大な意義を有するものかについては、各國語について一樣に斷定しがたい事情がある。特にわが日本語における詩形の發達は、なほ特別の考察を必要とし、にはかに決定しがたい問題を藏してゐる。かつこの種の問題は、本書の說くべき範圍を超えて、ふかく文藝美學・詩形論などに立ち入らなければならないので、これを他に讓るを以て至當とする。[7]

註(1)Hugo Riemann のいはゆる Agogik. 樂典などで Rhythmus と Takt (拍子) とを並べていふときのリトムスは、これである。

(2)H. Riemann のいはゆる Dynamik. こゝにリズムと名づける經驗は、長短律・强弱律の具體的統一であるから、間拍子といふのに當らう。

(3)平等拍子・不等拍子とは、樂典などで慣用されてゐる名稱であるが、おそらく偶數拍子・奇數拍子といふべきを、譯語な

つくる際思ひちがへたのであらう。數學上の有理數・無理數と同樣な、奇妙な名稱である。

（4）この法則がどの範圍で妥當するかは、問題である。リーマンは、かやうな圖式的アクセント說 Schematische Akzenttheorie を音樂上のリズムに適用し得ないものとして、極力非難してゐる。單純拍音においても、この種の圖式的な法則がそのまゝ妥當するとは、考へがたく、ヴントおよびその一派以外にかやうな法則を說く者のないのは、これを認めないからであらう。

（5）Koffka: *Experimentaluntersuchungen zur Lehre vom Rhythmus.* Zeitschrift für Psychologie, Bd. 52 (1909), S. 1ff.

（6）Wallin, J. E. W.: *Experimental Studies of Rhythm and Time.* Psychological Review, Vol. 18 (1911), pp. 160—131 202—222.

（7）著者の述作『リズムと人生』においては、聊かこの問題に觸れて說いてゐる部分がある。また「詩のリズムについて」（『心理學研究』第三卷第一輯所載〔昭和三年二月〕）には、若干の實驗的成果をかゝげてある。しかし、これだけではもとよりすこぶる不滿足なものであつて、なほ進んでの考察を期しなければならない。

ン

ワ行，ヴァ行

ヤ 行

ラ 行

マ　行

ナ 行

ダ　行

ザ 行

サ 行

ガ 行

カ 行

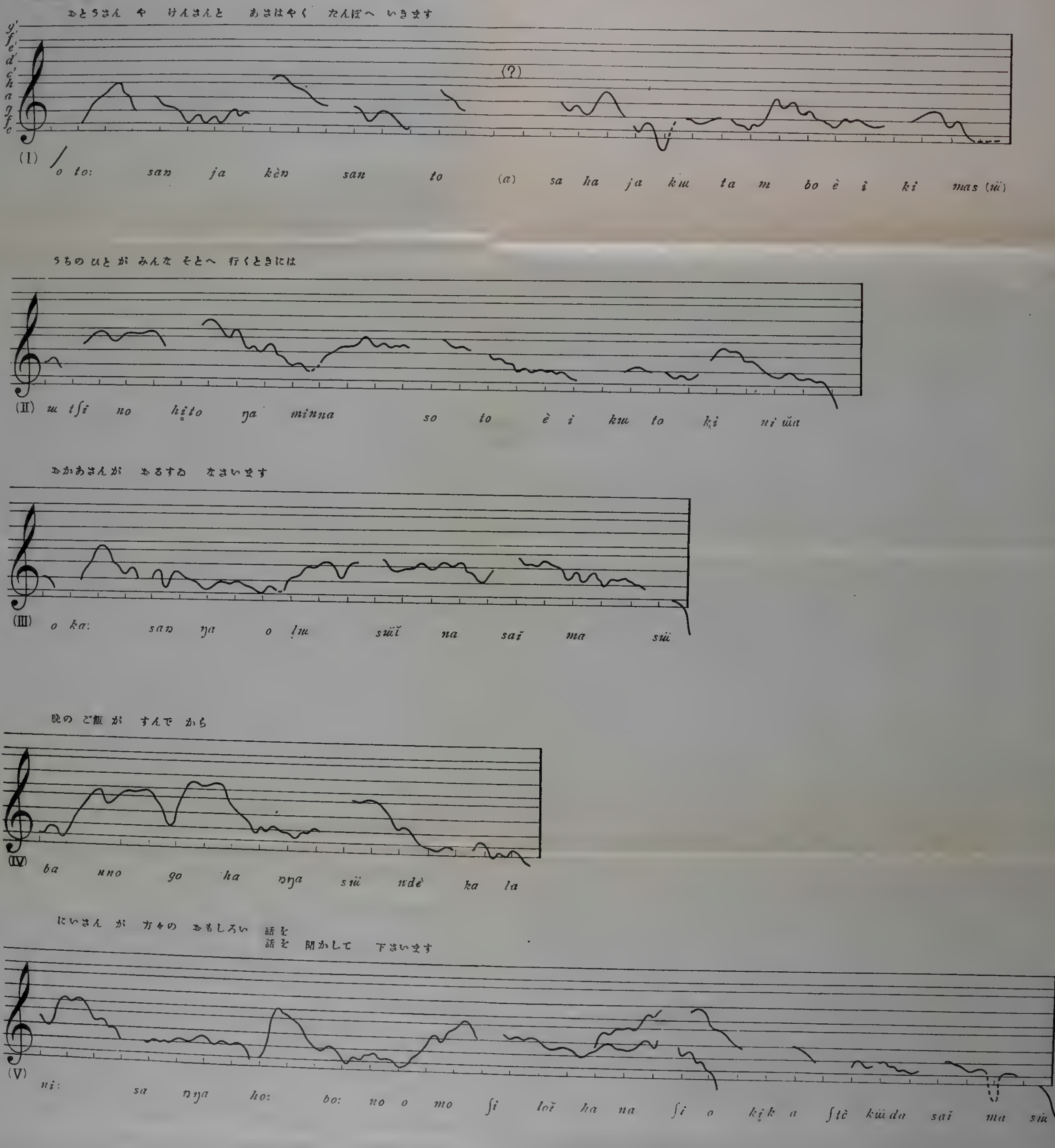
索　　引

□五十音順　□イタリクはフランス語　□“—”は英佛獨以外の外國語　□*は人名　□ロ1マ数字(太字)は章　□太い数字は節　□普通の数字はページ

ア行

田園生活（其一）

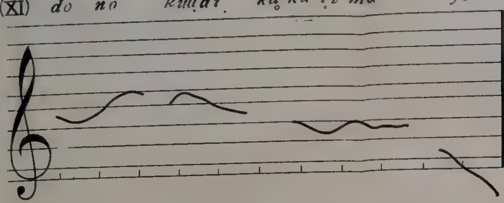
附圖壹



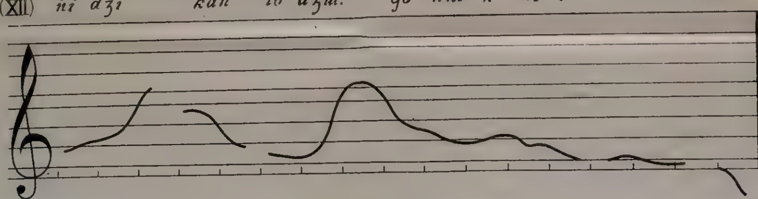
おとうさん や けんさんと あさはやく たんぼへ いきます
g' f' e' d' c' h a g f c
(?)
(I) o to: san ja kèn san to (a) sa ha ja ku ta m bo è i ki mas (ü)
うちの ひと が みんな そとへ 行くときには
(II) u tʃi no hi̥to ŋa minna so to è i ku to ki̥ ni ŭa
おかあさんが おるすゐ なさいます
(III) o ka: san ŋa o ɭu süï na saĭ ma sü
晩の ご飯 が すんで から
(IV) ba nno go ha nŋa sü ndè ka la
にいさん が 方々の おもしろい 話を
話を 聞かして 下さいます
(V) ni: sa nŋa ho: bo: no o mo ʃi loĭ ha na ʃi o ki̥k a ʃtè küda saĭ ma sü

田園生活（其二）

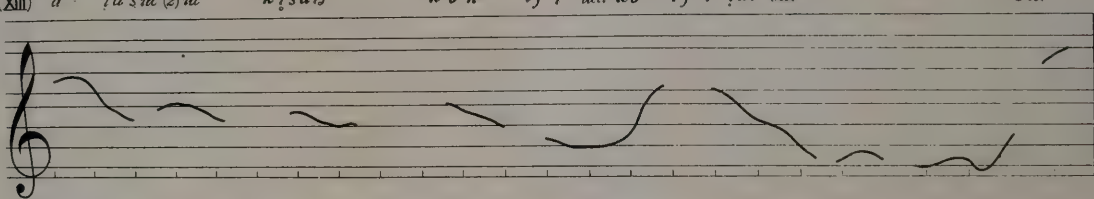
(XI) *do no kuḷaĭ kḁka ḷi ma ʃo:*



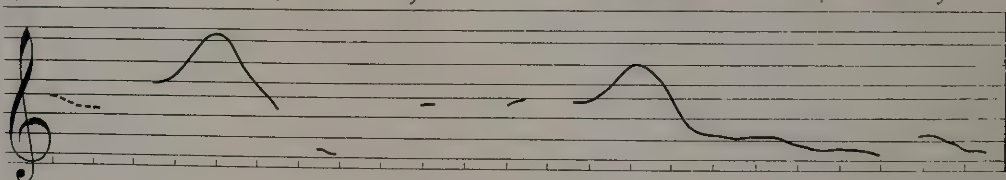
(XII) *ni dʒi kan to dʒɯ: go hɯ n dè i ki ma s ü*



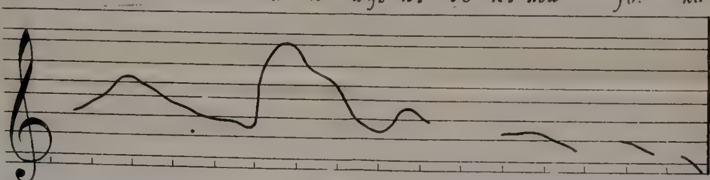
(XIII) *a ḷa sü (z) ü kḭsaŋ' kon tʃ i ŭa do tʃ i ḷaĭ odè ka kè dè sü*



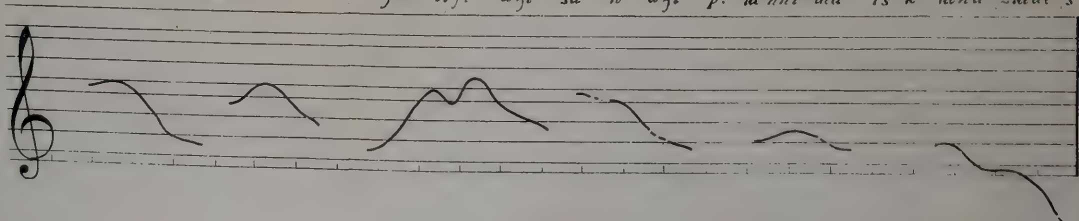
(XIV) *ma: ʃi ba ḷa kɯ tʃo 't: o h a .ma ma dè maĭ ḷi ma süŋa*



(XV) *h a ma è ŭa na n dʒi ni ts ki ma ʃo: ka*



(XVI) *so: dè sü nè: dʒɯ: itʃi dʒi sa n dʒi p: ɯ nni ŭa ts k ɯka züdè s*



附圖 貳

汽車の旅(對話)


(I) k ama kmɸa ma dè o: hk ɯ ŋi p: ɯo i tʃi maĭ kɯda saĭ
g' f' e' d' c' h a g f e
(?)
(II) i t: o. dè sk a
(III) i: è ṅi to: dè s i kɯ ḷa dè sk a
(IV) i tʃ i è ṅṅ i dʒɯ: go sèn?
(V) to: kjo: ka ḷa ka ma kɯḷama dè do no kɯ ḷaĭ aḷima sk a
(VI) to:kjo:è ki̥ka ḷa dʒɯ: ṅi ḷi ba ka ʃi dè s
(VII) dokka dè noḷi ka ĭŋ a aḷi ma ska (記錄不鮮明)
(VIII) o: hɯ na dè no ḷi kaĭ dè s
(IX) ki̥ʃ a ŭa i tsŭ dèma sk a nè
(X) dʒɯ:dʒi s an dʒi pɯṅṅi dèma s

昭和四年三月二十八日印刷
昭和四年四月一日發行

日本音聲學

定價金六圓五拾錢



著作者檢印

著作者　佐久間鼎

東京市神田區淡路町二ノ二
發行者　鈴木芃

東京市小石川區小日向臺町三ノ四三
印刷者　春山治部左衛門

發行所
東京市神田區淡路町二ノ二
振替東京八二二六番
京文社
電話神田三九〇・三九二番

關西大賣捌所
大阪市東區北久太郎町四ノ一六
振替大阪二三一番
柳原書店
電話船場四一四・四七九〇番

